THE CENTRAL REVIEW

中央公論

11-1926

十一月號

異國叢書

十二巻

菊判各冊五〇〇頁以上
佛國マルブル總革天金
挿繪數葉・詳註索引附

◇原著は凡て世界の秘稿！譯者は悉く一世の權威！

耶蘇會士日本通信 上巻	史料編纂官 文學博士	村上直次郎譯
同 下巻	史料編纂官 文學博士	渡邊世祐註
慶元イギリス書翰	史料編纂官補 文學士	岩生成一譯註
ドン・ロドリゴ報告書 ビスカイノ金銀島探檢	史料編纂官 文學博士	村上直次郎譯註
慶元オランダ書翰	史料編纂官 文學博士	村上直次郎譯註
ジョン・セーリス日本渡航記	帝國大學教授 文學博士	村川堅固譯註
ファレンタイン日本志	帝國大學教授 文學博士	新村出譯註
ケンペル江戸參觀旅行記	帝國大學名譽教授 醫學博士	吳秀三譯註
ツウンベルグ日本紀行	帝國大學助教授 文學士	山田珠樹譯註

内容見本 電話又は葉書ニテ御申込次第 卽

時送呈

ヅーフ日本回想録
フイツセル參府記事
第一高等學校教授 文學博士 齋藤阿具譯註

シーボルト江戸朝廷參觀紀行
帝國大學名譽教授 醫學博士 呉秀三譯註

日本關係西籍解題
東洋文庫主任 文學士 石田幹之助編

◇本叢書を讀まずして近代日本を語る勿れ！

◇**原著原文** は悉く容易に常人の過眼を許さゞる葡、西、蘭、伊、獨、英諸國語にて綴られし稀書中の稀書なるか、然らざれば數百載未刊の秘稿なり

◇**内容** は西洋文明移入に關する曠世の史料にして同時に我が大日本帝國史閲の貴重なる落穗なり。附するにパゼス、エンクステルン等に勝る書目解題を以てす

◇**譯註編者** は凡て斯學に於ける一世の權威にして絶對に代譯に非ず

◇**譯文** は流麗無比、嚴密なる詳註索引と相俟って、天文以降慶應に至る三百有餘歳の間に、碧眼に映じたる日本、近代文明に至る過渡未開の日本の姿を如實に髣髴せしむ

◇**讀者** は湧くが如き興趣を覺えつゝ、不知不識の間に現代日本の擴りて來る緣由を究むることを得給ふべし

◇**裝幀** はフランス特製マルブル總革を用ひ、堅牢典雅、正に本邦製本界に劃時代的の驚異を與ふべきもの故に本叢書は一面高く學界の金字塔たると共に他面永久に天下の讀書子の香飯たらん

豫約募集

▽**豫約締切** 大正十五年十一月十日

▽**配本** 十一月以降毎月一冊一ケ年完了

▽**申込金** 金四圓八拾錢也（最終會費に充つ）

▽**會費** 金四圓八拾錢也（毎月五日迄に御拂込のこと）

▽**一時拂** 金五拾五圓也（締切期日迄に御拂込のこと）

▽**送料** 一冊に就き金貳拾七錢也（會費に添附御拂込のこと）

東京四谷新宿一丁目

聚芳閣

振替東京五六一四六番
電話四谷五一番 二一八七番

万有

豫約會員募集
内容見本進呈

監修者

東洋文學 文學博士 和田萬吉
泰西文學 早大教授 矢口達
自然科學 理學博士 三宅驥一
社會科學 日本新聞主幹 北昤吉

出來丈安く出來丈多くの會員を良心的内容と永久の生命を

申込規定

一、會費 一ヶ月 三圓廿錢
一、配本各月二冊宛刊行
一、申込金壹圓
一、裝幀其他〇三六版四百頁以上 背革平クロース
一、卷數全卅六卷 一ヶ年半完結

第一期刊行書目

第一巻 神曲「上」 ダンテイ
第二巻 同「下」 同
第三巻 種の起原 ダーウイン
第四巻 好色一代男 西鶴
第五巻 ゴールドウビム ポー
第六巻 民約論 ルーソー
第七巻 ブランド・人形ノ家 イブセン

第廿九巻 相互扶助論 クロポトキン
第卅巻 カラマゾフの兄弟「上」 ドストエフスキー
第卅一巻 同「下」 同
第卅二巻 女ノ一生 モーパッサン
第卅三巻 居酒屋 ゾラ
第卅四巻 枕草紙

文庫

不折

第八巻 青い鳥

第九巻 社會學上より見たる藝術 ギユーヨー

第十巻 戰爭と平和「上」 トルストイ

第十一巻 同「下」 同

第十二巻 老子 老子

第十三巻 デカメロン「上」 ボカチオ

第十四巻 同「下」 同

第十五巻 昆虫記 フワーブル

第十六巻 源氏物語「上」 紫式部

第十七巻 同「下」 同

第十八巻 人口論 マルサス

第十九巻 死の勝利 ダヌンチオ

第廿巻 ファウスト ゲーテー

第廿一巻 意志と現識としての世界「上」 ショペン

第廿二巻 同「下」 ハウエル

第廿三巻 シエクスピーヤ物語 ラム

第廿四巻 春のめざめ ウエデキント

第廿五巻 フランス革命「上」 カーライル

第廿六巻 同「下」 同

第廿七巻 ボブアリー夫人 フローベル

第廿八巻 イリアッド ホーマー

清少納言

第卅五巻 マルクスの資本論 ウイキー

第卅六巻 萬葉集

第二期以後の主目鈔

懺悔錄 ルーソー

性と性格 ワイニンゲル

父と子 ツルゲネーフ

梅暦 春水

ツアラトースト ニイチエ

失樂園 ミルトン

タルチユーフ モリエル

天界と其神祕 スヰーデンホルク

（詳細内容見本）

申込所

全國書店並に

東京小石川水道端町二

萬有文庫刊行會

電話小石川八一五四番

振替東京七〇八三五番

婦人

■鬼熊繪草紙……岡本一平

■公娼廢止に關する諸問題（喧しい廢娼問題に嚴たる指針を與へた大論文！）……山川菊榮

朴烈事件の政爭化に對する公平な批判

■法廷だより……

■時評……吉野作造

■女性の特徴とその機能……長谷川如是閑

女學生の觀たる市電運轉手の「馬鹿野郎」事件

■現代的不貞に就いて……生田長江

■胎されたる農村婦人の問題……中西伊之助

宵話

十一月號

定價七拾錢
振替東京三四
中央公論社

公論

■「キネマ病患者」の墮ち行く道……三津太二
■少年按摩の不思議な戀の話……伊竹部隆章
■笹川臨風氏令孃に絡まる懺悔の戀死……水原鶴三
■亡き養母の後を追ふた少女の話……北郭二八郎
■亂倫と生活難から母娘五人心中……井邊・霞穗

■貧しきブルジョア（少年期を追懐して家の沒落をうたつて挽歌）……小牧近江

■滿洲の日本婦人……水野葉舟

■夢（當代隨一のエッセイスのト隨筆）……芥川龍之介

■吉原病院日記（浮き川竹の苦勞を詳さに嘗め來つた筆者の飾らざる記）……森光子

坐談

□愛硯の話……山口弘達子
□菊作り……菊池幽芳氏
□猫と鼠……濱田徳太郎氏
□雜草の話……前田曙山氏
□投網の興……奥平昌恭氏
□犬の心……高橋虎雄氏
□蟲の生活……横山桐郎氏
□釣と朝……阿部壽準氏
□寫眞の話……内田魯庵氏
□朝顔の話……秋原時雄氏
□鯉の性……新美銳次氏
□獨りの遊戯……長谷川如是閑

戀仇

□無修養即地獄……片岡鐵兵
□男性的戀がたき……水島爾保布
□藤見處實錄……直木三十五
□知らない戀敵……安成二郎
□レモンの匂ひから……若杉鳥子

■女人諸相（假面を被つた某新聞記者の大膽なる有名婦人印象記）……黒河惣

■暴風雨の跡……前田河廣一郎

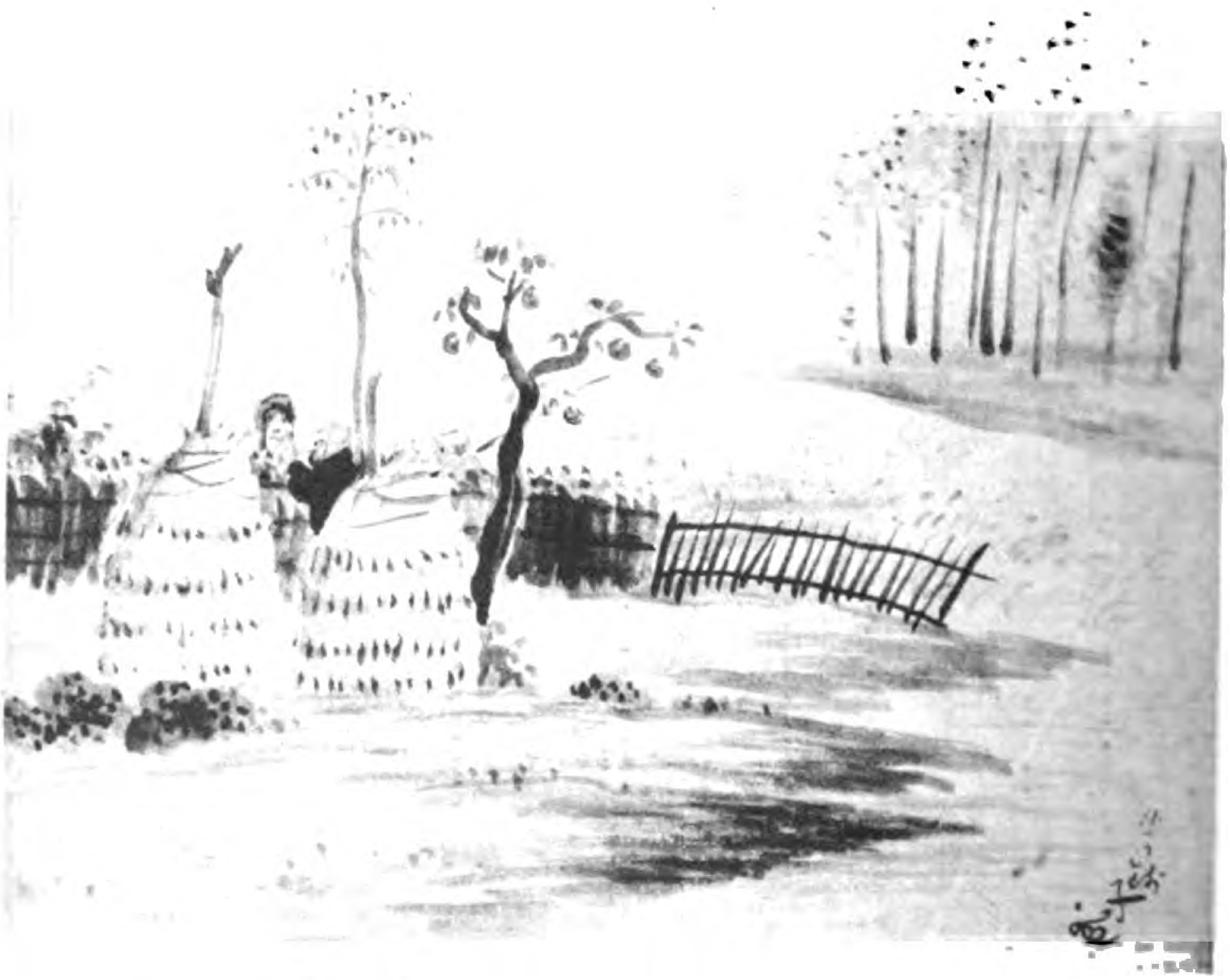
■乳（短歌二十首）……栗原潔子

■泡鳴庵日記……遠藤清子

秋


チューブ入の
クラブ煉歯磨
歯は美しく
強くなる朝
さ食後のク
ラブ煉歯磨
CLUB
DENTAL CREAM
TRADE MARK
耐久力三倍以上の
クラブ歯刷子





小春　　小川芋銭筆

大正十五年

中央公論

十一月一日發行

十一月號

第四十一年第十一號

第四百六十六號

政治季節

毎年秋になると政治社會が漸く騒々しくなつて來る。やがて開かるる議會の論爭の小手調べとでも云ふのか、各黨派間に段々と小ぜり合も繁くなる。新聞の紙面も此種の政界の掛引の報道で賑はうのである。之を世人は政治季節と呼びなして居る。

云ふまでもなく議會は過去に於ける政績の批評せらるる所であり、又將來に對する大方針の議定せらるる所である。要するに我々の利害幸福に關する一切の問題は悉く皆こゝで論議せらるるものだけに、その開會直前に際して國民視聽の自ら此處に向ふのは怪むに足らぬ。從てまた各派の政客が之を利用して論陣をひろく民間に布き、輿論の趨勢を自派の有利に展開せんと試むるも當然である。是れ所謂政治季節が政界年中行事の重要なる一項目を爲す所以である。

今や初秋も過ぎていよ／＼政治季節は來た。毎年の事とて格別の感興も起らぬが、併し退いて考ふるに、之は一體漫然として迎へ漫然として送つていゝものかどうか。こゝに私は少しく自ら反省して見るの必要を感ずる。

× × × × ×

政治季節は本來如何にあらねばならぬものか。又本來如何に之を利用すべきものか。

若し政治の運用が理想的に行はれて居つたなら、政治季節に入ると共に政治上の大問題がそれ／＼政界の專門家から論議され、國民一般は自家の利害休戚に關する大事件に關し爲に大に知見を擴められるだらう。國民の側から觀て政治季節の最も著しき特徴は、その教育的效果でなければならぬ。又政治家自身はこの期に乘じて大に自派の政策の解明につとめ、以て民間の支持後援を持續し又一層之を強固にせんことを怠らぬだらう。目前の議會に於ける多數少數の關係は俄に動かし得ぬとして、他日總選擧の行はるる際國民の投票が何處に投ぜらるるやは、平時に於ける各政客の精神的努力如何に繫るからだ。而して政黨政派が政治季節を斯く利用することとの間接の結果として、國民に及ぼす教育的效果の著しきものあるは亦論を待たずして明である。

然るに我國の政治季節は右の樣な形に利用されて居るか。本來の使命を遂げ其の當然の效果を擧げて居るか。政治季節に入つて我國の政界に特に顯著に現はるるものは二つある。醜陋なる論戰と陰惡なる陰謀と是である。この二つを特色とする點に於て我國の政治季節は全然他國のそれと趣を異にする。而して何故斯う云ふ差異を來すかといへば、その根本の原因は、總選擧の自然に來るを待たずいつでも政變を呼び起す機會を作らんとするのが政界に於ける一切の政治的活動の目標だと云ふ點にある。民間の道德的支持を得て徐ろに機會の到來を待たんとするのではない、何がな好個の口實を設けて無理に政府に詰腹を切らせんと企む。そこで政府も自ら之に對抗する爲に同樣の惡辣を辭するわけに行かなくなる。斯くして互に虛々實々の手段を弄し政爭は益々陰險になる。國民直接の利害の如きは動もすれば忘れられ勝になるのも當然である。

成る程政治季節に入つて所謂政治上の大問題は盛に政界の專門家から論議せられぬでない。併しそは國民の利福の爲の政策の討議といふよりは寧ろ急速なる內閣の倒壞を目的とするものだから、或は道德上の瀆職行爲を剔抉したり又は國體皇室の論に引きつけなどして、專ら致命的打擊を與へんと腐心する。醜陋なる論戰の獨り跋扈する所以である。啻にこればかりではない、目的は內閣倒壞に在るのだから、之を達する爲には手段を擇ばないことになる。その爲に種々の陰惡なる陰謀の行はるるを免れぬが、その最も普通なるは貴族院の反政府空氣を攪動することであらう。之に關連して貴族院內の諸派が動もすれば下院諸黨の掛引と相應じて輕佻なる策動に狂奔し、自派の勢力と面目とを重んずるに過ぎて高處より政界の弊風を牽制監督するに忠ならざるは、大に糺彈に值するものたるを注意しておく。

要するに我國に於ける政治季節の斯うした特色は、國民の教育どころか、却て道德上多大の惡影響を與ふるものなるは言を待たない。

× × × × ×

終りに斯くなることとの最終の責任が實に國民自身に在ることを一言しておく。國民の多數が選擧に於て政客の術絡に乘らず、眞に獨立の判斷に依て善に與みし惡を斥けるにきまつて居るものなら、「選擧に因らざる政變」を呼び起さんとの運動は自ら跡を潛むべきを以てである。

中央公論



第四十一年第十一號
十一月號
第四百六十六號

プラグマティズムの法律理論

——アメリカ法律學の一貢獻——

高柳賢三

（一）緒言＝法律及び法律學に於けるアメリカの貢獻（二）ロスコー・パウンドの根本思想（三）法律目的の理論（四）法律道德交涉の理論（五）利益調節の理論（六）裁判の理論（七）法律史の解釋、及びコンモン・ローの思想分解（八）結論＝批判

一　緒言——法律及び法律學に於けるアメリカの貢献

アメリカの法律及び法律學は何等かの新しき貢獻を世界の法律及び法律學に對して與へたであらうか？

アメリカの法律及び法律學は既に約一世紀半の歴史を有する。然しながらそれは、我國現在の法律及び法律學が大體に於て歐洲に發達した法律及び法律學の繼受及び模倣であると均しく、アメリカの法律及び法律學も亦歐洲の法律及び法律學の繼受及び模倣であつた。アメリカの法制に最大な影響を與へたるものは云ふ迄もなくイギリスに發達した所謂コンモン・ローであつた。そしてアメリカ獨立以前に於るイギリスの判例法と成文法とは、アメリカの國情とアメリカの政治組織とに違反せざる範圍内に於て當然アメリカの法律として認められたのであつたが故に、イギリスのコンモン・ローに伴ふ判例法主義は又アメリカ法の基礎となつたのであつた。然しながら歐洲大陸に發達した法律思想も亦アメリカの法律及び法律學に多大の影響を及して居る。例へば十七・八世記に於る自然法の觀念は、グロチュースやプーフェンドルフやブルマルキやヴァッテルの著書を通じて、十九世紀前半に於るアメリカ法律家の法律思想に多大の影響を及して居る。そしてそれは米國憲法の運用に於て殊にその影響が顯著である。又十九世紀の歐洲に全盛を極めたサヴィニーを頭目とする獨逸歴史學派の「法律は國民精神の所產である」と云ふ思想は、コンモン・ローはアングロサクソン人種の民族精神の發露であると云ふ思想となつて、殊に十九世紀後半に於けるアメリカ法律家の思想となつた。又成文法の方面に於てもローマ法に由來する歐大陸の法理は、殊に商法の範圍内に於て、ストーリー判事等の努力に依てアメリカの法律中に編込まれた。

斯くの如くアメリカの法律及び法律學は、大體に於て歐洲に發達したる法律及び法律學の繼受と模倣とであつた。ア

メリカ法律家の努力は、只アメリカの特種なる國情に之を適應せしめたのに過ぎない。然らばアメリカの法律及び法律學は、何等の新しき創造的な貢獻を他國の法律學に爲して居らないのであるか？　歐洲諸國に逆輸入せられ、或は又それ以外の國々に範を垂れる制度を一世紀半に亘る法律的活動の末創造しなかつたのであらうか？　此の點に就て私は、少くなくも左の諸點に就てはアメリカの獨創的貢獻が見らるゝのではないかと思ふ。

(一)　司法權優越の理論

成文憲法主義を採用したる國家に於て、成文憲法の條項に違反する法律は有效であるかどうか？裁判所は憲法に違反するの理由に依て法律の適用を拒否することが出來るか？換言すれば裁判所は違憲法律審査權を有するのであるかと云ふ問題がある。此の問題に就て從來歐洲諸國の成文憲法主義の下に在りては、大體に於て、憲法に違反する法律も亦法律たるの効力を有するものである、裁判所には違權立法審査權はないのであるとせられて居つた。然るにアメリカに於ては一八〇三年マーベリー對マヂソン事件に於る聯邦裁判所判事マーシャルの判決以來、違憲立法審査權は米國憲政の根本原理として確立せらるゝに至つた。此の原則は十八世紀の歐米の思想界を風靡した自然法優越の觀念、歐洲大陸に行はれた根本法優越の觀念、イギリスの名判官エドワード・クック卿の鼓吹した普通法優越及び普通法裁判所優越の思想、アメリカの獨立前のアメリカ植民地立法に對するイギリス樞密院の審査權行使の慣行等にその淵源を發するものではあるが、アメリカ憲法運用上の一大原理として確立するに至つたのは、アメリカ憲法の父マーシャル判事の右の判決である。そして爾來今日に至る迄是非の論は米國に於ても盛んであるにかゝはらず、實際に於てはアメリカ憲政の一大特色として內外の注目するところとなつて居つたのである。

此の主義は中米及び南米の憲政に於ても模倣せられ、最近に於てはフランスに於てリヨン大學の英米法研究に熱心なランベール教授に依て此の制度が詳細に紹介せられて以來、オーリユー・デュギー・ジェニー等の有力なる學者により支

持せらるゝに至つた。そして單に立法論としてそれが支持せらるゝのみならず、フランス憲法の解釋論として提唱せらるゝに至つて居る。レオン・デュギーの如きは、從來此の主義はフランス憲法の解釋としては採用すべからざるものとしたに反し、最近に公刊せられたる「憲法提要」に於ては舊說を改めて違憲立法審査權を認めて居る。最近彼をボルドー大學に訪ふた際、私は彼に向つて、何故に舊說を捨てたのであるか、と問ふたのに對し、教授は「過つて居た」「m'ai trompé」と答へて何等の理由を示さなかつた。我國に於ても亦憲法學者の間に最近違憲立法審査權を認むる學說の發生したることは亦注目に値する。

兎に角、米國に發達した違憲立法審査權の理論が、斯くの如く各國に於て模倣せらるゝに至つて來てゐることは、疑ふべからざる事實である。そして我々は、それを我國に採用するの可否は之を別とするも、此の制度を以てアメリカの法律生活が世界に寄與した貢獻の一つであると稱することを得る。

（二）　少年裁判所制度

刑事裁判及び刑事政策の範圍内に於てアメリカは特種な獨創的な貢獻をなした。人道主義に基いたかのシンシン監獄の如き、不定期刑制度の如き、又保護司制度の如き、皆アメリカが各國に先立つて創始した刑事政策的施設であつた。然し其最も顯著なるものは云ふ迄もなく少年裁判所制度である。此の制度は一八九九年七月一日からシカゴに設けられたのであつた。そして今ではアメリカの多くの州に於て採用せられた丈でなく、イギリス、カナダ、オーストラリア等は勿論、歐洲各國に於て此の制度が模倣せらるゝに至つた。又我國に於ても大正十二年一月一日から施行せらるゝに至つた少年法に依て設けられた「少年審判所」は、又此のアメリカに依て創始せられたる制度の模倣であると云へる少年裁判所制度は斯る事情の下にアメリカが世界に與へた第二の貢獻と見ることが出來る。

（三）　簡易裁判所及び法律扶助會制度

裁判と無産者との關係は、近代國家に於る司法社會問題として各國法律家の注意を惹いて居る問題である。そしてこれが解決の方法として簡易裁判所制度及び法律扶助會の組織は特にアメリカに著しく發達したのであつて、前者は一九一三年三月十五日カンサス州の三都市トピカ、レヴンウアース、カンサスに置かれたのが嚆矢で、その後オレゴン州のポートランド、オハヨオ州のクリーヴランド・イリノイ州のシカゴ、次で一九二〇年にはマサチューセッツ州に設立せられるやうになつて、漸次アメリカ全國の大都會に設立される傾向に向つて居る。その要點は、無産者が多く關係する小額の事件に就て、簡易、迅速、安價に裁判をすると云ふ點に在る。法律扶助會制度は一八七六年ドイツ法律扶助協會なる團體が、訴訟上の扶助を與ふる價値ありと認められ、而も無資力の爲め之を得ることの出來ぬドイツ系のものに無償で訴訟上の扶助を與へたのに其萠芽を發し、爾來今日に至る迄この制度は慈善團體、辯護士會、法科大學、都市行政と結付き、或は獨立な私設の法律扶助會として米國の殆ど主要なる都市に之を見出すに至つた。一九二三年六月オハヨオ州クリーヴランドで法律扶助會の全國大會が開かれ、法律扶助會全國聯合なるものを組織するに至つた。そしてウイリヤム・タフトを名譽總裁とし、米國法學會の宿老ジョン・ウイグモワーを副總裁とし、ボストンの辯護士で「裁判と貧乏人」の名著を公にしたレヂナルド・スミスを幹事とし、ボストンにその本部を置くことにした。

斯くの如く米國に發達した簡易裁判所及び法律扶助會の制度は、米國の特種なる事情に基く制度と見るべきではなく、近代法治國家が均しくその需要を感じて居るのであるが故に、將來に於て恐らくアメリカの法律生活が世界に寄與する制度と見らるゝに至るであらう。

（四）　判例式法律教育

過去五十年間に於る最も顯著なる現象の一つはアメリカに於る法律學校の異常なる發達である。從來アメリカの法律家は辯護士の事務所に於て自修したのに過ぎなかつた。然るに今日に於ては斯る變則なる方法に依るものは殆どなく、

大低の學生は法律學校に於て其法律家としての訓練を受ける。法律學校に就ても以前は所謂講義式又は教科書式であつた。然るに一八八〇年代にハーヴァード大學のラングデル教授が所謂判例式の法律教育を發達せしめ、學生をして豫め一定の判例を準備させ、教室に於ては之に基き學生と教授との間に於て問答が交はされるのである。此の方法は判例を主たる淵源とするアメリカに於ては最も妥當なる方法であるのと、又學生は常に具體的事實に對して法律的批判をなし、實際生活と全然懸離れることが少いのと、又教室での對論は講義式又は教科書式に於るが如く教授の意見を丸飮みにするといふ弊が少く、自ら考へる習慣を養ふ効果があるので、今では殆ど全部のアメリカの法律學校で此の教育方法が採用せられて居る。

此の米國に發達した判例式法律教育は、イギリスに逆輸入せられ、ケンブリッヂ大學では或る程度まで此の式を採用して居る。又歐洲大陸に於ても此の方式は學者の注意を惹き、之に關する可否の論が相當に戰はされて居る。歐洲諸國や我國の如き法典國に於ては此の方法に依ることは英米と異つて稍々困難であらうが、然し又法典が相當に古くなつて判例の分量が増加して來る場合に於ては、此の方法が法典國に於ても採用され得ざる理由はない。

判例式法律教育はアメリカが生み出した創造的試みである。そして現在に於ては、それはまだ廣く模倣者を出さないのではあるが、然し乍ら將來に於て此の方法が或る形に於て法典國にも採用されないと誰が云へよう。

然らばアメリカの法律學はその方法論乃至法律理論に於て、英國又は歐洲大陸の法律學と異つた何等かの新しき貢獻を齎して居るであらうか？

先に述べたるが如くアメリカの法律學は現在に於て各大學の法律學校を中心として動いて居る。この點に於てイギリスの法律學が今尚ケンブリッヂ、オックスフォード等の大學を中心とせずして、寧ろ裁判所並に辯護士養成所であるイ

ンス・オヴ・コートを中心として動いて居るのと稍々趣を異にする。勿論イギリスに於ても此等の大學は最近に於て漸次有力なる地位を占むるに至つては居るが、イギリスの法律家養成の中心地は依然としてインス・オヴ・コートに在る。此の點から云へば、アメリカの法律學は寧ろ漸次歐洲大陸式となつて居るものとも云へる。然しながらアメリカの法律學校はアカデミックではあるが、而も尙辯護士養成所たるの色彩が强い。此の點に於て、歐洲大陸の各大學に於る法律學とはその色彩を異にして居る

アメリカの法律學校に於て育まれて居る法律學は如何なる、性質のものであるか？方法論的に云へば、それは大體に於て分析的、歷史的、比較法的であると云へる。分析的と云ふのは、研究方法が判決例の分析を出立點とする意味である。然し單に現在の判例の分析を以て滿足せず、法律の各部門に就て、上はイヤー・ブックスより下は廿世紀の英米判例に至る迄、法の歷史的發展に着眼して分析をなすが故に、それは歷史的である。又アメリカは四十有餘に亙る各洲其法律を異にするのであるが故に、此等の異つた法律を比較對照してその是非を論ずるのであるが故に、それは比較法的である。分析は主として判例に限られ、過剩生產の稱ある各洲成文法に及ばず、歷史的考察はローマ法系、その他の法系の歷史的發展に及ばず、又比較の範圍も英米兩國の判例の比較に止り、ローマ法系の現行法の比較に及ばないのは、法律學としてはその制限である。然しながらそれは實際的法律家養成といふ立場からは或程度迄ジヤスティファイすることが出來るであらう。若しも我國に於て我國の法典及び判例の分析的研究を出立點とし、それを古代ローマ法より現代に至る迄の歷史的形相に於て眺め、且之を佛・獨・伊・瑞・西班牙・葡萄牙・南米諸國の法典及び判例と比較對照し、その是非を合理的に論ずる種類の法律學が發達したと假定すれば、それはアメリカの法律學の現狀を髣髴せしむるものと云へよう。斯る法律學は現在アメリカの大多數の法律家を育くんで居るものである。そしてそれが如何なる具體的形式の深作

となつて現れて居るかは、ジョン・ウィグモワー氏の「證據法論」（註一）及びウィリストン氏の大作「契約法論」（註二）を繙く時に其性質は極めて明らかとなるであらう。此等の二大名著は分析的、歴史的、比較法的な特色を有する。そしてそれは現代アメリカの大多數の法律家を育くんで居る法律學の最もよき典型であると稱することを得よう。

アメリカの法律學には以上の如き特色があるのであるが、然らばアメリカは何等かの新しき法律哲學を與へたであらうか？何等かの新しき法律理論を與へたであらうか？

ハーヴァード大學法學部々長ロスコー・パウンド教授は一九一三年ドイツの「法律及び經濟哲學雜誌」に「米國に於る法律哲學」なる論文を寄せて、「アメリカには近代的な法律哲學が現存しない」、と述べた。然しながら現在に於ては、此の言をなした著者それ自身の法律思想體系の中に、アメリカ式な色彩を備へた法律哲學を見ることが出來る。今此處には、彼と彼の法律哲學とに就て幾分の考察を施さうと思ふ。蓋しそれは司法權の優越、少年裁判所、簡易裁判制度、及び法律扶助會、判例式法律教育と共にアメリカの法律及び法律學が生み出した獨創的な所產の一として世界的意義を有するものと考へるからである。

（註一）Wigmore, A Treatise on the Anglo-American System of Evidence at Common Law, (2ed.)1923.
（註二）Williston, The Law of Contracts, 1922-3.

二　パウンドの根本思想

ロスコー・パウンドは其名著「コンモン・ローの精神」の中に、法律史の解釋に就て、巨人の有する大きな働きの無視すべからざる所以を論じて、「パピニヤンとウルピヤンとポールなきローマ法、バルトルスなき近代ローマ法、グロチ

ウスなき國際法、ポティエールなき佛蘭西法、サヴィニなき獨逸法、クックなき英吉利普通法、マーシャルなきアメリカ憲法は殆ど考へ得ない」として居る（註一）。私は更に附け加へて、ロスコー・パウンドなき廿世紀のアメリカ法も又殆ど考へ得られない云はれる時代が來るのではないかといふ豫感を持つて居る。それは法律の各部門に亙つて、最近に於るアメリカの判例と著書、論文とに歴然と現れて居る彼の偉大なる影響よりした一つの歸納である。

勿論巨人も亦或意味で時代の所産である。社會雰圍氣の兒である。然しながらそれ等の巨人が其時代とその社會雰圍氣とを表現するが故に、又その時代とその社會雰圍氣とに批判を加へ、之に或る方向を與へんと努力して居るのであるが故に、われ／＼はそれ等の巨人に對しより多く興味を感ずるのである。從て巨人はその生存する時代と社會雰圍氣とを切離して充分に之を理解することを得るものでない。ロスコー・パウンドを理解せんとする者は單にその思想的形骸のみを以て足るものでなく、彼の生存するアメリカの社會的雰圍氣、知的雰圍氣、法律狀態等と關聯せしめて初めて彼の理論を理解することが出來る。又、彼の理論を通じてわれ／＼はアメリカの法律學の現狀を知り、且その向ひつゝある方向を示唆せらるゝが故に、われ／＼は彼の學說に興味を感ずるものである。

私がパウンドの論文に興味を感じ初めたのは今から約十五年前東京帝國大學の學生であつた頃、帝國大學圖書館でアメリカン・ロー・リヴューに掲載された「ピューリタニズムと法律」と題する彼の論文（註二）を耽讀したことに始る。當時稍無味乾燥な條文の分析と解說とに大部分の時間を費して居つた私には、法律現象を人間の深い精神運動と關聯せしめて說明して居る此の論文に對して、少からず興味を感じたのであつた。その後大學を出てから英米法と云ふ專門を選ぶに及んで、英米法を單に分析的に考察するのみならず、それを英米の文化、殊に、その精神的文化と關聯せしめて研究したいと云ふ希望が生じて來た。そして此の方面から自分の愛讀したのは諸種の雜誌に現れたパウンドの論文であつた。

私はその一を譯して「法學協會雜誌」に掲載した(註三)。恐らくパウンドが日本の學界に紹介されたのはこの頃からであつたであらう。その後一九一五―一七の二ケ年に亘りてハーヴァード大學で英米法を研究して居つた間、私は教授と識り合ひになり、私のパウンド熱は益々高まり、私は氏の講義全部を聽講した。法理學、ローマ法、衡平法、不法行爲法、法理學演習等で、氏の傾けた學識と諸種の問題に就ての鋭い識見とは私をチャームせずには置かなかつた。

パウンドの法律理論に入るに先立つて、之を理解する準備觀念として二三の點を指摘しておきたいと思ふ。

(一) 彼は本質的には法律家である。彼は一八八九―九〇年ハーヴァード大學に學び、一八九〇年より其生れ故郷ネブラスカ州リンカンに於て辯護士として活動し、一九〇一年から三年の間ネブラスカ最高裁判所の裁判官となり、更に一九〇三―七年辯護士の業に復歸したのであつた。一九〇七―九年、彼はシカゴのノースウエスタン大學の法學部の教授となり、此の時より彼の一生は法律學の方面に向けられたのであつた。一九〇九―一〇年、彼はシカゴ大學法學部の教授となり、一九一〇年ハーヴァード大學に轉じ、今では其法學部長として活動して居る。斯くの如く彼は十七年間の辯護士生活と三年間の裁判官の生活をなし、此等の職務の執行に就ても頗る優秀の手腕あることを認められた。彼は後に學者として立ち、而も法理學と云ふ最も實際と懸離れる傾向のある題目を專門とするに至つたに拘らず、彼は常に法律の實際的方面との關聯を忘れないのは、多年に亘る法律實務家としての經驗に其基礎をおくものと云はなければならぬ。

彼は先に述べたやうな意味での分析的、歷史的、比較法的學風の下に育くまれた。そして充分にその教ふるところを吸收したのみならず、更に之を發展せしめた。彼が如何に鋭い分析的メスを揮ふかと云ふことは、彼の衡平法、不法行爲法等の講演に列したる者のよく知るところである。又例へば彼の公にしてた「權利論」を見ても分ると思ふ。それば

かりでなく古來の復雜なる法律の發達と法律思想の發展とを巧みに分析綜合する手際には、此の分析力の銳さがほの見える。彼の分析力の銳いことは一面分析的法律家としての訓練に基くものではあるが、又他面に於ては彼が植物學に精通し、「ネブラスカの植物地理學」なる著書を公にし、アメリカ植物協會其他の植物學研究を目的とする學會の會員であると云ふ事からも來て居るのではないかと思はれる。（註四）又歷史的研究に就いても彼が英米法史に就て一箇の見識を有するのみならず、又彼は多年ハーヴアード大學に於けるローマ法及び大陸法の講座を擔任し、此の方面の造詣又決して淺くない。而のみならずゲルマンの古法、インド法、回教法等に就ても常に注意を怠つては居ない。換言すれば從來のアメリカの歷史法學が英米法制の歷史にのみ着眼する傾向があつたのに反し、彼はその對象を擴大し比較法律史的方面に其傾向を向けしめたのであつた。又比較法に就いても從來の如く單に英國及びアメリカの各洲の法律の比較に止めずして、其比較の對象を擴大して佛、獨、伊其他の歐洲諸國の現行法をも比較の範圍中に取入れたのであつた。斯くの如く彼は從來の法學に於ける分析的、歷史的、比較法學的方法の長所を吸收して、更にそれ等の方法を完成擴大せしめたものであると云へる。

然し彼は此等の法律學的方法のみで滿足しなかつた。彼は開拓者的農業的社會が、大都市、大企業を中心とする社會へ推移する時代に遭遇した。そしてこの推移に伴つて生じた階級鬪爭を目擊した。そして此の新しき情況を處理するに就て、從來の法律及法律學が如何に透視力を缺いて居るかを痛感した。階級鬪爭を平和的に處理せんとする社會立法も、米國憲法第十四修正の大磐石に衝突して打碎かれるのを目擊した。裁判官達はスペンサーの社會靜學（ソシアル・スタテイクス）に現れたる個人主義的經濟思想が裁判官に依て萬古不易の自然法であるかの如く考へられ、異つたるそしてより進歩した經濟思想に基いた社會立法が、無殘にも裁判官の此の心情に依て打碎かれるのを目擊した。しかのみならず裁判所の構成、訴訟手

積、刑法、民事法等法律生活の各方面に亘つて、開拓者的社會雰圍氣に生存したる形態をそのまゝ殘存せしめて居るのを目撃した。單純なる判例の分析と歴史的發展の研究と英國及びアメリカ諸洲の法律の比較では到底此の問題の解決が出來ないことを自覺した。分析派の法律家は現在裁判所に依て認められて居る法律を金科玉條となすに傾き、歴史派の法律家はイギリス古來の法律的傳統を以て、父祖傳來の傳統であるが故に之に追從すべきものであるとなすに傾き、比較法學もその對照が英國及アメリカの諸洲に限らるゝが故に、到底此の改造の要求を充さしむるに足りないものであることを自覺した。又法律の革新に就て古來大きな働きをなした自然法の觀念も、それが個人主義的な傳統的經濟思想と結付いて裁判官の頭を支配したるが故に、到底革新の機能を果し得ざるものであることを悟つた。即ち此等の法律學的方法は、畢竟舊套を墨守せんとする消極主義に歸するのであることが歴然として明かとなつた。彼の組立つるに至つた動的な法律理論は、斯る法律及び法律學的背景の下に生れたのである。

彼を動かして彼の法律理論を生み出さしめたのは彼の法律家としての要求と熱情とであつた。彼はアカデミツクな哲學的體系を祖述して、その法律理論を開轉せんとしたのではない。彼の博識は古來の哲學體系をも網羅する。又近代に發達したる社會諸科學にも及んで居る。然し彼は此等の哲學的體系や社會諸科學の專門的論爭に就て、自己の立場を定めることを避ける。そして法律家の立場から、此等の他の學問の貢獻が如何に役立つかに細心の注意を拂ふのである。彼の理論は、畢竟法律及び法律學の革新を目標とする法律家としての努力の結晶であると云へよう。

（二）彼の法律理論に現れたところから其哲學的傾向を歸納するならば、それはウヰリアム・ジエームスに流を汲むプラグマティズムであると云へよう。

プラグマティズムは生に即した哲學である。それは靜止した世界よりも寧ろ動的な世界に着眼する。それは思惟と信

仰とを以て生の要請であると見る。思惟は既に完成した實在の復寫ではなくして、社會的進歩の現實的過程であるとする。それは一面に於て神秘主義の理想からわれ〲を解脱せしむると共に、過去よりの何等の統制原理なく、新奇又は放漫の要求からわれ〲を解脱せしむる。それは合理的發展の論理である。新しき現象に對して常に注意を怠らざると共に、必ずしも新奇に捕れず又過去の傳統を尊重すると共に徒らに之を追從せず、新と舊とを合理的に關聯せしめんとするのである。ジエームスの弟子ラルフ・ペリーはプラグマティズムの特色を以て(1)生を中心とする考へ方、(2)人間の努力を尊重すること、(3)社會を高調すること、(4)改良的であることの四點に在るとして居るが(註五)、此等の特色はパウンドの法律理論の中に遺憾なく發揮せられて居る。

プラグマティズムは理想主義と現實主義との中間に存する。生を中心とするが故に現實の生活を尊重する。然しながらよりよき世界を來さんと努力するのであるが故に、理想を尊重する。此の傾向はロスコー・パウンドが法律の世界に於て現在の法律狀態を――成文法、判例法のみならず生きた法律までも――研究しつゝ、しかも此等のある法律をあるべき法律に轉換せんとするが爲に、法の理想、法の目的に就て、古代より現代に至るまでの法律及び法律思想に現れた法の理想、目的を探究反省して、法律改造に役立たしめんとする努力に最も鮮かに現れて居る。

然し此の哲學的背景は彼の法律家としての要請から自然に發展した經路であつて、ジユームス、デユーイー等の哲學思想とパウンドの哲學的傾向とは寧ろ偶然的一致であると云ふべきであらう。それは共に或る意味でアングロサクソン的人生觀の發露であるとも云へよう、又民族を超越した時代精神の所産であるとも云へよう。然しながらパウンドはプラグマティズムの哲學を祖述して之を開展したものであるとは云へない。寧ろそれは彼の法律理論の中に躍動する精神そのものからの歸結である。

(三) 彼は彼の體系を「社會學的法律學」と呼んで居る。社會學的なる語は、自然科學的と云ふ意味を含むかの如く一般から理解され易い。然し彼にあつては、此の方面と共に「努力の効果」及び「理想の追求」を高調するのである。從てコント、スペンサーの社會學的方法よりは寧ろレスター・ウオードにより多く同情を持つ。彼はウオードが、人類の自然に對する態度は二重のものでなければならぬ、まづその弟子として立ち、次いで主人として立つべきであるとした點に多大の同情を有する。理智に依て導かれた活動の効果の主張は、ウオードとパウンドとの共通點である。又スモールが一九一〇年に公けにした「社會科學の意義」に現れた社會諸科學の協力の提唱、ロッスの社會統制論に現れた法律制度をより廣い社會統制の一部として觀察する見方に同情する。

斯くの如く彼の法律理論はアメリカの社會學的思想と密接なる關係に立つものであるが、然しそれは彼の法律家としての活動から來た自然的要請であつて、此等の社會學者の學説を祖述して之をその法律理論に應用したるものと見るべきではない。彼は所謂社會學者の爲した法律に關する研究には大して重きをおかない。蓋しそれらは法律家としての訓練なしになされて居るが故に殆ど參考とならないからである。彼は寧ろ法律家としての研究の社會學に對する貢獻に、より多くの信頼を持つ。社會學が法律家に與へ得る貢獻は方法論に於る暗示であると考へて居る。

(四) 彼は法律家であるが故に、その先輩たる法律思想家の體系からその長所を學ぶことに妙を得て居る。從てオーステイン、メーン、サヴヰーニー、イエリング、シユタムラー、コーラー、エーヤリッヒ等、それ〴〵傾向の異つた法律思想家の思想中より何物かを學ぶことを忘れない。これらの著者の影響は彼の法律理論の中に點々として指摘することが出來る。一面彼は十九世紀の分析學派及び歴史學派に對して一大チヤレンジをなして居るのであるが、しかも尚敵將の長所を認め之を自家藥籠中のものとするに妙を得て居る。又彼は新ヘーゲル派や新カント派の美しき哲學的衣裳を脱ぎ

捨てゝ、その奥に存する此等學派の法律學的貢獻を自己の法律理論の中に取入れてゐる。それが彼の理論を躍動せしめる奥秘である。

（九）彼の法律理論は先に述べたるが如く、プラグマティズムの精神に滿ちて居ると云へる。從て左の傾向を有する。

(1)活動主義、即ち十九世紀の法律理論の特質であつた法學的消極論を廢し、よりよき法律を創造するに就ての法律家の努力の効果を高調する。

(2)機能主義、即ち全體としての法律を社會統制の一要因と見るのみならず、各法規、原則、概念等を一定の社會的機能を充す手段として觀察する。そればかりでなく、各時代に於る法律思想其ものをも機能的に評價せんとする。

(3)歴史の尊重、即ち彼は現在の法律生活に即し、之を改善せんことに努力するのであるが、しかもそれが過去の歴史に依て制約せらるゝものであることを熟知して居るが故に、あらゆる題目を歴史的に取扱ふ傾向がある。但しそれは年代的ではなくて寧ろ觀念的（アイデオロジカル）である。そして又彼の理論の組立方もスコラ的乃至ドイツ式ではなくしてイギリス式である。

(4)社會的傾向、社會的と云ふのは、一面に於て神秘主義的でないといふ意味を持ち、他面に於て個人主義的でないといふ意味をもつ。此の點はプラグマティズム其物の特色であると共に、近代法律思想の特色であることは云ふ迄もない。

(5)多元的傾向、「一」と「多」を對照するとすれば、彼の法律理論は寧ろ一よりも多を高調する傾向がある。

（註一）Pound, Spirit of the Common Law, P. 33
（註二）pound, Puritanism and the Law, in American Law Review, vol.45, P.811
（註三）「米國に於ける法律哲學」、法學協會雜誌第三十三卷
（註四）Pound and Clements, Phytogeography of Nebraska, 1893, その他、歐洲及び米國の植物學雜誌に數多くの氏の論文がある
（註五）Perry, Present Philosophical Tendencies, P. 268

三　法律目的の理論

法律秩序の目的、目標、理想はなんであるかに就て、最近の法律哲學者は熱心に且つ巧妙に論究して居る。ロスコー・パウンドも亦此の法律哲學に於る最も重要なる問題に就て考察を怠つて居らない。實際的法律家として現代の法律學上の諸問題を取扱ふ場合、それは彼の常に遭遇する問題であり、それに依て彼の實際的活動が左右せらるゝのであるが故に、法律の目的、法律秩序の理想の問題は、現實の生きた問題を妥當に取扱つてゆくに必要缺くべからざる先決問題であるからである。パウンドは此の點に就てもプラグマティストに相應しき態度で之に對する。彼の眼は寧ろ將來に在るのであり、現實の生きた法律生活の諸問題の解決に、より多くの興味を感ずるのであるが、然し人類の經驗して來た法律的經驗を無視して驀地に突進し、その獨斷を以て之を裏付けんとはしない。過去の法律生活の經驗に現れた法律の目的、理想を充分に反省してその中から將來の指針を見出さんとする。彼は斯る立場からして二箇の重要なる論文(註一)を發表した。其一は、「法律規則及び理論に發達したる法律の目的」であり、其二は、「法律思想に發達せる法律の目的」である。第一の論文は、法律制度其物の發達を眺め、その各發達典型中に現れた法律の目的を歸納せんとするものであり、第二の論文は、法律に就て古來施されたる思想の中に、意識的又は潜在意識的に存する法律の目的を歸納せんとするのである。前者に於ては、各時代に於る法規及び理論の解説を必要とし、後者に於ては、哲學的又は社會思想史的、並びに制度的背景の解説があるが、要點は此等の法律制度及び法律思想に法律の目的が如何に現れて居るか、又それが時代の變遷と共に如何に變遷して居るかを論ずるにある。

第一の論文に於て、彼は主としてローマ法系及びイギリス法系を基礎として、それらの歴史に現れた法律の典型を五

つに分つ。彼が研究の對象を主として此の二法系に限つたのは、一面それらの法系が近代の法律に最も重大なる地位を占めるのであり、最も詳細に研究せられて居るのであり、且又法律の變化過程が最も明白に知り得るからであらう。

彼は此等の二法系の發達から歸納して、原始法時代、嚴正法時代、衡平法及び自然法時代、法律成熟時代、法律社會化時代に分つて議論を進める。

原始法時代は紀元前四五〇年、即ち十二表法制定に至る迄のローマ法、及びイギリス法系の淵源であるゲルマン法にその典型をおく。そして宗教、道德、法律が渾然として社會統制をなし、法律の範圍が他の社會統制の範圍に比較して極めて狹少であつたこの時代の法律、即ち自力救濟制限に關する規程、贖罪規程、非合理的な機械的な裁判方法、極端な形式主義等の中より、此の時代に於る法律の目標は、其大部分に於て爭を私戰に導びかずして之を平和的に解決することに存し、法の目的は「治安」に存したのであるとする。

嚴正法時代は、ローマに於ては紀元前四五〇年乃至一七八年、即ち十二表法より lex Aebutia に至る所謂市民法、イギリスに於ては十三世紀より十七世紀に至る所謂コンモン・ローに其典型を見出すのである。そして此の時代に於ては國權が發達し、法律は漸次他の社會統制の形式より分離し、法律の單位は「極限せられたる範圍の個人」となり、極端に形式的な訴訟手續規則が法律制度の中心をなし、個人主義的なそして非道德的な色彩を有する此の時代の法規と法律理論より推論して、此の時代に於る法律の主たる目的は、治安と云ふ素朴的な思想より更に進んで、「法的安定」及び「法的劃一性」の觀念に進んだとする。そして之を達する方法としては、規則（殊に訴訟手續規則）と形式の尊重が使用せられたとする。

衡平法乃び自然法時代は、ローマ法に於ては紀元前一七八年、即ち lex Aebutia より紀元四世紀即ちダイヲクレテ

イヤン帝に至る迄の法律状態、即ち所謂民法及び自然法時代、イギリス法に於ては、十四世紀に於る衡平法裁判所の設生より、十七、八世紀に至る迄の衡平法裁判所の衡平法理論、歐洲大陸諸國に於ては、所謂十七、八世紀に於る自然法派旺盛時代の法律及び法律理論に於て其典型を見るのであるとする。此等の時代に於ては、比較法的考察、宗教的道徳的思想乃至哲理に依て嚴正法が合理化された時代である。そして法律上の單位が「總ての人間」に擴張せられ、權利能力及び行爲能力に對する廣い範圍の制限撤廢があり、法律の形式よりは實質、文句よりは精神に重きをおく理論、取引に於る信義誠實、不當利得の法理の發達等より歸納して、此の時代に於る法律の目的は「爭の道德的解決」であり、その手段は義務の强制であるとする。然るに此の時代の法律は一面に於て過重なる道德的義務を法律上の義務として强制せんとし、他面に於て裁判官の自由裁量權が不當に擴大せらるゝに至つて、法的安定が傷けらるゝ傾向を伴ひ、之に對する反動として再び嚴正法に似たる特質を持つ、所謂法律成熟時代が發生するに至つたのであるとする。

法律成熟時代はローマ法に於ては、ダイヲクレティャン時代よりジャスティニヤンの法典編纂に至る期間、イギリス法及び歐大陸法に於ては、十九世紀の法律に其典型を見るものとする。此の時代に於ては衡平法及び自然法時代に豐富にせられたる法律の內容を整頓した時代である。ローマ及び十九世紀の歐大陸では立法運動が之に伴つたのであるが、英米法に於ては必ずしもさうではない。此の時代を說明するに就て、パウンドは主として十九世紀に於る英米及び大陸法を材料として、ローマ法に就ては深く論じて居らない。そして前時代よりの思想を繼承して、自然人を法律上の單位とし、物權法と契約法とを重なる制度とし、個人の權利と云ふ思想が中心となつて動き、それが精密に分析せられた十九世紀法に於る法の主たる目的とせられたるところは、「機會均等」及び「獲得物の安定」であり、之を達成する手段は個人の權利の保護であるとする。

法律社會化の時代は、十九世紀の終頃より今日に至る迄即ち法律成熟時代に對する反動時代の法律及び法律理論の中に其典型を見る。即ち財產使用權に對する諸種の制限（權利濫用の法理）、契約自由に對する諸種の制限、財產處分權に對する諸種の制限、債權者の强制執行權の制限、無過失責任の理論、公用物及び無主物の公有物への轉換、妻子に對する社會利益の主張等の現象が起つて來て居る事實を指摘して居る。それは一面に於て法律的安定を過重し、機會均等と獲得物の安定を過重したるが爲に法律と道德觀念との離隔を伴ひ、人間の完全な道德的及び社會的活動に對する要求が無視せられた結果、衡平法及び自然法時代に於て道德觀念が法律に侵入したと均しく、社會諸科學に發達した觀念が法律の中に侵入して居るのであるとする。そして法律觀念の星座が權利より利益に移り、個人的利益よりも社會的利益が高調されて居るのであるとする。彼は法の社會化の理論に就ては此の論文では詳細に說いて居らない。

以上はイギリス法系及びローマ法系の歷史的發展に關する氏の豐富なる學識に基き、博引旁證一々典據を示して形成せられた右の論文の形骸である。

法的安定と具體的正義とを如何に調節すべきかは、現代各國の法律家を悩ます難問の一つである。右の論文は、此のわれ〳〵の遭遇しつゝある問題が法律の歷史に於て常に存して居つた問題であり、それが法律史の各階段に於て如何に取扱はれたかを極めて明晰に示して居る點に於て、一大貢獻をなしたものと云はねばならない。即ち右の法律史的觀察に於て、法的安定と社會順應性との二つの思想が常に法律の生命に內在するものであることが明かとなる。而も時代に依て其何れか一方面が特に高調されて居る。法的安定に就ても原始法時代のナイイフな治安と云ふ思想、嚴正法時代に於る規則と形式との尊重に依て保障せられた法的安定及び法的劃一性、法律成熟時代殊に十九世紀法に見らるゝ個人權利の確定に依て保障せらるゝ機會均等及び財產權安定の思想等、法的安定を彩る色彩と之を達成する手段とは時代に依

て異つて來て居る。そしてそれ等の支持せらるゝ原理と手段とは社會の進歩と共に益々洗錬されて來て居る。又法の社會適應性が高調せらるゝ時代に就ては、衡平法及び自然法時代と法の社會化時代に於て、共に從來の法律材料以外から法律を改善すべき資料が求められて居る點に於ては一つであるが、その資料如何は時代と場所とに依て異つて居る。即ちローマに於ては、ローマ市民法以外の法律との比較及びギリシヤ哲學殊にストアの自然に關する思想であり、イギリスに於ては、ローマ法、教會法との比較及びキリスト教的良心であり、十七・八世紀の歐大陸に於ては、ローマ法的傳統に對する理性に基いた自然法であつた。現代に於ては寧ろ他の社會科學に於て發展した思想である。そして衡平法及び自然法時代になした誤は、われ〳〵が現代に於て繰返してはならない誤であると云ふことを指摘することも極めて適識である。

明治時代以前に於る我國の法律制度に內在する法の目的は何んであるかに就ては、寧ろ原始法時代の法律理想に近きものではないかと想像される。或は衡平法及び自然法時代と同一視すべきだとの考方もあるであらうが、然しわが國に於てはローマの市民法、イギリスのコンモン・ローに當る嚴正法なるものが發達しなかつたのであるが故に、純法律的立場から云へば、ギリシヤ法と均しく原始法の部門に入るものであり、治安と云ふ思想が法律制度の最も顯著なる中心觀念をなして居つたのではないかと思はれる。然し此の點に就ての正確なる研究は未だ試みられて居らない。

明治以後我國に輸入せられた所謂「西洋の法律」なるものは、法律成熟時代を表現する十九世紀法であつた。そして世界大戰頃よりして社會順應性が高調せられ、一面に於て宗教、道德、法律が渾然として社會統制の手段をなして居つた明治以前の法律思想への復興運動があり、所謂淳風美俗に依て、西洋から輸入せられた法律成熟時代の法律をわが國の民情に合致せしめんとする運動となり、他面に於て法律成熟時代の法律を基礎として築き上げられたわが國の經濟組

織・社會組織に對し、西洋諸國に於て見らるゝ法律の社會化現象にも比較せらるべき現象が起り、他の社會諸科學に發達したる思想が漸次法律體系の中に侵入しつゝある。そして學者も亦法律社會化を高唱する。從て又治安、法的安定と、社會順應性とを如何に調節すべきかは我國法律家の双肩に擔はれた任務である。斯る見地よりするも、パウンド氏の右の研究は所謂法律成熟時代の法律、即ち十九世紀法が如何に歷史的に發展したかを知り、又之を如何なる方向に向はしむるかの問題の解決に對して多大の暗示を與へるものであると云はねばならぬ。要するに法的安定と社會順應性の問題を如何に解決すべきかは、現代法律學の世界的な共通問題であり、それは一面に於て原理的研究を必要とすると共に、他面に於てその具體的解決は、各國の國情に依て其形式を異にすることは勿論である。最も重要なる點は、問題のあるところを明瞭に意識することである。そして此の點から云つて、パウンドの歷史的反省は多大の光明を放つたものであると云ふことが出來る。

第二の論文に於て彼は、ギリシヤより十九世紀末に至る迄の法律思想に現れた法律の目的を論ずるに當つて、之を「ギリシヤの法律思想」、「ローマの法律思想」、「中世の法律思想」、「宗教改革」、「スペインの法律神學者」、「十七世紀」、「十八世紀」、及び「十九世紀」の八箇に分つて解說して居る。

「ギリシヤに於る法律思想」に就ては、プラトンが、正義は靈魂の各部分が其個有の機能を充し、他の機能を帶びないことに存するとし、社會の組成員として其最も適する階級に屬せしめ、國家及びその各人の間に完全なる調和と統一とを來たさしむることを以て理想郷の構成であるとし、アリストートルが、正義は相互の權利の侵害なき統一、即ち各人がその指定せられたる活動範圍に止るが如き統一を要求するものであるとし、ストア派の哲學が、自然に從て生活し普遍的理性に從ふことを要求したるが如き、その哲學的色彩と傾向とに於て異るにせよ、畢竟ギリシヤ哲人の發達せしめ

た法律理論は、靜止的社會を目標とし、各人の本性に叶つた社會を理想とし、之を保持してゆく點に法律の目的があるのであると考へたのに歸するとする。換言すれば、「社會的現狀を維持してゆくことゝに法律の目的が在るのだとする。」勿論かゝる理想とて變化を認めるのではあるが、それは畢竟既に存する理想への復歸であり、之による匡正に過ぎない。それは近代の法律思想と根本的に異る點であるとする。

「ローマの法律思想」に於てシセロは、法律及び政治の基礎を自然に固有なる道德的精神に置いたのであるが、然しシセロに於る自然の觀念は、萬物は其特質及び目的より生ずる自然的原則を有すると云ふ意味で、所謂自然法は此の意味の自然的條理より生ずるのである。從てその自然は十七世紀の自然法が權威に對し個人理性の主張であり、十八世紀の自然法が、社會及び國家に對する個人理性の主張であるのとは大に趣を異にし、それは形式より實質への訴であり、傳統的形式及び獨斷的規則に對する合理的原則の訴に過ぎない。從てシセロの正義理論の一大原則は、社會秩序の下に於て取得された權利の尊重である。之と均しくジヤスティニヤンの法學階梯に揭げられた、「正義とは各人にその分を與ふる一定不變の目的である」、と云ふ有名な定義、及び同書に於る「正義及び法の訓は三つである。正しく生活すること、他人を害せざることゝ、各人にその屬するものを與ふること」、も畢竟ローマ人の法律思想がギリシヤ人の法律思想以上に出でたるものでなくして、只ギリシヤ人の理想を實際的に効果あらしめたのに過ぎないのであつて、畢竟それは靜止的社會を目標とし、彼等の考へた法律の目的は社會的現狀を維持するのに過ぎないのだとする。

「中世の法律思想」はギリシヤ哲學とローマ法とを權威として認めたる結果その最も代表的なる思想家であるトマス・アクヰナスの法律理論も、神學的な衣裳をつけて居るに拘らず、それは畢竟シセロ及びジヤスティニヤンの正義理論と歸趣を一にするものであつて、各人に其分を與ふることが其正義思想の核子をなして居るのであり、畢竟社會的現

狀を維持すると云ふクラシカルな法律目的を繼承したるに過ぎないものであるとする。然しトマス・アクヰナスが理性を根據として法の權威を支持せんとしたのは、後の時代に此の同じ理性に依て法の權威に反抗せんとするに至る傾向の伏線があるのであると見る。

「宗教改革」に於て彼は、宗教改革の法律學的意義は世界帝國の思想及び之に件ふ普遍的法律思想から、領土的國家及び國民的法律の思想に推移する分界線をなす點にあるとする。宗教改革は、聖書を解釋するに就て各個人の良心に依るべきもので、ローマ教會の有權的普遍的解釋に屈從する必要なしとするにあつた。そして其論理的歸結は、十八世紀の法律思想を支配した個人と社會との對立に導くのではあるが、宗教改革に從事した人達は其處迄は到達しなかつたので、政治的には國家を教會に對立せしめ、國家に對する個人の服從の義務を認めたのである。從て法律の目的に關しては、未だクラシカルな思想に何等の新しきものを加へて居らぬとする。

「スペインの法律學的神學者」即ちソトー及びスアレズに就て彼は、此等の神學者が一面に於て國家的法律と云ふ現實の近代的政治事實を認め、他面之を、中世の統一理想及びゲルマン法より由來する永遠の眞理としての法律の觀念と結び付けようとしたのであるとする。そして一面に於て法が「永劫不變の正義」の原則より發することを認め、又各國家及び個人は自立能力を有するが故に、各國家及び各個人の「平等」が正義の原則であるとした。そして此の平等が維持せられ表現せらるゝ「抑制」の觀念を認めた。即ち國家に對する抑制は、主權者相互の活動を定むるものと、國家と臣民との關係に於る活動制限を定むるものとの二種があり、個人に對する抑制は、個人相互の關係に於る個人活動の制限であるとし、其處に國際法、公法理論及び私法理論の生ずる基礎が置かれて居る。そして此等の諸抑制は永劫不變なる正義の原則に依て課せられたるものであるが故に、犯すことを得ないものであるとした。そして此の理論の中にパウンド

は、古代とは全然異つた法律目的を認むるのである。即ち古代にあつては、法律秩序は各人を其指定せられたる地位におき、現状の社會秩序を維持する爲にする活動制限であると見たのに對して、スペインの法律神學者に始る法律理論は、各人は自由意志を持ち、自覺的目的に向つて進む能力を有するのであるが故に平等であると云ふ立脚地から、他の人の活動の爲に各人の活動を制限せんとするようになつたのだとする、そして法律の目的は、各人の「自然的平等を維持」するにあると考へらるゝに至つたのだとする。

「十七世紀」に於て彼は、グロチウスの自然法理論、即ち人の性情に照し、理性に依て課せられた人間活動制限の理論と、人の性情より發し理性に依て論證せらるべき人間に固有なる道徳的性質、即ち自然權の理論とを説く。そして此等の理論は彼の先驅たる法律哲學者の中に內在するものではあるが、しかも神學的色彩を捨てゝ、むしろ「理性」に其基礎をおいた點に其特色があるとする。しかしながら、グロチウスの、人間に固有な道徳的性質の理論は人格權に就ては妥當であつたが、財產權に就て妥當でなかつた爲に、プーフエンドルフ、ホツブス、スピノザ等財產權に就ては、「契約」なる思想に依て說明せんとするものが生じ、その結果として、法の目的は、人間に固有なる道徳的性質を保護するか、又は社會契約に依て各人が有するもののみ保護するに在ると解せらるゝに至つた。即ち近代の言葉を以て云へば、法律の目的は個人の利益を維持保護するに在ると考へらるゝに至つたのであるとする。

「十八世紀」の理論は、理性に依て論證せらるべき自然法の存在、此の自然法は、自然權を完全に確保する法規の一體であること、國家は此等自然權を各人に確保する爲に存在するものであること、成定法は、國家が此の機能を果す手段であり、自然法に適應する範圍に於てのみ拘束力を有すると云ふ四つの基礎の上に成立つて居る。換言すれば、十八世紀の法律思想に現れた法律の目的は、「個人の絕對永劫不變な自然權の確保」といふことであつた。しかるに十八世紀の

絡り頃、カントが出て十八世紀の法律理論に致命傷を負はしめた。若しも自然權が理性に依て知ることをうる固有な道德的思想であるならば、理性は一定の前提から誤りなく推論をなすことが出來ることを認むるとしても、理性は如何にしてわれ〳〵にかゝる前提を與へることをうるか？もし又自然權が社會契約に基くものであるならば、過去の時代に於る契約の條項は、何が故に現代の人を拘束するか？かゝる疑問が提出される。斯くしてカントは權利及び權利を確保する手段としての法を終極的な所與に置いた。そしてそれは「意志の自由」であつた。そしてそれは活動者の自由意志が他人の自由意志と共存し得るが如き普遍的原則といふ有名な定義となつて結晶した。そしてそれは十九世紀を通ずる法律理論の基礎をなしたのであるとする。

「十九世紀」に就て彼は哲學的法律學者、英國功利派、歷史派の法學者、實證派及び社會主義者の法律理論（社會的個人主義）等各種の法律思想に就て、それ等がその學的方法を異にするに拘らず畢竟個人の自由を中心とする法律思想であり、それ等の法律思想に現れたる法律の目的は「個人の自己主張の最大限度を認むる」にあることを論證して居る。

右は氏の第二論文の梗概である。そしてそれは畢竟古代社會に於る法の目的が、「社會的現狀を維持する」にある點と十六世紀に始り十九世紀に至りて最高調に達した個人主義的法律理論の中に現れた法律目的が、「個人の自己實現を最大限度に認むる」にある點とを對立して描き出した所に特色がある。そして現在の法律學上の重大問題の一つは、個人主義に基いた法律思想を如何なる方向に向けてゆくかである。十六世紀以來發達し、十九世紀に至つて個人權利の體系として結晶した法律學は全然捨てられなければならぬのであろうか？そして再び古代理想に復歸せねばならぬのであるか？パウンドの右の論說は此の點を强く我々の眼の前に提出する。彼は此の點に就て、十九世紀に發達した個人權の詳細なる分析と均しく社會利益の詳細なる分析に進み、そしてそれを意識的に各具體的問題に就て調節するに向ふのが法律學

の向ふべき正しき進路であると、他の場所に於て主張する。そして畢竟彼はあらゆる欲求——個人的又は社會的——をなるべく多く認め得るが如き、より包容的秩序の創造が法の目的であると見るのである。古代の法律思想に現れた法の目的も、十六世紀以來發達した個人權利の詳細なる規定も此の立場からして新たに考へ直さねばならないのであるとする。そしてそれは彼の「社會利益論」への伏線であり、又その出發點を爲して居る。

以上の如く古代理想と近代理想とを對立せしめ、社會的現狀維持を法律の目的とする思想と、個人の權利を主張する法律思想とを對比する時に、我々は我國に於ける明治以前の法律思想は、そして又東洋の法律思想は大體に於て所謂靜止社會の法律思想であり、パウンドの所謂社會的現狀維持を目的とする法律思想である事を見る。そして又、明治以來我國に輸入せられた西洋の法律思想なるものは、大體に於て十九世紀に結晶した個人主義の法律思想であつた。それに依て我國の法律と法律學とが導かれて來た。そして現在に於ては、此の法律思想に對する反動が見らるゝのである。斯る狀態にある我々としては、パウンドの右の歴史的論述は頗る考へさせらるゝ處が多い。又われ〳〵が如何なる方向に向ふべきかに就ては、西洋に於る法律學と均しき問題がわれ〳〵に課せられて居るのである事を知るのである。

(註一) Pound, The End of Law as developed in Legal Rules and Doctrines, in Harvard Law Review, vol. 27 P. 195
The End of Law as Developed in Juristic Thought, in Harvard Law Review vol. 30 p. 201.

四　法律道德交渉の理論

法律と道德との區別及び關係の問題は法律哲學に於る中心問題の一つである。此の問題を如何に考へるかに依て法律思想家の法律觀が最もよく看取せらるゝのである。又此の問題は實際上の法律問題を如何に取扱ふかに就て多大の差異

を生ぜしむる傾向がある。即ち法律と道德とを峻別せんとする人は法律解釋適用に當つて、時代の道德に著しく背反する結果を顧慮せざる弊に陷り、他面に於て此の區別を輕視する人は、其法律の解釋適用が法律の力の及ばざる道德的問題をも法律に依て解決せんとする弊に陷る。從て兩者の關係を正しく認識することは、法律哲學の根本問題として重要なるのみならず、又實際的法律家の活動の場合に於ても重要である。パウンド氏も此の問題に就て、「法律と道德」(註一)と題する一書を著して、獨特の立場から此の問題に就て考察を施して居る。氏は最近寄せられた私への私信の中に、第二版が近く公刊されると云つて來たが、まだ之を手にしないのであるが故に、第一版に表れたところによつて其所說の大要を述べると大體下の如くである。

問題の考察は歷史的考察、分析的考察、哲學的考察の三部からなる。第一部はギリシヤ思想家より十九世紀末に至る迄の法律思想及び法規に表れたこの問題に關する歷史的反省であり、第二部は分析派法律家の此の問題に對する理論の解說と批判であり、第三部は哲學派の此の問題に對する理論の解說と批判である。

氏は第一部に於て歷史的考察を試みて下の如く說く。法律と道德との關係、法學と倫理學との交渉に關する總ての議論は、紀元前五世紀のギリシヤ思想家に遡らねばならない。そして此等思想家の問題は、正義は自然に依て正義であるか、又は單に合意、制定に依て正義であるかと云ふ點にあつた。ギリシヤの都市國家では、法は既に正常有力な社會統制の形式として一般社會統制から分化した。そして其基礎如何が哲學者の注意を喚起した。

彼等は一面、自然現象が場所の差異に依て均一性を失はないに反し、法律慣習がギリシヤと他國の間のみならず、ギリシヤ都市相互間で千差萬別であり、又同一都市でも時代を異にするに從て異ることを認め、此の事實は法規の拘束力に就て懷疑を起させ、畢竟特定時代支配者——少數者又は民衆——の獨斷的權力に依るの外觀を呈せしめ、一般的安定

を害すると云ふことを認めた。即ち、法律は神の賜物なり、或は、賢人の議なり、又は、人民の合意なり、と云ふが如き說明では、(正義は合意、制定に依て正義たり。)貴族と民衆との爭、專制的支配者に對するデモスの解放運動に對する滿足な解決を與へることが出來ぬことを看取して、自然界の恒常性普遍性のアナロジーに依て社會秩序の安定の基礎づけをしたのであつた。(正義は自然に依て正義たり。)

正義は自然に依て正義であるか、合意に依て正義であるかに關する右のギリシヤの學說はローマ法學に影響を及し、慣習又は制定に依る法律と自然に依る法律との區別を生み出した。そしてギリシヤ哲學と接觸するに至つた頃のローマ法は、法學者の學說に依て發達せしめられた時代であり、法學者の意見は何等政治的權力に依て支持せられず、只其合理性に依て支持せられねばならぬ狀況にあつたゝめ、法律の基礎は自然にあると云ふ考が起り、法律と道德との合一を高調する爾後の自然法的思想の淵源をなした。

中世紀ではアリストートルとジヤスティニヤンが權威として受容れられ、自然法論で革新的機能を離れ、單にそれ自身として受容れられた。蓋し當時は一面、數世紀の混亂の後を受けて安定的理論を必要とし、他面、各地方の異つた法律を統一する必要があつたので、前者は權威の考を高調し、後者はローマ法の解釋と云ふ方法で之に應じたのである。自然法は只アリストートルやジヤスティニヤンの權威の下に宣明されてあるから收容せられたのである、只之に神學的の基礎が附加せられ、法律は直接には理性から、間接には神より發するものとして權威の支持に用ひられた。

宗教改革即ち權威に對する反抗があつた時代に、プロテスタントの法學的神學者は、中世自然法の神學的部分を除去して之を理性のみの上に置かんとした。グロティウスは、國法は永劫の理性と、理性を意欲する神の意志の二つに置いてゐるが、その眞の基礎は明白に理性であつた。

カントは十八世紀の終り、此の合理的自然法に換ふるに形而上的な不變の成定法原理なるものを置いて、之を成定法の基礎とした。彼の成定立法原理は、單に批判的前提であるに過ぎぬものであつて、畢竟現行法制の支持に使用せられた。十九世紀の分析學派が更に此の形而上的基礎を排除し、法律を自給自足的のものとなすに至つたので、カントの論は法學の獨立性を高調する前驅をなすものである。

十八世紀の終頃に、自然法的思想は二つに分れた。一は、成定法は自然法の宣明なりとし、且つ自然法を現行法律秩序を支持する爲に使用した哲學的法學となり、他は、成定法を以て宣明的なものたりとしたが、それは理想的道德規範の宣明ではなく、文明社會の生活經驗に發展した慣習の宣明であるとした歴史法學となつた。そして分析派も哲學派も皆十九世紀の安定を要する社會に生れたのであると云ふ色彩を有する。十七、八世紀に於て、創造、變更を目標とする自然法とは學說の内容が異つて居るのである。

次に氏は、氏の法律發展史觀に基く各發達階級に於る法律と道德との關係に就て論じ、原始法時代に於ては、法律と道德とは渾然たる一體をなして社會統制の手段として用ひられて居つたのであるが、嚴正法時代に於ては、法律と道德とは嚴格に分離せられ、衡平法、自然法時代に於ては、道德と法律は合一せられ、合一的傾向を帶び、道德的觀念は着々として法律の中に侵入し、法律成熟時代にあつては、道德の侵入に依て豐富にせられたる法律は、再び法律と道德との分離を高調するに至つたことを詳說し、現代は之に對する反動として、再び法律と道德とを合致せしめんとする傾向に至つて居ると結んで居る。

第二部に於て氏は、十九世紀に於て隆盛を極めた分析派の法律及び道德の交渉に關する思想を解說して居る。分析派は哲學及び倫理學と法律學とを分離し、法律學を以て全然自給自足のものと考へ、所謂純法律的事實の分析で一般的法

律學を建設せんとしたのである。分析法學は法律と道德とを峻別し、法律家は法律のみを取扱ふべきであるとした。勿論實際に於て、法律と道德とが接觸を爲し相交叉することは之を認めたのであるが、分析學派は三權分立思想と法律の完全性とを前提とした故に、法律と道德との接觸は未だ法律が充分に發達せざるより來るのであるとしたのである。法律と道德とが接觸する場合は、司法的立法、法規の解釋、法の適用及司法的自由裁量の四點に存した。司法的立法は明かに三權分立思想に違反するのであつて、三權分立思想の下に於ては裁判官は既定の法律に依て裁判するのであつて、立法はその職責でない。實際に於て裁判官が道德を考慮して立法を爲すことは、一面、司法權と立法權との分界が發達しないのと、他面、法律の完全性が實現せられて居らないから來るのである。そして斯る範圍は法律の發達と共に漸次縮少してゆくものであるとした。法律と道德との第二の接觸點である法律の解釋に就ては、實際に着眼すれば法律の解釋は既定の法律を見出すのみならず、又新しい事件に對して法律を制定する過程を包含して居るのであるが、分析派の考へ方に依れば法律は完全なものであつて、總ての事件は既定の法規に依て規律せられて居るのであるが故に、法律家は之を見出すに過ぎぬものとする。法律の適用に就て分析派は、法規の適用は機械的に之を爲すべきものであるとした。第四に法律と道德とが接觸するのは、裁判官の自由裁量に任された事項、例へば課刑、執行猶豫、小額事件の裁判、子の監護、受託者、後見人、破産管財人選任の如き場合であるが、分析派は此等の場合を以て「無制者の法律」であるとし、之が範圍を出來る丈極限せんとした。以上四つの接觸點に於て分析派は極力その接觸を少くし、その接觸は法律の發達せざるより來るものであるとした。その學說にも相當の社會的意義はあるが、彼等の考へ方だけで不充分であることは今日の狀況に於ては特に顯著となつた。

又分析派は法律と道德との區別の基準は、兩者の內容と其適用方法とに在るとした。即ち、道德は思想及び感情を取

扱ふに反し、法律は行爲を取扱ふのであるとした。道德が個人の人格の完成を目的とするに反し、法律は個人相互、又は個人と國家との關係を規律することを目的とするのであるとした。此の考へ方には法律は萬能でなく、法律のみに依て理想的社會秩序を齎すことは不能であるといふこと、立法者は法律の實際的の制限を顧慮しなければならない、といふことを教へる意味に於て眞理を包含するのであるが、分析學派は法律と道德との此の分界基準を極端に考へて、法律が是非とも考慮せねばならぬ道德をも無視せんとする弊に陷つた。分析學派は又、道德的原則は個人的相對的に適用せらるゝに反し、法規は一般的絶對的に適用せらるゝものであるとした。即ち道德的原則は、その適用を受くべき事情に依て定るものであるに反し、法律は一般的に作用せねばならないのであり、一定の行動に對する適法不適法は疑の餘地を存せざるものであり、もし疑が存する場合には、それは特定の時及び場所に於る法律に缺陷があるのであるとした。併し法律に於ても又個別的適用の必要とすべき場合の數多くあることは明かであつて、分析派の此の理論は極端に之を適用することは到底不能である。

之を要するに自然法の法律家のやうに法律と道德とを同一視するのも、分析派のやうに道德と法律とを全然分離せんとするのも共に誤りである。道德に依て法律問題を解決することの出來ないのは四つの點に存する。第一に、一般的安定を確保し、爭鬪の世界を脱して法律秩序を齎す爲には、道德的にはどちらでも好いことを法律が確立しなければならない。第二に、法律は其希望しない多くの行爲を禁止することが出來ない。第三に、法律は兩當事者の行爲に非難の打ち處がない場合でも損害の歸屬を定めなければならない。第四に、法律裁判と云ふものに伴ふ或限度の固定制がある。此等の點から着眼して、分析學派の言分にも相當の理由がある。然し分析學派は此等の諸點を高調し過ぎたのであつて、法律的解決は不當に道德的解決と隔離するに至つた。

氏は、分析學派の法律と道德に關する學說を以上の如く分析批判した後、分析學派の主張するところのみでは、今日に於て主張せらるゝ新しきそして强い人間の欲求を滿足せしむるが如き法制を創造することは出來ない。法律家は單に既成法律の分析の裡に、新法律制度の創造を爲すことを得ないとして居る。

第三部に於て氏は、哲學派の法律と道德とに關する學說を解說批判して居る。十七、八世紀に於ては法律學は倫理學の一部と見做され、法規は道德規範の實現なりとせられ、道德的規範でなければ有效な法規でないとせられ、道德的規範が即ち法律的規範であるとせられた。此の考が即ち自然法學の特徴をなすものであつて、當時の時勢が法律の變改を必要としたと云ふ事情と、宗教改革以前に於て法學の一部と見做されたと云ふ傳統的事情に照して之を觀察する時には、此の學說の發生は當然の道行きであることが明かになる。然るに此の時代と場所とに於て理想化された倫理的習慣を實現することにより、その效力を生ずると云ふ誇張な主張に滿足せずして、更に極端な主張をなしたのである。殊に當時の政治的の論爭は此の說を極端な個人主義に導き、個人と社會とを對立せしめて、政治的法律的の義務を結局個人の良心に置いた爲め、殊に十九世紀の後半に於ては自然法說は反社會的な色彩を帶びるやうになつた。例へば政治的な所有權の問題に就ても、社會制度の安定と個人の生活との比較考量上、非社會的になつた社會制度を覆すことが正當であると云ふ極めて誇張な見方からでなく、更に極端な議論に陷つた。又法律的方面に於ても、哲學派の法律家は、自己の倫理的見解を以て法規の有效なりや否やを定める基礎なりとするに至つた。ベンタムは、此等の人は畢竟「余は選ばれたる者である。神は選ばれたる人に何が正しきかを告げる。故に正しきを知らんとする人は余の許に來らさるべからず。」と云ふ態度であると冷笑したが、ベンタムの言は決して不當でないといふ事例に乏しくない。勿論一面、法律の實際に當つて自然法は改革の理想として使用されることもあつたので、例へば、フランスのポティエールが自然法に依て

ローマ法を近代化したるが如き、又イギリスのマンスフィルド卿が之に依てイギリス商法を確立するに至つたか如き之である。然し又他方に於ては、法規の歴史を無視して法典編纂に熱中し、此の運動に對する反感を爾後百年間も經續せしむるに至つたのである。かくして十九世紀の哲學者及び哲學的法律家は法律と道德とを分離せんとしたのである。

カントは、人は內部的及び外部的の我より成るものとし、人の行動は二重の形相を有し、その一は意志の外部的發現であり、他は動機による意志の法定であるとした。一方に於て人は同類及び外界物との關係に立つが、他方に於て自己自身として存在する。法律は第一形相に於る行爲を取扱つて居るのであり、道德は第二形相に於る行爲を取扱つて居る。法律の問題は、各人が他人の自由を調和するが如き方法に於て自由を行使するが如き規律である。法律は外部的行爲に關し、外部的强制の可能性の範圍內に於て存するとした。カントの此の說は、畢竟法律と道德とを分離せんとするものである。次いでヘーゲル、アーレンス等も亦兩者の對立を高調した。

然るに十九世紀の終り頃から、個人本位の思想より社會本位の思想に推移するに伴つて、法律を道德に服從せしめると云ふ傾向を見る。かくしてイエリネツクは、一八七八年に法律を道德に服從せしめて此の推移の魁を爲した。即ち、法律は最小限度の道德であるといふ彼の有名な學說が之である。社會功利派のイエリングも、法律の目的は利益を確保するにありとし、衝突する利益をなるべく多く保護する爲の選擇、衡量、評價は倫理學に原則を求めなければならないとする。そして此の考へ方の結果は、法學は應用倫理學の一部であるといふことに歸着する。又新カント派のシユタムラーは、法律に依て正義を達せんとする爲には時代の理想を形成し、此の理想に依て現實の法律を指導せねばならぬものとする。然し此等の社會理想は法律以外に置かるゝのであり、畢竟道德的理想である。從て法律學は倫理學の下にあると云ふ結果になる。新ヘーゲル派のコーラーは、政治、法律、道德は文化理想の達成の要因であるとし、法學は社會

の之に向つて努力する理想的目的を評價しなければならないとする。彼の考は法律も道徳も共に普遍的文明史及び法律、經濟哲學に從ふものであるとするので、外形上は法律を道徳に服從せしむることはしないのであるが、近代の倫理學者は倫理學を頗る廣汎に取扱つて彼の所謂文化理想をも考察するのであるからして、畢竟此の意味の倫理學に對して法律學は從たる地位を占めるのである。氏は、哲學派の所論は、畢竟するに或る一定の時代及び場所に於ける現實法律現象と密接なる關係を有し、その理論は各發達階段に於ける法律秩序の問題及び此等の諸問題の合理的說明に過ぎないとして居る。

　氏は結んで云ふ。以上歴史派、分析派、哲學派の說く所を大觀して、此の問題は未解決で廿四世紀間の論戰の後、結局ギリシヤに於て提出された同じ論戰が繰返されて居るに過ぎないといふことを發見する。分析派の法律家は、立法により法律は法律たるものであるとし、歴史派の法律家は、法律は合意に依て法律であるとし、哲學派は、法律は自然に依て法律であるといふギリシヤ式形式を用ひて、此の三學派の特質を云ひ表しても大過なきものであるといふことが出來るのである。かくして此の問題に對する廿四世紀間の論爭が何等の効果を齎さなかつたとしたならば、從來の方法は誤つて居つたのであると結論しなければならないのでなからうか。元來法律と道徳との關係と云ふが如き單純なる問題を提出し、之に單純なる一個の回答を與へることに依て、社會統制の手段としての法律を理解せんとするのが誤りではなからうか。そして之は畢竟學問的スケマチズムにその罪を歸すべきだとする。氏は英米法制をその淵源に着眼して一、ローマ法、二、寺院法、三、封建法、四、ゲルマン慣習法、五、中世スコラ派の煩瑣論法、六、人民の慣行、七、倫理的慣行、八、技術的法律科學、九、理想的社會秩序に關する哲學者の著述、十、抽象的な倫理的思索、十一、科學的經濟觀念、十二、科學的政治思想、十三、科學的學問的技術及傳統的職業的技術、十四、所謂「輿論」を形成する倫

理哲學、經濟學說、政治思想等があることを指摘し、法律を形成する材料はかく複雜してゐるのであるから、之を法律と道德の關係と云ふが如き單純なる問題として考ふべきものではないのであるとして居る。

道德と法律との關係を完全に取扱ふには、單に法律學の立場よりするを以て足れりとせず、又倫理學的の立場から此の問題を取扱はねばならぬ。從て右の所論は此の點から着眼すれば問題の一面のみを取扱つた嫌ひがある。然しながらそれは又、氏の問題取扱の目的から來た當然の制約である。そして之を法律家の立場よりのみ觀察したところに創造的の貢獻が見られるのである。そして其所論の間には氏の機能主義、インストルメンタリズム、プリュラリズムの傾向が著しく躍動する、そして「斯くして此の問題に對する廿四世紀間の論爭が何等の効果を齎さなかつたとしたならば、從來の方法は誤つて居つたのであると結論しなければならないのでなからうか。元來法律と道德の關係と云ふが如き單純なる問題を提出し、之に單純なる一箇の回答を與へることに依て、社會統制の手段としての法律を理解せんとするのは誤りではなからうか」と、此の問題に對するフラーゲシュテルンクそれ自身に懷疑を投げかけた大膽なる態度は頗る注目に價する。然し又それは法律の現象を熟知する法律家として當然起る疑問である。

之を要するに氏の法律道德交涉論は、實際家としての法律家の立場から見て、その問題となる部分を鋭く指摘した點に特色がある。そして此の點からそれは新しき貢獻として研究批判せられねばならぬ。（未完）

（註一）Pound, Law and Morals, 1924

追記——本稿は某所に於て試みた三回講演の際の手記に基いて書いたものである

俸給生活者の階級的展開と反動運動

小島精一

序　言

コールは大戰後の其著書「産業に於ける混亂と秩序」を結ぶのに次のやうな一節を物して居る。

「私の此結論的一章の目的は今日此國（英）に進行して居る階級的鬪爭の或る要素に注意を喚起し、普通之を純然たる無産者と資本家との鬪爭と解するために生ずる暗影を取りのけんとするものである。此の二つの主役者の一方が筋肉勞働者で、他方が商工業の金融家であることは私も承認する。が、其中間に多くの群團があつて喧嘩の成行が彼等の向背で左右される處の大なるを無視したならば大變だ。若し資本家的金融家が頭腦勞働者又は其の大部分の默從を受けるならば、既に筋肉勞働者の背戻の増加によつて始まりつゝある資本家的××を迅速に結末迄運んでしまふだらう。又若し筋肉勞働者が頭腦勞働者の大部分の贊同を克ち得るならば、彼等にとつて、資本主義を××するのみでなく、殆ど摩擦なしに、遙に良い又遙に生産的な社會的及び産業的組織を置き代へる事は容易だらう。直に置きかへる事なしに、破壞すると言ふことも時には必要かも知れぬ、が、若し出來るなら、破壞する傍らから置き代へる方が遙によい」

私が此の小論文で取扱ふ題材はコールがかく重要視した俸給生活者の最近の階級的發展の實狀に就てゞある。そして、此論文の内容を一括すれば、まづ、ざつと次の通りであらう。

「俸給生活者の階級的發展は大戰後に大に進んだ。そしてそれは漸次勞働者運動に接近して行く。勞働者の側でも亦之と提携せんとする意向が充分動いて居る。けれど俸給生活者の意識は大體まだ資本家制度の檻内に逡巡して居る。從て、反て、現前の反動勢力の擡頭と迎合して居る。」

（第一）　俸給生活者の團結的發展

一

前世紀の後半から著しく其大量生產的色彩を濃厚にして發展して來た現代產業秩序には一方に其企業組織の集中が行はれると同時に他方には經營內部の分化が行はれた。言ふ迄もなく此二つの現象は相互に關連するものであり、又、前者が資本の集中、少數大資本家の支配に照應するものだとすれば、後者は社會的生產の實際的指揮者としての所謂產業技師群の擡頭を物語るものである。此事は例へばトウニイやヴエブレン等が詳しく說いてゐる。

吾々は此の二つの現象に關連して又所謂インダストリイとビジネスとの分離や反撥やを考へるし、前者が大體產業技師群の司る處であり、後者が資本家乃至大企業家の支配する處であるのを知ることが出來る。

資本家が產業技師に命令すると言ふことは、取りも直さずビジネス（即ち個人的利潤を目的とする財務的活動）がインダストリ（即ち社會的生產能率を目的とする活動）を左右してゐることである。

かくて、產業技師の社會的職能は本來極めて重要なものであるにも拘らず、現今の產業秩序に於ては決して其完全な機能を發揮する位置と機會とを與へられて居ない。けだし產業技師は其の精神的立場から見て資本家の個人的利殖慾と社會的生產能率の向上との、必ずしも一致しない二つの責任に板ばさみになつて居るからである。

しかし、資本家が彼等に其位置の安定を保障してやり、又とも角も、相應な報酬を支拂つて居る限りは、彼等は其自らの行き詰るべき階級的立場に就いて眞摯な考慮も拂はず、漫然と資本家の道具となつて其秩序を支持し、其莫大な利潤の僅かなる割前に均霑して滿足して來たのである。然し、世界大戰後の成り行きが、も早や彼等の冬眠を許さなくなつたやうである。俸給生活者の團結運動は此覺醒から出發するのである。

二

世界大戰を經過して、資本家階級はとも角も莫大な變態的利潤を獲得し得たが、技師及び經營者階級の大部分は之に參加することは許されなかつた。のみならず、物價の異常な騰貴によつて彼等の多數は寧ろ著しく窮迫に陷つてしまつた。例へば、炭坑支配人階級の中過半數は戰前年收四百磅以下であつたのが、大戰直後の一九一九年には物價は倍以上になつて居るにも拘ら

す、其過半數の收入は五百磅以下に止まつて居る。然も此五ケ年間に炭坑主の懐に入つた總利潤額許りでも實に一億六千萬磅の巨額に上つて居るのである。此の物價騰貴の英國で年五百磅以下の生活は決して樂なものではない。

（註）炭坑局からサンキイ委員會に提出された炭坑支配人の年俸は次の通りである。因に此數字は全國炭坑の五七%に當る統計である。

ボーナス家屋及石炭等の給與をも含む年俸	支配人の數 一九一三年	一九一九年
一〇〇磅以下のもの	四	二
一〇一――二〇〇磅のもの	一三四	三
二〇一――三〇〇	二八〇	二九
三〇一――四〇〇	一六一	二五一
四〇一――五〇〇	三二一	二一三
五〇一――六〇〇	五七	一四六
六〇一以上のもの	五〇	一五二

然るに一方勞働者階級は其團結的實力を强大にし、其勢力を賴んで戰前の實收賃銀率を維持するのみならず、進んで之を增加し、時間の短縮其他の雇傭條件を改善しようとする許りでなく、正に產業組織の根本に肉薄して、之を自分の手に乘取らうとさへして居る。今彼等の眼前にはとも角も光明に滿ちた希望がある。それに引きかへ、技師等の前途はどうかと言へば全く暗澹たる闇である。彼等は上述した如く其社會的責任に於て板ばさみになつて居るのみでなく、其階級的勢力に於ても勞資双方から押しつぶされさうになつて、次第に其相對的重要さを失墜しつゝあるのである。

かうした行き詰つた事情は遂に此階級の者にも或る切拔け策を講ぜしめる迄に差し迫つて來た。所謂「第三黨」とか「中產階級同盟」とか言ふ團結的劃策が、その自覺の所產である。其つまる處は團結力によつて此の勞資鬪爭場裡に或る獨自の立場を擁護しようとする試みであるが、果してそれは成功したか、又成功する見込みがあり得るか否か。

三

思ふに、現今の社會的鬪爭の積極的立場は資本家制度を支持するか、社會主義制度を主張するか、其何れかに黑白相分立して居るのであつて、此間に其何れにも偏せざる第三黨なるものが介在し得ない。とすると、若し此第三黨運動なるものが獨特の意義を持ち得るのは、たゞ團結の力によつて一時的に、過渡的に、其利益を擁護せんとする手段としてに外ならないであらう。此意味ではなきに勝るは言ふ迄もないが、下手をやると許

本家からも勞働者からも、どちらからも向背不常の裏切り者として取扱はれる虞れがある。かう腹と背に、勞資兩軍の堅陣を控へて此双方から敵視されては、到底其目的を達する望みはないのであるから、此現前の鬪爭的手段として考へる場合にも、つまりは勞資兩軍の何れかと堅く提携せねばならないことになるであらう。此運動の實際的效果は又さうして始めて現はれるやうだ。

話を端的にするために、上來、私は技師及び支配人の階級を例示的に擧げて來たが、此問題は決して彼等丈けの問題ではない。廣い意味で俸給生活者（サラリイマン）と呼ばれる程の者には一樣に同じことが言はれると思ふ。又醫師とか教員とか辯護士とか乃至は音樂團員とか役者とか言ふやうな所謂自由職業者の階級も其大部分は勞資爭鬪の中間に板ばさみになつて居る連中である。獨立自營の小商人や小工場主でさへも其社會的勢力は、さう容易に減滅する者ではなくよし絶對的には支持出來やうとも、相當的には他の階級の膨脹につれて年毎に失墜し行くを免れない。だから或意味では是等の者も社會的進展の舞台では大體俸給生活者と同じ役目を振り當てられて居ると考へることが出來やう。

四

俸給生活者と言つても其位置や收入には上下に著しい相違があるから、一概に論じることは出來ない。例へば支配人とか部長とか言ふ連中は資本家的生活を營み、其立場も大體資本家の立場と共鳴する。之に反して職工長とか下級技師、下級職員等の階級は勞働者の立場と大差がない。此兩者の間には色々の中間的段階がある。それで自衞團體を作ると言つても此中間階級を全部網羅するやうな組織は到底出來るものではないが、以下私の主として注目し度いのは其下層的部分の中に於て大戰此の方、一般勞働組合式の團結が著しく發達して來たことである。例へば炭坑坑夫長組合とか鐵道從業員組合とか官公吏組合とか教員組合とか機關工長組合とか、機關造船製圖工組合とかの發達が其一斑を示すものである。

此種の俸給生活者的勞働組合、又は夫れに類似の團結の發達に就てはコールが比較的簡明な説明をして居る。私の據り處とするのは其一昨年（一九二四年）の著書だが、それには其性質上純粹たる勞働組合と認むべき團體を次の四種に別けて居る。

第一は官公吏及び公共團體の俸給生活者である。勿論之には小學校や中等學校の教員も郵便局の職員も含んで居る。彼等の中には罷業手段をとるものもあれば、之れをとらぬものもある

が、ともかくも大體交渉團體として相手方に認められて居る。又此種の諸團體を統合しやうとする公職者同盟（Civil Service Confederation）もあれば、資本家側との協議團體たる公職者ホイットレイ會議（Civil Service Whitley Council）の制度もある。

第二は本來の工業勞働者の中職工長とか監督とか言ふ比較的高級の者の團體である。中にも、機械工業では機關及造船製圖工組合は始め單なる技術者組合の形式で設立され乍ら、其の後ち次第に左傾して今日では純粹の勞働組合となり、勞働組合會議にも加入し、雇主にも認められて居る。此工業には其他にも全國職工長組合がある。之は雇主側の猛烈な反對と妨害とに抵抗して全國的に連結して居る組合である。

炭坑業には舊くから坑夫長組合があり、近頃では又炭坑下級管理者（Colliery Under-managers）組合が發展して來た。是等の中にも勞働組合會議に加入するものが少くないし、或者は直接に坑夫組合と合體さへして居る。交通運搬業では鐵道書記組合が驛長、助役、其他の下級事務員を團結するに成功して居り、又本來勞働者の團體なる例の全國鐵道員組合（N・U・R・）や運搬及一般勞働者組合（T・G・W・U・）等にも監督級の職員を包擁する部課が出來て居る。殊に後者の書記及職員部は可なり有力なものである。紡績會社にも紡績書記ギルド等があるが此の勢力は微弱ださうである。

建築業では大體普通勞働者の組合に加入して居るが織物業では特別な監督達の組合がある。

其他一々枚擧するのも煩はしいが電氣、化學工業等にも多少の組合がある。

さて、第三種に屬するのは商業及び金融業の團體である。此範圍では早く大戰前から全國書記同盟と言ふ綜括的の組合が發達し組合會議にも加入して居たが（一九二一年勞働組合會議に參加せる會員數四萬三千人）近頃其經營の方針を誤つて財政的破綻を產み、會員の脫退するもの多く寧ろ不振に沈湎して居る。（一九二四年には會員八千人に下る）。最近に南ウエルスを中心として書記及職員同盟を組織する試みもあつたが、之も成功しなかつたらしい。それで、今日では職業別の組合が發展して來た。例へば銀行員ギルツとか保險會社員ギルツとか言ふのがそれであるが、是等は未だ幾分自ら高く持して勞働組合會議には參加して居ない。最後に所謂自由職業と稱される一團がある。之は音樂家同盟とか役者組合とか言ふもので、既に組合會議とも關係して居れば、同盟罷業をも敢行して居る。

處で一體に、部門的から包括的になつて行くのは大戰後に於

ける產業團體の發展傾向である。此のサラリイ・メンの團體も其勢ひには洩れないので、一九二〇年には右の各種頭腦勞働者を打つて一團とする新組織が成立した。全國自由職業、技師、職員及監督同盟（National Federation of Professional, Technical, Administrative & Supervisory Workers）と言ふ、長い名で呼ばれるのがそれであつて、其會員數は約三十萬人。其目的は一つには各種團體を促進することと、二つには一般勞働者組合との關係を明確にすることとである。

五

大體かうした狀況で、從來勞働運動の圏外に自ら高く持して居た俸給生活者階級の中にもかゝる明確な團結力が出來、それが組合運動と堅く提携して前進して來たことは、實に注目に價でする發展であると思ふ。

とは言へ、全體として見れば（然も、無論、極く下層部分丈けを指して居るのではあるが）此種の團結力は極く一部分に限られて居り、又、假令表面は勞働組合式の團結をする者の中にも其の戰闘意識は極く淡然として居る連中が多いのである。例をとつて話せば、坑夫長組合にしても或者は坑夫組合と親密な聯合を結んで居るが、他方には互に反目し、敵視して居るものも少くない。又機械職工長組合でも、一方には雇主側の手足となつて其庇護の下に活動して居るものが多い。

だから、今日では俸給生活者の大部分はまだ〱、團結を作つて居ず、其極く下層分子の、近頃發達して來た團體の中でも純乎たる勞働運動の仲間入りをして居るものは割合に少くないと言はねばなるまい。ダウトが英國では極く、狹隘な、又すぐ征服され易い政治的利害を持つペチ・ブルジョアと今以て雇主にこびりついて、眞の勞働者運動に加はり得ないプロレタリアが人口中層の大部分を占めて居て、其割合は他國より遙に大きいと歎じたのは無稽な誇張ではない。

つまり、大戰後の勞働運動はもはや單純な生活標準の向上丈けを目標とせず、直に資本家組織の轉覆を目指して居るのであるが頭腦勞働者の運動は概して言ふとまだ〱其處迄は發展して居らないのである。けだし、實際生活上の壓迫が筋肉勞働者程痛烈ではないから、階級的自覺が現在の制度を、否定し切る程進んで居ないのだ。それは恰も四五十年前に筋肉勞働者の組合が居たやうな境地である。そのために彼等は勞働運動には接近し乍らも其の主張を受け入れて、之と提携して行くことが出來ず、例へば今度の炭坑罷業の如き大衝突が起ると、勞働側に參加しない許りでなく、反て、稍もすれば資本家の傀儡となつ

調査委員會の機關として働くことになるのである。比較的下層の分子ですら尙ほかうだとすれば、中間及上層の分子が強く資本家に左袒するのは一層當然なことである。況んや彼等の胸底にはまだ〳〵階級的優越感がこびりついて居るのだもの。

六

では、勞働者側では頭腦勞働者をどう見て居るか、從來は無論之を敵視し、之と與することを肯んじなかつた。最近でも、此の不徹底な溫情主義的運動が反て本來の勞働者の戰鬪心を麻痺させることを虞れて此新人者を排斥せんとする心理は仲々に強い。たゞ、穩健な指導者の間には漸く此頭腦勞働者との接觸及び提携を非常に重要視する傾向が現はれて來たやうだ。例へば大戰後勞働黨が其綱領を改めて、其の右翼に從來の自由主義者を抱擁するに努めた如き、又一九二一年の改造で組合會議が頭腦勞働者支部を新設した如きは其顯著な一例である。

では、なぜかうした妥協政策が現はれて來たかと言ふに、私は勞働者が產業の積極的管理を眞面目に考究するやうになつて來た結果であると思ふ。けだし、現在の制度を攻擊するに主力を注いで居た大戰前の運動と違つて、今日では新秩序を如何に樹立し之を如何に支持するかと言ふ問題が當面の懸案となつて來たのであるが、さうなると夫れは從來の勞働組合丈けの力では到底滿足に解決することは出來ず、是非共中間階級との提携を必要とするからである。勿論、勞働者は中間階級の助力なしにも現在の制度を打破する機會を掴み得るかも知れない。が、それでは、ロシアの革命のやうな過渡的混亂と生產力の減退とを招來する虞れがある。なるべくならば此の不祥事を避けて、過渡的轉換期の犧牲を少からしめ、生產力の減退を防ぐに若くはない。夫れには此中間的知識階級と提携するのが有利であると考へるのである。(が、勿論一部左翼の連中は此提携を以て運動の軟化、又は資本主義への屈從と考へて、猛烈な攻擊をして居る。其事は別に叙べる。)

七

之を炭坑問題に就て言はふ。坑夫組合及び勞働黨の主張する所謂國有案は決して單純な炭坑の國有だけを目的とするものではなくして、同時に坑夫及び經營者による炭坑の管理をも意味するのである。即ち、坑口會議にも地方會議にも全國會議にも經營者は參加するし、炭坑經營の實際的指導權は、やはり其手に托されて居る。そこには現在の不在所有者こそ排斥されて居る

が、經營者の職能は充分其價値を認識され、大に尊重されて居る。此提案の說明者等（例へばホッヂェス、トウニイ、コール、等々）の語る處によれば、經營者の階級は新秩序によつて始めて其位置の安定と報酬の增加と其技能の自由なる發揮とを保障されるものである。

彼等の主張する產業上の民主制が果して現在の少數資本家の專斷制度より經營者の立場を解放し、向上させ得るか否かは姑く惜くとして、とも角も勞働運動の有力な指導者が一樣に經營者との提携を要求し、之に友人として話し掛け、其社會的職能を尊重し、其位置を保障するに努めて居ることは觀過出來ない。

然し之に對して炭坑經營者の代表者がサミユエル委員會で明言した主意は、要するに炭坑夫の經營參與を拒否するものであつたと記憶する。此事も一應注意する値打はあらう。

八

以上、私は此論文の一半を說き終へた。それは括つてみれば、勞資鬪爭の中間に板ばさみになつた俸給生活者の階級があること、彼等の間にも大戰後に次第に階級擁護の團體が出來てきたこと、その或者は純乎たる勞働組合の仲間ではあるが、大體に於ては尙ほ所謂中產階級の意識をぬけきらず、現前の階級的鬪爭に於ては寧ろ資本家側の身方となつて居ることとの三項に盡きるであらう。

これから、私の說かうとするのは、是等の所謂市民（シチズンス）階級が最近の勞働爭議に於て、果して、實際どんな役目を働いたらうかと言ふ問題である。之によつて私は、彼等の現實の立場を少しは具體的に描き出せるかと思ふのである。それには、所謂「罷業破り」の組織を注意して見るのがいゝ。けだし、これは資本家と中間階級との合體から成つて居り、勞資爭鬪の際に於ける有力なる一陣營をなすからである。

（第二）「罷業破り」の發展と市民階級

一

罷業を鎭壓するために政府が軍隊を使用することは當面の問題とはしない。私がこれから敍べるのは主として中間階級の有志からなる義勇的機關に就てゞある。

此種の組織の發達もやはり大戰直後、一九一九年の春頃を出發點とするやうだ。けだし、此時は大戰五ケ年間に鬱積され、壓抑され乍らも甚だしく成長して居た勞働者の要求が始めて解放され、中にも鐵道及炭坑業の空氣は甚だ險惡であつた時であるし、軍隊も亦復員令の遲延に氣をくさらせて居た時であつた

から、當時直接雇主の地位に居た政府は始め其の審査たる騒動に困惑して策のなす處を知らず、兎も角も先づ事件の解決を遷り延べて勞働者の氣組みを挫くと同時に第二爭議の勃發した場合勞働勢と對抗する丈けの陣容を整へることを取り急いだのである。

鐵道罷業が濟んで間もない一九年十月七日にロイド・ジョーヂがマンション・ハウスで試みた一場の演舌が此間の消息を傳へて居る。

彼の語る處によれば、此年の二月政府は鐵道罷業の避け難きを自覺し、直に內務卿の管下に其對抗軍として、「純乎たる市民的組織」を建設する手筈を整へた。其ため愈々罷業が始まると政府は自ら交通機關を運轉したが、それは一部は政府の直接援助により、一部は市民隊で管理したのであつた。この市民隊となつたのは主として自働車協會や仲間階級同盟——Middle Class's Union 即ち同年三月に政府の勸告で組織されたもの——や其他色々に類似的な諸團體であつた。一方、例の英國産業聯盟が其職員に嚴命して地方官憲や是等の諸交通團體と周密な聯絡的行動をとらせたことは私が既に述べた處である。政府は更に交通事務を拒んだ者には失業手當金を支給せさる旨の訓令を發し、又十月四日には地方官廳に令して秩序を維持するために市民自衞團を組織するやうに求めた。

此罷業の經驗を土臺として政府は其後直接にも、間接にも罷業破りの機關を着々と發展させて來た。或は海軍に廻令を出したり、或は此目的で登錄した車輛には四十磅の奬勵金を與へたり、或は陸軍補充豫備隊(交通支部隊)を組織したり、或は政府の修繕工廠に軍隊員の組織を編成するに努めたりした。同時に陸海軍在鄕員及び休職官吏等の首領連に交渉して、右の政府の計畫を援助するために市民隊を充分發達させることに努めた。

大體かゝる次第であつて、今回內務卿サア・ウイリアム・ジョインソン・ヒックスが有名なO・M・S・(物品供給支持隊)に公然奬勵を與へた如きも決して一時の偶然な政策ではなく、大戰後歷代政府の着々と繼承し、發展させて來た政策なのである。

私は先づ此種の機關の中最も重要なO・M・S・に就て比較的詳說し、次に之と類似の二、三、の主なる團體に就て語らう。

凡そ此種の機關の職能は表面的には(イ)直接に罷業其者を批難し、鎭壓せんとする團體と(ロ)直接には勞資鬪爭の渦中に沒入せざることを標榜し、只だ罷業のために毀損される一般公衆の生活を擁護せんとする團體とがあるが、勿論此兩種の團體は實際上はさう明白に區別は出來ないし、又、何れにせよ、勞資

者側から見れば所謂「罷業破り」たる意義に於て異る處はない。だから、私は此區別を無視して姑く兩者を併せ說くつもりである。

二

O・M・S・は Organisation for the Maintenance of Supplies の略稱で供給維持團とでも譯すべきものである。此團體は恐らく一九二五年夏に行詰つた炭坑爭議の成り行きが產むだものと思はれる。當時勞働者側の頑强なる抵抗的決意を觀取し、其戰鬪手段としての產業同盟（三角同盟の擴張されて復活せんとしたもの）出現の報に脅かされた政府及資本家側が採つた政策は、先づ解決を繰り延べて、其間に有力なる罷業破りの機關を完備することであつた。それでO・M・S・の組織が發表されたのは實に其の八月下旬である。

此團體の目的は「食糧、飲用水、燃料其の他社會の平常生活に欠くべからざる公共事業を支持するために進んで援助せんとする各方面の有志を組織して活動する」にあつて、其宣言する處では（九月二十五日の諸新聞）本來、非政治的、非政黨的のものであり、從て又決して勞働爭議の渦中に投じて其何れの側にも左袒せんとするものではない。が「最近數ケ月の出來事を見ると、解決至難なる產業的爭議を惡用して、一般罷業を促進せんとする傾向があり、又生活必需品の供給を停頓させ、動力、交通、及び保健上の事業を休止して國民生活を麻痺させる運動が組織されて居ることは明である。」此團體はかゝる「特殊の目的のために、爭議に關係なき公衆に甚だしき困厄を加へんとする企圖に對しては、此一般社會の利益を擁護するために全力を擧げて、官憲當局者の奉仕に提供せんとするものである。」

O・M・S・は直接には政府の管理する仕事ではないが、其總裁には、前印度總督ハーヂング卿を戴き、其理事には知名の陸海軍人、前官吏等を擁して居る。

其總支配權は中央會議に屬するが、全國各地方に二十數個の地方委員會がある。

會員は次の五種の部課に分屬する。

（イ）公共事業の擁護、必要の場合には特別憲兵となる

（ロ）鐵道、地下鐵道、軌道、食糧運搬

（ハ）馬車、自働車其他貨車運轉

（ニ）電話、郵便事業も休止する場合にメッセンヂャースとなる

（ホ）書記的事務

財政は初めは「少數の愛國的市民」の寄附金でやつてゐた

が、後には廣く一般の好意的寄附を募集した。其報告によると、各新聞紙上の宣傳は非常に好結果を收めて、財政上の援助も勞務の提供も極めて豐富であり、全國に亘り「各階級の有志」の贊同を得たさうである。

内務卿ジョインソン・ヒックスは十月一日のタイムスで政府と此團體との親密な關係を次のやうに語つて居る。

「自分は數週前から此團體の創立の事を知つて居る。否、其發起人は其設立前に豫め其計畫を自分に相談したのだ。……自分は彼にかう告げた。政府は決して此種の計畫に反對しない。若し、非常時に際會する時は政府は其責任に屬する行動をとるが、其場合、O・M・S・なり、其他市民有志の類似的團體から、各地方に亘つて此政府の計畫を支持し、遂行するに必要な部類別けの出來た人員を提供されることは恐らく極めて大切な援助となるであらう。」

之によるとO・M・S・は要するに政府の非常時計畫を實現し、成功せしめるに必要な人員を登錄し置き其仕事上の準備と訓練とを豫め行ふ團體と見ても大した差し支へはないやうである。此事はハーヂング自身の發表した覺書にも繰り返へし明瞭に記されて居る。そして其人員と言ふは「愛國的市民」の有志である。

愈々事態の差し迫つた、同年十一月二十日に政府は保健大臣の手から全國の地方自治體に公文書を發して、此非常時に地方官憲が中央官廳と提携して實行すべき、手段の概要を通達したが、此政府自體の計畫とO・M・S・の活動とは決して重複するものではなく、前者は後者に對して活動の組織を與へ、かくて兩者相依つて始めて充分な活躍が出來る譯なのである。

三

私は叙述の序に此政府の非常時計畫に就て語らう。據る處は一九二五年十一月二十一日のタイムス紙である。

右に叙べた保健大臣の通達にもO・M・S・の夫れと同じやうに近來の勞働爭議が單に其當事者間の折衝丈けに止まらず、一般公衆の生活殊に通信、食糧品其他必需品の運搬、光熱及動力の供給、保健等々に痛切な障害を及ぼす傾向のあるを指摘し、かゝる非常の場合には地方官憲は大體次に叙べるやうな計畫に從て中央政府其他各方面の有志と協力して、社會の福祉に緊要な事業の維持に當らねばならないと命じて居る。

玆に所謂非常時とは一九二〇年に發布された非常權力法に準據して國民生活の必需品を確保するための諸法令を發布する必要のあるやうな場合を指すのである。そして此政府の組織は

して平時の機關の代替物となるのではなくて只だ其の補充組織たるに過ぎぬものである。

さて、非常時補給組織の大要は次の通りである。

(イ)非常時にはイングランド及ウエルスを十區に別ち、(外にスコツトランドは五區に別つ)國務大臣が各區の長官として働き、其下に運搬、食糧、郵便、及石炭等の事務を分擔する夫々專門官吏を置く。是等は必要ある場合は地方官吏と聯絡をとり、彼等に必要な報道と訓令とを與へ、裁斷をする。

(ロ)各區毎に地方食糧官、道路官、運輸委員會、非常石炭官、其他必要と認める事務官を設ける。更に此計畫を援助せんとする有志を募集する有志勤務委員會を設け、其委員長は政府が任命する。是等の事務は地方官吏の協力を俟つ處が少くないが、大體を言ふと食糧事務と船舶、鐵道、沿海交通、港灣事務等には特別の場合の外は地方官吏は干與しないことになつて居る。

(ハ)法律及秩序の維持と人身及財產の擁護のために警官及び特別憲兵を統御するのは警察當局者の任務であるが、地方官吏は亦之を助けて一般有志者から其特別憲兵を募集することもある。

大體から言ふのが計畫の輪廓である。成る程此計畫によつて政府は自分自ら必要な人員を募集する手段を整頓しては居るやうなものの、それは「非常時の發生して後ちに始めて活動を開始するに過ぎないから、若し、O・M・S・の如き平時からの團體がないならば、其目的は決して滿足に遂行することは出來ない筈である。之によつても O・M・S・が政府の計畫に如何に大切なるかは明白である。

口

其目的の骨子は O・M・S・と類似して居るが、其會員中に多くの技術者を招致して、一旦事ある際、重要產業の管理に必要な人員を提供せんとする團體が一九二五年の夏に組織された。國民擁護團(National Guard)がそれである。二五年十月に諸新聞紙に發表せられた宣言には此團體は「總ての忠誠なる國民を編入し、「官憲を助けて「法律、秩序を强行し、緊要なる公共事務を維持し」若し是等の產業を麻痺させる企てがある時は斷乎として之に反對し、必要あらば實力に訴へるも辭せないと言ふ主旨が記されてあつた。其創立者の一人たるフイツジヨン大佐の說明によると夫れは主として鐵道及發動力事業の管理的技能を有つ者を供給するさうだが、炭坑罷業の場合にはポンプ作業者をも供給するし、若し、軍隊が出動するやうな場合には甲種資格者を提供して一般官廳を援助するさうでもある。

五

一九二四年の八月に陸軍補充豫備隊が組織され、時の勞働內閣の陸軍大臣が之に勅許を與へた。其創立當時の解釋によると之に編入された者でも非常時に徵集を强要される法律上の義務があるのではないと言ふのであつたが、其の點は色々疑惑の的となつて居た。處が二五年の一月に鐵道會社は政府と結托して、其從業員に此豫備隊の交通支部に參加するやう宣傳を始め、其ためには特別休日其他の特典を與へて誘惑するに努めた。又、政府は鐵道會社の總支配人に此支部隊の指揮官其他を任命する權限を與へた。此宣傳はドツク其他にも廣く行はれた。鐵道從業員組合其他關係組合では政府が之を罷業破りの道具に使ふ意志なるを確めて、勞働組合會議の協贊を經て其組合員の之に參加するを戒め、一方政府に其撤回を要求した。それで此問題は一時表面から姿を消したが、實際は暗默裡に政府側の運動は着々と進捗して居ると言はれて居る。

六

O・M・S・の總裁ハーヂングが發表した或る覺書（一九二五年十二月一日タイムスによる）の中には、同團體は勞資爭鬪の何れの側にも加擔せず、たゞ國民生活の維護を目的とする由を叙べたものがある。それによると罷業反對の積極的宣傳には他に特殊の優秀な團體があると言つて英帝國同盟（British Empire Union）と全國市民同盟（National Citizens' Union）とを擧げ、最後にO・M・S・は是等の團體と作業上の協定を保つて居り、防止的作業は安んじて之に一任して居る旨を公言して居る。乏しき材料によつて私の判斷する處では、前述した國民擁護團も陸軍豫備隊交通支部も大體O・M・S・の系統に屬するものだと思ふが、これから述べる此二團體の主眼とする職能は自ら趣を異にするやうだ。

英帝國同盟B・E・U・は大戰中に創立されたのであるが、勞働爭議に干渉し始めたのは一九年の後半期からで、殊に翌二〇年一月には「產業平和部」を設けて、「革命及び共產主義等の危險」に反對する宣傳を始めたのである。此團體の特徵は其會員の中に有力な實業家が多いことで、資金も潤澤である。

全國市民同盟（N・C・U・）は、もと中產階級同盟と呼んだものであり、一九年以來の主なる罷業には政府を助けて「緊要な事業の維持」に盡した經驗を持つて居る。例へば一九年の鐵道罷業には數千名の有志を提供したと言ふやうな具合である。

七

英國にも伊太利に做つて自らフアスシストと稱する團體が數個出來た。此運動が始めて出現したのは一九二三年頃からであるが、其代表的なものは英國フアスシスト黨（British Fascisti Ltd 有限責任會社の形式をとつて居る）である。二四年の秋に此中から急進粗暴の一派が分離して國民フアスシスト黨を組織したが、其狂暴な行動のために其實勢力は到底系統ある秩序的團體としての大をなすことは出來ないらしい。之に反して其母體たる英國フアスシスト黨は此猪突的暴行を排斥し、かゝる行動は階級的憎惡心を挑發するものとして處罰するとさへ戒めて居る。從て其組織も强固であるし、影響も大きい。此團體の最初の宣言には「皇室と帝國とを擁護するために實際的な、若し必要ある時は軍事的な活動をする」のが目的であるとあつたが、其後之を修正した宣言には其黨員を男女二部に編成し、平時は何れも宣傳、募集及び、反革命運動に從事するが、革命又は總罷業の場合には男子は實戰に、女子は兵站勤務等の補助勞務に服すると記されて居る。又玆にも必要あらば暴力をいとはぬ旨が記されて居るが、同時に此團體は共產主義とは戰ふが罷業破りを目的とするものではなく、たゞ非常時に國民生活に必要な產業の維持に努めるのだとも記されて居る。總裁にはブラツケネイ中將を戴き、其他幹部にも軍人が多く、組織も軍隊的に編成されて居るのが其特色である。

最近に此團體と地方憲兵隊との融合に關連して注意を惹き、物議を釀した事件が起つた。それは、リヴアプール及びウオルヴアハムプトンの兩地方でフアスシスト支部隊員を一團として其憲兵隊に編入する企てが暴露したのであつて、輿論の批難のために一時此計畫は表面的には中止されたが、とも角兩者の親密な關係を充分推測せしむるに足る材料とはなつた。

八

其他にもまだ此種の團體はいくらもあらうし、それは今後とも愈々發展して行くであらう。それが直接に政府の設けたものであると否とに係らず、又それが單に國民生活の保障を標榜するに止まると進んで罷業反對を宣傳するとに拘らず、とも角も勞働軍の陣營に打擊を與へる効果に於ては全く同一であり、其目的の眞意に於てさへ明白な區別は出來兼ねるし、又此兩者の間に周到な連絡と組織とが存在して居ることも疑ふ餘地がない。而して、極く簡略乍ら、右の敍述によつて、私はかゝる反動的運動の團體が主として所謂愛國的なる市民を以て組織され

て居ることを知り得た。私は、又單に理論としても今度の如き大規模な勞働爭議の何れにも干與せざる市民階級の立場なるものが果してあり得るか否かを疑ふのであるが、然し、それは姑く措くとして、（けだし、そんな抽象論はどつちでもいゝ）現前の事實ではとも角も俸給生活者は資本家を助け、現在の制度を擁護する大切な道具となつたのである。

私の語る處は、たゞ、それ丈けを確認させるに役立てばよいのである。

擱筆に臨んで、私はパルム・ダットの英國ファスシズム論から次の一節を引用して置かう。

「……英國に於けるファスシズムの基礎、之は先づ考慮すべき問題である。そして、英國の社會上の構成と勢力とを一瞥すれば、あらゆる基礎の充分具つて居ることが頷かれるであらう。

第一には極く狹隘で、又容易に支配される政治的利害を持つ處の、ペチ・ブルジョアと今以て、雇主にしつかりとこびりついて居て眞の勞働階級運動に團結し得ざる、プロレタリヤが人口中層の大部分をなして居る。此割合は他國よりも大きい。一九二一年度の人口調査に依れば、生產的產業に從ふ者九百萬、勤勞（サァヴィス）に從ふ者八百萬を算へ、是等の勤勞の過半は商業、金融及び個人勤務によつて占められて居る。勞働者の三分の二は團結組織を缺いて居るが、彼等は總ゆる產業に於て洩れなく均さられて居るのではなく、主として大生產的產業以外の勞働者である。過去三十年間大都市で容易に焚きつけられた帝國主義的主戰論の宣傳やデイリイ・メイル式（それはファスシズムの名の出來る二十年も前から、實は其運動の魁をなして來たのだが）新聞紙や雜誌類の恐しい程の流布等は皆此運動の可能性の大なるを語るものである。英國は決して大陸のファスシズム病から免疫されて居るのではなくて、反て其の本場たる、すべての基礎を有つて居るのである。」

社會科學と文壇の自己隔離

——正宗白鳥氏の森戸辰男氏評を讀んで——

大山郁夫

一

『中央公論』十月號の正宗白鳥氏擔當の『文藝時評』欄に載せられた『森戸氏の譬喩』といふ一篇の評論は、私たちのやうに社會批評に多少の關係を持つてゐるものの立場から見ても、相當に注意されなければならないものだと考へられた。といふのは、無論私たちが、そこに示されてゐる正宗氏の論旨に依つて、幾分かでも啓發されたとか、されなかつたとかのためではなく、更らにまた、私たちが、その論旨に贊成とか反對とかの態度を決めなければならないことを迫まられたやうに感じたためでもない。もとより、正宗氏があの評論を書かれた時には、それによつて讀者を啓發しようと企てもゐられなかつたであらうし、また讀者の贊否を問はうといふやうな意圖をも全然持つてゐられなかつたであらう。そして私たちもまた、そんなことは少しも問題にはしてゐない。が、それと同時に、私たちには、その問題にならないことの裏側に、實は大に問題になる一要點がかくされて居ることが氣附かれるのである。

それは要約的にいへば、つまりかういふことになる。——すなはち、私たちが正宗氏の論旨に向つて一口で贊否を言ひ切ることが出來ないといふ一點の上に、それが私たちに對して持つ重要性が存してゐるのだ。

と、かう言つてしまへば、如何にも逆說的に響くやうだが、實のところ、全く私にさう思へるのだから、仕方がないのである。しかし、それだけでは何のことだか判らないと言はれる虞れがあるならば、私はそれの說明の皮切りとして、まづかう附け足さう。——それは即ち、正宗氏が批難の對象とした森戸氏の論點と、その正宗氏の批難とを讀み比べてみると、どちらも尤も至極のことを言つてゐるのだといふことが、直ちに私たち

に感づかれるからである。

但し、さういふのは、一般的見地から言つてゐるのではない。一般的見地から見て、各々反對の意見を述べてゐる兩氏が、双方とも當然のことを言つてゐるのだ、といふやうなことが、假り初めにも、あり得よう筈はない。從つて私は、さういふことを言はうとしたのではない。私は寧しろ、森戸氏は森戸氏の見地から、そして正宗氏は正宗氏の見地から、それぞれ當然のことを言つてゐるのだ、といふ意味を述べようとしたのである。

問題の森戸氏の論文と、それに對する正宗氏の駁論とを讀み比べると、兩氏が全然別個の見地に立つて居るといふことは、社會科學的知識を幾らかでも持ち合はせてゐるものにならば、極めて容易に認識し得られることである。だが私は、その容易に認識し得られる點をも、本文の進行中には、追々に比較的詳細に論證してみる積りである。しかし、同時に私は、一度に一語以上は言はれないといふ簡單な理由の下に、そこへ行き着くまでのところでは、その前提となるべき別のことを言つてゐなければならないから、その間は、兩氏が全然別個の見地に立つてゐるといふことは、私の手前勝手の臆說としてでもいいから、まづ暫時試驗的に、その言葉通りに聞いて貰ひたいのである。

森戸氏と正宗氏とが全然別個の見地に立つてゐるといへば、それはこれらの兩氏が、各々別々のものを見てゐるとか、若しくは少くとも、同じものをでも各々違つた方面から見てゐるとか、といつたやうな意味を含んでゐるものとすべきものであることは、無論のことである。そして實際私が意味してゐることは、究極に於て、兩氏が各々根本的に違つたものを見てゐるのだ、といふ一點に歸着するのであるが、しかし私がそれを決定的に論證するまでは、それもまた私の假設的提言だとされても、私に於て別に毛頭異議を申し立てる根據はない。

だが、よし私の假設的提言としてでも、兎に角私がその事を言つてゐるとが認められるとすると、私は結局、正宗氏は氏自身が見て居るものと、森戸氏が見てゐるものとが根本的に違つてゐるにも拘らず、正宗氏は氏自身が見てゐるものを楯に取つて、森戸氏が森戸氏自身に見てゐるものに即して言つてゐることが、正宗氏自身に見てゐるものと違ふと言つて論難してゐるのだ、と言はうとしてゐるものだと解されるかも知れない。換言すれば、私は結局、正宗氏は議論にもならないことを議論の的としてゐるものだ、と言はうとしてゐるのだと解されるかも知れない。だが、さう解されたところで、私はふたたび文句が

言へないのである。といふのは、實はそれもまた、私の言はうとしてゐるところに外ならないからである。

といふと、私が如何にも正宗に失禮なことを言つてゐることにも當る。殊に、正宗氏が相當の自信を以てあの評論をかゝれたものとの忖度を許すに足るほどの外面的證據があるやうに私に考へられてゐる際に當つて、私自身がさういふことを口走るのは、倘ほ更ら厚かましいことのやうに見られることを、私は心から虞れる。が、それもまた仕方がないことである。

二

ところで、正宗氏が如何に自信に充ちてあの評論をかかれたかを語るその外面的證據は、一體どこにあるといふのか？　とかう問ひつめられると、私は、それは問題の正宗氏の評論の上に見られるのだ、と答へなければならぬ。正宗氏は、その評論の初めの方で、『察するところ森戸氏は、現代の社會批評家中最も頭惱の秀れ文才にも富んだ人であらうか』と前提し、それからその森戸氏が、『改造』の八月號で發表した『鬪爭手段としての現代教育』といふ論文の『主旨を演壇で述べた時には、さぞかし滿場の聽衆の喝采を博したことであらう』と、私たちの耳には非常に揶揄的に響く言葉で（かういふのは或ひは私たちの僻がみから來たものと邪推されるかも知れないが）前置を受け、更らにそれに次いで、『私も誘はれて、論者に對して遙かに拍手を送らうと思つたが、その時ふと、私の心に一つの疑念が起つて、折角この名說から受けた感銘を稀薄にされるやうになつた』（傍點は筆者が施したもの）といつて、一小段落結論をつけ、直ちに一轉して、森戸氏への論難へと移つて行つてゐられる。

正宗氏が『論者に對して遙かに拍手を送らうと思つたが』と言つてゐられるのは、氏が本氣で發せられた言葉であるかどうかを、私は知らない。しかし私が氏の平生の文章から氏について得てゐる感じからいへば、私にはどうもさうとは受け取れない。それで若し他の誰れかの場合ならば、それは言葉の綾といふものだ、と位で濟ませるかも知れないが、しかし正宗氏ほどの人が、そんな詰まらない眞似をしようなどとは、私が考へ得る最後のことである。私は寧ろ、正宗氏がさう言はれたのは、あとで森戸氏の『名言』に拍手しかけた手を引ッ込めたことを言つて居るところの皮肉味を利かせようとする意圖から出たものだ、と推測するのを至當と見る。そしてその皮肉味の裏側には、正宗氏の得意さまでが、私には可なりはッきりと見えるやうに感じられる。殊に正宗氏が、前に森戸氏を社會批評家中の

驍將の一人――尤もその點は私には割引なしに首肯できるが――と見立てゝゐられることが、それの伏線となつてゐるものだと考へるとき、正宗氏の得意滿面の姿が、一層はツきりと浮き出て來るのである。『社會批評家の驍將も、乃公の手にかかつては、鎧袖一觸にも當らない！』と、かういふのが、正宗氏があの評論を書き終つたときの氣持ではなかつたか？

私たちは一方ではさう考へながらも、他方ではまた、正宗氏のやうな老巧の人が、さうした稚氣を起さう筈がないと言つて、一應その推測を否定しようとする氣にもなる。だがさうとすると、正宗氏が何故に、さうでない場合には何の効果もなかりさうな安價な皮肉を飛ばされたかが、一層解らなくなる。で、結局私たちは、正宗氏が社會批評家中の驍將の一人を仕留めたと思惟して得々としてゐるやうなドンキホーテ振りを發揮してゐられる姿を私たちの想像のうちに描いて、そこに却てより深刻なる自然の皮肉を見てゐることを感じるより外に途がなくなるのである。

だが、社會批評家中の驍將の一人は、果して正宗氏の一擊の下に、手もなく仕留められ果ふせたであらうか？　そこにも私たちの問題が一つ存してゐるが、しかし、それの論究は、本文の構成の順序上、自然跡まはしにされることになる。

三

我國の社會評論壇と文壇とが、一般に精神生活といふ同じ名の下に包括されてゐながら、實は双方の間に横はつてゐる踰え難き溝渠によつて、際立つて對立的に隔てられてゐるといふことは、殆んどすべての觀察者たちによつて、殆んど無條件的に認識されてゐることのやうに見える。少くとも我々が、幾分か專斷的になるかは知れないが、一方に於ては、文壇といふ言葉を、比較的少數の所謂プロ文士たちを除いた文藝家たちの總稱として概念づけ、他方に於てはまた、社會評論壇といふ言葉を、そこで最も顯著な地位を占めてゐる社會主義的評論家たちの總稱として概念づけるときには、さういふことが、必ずしも大した見當ちがひだとは言へないやうに私には考へられるのである。

私は屢々、營業本位の所謂『評論雜誌』中の最も著名な二三に關聯して、それらの論文欄と文藝欄とが、殆んど全然相互間に何等の脈絡を持たないばかりでなく、最も多くの主要點について、相互的に反撥し合つてさへ居る、といつたやうなことが言はれてゐるのを聞いた。否、單にさう聞いただけでなく、私が實際それらの『評論雜誌』を手にして檢べて見ても、矢張り同じ點が特に注意されて來た。少くとも私は、概觀的にはさう

言へると信じてゐる。そしてこの際、それに關して、概觀的以上のことを詳言することは、必ずしも私の當面の目的に向つて緊切の關係のあることではない。

兎に角、社會評論壇と文壇とが、大體に於て、それぞれに別別の途を歩んでゐるといふことは、我々から見て拒めない事實である。殊に我々が、社會批評家的見地から相當に重大だと考へられる種類の如何なる事件が起つても、さうしたことが文壇に何等の感知し得られるほどの影響を及ぼさないのを常とすることを考へる毎に、いつでもそのことが我々の念頭を掠めて行くのである。たとへば、曾て無產政黨の問題が始めて起つたときでも、文壇はそれに對して、どこを風が吹くかといふ風に構へてゐた。また現在無產階級運動の上に容易ならぬ一大分裂が生じて居る際にも、文壇はそれを顧みようともしてゐない。軍事教育問題が學界及び世間を騒がしたときでも、矢張りさうであつた。更らに驚くべきこと――少くとも表面的に觀察して――は、當然思想界の共通問題として取扱はれなければならない社會科學壓迫問題、及びそれと關聯する學生檢擧事件のやうなものが起つても、文壇は泰然自若として、殆んど英雄的にも見られるほどの寛濶な態度を氣取つてゐるやうである。たゞ最近に於けるそれの一例外として見られることは、例の木崎村の無產小學校問題に關聯して、文壇の小さき一角に多少の動搖が生じたことである。がしかし、それは主として、私が文壇の概念から假りに排除してゐる所謂プロ文士たち――彼等は屢々、曾て青野氏が正宗氏からされたやうに、文壇の『正統派』の人々から、文壇からの撤退を勸告されて居ることもあるやうに、私たちのやうな門外漢の眼に映ずることもあるが、しかしそれは私たちの見誤まりかも知れない――の側から起されたのであつて、文壇の『正統派』に屬する人々がそれに影響された範圍及び程度は極めて少かつたやうであつた。それに、彼等がそれに影響されたのは、社會的に見て、別に特殊の事情に基いてゐたことも考へられるが、しかし私は玆でそれに觸れてゐる暇を持たない。

文壇の人々の立場からもまた、恐らく同樣のことが言ひ得られるであらう。たとへば、彼等が心境小說とか新感覺派とかを言つたやうなことを盛に問題にしてゐたとき――若し彼等が實際さうしてゐたとするならば――でも、社會評論壇は、そんなことには一切無神經もしくは無感覺でゐたといふことは、たしかに事實である。けれども、そんなことは、文壇の人々から言はれる―― 若し彼等がそれを言ふことを必要と感じたならば――ことの部類に屬するものであつて、我々のやうな社會評

論壇の住民の側から別に彼れ是れと言ひ立つる必要のないことである。我々に取つて大切なことは、たゞ文壇と社會評論壇とが、如何に完全に背中合はせになつてゐるかといふことであり、更らにまた、それは文壇の――少くとも所謂プル文士たちの側に屬する――人々と、社會評論壇の――少くとも社會主義的評論家たちの側に屬する――人々とが、概括的にいふと、根本的に違がつた見地に立つて居るといふところから來てゐるものだ、といふことである。

このことは、少くとも社會評論壇の側からは、當然疾うから指摘されていい筈のことであつた。といふのは、まづ第一には、あらゆる形式を通して表現されてゐる文壇人たちのイデロギーは、それ自身に社會科學的檢討の對象となり得るものであると同時に、それはまた、思想界に於ける一方の勢力として、相當の影響を直接に讀書人圈内に向つて及ぼしてゐるものでもあるからである。また第二には、彼等の間から屢々、彼等の特殊の見地から出た社會評論が、彼等の持ち前の達筆を通して、讀書人圏内へ送り込まれゐることがあるからである。私は常に、そのことの適例を、武者小路氏などが、『改造』の誌上などで發表する、我々から見て、とても愛嬌に充ちたもののやうに思はれる社會觀などの上に見て來た。

私自身は屢々一度この問題を取扱つてみようと考へて居たが、他のより緊要な諸問題に追はれて、今日までその機會を得なかつた。が、正宗氏の森戸氏評を讀むと、私は即坐に、私の豫々からのこの企圖を、この際ひとつ實現してみようといふ氣になつた。私が本文に於て、一見私の本來の仕事に縁遠いやうな文壇の批判に僅かでも觸れるやうな方向に乘り出さうとしてゐるのは全然そこから來てゐるのである。

四

正宗氏は、森戸氏が問題の論文の主旨を演壇で述べたとき、滿場の聽衆が一齊に喝采したであらうことを想像して、氏もまたその論文を讀み終つて、論者に對して密かに拍手を送らうと考へたが、ふと或る一點に疑念が浮んだので、それをやめにした、といふ意味に解されることを述べてゐられる。

若し私の誤解だつたら許して下さい。だが、私がそこを讀んだとき、私は直ちに、演壇と、滿場の聽衆と、その喝采とに、そだして幾分緩和された程度に於て壇上の人にも、更らに一層緩和された程度に於て一般の聽衆について拍手を送らうとした正宗氏自身にも、ふと一つの疑念を起したまゝに反省した正宗氏自身が、ひそかに或る皮肉な冷笑を投げかけてゐる姿を

像した。

だが、そんなことは、假りにどうでもいゝにしても、若し正宗氏が、満場の聽衆も氏と同じやうに或る一點に疑念を起したならば、氏と同じやうに拍手を思ひとまつたであらう、と考へてゐられるならば、——事實上、氏はさう考へてゐられるやうに察しられるが、——それは明かに間違ひである。あの場合、森戸氏は、當局の社會科學への高壓手段に對する抑へがたき憤激感から、——冷靜であるべき社會現象の科學的研究に從事する人が、如何なる問題に對しても、憤激しないであらうことを期待することの間違ひであることは、後にも論及しようとすることだが、——極力當局の暴狀を聽衆にアッピールしようとしてゐたのであつて、聽衆もまた、その積りでそれに聽き入つてゐたのである。で、その際に於ける聽衆の關心の焦點は、全然對當局糺彈の上にあつたのだ。だから聽衆は、正宗氏が書齋で(多分)森戸氏の論文を讀んでゐられた際に起したやうな疑念を起す餘裕を持つてゐなかつたであらうし、よしまたそれを起したにしたところで、そんなことを問題にして拍手を躊躇する氣持にはなれなかつたであらう。

演説會場の聽衆や街頭の群衆が常に理知的に低級な人間の團塊であつて、單獨に反省する個人が常に理知的に優秀な人間的人間だ、といふやうことは、群衆心理學者たちのお箱である。彼等は決まり切つて、理知の尺度を以て群衆を價値づけようとする。彼等は常に、歴史の廻轉期に於ける群衆の行動の意義を無視若しくは輕視しようとする。彼等はつまり、群衆を價値づける尺度として、別に行動といふものがあるといふことを忘れようとするのである。

演説會場の聽衆や街頭の群衆やは、如何にも多くの場合、そこで理知的反省に耽るやうなことをしないことは事實である。けれども一般の群衆學者たちは、群衆が、演説會や街頭に馳せ集まるまでは自由に理知的に反省する餘裕を持つた單獨の個人としての狀態に在つた個々の人間から成り立つ團塊であるといふことを忘れてゐるのである。演説會場の聽衆や街頭の群衆やの生成は、突き留めて見ると、社會的に必然的過程の產物であつて、決して偶發的現象ではないのである。

街頭の群衆は、時としては直接に『世界を變革』する行動の場面に立つ。が、彼等は一層屢々『世界を變革』する行動への過程の上に動く。若しくは、或る群衆は『世界を變革』しようとする行動を阻止する反行動の場面の上に立つ。若しくは彼等は一層屢々『世界を變革』しようとする行動を阻止する反行動への過程の上に動く。そして、かうした群衆と群衆との接觸の

瞬間は、行動と反行動との入り亂れて渦卷く場面である。それは原則的に、理知の働く場面ではない。

演説會場の聽衆は、さうした場面から比較的に遠距離におかれてはゐるが、しかしその方向は常にそこを指してゐるのである。即ち彼等は一個の有機的な團塊として『世界を變革』しようとする行動への、若しくはそれに對する反行動への過程の上に動いてゐるのである。彼等のその動きがその前途に於て常住的なものとなるか、間歇的なものとなるか、それとも或る點で全然停止してしまふか、は個々の場合の情況に依據することも多いが、しかし彼等が少くともその瞬間には、本質上內的必然性を以てその方向へと動いてゐるものだといふことだけは、爭へない事實である。

五

書齋とか研究室とかで、思索とか研究とかに沈潜してゐるものが、演説會場の聽衆や街頭の群衆やへ牽き附けられることを感じるか否かは、彼等の思索や研究やの深淺から來るものでなくて、彼等の『世界を變革』する行動、もしくはそれに對する反行動への意欲の有無もしくは强弱から來るものである。

思索や研究やは『世界を變革』しようとする行動、もしくはそれに對する反行動への意欲を阻止することもあれば、また逆にそれを釀成することもある。それ故に、社會現象を冷靜な態度で科學的に研究する學者が、その研究の結果のために熱烈なる行動人となるやうなことは、決して怪むに足りないのである。のみならず、我々は、さうした、學者が屢々、行動の深みの中で活きた研究を獲得することがあるといふことをも、忘れてはならないのである。

それに反して、『世界を變革』するよりは、寧ろ『世界を樣々に解釋』する傾向の勝つた人々は、その研究や思索の深淺に拘はらず、行動の場面へ突入することを避けて、どこまでも單純な思索人もしくは研究人として終始しようとするのである。無論彼等といへども、行動の場面の上の動きには全然無關心であり得ないところから、多少の程度の興味を以て遠方からそこへ眼を向けることはあるが、しかしそれは何時でも、取り澄ました傍觀的態度の限界を踏みこえないのである。

それだけならまだしもだが、彼等は彼等の無關心らしく見える、傍觀的位置を以て、現實社會の葛藤から隔離された超越的地位だと考へ、彼等自身は、そこから何物にも囚はれない心境を通して物を見てゐる單獨的個人だと思ひ込み、現實的に行動する人々の現實性を嘲笑しがちになるのである。だからこそ、

彼等の多くには屢々、演説會々場に於ける壇上の人の熱辯が滑稽に聞えたり、滿場の聽衆の喝采が衆愚の雷同に見えたりするのである。

だが、彼等がそれを意識すると否とに拘はらず、さうした超越的立場とは、現實社會生活に即しない抽象的立場だといふ意味になり、そしてそこから何ものにも囚はれない心境を通して物を見てゐる單獨的個人とは、現世的關心から隔離された抽象的個人だといふ意味になるのである。學者は屢々學問がさうした立場だと誤認し、藝術家は屢々藝術がそれだと感違へし、そして兩者とも屢々、彼等が學問なり藝術なりの『三昧』に入つて居る間は、一切の現世的關心から隔離された抽象的個人――まさか彼等が意識的に『抽象』的個人だといつたやうには考へることはあるまいが、しかし結果に於ては、彼等が意識的にさう考へるか否かは問題にならない――だとのやうに妄想するのである。

ここで私は、この場合最も適切にあてはまマルクスの言葉を思ひ出す。『フォイエルバッハに關する覺え書き』の第七項で、彼はかう言つてゐる。――

『フォイエルバッハはそれ故に、「宗教的情操」がそれ自身一の社會的產物であることを、並に彼が分析する抽象的個人が一の特定の社會形態に屬してゐることを、見てゐない。』

私は、この引用文の中の『宗教的情操』といふ言葉を、『藝術的心境』とでも言つたやうなそれに置き換へただけで、それをそのまま私の當面の目的のために用ふることが出來るのである。

六

ブルジョア文藝の支持者たちは屢々、階級的思想感情乃至行動に對立させて、人間性から滲じみ出すそれらといつたやうなものを考へ出す。彼等の所謂『人間性』は、階級生活に――從つて階級對立の社會に於ける現實生活に――關係のないものである。それ故に、彼等のこの論據からいふと、人間の階級的思想感情乃至行動は人間性に立脚したものでない、といふことになるのである。從つて彼等の見地から見れば、人間としてのブルジョアの階級的思想感情乃至行動も、同じく人間としてのプロレタリアーの階級的思想感情乃至行動も、共に人間性に交渉のないものだといふことになるのである。だから結局、彼等の人間性といふものは、彼等がさうだと思惟してゐる通りの彼等自身と同じやうな型の抽象的個人としての人間の屬性だといふ結論にならない譯に行かなくなるのである。また、それと同じ論據から彼等は、少くとも彼等の藝術生活に於ては、彼等が一

切の現世的利害から——從つて一切の階級的立場から——離脱してゐるものだとの妄想に導かれて行くのである。だから彼等は彼等の近邊に於て、無産階級意識に即する藝術に携はつてゐるものなどを發見しようものなら、直ちにそのものに向つて、藝術からの撤退を要求するやうなことをすることもあるのである。彼等から見れば、神聖なる藝術の殿堂に無産階級意識などが忍び込むのは、許すべからざる冒瀆である。

けれども彼等は、彼等が一切の現世的利害から——從つて一切の階級的立場から——離脱して專念に神聖なる藝術の殿堂に於て奉仕してゐると考へてゐるその瞬間に、實は見えざる全能的支配の手を彼等の上に加へてゐる現世的利害と階級的立場とに縛りつけられてゐながら、然もそれを意識しないでゐるのである。彼等のイデオロギーは、彼等がそれを意識してゐると否とに拘はらず、究極に於ては、糧をそこから仰いでゐるのである。だから彼等は『世界をさまざまに解釋』することにこそ努力するが、『世界を變革』することを恐れるのである。尤も彼等は、世界の全面的變革の一つ手前の分野では、彼等自身の立場から、あの部分この部分の改造を要求することを知つてゐる。けれども、世界の全面的變革！——それは彼等から見れば飛んでもないことである。少くとも彼等は、意識的か無意識かに、それから逃避しようとする。若しくは彼等は、彼等がこれから逃避しようとしてゐることを自ら意識することの代はりに、そんなことを考へるのは詰らないことだと言つて、悧巧さうな顏をしようとする。のみならず、彼等は、積極的にそれの方向へ赴くものを嘲けるか、憫むか、冷眼視するかする。その彼等の立場は？　それはその最も進歩した形式に於てすら、小市民階級的立場を出でないものである。

私は何時だつたか『西遊記』を讀んだことがあるが、たしかその中のどこかに、孫悟空が觔斗雲だつたかに乘つて、金箍棒だつたかを手挾んで、縱橫無碍の大活躍を演じたと考へて大得意になつてゐたが、しかしいづくんぞ知らん、彼は實はその瞬間に、お釋迦さまだつたかの掌の裡に取り込められてゐたのだつた！　といふやうなことが書かれてあつたことを、うろ覺えに覺えてゐる。我々はこの興味ある一挿話を以て、彼等藝術家たちの所謂藝術的心境なるものの位置の象徴だと見ることが出來るのである。

私は正宗氏が、森戸氏へ拍手を送らうとしてゐながら、ふと一つの疑念が起つたのでやめにした、といはれる一條を讀んだときに得たことを端緒として、それからそれへと思惟の絲を手繰りながら、つい當初豫想しなかつたところまで深入りして行

つた。だが私はもうこの邊で出發點へ立ち歸つて、森戸氏の論文に對する正宗氏の批難の要點を檢討しなければならない。

七

正宗氏は、直接には森戸氏の論文に用ひられてある譬喩について批難してゐるのであるが、しかし森戸氏がその譬喩によつて示さうとした意味は、森戸氏の論旨の一要點と有機的に交渉してゐるのみならず、森戸氏の社會現象の見方の根本要點にも不可分的に結び附いてゐるものであるから、正宗氏の批難は單に譬喩の用ひ方の妥當性といふやうな外面的形式に關することに限られてゐるだけでなく、その譬喩が傳へようとしてゐる意味、及びその意味が有機的に交渉してゐる論旨の內容にも及び、そこから更らに進んで森戸氏の社會現象の見方の根本要點にまで亘つてゐるものである。私はそれ故に、その積りで正宗氏の批難を見なければならない。

森戸氏が用ひた譬喩を簡單に約めると、次の通りのものであつた。

南洋の或る島の一角に氣象臺が建てられて、それは暴風雨の徵候のあつた場合には、いつもその豫報のための赤い信號を揭げた。ところが、無知の蠻人たちは、その赤い信號が暴風雨を呼ぶのだと考へて、一夜決死隊を組織して、氣象臺を襲擊して、それのすべての設備と共に、例の赤い信號をも破棄した。間もなく、新たな暴風雨が島を見舞つた。が、蠻人たちは果たして赤い信號が暴風風を呼ぶものでないこと悟りを得たらうか？

森戸氏がこの譬喩の媒介によつて傳へようとした意味は、社會科學は今や社會的氣象を豫報しようとしてゐる。ところが岡田文相以下の文部當局は、逆にその社會的氣象の豫報が社會的暴風雨を呼ばうとしてゐるものとでも感違ひしたかして、その豫報に必要な知識を供給する社會科學の研究を禁遏しようとしてゐるのである。だとすると、彼等の賢明さは、南洋の或る島の住民のそれに比して、果してその優劣が問へるか？　といふ點に歸着するのである。

この譬喩は甚だ素朴なものであるが、しかし森戸氏が演壇の上から聽衆に傳へようとした要點を强調する役には立つたに違ひない。そして、その演說の場合といふことを離れた一般的見地から、その中に挿まれた譬喩の用ひ方の巧拙を問ふやうなことは、特に或る場合のために組み立てられた演說を批判する際には、全然無目的なことである。

けれども正宗氏は、前に言つた通りに、單に森戸氏の譬喩の用ひ方を批評してゐるばかりでなく、同時にその譬喩が傳へよ

うとした意味の内容までを論議してゐるのである、かうなると、問題が自ら別になつて來る。

八

森戸氏が南洋の或る島の氣象臺の上に起つた例を引いて、社會的氣象のことについて語つたのは、自然現象の進行の上に自然的必然の法則が認められる通りに、社會的現象の進行の上にも歴史的必然の法則が認められることを言つたまでである。これは、我々と一樣に社會科學を以て一の法則科學として見てゐる森戸氏としては、當然のこととして言へることである。

だが、自然現象の進行の上に自然的必然の法則を認める通りに、社會現象の進行の上にも歴史的必然を認めるといふことは、自然現象と社會現象とを同種同質のものとして把握する、といふことを意味してゐるものではないのである。尤も、人間といふものが先づ第一次的には自然的存在である以上、その人間の生活現象である社會現象も、最も廣い意味に於ては一の自然現象であるには相違ないが、しかしかうした最廣義に於ける自然現象の中に含まれる人間生活現象としての社會現象と、その人間生活現象としての社會現象を除却した以外の自然現象――即ち狹義に於ける、若しくは一般的に理解されてゐる意味に於ける自然現象――とは、決して同質のものではない。そして、それらの兩者の間に存する樣々の差異のうちの最も根本的なものは、前者が意識生活現象であるに反して、後者がさうでないといふ點の上に見られるのである。正宗氏もこの點を認めて、『人間は生れて子孫を繁殖させて死滅することは、他の生物と同樣であるが、生きてゐる間の行爲や思想は千差萬別である』といつてゐる。

社會現象が意識生活現象である限り、社會法則は、自然法則とは異つて、徹頭徹尾意識生活現象の法則であるといふことは、當然のことである。そして社會科學が法則科學と見られる以上は、それはコントの所謂『豫見の爲に見る』(Voir pour prévoir)ことの任務といふやうな、法則科學として當然に持つべきそれの一特徴を辭退する理由がないといふこともまた、無論のことである。だが、ただ社會科學の任務とする社會現象の進行に關する豫言は、それの基礎となる意識生活現象の法則の本質上、自然現象の進行の或る部分に關する豫言のやうに、將來の或る事件の起らうとする時日もしくは時間までを言ひ當てることが出來ないのであつて、それは寧ろ傾向の進み行き、及びその究極の到着點、并にその究極の到着點に於けるそれの崩壞、もしくは新傾向への轉換といつたやうなことにのみ關聯せしめられてゐる

ものである。しかしながら、かういふ意味に於ける社會科學の豫言は、科學的に正當な方法で行はれる限りは、自然科學の豫言と同様に、正確であるべき筈のものである。資本主義的經濟組織の下に必然的に發生した無産階級運動が、資本主義の發達につれて昂進するといふやうなことは、疾うから社會科學的に豫言されてゐたことでもあり、そしてその豫言は現在では、全世界的に實現されてゐることでもある。それからまた、資本主義の最高の、そして最後の段階としての帝國主義の出現の必然性といふやうなことも、同様に曾て社會科學的に豫言され、今實現されてゐることである。更らにまた、資本主義の最後の崩壞への傾向を指示する現實社會の動きの諸相の上にもまた、我々は社會科學の豫言の部分的實現の跡を的確に認めることが出來るのである。

　森戸氏が社會的氣象の研究といつてゐるものは、さうした意味に於ける社會法則の研究を指してゐるものである。そしてその社會法則は、それ故に歴史的必然の法則として、自然的必然の法則としての自然法則から嚴重に區別されてゐるのである。森戸氏はかうした意味の歴史的必然の法則に觸れてはゐたが、どこにも、自然現象と社會現象とは同質のものだとは言つてゐなかつたのである。ただ森戸氏が、あの場合に氣象臺の例を引合ひに出したのは、科學的豫言といふ一點を中心としてだけである。少くとも私は、さう信じる。で、若しさうだとすると、森戸氏があの演説の場合に豫期の効果を擧げたであらうとは、正宗氏に想像し得られると同様に私にもまた想像し得られる。

　けれども正宗氏は、社會現象の法則性などについて語るといふことが、抑も根本的に間違つてゐる、といふのである。そして、その理由とするところは、大體次の二點であるやうである。

（一）社會現象は意識生活現象だから。

（二）社會科學者は純客觀的態度でゐられないから。

で、私はどれほど簡單にでも、次にこれらの二點を順々に檢討しなければならぬ義務を感じる。

九

　社會現象が意識生活現象と言つただけでは、その社會現象に法則性が缺けてゐる理由を示したことにはならない。それは、意識生活現象の法則性といふことも考へられるからである。正宗氏は極めて簡單に、人間の『生きてゐる間の行爲や思想は千差萬別である』とだけ言つて退けて、意識生活現象の法則性を拒まうとしてゐる。ここへ來て我々は始めて、正宗氏が

見てゐる世界が何ものであるかを、明白に知ることが出來た。即ち正宗氏は、人間の社會生活現象の全面の動きを見てゐないのである。換言すれば、氏は人間の社會生活現象を進化論的視角から、若しくは辯證法的眼界から、見つめてゐないのである。のみならず、氏の社會生活現象の觀察の視野は、全面的でなく、局部的である。氏が人間の社會生活現象を觀察して歷史的必然の法則に及ばなかつたのは、全くそこから來てゐるのである。

だが考へて見れば、正宗氏だけにでなくとも、『世界を樣々に解釋』するだけで滿足して、『世界を變革』する行動への意欲を持たないものに取つては、その社會生活現象の觀察に於て、歷史的必然の法則への到達の必要が全然感じられないのかも知れない。一切の科學は、人間生活の必要から生まれる。社會科學にしたところで、その例外を示すものではない。それ故に、歷史的必然の法則への到達の必要を感じない人々には、社會科學は無意義千萬のものである。と同時に、社會科學を無意義千萬だとする人々の見た人生の描寫や批判が、社會科學の重要意義を明確に認識する人々の感興や關心を喚びさますことが出來ないといふこともまた、當然至極のことである。私は、我國の文壇と社會評論壇との阻隔の原因の重大な一つをそこに見る。

これに反して、森戶氏の見て居る世界は、人間の社會生活現象の全面の動的姿態である。即ち氏は、その社會生活現象を、進化論的視角から、若しくは辯證法的眼界から見つめてゐるのである。氏はそこから出發して、歷史的必然の法則の認識にまで到達したのである。そして、マルキシストとしての氏の立場は唯物史觀の上に即してゐるから、人間の社會的存在が彼の意識を決定するといふ見地の上に社會法則の認識の基礎を置き、且つ社會進化の究極の起動力を諸生產力の發達のうちに見て居るのである。だから、森戶氏の論據が間違つてゐるか否かは、直接森戶氏の見地について檢討されなければならないのである。換言すれば、それは森戶氏の見地に即する內在的批判に依つて、始めて決せられ得る問題である。ところが正宗氏は、さういふことを毛頭試みないで、單に氏が氏自身の見地から見たものに即して得た結論を、森戶氏が森戶氏自身の見地から見たものに即して得たそれと比較してみて、兩方が同じでないから、森戶氏のが間違つてゐるのだ、と言つて難詰してゐるのである。これは、社會科學に關する論爭としては、亂暴極まる行き方であつて、正宗氏の日頃の態度には甚だふさはしくないやうに思はれるものである。我々から見れば、正宗氏の見地からは、人間の意識生活の表現の種々相が最も顯著に——そして全然沒法則的に——見えると言へるのは當然である。しかもそれは、森戶

の見地からは、人間の意識生活の表現の種々相にも拘はらず、否、寧ろそれの故に、社會生活現象の全面的動きの上に歴史的必然の法則が見られると言へるのが當然であると同様に當然である。だから究極に於て、正宗氏の論難は、議論にもならないことを議論にしてゐるものだ、といふ結論が不可避的のものとなるのである。

殊に滑稽なことは、正宗氏が自説の證明のために用ひてゐる諸例が、いづれも森戸氏の立場のそれのためにも役立つといふ一點である。即ち正宗氏は『氣象學者は自己の力で旱地へ雨を降らし、熱地へ涼風を送ることは出來ない』と言つてゐられるが、それは至極御尤なお説であつて、そして社會科學者もまたそれにバツを合はせて『社會科學者とても、自己の力で、社會主義の勃興する條件の皆無なところでそれを勃興させることも出來ず、またさうした條件が成熟してゐるところでそれを衰滅させることも出來ない』といふやうな御愛相をいふことも出來るのである。否、さうした奇術は、單に社會科學者にばかり出來ないことだけでなく、それは誰れにも出來ないことである。國家の力を以てしても、そんな無理は推し通せない。といふのは、それは歴史的必然の法則に叛逆することだからである。治安維持法の無産階級運動抑壓上の効果はどうか？　また社會科學研究への壓迫政策は、果して學生のその方面の熱心を少し

も減殺したか？　等等。尚ほまた、正宗氏が森戸氏への反駁のために擧げてゐる諸例中の、思想の傳染力とか、長野縣事件に於て見られたやうな群衆の行動の不可抗性とか、戰場の或る局面に於ける軍旗の奪ひ合ひの不可避性とか、保守的政治家の社會科學的豫報への恐怖の必然性とか、等等は、正當に取扱はれる時には、森戸氏の立場の證明のためにだけ役立つのである。

一〇

正宗氏はまた、社會科學者は氣象學者――おそらくこの場合それを『一般的に自然科學者』と置き換へても氏に於て異存はあるまい――のやうに、純客觀的態度で觀察對象を見てゐるか？　との意味を述べて、森戸氏に詰めよせてゐる。それに對して、假りに若し私が答辯しなければならない地位にあるものとすると、私は言下に『なぜ、社會科學者は自然科學者のやうに純客觀的態度で觀察對象を見てゐるか、といふやうなことが疑問になるのか？』と問ひ返さないでゐられないであらう。

歴史的必然の法則に喰つてかからうとする意氣込みを見せてゐる正宗氏が、その點に關しては安全第一の沈默を守つて、ほんのお坐なり的な説明をさへも與へてゐられないのは、不親切

といはうか、老巧といはうか、[illegible]といはうか、我々が一寸挨拶に困らされることである。だが同時に、それで我々の方にも、『社會科學者は自然科學者のやうに觀察對象を純客觀的に見てゐるか？』といつたやうな意味のことを言ひ放つてゐる正宗氏の氣持を勝手に忖度する權利が出來た譯である。

若し正宗氏の言葉が單純な問ひであるならば、社會科學者はそれに對して、『從來社會科學の方面に發表されて來た業績のうちの、眞に社會科學的研究の名に値ひするものについて、直接に批判して下さい』と答へるだけですむことになる。その場合若し正宗氏が『さういふ風に眞に社會科學的研究の名に値ひする業績の見本を示してくれ』と注文されたら、社會科學者は無論即刻それに應ずる用意を持つてゐる。けれども、萬一その際正宗氏が、『私にそんなものを調べてゐる興味も暇もない』と言はれたら、社會科學者は、『それなら、それについて何にもならぬことを兎や角言はれない方がおためでせう』といふやうな、頼まれもせぬ助言をしても別に差支へがない譯である。

けれども、假りに若し、正宗氏の言葉が單純の問ひだけだといふのでなく、それの裏に別の何かの意味が含まれてあるものとするならば、我々はその別の意味を讀まなければならぬ義務を感じる。そこで私は今その場合を假定して、その言葉の裏の意味を讀むことにすると、それはかういふことになる。即ち、正宗氏が『社會科學者は、自然科學者のやうに、純客觀的態度で觀察對象を見てゐるか？』といふ意味を述べられたのは、『見てゐない』といふ氣持をそれに含めてゐられるのであつて、そして氏が『見てゐない』といふ氣持を起されたのは、『見ることが出來ない』といふ前提から來たのである。だとすると、その『見ることが出來ない』といふ前提はどこから出たかといふやうな、その次の問題が生ずるが、それは、

（Ａ）社會科學者はその觀察對象に對して緊密な直接の利害感若しくは關心を持つてゐるから。

（Ｂ）社會科學者は森戸氏のやうな熱情家タイプの人でありがちだから。

（Ｃ）社會科學に於ては、觀察の主體と對象とが多くの點に於て合致してゐるから。

の三つの根據のうちのいづれかの一つ若しくは二つ、若しくはすべてから來てゐるものでなければならない。

もちろん、これは皆假定である。が、しかし有理な假定である。だから私は、右の三つの根據の一つ一つに、簡單な說明をなりと加へておかなければならぬ。

（A）社會科學に於ては、觀察者がその觀察對象に對して緊密な直接の利害感若しくは關心を持つてゐるから、純客觀的になり得ない、といふやうなことは、一般によく言はれてゐることだが、それは一つの極めて出鱈目な通俗解釋にすぎないものである。といふことは、究極に於ては、純客觀的觀察を必要とする科學にもせよ、それは人間生活上の必要から産まれたものだ、といふところから來てゐるものである。それは、自然科學の場合と、社會科學の場合とを問はないのである。

科學は本來、天から降つたものでもなく、地から湧いたものでもなく、また神から人間に授かつたものでもなく、それは人類歴史上の産物であり、從つてそれは、人間生活上の必要から人間が作つたものである。自然解釋に於て科學が迷信に入れ代つたのは、沙漠の旅行に於ける方向決定の必要が群星の客觀的現實的觀察を産んだやうに、人間の生活がそれを必要としたからである。それ故に、科學は人類史の始めから完全にあつたものでなく、少くとも幾らか系統だつた形に於ては、人間社會の生活關係がそれを必要とするやうになつてから始めて出現したものである。同樣のことは科學の起源についていへるだけでなく、それの發達についてもいへることだが、しかし私はこの問題を『中央公論』の九月號に出た私の『科學の社會性』といふ論文で比較的詳細に取扱つておいたから、茲ではこれ以上のことを言はない。

人間生活上の必要が科學を産んだといふことは、人間が科學の觀察對象に對して緊密な直接の利害感若しくは關心を持つやうになつてから始めて科學が産まれたといふことになるのである。私は今この點を論じ進める暇を持たないが、しかしここで次のことだけのことは言つておきたい。それは即ち、科學上の觀察者も、現實の人間生活から隔離されて棲息する特異の生物ではない、といふことである。

私は尙ほそれに附帶して、次の一言をも加へておきたい。即ち、現實社會事象の客觀的研究——即ち社會科學的研究——が要求されかけたのは、科學史上比較的最近に屬することであつて、そしてその要求に應じて現はれたのが社會科學である。

（B）科學者は熱情家であり得る。無論科學的研究に根本的に必要な純客觀的觀察は極度に冷靜に行はれなければならないが、さうした冷靜な態度を根本的に必要とする純客觀的觀察は、眞理の探求及び擁護に對して熾烈な熱情を有する研究家によつてなされるのを常例とする。この頃では誰れでも知つてゐることだが、科學的眞理に對する熱愛のために、ガリレオは晩年を

牢獄の中ですごし、ブルノーは焚殺された。ロージヤー・ベーコンや、コペルニクースや、ケプラー等々、學術のために多大の犧牲を忍んだものは、古來限りなく見られて來たことは、科學史上に顯著な事實であつて、更らに社會科學方面の受難者のリストは一層膨大なものであることも、今日では誰れもが知つてゐる通りである。

(C)社會科學に於て、觀察の主體と對象とが一致してゐるといふことは、つまり現今の流行語でいふと、社會の科學的研究は、社會に取つては自己批判だ、といふことになるのである。ところで、社會の自己批判、殊にブルジョア社會の自己批判の本質が何であり、またそれが如何なる條件の上で可能であり、更らにまた、それの現實的効果はどういふものであるか、といふやうな諸問題は、現在社會科學方法論上の活きた問題であるから、その方面の文獻を讀んで貰ひたい。けれども私は前の例により、極めて手短かな説明を加へておく。

個人生活の場合に於ても自己批判が常に要求されてゐる。ソクラテースが『汝自身を知れ』といつたのは、つまりそれである。それは自己を客觀的に見よといふ要求である。個人生活に於ては、生活が深められて行くだけづつ、自己批判が進んで行く。そして、自己と他人との異同及び關係に關する知識の如きものも、個人生活の場合に於ても結局は自己批判から得られるのである。

社會の場合でも、略ぼ同樣のことが言ひ得られる。今それをブルジョア社會についていふと、ブルジョア社會が、歴史的にこれに先行した封建社會や奴隸社會と、ブルジョア社會自身との異同及び歴史的關係を認識するやうになつたのは、ブルジョア社會の自己批判が行はれ始めてからのことである。所謂歴史的必然の法則は、その觀察のうちから抽き出されたものであつて、そしてその歴史的必然の法則はまた、現在の社會の將來への進展の方向を指示するのでもある。

けれども、特定の社會形態の下にその社會の自己批判の行はれるためには、その社會が或る程度にまで成熟したものであることを前提とするのである。それはブルジョア社會についても言ひ得られることである。そして、ブルジョア社會に於てそれの自己批判が行はれるまでにそれが成熟したといふことは、ブルジョア社會の純客觀的觀察を必要とするもの――その『もの』は、手ツ取り早くいへば、ブルジョア社會の場合に於ては、或る程度に階級意識にめざめた無産階級である――が生じたことを意味するのである。

無產階級の階級的行動の必要が歷史的必然の法則を指示する社會科學の發生を促したのは、一定の產業的段階に達した人間生活上のに於ける產業的行動の必要が、自然的必然の法則を指示する自然科學の發生を促したことと、同じ筋路から出て來てゐるものである。主觀と客觀との、行動と理論との、そして同時に必然と意識的統制との辯證法的統一といふことも、その下に於て始めて言ひ得られるのである。それ故に、無產階級的行動が必要とする社會現象の純客觀的觀察に熾烈なる熱情を以て從事する社會科學者の出現が見られるといふやうなことは、別に不思議でも何でもない。眞理に對する熱愛は、それの持主を、眞理の探求のために必要な冷靜なる科學的研究へ送り込むものである。

私がそれまで述べて來たことを振り返つてみると、私が正宗氏の森戶氏評からヒントを得て永々と書いたことは、畢竟現在の我國の文壇と社會評論壇との深刻なる阻隔の根本的諸原因の探究に終つたやうである。或はそれが實は、私の當初からの意圖であつたやうにも思はれる。がそれは兎も角、私はこの一文が、誰れからの贊成を得なくとも、誰かに何かの暗示を與へるだらうとを願ひつつ、疲れた手を休めることにする。



解散を豫想さるゝ今議會と各政黨の立場

普選後に於ける政治闘爭の性質の變化

長谷川如是閑

今までの政治上の爭ひは同一階級の内部闘爭であつた。それは丁度軍國國家の軍事的闘爭が必ず軍國階級の内部闘爭であつたのと同じで、社會の進化に伴れて武器の爭ひが政治的討議の手段に移つたのである。政治上の爭ひが同一階級の内部闘爭に止つた理由は、政治が完全に一つの階級の手に收められて、全然他の階級を排斥することが出來たからである。政治の爭ひは政治する階級と政治しない階級との爭ひではなく、全然政治する階級の内部の爭ひであつた。隨つて政治する階級と政治しない階級との爭ひは、政治上の爭ひではない。それは强制的の力の爭ひで、合理的過程ではない。政治する階級は、力を以つて政治しない階級を排斥し壓迫したのである。

政治は權力階級の獨占的態度である。政治自體は協動的で、妥協的であるが、政治する權力の有る無しは絶對的で、決して協定によつて定まるものではない。如何なる階級が政治するかは、合理的に定まるものではなく、力の關係で定まるものである。だから政治の初めの時期に於ては、政治的權力は全然軍事的權力と一致してゐた。政治的闘爭は同時に軍事的闘爭であつた。

政治が進化するに從つて、政治する階級の地位は、次第に政治される階級の生活條件に依存することとなつた。單なる殺戮壓迫等による政治は不可能となつた。それは政治的權力が屢政治する階級の力の發動によつて覆され、移轉される經驗の反復によつて持ち來たされた現象である。

つまり政治しない階級が次第に政治階級に參加することによつて、權力者の地位を占め、政治階級の內部闘爭に參加する分子として生長するに至つた結果である。民族的宗教の首長の支配に對し、地方の豪族が同じ權力階級に割込んだのもそれであり、その軍國階級の內部闘爭が終りを告ぐれば、奴隷的であつた產業的の階級が軍國貴族の政治に對し、權力者の地位に割込み、貴族と市民とが政治階級の內部闘爭に於ける相手同士となつたのもそれである。或る一定の支配狀態はさういふ內部闘爭の一方の相手方が、他方の相手方を壓迫する所から成立する。現在の政黨政治は市民階級が貴族階級を壓迫し吸收してしまつたところから成立したのである。

だから今日の政治的闘爭即ち政黨の爭ひは、初期の軍國階級と市民階級との爭ひを經過し來つて、市民階級の支配組織に於ける內部闘爭となつてし來つてゐるのである。何處の國でも普通選擧發達以前に必ずさういふ狀態が成立しなければならないのである。

一つの階級內にどうして內部闘爭が起るかといふことは、歷史的にいろいろ異なる事情によつてゐる。階級のない共產社會に於ける內部闘爭は、動物の同種內の闘爭と同じく生殖關係の爭ひであつた。それが進んで私有財產制度の發達した社會に於ける內部闘爭は、財產の爭奪、即ち物質的利益の爭奪であつた。その二つの關係は非常に異るやうであるが、實は生殖の爭から榮養の爭ひに移つたのであつて、同一系統に屬する生活階段である。軍國時代はずつとこの榮養の爭であつて、軍國的貴族は畢竟豐富な榮養の蓄積によつて出來上つた階級に外ならない。市民階級の支配に至つてそれが利潤を目的とする爭ひとなつたが、これまた利潤なるものがつまり物質的榮養の制度的表現であつて、その社會制度の下に於ては利潤が、蓄積された榮養の手形なのである。

それはつまり利害の闘爭であるが、一體人間は利害を集團的に追求するものであつて、家族は家族で集團として利害を追ひ、村も國も、皆一つの集團をなして同一利害を追求してゐるものであつて、內部で更に利害の衝突を起すやうでは、この集團的な追求が出來なくなる。然るに對立的の階級の一方が壓迫さるると、他の一方の內部で必ず爭ひが起ると云ふのは、どういふわけであるか、內部闘爭の止まない理由は何處に在るか。

それは反社會的な所有觀念が成立してからの現象である。一つの家族でも、內部の所有關係が全然共有的である場合には、決して所謂財產爭ひのやうなことは生じない。一つの民族に於ても、掠奪が主として他地方に向つて行はれたのは、即ち所有

の協動關係の無い社會との間に爭ひの起ることを示すものである。軍國階級が出來上つてから内部鬪爭の盛んなのは、所有の協動關係が丁度昔の他民族の間の關係のやうに、同族間に於てさへ無くなつてしまつた結果である。貴族の間に嚴然たる私有財産制が成立したからである。で、同じ一族の間でも、もはや所有の協動關係がなくなるから、同じ宗族の間に猛烈に軍事鬪爭を惹き起す。同じ宗族の間の權力爭ひと云ふのは、畢竟私有財産の同族間に於ける掠奪戰であつた。つまり一族の間にも他民族間に於けると同じく所有の協動觀念が失はれてしまふのである。何々氏は一族であるから親和を保つといふのはつまり所有が協動關係にあるといふ意味である。軍國時代に至つて、同じ何々氏の一族の間に軍事上の爭ひが起るのは、即ち所有の獨占關係がその一族内で成立してゐるからである。權力を爭ふのはつまりこの獨占を爭ふのである。

資本主義國家の政黨の爭ひもつまりそれである。この時代にはもはや氏族とか民族とかいふ幻像的統一觀念は失はれてゐて、所有の爭ひが全然凡べての鬪爭を支配する。昔の軍國貴族の内部鬪爭にはまだ或ひは地方の中心的氏族であるとか、氏族内の宗家であるとかいふ種族的幻像が幾分爭ひに刺戟を與へてゐたが、今日の政黨の爭ひには全くそれがない。今でも長閥とか薩閥とか云つてゐるが、然しそれは長州とか薩州とかいふ種族的の觀念に基いてゐるのではなく、さういふ幻覺よりも一層確かな利害の集團がその延長として出來上つてゐる、その利害關係を中心に爭つてゐるのである。政黨の爭ひは今では市民階級の利潤獲得の爭ひの一機構である。

同一階級内に盛んに爭奪戰の行はれるのは、自由主義的經濟組織が、一切の幻覺的な又同時に社會的な羈絆を離れて、殆ど資本家個人の戰鬪狀態に陷つた爲めである。そこで政黨は殆ど個々の資本家に從屬するといふ事實上の關係を有つに至つたのである。一つの政黨が資本家階級全體を代表するといふやうなことは有り得ない。何となれば資本家自身互に同じ資本家に對して利害を爭ふ地位に在るものだから、銘々の資本家は別々の政黨を有たなければならない。これは或る特定の資本家系統に屬する特定の政黨が存在する理由である。

恐らく銘々の資本家は銘々の政黨を有ちたいであらうが、資本家自體の組織が合同的傾向を有すもので、言ひ換へれば、中心的大資本家に統一される傾きを有つものであるから、所謂財閥の成立となる。中心的財閥は、その經濟的支配を政治的權力と結びつけることによつて、初めて完成することが出來るものであるから、彼等が各自の政黨をもつことゝなるのである。政

黨の勢力は彼等に取つて昔の軍國貴族と軍隊との關係と同じなのである。今日でも對外的には政治的權力が軍事的勢力と結びつかなければならないから、資本家はそこでは軍國貴族の地位を占めることゝなるが、さうでない場合には政黨が彼等の軍隊である。但貴族の銘々が軍隊を有つたのと異なつて、或る合同された幾つもの資本家的勢力がそれぞれ政黨を有つたのである。

政黨はそれ故に資本家の內部鬪爭の組織である。そこでは農業的資本家即ち大地主の類が產業上保守的地位を占めるものであるから、保守的の政黨を作り出し、近代的工業の支配者は產業の發達が個人的自由主義に基いてゐる性質上、進步的な自由黨を組織する。而もこの一般原則とは關係なしに、その時の政治的權力を占めてゐる政黨に結托することによつて、經濟的支配が十分行はれるのであるから、財閥はその時々の有力な政黨を利用する。だからこの原則的の機構がよく成立してゐる國では、政治的權力を占めた政黨は、比較的長持ちをする傾きがある。要するに資本家階級の內部の統一がよく取れてゐる間、所謂政爭が穩かで、それが破れると、政爭は烈しく且つ頻繁になる。

この政黨の內部鬪爭であるといふ組織の末期的の過程は、普通選擧から初められる。普通選擧は階級內部の爭ひたる政治の爭ひに新たな時代を劃するものである。即ち政治から排斥された階級がその內部鬪爭に入り込む過程である。

それは必然に政黨の爭ひを同一階級の內部鬪爭から對立的階級の爭ひに轉ずる。普通選擧によつて無產者を政治に參加せしめなければならなくなつたのは、無產階級の生活利害が市民階級の存立を支配するやうな生產過程に進んで來たからである。即ち生產管理の階級が生產勞働の階級に支配されねばならぬ傾向の增長して來た爲めである。軍國時代の奴隸はそれを鞭打つことが生產能率を上げることであつたが、今日の生產組織は、生產勞働者と協動することによつてのみ組織が保たれる。それは即ち產業的支配を基礎づける政治的權力が產業勞働者の參加を必要とすることゝなつたのであるが、それが即ち普通選擧となつて現はれたのである。それは決して組織自體の機械的推移ではなく、生產勞働者の階級的運動であつた。その運動は政治運動と全然性質を異にし、階級的對立に於いて生活能力の立場から生存を爭ふ組織であつた。

普通選擧はこの組織を單なる力の爭ひから政治的機構內に於ける爭ひに移すものであつて、資本家階級の立場から云へば、政治的對立の鬪爭を力のそれから政治的討議のそれに移轉せしむ

る緩和策である。その政治的鬪爭に參加することによつて、無産階級は政治的權力の機構内に於いて政治的支配に關與するのである。隨つて無産階級の政治的色彩が政治革命的の段落に到達せずに現はれることとなるのである。その結果、政治鬪爭は階級鬪爭の形を取る。資本家階級の内部鬪爭でなしに資本家階級と無産階級との權力の爭ひとなるのである。

だから全體の資本家的利害は自らよりよく統一され、所謂兄弟墻に鬩ぐも外侮を禦ぐこととなつて、資本家的政黨の統一的傾向が起る。同時に無産者の階級運動は、ブルジョア政黨に似た形の政黨組織となつて現はれる。隨つて階級的對立が政黨的對立を基礎づけることゝなり、所謂中間派が影を潜める。それは産業組織に於いて個人的自由主義の働きが終りを告げ資本家的統一を以つて無産者的統一に對立する形式となつたことに件つて、言ひ換れば資本家組織に於いて自由主義の衰頽したことと伴つて、政治上の自由主義即ち自由黨の衰頽となる。

この原則的な過程を日本の將來の政治組織が文字通りに踏んで行くか何うかは別として、少くとも無産政黨の有力な歴史が始るであらうことは今日の形勢上疑ふべからざることである。只、日本は資本主義がイギリス程完成せずに早くも轉化の道を取りつゝあるので、その點では全體の形勢がイギリスよりも大陸の諸國のそれに似てゐる。殊に初期の運動に必然な無産階級内の内部鬪爭が甚だ目立つて見える。或は實際的の經驗から、或は哲學的觀念的意識から、著しい實行上又思想上の無産階級内部の鬪爭が行はれる形勢を示してゐる。

この内部鬪爭の原因は、極めて複雜であつて、急劇に過渡期に入つた爲めに、同じ階級内に利害と觀念とが僅かな差で何方にでも傾き得るさまざまの根據が殘存してゐる爲めである。利害關係に於いても、明確に對立的地位が成立してゐるといふよりは、中間的な地位が到る處に殘存して、一時的の誘惑となる。又意識の方面でも、いろいろのイデオロギイが精神的興味を誘惑して、觀念的昂奮のうちに徘徊させる。要するにこれ等の歴史的殘物がまだ掃除されてゐない。折角起つた無産階級意識は、これ等の利害や觀念の過渡的殘物の間を彷徨する爲めに、それが一々内部鬪爭の形で現はれるのである。

然しこれ等の内部鬪爭の標的は、大局的の階級的對立關係を目當てにする時には、大方消えて無くなる幻像である。無論所謂戰鬪的目標の確立の爲めにそれ等の爭ひを爭はねばならぬ事情もあるに相違ないが、多くの人々の間には、觀念的興味が彼等をその爭ひに執着させる傾きがないとは云へないであらう。

これは一つには階級鬪爭が現實的の過程に完全に入つてゐな

い故もあらう。普選選擧が行はれて、無產政黨の政治運動が一層具體化されれば、無產者の階級意識ももつと大同的傾向を取るに至るであらう。只、元來政治の爭ひは所謂權力の爲めの權力の爭ひに陷る惧があつて、生存的鬪爭を單に政治的鬪爭に抽象してしまふ傾きがある。これは嚴重に警戒せねばならぬ點である。無產階級の運動がかやうな抽象化された政治的鬪爭に化してしまふならば、それは全く意味を成さなくなる。それには何處までも政治運動ときり離された經濟的行動が、無產階級の政治運動の性質を支持せねばならぬのである。

斯くの如くにして今後の政黨の鬪爭は階級の內部鬪爭でなく、階級を超越する社會的管理の組織を持ち來たす運動となるのである

解散の豫想と各政黨の立場

緒方竹虎

今さら政界を罵倒してもはじまらぬが、今年の政治期ほど醜怪な政治期はない。朴烈問題以外、何一つ問題がないのだ。減刑奏請が當を得てゐたか否かについては、おのづから議論もあり得よう。これに關聯して暴露された司法部內の綱紀問題、威信問題も重大に相違ない。併し朝野の大政黨が、政治期にのぞんで、何一つ相爭ふ政策上の主張を有しないといふのは、驚き入つたことである。ことに、燃えるか消えるか分らなかつた朴烈問題が、西園寺公の入京以來、急に火の手をあげたなど、ますますもつて不可解である。この頃の西園寺公は、どんな參詣客が來ても、なか〱顏色一つ讀ませぬそうだ。それを何う讀んだか、何れにしても苦々しい。といつて、斯うした反對黨の態度は、政府が正しいといふ裏書にはならない。この問題に帝國辯護士協會までも引張り込み、好んで騷ぎを大きくした例の司法省の第一次聲明は、餘人ならぬ法相みづから筆を執つたものだそうだが、それで世間が納得すると思つたのだつたら、政府の政治常識も餘程問題といはざるを得ない。

政界の醜怪なるは、ひとりこれのみでない。昨今の政局が全く研究會を中心として動いてゐることは、少くも議會政治の將來を念ふ者には、默つて見て居れぬはずである。反對黨の陰謀はイツも研究會を通じて行はれる。昨今の政務官の進退問題な

どがそれだ。すると政府もそのあとから、諒解運動と來る。お蔭で研究會の殿様連は朝に晩に酒びたりであるが、これではタッタ一年前の貴革運動は何のためであつたか分らない。議會政治の特長の一つは、すべての議論を明るみでするところにあるといへる。したがつて、いはゆる諒解運動は、議會政治には禁物のはずだ。それを平氣でやつて、政黨内から一つの非難すら起らぬところに、政界の調子の下落した、見逃し得ざる表れがある。

併し、この醜怪事も、長い政治の進展の上からは、必ずしも無駄ではなかつた。何となれば、この醜怪混亂があつて、はじめて議會解散の勢ひが、九分通り決したからである。

△　△　△　△　△

何うして政界の空氣が例年にもまさり、斯うも險惡になつたか。

それにはもちろん種々の理由があらう。政權を中心に動く政黨の本性が原動力たることは、いふまでもない。政府の弱腰といふことも手傳つてゐる。若し政府の腰がたしかだつたら、これほどまでに議會前の陰謀は、起らなかつたらう。政府の弱腰ほど、反對黨に對する誘惑はない。併しながら、何が最も大なる泥合戰乃至陰謀流行の原因であるかといへば、私は、政黨の革命期が近づいたからだといふ。いまの政黨にとつて最も怖いのは、普選の試錬である。それは一千萬の新有權者が、洪水のごとく選擧場を押し流すからばかりでない。假りに一時的にもせよ、いはゆる選擧界からその神通力を奪ひ、すべての政黨を五里霧中に置くからである。そこで普選の實施は既定の事實としても、既成政黨としては、何とかして最初の普選を自分の手において行ひたい。普選を自分の手でやつて果してどれだけの利益があるか。普選にも官憲の干渉がしかく有効であるか。何等據所はないが、政府黨の有利を味つた經驗ある既成政黨としては、最初の普選を自分の手でやることは、何よりの心頼みであるのだ。

この目的からいへば、反對黨としては、何とかして、議會の解散を受けぬ前に、政府を倒さねばならぬ。こゝにおいて床次總裁のいはゆる『政策問題に先ち』朴烈問題の勝負を決する必要が生ずる。研究會をたのんで一陰謀やつてもらふことにもなる。今後、議會開會までには、松島事件の豫審決定書も發表になるだらう。怪文書も恐らくまだ繰返されよう。與黨としては、田中山梨兩大將の機密費事件も、も少し利用せずには置くまい。そして若し政府の足許がたど〳〵すれば、この泥合戰はます〳〵熱を加へるだらう。

既成政黨は、必しも普選に對する準備を怠つてゐたわけではなかつた。何か新しい有權者の喰付きそうな政策を掲げるほか生きて行く途のないことは、既成政黨といへども、心得てゐた。前議會頃から急に社會政策や勞働立法の聲の喧しくなつたのが、それであつた。併し、例へば勞働組合法でも農村政策でも、際どいところになると幹部から拘制される。幹部から拘制されるのではない、既成政黨本來の立場が許さなくなる。普選を通過させるにさへ、一方治安維持法を制定せねばならなかつた。かうした差引の結果は、準備をして無準備と同じことになつた。のみならず、政黨には、常に政權をとつた時の懸念ばかりする癖があつた。例へば政友會で、近頃一貫した主張といへば、地租委讓を中心とした地方分權論であつた。この主張には、少くも議者の共鳴と、將來に生きるいのちとがあつたのだ。然るに、政友會は、何時の間にやら、この主張をぼかして仕舞つた。その理由はといへば、直ちに實施するに困難で、言質を殘すを恐れるといふのだそうな。

要するに、普選を最も怖れる既成政黨は、泣いても騷いでも、今やほとんど無準備のまゝ最初の普選に臨まねばならなくなつた。昨今の泥合戰は、いはゞその最後の亂舞亂鬪である。もちろん、不準備は既成政黨のみでない。新に選擧權を得た無産者側も、たとへば勞働農民黨でも、決して準備がよいとはいへぬ。併し、濱松及び北海道五市の市議改選にあらはれた結果によれば、若し無産者の組織が相當によく行はれ、その上選擧區の協定が出來れば、全國に亙り可成りの數を得はしないかと思はれる。最初の選擧ではそう大して變るまい、と誰もがいふ。併し、誰もが朧氣に外國の例を憶記する外何等據處あつていふのではない。何處までを「そう大して」といひ、何處からを「意外」といふのか分らぬが、濱松でも北海道でも、いはゆるボス政治家が多く落選し、全體に若いものゝ當選率の多いところは、たしかに、新しい勢力が地殼の下を衝いて、普選を待つて居るといへるのである。

△　△　△　△　△

こゝで政黨の腹の中を解剖して見る。前述のごとく、解散が第一案でないだけは、どの政黨も同じだ。たゞ、そのなかでも憲政會は、政權を有するだけ氣が樂だ。政府及び憲政會の方略は、恐らく如何なる陰謀が起つても、議會までは何とか持こたへて解散を浴せ、あはよくば多數を制しようといふのであらう。先頃の地方長官更迭は、明かにその準備兼示威運動といへる。もちろん、小選擧區制の場合と異り、假りにすべての條件が政府黨に有利であつても、二百以上を得ることは困難であら

う。同黨の幹部も内々これは認めてゐる。併し百五十にしろ二百にしろ、各黨派中の最大なる數を得れば、あとは中立を操縦して、議場に「有効なる多數」を得ることは困難でない。そこに與黨の狙ひどころもあれば、安心もあるのである。この形勢は前議會の時も同様である。したがつて、一度あることは二度あるとし、今度も際どいところになれば又妥協だらうといふ觀測が、今も一部に行はれてゐる。併し前議會の際は、財界の反對以外、當の加藤首相が、健康その他の懸念から、非解散論であつた。然るに今度は、財界も餘り多くこの内閣に執着を持つてゐない。内閣の陣容を立直す上からも解散が必要となつた。たゞ、今になつて首相が、決心したやうなせぬやうな演説をしてゐるのは、恐らくは、挑戰者たる名を避けたいからであらう。

政友會と政友本黨とは、第一案も第二案も、非解散方針なる點において同じである。さればこそ手を替へ品を替へ朴烈問題を繰返して、議會前の内閣倒壊を目錄てゐるのである。たゞ政友會に多少の心頼みがあるとすれば、それは、政友會が本黨に比して優勢であるだけ、一旦解散に遭へば、政友會の地盤の本黨に走るよりは、本黨の地盤の政友會に來る方が、多さうな點にあるだけである。昨年の議會には、本黨が政府に接近して、やゝもすれば當分『冷飯を食はされさうな』心配があつた。それが今年に、床次總裁の進退演説以來、憲本提携の成立も先づ九分通り想像されない。これだけでも、昨年よりは形勢が有利になつたと、みずから慰めれば慰められる。

何といつても、一番苦境は本黨である。これだけ作戰も一番念が入つた。念が入り過ぎて、凝つて思案にあたはなかつた形さへある。床次總裁の九月十九日の演説は、公表前、黨の最高幹部において、四五回も修正補綴したものださうだが、何れにしてもその要點が、『皇室に對する恐懼の觀念を疑はしめ皇室に對する敬虔の態度において異る者あるを見るに至りしは余のすこぶる遺憾に堪へさるところ』と、『政策問題に先ちその非違を正さゞるべからざることを敢てこゝに言明』するにあるだけは、一目みて瞭然である。この文句は、内輪にとつて、昨年以來の憲本關係に對する絶縁狀といはざるを得ない。本黨の一貫した最高政略は、憲政會との間に、いはゆる盥廻しに政權を授受するにあると思はれた。これは政友會に對する床次氏の感情からも、少數黨たる本黨の立場としても、さうありさうなことである。現に床次氏が首相官邸に尻を捲りに出懸けた後においても、盥廻し論はしきりに本黨側から水を向けられつゝあるといふことだ。『政策問題に先ち』朴烈問題の非違を正さんといふところに、手品の種があると猜するものもある。併し、

如何なる仕掛があつたにしろ、この演說以來、憲本兩黨間の感情は、可なり極端なところまで突つ走つたことは事實である。したがつて、研究會の舵手が非常の效力を發揮すれば兎も角、最早や撚りを戻すことは、十中九分九厘六かしいであらう。撚りを戻すとすれば、解散後であらう。

△　△　△　△　△　△

何れにしても、舟は解散を好まざる三人の客を載せ、アレヨ〳〵といふ間に、急湍を下りつゝあるのだ。

解散と勞働農民黨の立場

安部磯雄

總選擧が手輕に行はれるならば、大問題が起る每に議會を解散して國民の意志を問ふことが最も好ましい方法である。併し日本のやうに總選擧每に莫大な費用を必要とする國に於ては解散は容易に行はれない。丁度今日の狀態がさうであつて、如何なる政黨も解散を喜ばず、寧ろ出來る限りそれを避けやうとする傾向がある。然るに在野黨は一方に於いて解散は好まぬが、現內閣を倒壞せしむる必要から、出來るならば議會前に於いてそれを實現せしめやうと努力して居る。勞働農民黨の立場は、それも早く議會の解散されることを望まぬ。それは要するに總選擧に對する準備が未だ十分に整つて居ないといふ意味に於いて、出來るならば此度のやうな解散は避けて、明後年の總選擧の時期が來るまで待たうと考へて居る。斯くの如く總ての政黨は解散を歡迎しないのであるが、只在野黨が議會解散前に於いて、朴烈問題などを提げて現內閣倒壞運動を企てゝ居るので、此事情が政府黨の立場を危くせしめれば、政府黨としては政權を掌握して居る中に解散を斷行する方が得策である。現在の形勢に依れば此度の解散は避け難きものとして世間一般の觀測する處である。されば結局來年の二三月頃には議會は解散され、四五月頃に總選擧が行はれる順序となると思はれる。併し總選擧の時期が何時になるとしても、それが假令明後年になるとしても、普通選擧に依る總選擧に於ける各政黨の立場及び當然總選擧のもたらす結果に就いての豫想は重大なる意味がある。

普通選擧に伴ふ政界の分野に於ける大なる變動を豫期する者もあるが、實際に於いては大した變動は期待せられないと思ふ。議員の數に多少の增減があつたり、顏觸れに變化を生ずることはあるであらうが、大體に於て既成政黨は現狀を維持することが出來るであらう。從來の如き金力や地位に代るに手腕や見識のある人物が新たに議會に送られることになるであらうが、併し顏觸に變化がある丈けで全體としての既成政黨は其擁する數に於いて現在と大差があるまい。それは一面に於いて今日多くの人人の注目を惹いて居る勞働農民黨が總選擧の結果一擧にして有力な政黨となることとの出來ないことを語るものである。總選擧の結果勞農黨は確かに幾人かの代議士を議會に送るであらうことは期待されるが、それも全國から八九人、多くて十五六人もあれば大成功と見てよい。それは今日迄に行はれた市會議員の選擧の結果を見ても分るのであつて、濱松市及び北海道五ケ處に於いては無產階級の代表者は餘り多く當選して居ない。即ち濱松市に於いては四人、北海道は各一人づゝ當選して居るが、室蘭では落選した。併しこれは決して怪むべきことではなく、勞働農民黨が一躍して大勢力となることが出來ないのは其處に十分の理由がある。其第一の理由としては未だ無產階級それ自身の意識が確立して居ないことである。換言すれば世人の無產階級に對する觀念は、大體に於いて無產階級を勞働者と農民に限定し、他に無產階級、有產階級の孰れにも附かぬ中產階級と稱する中間的階級を認めて居る者が多い。併し從來の如き政治的に見て有產階級とか無產階級とか云ふ如き漠然とした考方からでなく、今日の社會問題の上から見て此兩者は初めて明瞭な色彩が現れるのである。社會問題の中心は生活問題であるが、其點から見れば一方に生活の安定を得て居る者、一方に生活の安定を得て居ない者といふ風に考へねばならぬ。今日の總ゆる問題は生活の不安定から出發するのであつて、其處に種々の社會問題が生れる。誰もが生活が安定を得て居れば、其處に社會問題もなければ、社會政策もない筈である。然らば生活の安定、不安定の意味は何であるかといふに、それは財產の收入に依つて衣食する人はそれを失ひさへしなければ生活の安定を得て居ると云はれ得るのであつて、病氣や死に依つても妻子が困らないやうに株券の利子とか、地代、小作料等の收入があつて斯くの如く生活の安定を得て居る者は有產階級であるが、一方に於いて勤勞に依つて收入を得て居る者は、今日の生活には困らぬが病氣や死に依つて絕えず生活の不安に脅かされて居るのであつて、斯くの如き生活は不安定な生活であるが、それが無產階級の生活である。社會問題の上から見れば此兩者の區別は明瞭に

して曖昧な點がない。然らば有產階級と無產階級の人口的割合はどうであるかといふに、それは無產階級が人口の九割五分に對して、有產階級は單に五分である。此意味が明かになつて來ればそれは政治上に於ける政黨の勢力の消長に非常な影響を及ぼすことになる。無產政黨に有權者の九割五分が屬することになれば既成政黨は其數の上に於いて最早其存在を認められなくなるのは當然である。社會問題の上からいへば中產階級とか俸給生活者、知識階級とかいふ者はない筈である。其或者は有產者に屬する場合もあるが、前の說明に依ると國民の大多數は無產者と認めなければならない。實業に從事する者でも、商業に從事する者でも、少數の有產者はあるが、商業家などでは大多數の小資商などは皆無產階級に屬する者であり、工業家に於いても同樣である。此點に關する意識が有權者の間に確立せられ、有權者が無產階級と有產階級の陣營に分れゝば、其處に初めて政界の大變動が起り、無產政黨は忽ち議會に絕對多數を占めることになるであらう。然るに現在に於いては未だ此意識が甚だ不明瞭である。此度の市會議員の選擧には殆んどさういふ意識が現れて居ない。のみならず此度の選擧に於いても、舊制度に依る選擧に於いても、日本人は階級から自己の代表者を出さうとする考がない。商業家は商業家階級から、工業家は工業家階級から、俸給生活者は同じ階級から自己の代表者を選ぶことを知らない。これでは有產階級、無產階級の意識が未だ確立せられないのは寧ろ當然である。玆に於いて有權者はもう一度自己の立場を反省する必要があるが、彼等に明瞭な階級意識を自覺せしめるためには、現實の確實なる認識が必要である。封建時代に於いては治者と被治者の兩階級に分れ、大名と武士の階級が、其數に於いては四十萬人位が階級的に日本人を支配し、農工商の階級が被治者であつた。治者は人口の五分、後の九割五分が被治者であつた。斯かる場合何か問題が起つた場合には農工商の三階級は士族階級に對抗するはつきりした意識が起るのは當然である。今日の社會でも有產階級、無產階級に分れて前者が後者を支配して居る。此場合知識階級、中間階級は昔の支配者たる士族ではなく、被治者たる農工階級である。有權者が自己の立場を認識し、其處に明瞭な階級意識が確立せられた曉には、無產階級の將來は其勢力が增大することは火を見るよりも明かである。無產階級の意識が未だ確立せられて居ない現在に於いて、既成政黨の現狀維持の許される理由が存する。

第二の理由は無產政黨は既成政黨に比して創立の日が猶淺い爲めに、未だ將來に對する見込が立たない點に在る。金持が貧乏人の兒に學者を出す場合に、どの兒が偉くなるといふとか分

つて居る場合には誰れでも學說を出すが、見込の立たない兒に對しては躊躇するのと同じく、勞農黨の將來に對する見込が立たないことが、殊に無産階級の意味が明瞭にされて居ない今日、無産階級とは單に勞働者や農民の階級であると考へて居る人達は、其階級から自己の代表者が出ることを好まぬといふやうな事情も手傳つて、勞農黨に多くの投票が集ることを期待出來ぬ。又一面に於いて日本人には支那人と同じく事大思想があつて、支那人が戰爭をやると勢の好い方に附くやうに、總選擧に於いても憲政會や政友會の如き大政黨に投票する傾向のあることも否めない。

第三の理由としては無産階級の內部に於ける闘爭である。勞働農民黨は今年の三月に生れたが、不幸にして其成長が遲く、健全なる發達を遂げてゐない。內部に於ける思想の衝突、それは右傾派と左傾派の反目に基くものであるが、此事情が勞農黨の發展を妨げて居るのである。現在では勞農黨の內部は大分左傾的色彩が濃厚で、右傾派は勞農黨に入らないことになつて居るが、此問題は總選擧迄に解決がつくことであらうが、何時迄も內紛が續くことは無産黨のためには不利である。同じ選擧區で右傾派と左傾派の候補者が立つことになれば既成政黨が漁夫の利を占めるに至ることは明かである。

斯くの如く考へ來れば第一回の普通選擧に於ける無産政黨の地位が比較的安全である理由が分る。

次に進んで來るべき總選擧後に於ける各政黨の地位はどうなるか、又どういふ態度をとらねばならぬか。將來に於ける既成政黨の地位は甚だ不安である。微弱なる勞農黨と雖も、總選擧に依つて只の十人でも代議士を議會に送ることが出來れば、これは既成政黨にとつて將來恐るべき敵となる。今日までは二大政黨が對立して總ての點に於いて優劣がなく、睨みあつたり、醜態を演じ合つたりして來たが、それで濟んでゐた。第一回の普選の時も前述の理由に依つて現狀を維持し得られるであらうが、將來は少數でも新分子が議會に入つて來る以上は、其處に比較研究が行はれることになる。從來は三政黨は老舖で暖簾も古く、此三軒の店が競爭をしてゐる間はそれでよかつたが、小さいけれども近處へ近代的な商店が現れ、品物も安く、店の裝飾も人目を惹くといふやうなものが出來ると老舖にとつては恐慌である。即ち其處に比較研究が生ずることが恐ろしいのである。然らば既成政黨は無産黨に對して如何なる點に於いて比較されるか。第一は其政策に就いてゞある。これは實行的のものであるから國民の當然比較研究の對象となるものである。既成政黨の揭ぐる政策は、大體に於いて毒にもならず藥にもな

い抽象的なもので、三黨ともに似たりよつたりのものである。然るに之れに反して無産黨の政策は一々具體的であり、甚だ明瞭である。それは約二十ケ條に亘り、政治、經濟、社會の三部門に分れて居る。其中一番注目を引くものは社會問題、生活問題に關聯したものである。近頃既成政黨も看板を塗り變へて社會政策をとり入れて居るが、それは到底無産黨の政策には及びもつかないのである。今玆に生活問題の綱目を一つの見本として擧げて見ることにする。

生活問題に對する政策

「戰死、廢兵、徵兵による本人並に家族の窮乏に對する國家扶養の實施」

「稅制の根本的改革、特に日用品の消費稅及關稅の撤廢と財産稅の高率累進賦課」

「最低賃金法の制定」

「失業、疾病、養老、災害保險制度の制定」

「冤罪並に不當拘束に對する國家の賠償」

「義務教育及職業教育期間に於ける一切の費用の國庫支辨」

「居住權の確立」

「耕作權の確立」

右の政策の一部を見ても、それは既成政黨にとつて大なる打擊であることを思はせる。既成政黨は老舖ではあるが特別に店に陳列するやうな品物もなく、あつても古色蒼然たるものばかりであるが、無産黨の飾窓には右のやうにいづれも新しい欲しいものばかりが陳列されて居る。それらを比較されることは確かに老舖の既成政黨にとつて恐慌であるに相違ない。無産黨の政策は第一回の總選擧に於ては有効でなくても、次第にそれが國民に了解されるやうになれば新店である無産黨も次第に繁盛に向ふことは疑ひない。第二に比較される點は選擧に對する態度であるが、これは主として選擧費の問題に係つて居る。無論普選に依る選擧方法に於いては選擧費用に制限を加へられて居るが、既成政黨は長い間の習慣に依つて、酒や煙草の止められない如くに選擧と云へば先づ第一に金で爭ふことを考へる。成るべく法に觸れないやうにしてこつそり金を使ふであらうが、秘密にしてもそれは有權者に次第に分るやうになる。然るに無産政黨は幸か不幸か選擧費の出處がない。金が無いことゝ從來悪い習慣に染まつて居ない二つの理由に依つて、金を使はないで選擧に臨むに相違ない。併し幾ら儉約しても多少の費用の要ることを無産政黨の人々も漠然と考へて居る者もあるが、金があつてもそれが腐敗の因であるから使はないとする態度が無産政黨の理想でなければならぬ。選擧に要する最少限度の金は止

おそ得ないとしても而もそれすら有權者の出すべき性質のものである。無産階級の代表者は財産がないのであるから、代議士となれば職業を止めなければならぬから生活費の必要上歳費三千圓には其儘手をつけず代議士の手に入るやうにしなければならぬ。それには候補者に金を使はせないことが必要である。此點に於ては無産政黨はなるべく金を使はぬやうに考へるであらう。斯くて既成政黨は金を使つて反つて世間から惡く思はれ、無産政黨は金を費はぬことによつて反對に信用を増加する。此れが比較研究の材料となる時に既成政黨は不利の立場に陥入る。第三は議會に於ける各政黨の態度に就いてゞある。政治上の問題に於いて最も不愉快な事は政黨が賤な問題を暴露し合ふことである。朴烈問題の如きは極めて愚劣なる問題であるが、其他以前に問題となつた、三百萬圓事件や機密費問題の如きは問題とはなるが、決して政治問題でない。政治問題は國民の生活に觸れたものでなければならぬ。今日の社會組織に於いては、あのやうな問題は必しも珍らしい事ではない。議會が開かれゝば又松島事件の如きが問題となるであらうが、さうなれば又お互にあばき合が始まるに相違ないが、元來あゝいふ問題が議會に持ち出されるといふことが根本的に間違であつて、議會に於いては國民の生活に觸れた問題だけが取扱はれなければならないのであるから此點、既成政黨はこれらの問題に觸れても、無産政黨は決して其例を學ぶものではない。議會で勢力を以て毆り合ふやうなことは想像し得られぬことであるが、少數黨なる無産政黨は勿論遠慮をすることであらう。又言論の妨害は無産政黨に依つて行はれることはあるまい。無論彌次の應酬の如きもこれを見ることがないであらう。或問題に就いては堂々と意見を主張するが、下らない問題には取合はぬ態度を無産政黨が常に執ることになれば、既成政黨は考慮しなければならない。議會に於ける一擧一動は恐く天下に現れる。新聞に依つて、速記錄に依つて、議會の如く廣告の効力の現れる處はない。其時は既に無産政黨と既成政黨との比較は著しい懸隔を生じることになる。斯くて無産政黨の公明なる態度が世に明かになれば、總選擧を重ねる毎に次第に其勢力を増大することは疑ひない處である。これを動機に議會の面目も亦一新されるに至るであらう。

既成政黨の煩悶其沒落的運命

麻生久

當とふんどし

來るべき議會の風雲急が傳へらるゝが、最初政友會が朴烈問題を携げて巧みに政府攻擊を始めたのは、其實來るべき議會を解散に導くためではなかつたのである。其腹は、皇室に關聯した此のつぴきならぬ問題を巧みに利用して、權兵衛內閣攻め落しの道行きを其儘に、若槻內閣に當てはめて、內閣乘取りの段取りと出掛けたのであるが、當てと何とやら、事實は鵜の嘴と喰ひ違つて、折角放つた第一矢は、のらりくらりの若槻首相に外されて、議會前の總辭職はどうやら不可能になつたらしい。勿論惡黨ぞろいの政友會の事であるから第二矢第三矢を必死に射かけて、遮二無二初志の貫徹に變身をやつさうが、併し之れは隻手幾匹かの鰌を捕へんとするに等しく一匹でさへぬらりくらりと逃げられるものを、數匹一緒では至難の事と思はれる。政友會は一方本黨を威嚇し、研究會を使嗾して、例の陰謀をたくらみ、政、本、研の提携成るなどと熾んにこけをどしの宣傳をやつてゐるが、これも、恐らく、あて褌の結果に陷るは必定と噂專ら。

又一方現內閣にして見れば、切角持つた寶物、さうむざ〳〵敵に渡す筈はない。事玆に至れば石に噛りついても騎虎の勢ひ振りを發揮して、止むを得ずんば我黨內閣の手で來議會を解散して普選第一の總選擧に臨まんとするは必定であると見るのは、この褌、あてと一緒にあたると見るは僻目か。

かう見來つても、どうせ政權欲しさの我利々々亡者共の事だから、今日如何に政友會大法螺を次き立てゝゐても、事態自己に不利の風向きとなれば、昨日の勢ひもぺちやんこになつて、尻のぬけた素人だましの口實に、寢返りを打たぬとも限らぬが、物事には又勢ひと云ふものがあつて、これも騎虎の勢ひ、乘りかかつた舟、打つた芝居にあべこべに引きづられて、今更手綱を引くに引かれず、帆をまくに由なく、否應なしに議會解散の破目に陷ると見るのは、ありさうな事ではないか。

かうなつて哀れを止めるは政友本黨であるか、うか〳〵政友

合の惡るの口車に乘せられて乘り出した前はてきれない、見す見す總選擧で兩方から斬り取り強盜されると知りつゝも今更引くに引かれぬ、しぎとなるは必定。

かく見來れば今議會の解散は先づ先づ十中九分九厘、あると見るが至當であらう。

煩悶泥試合の意義

近頃の流行に『政治の倫理化』と云ふお伽噺めいた本が大至廉金十錢なりにて賣り擴められてゐるが、其桃太郎式ヒーローはボーイスカウトの親方鼻眼鏡子爵。又先頃既成政黨革新の軍旗を、眞向に振りかざして勇ましい喇叭を吹きならしてゐた男がゐた。その名は曾ては憲政の神犬養木堂。だが、既成政黨革新の神は、とつくに共軍旗を機密費事件の親玉に賣りつけ、自分も既成政黨の一人となりすまし、革新される必要のある男となつてゐる。さてボーイスカウトの新ヒーロー先頃各既成政黨領首に色目を使つて政治倫理化の諒解を得たさうなが、十錢の倫理化轉賣代果して如何。

ボーイスカウトのヒーローに依つて、ブルジョア政治の倫理化が出來る位いなら、今頃人間の世の中はとつくにお釋迦様から救はれてゐる筈だ。

併しながら、今日の既成政黨の煩悶と泥合戰の由來には、單なる倫理化や革新運動位いでは片附かない深刻た煩悶がある。何故ならばその煩悶には革新位いでは解決のつかない自己の沒落的運命に對する深刻な煩悶がひそんでゐるからだ。

彼等が今日政權爭奪の爲には手段を選ばざる病的症狀を呈するに至つたのも畢竟するに此煩悶の外的な現れに外ならない。

今日の泥合戰や醜惡下劣な政權爭奪は一見既成政黨の政治家等が好んでやつてゐるやうに見えるけれ共、其實、そこには皮相の觀察を以てしては見る事の出來ない社會的原因があつて、彼等を驅つて今日の如き病的狀態に彼等を追ひやりつゝある。

其原因と云ふのは最近に於ける日本の社會の變化から來る必然の政治的變化である。現在の日本は將に政治的に一大轉換期に遭遇してゐる。政治の土台が根柢から變化し移動し來つた。換言するならば、日本の政治は最早、無産階級の勢力を無視しては之れを行ひ得ざるに至つたのである。普通選擧が實施さるゝに至つたのは此社會的政治的一大變化の實證である。

既成政黨の深刻なる煩悶は此新時代に直面して自己の死を直感せるものゝ煩悶である。彼等は新時代の潮に押されて、普通選擧を實施したのであるが、其實普通選擧そのものは彼等を死骸にして、埋葬すべき彼等の撲殺人墓堀人に外ならない。彼等は

今、其撲殺者と墓掘人を前にして、如何にせば其死をまぬかれて生き延るかに對する深刻なる煩悶にもだへつゝあるのである。

今後は最早、從來の憲政會、從來の政友會では生き得ない。彼等の或る者は看板の塗り替へを行つて無產階級のご機嫌を伺ひ僅かに此難關をきり拔けて生きのびんと欲してゐる。彼等の或る者は反動的勢力を利用して、國體の危機を叫ぶ事に依つて何等かの足場を保たんと欲してゐる。併しながら斯くの如き事に依つて毫も其不安はとり除かれない。彼等は依然として不安であり確信がない。其不安は焦燥を生むで彼等の氣持ちをいら立たせる。

彼等は凡夫の悲しさに、又其必然的な境遇から、此轉換期に立てる日本の社會を冷やかに觀察して、科學的に其對策を構じて安心を得るやうな事は出來ない。そして其煩悶と不安と焦燥との唯一の解決策として、政權に噛りつく事を選んでゐるのである。溺れんとする者が今沈み行く船のへりを奪ひあつてつかまりながら、なほ身の安全なる事を思ふ心理と同じやうに、彼等は政權さへ握つて居ればと考へてゐるのである。而も彼等の握らんとする其政權が沈み行く船と同じく、彼等の沒落と共に沒落し行く事には氣附かない。

其敵黨を傷くるためには手段を選ばざ相互の泥合戰。政權を爭奪するためには國家も皇室も顧みざる而も彼等は常に皇室國家に對する忠誠を口癖のやうにしてゐる……其手段。今日の政治界のあらゆる唾棄すべき醜態は、沒落せんとする既成政黨、既成政治家が自己の眼前に迫り來りつゝある沒落的運命に對する最後のもがきに外ならない。

併しながら彼等がもがけばもがく程其沒落は急速度を以て彼等の前に迫りつゝあるのである。政權を維持するために、又政權を奪取せんためにする彼等のもがきは最近、無產階級は云はずもがな一般國民に對して迄も如何なる感情と判斷とを抱かしめたであらうか。彼等に對する輕蔑絶望は殆んど決定的となり來つた。國民は新興勢力を以て日本の政治を根柢的に改造せんとする氣運は今全國に廣がりつゝあるのである。

無產政黨の出現と其意義

今日本には從來の政治的勢力とは全然別個な無關係な新勢力が普選の實現を機會にして嶄然擡頭しつゝある。それは取りも直さず無產階級の勢力であつて、その數に於ては從來のブルジヨア有權者の二倍半にあたる絶對多數を占めてゐる。此政治的新勢力は未だ政治的訓練と完全なる團結とを得てゐないけれ共既に政黨を組織して或ひは市町村府縣會の選擧に對しては將來に向つて絶大なる發展の潛勢力を示してゐる。而して既成政黨に對して其致命的打擊を與へつゝあるのは此政治的新興勢力と

之れを代表する無産政黨に外ならない。

無産政黨は、單に其外形的勢力に於て既成政黨に致命的打擊を與へつゝあるばかりではない。此政黨の含む性質は、政治の本質に對して從來のそれに致命的打擊を與へんとしてゐるのであつて、無産政黨出現の深刻なる意義は又そこに存してゐるのである。

從來の既成政黨は、憲政會、政友會、政友本黨等と分れてゐて、其外形は各自獨立せる政黨の形をなしてゐるけれ共、眞實の意味に於ては毫も分れなければならない程の主義政見の相違はないのであつて、眞の政黨と云ふよりも寧ろ私黨と云ふを至當とするのである。そこで彼等の從來の政權の爭奪は要するに私黨的爭ひに過ぎない。眞に主義政策を異にする政黨の政策上の爭ひではなかつた。かるが故に彼等が敵黨を倒さんとする場合には、各黨派の首領の人格を傷つくるか然らざれば、朴烈問題の如き特殊なる問題を利用して陰謀的に之れを行ひ來つたのである。既成政黨は畢竟するに何の思想的立場を有せず、確乎たる主義政策を有せざる私黨たるに過ぎなかつた。其離合集散は毫も主義政策に依つて行はれずして、個人的私黨の利害關係のみに依つて行はれたのである。憲政會の歴史、政友會の歴史悉く然りである。時に彼等が進歩的態度を持するも、それは黨それ自體の眞の思想主義政策から來るのではなくて、要するに其時政權を獲得するに都合がよければたゞこれを其場限りに利用するに過ぎなかつたのである。最近に於ける政友會の態度は彼等が如何に思想なき政權奴隷たるかを如實に示してゐる。大正九年に普選は國體に反すると稱した彼等が何時の間にか普選に贊成し、從來極端な保守的態度を持した彼等が貴族院改革をとなへたかと思へば昨今は又急に逆もどりして朴烈問題を以て極端な保守的態度を持してゐる。政友本黨が普選に反對的立場をとりつゝあるかと思へば今度は急轉して女子參政權に味方する如き口吻をもらすのである。

要するに、彼等は其時其場、若しもそれが政權をとるに役立つ事であるならば如何なるものをも利用し來つたのであつて、毫も何れが進歩何れが保守であるかの確然たる區別はなかつたのである。

併しながら無産政黨の出現は斯くの如き莫然たる政治界に、明かに一個の爆彈を投じて從來の私黨的政黨に根本的影響を與ふるに至るは必然である。

何故ならば、無産政黨は、從來の政黨と全然其意義を異にし、明かに階級的意義を以て階級の意思と感情と利害とを代表し、其意思と感情と利害とは政策の上に現はれ、其政策を以て政治に關與し來るからである。此意味に於て無産政黨の出現は從來の政治に對する一大爆彈であり、一大革命である。日本

の政治の革新と倫理化とは、犬養木堂の革新運動から生れず、ボーイスカウト子爵の政治の倫理化の、パンフレットから生れず、社會的一大事實として、新興無産階級の思想と意思と感情と利害とを其背にして生れ來つた無産政黨の爆彈的出現の中に生まるゝ必然性を有してゐるのである。

各政黨今後の變轉

今度の總選擧に於て、何れの政黨が外形的に多數を占めて、一時政權を掌握するに至るかはさして大なる問題ではない。無産政黨の出現に伴ふ深刻なる階級的意義は、遠からざる將來に於て既成政黨のそれ／＼に向ひ重要なる影響を及ぼし、政治の上に又既成政黨の上に根本的變化を與ふるは必然である。

日本の現狀を以てすれば、政黨は今後十年を出でざる將來に於て、大體に保守、自由、無産の三つに整理されて行くであらう。政友會が保守黨となるか、憲政會が自由黨となるか。或ひは既成政黨が漸次に一應瓦解して、全く新らしき形態の下に保守、自由の二黨が生れ之に無産黨が加はつて三黨對立の狀態に至るかは勿論疑問の存するところである。けれ共假令、憲政會、政友會と名は殘つてゐても、其内容は今日のそれとは全然異るに至るは自明の理であつて、其内容は、保守、自由、無産の三つに分れるであらう。

來年の春に行はれるであらう總選擧に於て無産黨は未だ充分の準備をとゝのへる事が出來ないからして、當選すべき代議士は十人を出でざる少數であらうけれ共、全國的に散在する無産黨の勢力は既成政黨の候補者に對して絕大なる威力と牽制とを示すに至るは勿論であつて、總選擧後、既成政黨の間に分解作用を起して內部より無産黨に投じ來る者なきを保しがたい。

何れにせよ。十年の後に於ては無産黨は議會の內部に於ても確乎たる勢力を占むるに至るべきは疑ひなき事である。

今回行はるべき總選擧をきつかけにして日本の政治には一大變革を來すであらう。そしてその時こそ政治は眞の政治らしき政治となり來るであらう。その時、ブルジョアとプロレタリアーの政治的鬪爭は白熱するとしても、それは寧ろ、社會の進化を促がすための必然的有意義なる鬪爭である。

新興分子の發達と組織へ

杉森孝次郎

政治日本の進歩的傾向に、この際、なんといつても、
子の發達と組織に依頼するほかない。

現內閣及びその與黨は、現存の既成的政治勢力のなかで、比較的に不良性をすくなく待つ。それはまた比較的に無知識でない方だ。組閣以來、治績のこれぞといふほどのものはなかつたが、すくなくとも形式上、普選はかれと共に記憶される因緣がある。そして、この一事情は、次期總選擧に際して、憲政會に自信を助成する一勢力だ。いな、すくなくとも、憲政會が今日に於てそれを豫想する際に、かれはその事情から、他の既成勢力殊に本黨が羨むことのできない魁闘を羨む。

世間乃至國民からいうても、憲政會內閣は、大企業と大革新には勿論缺けてゐたし、最初から一度たりともそんな期待をかけられもしなかつたが、もつと細かいところに於て、廉正、整理に、多少とも注意をあたひするだけの誠意と努力を示した事は否定されない。治安維持法事件のやうなものもあるが、大體に於て、既成勢力內の常識ある部分は先づもつて現內閣及び與黨にあると見られる。

解散が多少豫想されつつ現にあるが、現在の豫想原因として一般に見られてゐるものが、いかにも低、愚だ。しかし、こんな事情が解散事情とまで、どんなに曲がりなりにでも、發展し

せねばうそだ。國民全體の頭腦が低能に蠢、盲動してゐたにこそ、とてもつまらない事や、ばかげた事や、非理、背道事が、ともかくも社會的に羽翼を持ちうるのだ。

さすがに國民は、ためにするところある一部の既成勢力者やその緣邊及びそこらの部分者ほどに不良的、無識的に狂してはゐない。しかし、國民は、感ずべきことを感じ足らず、知るべきことを知り足らないで滿足してゐる。その虛に乘じて低惡、醜が飛んだ程度にまで發展する。

この狀態を救ふ方法としては、しかしながら、憲政會程度の、既成勢力圏內の新または進歩的分子の力では物に成らない。もつとはつきりと新興的な分子の發達と組織にそれは待つほかない。その新興分子は、多少象徵的に、無產、勞働、農、青年の世界だといふことができる。

日本を、政治的にも、眞に愛するものは、この際、希望と努力を、第一に、できるだけ純粹に新興的な分子、群れ、團體、階級に向けることを最も方法的だとする。

時評

政界昨今の問題

吉野作造

昨年の今頃 は「來るべき議會は解散になるだらうか如何」と云ふを政界の中心問題として居つた。今年はさうではない。人々は最早この儘で押して行けば必ず解散となるといふに一點の疑念を置かないやうだ。只果して解散を斷行するか又或は議會開會前に總辭職をせぬだらうかに多大の興味をかけて居る。政界策士の昨今の活動の實際に目標とする所も亦恐らくは此塲のところであらう。

昨年今頃の政界に於て最も強く人の注目を惹いたのは政友本黨の態度であつた。政友會は新に田中大將を首領に戴き犬養氏の一派を併合して在野黨としての堂々たる陣立を整へた。その勢力は實に與黨たる憲政會と相伯仲して居つた。故に其間に在て大勢を決する地位に在るものは實に政友本黨であつたのである。政友本黨にして若し少くとも政府攻擊の點に於て政友會と步調を一にせん乎、政府の一たまりもなく倒壞すべきは言をまたなかつた。幸にして彼は遂に政府を助けるの態度に出た。その玆に到るまでには固より多少の迂餘曲折を經ては居る。而して其間實に世人は政友本黨の態度に依て或は議會の解散を見ることあるべきを憂へたのであつた。

政友本黨の援助は政府に取て實は相當以上に重要なものであつた。それは單に下院に於て多數を制し得るのみではない、依て以て上院に於ける研究會とも聯携するの便あつたからである。研究會と政友本黨との密切なる關係に付ては今更云ふまでもない。而して政府は先づ研究會と通ずることに由て始めて本黨の好意を購ひ得たのだとさへ云ふ者もある。孰れにしても政府が下院に於て政友本黨の援助を求め上院に於て研究會の支持をかち得たのは、或る意味での大成功であつた。只之等の關係は、

表面與黨ではないから、全然政府の立策に盲從するわけには行かぬ。時々は義理にも之に楯つくことを必要とする場合もある。而して彼等の斯うした虚榮に阿ねる爲に政府がまた過分の犧牲を拂つたことも已むを得ずとせねばなるまい。要するに去年の政界はこれで以て兎も角も一時の小康を得たのであつた。

今年の政治季節　に於ける政界の主要話題は、前にも述べた如く、昨年とは違つて來た。それは政友本黨の態度が全然一變したからである。即ち彼は初秋以來頻りに反政府的聲明を繰り返して居る。之が政友會との多少の連絡を暗示するものなりや否やは明でないが、包括的に政府を信任せざるの態度をきめたことには疑なく、來るべき議會に於て政府側の遂に少數者の地位に落ちることだけは最早極めて明白だ。故にこの儘で押して行けば必ず解散になるにきまつてゐる。此點には一點の疑もない。只問題は、昨今野黨の人達は頻りに種々の問題を捉へては政府糺彈の巨彈を連發して居るが、それが旨く成功して政府を議會開會前に辭職せしめ得るや否の點である。野黨側は共に政府に向ひこれ〱の事實に責任を負うて速にその職を辭せよと云ふ。政府側は之に對して爭は議會で正々堂々とやらうと應酬する。互に土俵の上で揉み合つて居る形であるが、若し玆に何等か重要の因子ありてこの勝敗に多大の影響を與ふるものありとせば、それは研究會の態度である。研究會の態度如何に依ては、或は急に内閣の總辭職を餘儀なくせぬとも限らない。是れ昨今研究會の貴公子連の行動がしきりに世人注視の的となつて居る所以である。

政友本黨の態度　も研究會の態度のきまらぬ以上まだ本當にきまつたと云へまいと說く人がある。或はさうかも知れぬ。併し又逆に、政友本黨の態度がもう決つたのだから、研究會も何時までもあいまいな態度を續け得るものではなからうともいへよう。政友本黨の態度が研究會の去就をきめるのか、研究會が却て政友本黨を左右するのか、その邊の事情は私によく分らない。併し目下のところ政友本黨が研究會の態度如何に拘らず既に政府に對して斷然たる反對の決心を表明したことは事實である。

尤も政友本黨は去年でも自ら政府の與黨だとは云つてない。何處までも不偏不黨の獨立の立場をば形式上主張して居つた。而してこの形式上の獨立の立場と實際上の對政府友好關係とを調和せしむる爲に引援せられた口實は「政策本位」といふ言葉であつた。自分には獨立の主張がある。之と合ふものは援け、合はざるものは斥ける。專ら政策本位で進退するのだと主張したのだ。斯くして彼は政策上一致する所ありと稱して昨年來政

府を助けて來たのである。而してこれは政府と相結ぶに都合のいゝ言葉であつたが、又一轉して政府と離れ政友會などと新提携をひらくの口實にもなるものである。故に折角去年來使つて來た言葉だから今度も亦「政策本位」を繰り返して新しい立場を闡明したらよからうと思ふのに、先般床次總裁は不用意にも政策協定に入る前に我黨の大勢は既に決したなどと放言して居る。之を以て觀ても政友本黨の此際如何に硬化して居るかが想像せられ得よう。

斯く政友本黨の態度がきまつたとすれば、殘る所は研究會の態度如何のみである。

研究會の態度　は今日の政局にどうはたらくか。假りに研究會が政友本黨との從來の關係をも無視して現政府を支持するに決したとする。少くとも議會に於ける正面衝突の決着のつくまでは依然政府との從來の關係を絶たないことにきめたとする。然らば現內閣は、上院に於ては全然その據り所を喪へるものに非ず、下院に於ては若し解散の結果過半數を制し得る樣なこともあらば、兎に角政局を安定せしむる能力を有するものと許さねばならず、從て急いで其の地位を退かしむる理由はないと云ふことになる。之に反して若し研究會が今日既に政府との直接の關係を絶たん乎、その表面の口實の何であれ、政府はもはや上院に於ける確乎たる恒久的支持を失つたことになる。下院には既に政本兩黨の提携が政府に對抗して多數を擁して居る。斯くて上下兩院に於て既に政府はその支持を喪つた。政局安定の能力ありや否やはもはや問題でないと云ふことにならう。解散後或は下院に多數を制することなしとも限らぬが、併しその事の著しく不確なる場合は、解散まで引ッ張らず潔く其地位を棄てて餘計な迷惑を國家に掛けぬがいゝと云ふ理窟も出る。斯くして議會開會前に總辭職せよとの要求は愈々各方面に高く叫ばるるに至るのである。

斯くの如く政府の近き將來に於ける進退は一に研究會の態度如何に係はると謂ていゝ。この一文の發表になる頃は或はこの邊の事情が何れにか落ち着くと思ふが、どう決着のつくにしろ、そが主として研究會の態度に依て定まるものたるべきは疑を容れぬと思ふのである。

研究會には硬軟兩派ありと云はれて居る。硬派は一日も早く現政府と絶ちその總辭職を餘儀なくして政友會等と共に次期の內閣を取らんとするもので、軟派は急いで現政府と絶縁するの輕擧を避け少くとも解散の日までは現狀を續けんとするものである。要するに研究會は政友本黨と不可離の關係に在ることは疑ない。只獨り立ちの出來ぬ政友本黨をして誰れと連携して天

下を取らしむべきかの問題に關して、政友會に近づくべしとするものと憲政會を可とするものとの二派に分るるのである。政友會の分裂以前のことを思ひ合はすれば、研究會中に政友會系とも云ふべきものの少らざるは怪むに足らず、而も若槻首相の努力に依て昨今漸く俄に袂を憲政會と分ち難しとするものの輩出したことも認めねばならぬ。この兩派の權衡が結局いづれに落ちつくやが政界今日の運命の定る所なのである。

此時に當て次の樣な下馬評を試みる者がある。研究會は來るべき總選擧に對し朝野兩黨の何れがより豐富なる物質的準備を有するやに依て其の態度をきめると。研究會がつねに下院の多數黨と提携し來りしの歴史に照し、今日のあいまいなる態度は總選擧後に於ける形勢の豫想し難い爲だと難ずるのであらうが、孰れにしても研究會がこの際自家の現在並に將來に於ける立場の保持に汲々として、眞に大局高處よりの國士的打算を示さないのは私の大に遺憾とする所である。下院諸黨派間の政爭の愚劣なるは固より云ふまでもない。せめて貴族院の有識階級[redacted]緒になつて無用の政爭を煽り有害な影響を顧みぬとは、洵に淺ましきことの限りではないか。

何故內閣の倒壞を急ぐか　一つには來るべき總選擧を自派の手でやりたいからであり、又一つには何時までも現內閣を存續せしめては憲政會の勢力は增大するばかりだからであらう。政府の與黨が平時に於ける黨勢擴張に於て又總選擧に於ける懸引に於て多少野黨よりも便宜を得ることは避け難い。併しその便宜を得るの程度が格別に大なること、殊にそが常に無條件に然るの事實ありとせば、吾人は既に其間に何等か政治的罪惡の存在することを想像せずには居れぬ。之等の點も既に屢々他の機會に於て說いたことであるから詳しく述べぬ。要するに我國に於ては、政爭が公平に行はれ、その結果としての勝者に政權が歸し、國民の道德的支持の續く間はその地位を保ち得るといふのではない。何かの拍子で政權を得たものは、その地位を利用して益々强くなり、選擧でも何でも自家の都合のいゝ樣に之を導くことが出來るのである。昔佛蘭西では、初代ナポレオンも三世ナポレオンもやつたことだが、兵士を以て議會を[illegible]ため豫め議員を買收し又意に從はざる者には拘束を加へ、用意萬端整つた上で自分を皇帝に選ばせたものだ。斯んなやり方は今[redacted]によく見る。而も地位に依てこ地位を得たと揚言する點は同一である。今日の日本はマサカ斯くまでは甚しくない。且つ昨今は段々樣子も變つて來て居るらしくもある。併し近き過去の經驗は明白に「選擧は時の政府次

第一なることを語つて居るではないか。同じ努力は野黨ならば四割與黨ならば六割の收獲があるとよく人はいふが、其上更に與黨には敵の四割を削いで味方の六割を加ふるを得べき幾多の方法が備つて居る。故に何事をおいても早く天下を取らなくては駄目だ。天下を取る爲の口實たる「民望」などは天下を取つてから徐ろに取り繕ふことにする。是が非でも天下は早く取らなければならぬ。そこで相手を陥れ得る適當の手段あらば何事でも遠慮には及ばぬことになるのだ。何時までも野黨に埋れて居てはどんなに善い事をしても到底浮ぶ瀬がないからである。

日本では選擧を支配するものは個々の場合に在ては政治家であり、大局に在ては政府である。西洋では之に反して個々に在ても大局に在ても常に共に之を支配するものは民衆だけである。民衆の良心が支配するのだから、その結果につき政治家に丸で見當がつかない。政府にも固より全然豫想が出來ぬ。選擧の結果がどうなるか分らぬとすれば、無理に天下を奪取するに急いだ所が何にもならぬではないか。否却て之が民心を失ふ動因にならぬとも限らない。さうなると内閣の倒壞はもはや目標にはならぬ。民心が去れば内閣は自然に倒れるからである。故に何よりも必要なことは寧ろその民心を得ることでなければならぬ。斯くして彼國政客の最大關心事は誠意を以て民心に奉仕する事の外にはない。之でこそ政治は文明世界の一現象と云ひ得るなれ。日本の様なのは外貌のみを文明にして精神は要するに戰國時代の切取功名に外ならぬものと謂ふべきである。

大問題の製造 といふ特異の現象に對しても此際一瞥を與へておくの必要がある。政府を政治上の失態を理由として責めるのなら、議會で論難すればいゝ。議會の開會に先ち無理往生に自滅させようと云ふには、何がな之に適當する大問題を作らなければならぬ。問題があつて已むなく政府を責めるのではないからである。斯くて我國では從來よくいろ〳〵の問題が政客に依て製造されたものだ。元來政治家が或る目的を達する爲に强て問題を作出せるの例は早くから西洋にもある。佛國第二共和政がルイ・ブランを國外に亡命せしめた有名な事件などはその最も著名なものであらう。併し如何に公共的必要があつたとはいへ、斯かる陰謀は政治の公明正大を傷くるものとして、最も識者の排斥する所である。從て西洋には斯んな陰險惡辣な作爲はさう再々行はれたのではない。斯う考へて來ると、今なほ這般の情誼の公然跋扈する我國政界の低級なるには、今更ながら情けなく感ぜずには居られない。而して此事から間接に蒙る社會の道德的損害の如何に大なるかを思ふとき、之を知つてやつたことでないからとて、輕々に看過すべき問題でもない様に

思ふ。

大問題の製造は内閣倒壊の目的を達するに何が一番早道かの穿鑿から始まる。即ち第一段として問題の捜索があるわけだ。さて昨今かづき廻されて居るものに朴烈問題がある。之が前記の目的を達するに適當なものか如何は問題だが、一旦取り上げた問題だといふ所から、一層之に重大事たるの外貌を添へんとてか、今度は二人の看守を買收して虚實取り交ぜの聲明書を出させたりなどする。斯うなると、假令その聲明には些の僞りなしとしても、事件其ものとしては既に立派な製造ではないか。其他數へ上げれば外にも例は澤山ある。要するに問題の製造は我國の政界に於て決して珍らしい現象ではない。大問題の解決を求められて政界に波瀾の起るは致し方がないが、政海に波瀾を起さんとして、製造せられたる問題を突きつけられるのは、考へて見れば國民に取つて誠に迷惑千萬の話だ。是れ畢竟未だ政治が國民のものとなつて居ず、國民が却て政治家のものとなつて居るからでないか。

瀆職問題と國體問題

とがよく振り廻さるるといふことも前述ぶる結果として觀れば亦怪むに足らぬ。折角大問題を製造しても、政府がビクともせず國民も一向共鳴しないとあつては何にもならぬ。政策の得失を爭ふのでは遂に水掛論に了らざるを得ない。一擧に政府を窮地に陥れ得る問題としては疑もなく瀆職問題と國體問題とが一番い丶。加藤高明氏に對する珍品問題、田中政友會總裁に對する機密費事件は有耶無耶に終つたけれども、シーメンス事件の如きは遂に内閣倒壊の目的を達したではないか。この種の問題を提げて嚴格な批判を加ふるは政界廓清の爲に固より必要のことだ。只その動機の不純なると調査の不精密なるとの結果、徒らに人身攻撃の狂劇に終る恐あるを注意せねばならぬ。前議會の所謂泥仕合の醜悪なる場面の如き此種の弊害の最も著しきものであつた。若し夫れ國體問題――皇室問題をも含む――を政爭に引援するの當否に至ては世既に定論がある。之等の問題に關し政府者に直に何等か重大の失態あらば一日もその在職を許す可らざるは論を待たない。併し普通の同胞間に於てすら、同胞を裏切るの非違を以て互に相疑ふは決して其儘に看過して可なる事柄ではない。況んや政府の公人に對してをや。而して之等の事項を政爭に引援するは、一見その目的を達するの最捷徑たるに疑なきも、輕々しく之を敢てするの如何に有害な影響を及ぼすかは、よく〱心得て置くの必要がある。之に就ては私に別にまた少しく議論があるがこれは他日の機會に讓ることにしよう。

右傾左傾の辯

小學兒童盟休問題に關する諸家の意見　雜誌「啓明」十月號に本問題に關する諸名家六十八氏の意見が載つて居る。啓明會の發した問題は斯うだ。『小作爭議に關聯した小學兒童の同盟休校が近頃頻々として行はれる。これは決して輕々に看過すべき問題ではない。若しも小作爭議の手段として小學兒童を盟休せしむることありとしたならば、それは果して是か非か』。依之觀之啓明會の發題が一般論として「小作爭議の手段としての盟休の是否」如何を問ふものたるは明だ。中に過般の新潟縣木崎村の同盟休學を念頭に置きその事情已むを得ざるを辯護したのもあるやうだが、之は暫く論外としよう。木崎村のを前例としてその後所謂盟休が盛に小作爭議の手段として行はれて居るや否やは知らぬが、少くとも今後頻々として行はるべきを豫想するは必しも失當であるまい。故に此際一般論としてその是否を攻究するは頗る時宜に適した企と謂はなければならない。

さて上記六十八氏の意見を讀んで私の頭に殘つた印象を個條書きにすれば大樣次の如くである。

(一)小作爭議の手段としての盟休を無條件に可とした人は僅々數名に過ぎない。其理由とする所は次の二點にある。曰く爭議を有利に導き得ること。曰く階級意識を兒童の腦中に覺醒すると云ふ教育的効果があること。

(二)特別の無産者學校を設備するとの條件の下に盟休を可とせる人も數名ある。現在の學校がブルジョア臭味の多いのには滿足は出來ない。そんな學校へ行く必要は勿論ない。が、併し休んで只遊ばしても置けぬから別に教育の設備をしなくてはならぬと云ふのである（始めから無産者の爲の特別の學校があるのなら盟休の問題の起る餘地はない。玆に云ふのはさうした設備の元來なかつた場合を指すのである）。

(三)盟休を理論上いゝとは云はぬ、併し事情已むを得ずしてやる場合あるを許さねばならぬと說く者も十名足らずあつた。いゝとは云はぬが絕對にわるいと斷言するを欲せぬのである。此種の論者は爭議を有利に導くと云ふ盟休の實際的効果に付ても概して疑を抱いて居るやうだ。効果の有無に拘らずこの手段に出づべく餘儀なくされたと云ふ窮迫の事情に同情したいといふのであらう。

盟休を可とするものは條件附なると否らさるとを合せて十數名あり、事情已むを得ずと同情する者を之に加へても總計二十餘名に過ぎぬ。他の四十餘名（事情已むを得ずとする者も理に於ては反對の論者なるが故に之をも加ふると五十餘名になる）は齊しく之を不可とする論者である。而してその論據には色々あるが、爭議を有利に導くや否の實益の見地に立つものは極めて尠く、多くは階級意識を兒童の腦中に印するのがいけないと云ふに一致して居るやうだ。肯定論者の取て以て是とする所の根據が、恰度その儘否定論の根據となつて居るのが注目に値する。

階級意識覺醒の是非

一方は階級意識を鑄りつけるからいけないと云ひ、他方は鑄りつけるからいゝのだと云ふ。茲に我我は先づ根本的に相反する二樣の教育觀あることを注意せねばならぬ。

但し之を階級對立の社會的事實の認否若くは階級鬪爭の實際的必要の當否に關する見解の相違と觀てはいけまい。今日の社會組織に於て有產無產の階級が各々相容れざる利害關係を以て對立して居ること、而して兩者の對立に依て蒙る社會的禍害は兩者の鬪爭に依て始めて能く取り除かれ得るものなることは、最早何人も疑はぬ所だらう。此程度の階級觀は、如何なる根本的立場を取る者でも、苟くも當面の社會的禍害を除去せんと志す限り、必ず承認せなければならぬ所のものである。故に例へば階級意識を覺醒する爲に大人をストライキにでも捲き込むといふ事件なら固より問題は起らなかつたらう。所が頑是なき無垢の兒童を小作爭議の犧牲たらしむると云ふので爰に始めて異論が起つたのである。そこで問題は一體兒童に階級意識を起さすのがいゝか惡いかと云ふに轉ずるのだが、この事は亦斯う云ふ意味にも解釋され得る。眼前の社會的事實又は實際の必要といふが如き相對的條件より抽象した「人生」そのものにも、階級の對立を恒久的に認めねばならぬものかどうかと。

兒童を盟休に誘ふを非とする論者の立場は恐らく斯ういふのであらう。兒童は先づ「人」として教育せられなければならぬ。今日の學校がブルジョア階級の色彩に毒せられ過ぎて居る點に多大の不滿を感ずるその同じ立場は、亦吾人をして兒童が純プロレタリアート意識の前提の下に教育されることにも反對せしめねばならぬと。即ち彼等は「人生」の本質を又はその最高の目標を階級を超越したところにおく。現實の「人生」は何れを取つて見たツて階級の衣を着てゐないものはない。而も之を永遠の姿と見ず、肝腎の教育に於ては努めてその衣に條件せられざらんとするのである。斯の立場が正しいかどうかは姑く別

論として・所謂盟休を非とする人達の立場を根本までつき詰めて穿鑿すれば、右の如き人生觀を奉ずるの結果なることは疑なく、而してこの種類に屬する論者は之を意識するとせざるとに論なく其數は案外に多く、「改明」誌上に意見を發表した人に付て見るに實に總數の三分の二を超えて居るのである。

　之に對立する盟休贊成論者の立場は從て亦極めて明了だ。人間は徹頭徹尾階級の所産である。階級を離れて人生はない。而して今日の學校はプロレタリアートに取ては正に敵方の經營維持する所に係り、此處に學ぶのでは無産者として當然受くべき教養を受け得ざるのみならず、却て有産者のみに必要なる教養を無理に強請さるるの恐れがある。之に依て無産者本來の生命のどれだけ傷はるるか分らない。故にこんな學校には行かない方がいゝと主張するのである。無産者の子弟の爲に特殊の學校を建てよとは誰しも一致して唱ふる所であるがそれの出來るまでは在來の學校を利用していゝとは、少くとも此派の人々の肯んずる所ではない。有るは無きに優るといふのではなく、有るは無きに劣るといふが此派の立場である。ブルジョア學校に行つて純眞なる稚き魂の毒せらるるよりも、寧ろ休校した方が得策だといふわけである。而して斯うした議論の基く所は、要するに「人生」を以て徹頭徹頭階級に依存すると觀るからである。この立場の唯物的人生觀と密切の關係に在ることはまた尋詳しく言ふまでもなからう

左傾右傾の岐れ目　最近我國の社會運動を云々するもの動もすれば左傾右傾の分立を說く。左傾右傾の對立は西洋にもある。而して實際社會に於て何を以て左傾とし何を以て右傾とするやは甚だ明瞭でない。多くは外部的の標識を以てこの區別を立つるが故に、時としては更に極左極右の項目を立て又は中間派を認むることなどもあつて甚だ混雜を極めて居る。詰襟の菜葉服を着たのが左傾で羅紗の背廣に正式のネクタイでも着けたのは右傾だとするは滑稽のやうで、而もこの種の評價は案外に世間に多い。それでも何となく世間には同じ社會運動でも右傾なら危險少なく左傾を以て大に警戒を要すと信ずる傾向が著しい。何に依て斯く信ぜらるるやは識者に於て少しく攻究するの必要はないか。而してそれこれと機械的のけぢめは立て難しとするも、靜かに社會言動の傾向を察するとき、吾人は其間また一種の解釋を與ふることは強ち不可能でもない樣に思ふ。

　極端な國粹主義を右傾派と云ふなら凡ゆる社會運動はみな左傾派と呼んでいゝ。併し私は國粹主義は勿論、社會改良主義も乃至は勞資協調主義も今はみな論題の外に除いておく。之等の主義には――その主義と必然的の關係なき手段方法は別として――始めから危險の有無などは問題とならぬからである。そこで私はこゝには社會組織の根本的改造を要求する諸主張と

この主張に基く諸運動とのみを問題とする。而して之れだけに限つても猶ほ其間に左傾右傾の別を爲すものがあるのだが、若し之を許し得べしとするなら、一體その根本の岐れ目は何處に在るのか。之を私は考へて見たいと思ふのである。

ついでに云つて置くが、數年前までは社會組織の根本的改造などを說くものは十把一トからげに悉く官憲から危險視されたものであつた。單純なる主張既に然り。況んやその實行をや。這の同じ目的を有する主張運動でも其間許し得べきものと許し難き危險なものとあると、區別を立てて考ふる樣になつたのは、實は最近のことである。それ丈けは時勢に促された一つの進歩と云つてい〵。只その區別の立つ基礎の何たるかはまだ明了に認識されてゐない。例へば腹部に痛みのあるのは事實だが之れが胃に故障のある爲か腸に故障のある爲かはまだ本人に判らないと云つた風の有樣である。而して之が適當の診斷は醫者の研究にまかすより外はない。

或る人は右の區別を私有財産の否認を主張すると否との相違だと說いた。治安維持法はこの診斷に基いて書かれた時弊救匡の一處方箋に外ならぬが、之れが實に飛んでもない藪醫者の誤診なることは世既に定評がある。又或る人は無政府主義を說く否との相違だと云ふ。併し今日何處にも眞面目に文字通りの無政府主義を說く人はない。人性の無限の發達を信じ、之を自由の境地に置けば獨り手になくてならぬものを發展せしめ得るのだと、それの可能性を信ずる者は、一時多少の疾患あるに狼狽して無用苛察の取締を加ふる官憲の態度には、恐らく極力反對するだらう。この立場も誇張さるれば政治否認論と誣らるるの危險はあるが、無政府主義の彈壓に藉口して人性の自由發展を傷ふことは斷じて許さるべきではない。いづれにしてもこの第二の診斷も急所を云ひ當てて居ないことは明である。

其外數へ上げれば外にまだ澤山論ずべきことはある。煩しいから一切之を省略に附して、直に私の考を述べて見よう。私の觀る所では、所謂右傾左傾の根本の岐れ目は專ら「人性」の觀方如何に在るのではないかと思ふ。「人性」を根本的に階級に——物質的環境に——依存すると觀るか如何に依て分れるのではあるまいか。尤も階級に依存せぬとする觀方を取る者でも、絕對に物質的環境の影響を認めぬといふのではない。之を大に認めればこそ社會組織の改造を必要とするのである。たゞ社會組織に根本的な改造を加へた丈けでそれで能事了れりとするか如何が問題だといふのである。規道の上に障礙物があつて汽車が動けない。そこでその障礙物を取り除ける。之を取り除けさへすれば汽車は獨り手に動くとするは唯物的人生觀の立場であり、之を取り除くを先決の急務とし而も汽車の動くや否やは別問題で、汽車と規道との間には本質的關係はないといふが理

想的人生觀の立場である。障碍物の取り除けを急務とする點は兩者同一だ。それと同樣に社會組織の根本的改造を主張するに異論はないが、只違ふのは之に附する評價如何の點である。唯物主義者は之に第一義的の意義を附する。之れにさへ成功すればいゝのである。故に之を達する爲には手段を擇ばない。手段の選擇に迷うて目的の達成に多少の斷絶を來すはそれ丈けでも一の大なる惡だとする。理想主義者は之に反して之に附するに第二義的の價値を以てする。社會組織の如何は畢竟本質的生命の發展を可能ならしめる條件に過ぎない。故にその改造の仕方の爲にその本然の生命を傷けてはならぬ。即ち手段は目的に依て制限せられなければならぬのである。目前の急に應ずることのみを考へて後に目的の達成を妨ぐる樣なことがあつてはいけない。腹の痛みを止めさへすればいゝのだとすれば、モルヒネを呑んでもよからうが、モルヒネを呑んで之に中毒するの後害を恐るべしとすれば、少し位腹の痛いは我慢せねばなるまい。腹の痛みをとめさへすればいゝのではないからである。人生萬般の事物につき、人生の觀方の異同に依て實際的言動の如何に岐るるかは、多言を要せずして明であらう。

然らばこの觀方の相違は何故に危險の有無を分つの標準となるか。之は前述せる所に依ても明なるが如く、手段の選擇に關する用意に大なる影響を與うるからである。手段を擇ばず目的の達成に突進するを危險とする所以に至ては改めて說くまでもなからう。

非常對策を常習視する考方

私はこれ迄屢々いろ〱の機會に於て封建的教育方針の排斥といふことを說いた（近刊拙著「問題と解決」參照）。その故は封建制度はもと、戰時狀態を以て世の常の姿となすものであり、從てこの非常の要求に應ずるを以て一切恒久的施設の基礎となし、教育方針の如き亦みな此處から割出さるるを以てゞある。之と同じ樣なことは社會運動に就ても云へぬだらうか。戰時に在て煩瑣なる道德的言動は往々宋襄の仁として嘲笑さるることがある。今日の社會運動家がその執る所の手段方法につき理想主義的制限を加へんとする者あるに對して亦一樣に侮蔑の嘲笑を向けるのは抑も何の爲であるか。最近我國に於て右傾左傾兩派の反目暗闘が可なり險惡になり進みつゝある。それには固より他にいろ〱理由もあらうが、主としては以上の點にその根本原因を探るべきものではなからうか。

手段を擇ばずと云ふ考は昔からあつた。併しそれが只思想として好事の讀書子の吻頭に上るのみの間は大して實社會の問題にはならない。尤も之は何時までも丸で實行を見なかつたと云ふのではない。就中社會的鬪爭に於て、強者が金城鐵壁の堅壘に據つて頑強に弱者の手足を抑へつけると云ふ樣な場合には、

事實弱者は手段を擇ぶに遑なかつたのである。十九世紀の初頭南部歐洲に於ては、專制的墺太利の强大な壓力に對抗して、民間に暗殺の陰謀をたくらむ秘密結社は盛に勃興した。同じ樣な不詳の現象が十九世紀の後半まで露西亞にも行はれたことは人の知る所である。當時の識者は固より理に於て之を是認はしなかつた。只止むを得ず斯くならざるを得ざりし此勢には、多大の同情を寄せたのであつた。而して之等の秘密陰謀に關係せる者が傲然としてその敢行を自負したのでなかつたことは特に注意しておくの必要がある。その惡いことは萬々承知しつゝ而もその兇暴を辭せなかつたのである故に手段そのものに憎むべきものがあつても、之を敢てせる者の内面的懊惱に對しては、誰しも無限の同情を寄せざるを得なかつたのである。さればこそ世人は斯の現象を境遇の所産とさへ云つたのであつた。必然の理に基いて起るのではない。强者階級の頑迷を極めること又社會がその頑迷を許すことが、その唯一の原因だからである。今度の小學兒童盟休事件に付ても、現に斯う云ふ見地から之を咎むるに忍びずと說く者も尠くはない。併し何處までも理論上之を是認するのでないことは明である。

所がこの點に關し社會運動に在ては特殊の考方が發達した。今日の社會に於ける資本と勞働との對抗は――有產無產兩階級の對抗は――戰國時代に於ける群雄割據にも比すべきものである。彼等の間には道による相互の親睦と云ふものはあり得ない。根本的に利害相反するものなるが故に、我れ彼れを斃さずんば彼れ我れを斃すに至るべきや疑ない。この爭を花々しく戰つて終局の勝利を得る爲に我々が如何なる手段を取るべきかでは、問はずして明であらうと。所謂絕對的階級鬪爭主義が之である。獨り斯うした根本理論ばかりではない。更に進んで一層見事た發達を爲したものはその「戰術」である。こゝに私は絕對的階級鬪爭主義者の所謂「戰術」の細目につき說明するの煩を避ける。之も大事な問題だから別の機會に論述を試みよう。昨今我國でも、この「戰術」の講明が社會問題研究家の大半の主要問題たることを一言するに止めておく。

さてこの「戰術」は主として何處で發達したかといへば云ふまでもなく露西亞である。その主なる發育地が露西亞であると云ふ丈けで、賢明なる讀者はその性質の如何なるものかにつき直に首肯せらるゝ所があらう。戰前に於ける露西亞の社會狀態を知る者に取て、此處に發達したる社會改革家の「戰術」の露骨な非常政策たることには一點の疑もなからうと思ふ。露西亞の樣な國に於ては、資本主義の堅壘を陷るゝに手段なんどを選擇しては居れぬのである。今日謂ふ所の「戰術」は成る程露西亞に於ては必要不可缺ものであつたらう。

封建時代の敎育方針が必しも開明の今日に踏襲す可らざるが

如く、露西亞に成功した「戰術」が他の國の社會運動にも其儘適用すべきものなりやは一つの疑問である。單に革命遂行の目的だけから云へば、この「戰術」の無上の良法たるは疑ない。故に他の國のことは知らぬが、之に依るの外に致し方がないから露西亞でこの方法を取つたと云ふのなら、一應の理窟はつく。が、露西亞で之がうまく成功したから、他國も之にまねて速に露西亞の如くなるべきだといふのには、俄に同意することは出來ぬ。併し之は理想主義的人生觀を取ての上の話だ。人生觀の根本基礎が變れば、手段方法に付ての議論も自ら變つて來るのは當然である。

唯物的人生觀を取れば、人性は階級以上に超越するものではなく、階級間の鬪爭に妥協の途は絕對にあり得ない。故に社會的鬪爭を正に戰時非常狀態に比すべきものとするは獨り露西亞に限るのではないと云ふことになる。所謂非常狀態が凡ての國に於ける常の姿なのである。然にも拘らず、さうでない樣に思せせるのは是れブルジョワ教育が多年巧に我々を迷はした結果に外ならぬ。我々は一日も早くこの迷夢から醒め、階級意識を鋭敏にし、あらゆる手段を執て一日も早く利害相反する强敵を屈らなければならぬ。斯くて彼等に取て所謂「戰術」は絕對的價値を有するものとなる。封建時代の教育が實際に於て文學を武道の附隨たらしめた如く、今日の社會運動に於て唯物的傾向の主張は今や亦僅かに思想を以て戰術の附隨たらしめんとして居る。こゝに此種の社會運動が理論上からも又實際上からも嚴格に批判せらるべき理由があるのである。

結論　以上論述する所に依て、右傾左傾を分つべき標準は特殊の人生觀並にその上に立つ特異の戰術に在るといふ趣旨は明了となつたらう。社會組織の根本的改造だの、私有財產制度の改廢だのと云ふことは問題でない。勿論現在の制度に依て特に惠まれて居る階級は、その利己的立場より、或は力を極めて凡ゆる改革に反對するかも知れぬ。反對の口實として意外なことを言ひ出すこともあるべきをも想像し得る。而して此種の爲にする所ある論說に雷同して、世間には改革そのものを危險視するの議論も頗る多い。この事は前にも述べた。併し實際のところは眞に斯處に危險があるのではない。不合理と識て之を改めざるのが却て危險なのではないか。無理に改革を阻止した結果如何なる不祥事を釀出せしめたかは、歴史が既に之を明證して居る。故に速に危險を遁れんとせば、寧ろ適當なる改革を怠らぬ工夫が肝要だ。もし其外になほ戒むべきもゝありとせば、そはたゞ改革の方法に付てでなければならぬ。即ち改革の目的を與する手段として特異の戰術を採用するや否やが問題になる。而してこの「戰術」は亦特殊の人生觀に基する限りに於て整然たる一系統を成すものであるが、之を總括して危險思想と目すべきやは別論として、之れの採否が今日の社會運動を截然に一派

分けて居ることは疑ない。漫然として右傾左傾と云へば、現實に阿ねつたのが前者で飽くまで理義に忠實なのが後者だと云ふ風にも聞えるが、其實後者の方が特殊の國狀に基いて起つたものたるを知らねばならぬ。孰れにしても之は目前の便宜から起つた分派とのみ云ふことは出來ない。もツと深い處に觀點を下ろしてその利害得失を愼重に攻究するを要する問題だと思ふ。

小題雜感

研究會の態度

來るべき議會の解散を免れずと觀て、研究會出身の大臣政務官連（參與官をも含む）の間に辭表提出の相談があると噂する。醫者が匙を投げそうなのを見て取り、病夫を棄てて薄情な女房の逃げ出すと云ふ形である。元來が病人に取てさまで頼み甲斐のありそうな代物ではないが、同じ内閣に責任を連帶しながら解散になりそうだと聞いて俄に狼狽するのは、公人の出所進退として許し難い醜態である。

議會の解散につき研究會として何も政府と責任を共にするの必要はない。そこで、同會出身の閣僚並に政務官に其辭職を要求するの聲が會内に高いと云ふ。併し研究會は先きに彼等の就任を以て個人の資格なりと辯じ、以て世間の批難を防いだではないか。個人の資格といふ理由で就任に干渉しなかつたのが本旨なら、今更辭職を要求する義理はない筈だ。前の聲明は僞であると白狀するのなら問題は自ら別である。

個人の資格だと云ふ聲明を取り消し改めて會の代表であつた白と狀したとする。會の代表なるが故に辭職させると云ふのなら、從來政府を援助し連帶して天下に責任を負うたる彼今俄に之を解かざる可らざるに至つた理由を先づ公表しなくてはなるまい。理由を示さずしてたゞ責任だけを遁れようといふのは餘りに蟲がよ過ぎる。

景氣のいゝ間は一所にやる、景氣の怪しくなつた以上何時までも腐れ緣に繋がりたくないと云ふのが本當の腹なら、元々入閣就官せなければよかつたのだ。貴族院議員は下院の政黨者流とは違ふと仰しやる。盲目的に甲に黨し乙に敵するといふ譯には固より行くまいが、藝者の旦那取りではあるまいし、景氣のいゝとこへだけチョイ〳〵顏を出すといふのでも困るではないか。

或は曰く、貴族院は著しく主義政策を異にせざる限り時の政

府を助けて二三の策略を遂行させるのを任務とすると。よろしい。併し之だ時の政府に割り込まなくては出來ぬ仕事ではない。割り込む以上は之に伴ふ特殊の責任を負擔するの覺悟あるを要する。その時々の政府を助けるのが任務だからとて、政府の變りそうになる每に逸早くさッさと逃げ出すのは、餘り賞めた態度ではない。

貴族院の人達は現政府を助けるといふ。俺達が助けねば政府が出來ぬと眞に心から信じて居るのなら愛嬌だ。下院のどの政黨だつて見渡したところ、貴族院の誰れ彼れを拔擢せずしては內閣の作れぬといふ程貧弱なものは一つもない。現に下院の政黨者流は、上院の人の眞の助力を必要として某々を拔いたのではない、二三の地位を投げ與ふることに依て彼等の一味を操縱し得べきを信じたからだと云ふて居る。

研究會の本領が必しも如何なる內閣にも割り込まうと云ふに非るとを明にせんとせば、この際何とか別の方法がありそうなものだ。今の樣な見え透いた小策を弄するのは、研究會自身の目前の信用の上からも面白くない。況んや世間一般は貴族院の諸派に對し大局高所よりの政治監督を期待して居るに於てをや。

學生檢擧事件餘談

此間久しく病床にある舊友を訪ねたら、學生檢擧事件を報じた新聞を手にしつゝ、彼はいたく昂奮して「民衆の自由に對する官憲の壓迫」を憤慨してゐた。本件の必しも單なる「自由彈壓」と觀る可らざる趣意は本誌の前號にも述べたが、世間には此種の事件が起ると一概に斯く憤る人も多いと見える。而して一方には斯う云ふ盲目的憤慨家を巧に利用して所謂自由擁護同盟なんど云ふものを作り、以て官憲に對する一大示威運動たらしめんと企むものも少くはない。花柳病豫防の美名の下に女郎屋の手先になるまいとすると、世間を渡るにも中々骨が折れる。

官憲はまた學生の社會運動といへば直に神經を尖らし何も彼もやかましく取締らうとする。從て取締らるる者が期せずして共同防禦線を張り、遂に官憲の策動に對しては彼我を辨別するの遑もなく一應は無條件に反對するに至るも怪むに足らない。從て輕卒なる青年學生の同情者」は動もすれば凡ての官權的取締に對して直に反感を唆られるのである。先輩友人の斯うした態度が青年學生に取て決して好ましきものに非ることは申すまでもない。何となれば彼等は先輩友人の同情といへば無條件に自分達に加擔するものと考ふるに慣れ、爲に善き忠言に依て自己を反省するの機會を我から失ふの恐れあるからである。

× × × ×

先月號の雜誌に發表した私の學生檢擧事件に關する評論に對し、二三の青年學生から種々の詰問を受けた。詰ひ方には色々

あるが要するに餘りに學生側に同情がないと云ふに歸する。眞に同情がないか否かは丁寧に讀めば分る筈だ。官憲を辯護する積りのないことだけは何人にも明了だらう。只或は青年學生諸君のひそかに期待したらんが如く、盲目的に彼等の立場を完全無缺と賞讃しなかつたことは事實だ。私の云ふことに事實の誤解があるといふのなら謹で教を聽きもしよう。徹頭徹尾よしと賞めて呉れぬと怒られては迷惑だ。私は職業的辯護人ではない。又對校競技に見るが如き狂熱的野次應援者でもない。

眞に眞理を愛する者は、忍んで人の批評に傾聽するの雅量を失つてはならぬ。

× × × ×

自分に確乎たる信念のない者は、「自分はよい事をしたのだ」といふ妄想を作つて之でやつと安心する。過去に不善をなしひそかに自責の念に堪へざる者に於て殊に然りとする。而してその妄想を作る爲に取る方法に就てはいろ〳〵ある。凡人の最も多く念とするは他人の評判だ。他から良い事をした、良い人だと云はれさへすればいゝとする。金持の慈善事業などは、中に名聞の欲に出でざるもあらうが、多くは皆この類ではないか。年寄りの佛いぢりの如き亦これに屬すと觀てよからう。

老人にこの通弊あるは恕すべしとして、教養ある青年學生に往々亦この醜態を見るのは、私の常に遺憾とする所である。彼等に取つて最も大切なことは、自分の立場を眞によいものにすることである。自分の立場をよしと認めらるることではない。況んや自分の立場をよしと認めさすことでは斷じてない。

× × × ×

學生の社會運動を危險だと云ふ人がある。研究はいゝ實行はいかぬと云ふの理屈なきは、前號にも詳しく說いた。不都合とさるるのは單なる實行ではない。外にある。

官憲の眼からすれば、共產主義的理想の實現方法に關する共同研究が既に法律違反である。この法條に觸るる限り、彼等學生の檢擧され所罰せらるるは氣の毒だが致し方がない。

治安維持法を惡法と觀る立場の者に取つては、該法に牴觸したと云ふ事だけでは之を實質的に危險だと斷定することは出來ない。然らばこの立場を取る者から觀て危險の有無を判定すべき標準は抑も何か。此事に付いては別項の論文に於て多少詳しく私の所見を述べた。今後學生自身の反省の問題として又學校當局の部內取締の問題として深刻なる攻究を要するは蓋しこの點の闡明であらう。

左傾右傾の名目に拘泥せず、青年學生自身がまた進んでこの方面の反省愼慮を遂げられんことは、私の切に希望する所である。

嚴密な意味の偶然は、歷史の上には有り得ない。言ひかへると、歷史に於ては、いかなる現象と雖も、由つて來るところの理由を持つてゐるのだ。たゞ淺薄皮相の觀察のみ、たとへば、グスタフ・アドルフの體が、リユツエンの戰線にあらはれると同時に、彈丸に打ぬかれた事實をもつて、偶然と言ふのだ。然しその彈丸の彈道は、グスタフ・アドルフの存在と共に、二つながら必然的に、また因果的に決定せられる。一は因果の法則によつて決定せられ、一は個別の因果に從つて決定せられるのだ。かくて歷史の上の偶然は、自然的因果と個別的因果との交叉する點にあるので、從つて因果系統の交叉點にまた存在することゝなる。似て非なる偶然が歷史に於ては主役をつとめることは、世界の運命がクレオパトラの鼻の具合に關係したといふ古來の見方などが其一例であらう。が、精細に觀るに、歷史に於て、特殊な場合の典型的なものが、他の特殊な場合の、いづれとも同じく、個別因果的に決定されることは當然の話だ。――

オツト・ブラウン――



由井正雪は松平信綱である

大泉黑石

いやはや、貴公の氣の早いのには、この伯父も、つく〴〵呆れ申した。加藤遠州、この老齡になるまで、あんなに冷汗を流したことはないよ。愚老も貴公の胸中がわからぬ譯ではない。いや、充分察してはゐるけれども、かりそめにも赤穗五萬三千石の城主とあらう人の振舞ひとは受取りかねる今日の、あの輕卒は何です？御用の糸口から、あの始末では、これから先が心配だ。さう思つて今晩は、愚老、篤と貴公へ話を持つて參つた。實は、今度の勅使接判に命ぜられた貴公の差圖役が吉良上野介といふから、特別の音物でも屆けて置いたか？貴家の家老安井彥右衛門に尋ねると、たゞ口上に行つただけといふ返事だ。成るほど苦勞をしないで育つた貴公には氣がつくまい。氣はついても餘り屑いことでないからようやるまい。だが、教へを受け

るのに、それだけの挨拶をしない法があるかといふ彼の流儀だから、また岡部美濃守を虐めたやうに、性わるの惡戯でもしなければいゝがと內々心配してゐると、昨日、彥右衛門が愚老のもとへ來ての話だが、明日から勅使の宿坊にあてられる增上寺普光院の疊表。あれは取替へねばなるまいと思ひますが、何うでせうか？吉良に伺ふと、何、少かの間だから、それには及ぶまい。しかし其邊は御自由に、といつたやうな心得かねる返答だから、念のために同役伊達左京亮の方の樣子を見ると、もうちやんと疊替へをすましてゐるので、驚いた貴公。一夜のうちに三百七十二枚の表を替へる騷ぎつたらなかつたさうだが、全體、何の恨みがあるかは知らん、伊達の方へは然るべき傳達をして置きながら、こつちへ向いては、ことさらの差圖違ひをする吉良の奴。慮外千萬といつたものだ。いや、そろ〳〵始まつたな。多方そんなことだらう？吉良の肚では、鼻藥を持つて來ない禮に、貴公へ、さうした手違ひをさせて置いて、吠え面かかせるつもりだ。まかり間違へば、身代の半分ぐらいは摺らせて見せる氣だらう？だが際どいところで巧く立ち廻つて、まあよかつたが、一杯はめそこなつた當外れの吉良の奴。いよいよ默つてゐる氣づかひはない。何かと貴公の手配りにケチをつけて、恥を搔かゝせる工夫をするだらう。さあ、さうなると貴公のことだから赫とした勢ひ、飛んだことにならぬとも限らぬ、と思ふと、棄て置くわけに行くまい。このほど風邪に罹り、手當をしてゐたので、いゝ鹽梅に御暇御免の屆けをすまし、强つて貴公の勤先へ出席したのだ。及ばずながら影身に添ふて樣子を見てゐると、勅使の案內について來た吉良上野介。普光院の疊をチラとかすめて狼狽の風だが、食へない奴。ニヤリと笑ひながら「さすがは分限者の內匠頭殿。一夜のうちに是だけの仕事が出來るとは違つたものです。世の中には金ほど便利な寶はありませんな。」と言つたのが、謎とも知らずに、たゞ嘲けられるとばかり。「御挨拶痛み入ります。」と無念顏の貴公だ。その場はそれで何事もなかつたが、今度は勅使饗應のお能となる、と、あの膳部を列べた廣間に貴公は墨繪の屛風を立てまはしてをつた。それに因緣をつけた吉良だ。「內匠頭殿は屛風に御不自由と見える。これは何だ。これだけの馳走に墨繪を立てる法があるか！」と扇でビシ〳〵屛風を叩きながら大聲で罵つたらう。思惑通り、おいでなすつたと思つたら、瞬間、貴公の血相が變つた。「いや、屛風ぐらいに事を欠く私ではありませんが、先頃御老中の內命に、奢りがましいことは一切無用にしろとありましたので、これを選んだのですから落度はない筈」だと脇差に手をかけて詰め寄つたらう。みんな膽を潰した。サア事

だ。と、屏風の蔭にゐた愚老は驚いた突差に聲をかけて、貴公に急用だ、速やかに來いと言つた。貴公はさも口惜しさうな顔つきで吉良の側を離れたが、あの時愚老が呼ばなかつたら、勢ひ斬つたかも知れない。いや實際衆座のなかで、あゝ罵倒されたら、誰だつて分別もなくならう、口惜しまぎれに斬りもするだらうよ。さういふ愚老も吉良には口惜しい目に遭つた覺えがあるのだ。貴公も御存じであらう。去年のこと。日光山に大猷院樣御遠忌の法會が營まれ、京都からは風早中納言卿、勅使として下向されるについて、役儀命ぜられた伊豫大洲の小身大名、即ちこの遠州だが、禁裡のお客に對する諸式作法の辨へなどは、もとよりないのだから、老中に問合せると、かういふことに精しい吉良の差圖を受けたらよからうといふ挨拶。彼の人物をよく知つてゐる愚老だ。奴の命令通りに動かなくちやならんのかと忌々しく思つたのは言ふまでもない。大體。幕府の高家といへば、月卿雲客に接する典儀でもなければ、とんと光りやうのない日蔭の役人だから、こんな時には此方の天下と無暗に威張るんだ。なかでも吉良と來た日には寄つつけないほど鼻息が荒いのだから、さぞかし高く止つて人を見くびるだらうと思つたが、どうも仕方がない。愚老は出來るだけ禮を厚うして、諸式萬端の段取りを尋ねに行くと、案の掟。事毎に無禮の言を吐いて、散々茶闘もしてくれないのだから、無念に堪えなかつたが、公用の手まへ喧嘩もならず、我慢に我慢して、どうか斯うか、役目をすましたが、奴、倍臣の田舍者と侮つて愚老を愚弄するのかと思つたら、さうでない。故典舊規に對する已れの熟達ぶりをひけらかすためには相手を選ばんのだ。丁度その折。狩衣を着てをられた風早中納言卿に向つて「法會の式に狩衣とは不都合だと阿部豐後守が申してをります。」と、吉良が言ふたものだ。中納言も變な氣色。使ひを阿部にやつた。「畏多くも禁裡仙洞參內の折さへ着用して苦しうない狩衣だ。江戶では不可いといふ法はなからう。」と詰つた。「思ひがけぬことを承はるが、私は武家ですから、堂上人のなさることに口を出すわけもないし、口を出した覺えもありません。誰がそんな挨拶を申したか、しかと調べて曲事申付けませう。暫くどうか御忍びを願ひたい。」と、豐後守のおどろいた返事。さては吉良の嘘かといふ譯だ。何のために自分と阿部のあいだに波瀾を起さうとするのか、とにかく不屆の奴と中納言も少なからぬ立腹だが、相手は四位の少將でも高の知れた旗本だし、法會の際でもあるので、曲事云々は沙汰止みにして貰ひたい、と、あべこべに豐後守を宥められたやうな始末。別に咎めもなかつたが、この公家に此の宥恕がなかつたら、奴、決して無事ではなかつたらう。

こんな奴だから、何も貴公に限つて馬鹿にするのではない、おきまりの病氣だ。中納言卿ではないが、相手にするだけの吉良ではないのだから、貴公はもとより、家來不憫家名大事と思つたら、この際暫く目をつぶり、あの老耄に何と罵られやうと我慢をしないことは、一時の怒りに、彼に對して、もしもの間違ひでも仕出かさうものなら、悔んでも追つつかないことになる。いや、なりかねぬ。なるやうに出來てゐる俗臣大名の立場だ。貴公に限らず、われ〳〵すべてが充分氣を附けならぬ點。この機會にそのわれ〳〵の、公儀に對する立場といふものが、いかに薄氷の上にあるよりも險呑であるか？貴公に篤と考へて貰ふ必要がある。心を落ちつけて、ゆつくりお聽きなさい。さればまあ考へて見なさい。關ケ原の役によつて、完全に築かれた封建の今の世に、われ〳〵大名は、戰捷將軍德川氏を盟主とする支配階級の列につらなつてはゐるけれども、いつ何時蹴落されるかわからないんだ。德川氏のあの脅迫的な態度は何うです。われ〳〵大名を取潰すためには、どんなに小さい機會をも見逃さない。どんなに惡辣な手段をも辭せない、といふ決意が毒々しいほど、はつきり見えるではないか。もつとも是は今始まつたことではない。關ケ原の役以來ずつとさうなんだ。貴公も御存じの筈。當時二百五十五萬七千石の德川氏を筆頭に、一萬石以上の大名が、二百十四人もをつた。祿高にすれば二千八百七十二萬三千二百石なんだが、あの戰ひに勝つて地位確立した家康公の論功行賞の結果、右の大名のうち二十六人の領土を奪ひ、百四十五萬千六百石を沒收して大阪へ乘り込むと、そこでまた五十七萬四千石の宇喜田秀家を眞つ先に、一萬石以上の大名九十四人を斷罪し、六百五十萬五千五百石を取り上げて、その三分の一を御自分の子の結城秀康公と、譜代新封の大名五十人に配あたへ、自家のまわりを鞏かする一方、この勢ひで毛利、上杉、佐竹、秋田の四大大名の祿を、半分に近いほど削り取り、蒲生秀行、池田輝政、福島正則のやうな外樣大名へ、三十萬四十萬と思ひ切りの加祿をしたが、德川氏御自身の懷は、それほど膨ますことは敢てしなかつた、といふのも德川氏の事業は、かうして基礎づいたが、何しろ戰後間もないので、人心收攬の上に於て、それに滿足しなければならなかつたらう。こゝに德川氏の秘策がひそんでゐたのだ。つまり外樣の豪族に、さう手厚く賞賜したのは、やがて彼等の舊領も合はせて捲き上げる下心から出たことなんだ。それは今言つたやうな蒲生、池田、福島の連中が一人のこらず、さま〴〵の難癖をつけられて、ほどなく沒落したのを見れば容易に頷けるだらう。德川氏は自家の安全を圖るために、外樣の大名は成るべく取潰

して、その跡には腹心の連枝や譜代の忠臣を据ゑ、事情のゆるすかぎり小さい貧乏藩ばかりを殖して、叛逆の出來ないやうに去勢することに努めた。それに最も都合のいゝ機會は、關ヶ原のやうな戰爭だが、徳川氏が政權を握つて以來天下泰平で何事もないから、別に消滅させる口實をつくらねばなるまい。現はれいでたのが、深刻苛厲を極めたる武家諸法度十三ヶ條その他の法令だ。これによつて、われ〳〵大名は養子を禁じられた。言ひ換へると、嗣子(しし)のない大名の自然消滅は計畫されたのだ。六十萬石の蒲生忠郷。五十七萬四千石の小早川秀秋。三十萬石の上杉綱勝。二十四萬石の京極と鳥井を育め、五十にあまる藩家は續々と亡びた。遺領分賜お取上げの名目で、大名の資格を失つた者は幾らあるか知れない。お次には謀反だ。六十五萬七千四百石の豐臣秀頼や古田重然の城が落ちたのは仕方がないとして、五萬石の大久保忠隣。十二萬石の里見忠義。十五萬石の本多正純・正勝や、五十二萬石の加藤忠廣などは、たゞ嫌疑を受けたばかりで、事の眞僞も明らかでないのに打倒されてしまつた。それから自殺だ。これは四萬石の坂崎直盛ひとりだが、亂心發狂と見なされて家名斷絶した五十二萬石の松平綱昌に松平定政を除いても悠に二十人もあるだらう。徳川氏にとつて御方便の怪しげなる政治的理由で除封減祿の憂目に遭つた者も、十萬石の堀田正信や一萬石の天野康景のほかに、やはり二十名を下るまい。福島正則。山口重政などは、公命に背かずにゐられないやうに仕向けて置いて廢絶と來たのだが、餘儀ない事情で公命を怠つたばかりに、喜多見重政や里見義英は幽所になつた。これから他人の罪に連坐して除かれたものに八萬石の石川康長外五六人の大名があるし、いはゆる御家騷動のために減祿除封の馬鹿を見たものなどは、愚老の記憶にあるだけでも、五十六萬石の最上義俊。四十二萬石の加藤明成。三十萬石の堀忠俊。二十六萬石の松平直矩。福島正頼。生駒高俊。筒井。脇坂。土方。伊達。京極などがゐる。それに失敗(しくじ)つた家來の尻まで背負はされて三萬石ふいにしたのが鳥居忠則。他人と口論したばかりで十二萬石棒に振つたのが富田信高だ。泣き面(つら)に蜂といひたいのが、殺された科(とが)で廢絶をくつた五萬石の松平忠賴。七萬三千六百石の永井尚長。一萬二千石の稻葉正休だ。公務の取扱ひよろしからず役儀罷免の上領土沒收になつたり減祿されたものに、大久保忠增。坂本重治。本多重周他に五六人もある。それはまだしも、取潰されるほど格段の落度もないのに、故あつてとか、將軍家の思召しに適はぬとか、不敬の科(とが)によつてといふやうな因縁をつけられ除かれた者も少なくない。六十七萬石の松平忠直。五十五萬石の松平忠良。四十五萬石の松平忠輝。十一

萬石の酒井忠美。四萬五千石の青山忠俊。二萬五千石の酒井重澄。一萬石の織田信重などがそれだ。よく〳〵口實のないときは、戰ひを挑んでまでも討伐せずにはゐないのだから、こいつは叩潰してやらうと睨んだが最後、遁しつこなしにやるのだ。日に月に年にやるのだ。行つて捲上げた領地をもつて、連枝譜代を取立て、旗本に扶持くれ、自家の懐を肥して來たのだ。關ケ原の役當時二百五十五萬七千石だつた德川氏が、かうして今では八百萬石に近い大勢力となつてゐるのを見たなら、姦計に引つかゝつて、大名の列から蹴落され滅亡した人のなかには、泉下の恨み永劫に盡きない向きもあるに違ひない。いや、たしかにあるとも。無くて叶うものか。この年齡になるまで、あちらこちらの外様大名が、さうした運命に陷つた前後の模様を見るにつけ、聞くにつけて、他人事ならぬ義憤をさへ感じてゐるくらゐだもの。その人の身になつたら、さぞかし無念のことだらうと思ふんだ。それも自分や自分の家に拘はりのない向は、事の眞相の保證が出來ないから、とやかく言ふのは見合はせるが、直接間接、自分に關係した悲劇の實例を擧げて見ると、先づ第一に、愚老が生れた寛永九年四月のことだ。老中大炊頭土井利勝が、將軍家光公の首尾を損じて閉門申しつかつた。噂によると、身上お取上げになるかも知れないといふのだ。

餘人は知らず。德川氏譜代の忠臣、幕府の柱石ともあらう人が、さうした嚴罰に處せられる按排では、餘程の失敗をやつたものいと見える。が、何分將軍家と老中のあひだの經緯だから知りやうがないので、ひそかに事の成行きを見てゐると、二月ばかり立つた或る日のこと。何方の使者とも知れぬ中間體の男。漂然として愚老の邸の門前にあらはれた。かと思ふと、あたりに目をくばりながら、忍びやかに入つて來て、小脇に持つた白木の文筥をポンと玄關に投げ棄るが早いか、逃げるやうに立ち去つた。樣子怪しいとばかり、武者窓から見てゐた家の者だ。呼びとめて名まへを訊かうと大急ぎで跡を追つかけたが、やがて姿を見失つて引返して來た。そこでその白木の文筥だが、何分とも得體の知れぬ奴に持ち込まれた代物だから、愚老の父へ取次いだものか何うか迷つてゐると、そこへ、ふう〳〵息を切らして駈け込んで來たのが、また先刻の奇妙な男なんだ。こいつ、恐縮に堪えぬ物腰で、ペコ〳〵お辭儀をしながら、「エ、まことに申し兼ねますが、その文筥を何卒お返し下さいませんか。とんだ御門違ひをいたして相濟まん次第です。」といつたやうな話なんだが、どうしたわけかしらん、そのとき横手の庭から、何も知らずに玄關の方へ出て行つた愚老の父の顏を見ると、奇妙な男は跳び上つて逃げたさうだ。呆氣にとられたのは父だつ

たが、委細を聞くと、いかさま迂闊な気がするので、文箱をあけて見た。中に折りたゝまれてゐたのは立派な封書だ。何と思ひますか？ほかでもない。われ〳〵外様大名の運命を暗示するために、奸猾なる幕府の外様大名絶滅策の犠牲になつた人々の列を擧げ、さういふ運命から遁れるにはたゞ今に於て幕府を顚覆するよりほかに道はない、といふところで、その顚覆の段取りを細々と認め、祖先代々の武功を誇り、光榮を感ずるほどのものは、進んで此擧に一味加擔するやうに勸告いたし候といふ文言。熱涙義血にあふるゝばかり、惻々として胸に迫る謀叛の廻狀なんだ。差出人は誰だかわからないけれども、あの閉門中の土井大炊頭と、駿河大納言の松平忠長と、肥後守の加藤忠廣の署名に判形が捺してあるから、この三人が陰謀の發頭人といふことだけは確かだ。思ひがけぬ事のおどろきに、愚老も思案に思案をかさねた。愚老はともかくも、蕃の父は呆然たるものだつたが、つら〳〵おもふに駿河大納言松平忠長は將軍家光公の弟なんだが、祿高五十五萬石に不足を列べ、驕縱不遜の行爲甚だしく家光公の怒りにふれて、上州高崎に蟄居させられてゐたのだ。肥後守の加藤忠廣は二代將軍秀忠薨去の折。ひそかに妻子を居城熊本へ追ひやつた。彼の妻は秀忠公の養女なんだ。さうして御大葬の式に參列させなかつたのが、公儀を蔑如した振舞ひといふことになつて、これも同じく閉門中だつたのだ。土井大炊頭は先頃の始末だらう？従つてこの三人が、幕府の處置に恨みを抱いてゐることは、容易に想像される。何しろ、もう斯うなると、蛇に見込まれた蛙も同然。助かる望みは更にない。早かれ晩かれ取潰されるに決つてゐるのだ。決つたものなら、こちらも天下に屈指の雄藩だ。金もあれば兵もあるし、大阪落城このかた、幕府の黠策にかゝつて滅亡した豪族の遺將や浪士が、所在に出沒して機を覗つてゐる折から、大名諸侯の向背も懸念せられるほどハツキリしてゐないし、徳川氏の政塗に歎らぬ外様も少くないのだから、この際、むなしく手を拱き、頭を垂れて最後の日の到來を待つの自滅に等しきよりは寧ろ進んで、かういふ一派一黨を味方に引入れ、家光公日光參詣の虛に乘じて不意に旗を擧げ、江戸城に逆襲を試みたならば、勝てないとも限らぬ。負けても先祖に申譯がある。思ひ殘すこともなからうではないか、と、落ちかけてゐる首を三つ寄せて密議に及んだのかも知れない。いや、實際さうもありさうなことなんだ。今までさういふ謀反心を誰も起さなかつたのが不思議なくらゐだ。件の廻狀には、此度將軍家日光參拜之虛に乘じて云々、とあつたさうだが、家光公には其月なかば日光へ參る豫定であつたさうな。ところで、さう考へて見ると、これは全く容易ならん話だ。何しろ先月までは徳川譜代

無二の忠臣で而も老中であり、昨日までは將軍同腹の弟である横勢家と、九州隨一の大大名とが、張本人となつて幕府に弓を引かうといふのだから、邊鄙の封土にウヅウヅしてゐる外樣連や、沒落大名の遺臣浪士などは、松火に集る魚さながら、風をのぞんで相呼應し、家光公が留守のまに江戸城を圍むとすれば大騷ぎだ。天下は忽ち不安恐怖に蔽はれ、人心は激しく動搖するに違ひない。が、しかし斯かる場合の用意に、地方の豪族や外樣の血を絞り肉を削いで來たのが幕府であるのだから、自家の周圍にも麾下にも、一糸紊れぬ歩調連絡をとつて、固く結束するには充分の餘裕をもつてゐる、と見なければなるまい。されば敵味方の勢力を比べて見ると、四分六分。戰ひは久しきにわたるかも知れないが、久しきにわたれば叛軍の力は弱るばかりで、江戸城は落ちない。革命は不成功といふ卦を立てる方が正しいやうだ。殘念ながら愚老の父はさう思つた。實は此の場かぎりの話だが、愚老の父なども、徳川氏に心服してはゐないのだから、右の企らみには少なからず共鳴するところもあつたさうだが、勝算の見込みのない相談には乘るわけにも行くまい。だから共廻狀は其まゝ握潰して置くつもりだつたが、わざ〳〵愚老の父に宛て持ち込まれたものだと猶更のこと、全くのお門違ひにしても、臼木の文呂が父の手によつて開かれたらうといふことは、あの奇妙な中間體の男が、さう思つてゐるに違ひない以上はだ。事露顯の曉。謀反の企てを知りながら、訴へもせずに隱してゐたといふことが、何かの拍子に幕府筋の耳に入らうもんなら事面倒だらう。何はサテ置き、油斷も隙もならぬ時世に、大事な傳家と思へば、即ち、恐れながらと訴へ出る次第にもならう。これが大きによかつたんだ、といふのは、丁度その臼木の文宮が、愚老の家へころげ込んだやうな寸法で、外樣といふ外樣の邸には、小身大身の差別なしに舞ひ込んでゐたらうではないか。しかもそれに接した連中がまた一樣に、後の祟りを恐れて、その筋へ密告に及んだもんだから、さあ大變。時の老中は酒井忠勝に永井尙政だつたが、周章狼狽、家光公へ屆出る、一方では三人の逆徒に繩打つて吟味にかゝる騷ぎだ。武運も早是迄と覺悟をしたか、土井大炊頭は逐一白狀に及んだが、駿河大納言と肥後守の兩人に到つては、ただ、ひたぶる蕪くばかりで、何と追究されても、知らぬ存ぜぬ、謀反の廻狀などは全くの僞造だと言ひ張るのだ。よろしい。そんなら今一つの證據を見せるが、よもや是は知らぬとは言ふまい。とあつて法廷に引出されたのが一人のお茶坊主。その蒼ざめた顏を見るなり肥後守はアツと言つた。それもその筈だ。聞いて成るほどと思つたが、このお茶坊主は肥後守近侍の、頗る珍らしい臆病者

で、こやつに色々恐ろしい話を聞かせると、蒼くなつて震えあがるんだ。その形が面白くて悦に入る。あまり悧巧でない豪傑に應はしい癖だが、ある日のこと、この豪傑が机に向ひセッセと物を書いてゐるところへ、お茶坊主が罷り出ると、あたふた筆を止めた。その様子が尋常ではないので、一體何を物してゐるのか、と怪しみ問ふたわけだ。俄かに容を改めた豪傑、他聞を憚るやうな聲で、何を言ひ出すかと思ふと、「これは非常に秘密なことで、實はまだ誰にも洩さずにゐたんだが、日ごろ心安く召仕ふお前だ。内々申し聞かせやう。必ず他言しないやうに頼む、どいふのは餘の儀でない。われら近日江戸城に向つて兵を繰り出し一合戦する心底。ほゞ準備も整つてゐるが、大將たるべき者一人不足なので。これさへ定つたら、今日明日にも旗を擧げやうといふ段取だ。丁度幸ひお前を見立てることに決めやうかと思つてゐたんだから、お前の身仕度一つで萬端の用意は出來るわけだが、この上は命を惜まず働いてくれ。成功すれば一廉の大名に取立てゝやるつもりだ。わかつたか？今認めてゐるのは旗擧げの通牒だ、」と大眞面目に威かしたもんだから、驚いたお茶坊主。「私のやうな者がどうして戦爭などへ出られませうか。そればかつかりは平に御容赦下さい。」と胴ぶるひしながら齒の根も合はぬ始末。これがお慰みで、こんな惡戯をするんだがら、ます／＼愉快になる豪傑だ。いきなり憤然として居直つたかと思ふと大喝一聲、「痴けたことを申す奴。われら一反命じたる儀は辭退まかりならん。仰せ畏つて合戦の當日まで何人にも口外無用のことゝ心得るがいゝ！」と呶りつけたさうだ。倉惶として家へ歸つたお茶坊主は、これが苦になつて三度の飯も咽喉へ通らないほど屈托の體だ。家の者も不審に思ふだらう。病氣ではないのか？と訊けば、さうでないと言ふ。では、肥後守様に叱られでもしたのか？と訊いて見れば、何の、叱られるどころか、大名にお取立て下さるやうな御意だといふ返事に、これは不思議と、いろ／＼責め問ふたらしい。お茶坊主も包み隠すことが出來ないで、事の始終を打ちあけたのだ。「あッはッは。馬鹿者めが又舁がれてゐる。お前のやうな男を一方の大將にして戦場へ召連れる酔興者が何處にあるんだ。肥後守様にしても、そんな謀反をなさる筈がないではないか。おきまりの惡戯だ。安心せい。」と腹を抱えて嗤はれて、やう／＼氣がつくと、忌々しくなつたお茶坊主だ。肥後守の邸へ伺つて、上、お聞き下さい。昨日はかういふわけで、家の者のお笑ひ草になりました。もうあんな惡戯は、どうか御勘辨にあづかりたい。と恨みの些かも列べたくなるだらう。さあ、そこらでもう止めて置けば、何事もなかつたらうに、いきなり血相を變へて、お

坊主を睨みつけた豪傑。くどすぎるよ。「こ、こ、これに直れ。痴け者め！この事ばかりは親兄弟にも口外いたすなと、あれほど固く申付けて置いたに洩らすとは不屆千萬。もはや容赦相成らん！」と物々しい權幕で脇差へ手をかける。スワ手討ちと來たのだから、二度びつくり。ワッと悲鳴をあげて逃げ出したお茶坊主。家へころげ込んで、この始末を兩親に告げたらう。いかさま眞實とは思はれぬ話だが、正しく手討ちにでもなりそこねたお茶坊主の様子だから、これには何か仔細もあることだらう。どのみち愚圖々々しては追手に捕まる、と子を想ふ親心の不憫さに、一家こぞつて逃げ仕度にかゝるところを、一つ棟に住まふ代官所の小者が怪しんで訊ねると、穩やかならぬ事の次第。棄てゝは置けないので、代官井上新左衞門の耳に入れた。代官は某老中の邸へ駈けつけた。そこに居合せたのが、老中の昵近者に五百石の小姓組番頭を勤める松平信綱といふ順序になるのだ――よろしいか？覺えて置きなさい。松平信綱だ――信綱と某老中は膝を圍みながら、代官の註進を聞き終ると、顏を見合つてニヤ／＼笑つたさうだ。それだけの話だが、わかりましたか？惡戲も迂闊には出來ない。つまりさうした事が前にあつたのだから、謀書事件の法廷に、お茶坊主を引き出されて、謀反の證據を確かに見ろと言はれた肥後守の狼狽もさることだらう。流石の豪傑も陳謝の言葉に詰つて恐入つた事實を見れば、かうなるともう、あれは冗談ですといふ譯にも行かず、言つたところで追つつくもんでもなしと觀じたか、命ぜられるままに池上本門寺へ籠居の身となつたが、親父の加藤清正が辛苦艱難して築いた五十二萬石の領地は、たゞお茶坊主を脅かして喜んだばかりに、かうして沒收されて了つたのだ。幕府の使者が本門寺に其旨を傳へに行くと、仰せ畏つた豪傑だ。何をするかと思ふと、親父の清正が虎を突つ殺した出來の鎗を持ち出して流々すごきながら、「いや上使殿！これを御覽なさい。この鎗は父清正が志津ケ嶽の役より、朝鮮の戰までも携へて高名いたし、徳川氏のためには關ケ原の時。大阪方の古朋輩とも引別れて西國で御味方いたし、激戰あまたに及んだが、たつた一度のおくれも取つた例はないのです。われら父より受づいで大阪の陣にも御供つかまつり、徳川氏に忠勤を盡したものだが、今かような仰せを蒙る上は、もはや斯んなものには用がない。」と言ひさま、本堂の石段に突出してポッキリと鋒先を折つて棄てたさうだ。何處までも肥後守らしい遣りかたと思つて、上使の役人も驚いたらう。それから熊本城を明渡すことになつて忠廣の方は兎がついたが、今度は駿河大納言の方だ。これも同じく謀書は僞造だと言ひ張るし、ほかには證據がないので、しばら

く高崎の蟄居で謹愼の上、追つて沙汰するといふことになつたが、その時なんだ、例の肥後守は熊本へ歸つても、どうせ素直に城を明渡す氣づかひはない。乾度反抗するだらう、といふことを、松平信綱が——先刻の信綱が駿河大納言に囁いた。といふのは、小姓組番頭になるまへの此人は家光公の近習だ。つまり家光公とも駿河大納言とも幼友達といふわけだが、どうしたものか、この兄弟に對する先代將軍や御臺所の愛情が偏頗で、兄の方は冷遇され、弟の方は鍾愛を專らにした。侍臣たちも行く行くは此方が將軍職をつぐだらう、と、弟にチヤホヤする。兄方の近習でありながら、この信綱もやつぱり共組だ。家光公。面白からう筈がない。兄弟の仲は非常にまづかつた。ところが先代將軍の薨去と一緒に、この位地が顚倒したのだからたまらない。或時、家光公の惡戯を咎めて頭を毆りつけた出羽守の森川重俊などは眞つ先に殉した。といふ報せに家光公が、よもや生きてはゐられまい、といふくらゐだから、弟組の狼狽は事の外に違ひない。今度は駿河大納言の方が面白くなからう。さうして疎隔に疎隔した兄弟の情は、年に月に險惡に傾き、この分では何うなるかと氣づかはれてゐたが、やがて甲遠信の三國の封祿を以て家光公の臣下に置かれた。これが不足だ。われ將軍の子弟なれば、かほどの國を領するとも何かあらん、と大層な氣色。外にあらわれて良からぬことばかり、公儀の耳に入つたので、到頭高崎へ押し込められて了つたが、家光公にとつては、思ふ壺であつたかも知れない。兄弟相敵視することのいよいよ露骨になつたその矢先に、今度の謀書事件と來たのだ。いかさま有りさうなことだから、引捕へて吟味にかけると、先刻いつたやうに、噓實のほどは知りかねるけれども、例の謀書は僞造だと頑張るので、他に然るべき證據のないかぎり處罪の法もない。然るべき證據は他に一つもなかつたのだ。然し乍ら、家光公との仲が右の通りの始末だから、ウンさうかと此儘赦される氣づかひはなからう？何とか理屈をつけて、この際、片づけて了はねばならぬといふ家光公の底意なんだから、その誅滅の手から遁れるためには、肥後守や土井大炊頭の類とグルではないことの積極的な確證を示さねばなるまい。それには一應公儀へ申上げて、肥後守討伐に赴くのが、たゞ一つの分別だらうから、さうしては何うかと、松平信綱が駿河大納言へ、暗に仄めかしたわけなんだ。何しろ先代秀忠公在世中は、ひそかに此方の肩を持つてゐた人だから、形勢一變、事此處に到るのを見ては、さすがに氣の毒と思つたんだらう。成る程。さうでもしなければ救はれる道はないと思つたに違ひない。この好意を快よく受けいれた駿河大納言は、さつそく、肥後守やその家臣等

が、熊本城に據つて叛逆を企てるやうな專らの風說だから、いくぶんでも同類の嫌疑をはらすために、自分を討手に向けてくれるやうにと、願書を認めて信綱に托し、彼の手から家光公へ差出してくれるやうに頼み置いて、高崎の蟄居へ歸ると、すぐさま藩士に命じて、旗幟を整へるやら、鐵砲の手入をするやら、やつと遠征の準備が出來上つたので、幕府の許可を待つてゐると、程なくやつて來たのは、肥後守討伐の允許を携へたる使者ではなくて、駿河大納言問罪の密使であつたのだ。お聞きなさい。あの謀書事件については、確たる證據がなかつたので、一と先づ幽閉地に謹愼を申し付けて、公儀の方では密かに證據探索の步を進めてゐたのだが、不幸にして今それを見つけた。即ち此の戰爭の仕度が、何より有力な謀反の證據ではたいか？といふのだ。かう事實を摑んだ以上は、斷じて赦すこと相成らん。大納言の罪は正に斬にあたるべきものだが、家光公としては、骨肉の親しみ忍びがたく、特別の情けをもつて、すみやかに自殺を命ずると來たらうではないか。問罪使は阿部對馬守長次だつたが、大納言とは直接に會はないで、彼の身柄を預つてゐる安藤右京進重長の許に來て、竊かに密旨を告げたので、右京進から大納言へ傳へられた。この意外の沙汰には二人とも驚かずにはゐられなかつたらう？もつとも公儀の許しを待たずに、戰爭の段取にかゝつたのは良くないかも知れないが、それにしても、事の次第は願書に認めて信綱の手から家光公へ差出したもので、こんな誤解を受ける筈はないのだから、右京進は不思議に思つて訊いたが、そんな話は丸で知らない。よしんば、さういふ願書を奉つたところで、肥後守は池上本門寺に籠居してゐる時に、もう熊本城は明渡して、今では出羽の庄內、酒井忠勝に預けられてゐるんだから、叛逆などを企てる力はない。だから御取上になる氣づかひもなからう、といふ問罪使の挨拶を聞くと、二の句が告げなかつた。右京進。つら〳〵按ずるに、肥後守の出羽配流は、公儀二三の老中――たとへば永井尙政・堀田正盛・酒井忠勝など――が內々計らつた仕事に違ひない。それも昨日今日のことらしい。それを討伐に行つては何うかとすゝめるくらゐだから、小姓組番頭の松平信綱も知らないのだ。況んや、この田舍にゐてわかる筈がない。さうして見ると、成るほど肥後守征伐なんか、餘計なことだから、願書の御取上げにならないのは尤もだが、全く無意味と見なされたものが、今度は一體どうしたわけで、謀書事件にかゝわつた叛逆の證據呼ばゝりをされるのか、頗る合點がゆかないので、右京進、さう反問すると、問罪使阿部長次の曰くだ。「さやう。たしかなことは存じませんが、私一個の思惑を申すなら

ば、大納言卿が擧兵の目的には裏と表がある。表には肥後守討伐と稱して、公儀を欺き、油斷をさせて置いて不意に叛旗をひるがへす計略に違ひない、と將軍家の方では考へられたのではないでせうか？西國へ下ると見せかけて、本能寺へ出しぬかうといつた例は幾らもあるし、また、大納言卿の是迄が是迄。時機が時機ですからね。何しろ公儀の許しを得ないうちに、かうして戰爭の準備をとゝのへて居られるのだから、實際さう視られても仕方がないではありませんか？」云々。馬鹿な眞似をしたものだと言はぬばかりの苦々しい顏つきだ。遣り切れない寃罪！いくら是迄でも、時機が時機でも、これは酷すぎる。かう何でも片ぱしから惡意に取つて、事を曲げた日には、どうにでも曲がるんだ。さう思つて大納言の幽居へ出掛けて行つた右京進、右の次第を述べると、短氣一徹の彼のことだから觀念も早い。もう運命の打ち勝ちがたいことに、自殺の覺悟を決めたものと見へて、はなはだ殘念だが、いくら辯解して見たところで助かりつこはないんだ。いさぎよく切腹するから、檢死のために阿部對島を連れて來いといふわけだが、「いや暫くお待ち下さい。私にもちと了見がございますから。」と、さう言ひ置いて邸へ取つて返すと、右京進は對島守長次に向つて改まつた調子だ。「阿部殿に申し上げますが、かういふ上命を蒙ることは、大納言卿をお預り申してゐる私の身にとつて、この上ない不仕合せです。監督不行屆については、どんなお咎でも甘んじてお受けいたします。で、上の仰せに逆ふこともなりませんので、大納言卿には、もはや覺悟を召しておられますから、上の御墨付を賜はりました上で、いかやうにも取計らひたいと存じます。」とやつた。假に何ういふ大失態があらうと、先代將軍薨去あつて未だ墓石もさだまらないのに、同胞へ死を迫るやうな殺生が、果して家光公の本心だらうかと訝かつたのだ。ことによると老中どもの細工ではないかしら？と疑つたのだ。右京進にもちと了見があると言つたのは、それだらう？「成るほど御尤もの仰せだが、實を申すと、この密旨は將軍家の御心から、阿部重次殿が承はつて、密々、私へ傳へられたのですから、別に御墨付を下さる必要がありません。かりそめにも執政の職に列なるほどの重次殿。いさゝかの間違ひのあらう筈がない。それでもお疑ひなさるか？」と對島守。頭から抑さへつけた。阿部重次殿といふのは、家光公の寵遇をうけてゐた岩槻の城主だが公の亡くなられたとき、堀田正盛や内田正信と一緒に殉死した老中だ。ところが、さう聞くとます／＼怪しくなるのが人情。ハヽアさうかと恐れ入つて引つ込めない右京進だ。「いや決して疑ふわけでありませんが、篤と考へて見ますと、大納言卿と將軍

とは御一腹の御兄弟ですから、一朝の御立腹に、さうしたことを仰せいだされましても、後々に到つて後悔あそばされないとは限りません。その節は貴殿も私も共々に不念の御沙汰を受けるにきまつてゐます。さあ、そこを考へると、なか〳〵容易には御受け申されんのです。一面から見ても、大納言卿は大御所秀忠の御子。國に於て貴といひ親といひ兩々相竝ぶものはないのですから、いま卿に冤罪、いや罪がありましても、尋常一般の罰例に倣ひ、世の常の人臣同斷にいたすべきものではなからうと存じます。たとひ執政職のお取次でありませうと、口傳に述べられるだけでは心もとなく、一度御墨付を拜見いたさぬことには領掌まかり難き旨、上使に參られたのが不祥の貴殿。御大儀ながら江戸へ御引返しの上、さやう御執成下さるやうにお願ひいたします。」とキツパリ言ひ切る。道理には勝てなかつた阿部對馬守だ。座を立つて澁々江戸へ戾つたらう。さあ是が老中どもの細工なら見よ、右京進にもちと了見がと、胸に一物あるべきところだが、氣の毒千萬。それから四日目。即十二月は寛永十年の六日。朝まだきに對馬守の早馬が空を飛ぶやうに、高崎城内へ駈け込み參つたらうではないか。右京進の邸へ入るや否や、對馬守は首にかけた一封を押し戴いて敬々しく手渡したので、取り敢へず畏まつて披見すれば、正しく家光公の直筆だ。もし

や。といふ疑念に懸けてゐた少かな望みは遂に絶えた。落膽のあまりに右京進は、この上使のまへも憚らず、ワツと聲をあげて男泣きに泣いたといふくらゐだから、大納言に會つて、事の次第は斯樣々々と告げる勇氣も、さすがにあるまい。たゞそれとなく知らせるつもりと見えた。蟄居所の護衛につけてある自家の侍どもに旨を含め、その庭に面する緣側から少しはなして、鹿垣を結びわたし、グルツと圍ませた。野外の莊園なら知らず。城内に鹿垣だ。斧槌の音に障子をあけて緣端へあらはれた駿河大納言も「何のために、さやうなものを作るのか？」と訝からずにゐないだらう。仕事を急ぐ侍の一人は畏まつて「下部。委しいことは存じませんが、江戸表からの御沙汰とか申します。」と、さう答へるのを聞くと、見る〳〵土のやうに變つた顏色の大納言「さうか」と一言つぶやいて、流れる額の汗を拭きながら、障子をピツタリ立て切り、奥の書院に引込んで、そこに媾いてゐる近侍の女房三人を下局に退け、女童二人だけ留め置いて、身のまわりの物や、つれ〴〵の慰みに手習ひの文反故などを長持に詰めさせ、中庭へ運び出して、自ら燒き棄てゝ了つたのだ。女房たちが側にゐては都合がわるいので遠ざけてやつたんだらう。さうして四邊が薄暗くなると、書院に灯を入れて、しめやかな光の下に、暖めさせた酒を一二杯手酌で傾げ

あと、傍らに侍つてゐる女童の一人には「もう少し酒を暖めて參れ。」と言ひつける。もう一人の女童には「肴を持つて參るやう」にと命ずる。かういふ風に追ひやられた彼女らは、やがて仕度をとゝのへて來たが、來た足で一歩、書院へ踏み入るや否や、只ならぬ驚きに打たれて、アッと悲鳴をあげる。さゝげ持つた酒肴の膳部はガラ／＼取り落す。おわかりかね？部屋の主は黑の葵の紋ちらしの白小袖にくるまりながら、疊の上に前のめり、ガックリと首を垂れて、突り伏してゐたのだ。白小袖の肩口から胸先へかけて膿く流れたるは血汐。ゆらめく燭影に照されてゐる半面を見れば、一たん深く咽喉を突き刺して前に押切つた斬口が頤の下までパクリと裂けてゐる。朱にそんだ差添の束を兩手にシカと握つたまゝ、こときれてゐた。享年二十八。「從二位權大納言松平忠長。日頃の狂疾重りて自殺を遂ぐ」云々。即ち發狂自殺といふことになつて五十五萬石の封祿は公收されて了つた。これで謀書事件の嫌疑者三人のうち、二人は片づいたが、さて、も一人の土井大炊頭利勝は何んな始末になつたか？先刻言つたやうに、すでにあの時、評定所――實は老中の邸――で嚴重な吟味の結果。例の謀書に記名捺印したことも遂一白狀したのだから、前の二大名と同罪の處分を受けるのは當然であると見ねばなるまい。ところが事實はさうでなかつた。

さあ、それだから、世の中のことは實際わからないのだ。かりそめにも是がだ、肥後守や駿河大納言とは違つて、罪狀歷然たる重大犯人に對する其筋の、適當なる處置といふならば、いやはや正氣のほども疑はずにはゐられないほど意外も意外！土井大炊頭には何の御咎め御構ひもない。ないばかりか、二大名の事落着すると間もなく、閉門中の彼は引きいだされて復職を命ぜられたのだ。意外だらう？いや、かうなると意外も、是より先へは行き得ないのだから、事件の成行きを見てゐた世間の人々は、上下こぞつて昏倒せんばかりに打ちおどろいたつて無理はないが、その愕きが靜まると、幕府の政治方針に多少通ずる向きの面々は、あちらでも此方でも、大炊頭の奇怪な處置について、いろ／＼噂合合つた。たとへば肥後守は豐臣恩顧の家柄だ。かういふ大々名を雄藩として其儘に置くのは、德川氏の家運長久の策でないから、折あらば取除くに如かずとあつて槍玉にあげたんだらう？つまり加藤家の滅亡はたゞ時間の問題であつて、どう藻掻いたところで早晩犧牲になるとは免れ得ないのだ。謀書の記名捺印が僞造であるにしろ、陰謀露顯に及んで僞造と號したにしろ、罪を雑織する材料には乏しくない。爪の垢ほど些細なことがありさへすれば、廓大誇張の術は老中の方寸にあるのだ。材料皆無の場合でも、口實は立ち處に揑出され得る。といふやうな說を成す者も

あつたが、その後間もなく。西國第一の要害たる肥後守の熊本城に、德川譜代の豐前小倉城主細川忠利が据えられたところを見ると、この推測も何うやら外れてはゐないやうだ。これは誰でも知つてゐるだらうと思ふが、これから先の肝腎な話に大切な關係があるから、ついでに申すならば、先刻も言つたやうに、德川氏は天下一統の大業に成功したが、諸侯の嚮背がまだわからないので、群雄駕御、封土按排の點、宜しきを得ないために、封豕長蛇の勢ひに出られた日には、折角の覇業が危くなるんだから、家康公以來、諸侯の親疎大小によつて、それ〴〵布置することに、計を盡して剩すところがないやうに努めたものだ。早い話が仙臺には伊達政宗がゐるだらう？德川氏には外樣だが、いつ何時妙な野心を起すか知れないと見た幕府の方では、伊豫松山城主の加藤左馬助嘉明に四十萬石くれて、會津若松へ持つて行つたのも一例だ。いざといふ時に其處で食ひ止めさせる段取りなんだが、その左馬助の一子明成と、仙臺の大將とが、營中でポツカリ出會したらう？「このたびは其許父子に會津を賜はつたさうだが、會津は奧州の鎭衞だ。其許父子を据えられたのは、この老耄をよく防げといふ仰せと見たが、老耄れてはゐても、其許などに、さう易々と防ぎ止められる政宗ではござらぬ。わつはつは」と仙臺。大口をあけて笑つたさうだ。同じく譜代の脇坂中務輔安政が特恩をもつて播州龍野に据えられたのも、井伊直孝が武州世田谷に封じられたのも、一は大阪に近い要路を、一は甲州にあたる方面を鎭衞させるためなのだ。何しろ封建の統制は猜疑と呑噬の間に成り立つたのだ。諸侯は兵馬の權を持つて、いつも爪を研ぎつゝあると思はねばならんのだから、幕府たるもの戰々として、また常に備へないことには、治りがつくまいといふ理屈になると、肥後守の沒落は當り前の話かも知れないが、事件前後の模樣から按ずるに、叛逆の陰謀は全くの虛構としか思はれないのだから、そこらの外樣とは譯がちがつて、將軍家連枝の駿河大納言、つまりはたゞ家光公と反が合はないといふ非政治的な理由で卷添へを食はされたものと見なければならないとすると、こいつは安藤右京進の言ひ草ではないが、ちと無茶すぎる。幕府も近頃何うかしてゐるな？いゝや。さうでない。

あの裡面には、局外者の窺ひ知ることを許さぬ重大な事情が蟠つてゐるに違ひない。要するに不可解な謎の事件として、噂とり〴〵の形であつたが、突然にもその謎が尻ッぽを出した。それは例のお家騷動で有名な黑田家の大將――右衞門佐忠之――が家老の興津河内守をつれて、九州から參覲の砌。駿河大納言に招かれて駿府城で馳走になつたことがある。そのとき大納

言が黒田に向つて「自分は今思ひ立つことがあつて、貴殿の助力を求めたいのだ。どうか宜敷くたのむ。」と、さう言ひながら、黒田に強いて誓紙を促がしたといふ話だが、何を思ひ立つたのか少しも説明をしないので、黒田は躊躇した。すると家老の興津。相手の氣嫌を損ねては不可いと思つてか、他に仔細あつてか、側にゐて頻りにすゝめたらしい。で、黒田は心ならずも誓紙に捺印したが、しかし氣になつて仕方がないので、江戸に着くと此の始末を老中酒井忠勝に告げたのだ。大納言の「思ひ立つ事」が何であるかは知る由もないが、時あだかも五十五萬石の祿高に不平を鳴らしてゐる矢先であつたので、どんなに重大な意味に解釋されたかといふことは想像される。大納言の高崎幽閉も、謀書事件も、それから間もなく起つたのだから、不可解な謎としか思はれなかつた悲劇的な彼の最期の眞因も、つまりは此の一言の中にあるのではなからうか？それが何うして今まで解らなかつたのか？いや、何うして其處に想到するやうになつたのか？と言へば、この事件について、こんな具合ひに揣摩憶測を逞しうしつゝある時だ。それまではたゞ外藩にばかり備へてゐた幕府が「この調子では幕府の藩屏たる三家連枝でも油斷がならぬ」と見た證據には、腹心の譜代大名に命じて、俄かに三家連枝の警戒に就かせたのだ。南方の豪宿南龍公――貴

にこれが源因をなして由井正雪の慶安事件に大迷惑を蒙つた――紀州賴宣公に備へるためには、當代の英傑といはれた譜代岡部美濃守宣勝を岸和田城に据えたやうに、また水戸家に備へるために、土浦や佐倉に、それ〴〵有力の譜代大名を置いたやうにだ。だから駿河大納言と黒田の經緯――彼の所謂「思ひ立つこと」は、取りも直さず、幕府に弓を引く下心であると思惟された一事が、何ういふ筋合ひから、外へ漏れるに至つたかは詳らかにしないけれども、われ〳〵世間の耳に入つて、それと是とを思ひ合はせると、大納言沒落の眞因は夫であつたか、さてはといふ風に合點參つたが、どう考へても、さらに判斷のつかないのは、重罪人たる土井大炊頭利勝が、不可思議なる身のおさまりなのだ。而も愈々出で愈々不可思議なことは、例の松平信綱――駿河大納言に肥後守討伐をすゝめて願書を預かつたこと以外には、この事件に何ら關するところない――小姓組番頭の信綱が、土井大炊頭の奇怪なる復職と相俟つて、宿老に準ぜられ、加判に列し、宣下について將軍上洛に供奉すると同時に叙爵して伊豆守となり、頻々として所領を加へられ、武州忍の城主は三萬石の高祿をうけるに及んで、ついに老中の顯職にまで、目醒ましい勢で陞つた。これが瞬くひまの出來事ではあるし、これほど異數の榮進に値するだけの手柄といつては、何一つ表向き

に知られてゐない。いや、手柄を立てるにも、その時ではなかつたのだ。例の謀書事件前後に於ける幕府の仕事は、軍役の制。月俸の制。航海通商條目の制。大名の妻子を質に擬して江戸に置くこと、即ち證人の制。府内宅地の制。辻番所配置の制。惣目付の制。天主教の禁。武家諸法度の頒布。大名四月交替の制。これが主なるものだ。その間に持ち上つた事件といつても、黒田騒動に江戸城の火災。渡邊數馬と荒木又右衞門の仇討に宗義成柳川調興の疑獄ぐらいのものだ。いづれも小姓組番頭などが、あづかり知つたもんぢやないんだから、信綱突然の立身出世に、世間悉く驚異の目を睜つたのも無理はなからう。いや、それだけでは承知しない。あの白木の文箱のお見舞ひをうけた外樣連のなかでも、事の成行きに注目してゐた向きは、二大名の滅亡。土井大炊頭の復職。信綱の昇進。どうやら曰くありげな此の三つを結びつけて、その間に、われ／＼の意表に出るやうな驚くべき秘密の脈絡。因果關係がありはしないか？と空想に空想を重ねては見たが、果してそんなものがあるにせよ、さうした證據も手掛りもなければ、お互ひに餘り懸けはなれてゐるので、この三つのものゝ裏に潜む秘密を完全に説明することは出來ない。かうなると、もう一切は解き得ない謎と見るより他に智慧はなからう。さうしてその寛永の年は往いて正保に移ると、まもなく、土井大炊頭利勝は病歿したから、此人にからまる秘密も謎も、それきりの話だが、一方の松平伊豆守信綱は川越に遷つて、所領六萬七千石に上つた――もつとも是は島原の亂平定の功によるんださうだが――さらに進んで侍從となり、七萬五千石を領するに到る所以。またわからない。しかし「伊豆は右の手。讃岐（酒井忠勝）は左の手。伊豆のやうな老中が今一人ゐたなら、余はまことに果報な將軍といへるだらうと思ふのだ。天下の世話を燒く面倒がないからなあ。」と家光公は近侍の者に洩したことがあるさうだから、將軍の補佐に幕政に少なからぬ勤勞があつたには違ひない。しかし是までのところでは、信綱の敷政として聞えたものは殆んど何もないのだから、つまり黒幕だ。黒幕のなかで仕事をしながら、トントン拍子に出世する勢ひ、今や幕僚を壓せんとする有樣だ。どれほど利巧に立ちまわる人物であるかといふことは、これだけの事實を見ても容易に頷けるではないか？いわゆる才人だ。才魂機に觸れて發すれば、必ず人の耳目を驚かすといふのは此人のことかも知れない。聞くところによると、伯父の松平右衞門太夫に貰はれ、實父大河内金兵衞の手をはなれたのが九歳。同年配の家光公につけられて近習となり、名を長四郎といつた時分のことだから、あの吉原――一面蓬々たる葭に蔽はれてゐた吉原に葭切

とかいふ烏が騒しく栖んでゐたさうだが、或日、いまだ若齢の稻葉丹後守その他の者と鷹狩りに出掛け、段の中を飛んでまわるうちに日が傾いたので、俄かに心づいて引返さうとしたが道がわからない。日がくれると江戸城の門はしまる。さあ何うしたものかと心配すると「日の入る方が西で、お城が西だから、天道樣を目標に歩いたら、最後にはお城に行き當ります。」と信綱だ。言に從つて城へ歸ることが出來たといふ話。また或時家光公の體がわるくて灸をすゑることになつた。さつそく藁みごを持つて參れといふ命令に畏つた小姓衆。營中くまなく探したけれども、そんな物がある筈はなからう。そこで舂屋賄方へ人を走らせて取りよせる段取りだが、家光公の催促ははなはだ早急と來て面々當惑の體だ。それを聞いて「殿中の疊を切ツ割いて持つて行くがいゝ」と差圖したのが信綱。これで間に合つたさうだ。夏の夜のこと。御守殿に蚊が多くて困るから、榧の木を焚けといふ上の仰せだが、そこらに榧の木は見當らぬ。尋ね廻る。ない。さあ弱つたと聞いて「御納戸に碁盤がある。割つて焚くがよからう。」と信綱。少年時代の斯うした話は、まだ幾らもある。ずツと下つて寛永の中頃だが、川越一帶の松林に油蟲が湧いて、片端から枯れさうでございます、と百姓が信綱に訴へたので、一壺いくらと値段をきめて、油蟲の捕獲を百姓らに命ずると、またゝく間に捕獲した。その油蟲で一ぱいになつた數百の壺を買ひ取つて、土中に埋めて置き、三年ほど經つてから掘り出して見ると、壺の中の蟲は一匹のこらず松脂と化して目方幾百斤とかいつたが、商人に拂下げると、油蟲の買値の何層倍かになつたさうだ。拔目も如才もない。思ひつきも奇拔だ。氣轉の早いこと、すべて此の通りだが、ときには此の才氣が走りすぎることもあつたらしい。年月日を一寸失念したが、江戸城改築の際。信綱は作事奉行に任ぜられた。從前は寢所の棟木に、一本通しの大木をつかつたもんだから、今度も矢つぱり其積りで彼方此方さがし索めたけれども、適當の材がないので困つてゐるところへ、富士山麓で見つかつたといふ巨木が運ばれて來た。信綱大いに悅んでゐると酒井忠勝が役人に下知して、そいつを眞ツ二つに挽切つたものだ。漸く手に入つたものをムザ〳〵切られたのだから、相手は目上の老臣だが、さすがにムツとした信綱。酒井に食つてかゝると、かういふ挨拶だ。「從來の一本通しに倣つて、ともかくも、こんな良材を得た以上は、逸材に事缺かぬ趣意は立派に立つたわけだから、今度これをつかつて作事すると、それがまた例になつて、いつまでも接木は用ひられないだらう。今後また造營するときに、こんな大木が見つかるか何うかわからないし、費用もかゝるから、かういふ具合ひに挽

切つたのを、接木にして使つて見せると、接木でも構はないといふことになる。將來のためによからうではないか。」と、やりこめられたさうだ。これは四代將軍時代の話だ。「今夜は申樂を催したいが、室内が暗くては不都合だから、書院の中を白壁にして了へ。」と家綱公の仰せだが、たつた半日のうちに、壁を塗つて燥かす藝當は出來るもんぢやないのだから、家臣等そろつて呆れてゐると「それは造作もない。奉書紙で部屋の四方を張りまわしたら何うです。」と信綱が言つた。妙案だ。さつそくやつて見ると成るほど立派な白壁が出來上つたので、一同感心したといふ譯だ。それを小耳に挾んだのが先刻の酒井忠勝。「おれも伊豆の頓智には舌を卷いてゐるが、しかし、御幼少の上樣の難題を聞いて、一々畏まつた日には、どんな無理な註文でも、即座に辨じてくれるものと思はれ、引いては天下の政事にも差障るやうなことがないとは限らないから、そんな才覺がましい御氣嫌取りは却つて宜敷くない。さやうな仰せは遠慮に及ばずお斷り申して然るべきだ。」と、また一本突込まれた。この大老を措いて、小言の一つも信綱にいふほどの者は、彼と同じ年に老中に補せられた阿部豊後守忠秋ぐらゐのもので、萬治のころ、信綱上京して中宮和子の御所に召し出されたことがある。先代將軍秀忠公が幕府の基礎を固めるために、藤原氏の魂膽に學んで、後水尾天皇に奉つた自分の娘の和子。即ち東福門院の御所だ。この御所には數十人の江戸侍が、中宮和子の御用をつとめると稱し、朝廷の方で幕府に不利な計畫をしないやうに見張る役目を帯びて住み込んでゐた。すでにこれだけでも不遜の沙汰だが、さらに怪しからんことには、朝廷の自由を制限する公家法度を定めて漸く專横の振舞ひ仄見える矢先であつたのだ。女院は幕府に對する十餘ケ條の御要求を示し、江戸に傳へるやうにとの趣。これは女院の請ひ給ふ筋ばかりではなくて、後水尾天皇の叡慮に出たものであることは無論だ。信綱畏まり承はつたが、江戸に申傳へるまでもないと思つたのか、その十餘ケ條については、一々命を奉じがたいといふ旨を、その場で復奏して退いたさうだが、江戸に歸つた後で、例の大老を訪れ、談、たま〳〵この一件に及ぶと、驚いた酒井忠勝「それは不可いよ。豆州。よく〳〵物事を考へて見なさい。かりそめにも女院の宣旨とあつて見れば、事の理非にかゝわらず、先づ以て公方家に伺はねばならない筈だ。それを一々命に從ひかねるなどゝと即答申し上げた日には、其許の才覺とは言ひながら、公方家親ら政務を執らせられる場合、人にこそよれ、歴代尊崇をつくされた朝廷に對して、あまり輕卒すぎると思はれるではないか。しかも女院の要求される箇條のなかに御受納申して差支へぬ一つ

二つは、その通りに行つてもよかつたんだ」と面責した。其席に居合せた阿部豐後守忠秋も「才智にまかせて專斷の誤りを招くやうなことは謹みたまへ。」と警めたさうだ。彼も矢張り家光公の近習から取立てられて老中となつたのだが、議するところ、必ずしも同じくない。この二人が面に朱をそゝいで、殿中に論爭することも珍らしくはなかつたらしい。重厚の酒井と、嚴正の阿部とは自ら肌があつても、とかく才謀術數に恃みたがる信綱とは、反が合はないのだ。しかも見識往々にして信綱を凌ぐこともあるのだから、さすが苦手であつたに相違ない。信綱の人となりは、凡そ是でもわかる。だから、例の謀書事件が始まつて終るまで黑幕にかくれてゐた彼が、老中に補せられて、政界の表にあらはれると、右のやうな調子。すること爲すわざについて集る毀譽褒貶は一身に脊負ふて、一二三四と正保を渡り、慶安元年にさしかゝつたのだ。さうして此處に思はぬ問題さへ起らなければ、年と共にだん／＼忘れられて、つひには永久に解けない儘で終つたかも知れない件の謀書事件にからまる謎が、意外の邊から裸になつて飛び出すに到らうといふのだ。問着の口火となつのは、明人鄭成功の援兵請願であつたのだ。貴公も御存じだらうが、鄭の父は芝龍。福建省泉州の人。俊才文武を修め、元和九年わが江戸に來て家光公に謁し、肥前平戸に寓して百姓田川七左衞門の娘を娶り、過ること三年に臺灣に航して暹羅船を劫掠し、海盜を統べて、明に從ひ副總兵とたり、やがては清の興。順治帝が韃靼から起つて明に攻め入るに當り、彼、厦門に據つて防ぐことになつたが、到底敵はぬと見て、わが幕府に援兵を乞ふたのだ。その仔細に腑に落ちぬ點があつたので、幕府は長崎へ使者をつかはし、芝龍が書簡を携へて來た使ひの者に、戰爭の事情を詳しく聞き糺す段取だつたが、長崎からの注進によると、すでに清兵は福州に大擧し來つて明帝唐王を擒へ、芝龍を降して了つたといふので、もう援兵を遣はす必要もなく、それきり沙汰やみの形になつてゐた――ところへ今度は其子の成功から、改めて援兵の哀願書が到來したのだ。事情は曩に父の芝龍が清軍に降らうとするとき、切に之を諫めたのであるが、さらに肯んじないので、日頃の芝龍とも思はれぬ不甲斐なさに憤りを發した彼の妻は、遠く渡り行つた異鄉に、今は惜しからぬ命と覺悟を定め、敵の重圍にある城の櫓の上から身を投じたといふ。辛うじて一方の血路をひらき、南灣に落ちた長男の成功。こゝに踏みとゞまつて、今や明朝恢復の義兵を擧ぐるに決み、彼、伏して願はくば、わが幕府の援助を乞ふといふ理屈だ。江戸城の奥では是に對する評議が始まつた。家光公の御座所には酒井忠勝。阿部忠秋。松平信

綱。保科正之。阿部重次。井伊直孝。尾張義直。紀伊頼宣。水戸光圀を筆頭に、ずらりと居列ぶ譜代の重臣。堀田上野介正信や松平能登守定政の顏も見えたが、鄭成功の哀願書を前に、先づ口を開いたのは、紀伊大納言だ。意氣頗る昂然として言ひ放つ。「憶ふに清朝へ降伏したる芝龍に引かへて、彼の妻女が節を屈せずして、悲壯なる最後を遂げたといふことは、まことに恥を知るものであつて、その子、また我が國に生れたればこそ、日本人の氣象をおびて、義勇かくの如きもの有之かと思はれまする。ともに千載の美談。われら大いに感悟する次第です。」「されば此の際すみやかに救隣の美兵を御遣しなされては如何かと存じます。」と、水戸光圀、膝をすゝめる。側から乘り出したのが尾張義直卿だつた。「つきましては、紀伊殿よりも水戸殿よりも年長の私を、どうか援軍の總大將に御遣はし願ひたいと存じます。」「いや、そのことならば」と、橫合ひから紀伊大納言、船路の便利がありますから、私が參りたいものです。」「あいや。お待ちない。」と押しのけるやうに光圀卿だ。「上(かみ)の御馬前ならば、いつ何時でも討死いたす心掛の私こそは、誰よりも適任者であらうと考へます。」と、躍氣になるのだ。お了ひには喧嘩になりさうな勢ひだつたが「暫くお控へを願ひます。」と進みいでた井伊直孝。此處に於て一言なかる可からずといふ容だ。

「御三家殿の仰せられるところ、いづれも一理あつて尤ものことゝは存じますが、お加勢の儀は無用の至りでございませう。」「何。無用？」と尾張義直が意外の顏をすれば「これは異なことを承はる。」と紀伊頼宣も目に角を立てる。「それはまた何故だ？」と、水戸光圀も開き直つたが、その瞬間みんな呆氣にとられたのは、井伊直孝に一口も言はせないほど、すばやく飛び出して、眞向から火蓋を切つたのが、それまで餘り此人の味方をしたことのない松平信綱であつたからだ。「其許のお話を横取るつもりではなかつたのですが、援兵反對については、手まへ先刻から申述べやうと考へて居つたので、はなはだ失禮ではありますが、暫く御讓りを願ひたいのです。」と、出しぬかれて驚いてゐる直孝に一應の挨拶をすると、あらためて三卿の方へ向き直つた。「恐らく井伊殿の御所存も、かうであらうと考へます。お加勢のこと無用と申す理由は、つまり援兵を差出しても功なき時は、國の恥となるのみならず、それがためには、隣邦と仇を結ぶことも必定。これ永代の不得である。もしまた我兵功を立て、いくばくかの領土を獲ることありましても、それらは石田に等しく、後々の弊を招けばとて、いさゝかも益あらうとは思はれません。結局は何の手柄にもならぬ骨折損であるからです。明(ミン)の興廢。われらに取つて、そも〳〵何の關する

ところがありませう。されば。」と、さう言ひかけたが、今度は、かういふ議論を、正面の御座所から默々と聽いてゐる家光公の方へ向き直り、威儀をたゞして、徐ろに兩手をつくと「されば畏れながら、鄭成功が此度の請は、お上に置かせられても、絕對に御聞容れなきやう、切に懇願つかまつる次第でございます。」と結んで敬々しく頭を下げると其儘席についたものだ。これが血の氣の多い連中の氣に入らなかつたのは無論。末席に控へてゐた佐倉の城主。堀田上野介正信などは血相を變へて食つてかゝつた。「これは怪しからん」といふ調子。「伊豆守殿が施設されるところを見るに、もつぱら偷安無事を旨として、眼前の太平を修飾することより一歩いづるものがないのに不快を感じて居つたが、またしても優柔退儒の仰を承はる。近ごろ不遠慮の申條と思はれるかも知れないが、故の台徳院（秀忠）様御遺命にも武道振興のこと第一とあり、手まへの老父加賀守正盛が日頃の訓言にも、老中輩、武事を疎んずるやうな處置ある場合には、聊かたりとも遠慮に及ばず、家祿を抛つても諫めよとあるんだから、君父の志をついで、遠慮なく申し上げる。只今の御主張も矢張り例の事勿れ政策で行かうといふ貴殿御一人が、利勘の上から見ての姑息な計ひと存ずるから、手まへは何處までも反對いたす。」「これ〳〵上野！お上のまへも憚らず、

長上を誹るとは何事だ。餘計な言葉は愼みなさい。出兵に贊成なら贊成の趣を明らかにすれば濟むだ」と酒井忠勝にたしなめられて、プン〳〵怒りながら引込んだ。元來、彼は忠勝よりも大身なんだが、母方の祖父にあたるので、いつも呼び棄てにされてゐたのだ。列座一同恐れかしこまつてゐる場所柄もお構ひなしに、言ひたいことをポン〳〵いふのも、彼の父加賀守正盛が將軍家の古老であつて後年家光公に殉死する底の寵遇にあづかる門地に據る點もあるだらうが、一面にはまた年壯鋭氣のいたす加減もあるのだ。そも〳〵將軍家に奉る忠誠は、自分一人で買ひ占めた了見。朝夕片時も忘れつかまつらんと言ふのが口癖の男なんだ。その時分。老中の酒井忠清が彼に向つて、揶揄半分に、まことしやかに「もしも其許へ老中の御役仰せつけられるとしたら、御請けなさるつもりか？」と聞いたさうだ。「さうですね。上御一人の思召で仰せつけられるのだつたら、敢て御辭退はいたしませんが、お年寄御相談の上のことならば、平にお斷り申したい。」と言つた調子。大眞面目の返答だから、贔屓目に見れば正直無邪氣で、一片誠忠の志は感心したものだが、惡くいふと、目上を凌ぎ倒すやうな傲慢不遜の氣風たつぷりで、而も自ら悟らずに威張るだけ始末にいけない。とも言ふたもんだらう？こんな鼻息だから、つまり、閣際。威望。地位。

手腕。才智の點に於て、自分よりもズシと鮮やかなる信綱が、日に日に跋扈して、今では宿老隨一の勢ひ堂々と、件の通り。楯をつく相手が御三家であらうと誰であらうと、思ひの儘を貫かうとするやうな氣色を見ては、たえざる苦痛を感ずるに違ひないのだ。それが先代將軍家や自分の親父の主義主張に悖ることであれば猶さら。日頃の鬱憤も、かうして爆發しないわけには行くまい。されば伊井直孝に對する三卿の反駁が直ちに試みられる筈であつたらうと思ふ舞台に突然信綱が飛び出すやら、正信が現はれるやら、忠勝が割り込むやら、暫くの混雜が漸く秩序につくと、國家大事に關ることであるから、各自の存意殘すところなく建言するやうにといふ家光公の註文で、まづ光圀卿が、お隣りの尾張家に私語いた。「義直殿に申しますが、總大將の方は後まわしとし、援兵が當を得たる說と信ずる以上は、飽くまでも固持する心底ですが、われら三人が同意見であつて見ると、銘々同じことを述べるのも繁鎖だから、この際、紀州に一任しては何うでせうか？」それもさうだと尾張家が頷いて、隣りの紀州にさう傳へると、快諾した彼は、三家を代表して徐ろに口を開いた。「われ等が出兵を主張する眼目は、一に我が武力を彼に示し、義を重んずる國の威光を海外に宣揚するに好個の機會であると考へたからであつて、鄭成功を援け明朝の恢復を完うして置けば、將來の國交に便利するところ少なくない事は、われら之を望むけれども、伊豆殿が言はれるやうに、兵功あつても、そくばくの土地を獲る野心はないのである。また兵功なき場合には云々と、伊豆殿は言はれたが、赴いて死力を竭すならば、斷じて負ける氣づかひはないと思ふのです。」「然しながら、敵味方の兵力、地の利害も未だ究めないで、さやうの誓言が出來ますか？」と信綱が反問すると、また例の堀田正信が、隅の方から口を出した。「憚りながら、手まへが請合ひ申しませう。手近なところで豐太閤をごらんなさい。あの不案內の朝鮮に於て、あれだけの捷を得られたではありませんか。」といつたやうな大ざつぱな筆法だが、先刻の喧嘩腰では中止を食ふとでも思つたのか。存外おだやかな口調だ。「戰爭は氣である。たとひ先方の兵力地理に充分通じなくても、わが精銳これに當つて、一身以て國に捧げ、使命を果す覺語さへあるならばです。かの鄭成功が頽廢倜儻の志士であることは、すでにわれわれの知るところだから、清兵などは最早恐るゝには足らんと申したいのです。かゝる時に於て、伊豆守殿が仰せられるやうに、明の興廢に何の關係があるかといつた按排に、消極退嬰の態度にいづる結果は、たゞに我が幕府の威嚴を彼に示す適當の機を逸するばかりではない。義を見て赴かざる卑怯者ともいは

れ、輕んぜられるは必定。これ即ち武道の恥辱であり、引いては將來の外交にも災ひするだらうと思ふのです。紀伊殿の御趣意も其處にあるやうだから、手前一言添へる次第だが、達眼の伊豆守殿には、それがおわかりになりませんか？」「わかりました。」と信綱は苦笑しながら賴宣卿へ「しかと左樣ですか？成るほど。それでは紀伊殿と御同意の方々は別として、他の理由によつて出兵に贊成せられる向は、仰せ出られたい。」とさう言つて一同を見渡した。が、この際、鬱勃として國内に張る不平の徒や豐家の遺臣や外樣の力を削ぐ手段として出兵論に手を擧げる者のほかは、同意するにも反對するにも決まるで見當のつかぬ連中ばかりで、成り行き次第によつては、どちらかに組しやうといふ顏つきだ――もつとも、こんなのは後で信綱に附ひて了つたが――さて右の諸説に對する信綱の態度だ。愚老の思惑によると、そも〳〵彼、出兵反對の眞意が奈邊にあつたかは知る由もない。が、果してその言ふが如きものならば、出兵黨の此の意込みでは、國外に敗を取るやうなことは先づなからう、と見てよい。が、しかし、まだ一度も自説を曲げて人に屈しないことによつて高められ、高めつゝある職務上の權威が、少しでも貶るやうな妥協や讓歩は、かりに必要であると思はれる場合でも、氣質に於て忍び得ないところだ。大抵の者なら、さうか、そんなら、まあ行つて見るのもいゝでせう、と言ふに違ひない苦しいハメなんだが、例によつて踏ん張らうといふ了見。頗る呑み込んだものだ。「各々方の御意見一々尤もと存ずるが、さやうに壯氣となつて勝ちに行かねばならぬほどの義理もないところに傾注する餘力があるならば、それを以て內治に盡して貰ひたい。國事多端の折から、國威宣揚などは後でもよろしからう。」といふ風だ。いくらでも逃げられる方角に、攻擊の鋒先を向けさせると「この太平の世に國事多端とは何事か？」と眞つ先に突つ込んだのが例の正信。「いや、表面はさう見えるけれども殺伐の氣は全く銷えてゐないのだから、髀肉を撫して事なきを歎じ、機を覗ふ屠狗の雄。嘯畝の傑も少なくはない。かういふところから片づけて行かねばならん。」と信綱。「まかり間違つて、そんな浪人どもが事を擧げても高は知れてゐる。」と、また正信。「いや、それに應ずる者があつたら何うなさる。」「滅相もない。」「とは申されぬ。近くは加藤肥後守や駿河大納言卿の例もある。いかに恭順に見える諸侯でも油斷は相成らぬ。」といふ議論が切つかけで、暫くのあひだ双方對峙の體なんだが、おさまりがつかないので、將軍家の裁斷を仰ぐと、これも餘程困つたと見える。「予は熟考のうえ、明日を俟つて決することにしたい。一同今日は退出いたし、改めて登城いたせ。」といふ始末

だ。閣議は未決のまゝ閉ぢた。家光公が御座所を立つて奥の間の方へ行かれると、席順に從つて廊下へ出る。そこで白木書院に休息して歸り仕度にかゝるのだが、この日、誰よりも達者に喋つた例の正信が、一同の尻について、不愉快さうに歩いてゐると、直ぐ目の前にゐる能登守の松平定政が、突然ふりかへつて、あたりを憚るやうな聲だ。「おい。堀田。貴公に少し話があるから、私についておいで。」と、さう言ひながら、みんな白木書院へ消えて了ふのを待つて、反對側の黒木書院へ紛れ込むやうな恰好でコソ〳〵這入る。「話といふのは何だらう？」と、あとに蹤いて行く。誰もゐない廣間の中を覗くと、下段の間。墨繪襖の蔭にピッタリくつついて、ニコ〳〵笑ひながら手招ぎをしてゐるんだ。正信が近づいて行くと、いきなり肩に手をかけて、さも打ちとけた口調。「大ぶん激しい議論だつたが、お世辭ではない、貴公、今日の立役者だ。あの勢ひで、また明日もやるんだらうな？」と褒められて、わるい氣もしない正信だ。隱し切れぬ心中の得意は、顏にあらはれて昂然と眉を揚げて見せた。「むろん。主義のためには、最後まで爭ふつもりです。」「うん。さうだらう。それでこそ加賀守の倅だ。あの長四郎が、窮餘の口實に、國事多端の、內治が何うのと老猾く逃げまわるのを、堂々大道を行くやうな論鋒で追つかけたのは、武士らしくて小氣味がよかつたよ。大いにやんなさい。しかし氣をつけなくてはならん事がある。貴公にして置きたい話といふのは夫だ。長四郎に反對する分には、いくら猛烈に反對しても構はないが、手も足も出ないやうに追ひ詰めるのは却つて危い。かういふと失禮だが、まだ〳〵貴公などに說伏される男ではない長四郎が、顏に汗を流したのも、いづれは出兵論に大義名分の道理あればこそだ。が、しかし、一反横に車を押した以上は、何んな苦肉の策を弄しても押通さずにはゐないのだから、あれにかかつちや、公明も正大も、どゝのつまり實際に於て負ける。負けるのではない。道理も理屈も拐されて行衛不明になるのがおきまり。殘念な話だが、今日の會議に我々の勝味があつても、どんな不思議な力が働くのか知らないが、明日になれば、きつと鄭成功の哀願書は紙屑になるに違ひない、と私は見越してゐるんだ。だから惡いことは言はない。貴公も餘り長追ひしないで切り上げたがよからう。窮鼠猫を咬むの譬、こいつ何うにも始末がわるいと思つたら、咬みつきはしないが、發狂させる。狂人にして了ふ。」「狂人にして了ふとは？」正信。ギロリと目を瞬つて怪しむ「何ういふ意味ですか？」。「あの男の奥の手だ。一身まさに危い瀬戸際まで追ひ詰められると、その必死の立場を逆に利用して、まんまと凱歌をあげる非常手段だ。卑怯は卑怯だが、ち

よつと我々には出來ない藝當だな。」「ほう。それは初耳です。」「さうか。さうだからうな。そんなことは誰も知らないだらう。知つてゐるものがあつても、後の祟りが怖いから默つてゐるんだらう。つい先頃まで私も存じ寄らなかつたんだが、さうと知つて先づ私の胸に浮んだのが貴公のこと――とかく長四郎に含みたがる貴公だ。まあ、そんなことはあるまいが、萬ヶ一にも此手を食ふやうな眼に遭つてはならんから、念のために貴公の耳に入れて置かうと思つてゐたのだ。然しこれは誰にも洩らせない内密の話だから、どうか、そのつもりで聞いて貰ひたい。」と聲をひそめる定政。誰にも洩らさない秘密の何事かを、かうしてわざ〳〵呼び込んで語るくらいだから「そんな事はあるまいが」と口には言ひながらも、「今にやられるぞ」と腹の中では心配してゐたかも知れない。いや。實際、この出兵問題から十一年のあひだ、卑怯なる奥の手の持主といはれる信綱に對して反目をつゞけて來た一本調子の正信は、即ち例の佐倉の義民木内宗五郎直訴事件の翌年に到つて「老中輩、武事を怠るやうの處置あらば家國を抛つても云々。」の口癖を實行して、いはゆる信綱の奥の手に引ツかゝり、狂人にされて、可惜十一萬石の佐倉城と生別れになつた幕を見ると、やつぱり此の時分から、もう信綱に睨まれてゐたものと思はれる。定政の心づかひ、強ち餘計な取越し苦勞ではなかつたわけだ。しかし何ういふ關係で、この坊つちやん大名に、かゝる好意を寄せるのであるか？その邊の消息が、つまり今迄の話と、これからの話との、合ひの楔になりさうな肝腎の點だから、定政のいはゆる「内密の私語」が始まるまへに、一應の説明はあつたが便利のやうだ。されば元來能登守定政は徳川家康公には母方の甥にあたる人物。家康公の生母傳通院夫人お大の方は、三州刈屋の城主水野忠政の娘だ。はじめ徳川廣忠に嫁して家康公を生んだが、父水野忠政が死ぬと嫡子信元が今川に叛いて織田についたので、お大の方は徳川家より離別されて刈屋に戻つた。翌々年久松俊勝に嫁して定勝を生んだ。桑名少將隱岐守がこれだ。その六男が二萬石刈屋城主。即ちこの能登守定政なんだから、父祖兄弟の筋目から見れば、家康公の甥だ。幼名を吉五郎といつた時分、家光公の近習になり、二十三で能登守に任官。伊勢の三重郡五千石から小姓頭に拔擢されて、三十九で二萬石の刈屋に據つたんだ。伊豆守信綱とは同じ境遇に人となつたが、年は十六も若い。で、信綱が登つた梯子に、いつも一足おくれて足をかけるといふ風だつたが、そのうちに身分位置が段々懸け離れて、伊豆守には追ひつけなくなつた。が、何しろ將軍家の連枝ではあるし、なかんづく、人まへでも「あの男」とか「長四郎」

とか、憎さげに呼びすてるくらゐだから、信綱の智慧者ぶりが、癪に障らうといふ心底に於て、自と共鳴するふしも少なからぬ正信に、好意を寄せて味方がましくなる所以だらう。盗み聞きされるのを怖れるやうな警戒ぶかい眼を身邊にくばりながら、やがて彼は口をひらいた。「貴公の記憶にも不可解なる事件として殘つてゐるに違ひない。あの先年の謀書事件について、ある筋から聞き込んだことなんだが、あの時陰謀の嫌疑を受けて死んだ駿河大納言忠長が、まだ國千代といつた時代。兄の家光公より立ち優つて悧巧だといふので、家光公などが疱瘡に罹つて苦しんでゐるのに、永井日向守直清のほかは誰一人寄つく者もなかつたほど疎んぜられてゐたに引替へ、彼ばかり兩親の愛を專らにして將來は儲位にも就きさうな勢ひ盛んなる頃ほひだ。家光公の近習でありながら、他の近臣と同じく、大納言の方へ阿諛を送つてゐた日和見の長四郎が、御隱居家康公の一言に、兄弟の位地が顚倒するが早いか、俄かの忠勤。たとへば其ころ、秀忠公が寢殿の軒端に雀の子が生れたのを、家光公が見つけて、長四郎に言ひつけ、夜にまぎれてとらせにやると、小僧、足を踏み外して庭へ落つこつたんだ。物音に驚いた秀忠公は枕刀を引つ提げて躍り出す。御臺所は燭を持つて駈けつける。長四郎がへいつくばつてゐる。何うして斯んなところに來たのかと怪しみ尋ねると、雀の子を取るつもりだつたといふ。それは噓だらう？お前の本心から出たことではなさゝうだ。家光に頼まれたんだらう？と重ねて詰る。が、さうですとは言はない。此奴。本根を吐かないとは剛情不敵と秀忠公。大きな袋に長四郎を押込んで柱にかけた。あり體のことを申さぬうちは、袋の口をあけろ譯に行かない、とあつて翌日まで釣しツぱなしだが、秀忠公はむろん、長四郎の心中を察した御臺所が、おのれの苦痛を怺えて、主人の名を出さない覺悟に不憫を感じ、こつそりと袋の縫目を解いて朝餉を入れてやり、元の通り縫合せて置くと、晝ごろ秀忠公が見えて、また詰問だ。言はない。御臺所が側から色色取宥めるので、今後は決してもう斯んなことは致しませんといふわけで、袋から出して貰つたが、その心掛で生ひ立つならば、長四郎はきツと家光のために無双の忠臣になるだらう、と、秀忠公は喜ばれたさうな。いづくんぞ知らん。それまでさういふ殊勝な了見の男ではないので、長四郎よりは馬鹿でない家光公が、試みに雀取りの冒險を演らせたのだ。墜落したのは無論狂言ではないけれども、さあ、ズツと以前に斯んなことがあつたよと、公御自身の口から、私は聞いて知つてゐるので、間違ひのない話だ。要領のいゝ彼は、かうして主人の機嫌をとる上に、もつとも有效なる手段は、實にそれまで彼が秋波をつ

かつてゐた元の戀人のアラを見つけ次第に報告することである。そのためには何んな些細の機會をも逸すべきでないと考へたに違ひない。駿河大納言、駿府に封ぜられて間もない寛永三年七月、家光公上洛の途中――私は供奉しなかつたが、この話を私に聞かせてくれた人は、公のお側近くに參列してゐた――あの大井川にさしかかると、漫々たる水上に、浮橋が架けてあるので、渡るに厄介な往徠も平地同樣だから、いづれも大納言の巧智に喜ばぬものはなかつたわけだが、その光景に見とれあそばす家光公の御龍顏脇に控えてゐた長四郎。この男ばかりが、さも〳〵心外に堪えぬ面色。いやに改つた物腰でピッタリ平伏するかと思ふと、エ、、恐れながら、お上に申上げまする。そも〳〵箱根、大井は東海第一の要害。關東の障蔽である。と、神祖も大御所も常に仰せられてゐました。さやうなる天險の地を變へて、交通の自由を計るとは怪しからぬ次第ではございませんか？と仰々しい屁理屈を奉つた。お陰さまで、足もと安全に渡れた癖にだ。それも年中橋を架けつぱなしなら兎に角、一時の便利に手廻しをつけたんだらう？別に天險が何うなるわけでもなし、軍略上、どれほどの妨げになるもんぢやないんだから、これが餘の人なら、家光公もフヽンと笑ひすましたに違ひない。が、何しろ、その折があつたら、今までの復讐に扱いてやらうと、腹にある相手だ。取り上げた口實でもないとは思ひながらも、日頃抱いてゐる憎惡反感の捌口を提供されると、勢ひ其氣にもなるんだらう。聰明なお方だが、俄かの憤りと來たのだから、大納言こそ、いゝ面の皮。折角の好意も忠義立ても仇となつて、大層なお咎を蒙つたさうだが、彼方の釘を叩いて此方の頭が上ると狙ひをつけたことが、狹くては將軍家の思召しにかなひ、廣くては幕府の方針に當嵌る場合、義理人情にお構ひなく行つてのける、その、褒めていへば恐ろしく理智的な、誹していへば迚も冷酷な、おどろくばかりによく働く頭から割り出される陰險千萬の功利的態度は、すでに此の時分から、周圍の人々に、驚愕と敬嘆と、いくぶんの恐怖をもつて認められて來た。剛情だ。執拗だ。睨んだら放さぬ。大納言は睨まれた。睨まれたら百年目といふが、浮橋問題から六年目。例の黑田騷動が起つて、黑田右衞門忠之と栗山大膳の兩人。家光公のまへで對決させることになつたが、黑田は大膳の主人だ。主人と奴と公に曲直を爭ふなどとは、君臣の道に於て、古今その例がないから、お斷りだ、その代り自分が腹を切れば仔細はあるまい、と黑田が申出た。それもさうだから、家光公には內々黑田を召されて御自身取調べられた。ところが何しろ駿河大納言に脅迫されて、いわゆる「思ひ立つこと」に署名してゐる

んだから、不徹の科がないとは言へないけれども、栗山大膳が告訴したやうな叛逆の事實は全然虚說らしいから、訴人の大膳を捕へて糾問すると、申條頗る曖昧。で、結句こちらが憂目を見て鬼がつきはしたものゝ、この時ばかりは實際老中達も裁決に困つたらしい。何しろ黒田は關ケ原以來、徳川氏に少なからん忠節を盡した雄藩だから、一朝の間違ひがあつても、無暗に法規を適用して取り潰すわけに行かないのだ。出來ることなら助けたいと思ふけれども、栗山大膳の訴狀を見ると、その一ケ條々々々が、黒田にとつては、みんな致命傷だからな。手古摺る筈だ。そこへ拙者が引受けやうと現はれたのが、もう其頃は宿老に準ぜられてゐた長四郎だ。わざと內密に此の事件關係者の成瀨隼人正を、自宅に呼んで、栗山の訴文のうち一ケ條でも申開きがつくなら、減刑の望みもあるが、さもなければ到底助かるまいと思ふから、一應其許の存寄も承はつて置きたい、と言ひながら、大膳の自筆になる目安を示したのだ。つら〱見てゐた隼人正。頭髪逆樣に怒り出して、一ケ條も二ケ條もありはしない。主人の非を擧げて罪に陷れ、おのれの手柄にしやうなどとは以ての外の不忠者め！とさう言つて彼奴を詰れば、とやかくの返答はなからうと思ふから、それがし參つて糾問いたましせう。といふ調子でアッサリ片づいて了ひ、身柄を南部重直に預けられた大膳の寸法も食ひ違つたらうが、しかし、誰が何うヒネ〱つても匙加減のつかないほど決定的な事件の始末を、いかに才物の長四郎が引受けたところで、より善い工夫の餘地を見出すやうな奇術は不可能なんだから、黒田に泡を吹かせる豫算であつたことは爭へまい。が、こんな人間に限つて往々われ〱根本の精神を忘れるものと見える。魂なき才智が、才智なき魂にしてやられたのだ。策略を知らぬ戰士には辟易だと長四郎も苦笑したに違ひない。が、大膳の訴狀と一緒に、事件の公判がおはるまで手中に預かつてゐた黒田五十二萬石の祿封が、握り潰せなかつたのは、別に痛痒を感ずるほどの筋でもなからう。そのために悶着の火元の駿河大納言に手をつけることが出來なかつたのは長蛇を逸した形。的はこゝに置いてあるんだからな。が、捕へそこねた獲物を、そのまゝ見逃した彼であらうか？いや。われ〱の耳を脅かし、膽を冷した、あの不可解な謀叛事件が、突發したのは實にそのときだ。と、かう言へば、貴公もサテハと、彼の計畫。この騷ぎ。二つを結びつけて、その裏面に暗い手の影の跳躍を描くかも知れないが。うん。しかし、それまでには今少し距離があるやうだ。しばらく聽きなさい。あの事件の主謀者と言はれる二人のうち、加藤肥後守の處分に、さほど困難を感ずるには及ばなかつた其筋の役

人達も、細心緻密に審理を行ひ、罪跡の調査に努めたが、陰謀の證據不充分のために、或は無罪の宣告を下すことに決めるかも知れない駿河大納言に對して、本來ならば極力彼の有罪を主張しなければならぬ筈の長四郎が、どういふ氣まぐれかしらん、かねての計畫を實行するに絶好の機會を棄て去つて、あべこべに同情し、大納言が無罪になるやうな智慧まで附けてやつたといふことは、頗る辻褄の合はぬ話だが、たとひ無罪を言ひ渡すほど寛大な心持が、家光公になかつたにしろ、死ぬには當るまいと思ふ彼が、長四郎のこの面妖な同情に誘はれたお蔭で、たう／＼死地へ陷りこんだ結果から見れば、同情とは言ひたくても言ひかねる。いや。これがその實は同情の面をかぶつた恐ろしい呪ひであらうとはさ！大納言が高崎城内で自殺後間もなく、最後まで彼の世話を燒いた安藤右京進は、自殺の模樣について家光公へ上申かた／＼江戸城へ登つた。談。たま／＼大納言が肥後守討伐歎願書に及ぶと、意外なことには、彼が叛軍を起して江戸へ登る準備中を、公儀に探知され、辯疏に窮して、そんな遁辭など設けたやうな話は聞いてゐるけれども、願ひ書などは見たこともない、と家光公の仰せだから、驚いた右京進だ。果してさういふ誤解から彼が死を命ぜられたとすれば、棄て置けない公儀の過失だから、實際の事情を明らかにしなければならぬとは思つたが、もう後の祭。さうして事改まるのもよくないし、握り潰された願ひ書の詮議をしたところで、そんなものは預かつた覺えがないと長四郎が言へば、それでお了ひだから、大納言の沒落で涼しくなつたやうな家光公の前に、證據のない話を持ち出して氣色を損ずるのも考へものだらう。一切合財は胸に葬ることに決めて引退つたさうだ——などと誰から私は聞いたか、大がいの想像はつくだらうから敢て言はないが——要するに大納言は嵌められたのだ。長四郎は決して氣まぐれでなかつた。一ツの目的を遂ぐるためには何んな犧牲をも厭はず猛進する意志の強い男であつたのだ。彼の說によると、大納言の死は發狂自殺ださうな。駿河の淺間山では、山來、猿を神獸と崇め、殺すことを禁じてあるが、俺はその國の領主だから、どんな神樣でも、俺の命に背く筈はない、と大納言、家來が諫めるのも聞かずに、勢子を率ゐて山に分け入り、容赦なく狩りまわつて、日に千二百四十幾匹の猿をつかまへた話を誰でも知つてゐるもんだから、それに託して猿の祟りだと大眞面目に觸出したものだが、あの從容として亂れぬ末期の覺悟が、狂人などに出來ると思ふか？あからさまに處罰の理由を世間に知らせて都合のわるい場合と、邪魔になるから片づけたいにも然るべき口實がない場合には發狂と行くのが、この節の

慣用手段で、即ち彼の最も得意とする奥の手なんだ。だから此の手を食はないやうに氣をつけなくちや飛んだ目を見るぞといふのだ。貴公。わかりましたか?」と、物語り來つた能登守定政。さういふ御自身が、其伊豆守信綱の奥の手に引ツかゝらうとは夢にも知らずに、さも分別らしい微笑を、聽き手の堀田正信へチラリと見せた。

――(前篇「斯くあるが故に」)――

ちよつと聽いて下さい。こゝに已に動かすことの出來ない(といふやうな)有名の歴史的事實があると致しまして、これが探偵的物語(ディテックチヴ・ストオリー)としては無論、探偵物語的趣味をもつて迎へにくいものである場合、その題材によつて、企らまず作らず、史實そのまゝを、何ういふ風に觀察すれば、探偵的物語化し得るであらうか? といふことを一度でも考へた經驗のある人には特別、ない人にも此の「由井正雪は松平信綱である」後篇「故に斯くあらざる可からず」を讀んで頂いた上で、然るべき御批評を仰ぎたいのでありまして、筆者、筆を起すにあたり、千差萬別的記錄の峻別に於いて、信憑すべきに似たるものは之を採り、すべからざるが如きものは之を棄て、時間に場所に人物に、出來得るだけ粗漏詿謬がないやうに、神經を鳩め、聊かの菲才を弄んで、之に修飾按排をつけることなどは絕對の禁物といたし、ひとへに筆者が主觀の平明純一を期するに止めて置きましたが、一口に探偵的物語とは申しましても、例の、慌しく忙しく、神出鬼沒、奇想天外に走るのとは違つて、少々退屈な代りに、また一面悠々として進むが如く、退くが如きやうに努めたつもりであります。もつとも此一篇については、我田引水の論でも、別に試みる筈であつたが、敢て妨げとしないならば、都合によつては後篇に附ける考へもあります。その時はまた其時のこと。(大正十五の十の五――筆者)

一茶拜見

荻原井泉水

雀たちが、庇の上や松の木で鳴きはじめると、私は目を覺して、湯へ飛込みに行く。

　座敷から湯に飛入るや初時雨

と一茶が詠つた、湯田中の如意の湯である。夏のうちは避暑客でこみあつて居たといふ此温泉宿も、此頃は至つて閑散で淋しいうへに、朝は、さすがに高原の事とて、はや冷氣を感ずる。秋風が前の山の木葉を吹き鳴らし、低い雲が折々雨を落して過ぎる、もう時雨の來るのも遠くないのであらう。泉水を圍む松の木にまじつてゐる楓は、ちよつ〳〵と赤く染まりかけてゐる。私は湯から戻ると、湯ざめのせぬやうに、羽織をひつかけて、一茶の遺稿の整理にかゝる。机のほとりには一茶自筆の原稿が一ぱいに取散らしてある。

　長々あり〳〵しかれば此度が長のいとまになるかもしれず今夕ちと
　ちと小はやく一盃奉願上候

二月二十二日　　一茶

其秋様
希杖様

其秋といふのが、此宿湯本氏の曾祖父、希杖といふのが高祖父で、父子で一茶の門弟であつたのと、爰に温泉があるのと、柏原の家から遠くないのと、そんな譯で一茶は幾度となく、此湯田中に遊びに來て、太平樂を云ひたから滯在してゐたといふ。其頃は、宿から二三丁離れた星川の河原に小さな別莊があつて、そこに一茶はごろ〳〵してゐたさうだが、「今夕ちとちと小はやく一盃」といふ手紙は、女中に持たしてよこしたものと見える。そのやうな一茶との關係で、湯本氏方には一茶の書蹟した日記や原稿の類がかなり澤山にある。一茶は、用事などを女中に言傳てる代りに、つけ木に書いてよこすのが常で、其傳票代りのつけ木が束になつて殘つてゐたものも、長い間には他

に乞はれるまゝに散逸してしまつたさうな。で、今に傳つてゐるだけの遺稿を出版しておきたいと、爰の先代の主人から賴まれたのは、もう十年も以前になる。主人も急がず、私も忙しくて、其儘になつてゐたものが、今年、一茶百年忌といふ機縁に逢ふて、追福の爲にもと思立たれるや、早く早くと促されて、此春にも私は爰に來て、先づ一茶の日記、句帖類の校訂をしたのだつたが、今度は、一茶自身が上梓するつもりで書いたものと思はれる「株番」「我春集」などの校訂にかゝつてゐる。

「株番」は文化九年、一茶が五十歳の正月から筆を起したもので、

おのれやれ今や五十の花の春　　一茶

といふ句を始めに出してゐる。五十は男盛り、人生の春といふ氣持か、はた、世間は花の春だといふに已は既に人生五十のどんづまりといふ氣持か、一寸判じかねるが、恐らくは後者であらう。其正月は下總の布川附近の俳友の許に客となつて、毎日俳諧三昧に耽つてゐた風である。

松陰に寢てくふ六十餘州かな　　一茶

當今教科書にも載つてゐて、天下泰平を詠つた目出度い句として名高い此吟は、俳友鶴老と二人で、「鶴龜松竹」といふ題を置いて機械的に作つた中の一つに過ぎない。それは「七番日記」にも其題で四十二句書いてあるが、「株番」には

鶴の子の千代も一日はやへりぬ
龜どのゝいくつのとしぞ富士の山
松陰に寢てくふ六十よ州哉
竹にさへ丸にまろきはなかりけり

の四句だけを拔いてゐる。其中でも、「松陰」の句はお得意だつたのであるか、次の日には此句を立て、歌仙一卷を作つてゐる、（脇句は、鶴と遊ばん龜と遊ばん　鶴老）、其發句にはちやんと「賀治世」といふ前書をくつつけてゐる。して見ると、此句は普通に解釋されるやうに、松を以て松平氏を象徴し、德川幕府の恩澤を謳歌したのだと見ても差支ないやうだが、それが一茶の本當の氣持だかどうかは疑はしい。私は長野に吉村西三氏（一茶の門人、雲士の曾孫）を訪うて、一茶の遺稿「だん袋」を見せて貰つたが、其中に

田沼氏のきづける遠州相良の城見にまかりて

石はこひなげきこりつゝしめし野に
　　人の油にひかる城かな

といふ俳諧歌がある。此方が一茶の僞らざる氣持であらう。

すゞまうといづれば下に下にかな

斯んな句も日記にある。當時の大名や幕府に對しては、幾分か反感的な氣持を一茶は抱いてゐたのではあるまいか。然し、當時、そんな考などを發表しようものならば大變な事になるので、却て其とは反對な此「松陰」の句を彼は殊更に「天下泰平」などゝいふ前書をつけて書き散らした（今日殘つてゐる一茶の書幅、殊に大きなものには此句が一番多い）。それが彼の皮肉だつたのではあるまいか。斯うも推測されぬこともないのだが、之は斯ういふ私の心に惡い皮肉がある爲の色眼鏡で、一茶は無邪氣な、純眞な氣持だと云はれる方があるならば、私はおとなしく龜の首をひつこめて置く。

「我春集」三冊として、湯本氏方に傳はつてゐる稿本を、好く調べて見たらば、「我春集」と名くべきものは一冊で、あとの二冊は別の題名になるべきものだつた。但し、題は勿論、まだ付いてゐず、未定稿でもあるが、私は假に一冊を「花見の記」と名けた。一冊は、一茶が江戸の隨齋成美に評點を乞うた句稿であつた。其は文化九年十二月、故郷の柏原に入つてから後、文信に依つたもので、初めの句稿の末には

例の通くだらぬくさ〳〵入尊覽したゝか御しかりの程奉希候邊に
引込候へば彼流行とやらんにおくれはせぬかとそれのみ用心仕 候
御引被遊候はゞ此草稿此飛脚に御もどし可被下候是又奉願上候

と一茶は書添へてゐる。其後に成美が朱で書いてゐる評は、當時の歌舞伎評になぞらへた洒落れたものだから面白い。

（頭取曰）當座のたてもの外に眞似人なしいづれもさまおつしやり分はムリ升まい（ヒイキ）いひぶんのあるのないのといふ事があるものか日本中引くるめての名人〳〵（わる口）情がこはくて一つ風流だから切落ては請取らぬ雪の中でお念佛でもいつてゐるがいゝ（ヒイキ）此とうのいものとうへんぼくめ鍋の中へたゝきこんで杓子のむね打をくらはせるぞよ（頭取）東西〳〵まづ藝評にかゝりませう

さて、其句稿を見ると、一茶の句の製作の徑路に就て新に發見する所が少くない、且つ、成美其人の俳句鑑賞眼を知るたすけにもなる。

十二月廿四日、古郷に入

これがまあつひの栖か雪五尺

一茶の生活と感情とを說く人が引用せずにはおかない名高い句だが、一茶は「つひの栖か」といふ七字を再考して、「これがまあ死に所かよ雪五尺」とも作つて見、二つ乍並べて成美の評を乞ふたものだ。成美は、「死に所かよ」の方を朱で消し「つひの栖か」の方を選んで、其句の上に「極上々吉」と賞めてゐる。つまり此句は成美の評に依て定められたものだといふ事が

解つた。

「正月廿四日出、三月四日来」（文化十一年）と端に小さく覺書した句稿には

節分

（五十二の／六十の）坂を（越す夜ぞ／越るぞ）やつこらさ

やはり一茶が自分で定めかねて、斯う並べて書いてあるものを、成美は夫々に朱を引いて

五十二の坂を越るぞやつこらさ

とまとめてゐる。此時、一茶はじつさい五十二なのだから、其方が實感の强みはあるのだが、多分「五十二」ではまだ老ぼれの年でもなく「やつこらさ」といふ言葉を讀者にうなづかせるには「六十」位にした方が好からう。と、創作的のフイクションをしたのである。だが、「六十」では、概數らしく、概念的になつて、却て讀者にひどく力が弱くなる。成美が「五十二」といふ實感の方を選んだのは私も賛成である。

八歳の時

我と來て遊ぶや親のない雀

此句を、此句稿の中にやつぱり發見した時、私は思はずオヽと叫んだ。一體、此句は「おらが春」（文政二年、一茶五十七歳の作）に、自分が繼子として幼い困苦條を嘗めつくした事を書いた續に、

親のない子はどこでも知れる爪を咥へて門に立つ、と子どもらに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木萱など積たる片陰に蹲りて長の日をくらしぬ、我身ながらも哀也けり

我と來て遊べや親のない雀　　六歳　彌太郎

とある所から、一茶が六歳の頃の作として信じられてゐるものである。尤も「七番日記」文政十一年正月の部に「我と來てあそべよ親のない雀」と出てゐるのを注意したものは、一寸、をかしいぞと首をかしげずにはゐまい。（此事に就て疑問説を初めて發表したのは信州小布施の青年、上林氏であらう。）然し、何としても「おらが春」には「六歳、彌太郎」と明記してあり、何の意には如何にも幼年の氣持が出てゐるので、先づ六歳の折の作といふ事は動かぬ事になつてゐたのである。其が此の一茶自筆の句稿には、「八歳の時」とある。之は、六歳か八歳か、どちらが正しいかといふ問題ではなくて、實は六歳でも八歳でも、どちらでもよろしい。つまり幼時を追憶しての作だといふ事を語つてゐるものではないか。「八歳の時」といふ前書の「時」（「吟」ではない）といふ語、「遊ぶや」（「遊べや」ではない）といふ語調に氣をつければ、追憶だらうといふ推測は一層强められよう。尤も此句稿に並べて書いた中に

むら雀さらにまゝ子はなかりけり

といふ句もある。つまり此句と同じ氣持で此時一緒に出來たものに違ひあるまい。なほ「七番日記」の方で、其句の前後を見ると、

親のない一つ雀のふとりけり

手がらさうに子を連ありく雀かな

「七番日記」文化七年二月には

雀子やうきふししげき小竹藪

鳴よく／＼親なし雀おとなしき

雀の子を題として一茶が句作する時には必ず其親子の親しさに羨望の心を寄せないではゐられない、之が彼の悲しい感情であつて、其度に幼い時の追憶がまざ／＼と浮んできて、六七歳頃の彌太郎の氣持が實感として出るものと思はれる。成美に評を乞ふべき句稿に、幼き時代の作を殊更まじへて書くべき譯はなく、一茶自身で二度見せたかと思ふものには「是より次は先便に入尊覽候樣奉存候へども御報闕遲甲候間又々御面倒奉希候」と斷つてゐる位だから、此「我と來て」の句は、やはり此時代の作だと信じてよいゝと思ふ。即ち、彌太郎六歳の時の作ではなくて、一茶五十二歳の作なのである。六歳にして句を作つたといふ、かの童話的た氣持、今まで傳へられて一茶傳中の斷白い一節を抹殺することは、私としても、如何にも惜しいと思ふが、事實といふ立場から云へば、どうにも仕樣がない。又、一茶を一俳人（詩人）として見れば、其時其時の事實の報告以外に出られないといふ譯はなく、追憶や想像をも、一つの實感として打出し得る所に創作的の氣持があるのだとも云へる。此「我と來て」の句に對する成美の評は「小鷄ほしと啼きけむあはれにきこえ候」とあるが、點は一點である。此成美の評から示唆を得たものか、一茶は「おらが春」に

小さき土鍋のありけるを我膝の子にとらせて、取らせざりければ、雀の鳴くをききてよめるとなん

鶯よなどさはなきそちやほしき
小鍋やほしき母や戀しき　　貫之娘

と、其「雀」の句と文に並べて書いてゐる。

むまさうな雪がふうはりふはり哉

此句も此句稿にある。成美の評は「惟然坊が洒落におち入らん事を恐るゝ也」として一點。

菜の花や霞の裾に少しづゝ

「光琳が畫意」といふ成美の評は、うまく賞めてゐる。此句は二點。

一茶は、「かくしろし候へども、ちとも句らしきものは更に

不有候樣奉存候へども、たよりに尊覽に入れざるも、どうやら損のやうに覺へ候間くだ〳〵しくかんおう寺の宿の一ツもまぎれあたりも可有之かとしんじ候」とも書いてゐる。此氣持は當今の選者と投書家のやうだが、成美は一茶を門弟扱ひにはせず「評曰、君が句はみな一作あり、予がごとき不才は其所に心至らず、いはゞ活句といふべし、愚作の如きはまだるきように覺召すならん、可愧々々」などゝ答へてゐる。尤も一以下いづれも凡作なるべし」などゝ手痛く評してゐる所もあるが…………。

私は校訂の仕事に疲れると、ペンを擱いてぼんやりと庭の面を眺めたりしてゐた。少し前まで、鶺鴒の石と石とを磨るやうな鋭い聲が聞えてゐたようだが、今は泉水に添うた石の上に雀が二三羽、ちよんと乘つて日南ぼつこをしてゐる。少し向ふに萩の花が咲きすがれて、溫泉の香がかすかに漂うて來る。母屋の方から、主人の湯本氏が何か一抱へ持つて來るらしい姿が現れる。其足音で、そこの雀はパツト立つて、母屋を越えて、土藏の方へ飛んで行つてしまつた。

「土藏の中から又こんな物が出て來ました」

と主人は、私の側に古い寫本や懷紙や手束などを置いた。私が此春、來た時も主人は土藏から古い物を持出し、其中に希杖の日記など一茶の消息を知る好い資料になるものを見出したので「もつと何かあるに違ひない」と私は云ひ、主人も「其中に捜して見ませう、然し大きな葛籠の奧や、梁の上に積重ねてあるので、取出すのが容易でないのです」と云つてゐたが、先づ稍手近な物を取出して來られたと見える。私は其かび臭い古いものにも、一茶時代が匂ふてゐるやうな氣がして、丹念に手に取つて見た。「西行上人山家集　全」といふ寫本、本文の文字は一茶ではないが、表紙をめくると、確かに一茶の手蹟で、

「寶曆十三年五月かのとの酉一茶出生」

と書いてある。一茶の生年月日に就ては、元來、疑問とされてゐたので、之は有力な資料であると思ひつゝ、又、そこの小さな折本「増補奇人、俳士年表」といふものを取上げると、其題簽に［一茶］といふ小さな印が捺してあるのがめづらしい。之は一茶が所持してゐたものに違ひないと、先づ興味を感じて、其一枚摺の物をひろげて見る。縦を十割に仕切り、甲乙丙丁……壬癸まで、横を十九割に仕切り、最初は「正保（甲申）芭蕉生于伊賀」とあつて、一割々々に俳人の出生、死歿、俳書の出版等を記し、文化二年、即ち本書の上梓された年までの事があつて、以下は後から各自が書入れに便するやうに空白として

ある。所が、其細かい版行の文字と同じ大きさの細字で、偶々に書込んだものがある。其が紛れもない一茶の文字なのである。私は、先づ寶暦十三年の所へ目をやる。――是れ！是れ！

寶暦十三年（癸未）　寶茶翁七月十六日卒
　　涼佛明題集撰
　　五月五日一茶生

此「五月五日一茶生」は彼が自身で書入れたものである。一體、一茶の生年月日に就ては、「新家記」といふ斷片的の文稿に、伊勢崎附近の一貧家に泊つた記事のうち、「去し佛の法名と見えて、夏月短養信士、年十二才、俗名彌太郎としるしぬ、つく〵〵指折てかぞへて見るに我と同年、幼名もまた同じ、あまりのいぶかしさに生れし月日を聞けば五月五日、是れ又同日也」とある由、此文から五月五日と解つたといふ事は勝峯晋風氏の「一茶新年譜」に書いてあるが、此事を發見したのは信州長沼の某氏（吉村氏から聞いたが記憶を逸す）だといふ事である。で、私の見出した是は、一茶傳研究に新事實を寄與するものではないが、たゞ、一茶が自分を古俳人の年表の中に加入せしめて、自筆で月日を書いてゐる所が面白いのである。なほ外に、一茶の書入れもないかと見て行くと。――ある！澤山ある！其中に

寛政七年　一茶　旅拾遺選
寛政十年　一茶　さらば笠選

とある事だ。寛政七年は一茶、三十三歳、四國に遊んでゐた時代、それから寛政十年（三十六歳）までは大坂邊に放浪してゐたのだが、其間に「旅拾遺」「さらば笠」などゝいふ著述があるとは、これは初めて解つた事實である。これから

文政二年　十月十六日一茶中風起

と書いて居る。之は在來、文政三年と信じられてゐたものだから、研究問題である。而して、文政十年の所には、「一茶十一月十九日卒」と、これは他人の手を以て自分が書込まれてゐる。

或日、又、主人の湯本氏は土藏から、古寫本や一茶時代に刊行した版本を持出して來た。其時、蕪村全集の編者、穎原退藏氏が私を訪ねて遊びに來てをられた。二人して其古書籍の目ぼしい物とさもない物とを撰分けた。而して、其等の一山は穎原氏の座敷に殘して置いたが、翌る朝、氏が私の室へ來て、「こんな物が見付かりましたが……」と云はれる。其本の奧書を氏の示すまゝに見ると、

素明坊　一茶書寫

として〔二六庵〕〔一茶〕といふ落款が捺してある。本の題は

「其日くさ」、内容は「風早雖陳論、竹阿述」といふ所からはじまる。題簽だけは前日、私も一瞥したのだが輕く見てすぎた。須原氏も、床にはいつてから手すさびに抽き出しては讀んでゐる中に、「菊明坊一茶」にぶつかつたのだといふ。私も驚いて、其筆蹟を見ると、文化文政時代の一茶の筆蹟とは勿論違ふが、天明寛政頃のものとは確かに類似してゐる。私は、數日前、長沼の住田祥和氏（一茶の門人、素鏡の曾孫）方で、一茶が天明七年（廿五歲）の時に筆寫した「白砂人集」を見せて貰つたが、其筆癖と是とは殆んど同じであることも思ひ起された。凡て脚を廣く踏張つたやうな字體で、殊にゐの字とにの字とに特徴がある。「是は本物らしいですよ」と私は云つた「本物とすれば珍しいが何處にあつたんです。」

「外の寫本と一緒にはりの上に載つて鼠の糞だらけになつてゐたのです」と主人は云つた。「之を白砂人集と對照してしかと確めたいものです」と須原氏は云つた。私が住田氏へ紹介狀を書いて、須原氏が戻り路に寄られる事になつた。須原氏は本の表紙をめくつて見せた。其裏に「むさしなる菊明のぬしに……かりの庵をとぶらはれて……」と讀まれる。一體、一茶が江戸時代に「菊明」と號し二六庵竹阿を嗣いだといふ事は、「俳諧寺一茶」の著者、東松露香氏が云うてゐるが、其考證の據る所を擧げてゐない爲に、勝峯晋風氏は之を否定し、當時、菊明といふ俳人は居たが一茶とは別人だと斷じてゐられる。其問題こそ此本が一茶の眞蹟だと定れば、難なく決着する、其鍵としても興味がある。

其日の午後から、主人湯本氏と須原氏と私と連立つて、中野町なる小林萬次郎氏方へ「おらが春」の眞蹟原稿を見せて貰ひに行つた。「おらが春」は一茶の原稿其まゝを版下にして木版にしたとも信じられてをり、又、其はすき寫しを版下にしたので原稿は保存してあるといひ、其を決定するには一見に如くはないからである。此日は實に朗かな秋日和だつた。中野といふ町は、本通りが廣くて坂をなし、左右に並木があり、並木の下を細い流が走つてゐる。町筋は、縱にも橫にも幾條かあつて、此邊の山中の人が需むる物は大抵爰で應じられさうな店が軒を接してゐる。午後の陽光が强く照つて、町の片側はカツと明るく、白壁の家や藏などがあり、片側はポツテリと陰つて、庇を深く、重たさうな格子戸をたてた家が並んでゐる。小林氏の御宅は、さうした家の一軒で、ひえ〳〵として暗い土間から上つて、緣傳ひに奥に導かれると、そこに明るい日の當る池があり、鳩が下りて鳴いてゐる、其座敷に一茶の軸が掛けてあつ

た。

身の上の鐘と知りけり夕涼　　人も一茶

「身の上の鐘とも知らで……」とも他にある句。此「人も一茶」の自畫像は、彼が好く描くものではあるが、筆觸がわりあひに丁寧で、顔付も他の其より若く見える。さて、桐の箱入にして、今は卷物に仕立てゝある「おらが春」の原稿は取出された。明けて見た。すぐに解つた。寸分の疑ふ餘地もない眞蹟そのものである。句の下に、朱で圓いしるしが捺してある。其も、私が現に校訂してゐる「株番」其他に捺してあるものと全く同じもの である。それにしても、在來流布してゐる木版本が、よくまあ此原稿通りに出來たものだと思ふ。寫眞木版の無い時代には、之をすき寫しするより外に方法はないのだが、其が實に眞に入つてゐる。眞蹟原稿には、あとから繪を描いて入れるつもりであつたのだらう、一ページ宛の空白が三ケ所ある。之が木版本には追込んである。又、句の下にある朱のまるが脫かしてある。又、卷頭の細字の高さをつめて行數をふやしてある。僅かに此三ケ所だけが眞蹟と木版本と較べて目につく差違である。挿繪の稚拙さの味とか、筆觸のかすれの味とか、微細な點を云へば兎も角、大體を云へば、在來流布の木版本で一茶が原稿其儘といふ味は殆ど遺憾なく味ひ得ると思ふ。

私達は、それから湯田中まで山を越えて歩いて歸る事にした。稻田はほんのりと黃ばんで、歩けば少し汗ばみ、既に快い位そよ〳〵と吹く微風にも、稻の穗は動かぬ程の重さになつてゐた。田の畔には野菊や蓼の花が愛らしく咲いてゐた。山道にかゝつてからも、其の紫や赤やの草花は、道端に咲き續いて、中にも水引のすいと伸びたのや、露草の恥らうやうなのも美しかつた。草の中から大きな石が腹を出して西日を受けてゐる其處には必ず蜻蛉がとまつて、翅の先の四つの黑い紋をじつと見せてゐた。平地の稻田と桑畑とが錯綜して一眼に見渡されて來た。桑の色はまだ濃い青さで、さすがに養蠶國だけに桑畑の多いのが著しかつた。正面に、大きな山の容がどつしりと二つ、澄みきつた空に盛り上つてゐる。それが飯綱と黑姬とだつた。黑姬山のこちら側の麓に、一茶の故鄕の柏原はあるのだが、斑尾山と其に續く山とに隱されてゐる。其右手には高社山があり、何處を見ても山だらけ、稻田と桑畑とが見おろされるといふのも、山で圍まれた間の僅かな盆地なので、そこの向ふの山裾寄りに、銀の絲を束ねて展べたやうにきら〳〵と光る川がある。それが千曲川だつた。其流に添うて電車が走つてゐると、さう云はれて見れば成程、小さな四角い兜蟲のやうな物が快速力で動いてゐる。それは飯山へ行く電車だつた。今日の信州は

到る處に貨車が喰込んで行くが、一茶は此の山と山との間を縫ふて、此邊の門人を歷訪してあるいたのである。

一茶は柏原を出て、當時の善光寺街道を長沼まで來ると、漸く山といふものゝ冷たい壓迫から少しく手を弛められたやうな長閑な氣になつて、千曲流域の平地をなつかしがつた事であらう。長沼には素鏡、春甫、松宇、魚淵、掬斗、雲士、二休など、彼の友人門弟が一番多く居た。淺野には、文虎と栗之が居た。六川には知洞が居た。中野には梅塵と梅堂が居た。それらの村々は、皆、私達が爰から眺めてゐる稻田と桑畑との間に指摘される。或日も一茶は淺野に文虎を訪うて、それから湯田中の希杖を訪はうと、二人連立つて來た。

凉風にひんがしへ吹飛されしは水無月十七日なりき、其日は空に雲なくて、俳諧寺上人の杖ことにかろし、千曲河に望んで船呼ぶ聲は、幾世の絆ぬる岸の老松にこたへ、月亂山に飛りて影凉しく、常よりもあはれ深き曙になんありける、行く行く互に智惠袋の底を敲ていはく、支考はうそ商人、其角は酒狂人、獨鈷鎌首はむだ爭ひに月日つひやすなどゝ、口に年貢の出ざれば一々褒物になして、興に乘じて箱峠の箱を踏破りつゝ……

と、之は文虎が書いたものだが、湯本氏方の反故の中から私は見出した。その「箱峠」といふのは、今、私達が歩いてゐる此山道なのである。一茶が湯田中に來る時は、大抵、中野に出て、此山道を越えて來たものに違ひない。峠の頂きは、巖石を切り通して、箱の兩側のやうに迫つてゐる。箱峠といふ名はそれから來てゐるのかもしれない。峠の下り道は東に向いて日蔭になつた所に、大きな簇をなした薄が白い穗を立てゝゐるのも美しい。少し下りると、稻をぎつしりと詰めたやうな小さな盆地となり、後方の山の切れた所から流れ込む西日が湖を湛へたやうである。つめたさうな水が、道に沿うてとう／＼と走つて居り、農家が二三軒づゝ、道端のそこ／＼にある。其垣に、赤一色の朝顏の花が、もう夕暮近いのに凋みもせずに咲いてゐるのは、紙でゞも作つたやうな堅い感じがするが、其は又、一茶が好く自畫讃の「朝顏も一茶」に書く、あのぶつきらぼうの朝顏の花の感じでもあつた。箱に石を輪にした車をつけ、當歲位な赤子を入れ、藁の繩をつけて、五六歲の子が引つぱつて行く。手製の乳母車といふ譯だ。ごろ／＼と強く響いて、赤子の頭には手荒すぎやうと思ふが、其子はすや／＼と眠つてゐた。

「一茶もこんな中にはいつて居たんでせう」

「いや、一茶は、載せられる方でなくて、引つぱる方だつたんでせう」

そんな話をして笑ひながら歩いてゐるうちに、星川の河原に出た。此川は上州との境の草津峠の方から流れて來るもので、

水量は少いけれども、河原は廣い。石の間から草が伸び、蟲がしげ〳〵と鳴いてゐる、此蟲の聲は冬になつても絶えないといふ事だ、地下に溫泉のぬくみがある爲であらう。こゝらは、もう湯田中の内である。

田中河原といふ所は田のくろ、あるは石の陰よりめでたき湯のふく〳〵と出でゝ、たゞ徒らに流れ散りぬ、あはれ、此もの一つなりとも常の村里に、ふと湧きたらんには、地獄にて佛拜むよりもまさりて喜ばしからましを、此里人はさらに湯とも云はざりけり。湯のある所は山險ながら、絲竹の聲常にして老の心も浮き立ちて、さながら仙窟に入りしも斯くやあらんと覺ゆ。十娘五嫂の舞ひ、遊女傀儡の聲、時ならぬ花の咲く心地す、かの上人の菩薩と貝給ふもむべなる哉、此樓に上れば一時に衆苦を忘る、不思議の世界也けり

三絃の撥で掃きやる霰かな

一茶は斯う書いてゐる。其頃は湯田中の溫泉宿のどこにも湯女が居たといふ事だが、明治の初年に遊廓を作つて、それは下手の離れた所にある。私達は河原から上るために、遊廓の裏手の廊下を通つた。そんな所にも桑が作つてあり、又、蕎麥が花をつけてゐたりした。

其後、長沼に住田氏を訪ねた筈の嶺原氏からは「豐野驛にて」として葉書が來た。

住田氏は朝から長野へ出かけられて御不在でしたが令室の御好意で白砂人集、たねおろし等拜見出來ました。白砂人集の筥の蓋をあけると、そこへ現れた題簽の文字は紛ふ方なき「其日くさ」の筆蹟です、私はすつかり嬉しくなつてしまひました、あの竹阿迄の文は一茶青年時代の筆と斷じて好いと思ひます（下略）

是で、一茶が二十七八歲の頃、江戸の二六庵社中にあつて、菊明坊といふ別號を持つてゐたといふ事は明かな證據を得た譯である。

私も主人から依頼された校訂の仕事の大體を終へたので、あしたは歸京しようと思つてゐる。「そのうちに暇があつたらば、土藏の中の下積になつてゐる古い物を出して置いて下さい、まだ〳〵、うちの土藏からは一茶のどんな物が飛出して來るか解らないから…」と私は主人に云つた。稻穗をあさつて、腹をこしらへて戻つて來たらしい、夕方の雀がたくさん、土藏の屋根の上で、チユチエ、チエチユツと鳴いてゐた。

（十五年九月三十日、信濃下高井郡湯田中にて）

見世物研究
——技術篇——

朝倉無聲

第十二　武伎

寛文年代に京都の觀場で、居合を初め捕手や兵法等の武伎を見世物として興行した事は、寛文四年作『出來齋京土產』四條川原見世物の條に、居合、兵法、捕手とあるので知れる。居合は居合拔きであるのは云ふ迄もないが、當時兵法と云つたのは、後の劍術の事で、捕手はトリテと訓み、元祿三年版本『人倫訓蒙圖彙』に「とりて」とあつて、敵を投げ倒す態を畫いてゐるから、やはり即ち柔術の一名である。この武伎を初めて興行したのは、何者であるか詳でないが、當時の荒々しき人氣に投じて、大いに行はれたと見え、延寶年代から藤牧嘉信といふ者が、上方と江戸とを交替に武技を興行した。當時嘉信の名聲は四方に喧傳せられ、信章（後改め素堂）の『奉納二百韵』（延寶四年版本）に

明は花入江の雁の中がへり・やはら一流松に藤まき。

西鶴の『大句數』（延寶五年版本）に

小芝居に虎ふす野邊や圍らん・岩にゐる鷲もとり手兵法。

同人の『大矢數』（延寶九年版本）に

科なきものを捕たりの聲・看板に藤牧可心と打れたり。

とのやうに、俳諧に詠込まれた程である。嘉信の興行が元祿年代まで續いた事は、貞享四年版本『吉原源氏五十四君』遊女藤浪を評した條に

藤といふ字にすがりては、嘉信が打太刀に出づべきかつぽくじやといひしは、御手の太う荒れしゆへか、床の事痩せた男には用捨あるべし。

と見え、又元祿八年版本『俗徒然』江戸堺町の光景を叙いた挿繪に、中村勘三郎芝居に向つて、閻魔堂の見世物に隣り、太夫藤牧嘉信居合やはら兵法の看板を揭げてゐるのを見ても知れ

やう。かく流行を極めた武伎の見世物も、其後絶えて興行されなかつたのは、人心次第に華奢に流れ、かゝる殺伐の見世物には、興味を惹かなくなつたのに起因するものであらう。併し武伎の中やはら即柔術から工夫された請身の術は輕業師に、又居合は大道香具師によつて、其後永く演ぜられたのである。

請身の術といふのは、正德年間版本『和漢三才圖會』貞享元祿の頃大阪大道藝人の條下に

又人あり、重きを腹背に載せ、或は大臼を腹の上に置き仰ぎ臥し、杵を以て之を搗かす、或は斧を腹の上に置き、二人之に登りて踊る、蓋し此は體術より出づ、俗に之を受重射と謂ふの類か。

とあるもので、體術は即ち柔術である。天和年間版木『役者繪盡』に、當時有名の輕業師飛龍勝之亟が、其身を仰むきに手足で支へ、其腹の上で弟子が杉立ちをしてゐる態を畫いてゐるのが、恐らく最古のものであらう。其後明和六年淺草寺境内見世物の中に、難波珍藏が腹の曲とあり、又安永五年中洲新地見世物の中に、新之助は一身に骨なく、どう突き請身は五臟金鐵にや有らんとのやうに、專ら輕業師の演じたものであるが、化政度からは力持の附屬となつたのである。


元祿版『俗徒然』所載

居合拔きを大道香具師が演じたのは、富山の返魂丹を鬻ぐ松井一家の者が、元祿寶永の頃から三都の遊観場で、其伎を以て人集めの一策としたのが始めであらう。續いて安永天明度には、齒拔き齒磨賣の茗荷屋門次郎が、兩國に出店を構へ、居合拔きに高名であつた。この茗荷屋も二代目で斷絶した後は、長井兵助が代々淺草の御藏前で、是亦齒を拔き齒磨を商ふ御愛敬に、居合拔きで人寄せとしたのであるが、文政度に御成御用仰

付られ、將軍家や若君が淺草御成の節は、得意の居合拔きを上覽に供したのである。かくて明治維新後も尙ほ五代目兵助が、斯業を繼續してゐたが、其店の退轉したのは、恐らく明治の中程であらう。

第十三　珍相撲

珍相撲とは、女相撲や座頭相撲のやうな珍妙の相撲を指すのであるが、其初め上方で興行されたらうと思はれるものゝ、未だ確證を得ない。女相撲と座頭相撲とが、初めて江戸兩國で興行したのは延享二年で、それには『流言記』延享二年落首柳營役人評判謎の條に

一、曲淵越前守を見て女の角力じやといふ、其心は兩國ではほめれど一圓力がない。

延享三年版本『俳諧時津風』に女角力との題で、「男より勝色ありや女郎花、」又座頭角力との題で、「のばす手はたてるやうなる柳かな」との旁證がある。大坂に於ける珍相撲の文籍に見えたのは、『浪華見世物年鑑』明和六年の條に、難波新地曲馬前にて盲人角力、坂町裏にて盲人と女角力とあるのが始めである。明和八年版本『世間花物氣質』に、

力業を習ひし女郎も、同じ大坂難波新地に女子の角力興行の關に抱へられ、坂額といふ關取、三十日百五十兩にて先銀取れば云々。

とあるのに據ると、女子側の大關は坂額と名乘つたが、打出し後京都で興行した事は、明和七年版本『孝行娘袖日記』に

一、迚もかやうな儀は、上方でなければ宜しう御座りませぬ、御關及びの通り、近年女の相撲などさへ出來ました花の都。

とあるので知れやう。當時江戸でも盲相撲と女相撲とが、淺草



享保版『江戸名物鹿子』所載

や兩國で興行されたのである。『街談錄』明和六年淺草寺境內見世物の條に

盲と女相撲、盲の角力(東の關琵琶ヶ嶽道引、西の關琴ヶ崎遊曲)。

又『續談海』明和六年の條に、當年兩國橋にて座頭の角力取を致し、大に時行るとのやうに、座頭相撲の流行したのは、座頭即ち盲人がうろ〳〵と探り手に取組む剽輕な可笑味に落ちを取つたがためである。されば『編年雜筆』明和六年夏落首役者見立評判の條にも、人のおかしがるものは、兩國の座頭相撲と澤村宇十郎と記したので、宇十郎は當時有名の道化形である。

この座頭相撲と同時に、淺草寺境內で興行した盲と女相撲も亦日々大入りであつたが、間もなく寺社奉行所から停止を命ぜられた。其理由は『藝海聞くのまゝ記』に據ると、一座の女方は孰れも醜い大年增であつたが、中におくらといふのは、未だ年も若い上に、容貌も人目を惹くに足る程であつた。或時好色の定連申合はせ、興行人や世話人に金子を與へ、當時の通言で天の岩戸といふ一件を依賴したのである。其一件を賴まれた世話人は、兼ねておくらに懸想し、度々口說いたのであるが、應じないのを恨んでゐた折柄なので早速に承諾し、豫め座頭共に內含め置いて、當日取組の節一人娘に聟八人と號け、おくらに八人の座頭をかゝらせ、衆人環視の裡に醜態を演ぜしめたのである。かゝる事が再三に及んだので、終に寺社奉行所から、相撲小屋取拂ひを命ずると同時に、興行人と世話人とは、孰れも處刑されたのである。

安永から寛政へかけて、黃表紙や滑稽本中に、女相撲や座頭と女相撲の事を脚色んだものが數種出版された。即ち安永九年版本『空音本調子』と天明五年版本『鎌倉山女角力濫觴』とに女相撲があり、又天明七年版本『新發幸大寺不實錄』と寛政二年版本『玉磨青砥錢』とに、座頭と女相撲の事を戲作してゐるが、他に旁證がないので、當時果して興行されたものか、又は明和のそれに據つて、作爲したものであるかは明かでない。

寛政度に兩國や芝神明社地で、羊と女の角力が興行された。『寛政珍話』當時見立二幅對の條に、珍らしきものは、蝙蝠の輕業と羊の角力とあるもので、蝙蝠の輕業は、寛政元年葺屋町で興行したのである。柔順であるが兎に角獸と女との角力といふ所が人氣を呼んで、夥しい評判であつたから、並木五瓶作脚本『富岡戀山開』芝神明境內の段に

「この神明の吹矢の化物も久しいものぢや、
「此方は何ぢや、羊と女が角力をとる見世物ぢや、「そりや見たいものぢやが、まだ初まらぬさうな。
「こなさんは此神明や淺草でよく見る顏ぢやが、こちの金太郎と何を談合ふのでごんす、

「イヤ何も談合ひは致しませぬ、わしもひつぱりもので、人に知られた桂川屋の桃九郎といふ者でござります、今日の物日をきつかけに、此間兩國で見せて居りました羊と女の角力取、それを此神明へ持て來て、今日初日を出さうと、此羊を引いて來る道で、あの人が私に貸してくれとの事なれど、肝腎の此羊を貸しては、跡の評判が惡うなります故、貸す事は成らぬと云へば、立つのイヤ立たぬのと、無理ばかり云はるゝのでござりまする。

とのやうに、芝居狂言の一場面ともなつたのである。

右と同じ獸と女の角力ながら、文政五年五月に名古屋柳薬師で興行した熊と女の角力は、たゞ棒を振合ふのみであつたから、見映のしなかつたがためか、左迄には流行らなかつた。

文政九年の冬から、江戸西兩國廣小路で興行した盲と女の相撲は、孰れも、大坂下りの手取り者であるし、久々での興行であつたから、連日永當〳〵の大入りであつた。當時町々へ配つた番附に



文政版『盲と女相撲引札』所載

盲力士　武者振り、向見ず、枝ケ嶽、笛の海、佐渠手、夏うれし、杖の音、足駄山、もみおろし。

女手取、玉の越、乳ケ張、花の山、知惠の海、姥ケ里、腹櫓、貝ケ里、色氣取、美人草、としの甲、穴ケ淵。

行司　士村正兵衛、目倉島、美面山。

との珍力士名には、思はず破顏一笑させるが、其番附に添へた引札に

盲滅法海大無雙の曲取り、雙方相手を探りあてゝの大勝負、殊更女子太夫の儀は、あの表にて御評判請けましたる手取りにて、風の柳の手弱かに、種々手を盡し御覽に入れ奉り候。

との文句を讀んだ物見高い江戸ッ子は、何條默視して居やう。我れ一と見物を競ふたものと思はれる。それは翌十年初春新版の讀切り合卷本『豐年滿作豆』に、歌川貞秀筆で、當時流行商人の隨一たる滿作豆賣が行司となり、盲と女角力の光景を描いた口繪があるのに據つて、推知する事が出來る。

嘉永元年の春から大坂難波新地で、名古屋上り女相撲の興行

があつた。從來の女力士は、島田や丸髷に結つてゐたが、是は又思ひ切つた男髷男ましく、華美の廻しをメ込み、美聲で甚九節の手踊に觀客を呼んで、大當りを取つたと見え、當時大津繪節の替へ唄として

へ難波新地の溝の川、力女の花競べ、數々の盛んの人氣、取結びたる名古屋帶、尾張の國から上り來て、御目見へ藝の甚九節、打揃ひつゝ拍子やう、姿なまめく手踊に引替へて、力爭ふ勢ひの烈しさと優しさは、裏と表の四十八手。

との文句が江南の遊里で流行つた程である。『藤岡屋日記』嘉永二年四月十一日から六十日の間回向院で、お竹大日如來開帳の節境內見世物の條に女角力とあるのは、右の名古屋女力士が、更に江戸へ下つて興行したのである。かく流行した珍相撲も、明治五年三月十九日に至り、男女相撲の見世物を禁止められた結果、終に絶滅したのである。

第十四　力　持

力持は百貫目に餘る大石を頭上高く差上げ、或は碁盤で蠟燭の火を消すなどの力業である。延寶四年版本『大日本王代記』延寶二年の條に、江戸堺町に四ツになる子の力持、石臼に錢貳貫乘せ持上げるとあるのが、恐らく力持を見世物とした始めであらう。其後中絶してゐたが、寶曆八年の冬に兩國廣小路で、美少年が八反幟を曲差しする力持が現はれた。『街談錄』寶曆八年兩國で唐鳥見世物の條に

此時同所に八反幟を持ち、腮にて止め肩にてとまる、年の頃十四五歳にて、殊に美童なり。

とあるが、『續談海』寶曆八年冬の頃兩國橋前後にて見世物の條には、五端幟を十六七の男いろ〳〵にさして見せ候由とあつて、年齡と反數を異にしてゐる。蓋し前者は大田南畝が實見のまゝを記したもので、寶曆年間版本『冬至梅寶曆評判記』に、八端幟に碁盤娘との旁證もあるが、後者は後人の編纂したものであるから、『街談錄』の說を至當とすべきである。

明和元年の秋江戸音羽護國寺で、秩父三十四番觀世音惣開帳のあつた時に、同境內で種々の見世物が興行された。其中に女力持のあつた事は、『秩父開帳福溜短歌』に、子供角力のいさぎよき、あるは女の力持とあるので知れるもの〻、其藝名は素より、如何なる曲を演じたかは明かでない。是恐らく後に流行した女力持の濫觴をなすものであらう。

明和六年に淺草寺境內で、力持の興行があつた。それは『街談錄』明和六年淺草寺境內見世物の條に、早川虎市の力持輕業、北濱の力持とあるもので、ともに江戸の者ではなく、早川

は名古屋、北濱は大坂北濱の連中であるから、當時既に關西でも力持の流行してゐた事が知れる。

安永五年五月から、江戸堺町楽屋新道で興行した女力持太夫柳川ともよは、手弱女にも似合はぬ强力で、大八車に五斗俵五俵載せたのを頭上高く差上げ、又は仰けに寢て腹の上に玄米入りの大臼を載せて搗かせ、或は碁盤を片手に打振つて、百目蠟燭の火を消すなどの曲を演じたから、忽ち素晴らしい評判となつて、力持興行以來空前の大當りを取つた。尤も是にはともよが岡場所出身といふ點が、大いに興味を惹いたのも亦一原因であらう。併し女力持の小屋前には「大坂下り女ちから わざ柳川ともよ」と染抜きの大幟を立てゝ又引札にも


安永版『敵討垣衣摺』所載

今度大坂表より御江戸見物の爲に罷下り候を相頼み、各様へ御慰みのため御覽に入れ奉り候。

と記したのは、畢竟表向きの口上で、其實は大根畑の私娼出身であつた。

安永五年版本『力婦傳』に據ると、ともよは越後國高田在の水呑百姓の一人娘であつたが、十兩の借金が拂へないために、六反の田を金貸に取られる事となつた。ともよは父の悲歎を見るに忍びないので、隣家の主人に頼み、江戸私娼巣窟の一たる大根畑（現今の湯島新花町）の柳屋へ、六ケ年の勤めを金十兩に換へた。そこで早速廓へ出すと、容貌も醜くはない上に、雪國生れ特有の餅肌の太り肉、ぼつとりとした姿を見立てゝ、遊興する客も多かつた。或日柳屋の内儀が、酒屋から屆けた四斗樽を、酒部屋へ運ばせやうとしたが、生憎若者が居ないので、困つてゐるのを見たともよは、さながら手鞠でも持つやうに輕々と提げ、酒部屋へ入れたので一家中を驚かした。この力量を見た柳屋の亭主は、是を女力持の見世物としたなら、大當り疑ひなしと思ひ立つとゝもに、懇意の香具師とも相談して、ともよは三ケ月間力持の見世物に出て

くれるなら、年季證文を卷いた上に、歸國の旅費も出さうと勸め込んだ。ともよは日々故郷に殘した老父の事を打案じ、何日足の洗へるか知れない切店女郎の身を歎いてゐた折柄であつたから、早速に承諾したので、堺町の觀場へ出演する事となつたのである。

當時ともよの評判は市中を動かして、日々大入りであつたから『續談海』安永五年ともよ力持大當りの條に、外にも一兩人強力女出るとのやうに、紛らはしい藝名を付けた女力持が、江戸の兩國や大坂の道頓堀へも現はれた。兩國へ出た力持の女太夫は、安永六年版本『中洲雀』に、巴代が力強しといへども、綱代が顏の美なるにおされとある者で、肝心の力は餘程劣つてゐたが、美貌で客を呼んだものらしい。又大坂の道頓堀へ現はれた女力持は『攝陽年鑑』安永六年の條に、當夏力持ともへ大流行とあるもので、當時ともよ力持の評判が、大坂までも熱いてゐたから、かく紛らはしき藝名をつけ、江戸下りなど、吹聽して、興行したものであらう。

天明八年五月から江戸葺屋町河岸で、京下り女太夫早雲小金が、十五匹の大蛇を曲差しにした力持の事は、既に輕業の條下に述べたから、爰には省略する。當時其附近で竹桝粂五郎が力持を演じたが、天明九年版本『中洲の華美』に、樂屋新道の竹桝粂五郎が力持は、小人島の見世物を持にすとあるの外、目錄の記錄はない。

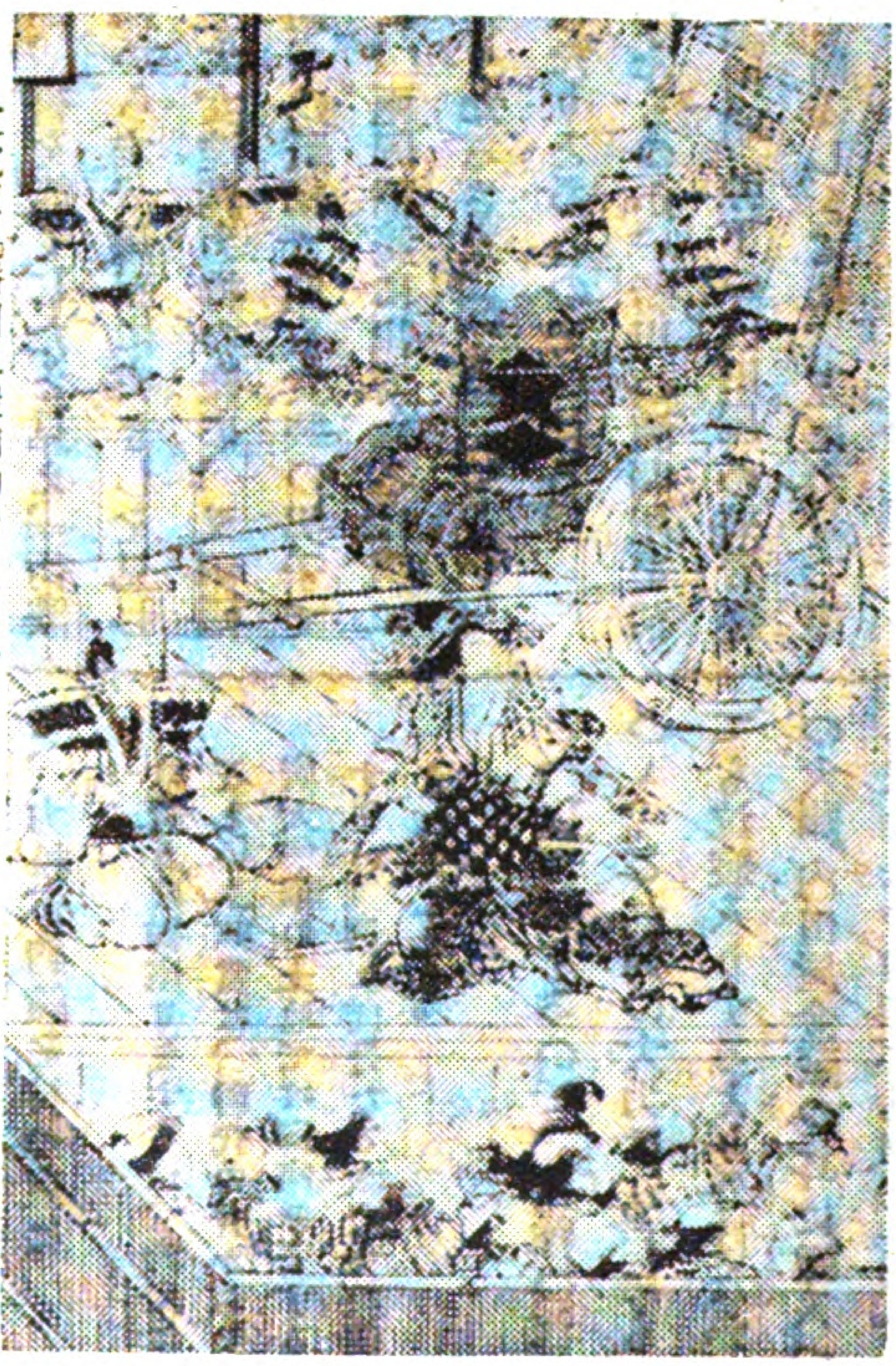
文化元年二月から、尾州大須門前で興行した女力持は、安永のともよを凌ぐの強力であつたと見え、『猿猴庵日記』文化元年二月の條に、大須門前にて女太夫力持、傳馬船に俵をのせ人をのせて差す、未聞の力といふべしとあるが、其藝名の知れないのは遺憾である。

文化六年正月から、江戸淺草柳稻荷向ふの中茶屋に出演した力持女太夫の淀瀧は、力持は兎も角稀代の大女だといふ所から、江戸の町々は是沙汰のみで、連日見物が群集した。是も子細のあることとで、淀瀧の前身は品川宿鶴屋抱の飯盛女蔦野といつて、前々から評判の高かつた者であるが、遊興をしなければ、見られないのを遺憾としてゐた連中は、今度其大女が見世物に出たといふので、我勝ちに押寄せたのである。

淀瀧の本名はおいたといつて、下總國小金村の百姓新七の娘であるが、家極めて貧しいので、文化三年の暮に出府し、所々の遊里へ遊女奉公の御目見をしたものゝ、餘りの大女なので、誰も抱えるものがなかつた、こゝに品川本宿二丁目（里俗橋向ふ）の四六見世（揚代夜四百文晝六百文である所から發した名目である）鶴屋の亭主は機を見るに敏な男であつたが、大女

つたの困つてゐるのに附込んで、安い給金で召抱へた上、源氏名を蔦野と付けて、文化四年二月から夜鷹を張らしたのである。蔦野は當年二十三歳、身長五尺八寸五分、從つて衣服の對丈も六尺二寸であつた。斯くばかりの大女であるが、全體よく釣合ふて見苦しくはなく、容貌も亦美しかつたので我れこそ大女に見參せんと、通ふ遊客の夜毎に多かつたので、鶴屋は大いに利潤を得たのである。當時蔦野の捺した手形を見ると、長さ七寸二分に幅五寸の大掌である。されば蔦野は馴染と會の初客とを問はず、いつも兩手を袖に入れ、又足を出すさへ恥ぢたとは流石に女心である。

かく蔦野の評判が高かつたのを當込んだものか、翌五年の冬に湯島天神の社地で、大女の力持を興行した。當時瀧澤琴嶺（馬琴の息）が、目擊したまゝを記した『兎園小說』品川の巨女に據ると、普通の女よりは少し大きかつたが、其手は蔦野が手形よりも大いに見劣りがして大きさの差別のあるものとは見えなかつたとある。されば此見世物は、香具師の奸策で、評判の品川大女は是であらうと、觀客を惑はした贋物であつた。


文化版『播州皿屋舗物語』所載

贋物でない品川鶴屋抱への蔦野も、月日の經るに從ひ廢れたので、終に香具師の手に渡つたが、文化六年の正月から、淺草柳稻荷向ふの中茶屋で、女力持の興行となつたのである。其時小屋に掲げた看板に、「大女力持太夫淀瀧、奧州の產、身の丈七尺五寸」と大書して、大女の力持する態を書き、其傍に巨大の駒下駄を吊したのは、客足を惹くとの禁呪ひではない、是ぞ大女の象徵であつた。偖二十四文の札錢を拂つて小屋へ這入ると、舞臺の上手に米俵、釣鐘、碁盤等を並べ、下手には小屏風を立て、其中で淀瀧が化粧をしてゐる。やがて開場を報ずる太鼓の音とゝもに、四十歳位の小男が舞臺へ現はれ、大女淀瀧儀身支度仕ります間、桝の曲持を御覽に入れ奉りますと口上を述べ、其身は仰けに兩足を高く差上げ、小足の裏で桝を蹴つ廻しつ、種々の曲持をする。其曲が終る

と丁度淀瀧は化粧を仕舞ひ、衣裳を着更へる所なので、小男は夫を手傳はんと、四斗樽の上に乘つて、衣紋を揃へてやるさまは、小兵なだけに夫だけ淀瀧は格別大女に見えたといふ。それから淀瀧は舞臺へ出で一禮の後、釣鐘を頭上高く差上げ、又は丼鉢を片手に、蠟燭の火をあふぎ消し、最後に五斗俵へ筆を結び付け、文字を書くのであるが、書を能くしたと見え、『街談文々集要』に、大女淀瀧手跡も拙からず、扇面に書きしを見し事ありと記してゐる。『武江年表』大女淀瀧力持の條に、又兩國廣小路へも出たりとあるのは、同名の贋物で然も女裝の男子であつたことは、『武江年表補正』に、兩國橋邊に出でたるは男にて、鬘をきて鉢卷をし、白粉を塗りたるさま、穢き事限りなし、これも看板に大なる駒下駄を出したりとあるので知れる。

右淀瀧の力持流行が動機となつたものか、新川の酒問屋を初め、神田鎌倉河岸の豐島屋や、神田明神下の内田屋の若者連は、四斗樽を藏へ運ぶ暇々に樽を曲差しゝては、互に力量を競ふ事が、大いに行はれた。それで我れ劣らじと練習の結果は、終に玄人を凌ぐ者さへ現はるゝに至つたが、其大關ともいふべきは、内田屋の金藏と豐島屋の滑藏とであつた。

文政度は力持界の全盛期で、連年新顔が現はれては、趣向を凝した曲や力量に、去年のレコードを破り、又前記の素人連中は夫に對抗して、神社へ寄進を口實に、所々で興行したのである。かく素玄兩派の力持が對抗してゐた折柄、文政三年三月から、兩國廣小路で興行した大坂下り力持太夫力松は、百廿貫目の釣鐘を輕々と差上げるといふので評判高く、其勇姿を畫いた錦繪さへ出版された程である。此力持の口上は大坂者の事とて、力松が釣鐘を持つ度に

口廣うは御座りまするが、此樣に百廿貫目の釣鐘を輕々と差上げるなどといふ藝當は、神代の昔からも聞及びませぬ儀で、お江戸八百八町廣大繁華の土地では御座りまするが、此樣な怪力士は恐らく御座りますまい、然れば是なる太夫力松儀は、三ケ津の惣錄天下一の大力と申されましよう。

との廣言をするので、見物の江戸ツ子は、大いに癪に障はるものゝ、これ程の大力は江戸にも一寸見當らないから、悔しくつても泣寢入りするより外はなかつた。この事何時しか素人力持の大關内田屋金藏の耳に這入つたので、或日子分三人を引連れ、力松の力持を見物したが、其時釣鐘の恰好を觀ると、どうしても九十貫目以上の物とは思へない。依て口上の男に其釣鐘は確に百廿貫目あるかと問ふたところ、口上は冷笑しながら、有るか無いかは持つて見れば知れますと、人を茶にした返答に、憤る子分を宥めた金藏は、品によつては持つまいもので

もないが、若し持上げたならどうするのか。萬一首尾能う御持ちなさつたら、此釣鐘を進上致しましやう。それは一段の事だ、いよ〳〵くれるといふなら持つて見せやうと云ひながら、すか〳〵と舞臺へ上つたが、先づ裾をからげ兩肌を脱いだ上、龍頭を掴んで何の苦もなく差上げたのである。此光景を見た觀客は、孰れも其强力に舌をふるひ、廣言した口上は、どんな目に逢ふ事やらと、片隅に身を竄はしてゐた。そこで金藏は大聲で、御覧の通り釣鐘を差上げたからは、約束によつて貰ひ受けたと呼ばゝつて、子分に云付け釣鐘を木戸の外へ運び出させた。此騒ぎに座元を初め、組合の香具師仲間まで、一同手を突いて平謝りに詫言をした上、金藏が云ふまゝに、重ねて廣言致すまじき旨の一札を入れて、漸くに事濟みとなつたのである。此一件から力松の評判が惡くなつたので、間もなく閉場して歸坂したのである。かく江戸ッ子の爲に萬丈の氣焔を吐いた金藏は、其後間もなく歿したが、日常差馴らした力石は、銘を奬喩といつて、深川洲崎八幡の境内に現存してゐる。

文政三年六月朔日から、本所回向院で信州善光寺如來の開帳があつた。其の參詣人を目當に、同境內を初め東西兩國で、種々の見物が興行された。其中に浪花力持と江戸力持との二座あつて、各得意の曲を演じて、大入を爭ふたのである。

浪花力持は小竹と大筈の男女一座で、先づ女太夫大筈雛野は、麻の葉模様の上着を肩脱ぎにして、浪模様の下着に襷をかける。そこへ童子格子の襦袢を着て、廻しをしめた小竹一座の男四人現はれ、其中の一人は雛野に肩車をする。次に二人は肩車をしてゐる男の後帶を抓み、各片膝を雛野の肩にかけ、片足と片手とを外へ伸ばすと、最後の一人は肩車をしてゐる男の上へ、更に肩車をするのである。孰れも手に大入の二字を書いた扇子を持つてゐるが、特に頂上の男は傘を翳すのであつた。其時口上は身振可笑しく聲張上げて、これを號けて女五大力菩薩、どつと褒めたりと云ふにつれ、雛野は悠々と十遍ばかり、舞臺を往來するのが此曲の終りである。次に小竹作五郎は、身に梅模様の襦袢を着て、龍と浪との縫取りをした華美の廻しをしめて現はれる。そこへ世話人の持運ぶ大俵を右の肩に載せ、其上に兩端へ提燈を付けた板を置き、其板の上に櫻の造り花を挿した手桶二つを並べ、更に其手桶の上に板を置くと、それへ作五郎と同じ粉裝の男が乘ると同時に、下から世話人が投上げる炭俵を手に受けて、身の右左に一俵づゝ置き、自分は一俵を兩手に持つて屈むのである。偖口上に從つて作五郎は、肩の物に手もかけず、巧みに兼合をとつて、三間有餘の梯子を登るさまは實に危險で、既に粟を生ずる程である。この曲は大阪で俵取

と號したものであつたが、江戸では未だ演じた事がないので、大いに喝采を博したのであつた。

江戸力持は山崎と花崎との男女一座であるが、其の演技の光景は文政四年版本『兩國山廣弘壵見世物物語』に

口上高ら は御座りますれど御免の蒙り、是より口上をもつて申上げまする、扨掛置きましたる梯子、長サ三間餘御座りますを花崎力江女の業に、兩手兩足に請止めまする、俵を擔ぎたる男三人、右の梯子へ登り拍子を蹈みながら下りまする、百貫目の力業、又碇を擔ぎ、船に人を乗せ擔ぎ舞臺をめぐる。此儀はお目推量にも知れてある儀には御座れど、俵は中に何があるやらと、胡亂に思召しも御座りませうと、即ち爰許にて秤に一俵づゝかけて御目にかけます。

とあるので、其一班を知る事が出來やう。右二座の曲中人氣のあつたのは、何といつても小竹の俵取と、花崎の梯子の曲であつた。文政七年の春から、江戸で素人力持が大いに行はれ、深川八幡を初め本所羅漢寺、御藏前八幡、高田南藏院等開帳の節は、市中酒屋の雇人中、强力の若者十數人申合せ、奉納力持を興行した。何分法樂即ち木戸錢を取らない上に、玄人とは又別の興味があるといふので、評判は次第に高くなつて、日々見物群集したのである。されば機を見るに敏なる讀賣は、力士の住所と名前とを明細に認めた番附を賣歩き、又繪草紙問屋でも、其勇姿を畫いた錦繪を賣出す程であつた。當時出演の力士は番附に據ると

東方大關芝土橋三河屋久太郎、關脇駒込土物店鐵次郎、小結筋違内田屋留五郎、前頭鐵炮洲伊勢屋吉五郎、同駒込和泉屋常吉、同新川三浦屋半五郎、同箱崎川越屋鐵五郎、西方大關飯田町萬屋金藏、關脇本所四ッ目久藏、小結材木町萬屋吉五郎、前頭本所四ッ目住田屋伊三郎、同材木町揚屋彦太郎、同南傳馬町西野屋忠藏。

との十三名であるが、時と所に據つて力士の顏振れが、少々變る事もあつた。是等の力士が演じた力持の光景は、『遊歷雜記』に

四斗入り米俵を空へ投げて兩手にて請留め、又米三俵を一緒にくゝりしを、座しながら兩腕差延ばして持上げ、暫く保ちて肩へ載せ、立つて踊りながら手拍子する。

『十九卷本我衣』に

男山印の薦被りをさまぐ\手玉にとりて左の肩に載せ、其上へ米一俵を載せ、挨足にて歩く。

人を足に乘せ、右左とふりかゆる、又斗桶の上へのせ、斗桶と共に左右前後と足にて廻はす。

三俵振分けにして擔ぎ、又兩手に一俵差す、所謂馬程の力なるべし。

腹の上へ二俵横に載せ、其上へ廿貫目計りの男上りて、其男又一俵を擔ぐ、百貫目餘なり。

『御藏前八幡奉納力持錦繪』に

大關久太郎酒樽三ッ米俵一ッを足にて差す、大關金藏八十八貫目の石を兩手にて差上ぐ、關脇直吉大龜と號けたる百廿貫目の石を足にて差す、關脇與五郎七十一貫目の石を差上ぐ、小結佐七酒樽の曲持、小結

平藏米五俵くゝりしを振分けに擔ぐ。

とのやうに、素人ながら種々の曲を盡したので、大いに流行を極めた結果、香具師配下の力持共は、孰れも影を潜めたのである。其勢ひに乘じた素人力持連は、翌八年の春久太郎組と金藏組との二組に分れ、久太郎組は大坂の難波新地、金藏組は尾州の大須で、孰れも見世物として力持を興行した。

久太郎組は鐵五郎外五名で、三月から難波新地野側で興行したが、評判が高かつたと見え、『攝陽年鑑』文政八年三月の條に、江戸力持大當りとある。金藏組は長藏外三名で、六月上旬から大須山門内で興行したが、『見世物雜志』文政八年六月の條に

目方百七貫の大石を腹に乘せ、其上へ人三人乘る、伊丹三斗五升入の樽を差し、又腹の上に十二俵載せ、又は口にくわへなど、希代なる力持なり、大に評判宜敷く大繁昌なり。

とのやうに大當りであつたから、終に五大力の替へ唄として



へひるまぬ手者も石持てば、中々抱へ持重る、例へつられてひよろつくとても、樽と俵の曲をなす、うんとしやう、互ひの力腰と手に、ぬかりは見えぬ五大力、さはさりさがら弱る色なき御風情、褒めてやるぞへ當ろぞへ、惜き腕とめ候かしこ。

との文句が、遊里で唄はれた程である。

曩に難波新地へ出演した久太郎一座は、其後讃岐の金毘羅へ參詣して、文政九年三月に歸路御暇乞ひ旁との披露で、再び難波新地で興行したが、前回のやうに大入りでなかつたため早々に打出し、七月九日から尾州大須で興行したのである。當時久太郎一座の演じた曲は、『見世物雜志』に

○芝土橋久太郎、大石百五十貫目其上米三俵足差し○神田柏崎鐵五郎、千丈嶽獅子の子落し米六俵立さし○中橋鈴木吉五郎、米二俵曲差し腹矢倉持ち○本所小西鐵之助、米十五俵腹持ち、其上にて俵曲差し○四ツ目木村與五郎、鶯の谷渡り臼の曲差し、獅子の追ぶち○頭取柳卯市

郎、人の曲差し、石の曲持、此外河岸米俵數表都三手に分け御覽に入れ奉り候。

とのやうに、前年同所で興行した金藏組よりも、更に强力を發揮したので、喝采を博したのを機會に打出し、無事江戸へ歸つたのは、其年の秋であつた。

天保度に三都で行はれたのは子供の力持で、大碇を初め鐵割や岩崎等の一座が續出した。孰れも大坂出身で十二歲未滿の者計りであるが、中にも評判の高かつたのは、曲持を兼ねた大碇梅吉の一座であつた。子供ながら天眞の怪力に、前に述べたよ略同樣の曲を演じたが、大人よりも反つて手際よく、殊に大人は力量に慢じて、兎角人を見下す憎體なのに引換へ、是は無邪氣に愛敬さへあるといふ點が、人氣を呼んだものであらう。

右梅吉一座が江戸東兩國廣小路で興行したのは、天保二年八月からで、年齡僅に九歲の小兒ながら、力曲持に妙伎を盡したので、大いに行はれたが、同年の冬打出して歸坂したのである。かくて嘉永元年二月に、力持一流元祖と稱して、再び江戸へ下つた時には廿六歲で、一流元祖の名に背かず、力量手腕ともに、斯道で嶄然頭角を現はしてゐた。當時江戸では既に子供力持は廢れ、牛馬等を曲差しにする事が流行つたので、川崎彌五郎は、馬一頭を坂にのせて曲差をし、叉三の宮卯之助は、牛一頭を小舟に入れたのを差しなどして、世評が高かつたのである。梅吉は是等と對抗して、東兩國で興行したが、大切りに人を乘せた馬二頭を船に入れ、頭上高く差上げた怪力に、滿都を震駭せしめたが、それ以來大碇といへば、殆ど力持の代名詞のやうになつたのである。

梅吉は安政年代に歸坂したが、弟子の兼吉は江戸に滯在して、明治維新後に至るまで興行を續けてゐた。

文政度に勃興した素人力持も、玄人仲間を壓倒した勝利に醉つたものか、素人の本分を忘れ、莫大の給金を貪つて、旅興行をするやうになつてからは、一時衰微を來したのである。併し後繼者が盡きないから、其後大力の者が續出して、嘉永安政度には、神社佛閣の境内で、法樂の奉納興行をするやうになつた。中にも神田鎌倉河岸豐島屋の若者熊吉は、最も有名の怪力士であつた。

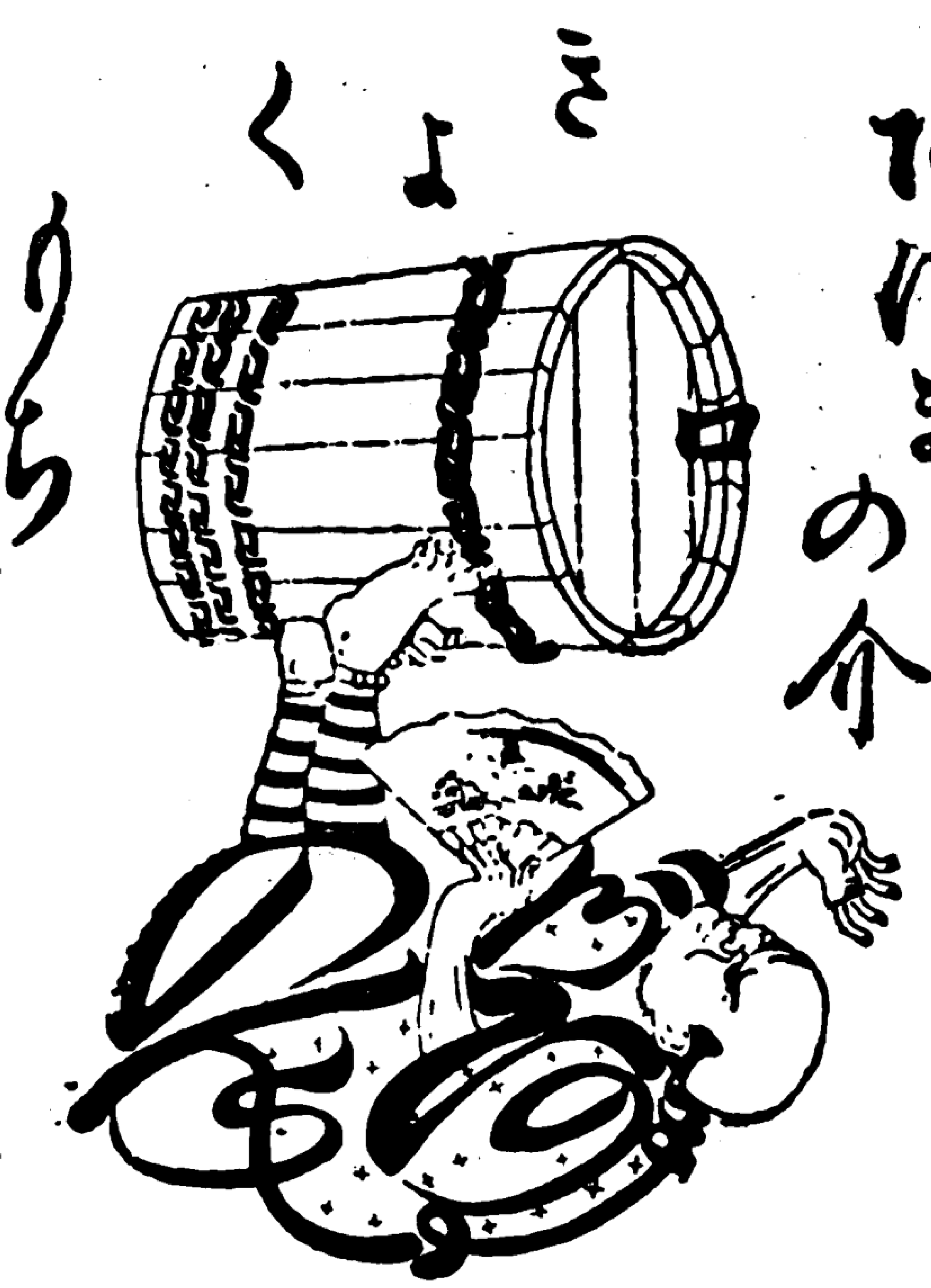
一體豐島屋の河岸揚げは、世に曲揚げと呼んで、夜雪庵金羅の句にも「河岸揚げに醬油樽履く袷かな」とのやうに、醬油樽などは兩足に履いて運ぶのである。然るに若者中の熊吉は、醬被り二樽の太繩に兩足首をかけて下駄とし、輕々と河岸揚げをして、濟衆に一驚を喫せしめたので、鬼のやうな力があるといふ所から、何時しか鬼熊と渾名されるやうになつた。この鬼熊

が奉納興行の時に差した力石は、錦を飾遊びといつて、百五十貫目あつたといふが、今尚ほ淺草の奥山に存してゐる。

明治年代には岩槻町酒屋の主人で、本町東助といふ者が高名であつた。東助は波多野姓であるが、もと本町藥種屋の手代であつたから、本町と呼ばれたのである。東助の演じた曲は、米俵の先へ筆を結び付け、大字を書くのであるが、力業の割に其名の高かつたのは、畢竟素人力持連中の多くは、目に一丁字もなき上に、滿足に話さへ出來ない者共であつた。是に反して東助は少しは學問もあり、人品も卑しくなかつたので、當時の名士に贔負されたがためであらう。

玩具博士で有名の故清水晴風は、通稱を仁兵衛といつて、車力を家業としてゐただけに、若年から力持を練習して、終に力持番附の幕の内に列した程である。されば幕末から明治へかけての素人力持に就いては、活字引とも云はれる程精通してゐた。曾て筆者が同人の力持談を聞書きして置いたが、當時素人力持の状態を窺ふに足る唯一の資料であるから、左に掲げる事とした。

素人力持の興行は、多く神社佛閣の開帳の折に催すので、それも主に春から夏へかけてであつた。



享保版『文字繪盡』所載

力持に出る程の者は孰れも力自慢で物好きの寄合ひであるが、其中給金を取る頭株は一二人、其外は道樂に演ずる素人連中で、勿論無給であつたから、興行人は是をオスケと呼んで、優待したものである。

興行場は三尺程高く盛り土をしたので、前藝として樽の曲持や力石を差すのである。所謂オスケと呼ばれた素人で、服裝は浴衣の着流しや印判襦袢であつた。かく前藝は米俵や酒樽を種々曲差した後石を差上げるのであるが、此時は介措人三人付きで、先づ力士は腰を落し、兩手を差出して身構へてゐる所へ、三人がゝりで石を載せると、力士のヨシといふのを合圖に、手を離すのである。此石には芋（廿

五六貫目）、太きわ（三十貫目）、（米俵與[illegible]四十五貫目）、玉子（四十貫目以上）の四種あつて、夫々オスケが力に應じて試みるのである。石は唯持上げるだけであるが、俵又樽には種々の曲持があつた。其主なる曲名を擧げると、俵にはモチリさし、こばさし、鶯の谷渡り、大返し、さしもんどり、重ねもんどり、腕だめ、腕木さし、片手どめ、七分どめの十種。又樽にはのつきりさし、鏡さし、鼓返し、ニンベンさし、横一、大返し、腕だめ、邯鄲夢の枕、七分留の九種であつた。

右の前藝が終ると、次に中藝として腹やぐら（腹の上に米七八俵を載せる）、腹うけ（腹の上に臼を載せて米を搗かす）、五人男（手や肩に五人乗る）、長柄うけ（二人で長柄を持ち、米俵を投合つては受留める）、臼の蛇の目ざし等を演ずるのである。

眞打は多く足の曲持である。三百貫目と稱する大王石（實は百五十貫）程を足にて差上げ、又田舟に米十俵（牛を米の代りとする事もある）を載せ、足で曲持をするのであるが、此曲が終るので一切りとするのであつた。

一體力持の俵及び樽は、特別に製したもので、普通の伊丹樽に水一杯張ると、二十貫目以上となつて取扱ひ惡いから、特に十四五貫目入りの物を調へ、又俵も十六貫讀切りと稱してゐるが、實は八掛けの十二貫餘の物であつた。

力持につかふ囃子は、馬鹿囃子の中でテン〱ドヽドン〱といふ「しやうでん」と、テン〱テン〱テンドヽドンドン〱といふ「きざみ」を主に用ゐたのである。

偖力持は明治十年前後迄流行したが、其後次第に衰微する許りで、それも大正の御代となつては、其俤も止めなくなつたと、語り終つた晴風の太い眉は、宛然感慨無量といふやうに、ピクリと動いたのであつた。

（つゞく）

秋興

山獸水禽録

小杉放庵

山の部（重に北下野の山村の話）

三四年前、日光の御獵場へ、猪を四頭放した、以前は居たが、取り切つたので、又殖やして見やうと云ふわけであつたらう、いくばくもなく其處で一頭、此處で一頭と入手に落ちて、今はまた猪なし山にかへつた、獸類の榮枯存亡も命數のあるもので、人巧では追付かぬかも知れぬ、昔は野州の山手にも鳥獸は多かつた、幼少の頃、朝めしを喰つて居る前の庭に、ノソリと立つた雄鹿を見た覺えがある、用水を落葉がつめたので、それを掻きにやられた足元から、いきなり鹿が出て、箭のやうに飛んだ、こちらも二足三足逃げかけた覺えもある、或る炭燒が、澤で米を磨いで居る、カサリカサリと足音の近づくを、てつきり鹿と考へて、樅の根に、伏し身になつて待ち眺める前に果して鹿の足が出る、いきなりしがみ付いて、小力のあるまゝに打ち倒し、友を呼んで押えた、と云ふ話もあつた。

小鳥でも見へたら打たうと、馬方が、ざら玉を籠めた鐵砲を、荷鞍につけて仕事に出た、かへりの山路で、出合頭に鹿、丁度鐵砲を卸して居た處、さし當てるやうにして放したのが、顏へもろに行つて、思はぬ儲けをした、あの頃は獸の方にも、のんき者が多かつたと見へる、紡績の水力電氣の堀割り、村の子供が學校へ行きがけに見付けたは、堀の中から、枯木の枝のやうなものが出て、それが上へ行き下へ行き、又上へ行き下へ行きして居る、近づくと鹿で、誤つて落ちたらうが、兩側石垣故出られずに居る處、忽ち村の若い衆に、棒づめで取られた。

狼もよく出たものだと云ふ、殘雪の頃は、家のまはりに足跡を見るとあり、その足跡、必ず前足の踏んだあとへ、後足が行

く、是れ用心深い狼の特長だと云はれたが、果してどうか知らぬ。脊戸の山などには、犬の糞ほどの量で、毛の交つたやつ、あれは狼のだと聞くと、さすが子供心安からず、町へ豆腐買ひにやられる時は、ソツと短かい脇差を懐にしたが、出たら斬る氣で居たものと見える、說あり、狼の糞は花火の合藥に無くてかなはぬもの、狼煙と云ふ字の出處だと、是以て果してどうか知らぬ。

濱では、小魚の群れの後に必ず大魚の群れありと云ふ、雉は山に雪深くなつて里へ出る、鹿が里近く來る時は、その尻に狼がついて居るからだと云ふ、一年諸方に狼の噂あり、或る日村の娘が、馬を引いて山から歸へる、二頭の狼に襲はれた、馬を捨てゝ丘へ登る、ふくら脛を咬えて引落す、又登る、又落す、鎌で拂つてやうやく逃れた、馬は狂つて村へ走る、一頭の狼を、長い顋の下にぶらさげて走る、彼の狼の牙が、馬の頰骨に喰ひ込んで、外れずなり、そのまゝ下げられた、是は村の者が打殺した、娘を取り損じた一頭は、そのまゝ村の山近くに出沒する、村中の騷動、鎗鐵砲で取捲いて仕留めた、千葉縣の熊さんほどに、手數はかゝらなかつたと見へる。

亡叔父の話だが、栗野の村へ、どうまぎれたか狼が出て、宿の通りをあちらへ走りこちらへ走る、あぶなくて手に合はず、大騷ぎとなり、何右衛門は聞えた獵師故、早く出てくれと賴む、何右衛門は出て來て、鐵砲をさし向けたが、容易に放たず、二度三度前を通らせてから打ち放つ、一發で仕留めたが、なぜ早く打たなかつたと聞くと、かゝる家の立てこんだ處では、あてなしには打てぬ、あてなしに打てば、外れた時に思ひの外の過ちあり、先刻から、向ふの家の土藏をあてにして、外れても土藏で留めやうと待つて居た、と告げたと云ふ。

熊の話もある、北下野の山手は、上州沼田へつゞく、又會津の方へもつゞく、さまでの高山はないが、深山とは云へるであらう、上州小川の山里を通つた時に、軒先から懸けて、後足が地に引くほどの熊の生皮を見たが、珍らしい大熊だと思つた、此奴は取られる時に、三四人怪我をさしたと云ふ、中禪寺、西澤金山のあたり、折々熊を見かくる人あり、子を連れて居る母熊は、人を見ると怒りてかゝる、最も强悍、所謂乳虎の勇であらう、此間、中禪寺の湖水で、岸近く浮んで居る小船に熊が泳ぎついて、二人の船夫に大怪我をさせた騷ぎを聞いたが、何やら熊の習性と云ふものに反した話、尤も熊だとて、人間がきめた通りの行動をのみなすわけもなからう、千丈が原の湯瀧の下で、ガサガサと藪の中を通つて行くもの、角なき故牝鹿だらうと思つたが、毛の色に黑味があつた、同行の桑重は、向ふ見ず

で、忽ち藪の中に飛び込んだが及ばず、そのまゝ唐松の林の方に去る、あれが熊であつたら、子引きの母熊でもあつたら、二人共危かつたなあと、今での茶話。

羚羊（かもしか）は去年あたりから禁獵になつたと云ふ、その時の或る新聞に、鴨と鹿とが銃獵法度になる、と書いてあつた、羚羊（かもしか）と云ふ獸が、日本に居るとすら、知らぬ人多き程、羚羊は少くなつたものと見える、あれは地方に依つて、くらしゝとも呼ばれる、信州有明の裏山を、處の獵師に連れられて、一日羚羊をつけ廻したことがあつたが、是が羚羊の糞だと見せられたばかり、兵物には會はなかつた、あの山は花崗石で出來て居たと覺えて居るが、その爲か恐るべき急峻、道なき岨づたいばかり、雨ふれば瀧となる岩のあらはな峯の横手を、獵師の尻について、手足で登る、獵師の踏み落した人頭大の石が、眞向から落ち來るを、かはすも逃げもならず、わずかにひねつて腰で受けた、山あるきは自信ある筈であつたが、大きに胆をひやし、以後羚羊狩は謝絶ときめた。

此の羚羊に俗傳あり、あれは踊りがすきで、たとへば二人の獵師ありて羚羊を見付けたとする、一人銃を捨てゝ、ひたすら踊る、羚羊是を見ておもしろく思ひ、ひたすらに眺める、そこを一人が忍び寄つて仕留めると云ふ、山中の獵師は、そんな馬鹿な話はないと笑ふが、山下の村人は、まことしやかに話す、羚羊全く跡を絶つに到れば、此の俗傳がまことの話にもなるであらう、又、猪は頸が曲らぬ、手負ひとなれば、まつすぐに走る、路がつき當れば、つき當つた山を堀る、などゝ眞顔に山人が云ふ、さらば丁字形になつた山路では、やたらに猪が土を堀つて居さうなもの、單調な山村では、何ぞ不思議の説話を以て、此の單調を裝飾したき情ありと見へる。

野州赤薙山で、獵師が羚羊を追ひつめた、絶壁の突端、逃げやうのない處、しめたと思つて、切つて放たうとする、一跳して見えずなつた、逃げ路はない筈だがと、岩の鼻へ行つて覗くと、十間ばかりの直下に、チヤンと四足を立てゝ居た、近づいても動かず、立つたまゝ、つまり跳ね降りたまゝ、衝撃で即死したわけ、あまり甲斐々々しい最期で、無氣味に思つたと云ふ、無氣味な最期は、猿に多い、信州中房のほとりで、實弾一發を受けて果てた大猿は、人の如くあぐらを掻いて、合掌の形をなして居たと云ふ、重さ十貫ほどゝ云へば、痩せた大人ほどあつたらう。

野州栗山郷は、平家の落人、隱棲の地だと云ふ、奥山の人遠き部落には、毎々此の平家云々を聞くが、成程平家が落ちて行つて住んだ山もあらうが、又其他國々時代々々の落人の部落も

あつたらう、それが皆平家になつたともあらう、ともかく、此の村はひどい山村で、女が畠で働き、男は山で杣をし、獵をして暮しを立てゝ居た樣子、少年の頃、雪中を人に連れられて行つた、丁度鹿の群れが近くへ現はれたと云ふ折柄、村の男が皆出て山に行く姿を見れば、毛皮の袖無し、芝頭巾、明治三十年頃であるにも係らず火繩銃、村田銃も半分程、手鎗、山刀、竹筒の火藥入れ、毛皮の玉入れ、向脛、山袴、鹿の生皮の靴、檜の枝を曲げた輪かんぢき、かなかんぢき、草双紙の挿繪を生で見るやうであつた、指揮は長老、七十餘りの達者な翁、若い者は勢子になり、雪を踏んで鹿を追ひ出す、先輩は「たつ」に待つ、「たつ」と云ふのは、追はれて走る鹿が、必ず立ち淀む場所がある。其處に待つて居る役目、一のたつ、二のたつ、と次第に手配りをして、のがすまじき仕掛け、其時は大獵で、大獵祝ひを長老の家で催した、私を連れて行つた野又と云ふ老人、同村の神主で、かけ持ちに此の山村の神社も預かつて居た、神事あつて出張つたであらう、長老の家を宿として居た故、此の席に招かれた、若い人もお出でと、私も引き出された、會津の直しと云ふ、甘口で強い酒、肴は鹿肉のさしみ、鹿の腦味噌の燒いたるもの、まことに舌を捲いて恐れをなす珍味をした、かに強いられて、酔つぶれて苦んだ覺えがある、此の村の獲物は、山越しに日光へ出す、或年、一冬に百頭も取れた事あり、是を一ぺんに出せば、忽ちに相場が落ちる。そこで皆雪中に漬けて置いて、二三頭づゝ賣りに出した、平家の遠孫も商才智謀ありと、野又翁が笑つて話したのを覺えて居る。

水の部（大利根殺生日記）

、、日

ゆふべ、ちと酒を過ごし、それ故夜ふかし、死んだように眠つた爲か、頸の筋をねちがへて、朝の九時、兩國を立つ頃から、頸が痛み、銚子に着くに及んで右も左も曲らず、禍は、孤り來らず、足首の腫物が、靴に觸れて、跛を曳く、以前なじみの銚子の蕎麥屋で、ねぎなんばんと云ふ蕎麥で一杯くみ交はす、同行は、針重桑重、蕎麥屋の門から乘合自動車にのつて、三里ばかり、利根の岸を上る、何と云ふ村であつたか、立場茶屋の前で降りて、田の中を川岸へ出る、其道七八町、鐵砲は、針重氏が擔いでくれ、雜嚢は、桑重氏が提げてくれ、拾つた竹を杖つき、首を据えて、ちんちんもがもがと、たどり行く、兩位の惡友、平生の遺恨此時と、さんざんに嘲弄する、だまつてちんちんもがもが、頸は痛し、足は痛し。

渡船に乘つて刀江を越す、此邊の川幅一哩ほど、風なく、水

の色晴天を映し、遙かに鴨のむれを見る、彼等の中、如何なる宿命あるものか、我等の筒尖きに落るであらう、太田の河岸に着く、日傾いて、ポプラの殘んの黄葉輝き、字太田二三十軒の農家、田の間に見ゆ、太田氏の家、其中に大きな構え、門を入つて三四十歩にして、小山のやうな茅屋根、東京から推參致しましたと、おとなへば、あるじは今出たばかりの不在、祖母と若き夫人とあり、先づ上つて、御あいさつは、頸が痛んで失敬致しますと云ふと、お婆さんが、直ぐ癒して上げませうと、茶を飲んで居るまに、電氣按摩を仕掛けてくれた、馴れた手つきで、十分程、どうやら驗が見えたやうす、そこへあるじが歸つて來る。右の肩に鐵砲、左の手に一羽の本鴨、今夜の珍客のお肴に、ちよつと取つて來ましたと云ふ、是れ入室劈頭の一撥、腕に覺えなき三人、ひそかに相顧みて舌を吐く。

、、日

さあさあ時間です、と、年下のあるじに起される、電燈なき江村の石油ランプ、殘燈をかきたてゝ、身ごしらへをなす、昔一村の統領の家、上段の間、厚さ一尺もある藁蒲團の上の絹夜具のぬくみ、襖の字は、米芾の大書、陶靖節歸田園居の古詩、此の詩は隱逸宗の經文の如きもの、折節二番雞の聲聞え、しんかんとした江村夜明けの趣、今から勇壯なる殺生の遊びするよりは、此のまゝ夜具の中に頰杖ついて、隱逸の大人となりたけれど、さうも行かず。

提灯を提げて出て見れば、ソボソボと雨ふりかゝる、河岸に出て用意の小船の苫の下に安坐する、櫓の音して船搖き、やゝ川の半ばと思ふ頃、苫の間より下流を見れば、東の方に横雲しらむ、時に頸の痛みはどうなつたと聞かれ、忘れて居た程に、好くなつたと見える、やがて蘆場に着く、あるじは船夫を指揮して、籠の中の囮を出して、脚を綱に結んで、二三間づゝ間を置いて、六羽ほど水上に放す、綱の兩端竹を突き挿して留めとなす、船は蘆場の中深く入つて、蘆の中より鐵砲と目とを出す、囮は水に放されると、すぐに鳴き騷ぐ、ゆふべ田圃に行つて居た鴨共が、川の上に歸るとて、夜明けの雲の中で、此聲を聞いて、友が居たかと降りて來る、そこをドンとやると云ふ、さるほどに雨は次第にふりしきり、尻の下ジメジメとして心地わるく、鴨も來ずに朝となり、腹は空く、今日には限るまいと、蘆場から出て、囮を收めて、歸り仕度の頃から、向ひ風となり、雨はますます、五人居る小船の脚重き故、高波打込んで、半身水となる、十二月の寒さ、此のまゝ水船となれば、チト覺束なきありさま、かはるがはるあかを掻いで、舳をかへて下總地へ乘り付けやうと働く、その間にも、彈帶と鐵砲を擔ト

まいとする苦勞いろいろあり、やうやく向ふ岸について、振り返つて見れば、朝ぞらうす黑くなつて雨横さまに、水面は却つて白みわたつて、今更の如くに胆をひやす、三哩ほどの川幅でも、荒天となれば、まかりまちがへば、驅け出しの獵師位は、知らぬ顔で眠らせるであらう、あるじは、歸りの船の、大きいのを頼むとて骨折る。

、、日

からりと晴れた朝となる、昨日ズブ濡れの獵服は、大夫人が一夜炬燵にかけて置いて呉れたれば、殘りなく乾いて居る、脚の履物も昨日の騒動で、何處へかとんでしまつた容子、今日は石油發動船で、眞平地に鴨の群れを攻めて見ると云ふ、八時に船を出す、晴川の上に泛べば、流れを上下に望み、斜面に眺むる故、いかにも大きな河の姿となる、遠くの沖合に、陸地と一線をなす處に、鴨の群見ゆ、我等の眼は先づ足を見出し得ず、船頭とあるじ太田氏の獵眼、逸早くも見付けて、へさきを向けて暫く進み、少し右へかはし、又左へかはす、鴨の方にも司令官あり物見あり、絶えず外敵の監視をなす故、そこで山道なりに船をやる、鴨をだますか、それまでに氣がつくかと云ふ處、射程距離に近くなつて、フースピー、フースピー、と船頭が號令をかける、フールスピートで、眞直ぐに突入して、飛び立つ群へ打ち込まふと云ふ、此のフースピー、機械の具合整はず、思つたやうに速くは參らぬ間に、彼方では一羽立ち二羽立ち、三四五六相繼いで立つと見るや、幾百の水禽の羽音ドット響いて、蹴立つる水沫夥しく、見るまに盤旋と舞ひ上り、雲を霞と飛んで行く。

かくの如きこと兩三回、次第に船を下して、松岸について暫となる、芦の間、川添え石垣の上に、廣大な三層樓、妓樓で持つて居る一部落、樓上には川を眺めて立つお女郎も見え、又かすかに絃の音なども聞ゆ、船夫を廓へ上げて、酒と肴とを買はす、すしを注文したと見え、大皿に盛つて、若い衆が運んで來た、小春の日かげ、あたゝかに芦荻をてらし、樓をてらし、われらの盃をてらす、樓上のお女郎も、物珍らしげに此の船中の晝飯の一坐をのぞく。

再び船を出して、上流をさして走らす、二度三度、鴨をだまし損ねたが、やがて鴨にも油斷者あり、飛び立ち遅かつたと見え、四丁の鐵砲、連續八發の散彈、打つたと思ふうちに、バタりと一羽、又クルクルと舞つて、ザブりと一羽、又一羽、それを拾ふもの、飛んで行く群れを見送る者、あれあれ、あいつは手負ひだ、と群から遅れがちの一二羽を指さす、何さま翼に力なく、たよたよとしたと見るや、そのまゝ水に入る、それ追へ

と船は急ぐ、やがて近づく、モハヤ飛べず、船を見て居て、ッイともぐる、永くはもぐれず、出るぞ出るぞと、云ふうちに、思ひもかけぬ方角に首を出す、さそくに切つて離つ、あるじの太田氏は手を收めて、客の三人われがちの功名を爭ふ、爭ふ心ある故、手元狂つて、一間も隔てゝ水煙りをあげる、此の邊が先づ、鴨獵初心者の、忘れ得ぬおもしろさであらうよ。

夕暮れ近く、川はなぎとなり、夕日に染められて、水天一色の眺め、はるか彼方の丘の松をかけて、飛ぶ鴨の姿點々と連るを見れば、今の先まで仇のやうに追ひ廻したとも忘れ、のんびりと和らいだ心を持つ、太田から一里ほど、思ふに前日雜船のあたりの芦場に船をつく、夜鴨を打つものあるや知れず、話の種に見て置けと云ふ、日は入り果てゝ蒼茫とした芦原の中に、友に分れて一人坐して居る、次第に暗くなり、芦の穂先きも黒みて空に交はる頃、星ばかり見ゆる頭の上を、サッサッと飛ぶ翼の音を聞く、姿は見えず、馴れた者には見へると覺ぼしく、やがて近處の芦のかげに筒音あり、火光一瞬、すこしの間、やがてザブリと物の水に入る音する、又飛ぶ音、チリ、チリ、と云ふは、鈴鴨と云ふであらう、遙かのあなたに又筒音、夜鴨打ちは法度ながら、たまには阿漕ぎの、浦人もあると見える。

太田の莊に歸れば、離れ立ちの湯殿に、焚火赤々と見え、臺所の大圍爐裏にも、焚火赤々、湯に入れば、湯殿の隣りに人聲す、働き衆の家族の居る處であらう、湯殿のうしろにも物音す、豚であらう、圍爐裏をめぐつて坐し、酒をあたゝめて盃をあぐ、下總豚の甘脆、活きの良き野菜、爐の火は桑の根株を焚く、桑の根株の火は、藥になると云々。

、、日

朝の四時に起されて、また前日の芦場へ、舳を提げて出る、靜かなる水上、滿天紺青に紛々たる星の光り、映つて船をめぐつて紛々たる星の光り、上下四方すべて紺青世界銀點の莊嚴、動くものは船上の四五人ばかり、眞黒な形、それより外の物を見ぬ故、比較を絶し、大きいと思へば、われ人ともに巨人の如くにも思はれ、小さいと思へば、われ人ともに雲霄に泛んだ一片塵、何をしたとて知れたものに思はる、明星の光り一際鋭くなる頃、芦場に舟を入れて、人々それぞれの用意あり、川なきまゝに東の方を見て居れば、水平線とおぼしきあたりに、いと細き光り物ありて、見えつかくる、やがて此の物灣曲の姿となり、灣曲の中に異様に圓き黑き物を抱く、初め何物かを知らず、やゝ久うして弦月の極めて細きと知れた、弦月冉々と上り、上つた跡にほの白く、水と天と分る、やがて日が出る。

来たよ来たよ、と細い聲で云ふ、舳の剣を數へて見れば、六

羽あるべきが八羽となつた。二羽はいつのまにか降りた鴨、それを見定めて打ち取る、打ち取つたばかりで動かず。次の獲物をヂッと待つ。芦の間から、空をすかし見る、あれあれ田圃から朝がへりの鴨の群れ、天上を飛んで居る、囮を見付けたか、グルグルと大のしに輪をかいて、次第に寄つて來る、餘り近く寄すれば、こちらの姿を見付けてそれる、よろしき矢頃を計つて、切つて放つ。三羽ほど落ちた。そこで船を出して、獲物を拾ふ、中には芦の茂みにもぐつて、見當らぬもあり、それを見付けやうと、降り立つて水に入る、冬の朝の水なれば、脛（すね）は咬まるゝ如くにつめたい、ふと首をあげる、頭の上を物ありて過ぐると見る、見る打ちかける、クルクルと仂斗をかへして、足下にザブりと落つ、落ちたを見れば大鷹此奴も空中の殺生者、朝のかせぎに出たであらう、片息になつて、大の眼を睜つて人を見て居る。

短かき冬の日も、四時に起きれば、なかなかコクあり、船をかへして、太田の莊にて晝めし、午后も引つゞき小春日和、兎を狩らうと野に出る、此の野は雜草と松原、やがて鹿島の砂原につゞく、地圖で見れば僅かの場所ながら、一面の平地彼の砂原は小さな砂漠をなし、馬に騎つて一夜迷つて、歩き明かしたと云ふ話もあり、按摩が出路を失ひ、のたれ死にをしたと云ふ話もある、砂原と松林の間を行き、又草原を走り廻る、兎の糞はあれど、兎は出でず、ソロソロ歸らうと云ふ處で、針重が、鴨、々、とさゝやく、中腰になつて指をさす、松林の下の小沼に、赤首（あかくび）とおぼしきもの五六羽、ピタリと地に伏して、肱と膝でヂリヂリと散開し、よき處で四挺八發、五羽は仕留めて二羽逃げた、逃げた鴨のうちに、翼の動きのあやしきものあり、それを一人で追つて見る、川の上なれば見屆けられやうが、松林にかくれて行衞も知らず、此の松原の松は、風當りの强い爲か、枝ぶりコビて趣あり、枝ごとに白綠（びやくろく）の苔を被る、東京の春の床の間を飾る材料、專ら此邊より出ると聞く、そこで足をかへす、松林の間の、小さな草原に、大きな兎を見付けて、一散に走つて夥伴（なかま）の者に、兎が居たぞ、行つて撃たうではないかと云ふ、兎かそれとも猫かと云ふ、兎さ、しかもはらんで居ると見え、おなかが大きかつたと云へば、腹の大きいまで見屆けて、なぜ又ドンとやらなかつたと云ふ、成程と大きに悄氣（よげ）た、

此の兎か猫かにつけては、なかまの一人桑重に一話あり、曾つて兎狩りに出て、村を過ぎて、白猫が物に驚いて木に登つたに、筒を向けた、當人其時は、全く兎が木に登つたと思つたと云ふ。

、、日　省略

、、日　省略

、、月

今日はかへる日、老夫人若夫人、皆々モ一日遊んで行けと云ふ、明けても暮れても、鳥打つ仕業、鳥打つ話に餘念なく、さて又出でゝは船に酒あり、かへりては爐の火に酒あり、ずゐ分と飲んだれども、頭を使はず、からだのみを使ふ故、酒の氣胸に溜り得ず、北歐の神話には、晝は戰爭、夜は酒宴の極樂あり、われらの此の日頃も、その如くの樂みを盡した思ひ、倦かぬほどに歸るがよからうと、暇乞ひして石油發動船にのつて、狩りつゝ銚子に向ふ、先づ船を中流に浮べて、機關を留めて流れに從ひ、泥爐に火を入れて酒をあたゝめ、小春日の水郷を左右に眺めて、盃をとつて鴨や來ると待つ、胴の間の隅には、連日取りためた獲物堆く、以て東京の妻子に誇るに足る、それ金持ちは喧嘩せず、今日はあせらずに、浪人孤客の鴨あらば打たうと云ふ、驚近くなるまで出合はず、ちと眠氣を催す處へ、みよしを掠めて離れ鴨一羽、誰れ打つともなく二三發ドンドンと鳴り、落ちると見へてそのまゝ向ふ岸へ飛んで行く、船も目をさましたやうに走り出す、立並んで鴨の行衛に目をやる、芦場を越して田圃へ落ちた、船を岸へ着ける、船と岸との間に、さつぱ舟と云ふ小舟あり、それを足場に、一番に跳ね上がる、老へて見れば、逃るものは大いさ、牝鷄ほどに過ぎず、追ふものは、四五間もあらう發動船、大の男合せて七人、四人は銃を引つそばめ、果しまなこ、ピストン齒車勵々しく働き、スクリウ波を切り、たとへば龍を追つてもこんなもの、海賊を退治ればとてこんなもの、馬鹿げた話ながら、當座の勢ひ、かくの如くならざるを得ず、さて一番に跳ね上つた、其時うしろに、大いなる物の落つる音あり、振りかへつて見れば、水の中に針重首と鐵砲とを出して笑ふ、かゝる事にはチツトもかまはず、今川の畔の小川に入つた件の物、芦の根方にまぎれやうとする處を一發、漸くに仕留めて、船にかへつて來れば、へさきに大入道素裸にて立つ、わが跳ねた時、さつぱ舟を蹴る、その時針重入道片足を掛けたから、見事なる足掛となつて、落ちた、水淺く命と鐵砲別條なし、天氣もよし、酒をあたゝめた泥爐で、洋服とふんどしとを乾す、各々身についたもの一枚づゝを寄進して、裸形の入道にたてまつる。

かくて松岸に船をつけて、夕方の汽車で東京にかへる、入水の友が衣類も、車中のスチームに依つて名殘りなく乾き、汽車を降りて、交る交る獲物を擔ぐ、三人分を一にすれば、屈強の男も脊梁を灣曲せずばなるまじき程の重さ、されど此の水禽共が、若しわが仕事の繪にてもあるならば、半ば以上は、太田の畔のあるじの落款あるべきと思はれる。

此記五六年前の日記に依つて作る、友達の多くは、わが殺生を樂むを

非とし、自身も赤やゝ忍びざる心を生ず、しかも兩三度危かりし覺あり、最後に、獵に出でゝ酒のみてかへり、彈丸の入りしまゝの銃を忘れて、仲に掃除せしめ、壁を打ぬく、其年より此の遊びを廢したり、秋となり、水澤山間に旅して、銃聲をきけば、今以て心やゝ動かざるを得ず。

東京の釣

菊池寛

自分は、少年時代から釣が好きである。秋が來ると、日曜日毎に釣に行つた。そして、小さい沙魚を四五疋釣つて、それで充分滿足してゐたものである。

東京に住むやうになつてから、數年前釣を始めて見たが、東京と云ふところは、釣を樂しむべく、釣場所としては荒れ切つてゐると思ふ。あまりに、釣好きが多く、而してあまりに場所が少いのだ。田舍の都會などと比べて見ると、十里四方の釣場所の中に、釣師が田舍の二十倍も三十倍も或は百倍もゐるのだから、魚が年々居なくなるのは當然である。私は、兼ての持論だが、東京の釣は、既に傳説の釣だとしか思へない。魚が、殆どゐなくなつてゐるのに、たゞ魚が釣れると云ふ傳説丈が殘つてゐる感じである。

五六年前、洲崎の向ふの小さい川へ沙魚を釣りに行つた。ところが、巾十間長さ一町位の川の兩岸に、千人ばかりの人が集つてゐるのだ。一尺の川岸に二三人宛ゐる感じである。そして、銘々絲を垂れてゐるのだが、魚籠をのぞいて歩いたが、魚を釣つてゐる人と云へば、殆んど一人も見かけなかつた。これは、東京の釣の縮圖であると云つてもよいと思ふ。釣師が驚くべく多勢で、しかも魚は、ちつともゐないのである。

震災の夏、知人のすゝめで、二三度品川沖へ黑鯛を釣りに行つた。澪にゐる黑鯛を釣るのである。そして夕立が來れば、御臺場近くへ寄つて、所謂ガチ(岩石多きところ)を釣るのである。夕立の最中で、ガチで大黑鯛を釣り上げる壯快な情景は、石井研堂氏の「釣師氣質」の中などに、潑剌とかゝれてゐる。しかし、もうそんなことは、一の傳説になつてゐるので、今更そんな型通りにやつても、一疋だつて釣れないのではないかと思つ

た。とにかく、黒鯛を釣りに三四度行つたが、いつも一疋か二疋かである。十疋釣れた五疋釣れたなどいふことは、大抵いつかの話であつた。自分丈が、釣れないのではない。船頭が釣れないのである。そして、船頭は、釣れた話だけをするのである。恐らく、五疋十疋釣れることは、一月に一度位で、その一度をどのお客にも話して、希望を持たせるのではないかと思つた。そして、彼等は商賣として、釣れても釣れなくても、型通りの場所を釣り、夕立が降れば定石通り、ガチへ行つて釣るのではないかと思つた。自分の數回の經驗では、さう感ずる外なかつた。

品川沖のボラ釣りもやつぱりさうだつた。自分が行つた日など、船頭が一疋釣つた丈だつた。それを話してきくと、二尺近いボラが無數に釣れるやうに云ふのである。實際、東京附近の海や川の廣さは定まつて居り、隅田の水が、文明的な毒を流すため、だんだん魚が少くなり、そのくせ釣師は多いのだから、東京の釣が、だん／＼いけなくなるのが、當然なのだらう。隅田川では、もう沙魚さへ釣れなくなつた。三代將軍時代板橋で、猪狩をしたと云ふことが、一個の傳説歷史であるやうに、東京灣のボラ釣りや黒鯛釣りも、だん／＼傳説化して行くのではないかと思ふ。

香魚釣りも、今年は行かなかつたが、大正十二年、十三年、十四年と解禁日には、必ず行つたものである。そして、大正十四年の六月一日に始めて二才位の香魚を一疋釣つた丈である。此日には、東京釣友會の牧議治氏に連れて行つて貰つたのであるから、案内者も場所も釣具も申分ない筈だが、たつた一疋だつた。しかし、それも自分丈ではない。釣友會のお歷々十人位の中で、一疋も釣らない人が半分以上ゐた。尤も、牧氏丈は、蚊針釣がいけないと見て、忽ち友釣りに變つて、見事な香魚を十數疋釣つて、老練の手腕を示したが、外の人達は、前述の通不漁だつた。香魚など、全東京の無數の釣師に、いぢめられるのでは、年々不漁になるのは、當然ではないかと思つた。

以上は、東京の釣に對する自分の素人觀である。もし、これが誤つてゐるものとしたら、東京の釣師諸氏の中、自分を釣に同行して、自分の目前で、その誤りを示して貰ひたいと思ふ。

今までの釣の中で、これは面白いと思つたのは、中村武羅夫氏に伴はれて行つた江の島のボラ釣りと、柳島の沙魚釣りだつた。江の島のボラ釣りは、その日は不漁だと云ふ話だつたに拘はらず、十數疋釣れて面白かつた。柳島は、平ケ崎の南洲院の近くに在つて、獨歩や隆十郎なども沙魚を釣つた所だが、中村氏と同行して百疋ばかり釣り、その後も自分一人で二三度行つて、相當つれてよい場所を知つたことを欣んでゐたが、震災後

行つて見ると、川の模様がすつかり變つて居り、殆ど釣れなかつた。

此の秋も、京成電車の沿線の谷津遊園地で、沙魚が釣れると云ふ廣告を見て行つて見たが、一疋もつれなかつた。あんな小さいプールには、初めいくら居ても、十日もすれば釣り上げてしまふだらうと思つた。

東京で、魚のつれるところは、今の所釣堀より外はないと思ふ。釣堀だけはたしかに魚がゐる。そして、釣り方に依つては、必ず釣れる。しかし、釣堀の鯉を釣ることだつて、なかなかの修業で自分など、五六回通つたが、まだ釣れると云ふところまでは行かなかつた。とにかく、釣のたのしみは、容易には得られさうもない。

スポーツ夜話

橋戸信

スポーツと音樂

秋もまだ初めの頃、都下五大新聞の一たる某紙のT社長に、葉山へ歸る汽車の中で同行の友人に紹介されたことがある。名刺を出さうとすると『イヤそうですか、名刺には及びません、御名前はかねてから知つて居ります』と社長は頗る如才ない言葉を浴びせかける。社長は可なり大きな聲で、前列の人々にもよく聞える程度で語り出した。

『當世の若い方々と御交際するにはスポーツと音樂を解しなければいけないのですが、私は兩方とも門外漢なので、御恥しい次第なのです、其所へ行くと死んだ黒岩君などは偉いものでしたな』

友人はすかさず『併し先生のお國では琵琶が盛んな所ですから、御若い時分にはおやりになつたものでしやう』と云つて、笑ひながら社長の顏を瞻めた、私も此方から同様の視線を社長に向けて、その返事に非常な期待がかけられてゐるかの如く思はせやうとした。

社長は『イヽエ若い時分詩吟を習つた位のものです』と輕く否定した後、昔の武術が現今のスポーツに代り、鎌倉朝時代殷賑を極めた雅樂即ち日本固有の音樂は漸次顧られぬやうになつ

て、一も二も西洋物に押される時代の力が如何に強烈なものであるかを語り初めた。

友人はそれを聞き終つた後、フト話をもとにかへして『西園寺さんは琵琶が上手ださうですね』と聞くと、社長は『それに就いて面白い話がある』と云つて次のやうな隱れたる挿話を聞かせた。

西園寺公はもとが琵琶の家柄なので、或時昭憲皇太后の前で彈奏する光榮を有した。然るにどうしたものか、其時の出來榮が頗る下手であつたので、彈き終つた後『甚だ今日は調子が外れまして恐れ入ります』と云ふやうな旨を言上した。すると皇太后は『イヤお前が上手に琵琶を彈くやうでは、却つて御國の爲めに盡せなかつたかも知れない』と仰せられたので、西園寺公は非常にこの御言葉に感激したさうである。先帝陛下はどちらかと云へば公の幼な友達でいらしたので、公にとりては寧ろ遠慮のない方であつたが、昭憲皇太后様には、此ことがあつて以來公は殊に尊敬の念を厚くしたさうである。

社長はこの物語中、左右に我等を見ながら非常な面白い秘事でも洩したやうな調子で、私共が話につり込まれて行く樣子に滿足の笑を洩らしてゐた。

『スポーツと音樂』この老大記者の目に映じたる二つものに對して、若い者とヒケを取らずに語り得る老人はあるか、イヤ若人の全部にもその用意は出來てゐるか。

子規は捕手

先日一高野球創立時代の選手鹽谷氏の七回忌が某所で行はれた。席上故正岡子規氏に關する追憶が出て、段々話が進むに連れて、子規氏は例のインブリー事件が起つた頃の捕手であつた事が判明した。これは恐らく誰れも知らぬだらうとは鎌倉にゐる福井博士の話である。インブリー事件とは、一高と明治學院とが向陵で試合して、一高の旗色が漸く非なる時、後者の教師インブリー氏が、外野の垣根を踰いでヅカ〳〵這入つて來たので『毛唐をやつゝけろ』と云つた調子で、見物してゐた柔道部の連中がおつ取り卷き、二言三言云ひ爭ふ中、後方から石を投げたものがあつて、それが外人の眼の下に的中し、事が大きくなつたのである。一時は國際問題になりかけやうとしたが、一高方が白金までテク〳〵歩いて行つて陳謝したので事件は無事に治まつた。野球史上では子規氏は、虎の門に工部大學があつた頃の投手であるかの如く傳へてゐるが、焉んぞ知らんこの瀟洒たる詩人は、捕手の荒行をなし、前記インブリー事件などで

は、バツトを叩いで憤慨した一人であつたのである。

彌次の非哀

この春大毎チームが華盛頓と寶塚で試合した時、大毎方の旗色が甚だ惡く、湯淺投手の球は丸でフリー・バッティングのやうに亂打された。すると憤慨し切つてゐるフワンの間に、一際過激の男がゐて『月給が泣くぞ』『大毎の面汚し』などゝ怪しからぬ惡聲を飛ばすものがあつた。湯淺投手はジーッとこらへて聞いてゐたが、自分が九回の第一打者となつて、アウトになるや否、ベンチとは反對の方、即ち外野の方へダン／＼走つて行つて、歸りかけやうとする、前記の惡彌次を引捕へ、散々と油を絞つたものである。彌次は口程にもない男だと見へて、閉口頓首して歸つて了つた。これ丈で濟めば何のことはないが、湯淺君が引上げる時『馬鹿ッ』とふりかへりながら浴びせた一語は、フワン全部を愚にしたものだと云つて滿場騷然、試合が終るのを待つて、外野の一團は潮のやうに徐々として押寄せて來た。スタンドの方からこの光景を見てゐると、如何にも非常なことが出來上りさうに見へて、物凄い感がズーンと頭の中を走つた。忽ちにしてベンチはこの群集で包圍され、やがて選手の引上げた倶樂部ハウスの前にも一杯人だかりして『湯淺を出せ、湯淺を出せ』と叫んでゐる者があつた。肝腎の惡彌次君は何時の間にか姿を消してゐるのに、それを買つて出た二三の者がエライ勢ひで取圍いてゐた。ゴタ／＼は約一時間も經てヤット鳧が附いた。監督が遺憾の意を表した迄で、大山鳴動鼠一匹の譬に見るやうな振はぬ結末であつた。夕暮の色も漸く濃くなつて來たので、人々は思ひ／＼の方面へ離散したが、この騷擾のヒーロー連が、意氣揚々として肩で風を切りながら、何事をか豪語しつつ或る横町を曲らうとすると、三四の刑事がワッと前に立塞がつて『オイ一寸來い』彼等は騷擾罪の下に警察へ連れて行かれて金五圓宛のお灸をすへられた。其後寶塚のフワンは非常にリフワインされたとの事である。

彼等の日本人觀

私が九州の旅を終つて下の關に着いたのは、去る十月五日の夕方であつた。此町で名物の鰒料理が初まり、松茸もそろ／＼出初めたと云ふに濕ぼつたい南風が吹いて、心持のよくない日であつた。此日華盛頓チームは小倉で布哇と戰ひ、停車場前の山陽ホテルに引上げて來たので、東道の主人である加藤吉兵衛君を其所に訪ふて試合の話など聞いてゐた。すると華軍の一選手が、戸をノックして這入つて來て、監督の教授が持病の喘息を起し

たから、英語の解る醫者を呼んで呉れと云ふ。加藤君は『厄介だな…』とつぶやいてゐたが、やがて醫者へ電話して來て貰ふ事にした。私も加藤君を助けるつもりで室へ同行して見ると、ぜい／＼云つてゐる教授は、なか／＼醫者の注射を直ぐ受けやうとはしない、いろ／＼と藥の名を聞いたり、分量を尋ねたり、甚だ不安の色を眉宇の間に浮べながら一本やつて貰つた。すると直ぐ功果があつて、少し樂になつたので非常に安心したやうに見えた。急にパンを呉れとか、スープを持つて來いなど云つて上元氣になり、醫者が獨乙語なら話せると云ふので、何やら盛んに喋たつてゐた。日本に來ると、何やかやと賞め立て、喜ばせるのが、外人の常套手段であるが、イザ病氣などするとなか／＼日本人の醫者を信用しないのが彼等の仲間に多い。それ丈け日本の醫師を見くびり、日本人と云ふものを輕視してゐるのである。

この惡癖は運動家の間にもあつて、彼等は自ら墓穴を掘るの愚を敢てする。この春スタンフォード大學が來て大敗の歴史を殘した時、流石の監督ウオーカー氏は常にかう云つて選手を戒しめてゐたさうである。

『日本人は一見小さくして非力のやうであるが爲め、米國人は頭から馬鹿にしてかゝるから負けるのだ。どんな事があつても、見くびつてはいけない』

所が選手の間には依然不心得の男があつて、監督の本當の心持を了解し得なかつたさうである。これは監督が或る席上で、某日本人に語つた述懐談である。

名人の領域

外人は『ナーヴ』と云ふことに就いて非常な注意を拂ふ『彼は強くさうして優れたるナーヴの持主である』など云ふ文字をよく見る事がある。即ち優秀なる神經の統一された人を云ふのであるが、日本人は一般にもまたスポーツマンの間にも、このナーヴに關しては、餘り多く研究されてゐないやうである。總て名人となるには、優れたナーヴを持たねばならない『撞球家の山田浩二氏が、一心にキューの先を見つめて、今や球を撞き出さんとする刹那は、假令耳の傍でピストルを打つても彼の心は動搖しないであらう』と云ふやうな記事を外國の新聞で見たが、これを日本で云へば無我の境とか、三昧に入るとか云ふのであらう。最近讀賣紙上に出た菊池寛氏の本因坊對雁金七段の觀戰記の中にも、碁のことは判らぬが、兩者の落着拂つた態度には少からず敬服したと云つたやうな文字が見へた。何事に名人には共通したる落着きがあると見へる。

雄辯家人見絹枝孃

最近我がスポーツ界の人氣を一人に集めたる人見絹枝孃を、トラックに於けるヒロインとして賞める人はあつても、壇上の女英雄として知る人は尠ないであらう。彼女は去る十月初旬大阪に凱旋し、大毎同人の暖かい握手に迎へられた夜、其大講堂には健母會を中心とする歡迎會が開催された。種々の方面から代表者が出て、いろ〳〵の祝辭を述べた後絹枝さんは五尺六七寸の立派な體軀を壇上にすゝめ、徐々として瑞典に於ける大會の模樣を語り初めた。落着いた態度で、音量もあり、熱も相當にある。聽衆は恍惚として、陶醉の狀態を續けてゐる。やがて女史が得意の競技に勝てるを知らすべき日章旗が、場內の竿頭高く揭げられた刹那の光景に至るや、聽衆の間から盛にすゝり泣きする聲が聞え出した。見れば大毎主幹高石眞五郎氏までもハンカチーフで目をこすつてゐる。私はやはり泣かされた一人であるが、此時壇上を仰ぎ見る私の心は、絹枝孃に對して自然と頭が下るのを禁じ得なかつた。これが取つて僅に二十歲の日本娘とどうして思へやうか。英雄はすべての點に於て英雄である。我が絹枝孃は、單に日本スポーツ界の雄でなくして、優れたる女流雄辯家としても、天晴れ一の椅子を與へらるべき女性である。優秀なるナーヴの持主でなくしてこの藝當が出來るであらうか。

此の問題でもう一つ驚かされたことは、これも最近大阪で第二回の聯盟相撲が行はれた時、雷權太夫氏が初日の挨拶と云つたやうなものを土俵上で朗讀した。背後には西の海、常の花、宮城山の三橫綱、大の里、高砂、峯崎などの巨頭が羽織袴で嚴かに立つてゐる、誠に晴々しい光景だ、此時一步前に進み出てたる雷は『これから御挨拶を申上げます』と先づ錆のある聲で一禮した後、懷中から忝々しく書いたものを取出して讀み出した。文章は頗る固苦しいもので、難解の文字さへ多いのに、殆んど目に一丁字なしと思はれる彼は頗る要領のよい間隙を置いて讀み進めて行く、而も時々頭をあげて觀客の間に視線を投げかける態度は、實に堂々たるもので、私は種々の發會式に臨んで大臣などの代理が祝辭を朗讀するのを聽かせられたが、これ程の感激は決して受けた事がなかつた。前の場所に同樣のことを出羽の海がやつた時も、私は同じやうな感じを受けたのであるが、彼等をしてこの立派な態度を作らせたものは、學問の力でもなければ、經驗の然らしむる所以でもない。彼等が多年土俵の上で鍛え拔いたる優秀なる對抗的ナーヴがあればこそだ。この雷の成功は、恐らく壇上の絹枝孃に似通ふ或物がなくてはならぬ。彼等はたしかに名人の領域に入つた人々である。

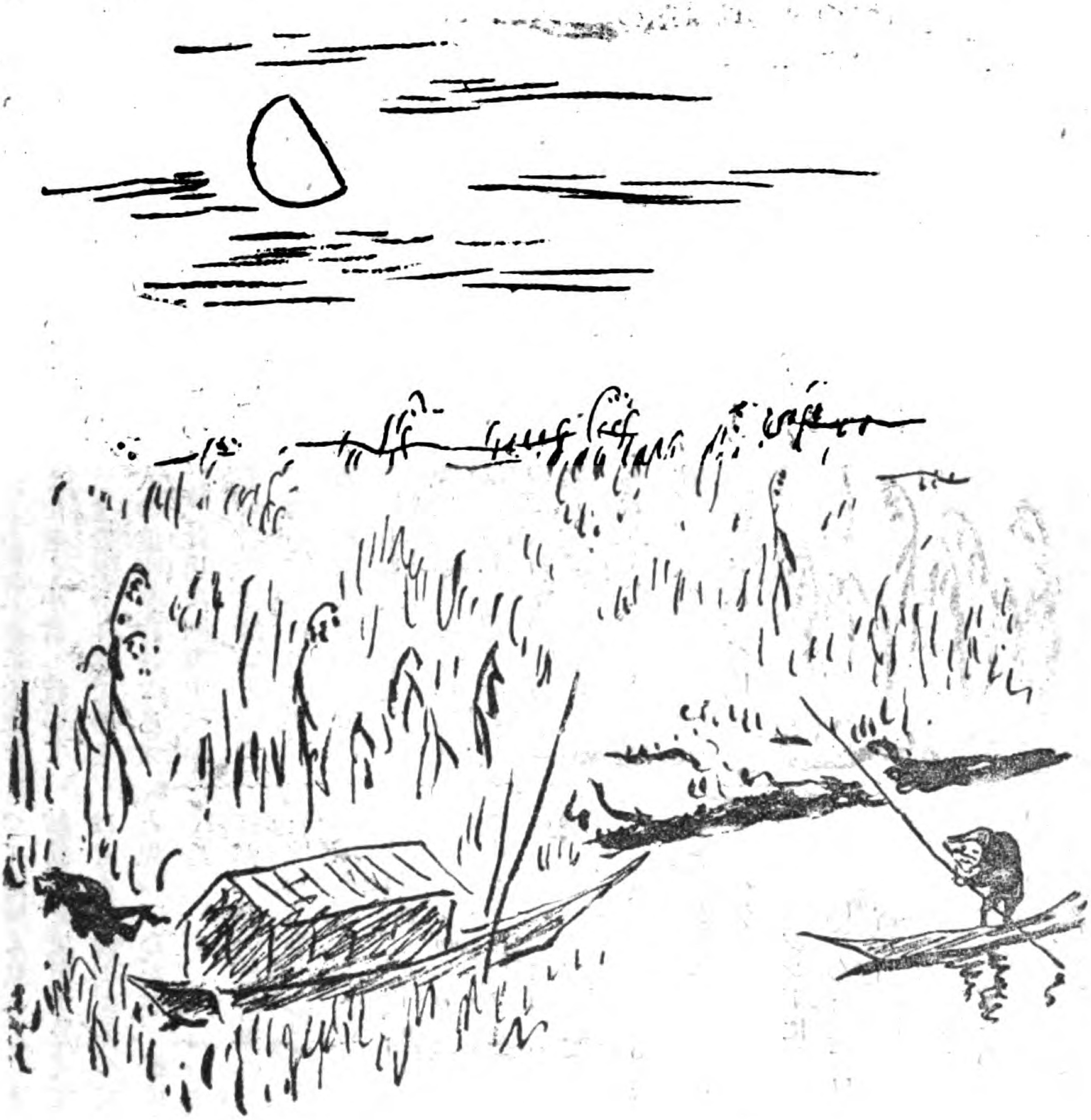
コツと云ふもの

今秋は三つの野球團が來朝して可なり學ぶべき教訓を殘して行つたが、私が最も驚かされたのは全布哇軍の遊擊カマチョー君の打力であつた。東都に於けるものとしては早大に於ける二

のホームラン、明大又は横濱で打つた驚くべき長打、更に大阪でも甲子園と寢屋川で素張らしい本壘打、また遠く小倉へ行つては對華盛頓の際二のホーマーを飛ばして大きなスコーアで敵を粉碎して了つた。當代の名投手として白人の追從を許さゞる大毎の湯淺投手でさへも、嘗て布哇へ行つた時、此男に回復すべからざる長打を蒙つてゐるので、彼程恐ろしい打者は無いと云つてゐる。カマチョー君は一寸見れば大して恐るべきそうな男ではない。身長も五尺四五寸位で、日本人としても大きい方ではなく、力と云つても何處に秘つてゐるか、肩巾も大して大きくない所を見れば、これも人並みであると思はれる。然るにあゝした大快打をほしいまゝにして行つたのはどうした譯であらうか。要するに彼は打撃のコツを心得たもので『打撃の悟道』と云つたやうなものに通曉した達人なのである。

打撃のコツは鋭い視力をもとでにすると云ふ人がある。成程それもさうだ、視力が十分優れてゐなければ、球の種類を一瞬にして見分けることは出來ない。ベーブ・ルースは一分間に六十間廻轉する蓄音機板の文字を、その廻轉中に見分ける程の視力を持つてゐると云ふが、果して實際であるかどうか、眞僞の程保證は出來ぬが兎に角人並以上の視力を持つことは事實である。近頃恐ろしい當りを見せてゐる大毎の湯淺君は『どう云ふものか此頃はどんな球でも打てると思はれて仕方がない、さうして飛んで來る球の縫目がよく分るやうになつた』と記者に云つたことがある。勢込んで飛來する球の縫目が分る樣なら、從つて廻轉も見へる、カーヴと直球の差もすぐ看破出來るから、結局は屹度打てなくてはならぬことになるのだ。カマチョー君はどんな視力を持つてゐるか、球の縫目に就いて聞いて見やうと思つてゐたが、遂にその機會がなかつたのは殘念である。

が、視力は打撃のコツを得る一の要素であるが、これを全部とは云ひ難い。野球家に云はせると、タイミングと云ふこと、即ち球とバットと合ふかねあいに不立文字の悟りがあると云ひ、或は自信、自信、自信、これより外にない、自信のある所ヒットあり本壘打ありと云ふ。然らばその自信はどうして得るかと云へば練習に限ると云ひ、練習の方法はどうかと云へばいろ〱と面倒臭くなつて來る。記者に云はせると、打撃のコツは、視力でも自信でも練習の結果でもない、さう云ふものから超越した或物があるのだ。云はゞ或物に達する過程として、視力や自信を必要とするのだ。或物に達してふりかへつて御覽なさい、そんな小細工をした昔が馬鹿馬鹿しくなる。記者はカマチョー君のグラウンドに於ける態度を凝視してゐて、何物をか非凡の點を見出さんとして見出し得なかつたが、默々として多く語らず、場當りの風は微塵もなく、專心競技と云ふものに沒頭して、一直線に驀進せんとする至純の態度には尠からず動かされた。一心專念、その背後に偉大なる或物が從つて來るのではあるまいか。



秋郊雜畫稿

森田恒友

月

「河畔秋月」などいふ畫題は、古い臭のする畫題だが、畫題などを頭に置かずして河畔に秋の月を見ればいくら古くともよいといふ氣がする。滿月もよく半月もよく、弦月亦惡しからず。

月の下、岸邊の葦の中に、ぽつりぽつりと點ぜられる屋根舟の中に、めそ捕りの親父が寢て居る。サツパ舟の親父、通りすがりに、

「居るけい」と聲をかける。

「おー——オ」と返事が聞へる。

一 秋の野 一　(口繪說)



時雨

時雨といふ畫題を課さば、山路、山村に材を探る人が多かろう。之れをも私は見慣れた沼邊に探つて見る。沼の畫趣の多くを、私はうすれ日、曇り日に覺へるが、折々ザーと來る秋の時雨は、格別沼畔を興深からしめる。向ふ岸の村へ買物に行つた人、蓑も笠もづぶ濡れて渡しから上つた。彼れの手には繩で結んだ德利や油揚げがさげられる。ハハア御馳走買ひだなと分る。刈られた田に水が溜つて畦道のみが縱橫にうねつて居る。



野鳥

午後の太陽に向つて、夫婦の農人、子供を中に草の上に小憩みして居る　黄ばんだ雜草の伸び亂れてゐる中に、點々と愛らしい野菊が咲いて居る。親父さん野菊の一枝を摘み採つて、「奴、來い〳〵」をやつて居る。

田の面には　小鳥の群が飛び散り飛び集りして居る。

眼を瞻せれば野草が美しく、仰げば群鳥の樂しさを見る。但し私の此の畫面は、午後の日を前にしてゞある。



刈田

秋の自然を畫筆に上すと、むしように點を打ちたくなることがある。向ふ丘を包む雜木の感じも大小無數の點だ。刈田に殘る稻株も亦無數の點だ。遠い野面にそよぐ草の感も、少し長味のある點とも見へる。そういふ大小様々の點々が動いて居る。時雨の來そうな日には特に動いて居る。

動いて居れば天地がざわつきそうなものだが、不思議にも秋の自然は靜まり返つて居る。野面が照つたり影つたりしながら。



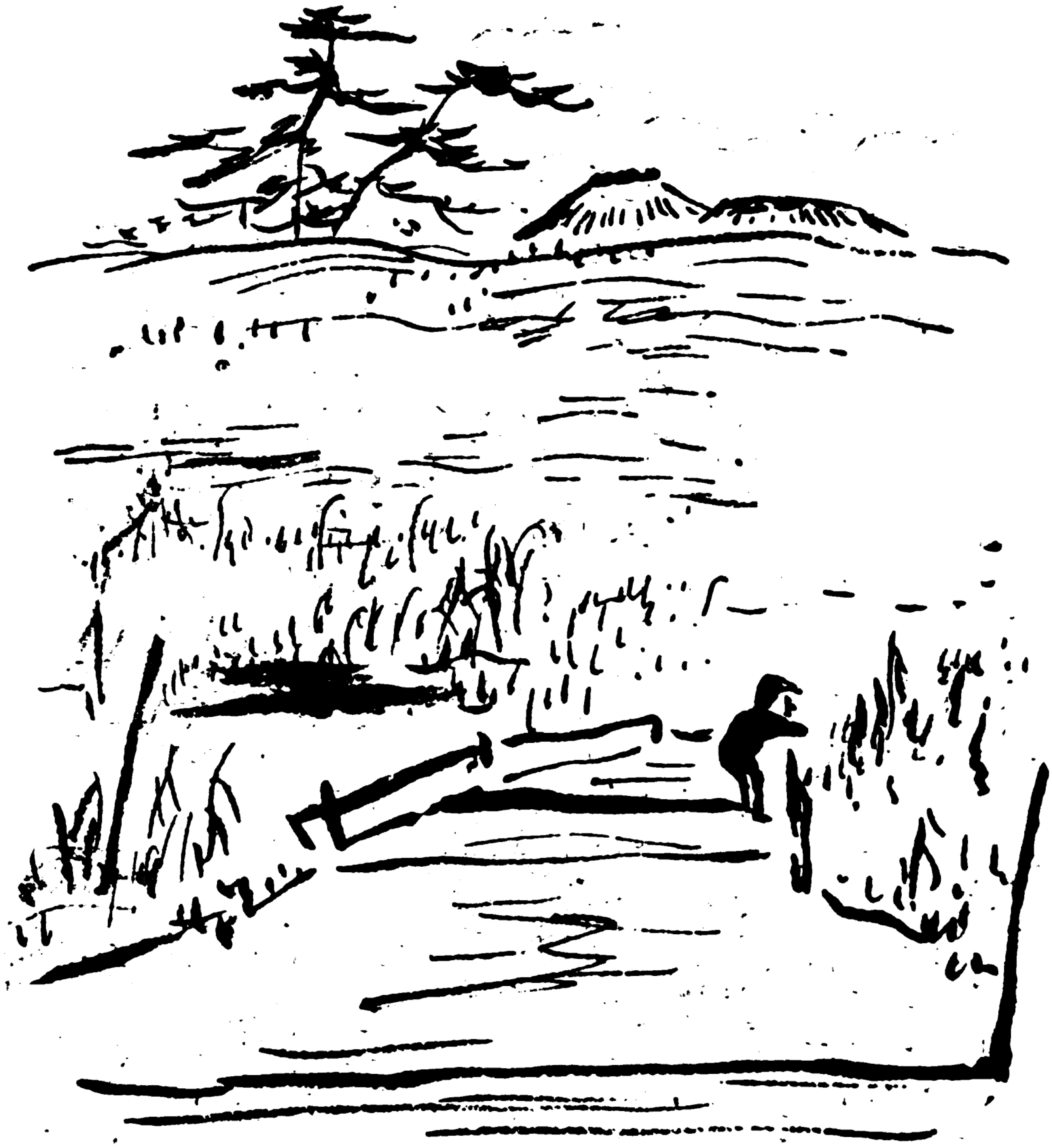
たき火

何だからす寒くつて、一向仕事も捗らぬ。其處等の葉つぱをかき集めて、一つたき火をしろ。

丘下の道をやつて來た他處(よそ)行きすがたの父さん、

「ほう、たき火かア、急に寒くなつたなア、どれ、己れも一つ温まつて行くかな」

と火の側へ寄る。火を中に、背中を此方へ向けた方は黒く、顔を前へ出してる方は、着物も手足もあかく見える。



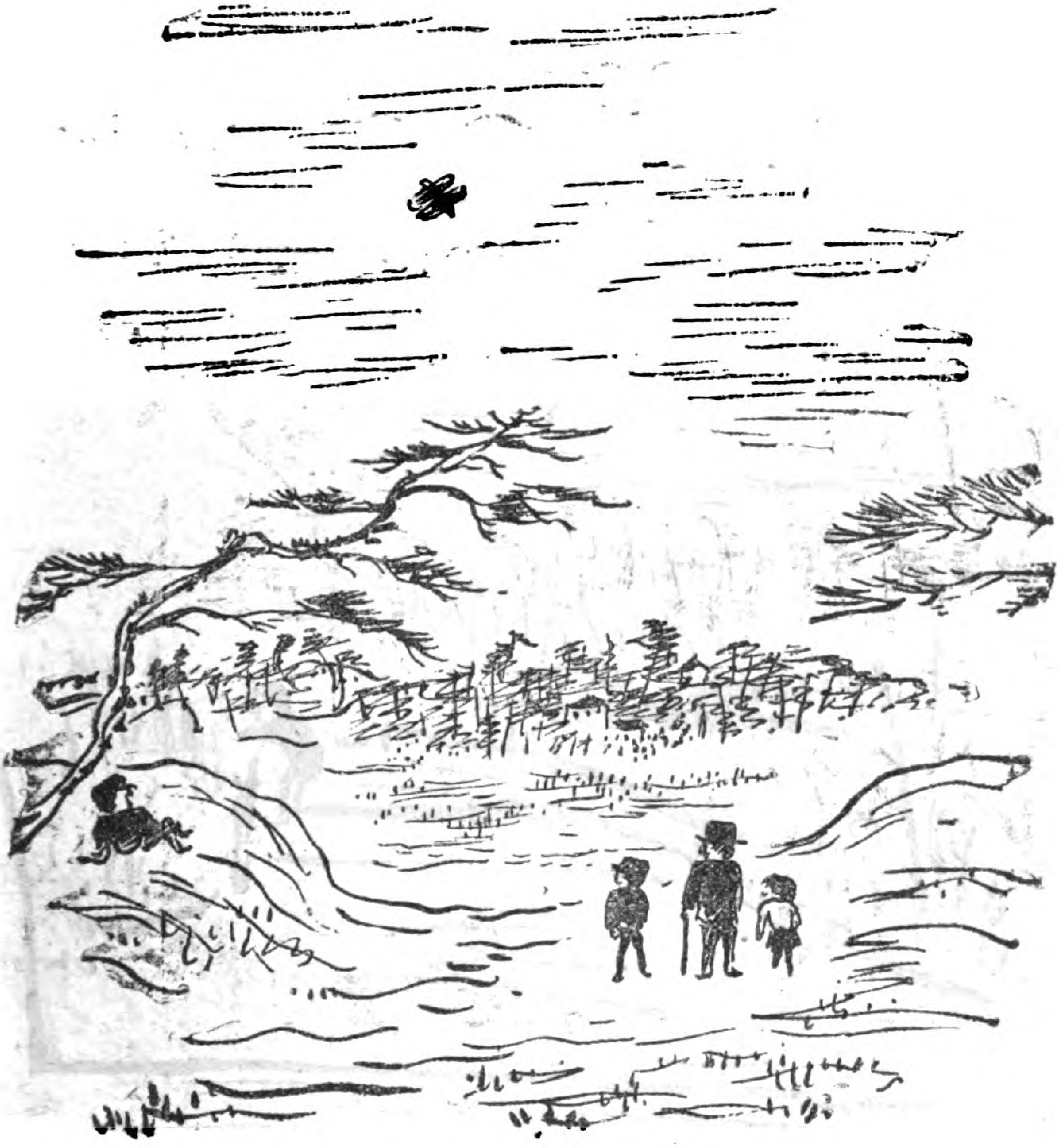
長い影

「おい〳〵、いつまで其處で、ぼんやり何を眺めて居るんだな」

と言ひたくなる程、一人の男が野橋の上に佇んで居る。

其の人間の影が、橋を横に越へて、下の水中に、遠くの方まで投じて居る。秋の日の投げる影の長さ。

印象派の技法では、影の色は紫と昔習つたこともあるが、それは西洋の自然であらう。日本の秋の日の投げる長い影の色は、寒い〳〵藍の色だ　日南の暖い色と、日影の寒い色とが秋を默つて語つて居る。



秋晴

之れは新らしいと言へば新らしい畫面かも知れぬ。油繪ならばちつとも新らしい畫面でもない。佛蘭西のアンリ、ルッソーといふ人は、建ち並ぶ家や木立の上に、あの低能な形をした飛行船を描いたが、日本の秋晴には飛行船は調和しない。第一日本の景色には、飛行船は大き過ぎて調和しない。野道に自轉車の走るのが調和して來た程度に、今は飛行機も郊外秋晴の畫面に點じ得ることゝなつた。だが、自轉車も、飛行機も、遠く眺めての範圍にのみ繪になるものだ。



すすき

東京の西北郊、中野や荻窪の附近には、いくら開けても未だ其處此處に空地が殘つて、秋になると薄原が現ぜられる。武藏野の土中には、都會發展の勢にもめげずに、未だ〳〵すゝきの根が絶へるには間がありそうだ。

日曜の空地には、近所の子供等が薄の穗を折りに集る。だが年々子供の數が增すよりも、すゝきの繁茂する方が早いと見えて、空地の薄は去年より今年は美しく、來年は今年より見事に穗を出しそうだ。

それは兎も角、薄の穗と、子供の頭の上に、赤とんぼの飛び亂れる様とが、此の畫稿の趣意と汲んで頂けばよい。



水鳥

鳰といふ小さい水鳥、常陸や下總の水國人は、むぐつちよと呼び慣れて居る。むぐつちよの方が彼れに親しい名前だ。

彼れの可憐な樣子は、春の水にもよいが、彼れの淋しい感じは秋の沼水に調和する。私は枯れ葦の根に鴨を描かんより、葦の穗を分ける漁人のすがたに、びつくりして、十間ばかりを向ふの水面へ飛びうつる彼れを描いて見る。



斜陽

川向ふに日が傾いて、土堤の上にぽつりと立つ男、土堤の向ふに頭を出して居る帆柱、共に墨畫のように黒く點じて居る。

土堤下の家には、近所の女房が來て話して居る。燈をともしてから夕飯の仕度に掛かろうといふ女房には、秋の日の短かさも感ぜぬのであろう。秋の日が長かろうが短かかろうが、平野の人間には沒交渉のように見へるところに畫稿を作って見た。

散歩

佐佐木茂索

——そんな風で澄江堂の話はなかなか盡きない。そして、いつの間にか僕らは銀座をあとに京橋を渡り、もう春陽堂の前あたりを歩いてゐた。丸善へでも寄つて、それでおしまひかと思つてゐると、飾窓を一瞥しただけで、

「ところで君。——」とか何とか、澄江堂の話は程なく室町を通り拔けてしまつた。今川橋も何ごともなく過ぎて、僕らはやつと萬世橋でその日の散歩を終りにすることが出來た。また別の日は此逆に、上野から日本橋まで疲れる氣色もなく歩き續けたこともあつた。これらは、もう七八年にもならうか、澄江堂が我鬼先生の時分で、お互に健康な時代の一兩日だつた。健康な時代と云へば、これらよりもづつと以前になるが、詩人金子光晴と僕とは淺草からの歸り、田原町から上野山下に出、須田町から九段を通つて牛込見附神樂坂を過ぎ、當時住んでゐた小石川水道町まで歩いたことがある。何を語り合つてゐたか忘れたが斷へずおしやべりを續けてゐたことは事實であり、長途の割にはくたびれもしなかつたやうである。だがこんなのは散歩とも云へないものかも知れない、散歩だとしたところが凡そ無思慮な散歩と稱すべきであらう、ただ歩いたといふに過ぎないものかも知れない。

此間、下谷根岸から三田の慶應義塾まで犬を連れて歩いて來たといふ青年を見て、歸りはどうする氣だらうと其無鐵砲に驚いたが、顧ると僕と雖も年少の頃はその程度のことは無鐵砲とも何とも考へずにやつて來たのだつた。

◇

僕は曾て「ある日歩く」といふ小說を書いたことがある。だから——及その他の理由から、僕は散歩が好きらしいと思つてゐる人もあるさうである。だが、殊さら「ある日歩く」と珍らしそうに書くだけに、實は歩くのは餘り好きな方ではないのである。何かと云ふと、すぐ乘り物を利用したがる方である。散歩といふ文字は、如何にも輕快で、散歩慾をそゝるに足る十分の魅力を具備してゐるが、さて現實の散歩といふもの、大低は

埃りつぽく、くたびれ易い變なものである。散歩といふ輕快な文字に誘惑されて出かけた歸り、重くるしい氣分に、若し少しでもなつてゐなかつたとしたら、――そんな健康な人は幾人あることだらう、羨ましい次第である。ケエベル小品集には、日本には散歩に適する徑がないと書いてあつたと記憶するが、「日本には」と大きく出ていいか惡いか分らないが、とにかく餘り好適の散歩場所のないのは事實である。

僕は今郊外目黑に住んでゐるが、「郊外」などといふ文字も字面が輕薄らしいだけで、實は輕薄でも重厚でもなく、ただのつまらない田舍といふ意味に過ぎない。その郊外に住んでゐると、散歩するには事を缺かないだらうとは誰でも云ふことであり、僕自身も郊外に住んでから大いに散歩してみるつもりでもゐた。だが移り住んで丁度一年、僕は近所の有名な甘藷先生の墓さへ、つひ兩三日前に通りすがつただけだつた。

目黑と東京と、どつちが天氣の日が多いか。――こんな事を云ひ出すと、東京には上り坂と下り坂とどつちが多いかといふメンタルテスト類似に見下げられるかも知れないが、此のどつちが天氣の日が多いかは、そんな戲問でなく、確かに田舍に住むものにとつての實際の問題である。「天氣の日」と漠然と云つては間違ひが起るから、云ひ直すと、散歩に適する日は、確實に東京の方が目黑よりは餘計に持つのである。

云つてしまへば頭から何だと箸にもつかぬ事だが目黑では雨が降つたら泥濘を凌して當分は散歩に出られないのである。東京でなら――少くも銀座でなら、例へ雨の降つた日でも、降り樣によつてはその日のうちに草履で散歩に出ることが可能である。だが郊外では――これから冬も過ぎて霜どけの時分など、いよいよ散歩に適する日が、――徑が、乏しくなるのである。郊外は散歩するによろしなどと、それはそんないい日も時折りはあるといふことに過ぎないのである。

◇

だから僕はよく銀座に出かけて行く。が僕は銀座へ散歩する目的で出かけたことは滅多にない、大ていは買物かたがたか、何處か喫茶店の片隅に腰をおろす爲にである。喫茶店で、誰にか會はないかと、その實會ふと反つて煩しくて厭な場合の方が多いのだが、――片隅でまづさうに茶を吸つてゐるのは散歩よりは快適である。

僕は小說では屢々主人公を散歩させる。そして何の主人公もいかにも散歩好きの人間らしくしておく。だが、これは作の[illegible]宜に出ることであつて、必ずしも作者が散歩を好んでゐる

にはならない筈である。曾日、ある人が僕の或作を批評して、此作者にしては珍らしく突込んだ作とか何とか云つてゐたが、突込むとは一體何を意味することか。主人公が散歩してゐる青年では突込んだことにならないのか。自己に近い生活をのみ生活と考へる誤謬から、少しは解放されるように努力したまへと云ひたい。人おのおの思ふところあり見るところあり、年年赤ん坊が生れる以上、歳歳赤ん坊の小説があつていい理屈だ。

銀座を散歩する人は、今夜もまた「大きいのと小さいの」が散歩してゐるのを目にすることだらう。「大きいのと小さいの」と云へば知つてゐる人には直ぐ通じる二人の西洋人のことだ。この兩人はいかにも親友らしく、そして兩人以外には全然孤獨らしく、何と仲よささうに銀座を散歩してゐることか。何かの都合で大きい方か小さい方かが一人きりで散歩してゐるのを見ると、今夜は片方が病氣ででもあるのかと僕にさへいささかの心配である。この大小二人の紅毛人の散歩は、いかにも「西洋」を想はせ、何か「西洋人の生活」を考へさせる力を持つてゐる。僕も、默つてさつさと歩くいい相手を獲たら、これでなかなか美事な散歩の實行家になるであらう。散歩は元來は好きでありながら容易に實行しないのは、ひとりで歩くには少し年とり過ぎたせいだらう。

◇

雨天の散歩、この文字も部屋の内で考へてゐる分には美しい文字だ。だが、本當に歩いてみたまへ、五度に一度だらう散歩の氣もちになれるのは。大ていは早く歸つて、濕つた着物を着換へたくなるだらう。京都の散歩も——別して秋は、と考へられるが、京都は僕には故郷のせいか、人目が繁くて狹過ぎる氣がしてならない土地だ。事實、靜かな町なかを散歩しながら、不圖何處かに人の視線を感じ、直覺的に見かへすと、格子窓の内から白い顏が覗いてゐる、そんな事がありがちの土地だ。これは僕と京都とに限らず、誰でも故郷を散歩する人が悩まされる化物かも知れない。

◇

散歩の題を得て、こんなことを書いてゐたら限りなく書くことがあるだらう。例へば、散歩のついでに本屋に立寄つてみて、昨日二冊あつた自分の著作集が、けふは一冊になつてゐるのを發見するような、謂はば實用的の散歩など、——だが少し下らないようだ。

秋蟲雜感

横山桐郎

一一鈴蟲一一

私は鈴蟲が大嫌ひだつた。それは彼の鳴き方がいかにも煉々しくて耳障りだからだ。無論徹頭徹尾悪いといふ譯ではないので、彼の奏樂にもいゝ處がある。殊にその終りへ來てスーッと音を落すところなどは却々巧みなもので確かに人を惹き付ける力がある。然し彼の奏樂が酣はな時つまり彼が夢中になつて女を呼んでゐる最中の奏樂に至てはとても、喧ましいといふ感じなしでは聞けたものでない。家庭で聞いて娯しむ音としては下の下だと思ひ込んでゐた。處が今年になつてある機會から私は、とても鈴蟲に對して感謝と尊敬とを拂ふやうになつてしまつた。そして彼が如何に眼に見えない功徳を持つて居るかゞ判つた。私は此秋、九月の終りに蟲屋になつて銀座街頭と神樂坂上に立つた。丁度銀座で賣つた夜は朝から怪しい空模様で夕方から粉糠のやうな雨が落ちて來た。然し私が少し遅ればせに駈け付けた時には農大の學生諸君はもう店を開いて私を待つてゐた。

そして店では鈴蟲が威勢よく合奏をやり、往きかふ人々は物珍らし氣に小さな屋台を取り圍んでゐた。だが斯うした景氣にもむらがあつていつも〳〵人だかりがしてばかり居ては呉れないで時には店の前がガランとして終ふ事も度々だつた。そういふ際に一同は非常な寂しさを感じた。誰でもいゝ、假令素見客でもいゝから立つて貰ひたいと思ふ程だつた。それでも鈴蟲が鳴いてゝ呉れさへすればそうでもないのだが、何かの工合で彼が鳴き止むでしまた時には、それこそ慘めな程店頭の景氣が落ちてしまふ。全く火の消えたやうな不景氣さを感じる、蟲屋の店先で蟲が鳴いてゐない位不景氣な事はない。殊に他を壓する雄大さを持つた鈴蟲の奏樂は確かに蟲屋の店先に無くてならない囃方なのである。だから鈴蟲が鳴き出すと皆ホツト息をついた。私は今度といふ今度は熟々彼の奏樂に感謝し蟲屋さん達が大して利益になりそうもない彼や、きり〳〵すを澤山店先に釣るして居る心持が判つた氣がした。

二　鈴　虫

黒の琵琶形に印度模様の浮彫のある翅を持つた鈴蟲は、何と言つても蟲界音樂家の重鎭である。その鳴く音の如何にも涼しさうなそして上品な事は他に比べるものがない。殊に鳴き方の上手な此蟲になると、一氣に七聲位續けその一聲々々は長く波を描き、その終りは絹糸のやうに細くなつて暗の中に消えてゆくあたりは此蟲獨特である。その音が鈴を振ふやうであるといふので鈴蟲と呼ばれてゐるけれど、その音の冷涼さを含むだ點から考へて涼蟲と言つてもいゝと思ふ。私が此蟲に對して一番嬉しいのは、いくら澤山飼つて置つても少しも喧しいといふ事のない點だ。大低な蟲は三匹も四匹も飼つて置くと、とてもうるさいものだ。彼の可愛い松蟲でも、二三匹で一時に鳴かれると閉口する。（無論家の中の事）然し鈴蟲に至つては決してそうした心配がない。それのみか、澤山のものが互ひに入り亂れて鳴いてゐるのは、とても優雅なものである。夏私が緣日へ出かけて一番樂しみなのは、蟲屋の前を通りすがりに聞く鈴蟲君の合奏である。それから尙私が此蟲に對して好意の持てる點は彼が非常に溫厚しい事だ。それは彼を瓶に入れて飼つて置くとすぐ判る。一寸見はいかにも柔和しさうで松蟲は、あれで却々すばしつこい奴で、へまな取扱をすると直ぐ瓶の底から跳ね出すけれど、鈴蟲に至つてはいつもおとなしく底に居て無暗と跳ね廻る事をしない。すべてが女性的に出來てゐる感がある。それから又所謂その鳴き方に上手下手のあるのも此蟲が一番激しいやうだ。此蟲の鳴き方は長く延いてそれが六聲から七聲位續き、その音に錆のないのが上等としてある。然し普通蟲屋から買つて來たものは大低四聲か、五聲で六聲も續けるのはめつたにない。甚しいのは三聲位しか鳴かない。而もその三聲も一聲々々が短くて、いかにも堅い余裕のない音も立てるのがあるが、そんなのは鈴蟲仲間の面汚しのやうな氣がして、聞いてゐても癪に障るものだ。それは確かに鳴き方も下手なのであるが、又一つには樂器そのものが傷んでゐる場合も少くない。だから秋も末の鈴蟲には所謂鳴き下手の鈴蟲が非常に多い。そして斯ういふ連中の立てる音はキリ〳〵或はギリ〳〵と音に錆が含まれてゐて聞いてゐても氣持が惡い。然し當の鈴蟲君は、自分の樂器の惡い事や、不快な音を出してる事などには全で無頓着で身を顫はせて女を口說いてゐる樣子を見ると、ほんとうに哀れな氣がする。殊に男のそうした熱意に對して如何にも冷然たる女の態度を見ると蟲乍ら反感が起る。私は鈴蟲を飼ふのもいゝが、鳴き方の下手な者や、擦り減つた樂器を懸命に鳴らさうとあせつて

ゐる男の慘めな態度にはいつもいやな氣持をもたせられる。

三　松蟲

鈴蟲の鳴き音が徹頭徹尾上品で御屋敷向なのに反して松蟲になると、意氣向で待合とか料理屋それから長唄の御師匠さんの軒下に釣るすのに適はしい氣がする。それも澤山飼つてはいけない、先づ一匹か二匹がいゝ。あれで松蟲の聲は濁音がなくて徹き透るやうな鋭さを持つてゐるので、近くで聞くととても强く感じるものだ。だから一匹ならとも角、二匹以上も軒へつるして置いて、それが一處にかけ合ひで鳴きでもしやうものなら、それこそ却つてうるさくなる。先づ餘程寢坊な人でない限り、寢室の椽の軒下で、二匹の松蟲に鳴き競はれたらキツト閉口するだらう。殊に彼は夜更けになると夢中になつて鳴く傾がある。そしてそういふ時には普通のチン、チロリンのチンを略してチロリン〳〵と大聲で鳴く。私は此夏二匹の松蟲を飼つて可なり惱まされた。それは今でも（十月三日）未だ生きてゐるけれど、物置部屋の隅に置かれて座敷へ出す事は禁じてある。だが廣い自然の野、秋色豐かな秋の夜月の光の下で聞く彼の音樂はそれこそ格別としなければならない。

松蟲は鈴蟲と比べると、行動が遙かに敏捷で態度がキビ〳〵してゐる。瓶等の中で養つてもうつかりすると跳ね出して逃げてしまふ。それに乾いた處が好きで濕氣が嫌ひだし、鈴蟲よりも弱く却々飼ひにくい。それにその風彩がノツペリしてゐて餘りいゝ感じがしないので、私は此蟲に對しては餘り好感を持たない。

四　くさひばり

數ある鳴く蟲の中で、此蟲程可愛い美しい音樂を奏でる蟲は他にないと私は思つてゐる。「熟々惜しい、熟々惜しい」と言つて夏の逝くのを悲しみ鳴いてゐた「つく〳〵ぼうし蟬」の聲がかすれて、障子を染める朝陽の色に橙色が添へる八月の終ひ頃になると、ヒヨツコリ此樂師は庭の垣根の朝顔の葉の裏なんかに現はれて來る。そしてうす褐色の二枚の翅をすり合せて金鈴を振るやうな細かな震へと、水晶のやうなすき透つた音をたてる。朝起きがけに顔でも洗ひ乍ら、庭の植込の繁みから洩れてくる此蟲の音を聞くとそれこそ、しみ〳〵と初秋の冷涼さを覺える。私は鈴蟲に亞いで此蟲が好きである。それに彼は柄こそ小さいけれど却々大きい聲を出し、二十間位の遠方まで聞える。それに夜でも晝でも鳴く、殊に朝、それから曇つた日によく鳴く、細かい竹細工の籠に入れて、座敷の違ひ棚にでものせ

て置くと、霊魂の顫へのやうな彼の音波は室中に擴がつて家全體を音の漣の洪水にする。

文豪ラフカデオ・ハーンをして詠嘆せしめ、傑作「草雲雀」の名稱を殘させたのも此小さな蟲だ。實際僅か三分足らずの此蟲の奏でる音樂は、全く人の心をチヤームする偉大な力を持つてゐる。そして彼は非常に敏捷で却々捕まへにくい、それに所謂聲はすれども姿は見えずの方で、眼の前で頻りと鳴いてゐる事は確かなのだがさてその居所を突き留めるのが一骨である。こつちの體の向けやうで聲の源があつちこつちに變る。それは不思議な位だ、そしてやつと葉の裏に居るのを見付けて覗かうとすると、彼はヒラリと葉の表に廻つてしまふ。それから又私が上から見やうとすると、今度はヒヨツト裏に隠れん坊をする。それは却々機敏でとても愛嬌のある仕草で人を翻弄する。若し一度捕まへ損じやうものなら、それこそ二度と捕へる事が出來ない程、眼にも止らぬ素早さで逃げてしまふ。

身の丈はたつた三分ばかりのうす黄色の小蟲だけれど、却々氣が荒く澤山雜居させて置くと友食ひをやつて弱蟲共からやつつけてしまふ故注意がいる。

五　かんたん

邯鄲と漢字で書く。草雲雀に負けず却々人氣のある蟲である。少し黄色味を帯びた綠色の細長い、その態度のシナ〱した點等が、一寸御姫様を偲ばせる處がある。その鳴き聲も非常に女性的だ。リユーリユー〱〱或ひはヒヨロ〱〱とも聞える。私は此秋蟲屋をやつて此蟲が一般世人の間に意外の人氣を持つてゐるのに全く驚いてしまつた。何しろ値だんも張るし數も少ないので、初日の晩の銀座では、十匹程しか用意して行かなかつた。ところが、來る人も〱「かんたん」はありませんか「かんたん」を下さいと言つて彼を要求した。僅かの用意は忽ちに賣り切れとなり、おそく來た人達には總て、賣切れの御詫ひをすると云つた景況だつた。それは二日目の神樂坂の蟲賣の場合も同様り餘程優勢だつた。人氣の點では草雲雀なんかよりだつた。しかし彼が斯様な人氣のあるのは、その鳴聲よりもむしろ其名に理由が在るのではないかと私は思ふ。といふのは、其鳴聲は草雲雀に比べると確かに一段落ちる。幾分音に濁りが含まれ調子もずつと低い。だけど其「かんたん」漢字で「邯鄲」といふ名は所謂「邯鄲夢の枕」といふ故字を想ひ起こさせ、いかにも美しい幻想を與へる。しかし彼の名聲も決して惡くはない、如何にも物柔かな「夢の様な聲」を出す。それは草雲雀と共に、日本座敷の床の間に置いて娯しむに適はしい小業師で

ある。それに却々居ない蟲で、東京附近では武州の高雄邊で採れる位のものだ。元は明治神宮の內苑でも聞かれたそうだが、今はもう駄目である。

六　かねたゝき

「草雲雀」の仲間で體の大いさも似たりよつたりの「かねたゝき」も却々可愛い音樂師だ。しかし其風つきには少し阿娜つぽいところがある。雄の方は短かい黑褐の翅が丁度水兵服の垂れのやうにチョコナンとついてゐるが雌の方には翅がなくてうす鼠色の體全體に銀の粉を裝ひ、のつぺりした樣子、體にしなをつけて步く態度は裸體といふ感じがして艶つぽく見える。行動そのものが草雲雀と比べると遙かに女性的である。

七　こほろぎ

私はこほろぎを見ると、最も愛す可き民衆的音樂家よ、と言ひたくなる。實際彼の世間は廣い。都會を離れた野原は言ふまでもないが街の中、それこそ下町の裏長屋の溝ばたでも彼の音樂を聞く事が出來る。先づこほろぎにもいろ／＼あるけれど一番の名手は「えんまこほろぎ」だらう。彼は音樂家といふより寧ろ聲樂家と言つた調子を持つてゐる。彼が夜たつた一人で、石の下や溝蔭に陣取つて女に對する呼び出しの歌を唱つてゐる時の調子は、それこそ玉を轉がすやうな清らかさと、嬉しくて／＼堪らないと言つた晴やかさを持ち、丁度ソプラノの歌手の獨唱を聞くやうだ。曾て帝劇だかで一夕拾圓とつて聞かせた露國のシユーマン、ハインク氏の聲によく似てゐる。先づ自然樂師の中で蟬はたしかに聲樂家と言つていゝが、秋の蟲仲間で、それに喩へ得るものは此えんまこほろぎ君だけであらう。先づ九月から十月へかけて、野へ出て見給へ、枯草の褥の中に躍り乍らコロコロ／＼コロコロコロ／＼と呼び出しに餘念のない此蟲の男共の聲を聞くと、まるで唱歌室へ入つたやうだ。兎に角體格も大きいし、聲も高いし自然樂師の重鎭として大いに尊重していゝと思ふ。たゞ彼は他の鳴く蟲等と違つて、自重心が足りなくて困る。田舍へゆくと、野菜物を喰ひ荒すばかりでなく家の中までノコ／＼入り込んで衣類や蚊帳など嚙つて、とんだ迷惑をかけるので嫌はれる事がある。たしかに玉に疵だ。それから先生却々の嫉妬燒でその戀愛合戰に至つてはとても痛決な場面を演じる。

私は今年は一人の女に二人の男を與へて、所謂三角關係を造つていろ／＼觀察して見たが、とても痛快だつた。約一ケ月に亘つて每日／＼彼等の行動に注意したが、一篇の物語になりさう

だ。今此處で其話を書く餘白はないけれど、結末は女が男に嚙み殺される事によつて事件は終つた。そして今では、最初の戀敵の二人の男は仲よく私の與へる「さつまいも」を分け合つて生きてゐる。約一ヶ月といふもの、夜も晝も殆んどたへず鳴き通した二人の男は、雌が死んでしまつてからはるまで鳴かなくなつて了つた。それにしても二人の男のあくせくした爭ひの間に立つて女は實に冷然たるものだつた。そしていつも男同志の喧嘩を冷やかに眺めてゐた。私は女を憎むと共に、女の前へ行き、平つく張つて翅を擦り合せる男の哀れな姿を見るたびに、蟲乍らつく／＼情なさを感じた。斯うした事は鈴蟲にも松蟲にも見られるし蟷螂などに至ると更らに激しい。兎に角一般に蟲の世界では女の權力が馬鹿に強く、男は小さくなつてる傾がある。ある種の蜂などでは、私は度々實見した處だが、假令愛は得ても、女の感情がさめたが最後太い後ろ脚で背中の男を蹴落して了ふ、それは全く慘めな有樣である。それが一層度を増すと蟷螂や鈴蟲みたいに最後は女が男を喰つて了ふ事になる。或る筋から「蟲の世界の女權問題」に就いて書いて呉れと言はれて其儘になつてゐるが、若し充分調べて書いたら可なり面白いものが出來やうと思ふ。兎に角蟲の世界ではおしなべて男性が女性の前に頭の上らない事は事實である。月明の夜、秋の野に催ふされる數々の自然樂師の大演奏會も、その實、異性に餓えた蟲の男共が美しい女を呼ぶ誘惑の音樂會であり、口說の腕試しだと思ふと一寸興がさめる。

私は普通の「こほろぎ」の大合奏をきくのが何より好きである。彼は朝の四時頃から六時頃にかけて一番よく鳴く、何百何千といふ彼等が一齊に聲を揃へて鳴くのを、床の中で聞く氣持は何とも言へない。うつすらと靄もやのかゝつた自然の樣子、朝露にしつとり濡れた樹々が、もやの中にボンヤリと浮んでゐる面影が眼に浮ぶやうな氣になる。一般に「こほろぎ」といふと馬鹿にして餘り顧みないが、私は彼の奏樂がとても好きである。

八　きりぎりす

「こほろぎ」に亞ぐ民衆樂師の「きり／＼す」君も音樂家としては不遇な方だ。尤も奏樂そのものが餘り華美でないのが主な原因だがその風彩が如何にも田舍臭い野暮つたい點も、彼の不遇を齎らす原因だらう。その點では、鳴き聲は喧ましくても、轡蟲の方が一段上にある。轡蟲は誰が見ても風采が上品に見える。殿樣然とした處がある。殊に雌に至つては上品を通り越して雄大さをさへ感じる。處が「きり／＼す」君には惜しい哉轡

蟲氏に見るやうな品がない。ガッシリした體つき、脂切つてテカ／＼光る腹がツンツルテンの翅の先から無遠慮にはみ出してゐる。それは何處から見ても田舍者である。一見して「野人」といふ感がする。それに彼の奏樂も濁音が多くて冴えに乏しいから一般から優待されないのも無理はない。その證據には容れ物でも粗造りのブッツケ細工で、糞を掃除してやる事も出來ない籠に入れられてゐる。そして糞尿垂れ流しの不潔の中で我慢を餘儀なくされてゐる。然し御當人は一向平氣らしく、胡瓜のしなびた奴を睨め乍ら「ギーッ、チョン」と底力のある聲を立てゝ的のない女を呼んでゐる。だがあれで蟲やさんにとつては螢蟲と一處に店の人氣を引き立たせる看板娘である。

九　馬追蟲

蟲界樂壇人中での胡弓の名手は吾が馬追蟲君である。俗に「すいつちよ」などゝ呼ばれて頗る甘く見られてゐるが、あれで却々凄い處のある音樂家である。何しろ彼の喰ひ物が凄い、といふのは野菜も喰べるけれど、それよりも肉が好きでいろ／＼他の蟲を取つて喰ふ。殊に共喰ひの激しい事驚くばかりで、二匹一つ容れ物に入れて置くと、きつと喰ひ合ひをおつ始めて弱い奴は忽ち餌にされてしまふ。どうも蟲界の樂人には私的生活

を飼くと情なくなる者が多い。これに大變喰心棒で、南瓜胡瓜等をやつて置くと、一日中殆んどつき切りでむしや／＼やつてゐる。一度に餘り多く喰べないで小しづつ／＼長く樂しんでゐるらしい。

惡口ばつかり叩いては可哀想だが彼の奏樂も近くで聞いては音に濁りがあつていけない。それに頭の心をチーンと刺すやうな欠點がある。しかし遠くで聞くとそれは一段と美しさを增す、所謂「スーイッチョン／＼／＼」と如何にも秋の夜に適はしい音を立てる。

一〇　蟷螂

秋の蟲といふと一般には鳴く蟲だけしか考へないけれど此の昆蟲界の意地惡者の蟷螂も見のがす事は出來ない。

九月に入つてそろ／＼颱風が見舞ひ出す頃になると、私の研究室の前の草原には、何處からともなくきつと蟷螂が現はれる。それは大きな野外昆蟲飼育籠の金網の外周りをノソ／＼と步るいてゐることもあるし、草の葉に止つて手を合せて御祈り姿をしてゐる事もあれば、ばつたを捕へてモリ／＼嚙つてゐる事もある。私がツカ／＼と近よると彼は迂散臭い奴めと言はぬばかりに、首を上げ前脚を中段に構へて私を見つめる。何とい

ふ小悧らしい態度だらう、私が一寸手を伸ばして觸らうとすると、彼は一層首を上げ鎌を振つてとび付からうと身構える。いかにも負け嫌ひの意地つ張りである。私はいつもこん畜生生意氣するナイと心の中で言ひ乍ら、親指と人指指とで彼の唯一の武器である二本の鎌を一束にして摘んでやる。彼は長い腹を動かし針金のような細い脚で私の手首に絡み付き、三角頭を押し付けて私の手を噛む、そして齒の立たないのを如何にももどかしさうにして藻掻くのが常である。

やはり秋出て來るツマグロキテフといふ可愛い小蝶が度々此惡者の犧牲になる。それは私の室の前に植えてある「くさねむ」の葉に卵を産みに來るのだが、うつかりしては、蟷螂の辻斬りに逢つて哀れな最後を遂げる。彼は草の葉の蔭に身を潜めて、獲物を待伏せてゐるのである。そんな事とは露知らぬ女蝶は、ヒラ〳〵と飛んで來て御産をしやうと葉末に止る處をバッサリやられてしまふ。

蟷螂の持つてる鎌の力は實に驚く可きもので自分の體よりも遙かに頑强な大蝗蟲（バッタ）等でも苦もなく抑へ付ける偉力を持つてゐる。蝗蟲は彼得意の後ろ脚を使つて、相手の體を叩いたり蹴つたりするけれど、蟷螂先生そんな事にはまるで無頓着で、定つて首つ玉からムシャ〳〵と噛り出す。それはほんとうに慘酷である。然しもつと慘酷なのは男を喰ふ鬼女房であらう。滿腹してゐれば兎に角、若し少しでも空腹を感じてゐる時でもあらうものなら、それこそ忽ち捕まへられて喰はれて終ふ。第一雌と雄とでは體格が段違ひである。雌の豐圓な肉體に比べて雄はやせてゴツ〳〵してゐる。女の一擊は男にとつては大鐵槌だし女の抱擁は男にとつては致命の抱擁なのである。豪然と頑張つてゐる女の檻の中に男を入れてやると、男はすぐに亢奮して異常な身振りを始める。然し却々女に近づかうとはしない。尻を曲げたり捻ぢつたりして見せびらかし乍らヂリ〳〵と近寄つてゆく。斯うした男の態度を冷然と見下してゐるのが女の常習だ。そして時々體をゆすつて男を威嚇する。それを見ると男はもう近づく事が出來ずにマゴ〳〵する。それは確かに見ものである。今年も私は澤山蟷螂を飼つてゐるが、殆んど半日も女の周圍をマゴ〳〵した上句結局喰はれてしまつた男もある。そしてさういふ時、女はきつと男の首筋から噛り出す。キチン質の堅い首筋はポリ〳〵と音を立てゝ折れてゆく。頭が噛られ、胸が喰はれ、翅が落ち足がもげて見る影もない男の姿を眺めると全く情なくなる。而も平然と舌舐めずりをしてゐる妖怪な女の樣子。大抵一匹の男を三分間位かゝつて喰ひ盡す鬼女の食慾はたゞ呆れる他はない。今私の前では毎日いろ〳〵な悲劇が行は

れてゐる。

下手な芝居を見たり、マラソン競爭劇みたいなアメリカ映畫等に高い入場料を拂ふよりも蟲の世界に演ぜられる、實際劇、生きんがための猛闘劇の方を見る方がどれ位面白くて爲になるか知れない。

O君の新秋

芥川龍之介

僕は膝を抱へながら、洋畫家のO君と話してゐた。赤シャツを着たO君は疊の上に腹這ひになり、のべつにバットをふかしてゐた。その又O君の傍らには妙にものものしい義足が一つ、白足袋の足を仰向かせてゐた。

「まだ殘暑と云ふ感じだね。」

O君は返事をする前にちよつと眉をひそめるやうにし、縁先の紫苑へ目をやつた。何本かの紫苑はいつの間にか細かい花を簇らせたまま、そよりともせずに日を受けてゐた。

「おや、こいつはもう咲いてゐらあ。この……何と云つたつけ、團扇の畫の中にゐる花の野郎は。」

×

海の音の聞えない、空氣の澄んだ日の暮だつた。僕はやはりO君と一しよに廣い砂の道を散歩してゐた。すると向うからお孃さんが一人、生け垣に沿うて歩いて來た。白地の絣に赤い帶をしめた、可也背の高いお孃さんだつた。

「あ、あのお孃さんは氣の毒だなあ。長い脚を持て扱つてゐる。」

實際その又お孃さんの態度はO君の言葉にそつくりだつた。

×

O君は杖を小脇にしたまま、或大きい別莊の裏のコンクリイトの塀に立ち小便をしてゐた。そこへ近眼鏡か何かかけた巡査が一人通りかかつた。巡査は勿論咎めたかつたと見え、白扇でO君を指さすやうにした。

「これです。これです。」

O君は多少吃りながら、杖で二三度右の脚を打つた。右へ脚は義足だつたから、かんかん云つたのに違ひなかつた。

「僕の家はそこなんですが、……」

巡査はにやにや笑つたぎり、何も言はずに通りすぎてしまつた。

×

家々の屋根や松の梢に西日の殘つてゐる夕がただつた。僕はキヤンディイ・ストアの前に偶然O君と顏を合せた。O君は久しぶりに和服に着換へ、松葉杖をついて來たのだつた。

「けふは松葉杖だね。」

O君は白い齒を見せて笑つた。

「ああ、けふはオオル（櫂）にしたよ。」

僕はO君の家へ遊びに行き、四疊半の電燈の下にいろいろのことを話し合つた。が、大抵は神經とかテレパシイとかの話だつた。Uと云ふ僕の友だちの一人はコツプに水を入れて枕もとへ置き、暫くたつてそのコツプを見ると、いつか水が半分になつてゐる、或晩などはうとうとしてゐると、いきなり顏へ水がかかつた。しかし驚いて飛び起きて見ると、コツプだけは倒れずにちやんとしてゐる、――そんな話も出たものだつた。

それから僕等は散步かたがた、町まで買ひものに出かけることにした。するとO君はいつもに似合はず、肘掛け窓の戶などをしめなじめた。のみならず僕にかう言つて笑つた。

「この窓に明りがさしてゐるとね、どうもそとから歸つて來た時に誰か一人ここに坐つて、湯でも飲んでゐさうな氣がするからね。」

O君は勿論この家に自炊生活をしてゐるのである。

×

O君はけふも不相變赤シヤツに黑いチヨツキを着たまま、午前十一時の裏庇の下に七輪の火を起してゐた。焚きつけは枯れ松葉や松毬だつた。僕は裏木戶へ顏を出しながら、「どうだね？飯は炊けるかね？」と言つた。が、O君はふり返ると、僕の問には答へずにあたりの松の木へ顋をやつた。

「かうやつて飯を炊いてゐるとね、松は皆焚きつけの木――だよ。」

×

パナマ帽をかぶつたO君は小高い砂丘に腰をおろし、せつせとブラツシユを動かしてゐた。柱だけの白いバンガロオが一軒、若い松の群立つた中にひつそりと鎖戶を下してゐる。――それを寫生してゐるのだつた。松は僕等の居まわりにも二三尺の高さに伸びたまま、さすがに秋らしい風の中に靑い松かさを實のらせてゐた。

「松ぼつくりと云ふものはこんな松にもなるものなんだね。」

O君はブラッシュを動かしながら、僕の方へ向かずに返事をした。

「女の子が姙娠したと云ふ感じだなあ。」

×

O君は本職の仕事の間にせつせと發句を作つてゐる。ちよつとO君を寫生した文手にそれ等の發句もつけ加へるとすれば——

——秋 興——

らん竹に鋏入れたる曇り哉

夜具綿は糸瓜の棚に干しもせよ

わくら葉は蝶となりけり糸すすき

うすら日を糸瓜かはむけ井戸端に

ひときはにあをきは草の松林

大つぶもまじへて栗のはしり哉

鳳仙花種をわりてぞもずのこゑ

（十五、十、十一鵠沼）



想華

清悦物語まで

――東北文學の研究 二――

柳田國男

一 生き殘つた常陸坊

義經記成長の事情を窺ひ知る端緒として、最初に我々の心付く特色の一つは、いよ〳〵泰衡が背き和泉夫婦が忠死を遂げて、主從僅かに十三人で、寄手の三萬餘騎と激戰するほどの大切な日に、生憎其朝から近き邊りの山寺を拜みに出て、籠城の間に合はず、其儘還つて來なかつた者が十一人あつたといふ點である。其十一人の大部分は名が傳はらぬが、たゞ一人だけ知れて居るのは常陸坊海尊であつた。それが其通りの歴史であつたとすれば是非もないが、人の口から段々に大きくなつた物語としては、斯樣な挿話は見た所何の必要もないので、若し必ずさう語るべきであつたとすれば、別に隱れた理由があつた筈である。

ところが一方には足利時代の下半期、即ち義經記の京都邊まで盛んに行はれて居た時代に、此とは獨立して別に右の

常陸坊海尊がまだ活きて居るといふ風説が諸國にあつた。殊に東北ではつひ近い頃まで、海尊仙人を固く信ずる者があつて、それは其筈だと謂ふ人も無いともいはれぬが、實は此噂が一箇處一口では無い爲に、却つて始末が悪いのであつた。例へば本朝故事因緣集には、海尊富士に入つて岩の上に飴の如き物あるを見付け、之を食つてから不死になつた。近代は信濃の山奥で、其姿を見た者があつたとあつて、その近代とは江戸の初である。今から百五六十年前にも、能登と加賀越後に又別口の話があつた。それよりも更に有名なのは會津城下の實相寺、第二十三世の桃林契悟禪師、其號を殘夢又は秋風道人と云ふ者が即ち海尊だといふことが、既に林羅山の神社考などにも見えて居る。しかも此人なりとすれば、非常な長命であつたが天明四年の三月に、目出たく大往生を遂げて居るので、それではえらく都合の悪いことには、仙臺以北の海尊仙人に至つては、其後又五十年もしてから漸く出現して居たのである。つまりは互ひに相手をにせ物としなければ、成立たぬ話ばかりであつた。

尤もこの殘夢和尙などは、必ずしも自らさう名乘つたのでは無かつた。たゞ第一には年齢を言はぬ。第二には源平合戰の顛末を、あまりに詳しく知つて居る。第三には人が貴僧は常陸坊であらうと言ふときに、微々として笑ふのみで、さうで無いとは決して答へなかつた。即ち何か世間の方にもさう評判するだけの根據があつたので、單にそれだけの事ですむならば我々にも出來る。一般に足利時代は、現世福德の盛んに欲求せられた時代で、鞍馬西ノ宮等の福神化と共に、長命談も亦多く行はれた。私が次に說かうと思ふ若狹の八百比丘尼も其一つなれば、又車僧七百歳といふのも有名であつた。彼等は皆單に一人で靜かに仙人になつて居たのみで無く、稍之を人に見せびらかす形があつた。

會津實相寺の殘夢和尙の處へは、石城の方から無々といふ老人が折々來た。逢ふといつでも源平合戰の話ばかりして居たといふ。曾我の敵打の朝別れたまゝだつたなどと話して居たとも傳へられる。

無し〳〵といふはいつはり來て見れば有ればこそあれ元の姿で
無し〳〵といふもことはり我姿あるこそ無きのはじめ也けり

斯んなをかしな禪問答の歌までが、よくは解らぬ爲に疑の種に算へられたらしい。又福仙といふ鏡磨ぎが、時々此お寺の近くに來た。それを見て和尙がある時、あいつは義經公の旗持ちであつたと謂つた。それを聞いて福仙も負けぬ氣になり、和尙樣こそ常陸坊海尊なのだと謂つたとかで、とう〳〵土地の人がすつかり信じてしまふことになつた。近くは又天明年中にも、上州伊香保の木樵で下駄灸といふまじなひをして居た親爺が、やはり義經の旗指しであつて、海尊から此名灸の傳授を受けた爲に、長命して居るやうに評判された。いづれも本人は大抵白狀せず、世間が段々にさうしてしまふのには、何か曰くのあつたことらしく、つまり夙くから常陸坊は高館で死なず、さうしてまだ活きて居るといふ風說が無かつたら、到底次々に斯んな出來事も起らず、一方には又いつ迄も此種の出來事が續く爲に、どうでも此人を活かして置く必要が、昔からあつたのでは無いかと思はれるのである。

二　淸悅出現のこと

私が殊に話をして見たいと思ふ淸悅物語なども、疑も無く斯うした社會相の間から、頗る自然に發生したものゝやうである。南部叢書の一冊として遠からず出版するさうだが、今はまだ寫本時代で、是は又不思議なほど異本が多い。見た人は多からうが印象は一樣で無いわけである。其異同をざつと考へて見るならば、幾分か奧淨瑠璃の衣川合戰談、即ち所謂奧州本の義經記、及びそれから發達したかと思ふ義經記流布本、乃至は能や幸若の種々の物語との、互ひの關係が現れるだらうと思ふ。

現在ある淸悦物語の寫本は、殆ど持主毎にといふ程の相異はあるが、要するに至極簡單なもので、義經の家來の或一人の、生き殘つて長命したといふ者の直話である。元和二年といへば高館落城の時から四百三十年近くも後のことだが、小野太左衛門といふ柴田郡の武士が、平泉附近の山に遊んで不思議な老人に行逢つた。源平合戰の事を詳しく知ること、丸で見て居た人のやうであつた。色々と尋ねて見ると、それが果して義經舊臣の一人であつた。落城の際には常陸坊海尊と只二人、隨分よく働いたが誰も殺しくれないので、とう〳〵生き殘つたと稱して居た。

さうして其後の四百何年間、生きて居た理由は又別であつた。前年秋の一日、二人の同僚と共に衣川の上流に出て釣をして居ると、かはつた山伏が出て來て寄つて夕飯を食へとすゝめる。行つて見ると立派な住居であつた。皮も無い魚の其色朱の如くなるを料理して食はせた。名を問へばニンカンと答へたと謂ひ、一說には又感人奨とも傳へて居る。即ち俗間說く所の人魚のことらしく、之を食した御蔭に此通り長命であつたので、格別此人の修養の力でも無かつたのだが、小野は深くも之を尊敬して、就いて兵法を學ぶこと六箇年、或時は內々藩主貞山公にも勸めて、一度は御對面なされたと謂つて居る。赤漆の小宮一つ、曾て肌身を離さなかつたのを、殿様だけには御目にかけた。其中には紛れも無い九郎判官直筆の證文、又吉野記と題する一卷の記錄があつたなどと書いてあるが、他には見た人はもなかつたやうである。

不思議なことには右の老人は、たゞ義經の家來といふのみで、在りし世の本名は語らず、淸悦といふ盲人のやうな名を用ゐて居た。人が義經記を讀むのを聽くと、そんな事は無い、それは間違ひだと謂つて、ぽつ〳〵と話したのが此本だとあつて、如何にも小野太左衛門自身の筆記であるかのやうに見える。併し實際は決してさうでなかつた。

近頃仙臺叢書の一部として覆刻した東藩野乘といふ舊記には、漢文の淸悦翁傳がある。之に依れば淸悦物語の始めて本の形に爲つのは寛文八年、即ち小野氏が平泉の山で此人に逢つてから、五十一年の後である。もう其時分には双方と

も此世に居なかつたことは確かである。小野は固より人魚は食はず、清悦自身も亦寛永七年に一度は兎に角死んだことが、現に其物語の中に書いてあるからである。然らば聽いてから此本を書く迄の間に、何度とも無き語り傳へがあつたことは明白で、或は座頭の如き專門家も之に參與して居たのかも知れぬ。又さう思つても差支ない個條が幾らでも見出されるのである。

三　鬼三太殘齡記

清悦の物語といふものは異本が多いのみならず、其異同が信州の甲賀三郎のやうに、字句の端々に止まつては居ない。時として重大なる内容、又は標題さへも變つて居ることがある。最近私の見た東北大學の圖書館に在る一本の如きは、書名を鬼三太殘齡記と稱し、序文に歳は重光大康落に在る臘月十日とあつて、仙臺の城下で人の話を筆錄したと謂つて居る。即ち辛巳の年のことで、多分は元祿十四年淺野内匠頭が腹を切つた時分の事である。是も明かに清悦の話とあり、又人魚を食つて長命したことも述べ立てられ、衣川合戰の前の日に天地晦冥にして人の顏黄に見え、北上川逆流して大蛇が現出したなどゝいふ點は一つであるのに、談話の骨子ともいふべき部分が、他の清悦物語とは異なつて居る。最も顯著なる點を列擧すれば、第一には鬼三太の方では義經が死んで居ない。他の一方では首になつて鎌倉に送られ、含み狀に由つて賴朝の誤解は釋け、讒言をした梶原が刑罰に處せられて居るに反して、此では中尊寺の三位房法印とかに諫められ、辨慶ばかりを見殺しにして山越しに落ちたと書いてある。杉目行信と云ふ容貌最もよく義經と似た者が、既に北國の道中から身代りに立ち、爰でも義經と名乘つて死んだのだと謂つて居る。次には此方では清悦は自ら堂々と鬼三太の假稱を名乘つて居る。彼は義經記に於ては合戰の最初に、首の骨を射られて一箭で死んだとあり、堀河夜

討の際の如き花々しい働きは無かつたのを此本では大變な者にしてしまつた。全體御庭の喜三太の如きは、近世の鬼一法眼の芝居などでは、隨分の儲け役であるが、實は義經記特製の人物に過ぎなかつた。それが鬼三太と書いてくれなくては困るの、雜色といふものには二種あつて、それは其の上等の分だのと、餘計な辨明をして居るのは仙人らしくない。それから清悅物語には常陸坊と二人、どうしても死ねなかつたと手輕に書いてあるのを、鬼三太の方では彼奴はけしからぬ男だ。命を惜むのみか主君大切の際に、御手元金を持つて立退いたと謂つて居る。それから龜井六郎が無茶者で困つた話もあり、更に面白いのは會津に居た稲仙といふ鏡研ぎが、或は喜三太の成れの果といふ者もあつたのを、ひどく氣にして打消して居る。それから伊達政宗が見たといふ赤い筥の中には、鬼一法眼秘傳の一卷があつて獻上したやうにも書いてある。會津方面には鬼一が娘皆鶴姫の遺跡といふものゝあるのを妙だと思つて居たが、やはりこの稲仙と關係して古くから話があつたらしいことを、却つて斯んな事から心付いたやうな次第である。

此以外にも北國下りの路筋がちがつて居る。途中で嗣信兄弟の家に立寄るには、會津を通過した方が地理に合ふと思つたらしい。此通り何から何までも大ちがひで、強ひて普通の清悅物語と共通の點を求むれば、辨慶が腕力ばかりで智慮乏しく、屁理屈を言つては泰衡兄弟の感情を害し、是には義經も困り拔いて、始終小言ばかり謂つて居たなどゝいふやうな、をかしくも無い點ばかりだ。殊に鬼三太の方は辨慶龜井を惡く言ひ、しまひには辨慶は坊主で無い。本取を切つて髮を短かくして居たので、山伏のやうに見えたのだ。立往生といふのも實は溺死で、衣川の岸近い岩と岩との間に挾まつて、倒れなかつたばかりだなどゝ、自分は生き延びて遁げた癖に、人にけちを附けるやうなことばかり言つて居る。假にも史書の闕を補ふといふが如き、態度ではなかつたので、是が後代に及んで珍重されたとするならば、もう義經記も耳に蛸で、何か新しく且つ笑ふやうなものを、求めて居た人心に投じたもの、言はゞ三馬の忠臣藏偏痴奇論など

と同じく、所謂ヲカシ文學の不完全なる發育に過ぎなかつた。

四　義經勳功記

ところが爰に又一つの不思議がある。前に申す鬼三太殘齡記は常陸坊海尊を惡黨の如く罵つて居り、普通の清悅物語も私の見た本だけは、少なくも話者清悅は常陸坊に非ず、「聞けば常陸坊もまだ長命をして、仙北の方に住んで居るさうな」と、よその事にして語つて居るにも拘らず、一方には仙臺以北、平泉地方の一帶に亙つて、今尙清悅とは海尊さまの事と、思つて居る人が多いのである。現に清悅物語が本に爲つたと云ふ時から、又十何年もしてから後に、宮城郡岩切の青麻權現の岩窟に現れて、神官鈴木氏の先祖鈴木所兵衛と對談をしたといふ異人などは、我は常陸坊海尊である、今は名を清悅と改めて居ると、明かに自ら名乘つたと傳へて居る。この所兵衛などは、正直朴訥の善人であつたが、やはり信心深い盲人であり、しかも信心の力によつて目が見えるやうになつた爲に、恐らくはそれから最も熱心に、海尊仙人の奇跡を人に說いたかと思はれ、今も右岩窟は深く附近の住民から崇敬せられ、その神の清悅にして又海尊なることを信ずる者は多いのである。但し常陸坊といふ故に、之を常陸の阿波の大杉大明神と同體なりと說く者もあるらしいが、しかも海尊の常陸に居たといふことは夙くより之を傳へ、例へば天海大僧正の如きも、若い頃に彼の地方に在つて、殘夢和尙の海尊に逢ひ、長生の秘訣を學んだやうに謂つて居たのである。

さうかと思ふと又同じ元祿の前後に、仙臺領では南の角田白石の間を往來して、村々の舊家に書いた物などを殘した白石翁といふ異人があつた。此も實名を語らず年を言はず、それで居て非常な長命であつたらしく、誰を捉へても倅と謂つた。角田の長泉寺の天鑑和尙などは、元祿三年に百七歲で死んだが、白石翁は此和尙をも倅がれと呼んだ。やは

り源平合戰の話が大さう詳しく、折々人の家でその話をしたので、或は淸悅かとの世評もあつた。元祿六年の二月十六日、白石在の安子島氏の宅で、めでたく往生を遂げたにも拘らず、十何年後に町から京都に往つた或商人が、確かに京の或處でこの白石翁を見かけたと云ふ話もあつた。

淸悅が夙くに死んだことは、淸悅物語の中に正しく記してあるにも拘らず、尙右の通りにいつ迄もどこかに居つた。この種の仙人になると、どうも死んだと生きて居るとの境が甚だはつきりとしない。會津實相寺の殘夢和尙の如きも、辭世を示して立派に成佛し、寺では葬式も濟ませたのに、二十年程後に不思議なことがあるので墓を開いて見ると、空棺であつたとも傳へられ、或は又會津の人が駿河の三保松原で此和尙に逢つた、相變らず源平時代の話をして居たなどとも謂つた。つまりは夙くから、多くの人の言ふことが一致しては居なかつたのである。

故に其一例として見れば、驚くにも當らぬやうなものだが、正德二年に始めて世に出た義經勳功記が、やはり殘夢の話だと稱するのである。餘程のうそつきらしいが編者馬場信意なる者、此書に序して曰く、友人安達東伯久しく奧州に在り、一日老翁の來り訪ふ者あり、字里行藏を言はず、里人も亦知るなし、相馴るゝこと久しくして終に海尊なることを知れり云々とあつて、此書を以て東伯の筆記だと謂ふのである。此海尊は後に名を淸庵主と改め、今又殘夢と謂ふとあつて、會津からでも出て來たかの如く粧うて居るが、しかも長命の原因は亦衣川の人魚の肉であり、其時の釣仲間は武藏坊、還りて其一片を源公に獻じ公も亦之を食す。皆共に死せざることを得たりと謂ふのである。近世の所謂義經辨慶入韃說には、實はこの勳功記を根據とする者も少なくない。如何にも心元ない次第である。

五　人魚の肉

自分たちは今頃成吉思汗の義經であるか無いかを、容喙するだけの餘裕は持つて居ない。此際考へて見ようと思ふのは、勿論海尊長壽譚の眞僞では無いので、全體どうしたわけで此樣なをかしな話か保存せられ、又際限も無く成長して行くかである。さうしてて先づ略 決定して見たい問題は、長命の原因と認められた色々の風說の出處である。

本朝故事因緣集の石上の飴の如き物は、他には類例も聞かぬやうである。會津の殘夢和尚は盛んに枸杞の葉を食つただけだつたと、天海僧正などは人に語つたさうだが、これは眞似やすいので試みた者もあつたが、話ほどの效能は無かつたらしい。ところが淸悅物語以下の書に於ては、人魚又は仁魚と名くる朱の色をした魚の肉と稱して、ほと〱凡人をして斷念せしむるに足るやうな、珍遭遇を說いて居るので、それが若し淸悅乃至は小野太左衞門氏の獨自の空想に成つたとすれば、事の奇は稍一段を加へるのであるが、奈何せん是にはあまりに顯著なる先型が存するのであつた。

前に申した若狹の八百比丘尼の物語は、正しく系統を同じうする言ひ傳へであつた。足利氏の中期に若狹に八百比丘尼といふ長生の婦人ありしことは、既に馬琴の八犬傳に由つて之を知つた人が多いが、少なくとも當時其風評が高く、或時は京洛の地に入つて衆人に歸依せられたことは、文安六年五月から六月迄の、臥雲日件錄や康富記、若くは唐橋綱光卿記等、多くの日記の一致するを見れば疑ふ所は無いのである。但し如何にして其樣の長壽を得たかは、此等の記錄には何も見えず、林道春が父から聽いたと謂つて、本朝神社考に書いたのが一番に古いが、是とても淸悅物語の出現よりは前であつた。即ち昔この比丘尼の父、山中にして異人に逢ひ、招かれて隱れ里に到る。人魚の肉を饗せられて敢て食はず、之を袖にして還り來るを、其女食ひて長壽なりと謂つて居るのがそれである。

同じ話は又若狹郡縣志、向若錄等にも出て居るが、此方では父は小松原といふ村の人で、海に釣をして異魚を獲たのを、娘だけが食べたといふことになつて居る。美しい女性のいつ迄も若いのを、「人魚でも食つたのか」といふ習ひは、

今でも諺のやうになつて殘つて居る。斯く所此の如く久しいのである。但し數多い諸例の中で、釣をして手に入れたといふのは殆ど是ばかり、他は何れも衣川と同じく、特に饗應してくれる人があつたのであつた。然るを本人は怖んで敢て食はず、却つて無邪氣なる小娘が、其恩惠を專らにしたといふことは、話の夙くからの要件であつたと見えて、現に清悅物語でも同行者の一人が之を持ち歸り、其女の之を食うた者がつひ近頃まで存命であつたと、不必要に問はず語りを添へて居るのである。鹽松勝譜には常陸坊海尊、衣川にて老人に逢ひ亦魚を貰つて食つた。其婢女も亦之を分ち食したとあるのは同じ話である。

桃井塘雨の笈埃隨筆には、今濱洲崎といふ地に異人來り住み、一日土地の者を招いて馳走をした。人の頭をした魚を料理するのを隙見して、怖れて食ふ者も無かつたが、唯一人之を懷にして歸り、其妻知らずして之を食つたといふ話を載せて居る。此は疑も無く寬永二年の隱岐島紀行、「沖のすさび」の丸寫しであつて、彼には伯耆弓濱の洲崎の話となつて居るのを、今濱洲崎と改めて若狹まで持つて來たものである。味は甘露の如く食し終つて身とろけ死して夢の如く、覺めて後目は遠きに精しく耳は密に聽き、胸中は明鏡の如く顏色殊に麗はしとあつて、終に生き殘つてしまつたのである。七世の孫も亦老いたり、彼妻獨り海仙と爲りて山水に遊行し、諸國を巡歷して若狹に至り、後に雲に乘りて隱岐の方に去れりとも記し、即ち此島燒火山其他の處々の遺跡を說明して居るのである。人の妻とある例は是がたゞ一つであるが、海仙となつて諸國に遊んだといふのが、何か海存仙人の口碑と因緣あるべく思はれる。但し此話は九州を除くの外、殆ど日本の全國に分布し、しかも大抵は同じ由來談を、若干の差異を以て說いて居るので、即ち平泉の清悅の奇恠談が、必ずしも一人や二人の與太話で無かつたことだけは、もう十分に證明せられるのである。

六　八百比丘尼の事

然らば人魚の効能と義經記との關係や如何。それを考へるには尚少しく類似の例を列擧して見なければならぬ。若狹の方面には「沖のすさび」と略同じ頃に、貝原益軒の西北紀行があつて、忠實に土地の所傳を錄して居る。小濱の熊野山の神明社に、其頃は既に比丘尼の木像と稱するものがあり、しかもその由來記はまた別箇の趣を具へて居た。昔此地方に六人の長者、折々集まつて寶競べの會を催して居たが、其一人人魚を調味して出したのを、五人の客疑つて食はなかつた。それから家に持歸つて少女が食つたといふ段は、すべて他の例と一つである。

佐渡では羽茂の大石といふ村で、八百比丘尼此に生ると說いて居る。やはり異人饗應の話があり、人魚の肉によつて千年の壽を得たのだが、其二百歲を割いて國主に讓り、女自身は八百歲に達した時、若狹に渡つて死んだと傳へて居る。播磨鑑では、私の鄕里神崎郡比延村に、此比丘尼は生れたと主張する。是も八百になつて比延川に身を投げたとも謂へば、或は今一度人魚を捕りに、明石の浦へ出かけたまゝ歸つて來ぬなどゝも謂ふのである。土佐でも同じ人の海に入つた話、其他色々の遺跡はあるのだが、人魚に關係せぬものはすべて省略する。西郊餘翰卷一に、土佐高岡郡多野鄕の賀茂神社にある八百比丘尼の石塔の事を記して居るが、白鳳十二年といふ大昔、此海邊に千軒の民家があつた時代といふ。七人の漁翁が人魚を捕つて刑に處せられた。七本木といふのが其故跡である。村に一人の隱者があつて、窃かに一切れの肉を貰ひ受けて、自分の娘に食はせると、乃ち後の八百比丘尼になつた。三百年を經て一度還り、此石塔を建てたとも謂ひ、或は死んだ後に若狹から屆いて來たともいふから、人魚を食つたといふ證據には向かぬのである。

關東諸國殊に東京の周圍にも、此比丘尼の栽ゑて置いたといふ老木が多く、下野にも上總にも色々の遺址はあるが

人魚の話はまだ聽いて居ない。しかも海も無い美濃國などにも、やは麻木長者の娘が麻木の箸に附いた飯を、苧ケ瀬池の魚に施した陰德で、八百比丘尼と爲つて若狹に往つて死んだといふのが同じ話だつたらしく、更に遡つて飛驒の益田郡、馬瀬の中切の次郎兵衛酒屋の話などは、山國らしい昔話に變化して今も語られる。此酒屋へ折々一人の小僧が、小さな瓢簞を持つて一斗の酒を買ひに來る。疑はずに量つて與へると、幾らでも其瓢簞へは入るのだ。試に小僧の跡をつけて行けば、村の湯ノ淵といふ處へ遣つて來て振返り、わしは龍宮の乙姫様の御使だ。おぬしも御座れと引張つて行き、僅か三日の間款待を受けたと思つたら、もう此世では三年の年季であつた。歸る際に龍宮の寶でキヽミヽといふ箇を下される。耳を此に附けて居ると、人間にはわからぬどんな事でも聞かれる。家に娘があつてそれを不思議と思ひ、誰も知らぬ間にそつと開いて見ると、箇の中には人魚の肉が入つて居て、如何にもうまさうな香氣がする。つひにそれを食つてしまふと、其御蔭で娘は八百比丘尼になつてしまつた。村の氏神の雌雄杉の根もとへ、黃金の綱をこしらへて深く埋め、いよ〳〵といふ場合には出して使へと謂つて、自分は仙人になつて何れへか出て往つたと語つて居る。ちやうど刊本の義經記が編纂ものなる如く、是も地方に流れて居る三つ五つの物語を、端切り中を摘んで冬の夜話の用に供したものらしい。

まだ幾つかの例が殘つて居るのである。丹州三家物語に錄する所は、殆ど神社考と大差無く、たゞ比丘尼の生地を若狹鶴崎としたのみだが、丹後には別に竹野の乘原といふ部落に、舊家大久保氏の家傳といふものゝあることを、近頃の竹野郡誌には詳述して居る。或時此村へ一人の修驗者が來て居つて、庚申講に人々を招いた。それから先は例の如くだが、此家の娘は比丘尼ながら樹を栽ゑ石を敷き色々と土地の爲になつて居る。紀州那賀郡丸栖村の高橋氏でも、庚申講の亭主をして居ると、見なれぬ美人が來て所望をして仲間に入つた。其次の庚申の日には私の家へ來て下さいと招かれ

たが、其晩土産と謂つて紙に包んでくれたのが、例の人魚の一溜であつた。歸つて帶を解くときふと取落すと、其折十二三歳の家の小娘が拾つて嚥み込んでしまつた云々と傳へ、今も其家の子孫といふ某は住んで居るが、此事あつて以來いつも庚申の晩には、算へて見ると人が一人づゝ多く居るといふので、とう〳〵庚申講は營まぬことになつた。こゝでもどういふわけか八百比丘尼は、末に貴志川へ身を投げて果てたと傳へて居る。越後の寺泊に近い野積浦の高津家にも、やはり人魚を食つた八百比丘尼は此家から出たと謂ひ、今も手植の老松が殘つて居る。同じく庚申講の夜山の神樣に招かれて、そんな物を貰つて歸つたと謂ふのである。最後にもう一つは會津の金川寺といふ村でも、比丘尼は此村の昔の住人、秦勝道の子だつたといふ口碑がある。勝道は亦庚申講の熱心な勸進者であつたが、村の流の駒形岩の淵の畔に於て、やはり龍神の饗應を受け、其食物を娘が食べたといふ點は丹後紀伊などゝ似て居たが、是だけは人魚で無くて九穴の貝といふものであつた。

搜したらまだ何程も例は出て來るのだらう。私が知つただけでも娘に食はれたといふのが、平泉を加へて十件あり、食物は其のたゞ一つのみが九穴の貝であり、更に庚申講の晚といふのが、互ひに離れた土地々々四つもある。天平以前に庚申祭などがあつたかと、野暮な疑問を抱くことを止めよ。庚申は要するに夜話の晚であつた。終夜寢ないで話をする爲に、村の人の集まる晚たのである。即ち人魚を食つた長命の女の奇跡を、發揮し宣傳するには最も適したのが、庚申講の夜であつたのである。

七　九穴の貝

八百比丘尼とは謂はぬが、同種の話は別に又九州にもあつた。筑後柳河附近の本吉の三囲家、唐人竹木翁の子孫と稱

する家でも、曾て此家の娘が牡丹長者の乳母であつて、やはり不思議な食物から長命を得たと傳へられて居る。牡丹長者は肥後の桑原長者と、山を隔てゝ寶競べをして居た。或時延年貝と名くる稀有なる螺の貝を送つて來たのを、誰も食はうとはせぬ故に、此乳母が貰つて食ひ、それから無限の長生をしたと謂ふ。至つて貞淑な婦人であつたが、何しろ死なぬのみか若く美しい故に、夫を換へること二十四人に及んだのである。いつ迄も／＼固有名詞のみを入れ換へつゝ、日本人は斯んな話ばかりをして居たものと見えた。どうして又それがさう大なる興味を以て、短命な凡俗からもてはやされて居たものか、自分にも實は久しく不明であつたが、斯ういふ風に考へて行くうちに、幽かながらも原因がわかつて來たやうな氣がする。

なるべく手短かにもう一つだけ、近い例を擧げるならば、今から百三十年ほど前の寛政九年に、筑前芦屋浦の傳次といふ者が、領主の命に由つて、家に傳ふる壽命貝といふものゝ、由來を詳しく申し立てたことがある。沖繩あたりで千年貝、又色の佳いのを萬年貝といひ、南方の海では折々取れる大きな貝があるが、多分あれのことだつたかと思ふ。土地の名木神功皇后の船留松の根に、埋めてあつたのを堀出した。之に水を盛つて飲ませると、疫病其他を治するの効があると謂つた。どうして又そんなものが出て來たかに就いては、それから更に十五六年前に書いた、庄浦仙女物語といふものが要領を盡し、其書は夙くから江戸の隨筆家の中に大評判であつた。或年此附近の船頭に、奥州津輕の或海岸に船がゝりをして居た者が、上陸して村の奥の山へ遊びに往つた。三十ばかりの美しい女が一人出て來て、國はどこかと聞いて非常に懐かしがり、私の故郷も筑前だと謂つて、色々な事を尋ねるが話がどうも合はぬ。實は私はもう六百四十歳ばかりになる。若い時分に病氣をして居ると、子供たちが案じて珍しい貝を捕つて來て食はせてくれたら、段々若くなるばかりで死ななくなつてしまつた。子にも孫にもおくれた故に、是非なく國を出て來て、それから亭主も二十何人と

か持ちかへたが、自分ばかりはまだ斯うして居る。貝の殻だけはあまりに奇妙なので、斯う〳〵した松の下に埋めて置いた。尋ねて見てくれと傳言したので、そこで右の傳次が之を發見することになつたのである。

此話は勿論確實性に乏しい。少なくとも中途で誰かゞ若干はうそもついてゐる。しかも私などの注意するのは、九州の船頭の還つて來ての話に、この女が壇ノ浦の合戰前後の事を、よく知つて居るのに驚いたと話した謂ふ點である。何でも稚ない天子様が、筑前山鹿とかに御滯在の際などは、毎度此女は魚を賣りに行つて、陣屋々々の様子を見て居たと語つたさうである。

全體人が長命をすれば經驗の多いのは知れたことだが、何で又斯ういふ仙女までが、是非とも源平の合戰を談じたければ止まなかつたか。それから後の色々の大事件は棄てつぽかして、あの頃ばかりをさうは喋々するのであるか。つまりは世間の人たちも、比較的平家物語や義經記に親しかつた爲でもあらうが、若狹の八百比丘尼なども、やはり源平の盛衰はまのあたりと謂ひ、義經辨慶の一行が修驗者の姿をして、北國街道を下つて行くのに、ちやうど行逢つて覺えて居ると語つたさうだ。八百比丘尼の年から勘定すると、凡そ五百三十幾歳の代のことだが、こればかり記憶して前後の大事件に疎かつたらしいのは、常陸坊海尊の場合よりも、更に一段の不可思議であつた。或はもと年を取つて居るから知つて居たのでは無くて、あまりよく知つて居るから長壽者でなければならぬと、人も自分も感ずるやうになつたのではあるまいか。

八　おとら狐と玄蕃丞

是と必ず何かの關係があらうかと思ふ話は、三河の長篠の古城址を中心として、あの附近一帶の田舎に甚だ惡い狐か

居る。其名をおとら狐と稱し、又おとらと名乘つてもよい理由のあつたことは、曾て「おとら狐の話」と題する小著を以て、之を研究して見たことがある。非常な古狐で、其證據にはおとらが人に憑くと其人は必ず長篠の合戰の光景を見て居たやうに話する。それで忽ち彼なることが知れるのであつた。又長篠だけならまだよいが、ずつと離れた川中島の合戰まで話して聽かせる。しかも此合戰の大部分は、どうも甲陽軍鑑の出たら目であつて、實は無かつた事らしいといふ説もあるのである。それにおとら狐は川中島に居たとき、うつかりとして流れ彈に中り、片目と片足とに怪我をしたと謂つて、今以て之に惱んで居るらしく、彼に憑かれた者は一方の目からヤニを出し、又必ず片足を引きずること、恰も長篠よりやゝ南方の牛久保といふ町を鄉里とする山本勘介と同じであつた。それにも何か隱れたる因緣のあるらしいことは、早くから考へて居るが自分はまだ十分には合點し得ないのである。

又信州の松本附近では、桔梗ケ原を本據として玄蕃丞といふ狐が居た。始めて鐵道が此平野に通じた頃、汽車に轢かれて死んだともいへば、或は今でもまだ活きて居るともいふ。此狐も武田合戰の始末をよく知つて居たのみならず、頗る之を人に語りたがつたやうな形がある。珍しいことには一年に一度とか、例へば若狹などの異人同樣に、廻狀をまはして近村の住民を招いて此話をして聽かせた。急造りの立派の家の中で、此時ばかりは本物の御馳走をどこからか持つて來て食はせたといふことである。但し此方はもう誰でも笑つて聽くやうな昔話と化し去つたが、三河のおとらに至つては今尙現實であつて、待つて居たらば恐らく此から後も例が出て來よう。斯ういふ不思議な資料は、過去の記錄になつてしまはぬうちに、よく調べて說明を求むべきである。人間界の、しかも常人の間の出來事に、意味不明といふものがあつてよいものでは無い。

そこで立戾つて流布本の義經記に、常陸坊以下十一人までの家來が、朝から寺參りなどをして居て、をめ〳〵と生き

殘つたといふ一條を考へて見る。全體そんなつまらぬ事を、誰が知つて居て人に話したのか。本人どもが白狀したとすれば、如何なる機會に如何なる問に答へて、何人に語つたとすべきであらうか。それよりも更に大なる不審は、高館城內の悲壯を極めた光景、十郎權頭が最後の忠節の如きは、果して之を目擊して末代に語り傳へた者が、人類の中にあり得たであらうか。

しかも海尊はたゞ長命をして居たばかりに、永く此地方に於ては歷史家の權威を失はなかつたのである。氣仙風土草の記する所に依れば、此郡唐丹村の荒涼の海に近く、龜井墓と稱する古墳があつた。どうしてそんな事がわかつたかといふと、江戶時代の初頃に常陸坊海尊は松前からの歸途、此村を通つたことがある。其折出會した土地の山伏成就院なる者に向つて、此が龜井六郎の墓だと敎へてくれたによつて信ずるので、彼は往々にして此の如く其信任を濫用した。

さうかと思ふと加州の金澤などでは、龜井六郎と常陸房と二人、仲よく今も暮して居るといふ者が、現に百五六十年前まであつた。號を殘月と謂ふ道心坊があつて、小松原宗雪と稱する浪人と、寒山拾得の如き生活を續けて居た。もとは此城下の淺野川が、東西に流れて居たものだなど〻謂ふので、さては土地の人々も耳を峙てた。二人に源平時代の話をさせようとする者は、わざと知らぬ顏をして其前で義經記を朗讀する。さうすると忽ち釣り込まれて、それは大ちがひなど〻謂つて、思はず本當の話をしたといふ。多分は殘夢や淸悅の如く、いや義經公はあまり風采の揚からぬ小男であつたことの、辨慶は三十七八の色の白い好男子であつたのと、もう何人も反證し得ないやうな新事實ばかり說いて居たことであらう。どちらが釣り込まれたか知れたものでは無いのである。

それに尙よく氣を付けて見ると、いつでも三河萬歲の才藏などの如く、脇に居て相の手を入れ、餅ならばこね取りをする役が一人あつた。加賀の殘月の小松原宗雪、會津の殘夢の無々老人と福仙、平泉の淸悅の小野太左衞門に於ける如

く、少しは傍から註解し敷衍する者が居らぬと、話が人の心を打つまでには、はづんで來ぬものであつたらしい。それが民族初期の文學の進んで出た經路であり、同時に又現代の都府文藝が、親近なる批評家に取卷かるゝに至つた遠因でもあつたらう。陸中黑石の正法寺などでは、毎度和尙の處へ話しに來る常陸カイドウを、あれはもと義經公の家來だと、告げ口をしたのが境內の石地藏であつた。そこで見顯されて歸つて行くときに、變にこの地藏が煙たいやうな顏をした。さては此奴がしやべつたのかと、いきなり地藏の鼻を捻ぢたと謂つて、今でも鼻曲り地藏樣がある。先づ是ほどにして迄も我々の昔話は、是非とも長命な人の口から、直接に聽かねばならぬ必要があつたのである。

九　語り部の零落

まだ是だけでは十分な說明で無いかも知れぬが、私の今持つて居る假定は、さう込入つたものでも何でも無い。つまり偶然に判明した淸悅物語の成立ちに基いて、更に義經記其ものゝ起原までが、推量し得らるかと思ふのである。義經記の近世の語り樣は、他の多くの歷史談も同樣に、所謂「げな話」、「ださうな話」の體裁になつては居るが、本來はやはり淸悅物語の如く、當時見て居たと稱する者の、直話體ではなかつたかと謂ふのである。

文字を知り記錄を愛する者が、書いたものといへば一應は悉く有難がつたやうに、記錄と緣の無い人々には語り事を信ずる必要があつた。但し昔の人々の事實認定には、噂と實驗との明白なる差別があつて、現に私が見た私が知つて居るといふ者の言葉で無いと、之を信ずることが出來なかつたものかと思ふ。數百千年の歲月を隔てゝから、そんな人を求めることは不可能のやうに見えるが、前代人にはそれは無理なる注文でも無く、又有り得べからざる條件でも無かつた。即ち人には死後の靈がある。優れたる靈魂は生きた人に憑いて、其人の口を借りて何でも言ふことが出來た。託宣

は決して豫言ばかりではなかつた。人の現在の疑問を解く爲には、今日と同じやうに過去つた理由を述べなければならぬ。しかも人間の知識慾は、先づ最初には霧立つ野邊の如き、茫洋たる前の代に向はうとするのが自然である。現實の畏怖憂苦あり、不安ある場合は尙更のことであつた。

神話が單なる記述といふよりも、屢々說明に傾いて居たのは此理由からである。神話が神語として久しく尊重せられたのも、根本には人の生活上の要求が橫はつて居たからで、又親しく實情を知つた者の言なるが故に、何程荒唐であらうとも之を信ずることが出來たのである。從つてそれが常人の仲介を經、若くは記錄の文字を以てのみ人に傳へられるやうになれば、その最も重要なる特質は消滅し、更に第二次の鑑賞に入らなければならぬのは勿論である。稗田阿禮が天朝の命を拜して、歷代の舊辭を語つたのは、果して二者何れの部に屬すべきものかは決し難いが、少なくとも彼女の家は巫女の家であつた。曾ては必ず神に代つて、と言はんよりも寧ろ神々に身と口とを貸して、人に歷史を語り傳へるのが、此家の職掌であつたのである。單なる暗記の力のみの如く、之を想像するのは誤つて居る。

しかも此樣式は神話が旣に信ぜられず、頗る文藝的の興味を以て世に迎へらるゝに至る迄、尙變更せられなかつた例も多いのである。例へば金田一京助君が採訪せられたアイヌの聖典、即ち特權ある舊家のみが保持して居た所謂神謠大謠の類に止らず、或純良なるアイヌメノコが、自ら和譯した動物說話の如きも、悉く皆第一人稱の自傳であつた。即ち人が其物語を歌ふのは、其神其靈が一々彼に憑いて、其口を假りて自ら說くのであつた。現に目前に在つて語る者の、凡庸なる我仲間の一人に過ぎぬことを知りつゝも、別に背後に隱れて彼をして言はしむる力ある者を信ずる故に、興味と感動とは常に新たであり、或は信仰變化の後に至るまで、尙其樣式に對する愛慕の情を、斷つことを得ないのであつた。

我民族の初期の文學に於ても、心ある者は尙其の若干の痕跡を見出すことが出來るが、更に一步を進めて文字の拘束

を受けなかつた地方、若くは階級を求めて見たならば、其の昔の物語の今尚固く信ぜられて居る部分、即ち史傳と名けて如何なる反對の證據あるも、之を一蹴し去ることを許せざる樣な村々家々の由來記にも、やはり先入主や愛郷心以外に、久しく其確信を育てゝ來た原因のあつたことを見出すであらう。現に神樣がさう仰せられた、何某の靈が出て語つたといふことが、さう短かい期間には、覆されべきものではなかつたのである。

併し結局は意識の有無に拘らず、もと人間の想像力に根を差した以上は、自由に又美しく成長せねばならなかつた。さういつ迄も古い形だけを、守つて居るわけにも行かず、第一には聽く者の側の要求が、時と共に變化して之を動かさずには止まなかつた。奥州には衣川の悲劇以外に、又前九後三の合戰談があつた。義經記の中では金賣吉次が、若き貴公子に向つて長々と之を語ること、恰かも舞の本の烏帽子折に於て、山路の草刈る夜の笛の物語を、遊女に試みさせて居るのと同じであつた。それから尚行けば悪路王大竹丸の退治、三代田村の勇猛談なども、之を信ぜんとする人々と、もう藝術として樂まうとする者と、相交錯して居たのである。中央の歴史と交渉の無いものでは、膽澤郡には掃部長者の物語、長者の妻が後に池の大蛇となり、松浦小夜姫を人柱に立てようとした話、それから氣仙高田の武日長者、姉は旅の空に世を早うして、徒らに姉羽の松の名を留め、妹は采女となつて京に上つたと謂ふの類、今は悉く物の哀れを聽く人の想像に讓つて、實際其樣な出來事があつても無くても、構はぬといふ境まで進んでは來たけれども、最初に何が目的で斯ういふ物語を聞きもし語りもすることになつたかと言へば、やはり亦餘りに空虛なる我土地の過去に、曾て充ち滿ちて居たものを見出さうとする念慮からで、それ故にこそ最も神靈に親しく、隱れた世界と交通することの出來る者のみが、常に傭はれて仲次の任務には服したのである。

一〇 盲目の力

故人が我々の夢に見える如く、又物語の中に現れて泣き歎いたことは、淨瑠璃のやうな近世の作物にも、なほ多くの名殘を留めて居る。文藝が宗教の領分から全然獨立して後も、歌謡は到底平靜たる敍述のみを以て、喚び戻された人々の生活を客觀することを得なかつた。情の高潮に達した際には、主人公は必ず歌を詠むことになつて居る。之を聽く者の感動は必ずしも其詞の巧拙によらず、寧ろ其の自ら語るの聲に由つて、現前に相對するの思を抱くからであつた。イタコ又はモリコと稱する東北の巫女たちは、敎へられずして早くより此法則あることを知つて居た。故に一方には祈禱の辭、若くは遠ざからんとする靈魂を招くの詞を唱へつゝ、他の一方には一見これとは關係なき歌物語を以て、神を人界に悠遊せしめ、若くは人をして神の國を愛せしむるの手段に供して居るのである。

之に比べるとボサマの方は、同じ盲目でも早くから信仰を離れて、物語に專らなる者が多くなつたが、それでも自ら一人稱を用ゐて、私が見た斯う言つたと、語つた時代は永かつたのであらう。さうして義經記に於ては、義經を招き、或は辨慶龜井をして語らしめたのでは、中途で死ぬ故に事件の全體に亘ることが不便であつた。從つて比較的重要ならざる常陸坊海尊を煩はして、顚末を敍せしめたのであるまいか。若しさうとすれば海尊は死せず、若くは長命してまだ居るといふ俗傳は、最も容易に行はれ得たので、しかもその海尊が弘く此地方の信仰の一中心を爲したのは、座頭の職分の九州同樣に、本來亦宗敎的なりしことを暗示するのみならず、更に海尊の信仰が此徒を介して、高館口碑の成長に參與して居たことを推測せしめ得るのである。

此點は平家物語と座頭との關係も同じことで、文學記錄を離れて考へると、平家と義經記と起原何れか古きといふ問

題は、まだ〳〵決定の時期には來て居ない。徒然草其他の京都人の記錄には、平家は文人某が作つて盲人に歌はせたとなつて居るが、それは此物語の何れの部分も、すべて京都に起つた筈といふ前提から來て居る。成程京人でなければ知らぬ話も多いが、同時に又公卿衆などなら知るまいと、思つてよい部分も少なからず、しかもどうして琵琶の曲にかけるに至つたかの說明は、却つて後者に在つてのみ可能である。

合戰の物語の古戰場から起るは自然である。戰の跡には人怖れて近づかず、五十年も百年も荒れて居て、心を動かすべき光景であつたらう。從つて亡靈を信ずる人々には、數々の不思議が現れずには居なかつたと思ふ。それを問ひ弔ふ人の志に、話を知りたがる好奇心も加はつて、何かと言へば村に居る巫女術者が、其昔を說く機會は多かつた筈である。沖繩などでは北山の城跡は、今以て悲しい荒墟であるが、國頭全郡の舊姓にしてユタの言に聽き、北山王を以て一旦忘れたる其家の遠祖と信じ、年々來つて香火を捧ぐる者が、既に數萬人に及んで居る。支那でも南宋の朝廷覆沒して後に、陶眞と稱して琵琶を彈ずる盲人の、舊史を說く者が多く出たと謂つて居る。瀨戶內海殊に壇ノ浦の周圍は、恐らく亦平家座頭の發祥の地であつたかと思ふ。

盲人は殊に目に見えぬ者の音響を傳へるのに、適して居たのでは無かつたか。小泉八雲の怪談であつたかに、耳切法市なる者が長門の阿彌陀寺に在つて、平家の人々の亡魂に招かれ、何も知らずに其物語を語つたといふ話がある。諸國に分布した逃竄說話の一つで、多くは陀羅尼の功力に由り、耳だけ切取られて助かつたことになつて居るが。山の神路の神其他の怖ろしい神が、盲人の目が見えぬに乘じて近々と現れ來り、歌曲を所望したといふ點は何れも同じである。恐らくは曾て神と人との間に立つ役に、特に選定して彼等を用ゐた名殘だらう。平家の方では惡七兵衞景淸の地位が、やゝ義經記の海尊と類似し、其交涉は物語の内外に及んで居る。彼が眼玉を拔き棄てゝ日向に行き、神に任へて居たと

稱して色々の口碑を存じ、一方には座頭の給田がもと日向に在つたと謂つて居る類の傳說は、誤解若くは假託にせよ、何か隱れたる事情が無くては、唐突に發生しやうは無かつたのである。

但し今更其樣な事情は、尋ねて見るにも及ばぬか知らぬが、昔の交通の容易で無かつた時代に、何の因緣が斯ばかり幽かなる農民の夢を、成長させ變化させ又遠くへ運んだかといふことは、一度は考へて置いてもよいのである。曾我兄弟の仇討の物語が、もと富士山下の荒寥たる田舍を出て、中國四國の山の奥に這入つて居る場合に、必ず虎少將の尼となつて廻國し、若くは鬼王團三郞の來て隱れたといふが如き、本文以外の事實を伴うて居るやうに、義經記の流傳にも亦早くから、常陸坊とか喜三太とかの、書物を無視した活動があつたらしい。文學の都鄙の優劣が强く現れるやうになつてから、たま〳〵相手の武器を借りて爭はうとした者は、忽ち淸悅物語の如く敗衂したが、さういふ世の進みには頓着せぬ人々が、古い方式を守つて居た場合には、何等かの形を以て兎に角に元あつた物を保存して居る。

虎少將等の廻國といふことは、要するに曾我を說いた人々の行脚を意味するらしい。義經記の方で之に似た者は靜御前　是も諸國の田舍に來て、菴に住み又は石を立てゝ居る。吉野記吉野文などといふ舊記のことが、東北にも傳へられるのは、或は此と關係があるのかも知れぬ。小野小町和泉式部といふ類の上﨟までが、東西の諸國に同じ一つの物語の跡を止めて居るなども、之を模倣又は妄說と見る必要は少しも無い。要するに旅の語り部と、物語の主人公とを混同した結果であつて、やがて亦日本民間の說話が、久しく一人稱形式を以て述べられて居た證據である。

文藝時評

尾崎紅葉について

正宗白鳥

私は、森川町の下宿にゐた時分、ある夜、「趣味」といふ雜誌の編輯者であつた西本波太といふ人に誘はれて、二葉亭四迷を訪問したことがあつた。その時の斷片的談話は私の心に深く刻まれてゐて、今も二葉亭の面影とゝもに、それ等の談話が、歷史的興味をもつて思出されるのであるが、その時には紅葉山人に關しても、一言彼れの感想が洩らされたのであつた。

「新しい時代の作者のものを推讃するのはいゝが、そのために過去の作者の價値を無視しなくつてもよからう」と云つて、彼れは、紅葉の小說には、時代の變遷に關はらず、紅葉としての獨得の妙所を持つてゐると云ふ意味の批評を述べた。この簡單な評語は、當時の私をして奇異な思ひをさせた。自然主義全盛の時代で、紅葉はじめ硯友社一派の文學は古くさい低級な文學として、文壇の新人にはいたましく蔑視されてゐたので、露國の大文學に熟通してゐる二葉亭の如きは、無論紅葉などの遊戲文字に同感をもつてゐよう筈はないと、私は獨り極めに極めてゐたのであつた。……今から思ふと、二葉亭が紅葉の小說に好意をもつてゐたのは不思議はないので、二葉亭はロシヤ文學の感化を受けて、「浮雲」のやうな異つた小說を書いたり、人生問題に煩悶したりしたものゝ、根柢には紅葉などと似寄つた舊日本の文學趣味を湛えてゐるのだ。二葉亭ばかりではない。もつと時代の若い人々でも、紅葉と似通ふやうな文學趣味を隱然持つて

ゐることは、今なほ舊歌舞伎劇が、何とか理窟をつけながら、喜ばれてゐるのと同樣である。日本人は日本人である。祖先以來の傳統的趣味から全く脫却することは出來ないのである。

自然主義勃興以來、紅葉山人は文壇的には虐殺されながら、世上の小說好きには相變らず喜ばれてゐたらしい。それも、蘆花浪六、あるひは天外諸氏の小說とは異つて、讀者が各方面に渡つてゐるらしい。彼れと、後年の漱石との藝術とは最も日本人の趣味に適してゐるのであらう。そして、それは必しも通俗呼ばりすべきものではないらしく、鑑識の傑れた文壇の諸氏が、近年紅葉讃美の語を放つてゐるのが、をり〳〵私の耳に觸れるやうになつた。藝術に對する毀譽褒貶の變遷は面白い。……數ケ月前の「新潮」の合評會にも、紅葉や一葉の噂が出てゐて、秋聲秋江の諸氏が紅葉をひどく推賞してゐた。谷崎氏が紅葉を世界的文豪として奉つてゐるといふ噂も出てゐた。歲を取ると、現在よりも過去がよく見えるものだが、「あの紅葉」の小說がそんなに傑れてゐるのであらうかと、私は疑ひながら、新たに彼れの全集を讀直さうと思立つた。

私は、少年の頃「拈華微笑」を讀んで以來、紅葉山人の作品は殆んど全部讀んでゐると云つてい丶。二三度繰返して讀んだものもある。「隣の女」の如きは、退屈な時にたび〳〵取出して讀んでは、面白がつて獨笑ひを浮べた。しかし、紅葉の作品に對して敬意を表したことは一度もなかつた。「小說といふものはこんなものであらう。おれには書きたくも書けないだらうが、書かなくてもい丶」と、いつも思つてゐた。だから、私が十年も早く生れて、硯友社全盛期に成人してゐたなら、決して小說家として身を立てようなんて、柄にないことを思立ちはしなかつたであらう。

明治二十九年の二月下旬「多情多恨」が讀賣に出か丶つた頃、私ははじめて上京して、橫寺町の下宿に、所謂草鞋を解いたのであつたが、間もなく、町內の古ぼけた共同門に「尾崎徳太郞」といふ表札が出てゐるのを、散步の途中か、

湯屋通ひの途中に見つけたので、これが、有名な紅葉山人の住所であらうかと疑つて、同宿の友人に訊ねたが、法律書生であつた友人は、そんなことは知らなかつた。數日經つて、田舍の知人から紹介されてゐた戸川殘花翁を、築土寺町に訪ねた時に、かの表札について訊ねると、翁は、「それが紅葉の家だ」と答へて、「文學者は皆んな貧乏だ」と、その實生活についていろ〳〵話して呉れた。私は、當時文學を志望してゐた譯ではなかつたので、貧乏と文學の關係についてさして感激もしなかつた。

私は文科に籍を置くやうになつても硯友社は好かなかつた。早稻田卒業後二三年の間に、他所ながら紅葉山人の風丰に接したことは、四五度に及んだが、敬意を寄せて凝視したことは一度もなかつた。しかし、青春の頃眼前を横切つた、明治時代第一の人氣作者紅葉山人の通人らしい面影を、今思出してゐると、彼れの全集を讀みながら、追憶の興味が添つて來るのである。

早稻田卒業直後、出版部に奉職して間のない頃、牛込の明進軒で編輯會議があつて高田坪内兩博士も出席され、會議後晩餐を饗せられてゐると、そこへ、脊のスラリとした痩男が筒袖のやうな身裝で、階子段を上つて來た。扉が開いてゐたので我々の部屋へ目を注いだやうであつたが、ふと高田博士と目を見合せて互ひに目禮した。「尾崎君ぢやないか」と、坪内博士が顧みて聲を掛けた時には、その人は向うの部屋へ入つてゐた。「横寺町の先生はこの頃よくいらつしやるかね」と、高田博士は給仕女に訊ねた。「紅葉といふ人はあゝいふ人か」と、私は意外な感じをして、その書生々々した影を心に留めた。當時の私は、十五圓の月給に有りついて、面白くもない文科講義錄の原稿集めや校正をやつてゐたので、小說のやうな六ケしい者を書かうといふ大それた野心を抱いてはゐなかつた。講義錄の餘白へ氣紛れに、「文藝時評」を書いたりしたが、無論しつかりした文學上の見識があつたのではないので、空疎な評語を並べたに過ぎなか

つた。硯友社系統の作品は大抵罵倒したやうに覺えてゐるが、非難攻擊の依りどころは、彼等に思想がないといふことであつた。實人生について經驗乏しく、藝術の鑑賞力の淺い批評家が、尤もらしい文學批評を捏上げるには、思想の有無を持出すのが、一番樂であつて、襤褸を出さずに濟む譯なのだ。その頃露伴の小說には思想があつて、紅葉のには思想がないと云はれてゐたやうであつたが、露伴にどんな思想があつたのであらう。「一口劍」には、「精神一到何事かならさらん」といふ思想が現はれてゐるから、紅葉の「おぼろ舟」の如き、情緒のみ現はれてゐる小說よりも傑れてゐると云ふのであらうか。

二度目に、ちらと紅葉の影を見たのは、赤城下の淸風亭で、「高等講談」と稱して、文學者が自作の上品な講談を自演した時であつた。私が聽きに行つた時は、その二回目か三回目かで、江見水蔭氏のあまり面白くない話を聞かされたのであつたが、氏の話の濟みかけた時分に、紅葉が庭から入つて來て、水蔭氏を招いて一緖に出て行つた。「あゝ紅葉さんが來た」と、私の側にゐた聽衆は、みんなそちらへ目を注いだ。「茶碗割」や「短慮の刄」は、この高等講談會で述べられたので、矢張り誰れのよりも紅葉のが面白かつたらしい。

三度目に、私が紅葉を見たのは、池ノ端の無極亭で、久米八門下の踊りの會のあつた時であつた。私は德田秋江君などゝ一しよに出掛けて、坪內博士のほとりで見物してゐたが、その會へは紅葉山人も來てゐて幸堂得知翁と並んで話をしてゐた。そこへ遲れ馳せに鏡花氏がやつて來たが、座席の斡旋をしてゐた中年の女が、「先生のお側へいらつしやい」と云ふと氏は禮儀正しくもそちらへ寄つて行つた。私などのやうに、先生の側で胡坐を搔いたりなんかしなかつた。間が隔たつてゐるので彼等の話聲はよく聞えなかつたが、たゞ、紅葉が鏡花氏に向つて、「お前が……」〳〵と云つてゐるのが耳に留つた。そして、話は聞えなくても、兩氏の態度を見てゐるだけで、師弟對座の光景が映畫の如く浮んだ。一人が

師の態度を崩さなければ、他の一人も弟子の態度を破らなかつた。「青葡萄」に書かれてゐる師弟關係が思出された。

四度目、すなはち最後に紅葉を見たのは、島村抱月渡歐の送別會の席上に於てゞあつた。私は、開會前から會場の紅葉館に來てゐた彼れが女中から飴見たいな菓子を貰つて、それを口に含んで、片膝を立てゝ座してゐる彼れを見た。發起人を代表した彼が送別の辭を述べるのを聽いた。それから、廣津柳浪氏が、當時「無花果」の作者として聲名を博してゐた中村吉藏氏を紅葉に紹介してゐるのを見た。この各方面の重立つた文學者の集まつた會場に於ても、紅葉は特に文壇の第一人者らしく、あたりの人々に取扱はれてゐるのを、私は見た。彼自身もそれを當然としてゐるらしく振舞つてゐるやうに、當時の私には思はれた。彼れは文章のためには苦心焦慮し、ことに最後の大作「金色夜叉」のためには天壽を縮めるほどの思ひをしたのであらうが、また物質の不足に惱まされたこともあらうが、自己の名聲はあくまで樂んでゐたに違ひない。彼れの作物がそれを證明してゐる。彼れには、二葉亭や透谷や獨歩や、あるひは樗牛なども持つてゐたやうな人生苦を感得したことはなかつたに違ひない。彼れの作物がそれを證明してゐる。彼れは解決の出來ない人生を持つてゐなかつた文學者の一人である。

私は、この一代の才人であつた紅葉山人を、他所ながら瞥見したゞけで過ぎたのであつたが、抱月渡歐の翌年、讀賣新聞に入社したゝめに、彼れに對して多少の掛り合ひがつくやうになつた。私の入社後間もなく山人は逝去した。彼れは長い間自己の作品を發表した讀賣とは緣を切つてゐたのであつたが、過去の深い關係から云つても、また彼れの文壇に於ける功績から云つても、その傳記や逸話を紙上に掲げるのは、當然爲すべきことのやうに思はれたので、私は主筆に進言して、自分でその記事を集めやうとした。それで、まづ柳浪氏と眉山氏とを訪問したのであつたが、二人とも紅葉に關する話は一切避けて、私の力ではどうしようもなかつた。變に思つて、私の讀賣入社當時に紹介の勞を取つて與

れた石橋思案氏を博文館に訪問して譯を訊かうとしたが、氏は不在であつた。一日驅けずり廻つて何の得るところもなかつたのを忌々しくも思ひ、主筆に對しても申譯がないやうに思つて、社へ歸つたが、すると間もなく、思案氏から電話が掛つて來た。……その時の荒つぽい氏の口調は私は今でもよく覺えてゐる。「君は紅葉のことを聞きに來たんでせうが、そのお話は出來ません。君には何も關係がないのでお氣の毒だが、讀賣新聞は紅葉を虐待して苦めたのだから、我々友人は、讀賣には斷じて筆を執らんことに決議をしてゐるんです。無論話をする譯にも行きません」

卒直な思案氏の言葉によつて、私は柳浪眉山兩氏が、氣の毒さうな顏をして話を避けてゐた理由が分つた。「さういふ譯なら、此方でも書く必要はあるまい」と、主筆も承知して、私も重荷をおろした氣になつたのであつたが、しかし、全然知らん顏をする譯にも行かなかつたので、私の筆で十行ばかりの弔詞を書いて、肖像とゝもに紙上に掲げることにした。讀賣はあれで濟ませるのかと、紅葉に對する冷淡な態度を非難したものもあつたが、こちらが冷淡であつたのではない、先方からさう仕向けたのだ。……兎に角、まだ一篇の小說も書かなかつた前に、明治文壇の第一人者尾崎紅葉追悼の文章を、たとへ十行でも執筆して、當時の文學新聞に掲げることが出來たのは、私に取つて名譽であつた譯だ。

私はかねて、「心の闇」と「多情多恨」とを、紅葉全作中での最も傑れた者として心に留めてゐた。「金色夜叉」の如きは、「不如歸」「魔風戀風」などと同列に論ぜらるべき通俗小說であると思つてゐた。ところが、今度全部を通讀して見て、さうとばかりは云へないことを知つた。文學者としての紅葉、人としての紅葉を研究するためには、「金色夜叉」をこそ撰ぶべきである。馬琴を研究するには、「弓張月」や「美少年錄」や「俠客傳」よりも、「八犬傳」を撰ぶのが當然であるが、「金色夜叉」は紅葉山人の「八犬傳」と云つていゝのである。……私は今度この未完の長篇を讀んで、たゞに紅

業の文學的技能を充分に窺ひ得られたのみならず、世上の小說愛好者の心理をも察することが出來た。明治時代の世相の一端をも窺ひ得られたし、もつと廣い人生と文學とに思ひを馳せて感慨に耽つたのであつた。時代精神捕捉の必要を强說した高山樗牛は、「金色夜叉」を罵つてゐたが、しかし、この長篇には、日露戰爭前の時代の精神や時代の苦悶が、自から作中に現はれてゐるではないか。作者はそれを意識して書いてはゐないのだが、意識してゐないところに、むしろ妙味があるのだ。今日のプロレタリア文學主唱者が、粗雜な理窟を作中に並べて、それで時代を批判したつもりでゐるのをこそ晒ふべきである。

「金色夜叉」について所感を述べる前に、私は彼れの他の作品について、些少の批判を試みようと思ふ。

「新色懺悔」は云ふ迄でもなく、「伽羅枕」なども、西鶴その他の舊文學をお手本として、一生懸命お化粧をした習作であるが、それ等初期の作物のうちでは、「二人女房」と「三人妻」とがいゝ。「金色夜叉」に到達するまでの紅葉の素質が、この二篇に充分に現はれてゐる。私が今座側に備へてゐる春陽堂新刊の「紅葉全集」には、「二人女房」が含まれてゐないので、たしかなことは云へないが、この小說には、ありふれた人情が、分り易く、あたり前に書かれてゐる。平凡この上なしの小說であるが、常識的で健全で、人生世相に暗い影を見ないところが、紅葉の特色であり、一般の讀者が彼れの小說を喜んだ所以である。この小說の現はれた時、依田學海翁が作者に向つて、「甚だ面白い、後生恐るべし」と激賞したのに對して、作者は、「いや、まだ駄目です。四十にもなつて頭に白髮が出るやうになつたら、實の入つたものが書けるでせう」と答へたことが、作者苦心談の中に出てゐた。二十を過ぎたばかりの若年が、學海翁の如き老人をも感動させるやうな小說を書いたことは、今から見て不思議なやうに思はれるが、これは必しも紅葉が非凡な秀才であつた證據にはならないのだ。紅葉は青年の頃にも、當時の一般人が見てゐる通りに人間や世相を見て、道德觀や世間智

が俗人と同様であつたから、世の老若男女に受入れられ易かつたのだ。二人の女を取扱ふにも型の如く筋を運んで行くのだから、作者も書易かつたに違ひない。一葉亭の「浮雲」にあるやうな深入りした心理に突込んでゐるのでなくつて、腕を見せるのは文章の綾にあつただけなのだ。

「三人妻」なども、徳川時代の文學の連續と云つていゝもので、文章にも着眼にも新時代の色彩の乏しいものであるが、しかし、「三人妻」は傑作である。緑雨の「かくれんぼ」の比ではない。

私は、西鶴の「一代女」や、荷風の「腕くらべ」や、里見弴の「今年竹」など、溫柔郷裡の消息を傳へた古今の名作を、「三人妻」に比べて見た。「三人妻」には、「腕くらべ」に漂つてゐるやうな哀愁がない。近代的哀愁とも名づくべきものが讀者の胸に迫つて來るのが、荷風の作品をして硯友社の作品と趣きを異にさせるので、「三人妻」にはさういつた感じは含まれてゐない。紅葉の年齢がまだ若かつた時分の作であるためでもあらうが、色つぽい興味にのみ駆られてにがい味ひはどこにも加味されてゐない。三美人の風姿をそれ〴〵に描くとともに、個性をも書分けたつもりなのであらうが、それは型の如くである。花柳界見聞録たるに過ぎぬ憾みのある「今年竹」の方が複雑な現實味を持つてゐる。……

しかし、「三人妻」は、一つの磨かれたる璧である。舊文學傳來の豊艶なる文字で色取つた浮世繪である。西鶴を眞似て筆致に斧鑿の痕のある「伽羅枕」よりも渾然としてゐる。かういふ種類の文章としては、徳川時代の小説にも類のないほどの名文である。かういふ者を讀むと、紅葉は、新時代の先驅者ではなくつて、舊文學に最後の光を放つた名作家と云つた感じがする。それは先代菊五郎が歌舞伎の形式美や情緒を繼承して、舊い世話物役者として最後の光を放つたのと似通つてゐる。そして、菊五郎は舊技巧家として、最後の一人であつたのみならず、徳川末期の名優にも勝つてゐたやうに想像されるが、紅葉もさうであつたのだ。

「三人妻」などは、文章美に於て、舊作家を壓してゐるが、內容は、「梅曆」や「娘節用」などの人情本と同じなのだ。紅葉の持味は、「三人妻」から「金色夜叉」に至るまで失はれてゐない。「三人妻」の葛城餘五郎は、大成金であつたゝめ、自分の心に適つた女を自由に手に入れて、色の樂みに耽つて、人生の幸福此處に在りと滿足してゐたのであるが、薄給の勤人で、容貌も醜かつた粕壁讓（隣の女の主人公）は、その滿足の得られないために焦慮した。この「隣の女」くらゐ、紅葉の主觀を知り、作風を知るに都合のいゝものはない。「媒妁に妻はせられた嫁、好加減に極めた緣談、親などに勸められた女房、そんなのは粕壁讓の最も屑しとせざるところである。……相互に心が知れ合つて、添はう添ひましよ。死ね死なうといふほどの間でなければ、夫婦になるべき必要がない」と云ふのは、何も粕壁に限つたことではないので、今日は、これを眞劍な戀愛のない結婚は虛僞な結婚であるなどと、六ケしい言葉で言現はすだけの相違であるが、粕壁讓の理想の色調は、「あちらからもこちらからもやいの〳〵と云はれる「唐琴屋丹次郎」となることにあるのだ。作者紅葉は、理想の充たされない粕壁の苦悶を取扱ふのに、歐洲近代の作家及び、その流れを汲む現代日本の作家のやうに眞面目な同感を寄せないで、揶揄し翻弄してゐるのであるが、それに關はらず、紅葉本來の趣味は、唐琴屋の若旦那の趣味と同じ色を帶びてゐるのだ。「何だ男のくせに」と云つた調子で粕壁などを罵倒して、上べに凛としたところを見せながら、內實丹次郎の影に憧れてゐるのは、多數の世人と同樣なのだ。本筋では粕壁の悲觀焦慮空想を寫しながら、影では、その隣りの一室で、「隣の女」お小夜が、その旦那らしい好男子と駄洒落まぜりの口說をかはしたり、あるひは情夫の巡査と痴話喧嘩をしたりしてゐるところを描いたりしてゐるのは、現實と理想を對照させてゐるやうなものだ。紅葉の小說が、多數者に愛讀され、今もなほ、可成りの愛讀者を持つてゐる理由の一半はさういふ點にあるのであらう。單なる「梅曆」ではあまりに低級で、普通の讀者の道義觀が滿足されない。それで、「何だ男のくせに」とい

ふ謀とした道念を加味しながら、春色「三人妻」春色「隣の女」を書いたのが、學海翁などの通俗的知識階級の讀者にも喜ばれた所以であらう。狂詞亭紅葉である。無論文才に於ては爲永春水などは紅葉に比較さるべくもあらず、永井荷風とても遠く彼れに及ばないのである。

「金色夜叉」を、失戀の惱みを描いた小說とのみ思ふのは淺薄である。間貫一は、紅葉全作中でも類を絶してゐる色男なのである。粕壁讓をして羨望し、垂涎三尺たらしむるに足る幸福人である。讀者の興味の一半はそこにあるので、お宮は雜作なく悔悟して、命を掛けて慕ひ、滿枝は滿枝で、振られゝば振られるほど戀慕つてゐる。幾多の青年讀者が、自己を貫一の境地に置いて恍惚としたことであらう。讀者心理から云へば、光源氏も「紅樓夢」の賈寶玉も「一代男」の世之助も「梅曆」の丹次郎も、及びもつかぬ色男は貫一なので、失戀の惱みを言譯に、終ひまで女に捉へられぬところが、讀者をじらして、讀者の好色的情緒をそゝる所以である。

作中のいろ／＼な男女のうち、赤樫滿枝は實によく書けてゐる。「三人妻」のお才などよりも一層具象的に、豐艶なる肉體が紙上に躍動してゐるのは、歳とともに紅葉の技巧が進んだ證據である。面白いのは色の口說である。西鶴時代の大まかなものから、梅曆時代の舌つたるいところ、紅葉を經て、現代小說のハイカラな戀愛問題に至るまでの變遷を比べて見ると面白い。そこにも時代相が現はれてゐるのである。

長篇の構圖を定める腕前は、紅葉でも得意ではなかつたので、「金色夜叉」も、通俗小說として、讀者の好奇心を惹く用意はあまり周到でないので、次第にだれて來てゐるのだが、荒尾や滿枝の挿話によつて僅かに興味をつないでゐる。それにしても、貫一が千葉行きの際に、兩國驛前の休憩所で、仲のいゝ男女の秘密話を立聞きして自分の身に引くらべて感慨にふけり、鹽原の宿で、また仲のいゝ男女の情死の相談を立聞きして飛込んだりするのは、知慧のない趣向で

ある。しかも、女の方が、富山の思ひを掛けてゐた女であつたなど、故事つけの苦しさが思はれる。

由來紅葉は常識的の作家であるため、貫一の人生に對する憎惡感が甚だ不徹底である。風早蒲田などの舊友の懇請を斥けて飽くまで高利を貪らんとする凄味を現はしてゐるところもあるが、隨所に弱々しい人情がつきまとつてゐて、夜叉らしい强味はあまり現はれてゐない。荒尾に對するところもさうであるし、情死の計畫者を救ふあたりは、まるで平凡な人情家である。私はその點で、讀みながら紅葉の不徹底さを齒痒く思つた。

しかし、紅葉が自己の天分と蘊蓄とを傾注した小說は「金色夜叉」である。「三人妻」や「多情多恨」のやうに完備したものではなくつて、どんな批評家からも非難されさうな缺點を有つてゐるのであるが、彼れとしては、最も面倒な題材にぶつゝかつて藝術的奮鬪を試みたので、腦漿を絞り盡して、倒れて止むといつた悲壯な感じがされる。それで彼れは自己の有つてゐるあらゆる物を投出してゐる。繼ぎはぎではあるが、それ等の繼ぎ切れのあるものには、一代の才人の織つた錦繡の美を表はしてゐるのだ。「金色夜叉」は紅葉の作中では唯一の劇的効果を有つてゐるので、「不如歸」とゝもに、早くから新派劇の寶物にされ、大學生が劇場に親しむやうになつたのは、「金色夜叉」が本鄕座で上演されたゝめであると云はれるほどに、その芝居は世俗に歡迎されたのであるが、それは紅葉の藝術に取つてはいゝことではなかつた。私は當時劇評をやつてゐたので、高田實の荒尾や藤澤淺二郎の貫一などを見せつけられたが、その記憶が、この小說の鑑賞に於てどれほど邪魔になつたか知れないのだ。小說の筋立に芝居がゝつた不自然さがあるにしても、あゝわざとらしいお芝居にされて、しかも薄汚く蕪雜に振舞はれては、原作の名文章が泥土に委されたやうなものだ。「金色夜叉」が最も廣く流布してゐるとゝもに、紅葉の作中の最も卑俗低級なものゝやうな印象も我等に與へてゐるのは、新派劇の罪なのだ。

しかし、この芝居が大學生など青年男女から異常な歡迎を受けたことも時代の風潮と關係がある。硯友社文學の戯作者氣分で筆を執つてゐた紅葉も、知識階級の青年を主人公として、新時代の悩みを寫すやうになつた。それが不徹底であつても、我々はそこにあの時代の影を髣髴と思浮べることが出來るのである。春のや主人の「書生氣質」の學生は、文明開化の空氣に浴して、ふは／＼と氣樂に生きてゐた。それが、「金色夜叉」では、不徹底でも何でも、どうかしたければならないと云つたやうな時代の苦しみが出てゐるのだ。明治の新日本もボンヤリしてゐられなくなつた。同じやうに貧乏であつても、學生や若い女の生活難や金錢慾に對する感じが鋭敏になつてゐる。富山のやうな富者に對する反抗と羨望、青年男女の滿たされない望みが、在來の小説とはちがつて、尖つて出てゐるのである。新時代の色男としての貫一を取扱つて、讀者を喜ばせようとしてゐながら、作者は不用意のうちに、時代の影をも寫してゐるのだ。自然主義以後の作家のやうに、紅葉には自覺とか自意識とか名づくべきものはなかつたのであらうが、彼れはこの最後の大作に取掛つてゐる間には、創作上の苦悶があつたに違ひない。そして、その苦悶には私はいたましく同感するのである。

貫一の失戀の苦をこれでもか／＼と書續けてゐるのが、深く掘下げてゐるといふよりも、多くは「くどい」と感じさせられるのだが、名作「多情多恨」だつて、くどいことは隨分くどい。

四十にもなつたら質の入つたものが書けるだらうと、若い時分に述懐してゐた紅葉山人は、四十未滿で逝去した。老大家のやうに思はれてゐた彼れも、今の私の年齢よりは十歳も若くて死んだのである。世態人情に明るかつた彼れの言説も、今から考へると未熟に思はれるのも止むを得ない。「新著月刊」といふ雜誌に掲げられ、後日「唾玉集」など題して出版された宙外青々團二氏の文集のうちに收められてゐる宙外氏筆記の名家苦心談（それは前代の諸作家の文學觀

人生觀を伺ふに甚だ便利なものである）や、明進軒會食後の雜話によつて、我々は紅葉の創作の用意や世間智を直接に知ることが出來るのであるが、それは、極めて常識的で、綠雨や二葉亭の所說にあるやうな銳利な觀察や不安な懷疑は全く見られなかつた。戀愛や家庭生活についても、いやに老成ぶつた態度で子弟に敎へを垂れてゐたが、「金色夜叉」などを讀みながら、私が氣づいたところによると、紅葉でも、青春期を過ぐるにつれて、創作その他の事について疑惑の念が湧いて、いろ〳〵に惱んでゐたのである。たゞ、一代の大先生として奉られてゐた自己の內兜を子弟や世人に見透かされまいとして、努めて老成ぶつた態度を持續けてゐたのであらう。三十にも達しないうちから大家に成りすまし、ことに門下生をつくることなどは、自己完成の上に決していゝことではない。

「青葡萄」は、紅葉全集中唯一の、事實直寫の小說であつて、これによつて彼れの日常生活の一端が窺ひ得られるのである。それに、言文一致體の文章はこの一篇に於て最もよく調つてゐる。「金色夜叉」などの會話は、純然たる寫實とは云はれないのだが、「青葡萄」は事實の直寫であつたために、會話が自然であつて生動してゐる。紅葉も生き永らへてゐたら、「青葡萄」の文體を押進めて、新時代の文學へ入つて行つたかも知れないが、あるひは從來維持してゐた大家の格式を崩すのを恐れて、徒らに神經を惱ましたかも知れない。……どちらにしても、紅葉は露伴氏とは違つてゐる。「青葡萄」では、人の師としての紅葉が、門下生に對して威嚴と情味とを兼備へてゐたことがよく現はれてゐて、文壇に於ける彼れの實際的勢力の大であつた原因も察せられるが、文學の上から云へば、かういふ師匠を頂くことは弟子として幸福ではなく、師匠自身に取つてもいゝことではあるまい。文學に於ては、飽くまでも自己の天分を發揮すべきもので、師匠の束縛なんか受けてはたまるものでない。好んで人の師になるものも愚かであるし、進んで人の弟子になるものも愚かである。

二葉亭、透谷、獨步などには、將來の文學の萌芽が宿つてゐたが、硯友社の文學にはそれがなかつた。舊文學の衣鉢を與いだのに過ぎなかつたが、しかし、紅葉山人だけは、作品の價値から云つても、日本文學史上に立派に眼を留むべき傑れた作家である。言文一致の文體を完成するに努力した一人であるのみならず、その作品のある者は、古來の日本文學の傑作に比して、決して劣るところはないのだ。

紅葉以外の硯友社の作家と作品とを、今記憶を索つて思ひ浮べると、廣津柳浪氏の「今戸心中」その他二三が、今讀返しても見褪めがしないだらうと思はれるばかりである。時として紅葉以上との評判のあつた川上眉山の作品も、私には深い印象を留めてゐない。……さう思ふと、十數年の間小說壇を獨占してゐた硯友社も、內容は甚だ稀薄であつたやうに思はれるが、しかし、あれほど旺盛だつた自然主義の作品のうちにでも、今になつて顧ると、どれだけいゝ者があつたであらうか。いつの世の藝術でも、時日の篩にかゝると、殘るものは幾つもないのが當然なのだ。（九月十九日大磯にて）

「タイタス、アンドロニカス」と「繪本合法衢」

私は、沙翁の「タイタス、アンドロニカス」を、最近出版された坪內博士の飜譯によつて讀んだ。この戯曲は作者が二十五歲頃即ち修業初期の習作であつて、一部の批評家は、「こんな譯のわからぬ滅茶苦茶な、只もう怖ろしい事づくめのメロドラマ」を沙翁が書く筈はないと云つてゐるさうである。「血の悲劇」と名づけられてゐる「殘忍一點張り」らしい

戯曲である。

しかし、私には面白かつた。「譯の分らぬ滅茶苦茶なもの」とは思はれなかつた。筋もよく通つてゐるではないか。「南北默阿彌らの血の悲劇を今も尙ほ頻りに歡迎し、又所謂劍劇の隨分甚しい慘酷にも、飽きせぬ感興を覺えつゝある我民衆の如きは、三百數十年前の此作に對して、或ひは一種不思議な同氣相求を感ずるでもあらう」と、博士は云つてゐられるが、私は、「同氣相求」以上の感じに打たれてゐる。鶴屋南北の「五十三驛」や「合法衢」こそ、譯の分らぬ、滅茶苦茶な、鬼面人を脅かすものと云つていゝであらうが、「アンドロニカス」は、結構が整然としてゐて、讀んだゞけでハツキリした印象が與へられる。表面の不自然を非難するのなら、沙翁の後年の戯曲とても、多くはその非難を受けなければならぬのである。

この戯曲が現はれた三百數十年前の頃は、日本はまだ戰亂時代であつたが、その頃の日本歷史を讀むと、この戯曲にあるやうな殘忍な事實に絕えず世に行はれてゐたではないか。戰死した愛兒の靈を弔ふために復讎的に捕虜の王子を生きながら火炙りにすること、自己の意に逆つたのを怒つて直ちに實子を斬殺すること、恨みある敵方の女子を辱めた上に兩手を切り左右の手首を切落すことなど、戰國の昔には有り得たことなのだ。しかも、沙翁はすべて、シリアスに取扱つて、決して惡巫山戯をしてゐない。黑人の惡漢アーロンの如きも、「リチャド三世」やイヤゴーなどの惡漢型を豫想せしむるものである。「合法ケ衢」の左枝大學や立場の太平次は、物慾のためにいろ／＼な殘酷な事を行つてゐるが、それだけで、臺詞を通じて現はされる彼等の心理に何等の深刻味もない。「頭も幸ひ五月闇倉狩峠の土となれ」なんて、南北特有の氣取を見せてゐるくらゐである。「歌舞伎脚本傑作集」に挿まれた初代豐國の色摺の口繪で想像される如く、鷲つ鼻で目の小さい五世幸四郎が、グロテスクな扮裝と身振で見物を脅かしたゞけである。「この惡企みは想像したば

ありでも身が顫へる」と云つてゐるアーロンの臺詞には、我々の胸を抉るものがある。「紅葉論」の中で私が說いたやうに、「金色夜叉」のうちには、人間の夜叉の一面はあまり出てゐないのだ。人類の有つてゐる復讐的氣魄が甚だ稀薄である。アーロン曰はく、「夜叉といふ者が實際あるものなら、おれはその夜叉になりたい。地獄の消えずの火の中で燒かれながら生きてゐたい」と。この精神的强味は、南北の人物にも缺けてゐる「アンドロニカス」には、技巧の妙味が隨所に散亂してゐる。復讐祈願の銘文を天上の諸神へ向つて射放つところや、料理場に留つてゐる蠅をナイフで突殺して感慨に耽るところなど「合法ヶ衢」の鷹狩の爭ひのやうな大ザツパな常套的趣向とは違つて、人間の狂暴性が熾烈に現はれてゐて面白いが、ことに、手や舌を切られた女子ラヴイニアが、父兄に加害者を知らせるところは凄慘である。この役は田之助にでも扮さすべきものである。ことに、彼女が手を失つた殘臂で水盤を捧げて、復讐のための人肉料理に侍するところは、南北風の茶番ではない、鬼氣人を襲ふものである。……沙翁のやうな大詩人が、こんな殘酷な趣向を立てる筈がないと云ふのは、古來の詩人を强いて人類愛や、生やさしい人道主義の權化にしたがる近代の批評家の習癖に基くので、沙翁には人類固有の殘酷性に對して洞察があつたのであらうと思はれる。

我々人類は、殺戮を日常茶飯の事とし、復讐慾に燃えてゐた時代からいくらも遠ざかつてゐないのだから、上べは平和を裝ひ、共榮共存を企てながらも、祖先傳來の殘虐性復讐性が決して消滅してゐるのではない。世界平和を高唱しながら、國と國とはひそかに戰鬪の爪牙を磨いてゐるのである。人と人との間にも「血の悲劇」は、いろ〳〵な形をして現はれてゐるではないか。

日本の劇場に今なほ盛んに上演されてゐる「血の悲劇」が、見物に迎へられるのも、見物自身の心に共鳴を覺えるか

らであらうか。

しかし、この頃上演される「血の悲劇」は、血の色が次第に稀薄になつた。警視廳の干渉などがあるばかりではない、見物が酷たらしい舞臺面を喜ばなくなつたゝめであらう。左團次が十月に上演すると新聞に報道されてゐる「合法ゲ衞」だつて、多分殘酷味が閑却されるのであらう。……藝術鑑賞がさう云ふ風に進歩するのは結構であるが、それによつて、人間の殘虐性や復讐慾が急に減退したとは、私には思はれない。むしろ内攻して行くのであらう。人間の神經は次第に尖つて來るのだから、人間の殘酷性は次第に内面的に深刻になるのだ。立場の太平次やアーロンの跋扈する「合法ゲ衞」や「アンドロニカス」の世界が恐ろしいばかりではない。今日の現實も恐ろしい。(九月二十三日、大磯にて)

私は、故郷へ往復の途中、神戸の楠公神社前や、大阪の道頓堀あたりを散歩して、他所ながら澤正一座が非常な人氣を博してゐるのを見た。それから、少時間文樂座へ寄つて、この春見た時よりも、一層見物席のさびれてゐるのを見て、亡び行く藝術に對して痛ましい愛惜を感じた。

昨日は偶然上京して帝劇へ入つて、半年振りで東京の舊劇を觀た。學生時代に、感激し心醉して見た「菊畑」は、こんな詰らない芝居であつたのか、と呆れたのであるが、南北の「合法辻」も、殺人芝居といふ意外に、何等の意味のないことを知つて、大勢が高い入場料を拂つて、こんな芝居を觀てゐるのを、奇異に感じた。大抵の見物はさすがに左程の興味を感じてゐないやうであつたが、とに角、一夜の歡樂を求めるつもりで、一團の人類が此處に集つて、こんな者を觀てゐるのを、人生の一光景として傍觀してゐるのは、芝居その物よりも私に取つて一つの興味となつた。

鶴屋南北の脚本は、「歌舞伎脚本傑作集」に蒐められてゐる者だけは讀んでゐるが、舞臺に上つたものでは、「四谷怪

談」を觀てゐるくらゐで、近年左團次によつて新たに上演されて、好評を博したらしい「勝角力」や「達磨」は、つひに觀る機會を得なかつた。

今度の「合法辻」は、南北の代表作と云つていゝもので、昔は非常に持囃されたものらしい。私は、脚本で讀んで、「倉狩峠」の一場の如きが、最も南北の特色を結晶させたものであらうと思つてゐた。奇怪な顏をした幸四郎や、醜惡な半四郎が、陰慘な夢を舞臺にうつして、鎖國的無智の泰平に醉つてゐた見物が、間延びのした痴呆的顏面をして、それを觀賞した、德川幕府のある時代を想像して、その光景を人生地獄の繪の一枚のやうに思つてゐた。峠の一軒家、薄暗い行燈、團塊婆の蚊いぶし、猿轡を嵌められて縛られた美人、鼠の活躍、捨鐘、忍び三重、時鳥、蛙の聲。南北慣用の技巧は、完全にこの一場に集められてゐる。かういふ瑣末な技巧から云つたら、「タイタスアンドロニカス」などは、とても南北に及ばないであらう。……帝劇では、幕が下りると、文明の電燈が眞晝の如く輝いて、「今のは夢であつたか」と、氣持が變るのであるが、昔の劇場では、幕が閉ぢられた後でも、あたりは暗かつたのだ。惡夢は醒め切らなかつた筈である。今日の文壇用語で云へば、見物は救はれないのである。「救ひのない人生」と云はるべきものだ。……ところが、いくら昔の痴呆的見物だつて、殺人の血を見て滿足してゐたのではあるまい。肉親の仇を討つため、あるひはお家の寶物（それが香爐であらうとも茶壺であらうとも）を搜出して主君に捧ぐるといふ理想のためには、どんな艱難辛苦をしても、嬲殺しにされても厭はないといふ勇猛心に同感して、それによつて救はれてゐたのであらう。舞臺の人物も、さういふ理想を遂げられさへすれば、身を膾の如く切りさいなまれても滿足してゐるらしい口吻を弄してゐる。この點から云ふと西洋の昔の血の悲劇の方が、却つて「救はれない人生」を現はしてゐる。「タイタスアンドロニカス」中の人物には、「合法辻」中の艱苦に漂つてゐる人物のやうな理想の滿足がない。惡人でも、ブーロンその他は、虐殺の

心理狀態が、太平次のやうな痴呆性殺人でなくつて、殘酷性が根深い。

今の時世では、「合法辻」の人物の理想なんか、てんで受入れられなくなつてゐるのだから、今度の上演を見ると、譯も分らずに斬つたり斬られたりをしてゐるとのみ見られる外はない。陰氣な劍劇である。私は、脚本で讀んで想像してゐた時のやうな奇怪な繪畫美も感ぜられなかつた。「四谷怪談」のやうに幾度も手に掛けられて、傳統的に型の美が踏襲されてゐるのではないから、尙さら蕪雜である。

さすがに、左團次の太平次と、梅幸のうんざりお松とには、原作とは色彩を異にしてゐても、藝に面白味がある。ことに左團次は、自分の選擇した出し物だけあつて、身を入れてやつてゐるのだが、彼れは、かういふ南北物について、どういふ點で興味を感じてゐるのであらう？豐國などの舞臺繪の美に感じて、それを再現しやうと思つてゐるのであらうか。南北の慘劇に、默阿彌など普通の舊劇中の殘忍行爲とはちがつた人生味を認めたゝめなのであらうか。……思ふにそれほど深い意味がある譯ではあるまい。

私は、「合法辻」を見て感じた陰慘味や戰慄は、「アンドロニカス」を讀んで感じたそれよりも遙かに低級であるやうな氣がした。「四谷怪談」などについて、いろ〳〵に文學者の新解釋がつけられ、南北全集までも出版されたが、今度の帝劇の演出によつて見ると、新代の舞臺に南北の復活することは、覺束ないだらうと思はれる。時間に制限があるため、筋の通らぬほどの省略がされてゐるのも、この脚本の價値を傷けた一つの理由になつてゐるであらうが、しかし、この芝居などは、筋立てよつて我々を納得させるのではない。（十月四日、東京にて）

斷片語

△西行と芭蕉とは、その人となりや作品が、日本趣味の極致に徹してゐるやうに思はれてゐる。西鶴でも近松でも、あるひは人丸でも定家でも、特種の文藝愛好者に欽崇されてゐるのだが、西行と芭蕉とは、その名聲が國民的であるらしい。この二人の性行は、日本人の心魂に觸れてゐるやうである。私なども、文學修業の極致は、かの二詩聖の心境に達することであるやうに、多年考へてゐた。

△この頃も、旅中つねに、「山家集」と「芭蕉全集」とを懐にして、秋草に圍まれた輕井澤の寓居で讀み、京阪のホテルで讀み、今も故郷の海岸の小樓で讀んでゐる。こんなにして二大詩集に親しんだ結果を云ふと、彼等の心境が解つたやうでもあり、解らないやうでもある。得るところがあつたやうでもあり、なかつたやうでもある。

△芭蕉の句にも、いくら考直しても詰らないと思はれる者が多いが、西行の和歌には、感心させられる者が極めて少くて、大抵は凡庸である。定家の「拾遺愚草」や實朝の「金槐集」の方が遙かに名歌に富んでゐる。雪月花や××の戀△△の戀といふやうな題詠的の和歌には、ことに詰らん者が多いが、そんな詰らない和歌を芭蕉などが屢々引用して推讃してゐる。文學者の崇古癖はむしろ滑稽である。

△芭蕉はさすがに傑れた詩人である。西行よりは遙かに詩人的天分に富んでゐる。しかし、私自身は詩作に巧みな芭蕉よりも詩作に拙い西行の氣持に共鳴を感じてゐる。自然に同化し、世俗から隱遁しようとしたところは、二聖相似てゐるやうであるが、非常に違つたところもあるのだ。

△「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休が茶に於ける、其貫道するものは一なり。しかも風雅に於ける、造化に從ひて四時を友とす。見るところ花に有らずと云ふことなし。思ふ所月に有らずと云ふことなし。思ひ花に有らざる時は夷狄に等し、心花に有らざる時は鳥獸に類ひす。夷狄を出で鳥獸を離れて、造化に從

ひ、造化に歸れとなり」と、芭蕉はその「卯辰紀行」に於て云つてゐる。彼れの心境はかうであつたのだらう。花に徹し月に徹してゐたのである。少くも徹しようとし、また徹したつもりであつた。西行も、彼れが生きてゐた時代の歌人の常套を脱しないで、月と花とを謳歌し、「願はくば花の下にて春死なむ」とか、「佛にはさくらの花をたてまつれ、わがのちの世を人とぶらはゞ」とか歌つてゐたが、彼れの心には、「風雅に從ひ造化に從ひ四時を友と」したゞけでは安んぜられない懷疑の焰が燃えてゐた。芭蕉の如き風流的樂天家ではなかつた。

△「無常」を題として作歌をしても、西行には、實朝や定家とは違つた深みをもつてゐた。云ひ廻しの巧さだけではない實感が出てゐる。「まぼろしの夢をうつゝに見る人は、目もあはさでやよをあかすらむ」の如き、技巧によつてつくられた歌ではない。天眞素朴の萬葉歌人などとは心境がまるで違つてゐる。風雅を主とした後世の歌人の歌ひ得られるものでもない。「おどろかむと思ふ心のあらばやは、長きねぶりの夢も覺むべく」など、彼れは、屢々驚かんことを望んでゐる。國木田獨歩が、「人生の不思議に驚かん」としたことが思出される。

△西行は胸に激情を潜めてゐた人らしい。それで、芭蕉が俳諧三昧に沒頭してゐた如く、あるひは紅葉が小說の文章を生命としてゐた如く、和歌に全心を注いでゐたのではないやうに思はれる。

△「寂しさ無くば憂からましと、西上人の詠み侍るは寂しさを主なるべし」と芭蕉は云つてゐるが、芭蕉は多數の門弟や崇拜者にちやほやされて賑かさうであつた。

△「日既に山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈を秉りては魍魎に是非を辨らす、斯く云へばとてひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隱さんとにはあらず。やや病身人に倦みて世を厭ひし人に似たり」云々といふ幻住庵記は、芭蕉作品中の名文で、彼れの心境がよく現はれてゐるが、これは、鴨長明の「方丈記」以來の、日本の文人

の常套的趣味で、その厭世情調は文章の綾のやうに感ぜられる。

△さびと云ひ、匂ひと云ひ、芭蕉の藝術に幽玄の味ひが附せられてゐるが、それは私には水中の月で、捉へられない。この頃頻繁に現はれる芭蕉批評を讀んでも解らない。

△先日京都の瓢亭で、獨りで靜かに、ここの茶料理なるものを味ひながら、殊更に古ぼけたまゝに舊態を維持してゐる狹い脆弱らしい簡素な部屋と、水の流れてゐる風流な庭を見て、芭蕉の句利休の茶の趣味はこれだなと思ふと、俄かに手頼りない感じがした。

△島崎藤村氏の「嵐」は、雜誌文學近來の逸品であるが、しかし、あの作品が若い批評家や作家をも非常に感激させ、極度に讃美されてゐるのは、私の意外とするところであつた。「家」や「新生」の波瀾ある生涯の記錄をよく味得したものにして、「嵐」の眞價がしみ〲と感ぜられるのだと、私は思つてゐる。

△「菊の香や奈良には古き佛達」私はこの句が好きであるが、「嵐」にはさういふ味ひがある。

△雜誌編輯者の組合が出來たさうだ。作家の組合に對して當然起るべきことであらう。近年作家は、以前に比べると、經濟的にも稍々豐かになり、世間的にも多少幅が利くやうになつたのだから、酬いられる所の少い編輯者の方では、心中穩かならぬもののあるのは當然である。流行作家が編輯者に對する暴慢な態度を時々耳にして、私なども時々にが〲しく思つてゐる。原稿料が不法にせり上げられるのも、雜誌社や編輯者の苦痛となるのであらう。しかし、十年くらゐ前までは、概して編輯者の方が威張つてゐた。大青[illegible]の編輯者には、我々は頭が上らなかつた。田舍の地主が小作人にいぢめられだしたのと同樣に、時世の變遷を私は感じてゐる。

△作家の方から、原稿料が多過ぎると主唱する者が現はれて、それを問題にして、氣にして騷ぐ世になつたのだから結

く。齋藤緑雨などが地下で聞いたらビツクリするだらう。日本の文學者は芭蕉や西行を祖先に持つてゐるほどあつて、今なほ無慾なのであらうか。そこへ行くと、歐米の作家は平然として業慾であるらしい。バアーナードショウの如き、社會主義を賣物にしながら、莫大な金を取つて、日本の流行作家などが足許へも寄りつけぬやうな贅澤な暮しをしてゐるらしいではないか。イバネスでもローランでもウエルスでも、皆んなさうであらう。

△私など物慾に累はされないやうに心掛けてゐるが、しかし、當然取れるものなら遠慮なく取つていゝと思つてゐる。金ばかり慾しがつて濫作するのは文壇の弊害であるが、いゝものを書いていゝ原稿料を取つていゝ生活をしようと心掛けるのは惡い考へではない。それが心のはげみにもなるのだ。私など廉い原稿料で百枚書くよりは、高い原稿料で二十枚書くやうな方針にしたいと思つてゐる。……藤村氏の「嵐」のやうな苦心の傑作に對しても、青二才の駄小說と同樣の原稿料が拂はれると假定したら、隨分不公平ではあるまいか。

△今田舍でこんな文壇的感想を、强いて書いてゐると、それが非常に自分の心に相應はしくないやうに感ぜられだした。「時評」などをやつて來たのが惡かつたのだが、この頃は生活は例の如く隱退的でありながら、「文壇」といふものが、濃厚に目さきにちらついていけない。「嵐」を讀んだ時には、文壇臭がないだけでもいゝと思つた。私は「東京驛」といふ小說を、輕井澤の陋居で、全心全力を注いで書きながら、文壇臭を帶びてゐるのにいや氣がして、續きが書きづらくなつてしまつた。文壇臭は私ばかりではないので、雜誌の小說や戲曲には、大抵その臭みがある。プロレタリア主義を抱持する人の創作や議論にも、その社會觀よりも、文壇臭紛々たるものが多い。……自から戒めざるべからず。(九月二十九日、故鄕の、薄暗いランプの側にて)

正宗氏の批評に答へ所懐を述ぶ

青野季吉

正宗白鳥氏は、四五ケ月前の本誌の文藝批評で、私の一文に痛烈な批評を加へられた。當時私はその批評を熟讀したが、どうしても腑に落ちない個所が二三あつたので、讀賣新聞でそれを述べておいた。すると正宗氏はまた、九月號の本誌の文藝時評で、拙著『解放の藝術』を中心にして、私を、氏の犀利な解剖の材料とされた。何よりもまづ私は氏に、一度ならず二度までも、一介の讀書生に過ぎない私ごときを問題にされたことを、感謝しなければならぬと思ふ。

九月號の批評では、前とちがつて、私といふものが全體として、氏の批評の對象とされてゐるので、私は前のよりも一層注意を深めて、讀んだ。注意を深めて讀んだと言ふよりも、一字一句頭の中へ刻みつけるやうにして、考へて行つたと言ふ方が正しいかも知れない。が、それにも拘らず、氏の力を籠めて論じてゐる一二點に、私はやはり服することが出來ないのを發見したし、解剖台上におかれた材料には、また材料としての解剖者の參考までに、一應言つておきたいこともある。そこで重ねてこゝに、氏の批評について若干の感想を述べることにした。——私は文章の技巧につたないから、行文の間に、あるひは先輩にたいする禮を失する場合があるかも知れない。しかし、直截をよろこぶ氏のことであるから、枝葉の言葉で、とがめ立てはされぬであらう。

氏はいつか、いつもの投げ棄てるやうな調子で、『理屈はどうにでもつく』と言つたことがあると、私は記憶してゐる。この一文の要點もやはり『理屈』になるが、氏によつてそんな風に片附けられてしまあないことを、私は心から願つてゐる。私の考へでは、理屈は決してどうにでもつけられるもので無く、一つの現象につく理屈は唯一つしか在り得ない。その唯一の理屈をつけるかつけないかだけの差があるばかりである。若しそうで無いならば、およそ科學の討究もあり得ないし、論議に何の意味もあり得ない。

氏はこの一文で私に關聯して、三つの『不思議』を數へてゐる。しかも、平生の氏に似合はず、その『不思議』を數へるのに、語勢荒きまでにムキになつてゐる割合に、それを解くことに餘り心を用ひてゐない。尠くとも私にはそう考へられた。まさか氏に、つまらぬ成心のあるわけはないが、どうしたわけであらうか。

それはそれとして、氏の指摘した三つの『不思議』の概要は、かうである。

正宗氏によると、私（靑野）には、『人類發生以來、男女とも靑年時代には必ず多少は有つてゐる筈の詩を缺いでゐる。』その『天性藝術慾の瀕いらしい』私、しかも『その所論を押進めると、どうしても、文學無用論に走らねばならない』私は、氏によると、『無用の長物である筈の文學などには唾を引掛けて、自己の天性に適した他の方面へ向つたらいゝやうに思はれる。』それだのに私の『さう痛感しないのは、不思議である。』これが氏の不思議の第一である。

更に語をついで氏は言ふ。『諸般の生產事業を起すに當つて、資本家が頭を使つていろ／＼劃策して、勞働者を驅使して激勞させ、利益の大部分を自己の懷中に收めるのは陋劣であると憤つてゐる氏等（靑野等）が、藝術運動の易きにつくのはどういふ譯であるか。』と。これが氏の不思議の第二である。

拙著『解放の藝術』に、私どもの求むる藝術、少くとも今後起るべき藝術は、かりにも階級的麻睡に役立つものであつてはならず、階級（無產階級）の覺醒に役立つものでなければならぬ、と言ふ意味のことを述べた個所がある。（私はいま旅中でその文章を書いてゐるので、拙著を持合せず、そのまゝの言葉を引いて來れないのを、遺憾に思ふ。）正宗氏の不思議の第三は、この主張に關係したものである。氏によると、『由來藝術は有閑時の所產』であり、『古來の傑れたる藝術には多少麻睡的文字の含まれてゐないものは、絕無である。』『いろ／＼な苦悶も、藝術で取扱ふ時には麻睡的魅力があるのだ。』『ストリンドベリーの男女暗鬪の悲劇を見ても、チエホフの淋しい芝居を見ても、あるひは、トルラーやカイゼルの傑作を見ても、自己の影周圍の姿をそこに見て暗然として溜息を吐いても、觀客の心は、鍊鍊した階級鬪爭の感を起させられ、イヲ／＼させられるのではなくつて、藝術的感激――麻睡的力を感ぜしめられる』のではないか、と言ふのである。

もちろん正宗氏の批評は、この三點のみに限られたものでなく、そこにはまだ示唆的に書きとめられた點もあり、それはい

ろ／＼なことを考へさせるものであるが、しかも氏が高山樗牛や二葉亭などの例を引いて來て、言葉を强めて說いてゐるのは、この三點である。そしてまた、私が感想を書き付けなくてはをれなくなつたり、平素の所懷を事のついでに述べてをき度くなつたりしたのも、この三點に關してである。

誰でも分る通り、氏の第一の不思議は、一般的の問題にも觸れてゐるが、ヨリ多く私の氣性や、行動を中心としたものである。それに反して、藝術運動と實際運動に言及した氏の第二の不思議と、藝術の『麻痺』性を取扱つた第三の不思議とは、問題を一般化したものである。さうして言ふまでも無く、我々の文藝運動にとつても、是非とも明らかにしたければならず、理論的にも徹底させておかねばならぬのは、一般化された問題である。そこで私は先づ、第二第三の正宗氏の不思議について、私の感想や異議や解釋を述べ、最後に第一の不思議に關聯して、私の所懷をのべることにする。それがまた順序でもあらうと思ふ。

正宗氏の第二の不思議は、既にもちよつと示しておいた通り、實際運動をすてゝ藝術運動の易きにつくのはどういふ譯か、と言ふのである。この一節へ來たとき、すぐ私の頭へ浮んで來たことは、これまで數年來、いろいろさまざまな人々から、いろいろさまざまな言葉によつて、我々及び我々の運動に、それと同じ非難が加へられて來たといふ事實である。我々の仕事に反對したり、疑惑を投げたりした文藝家は、ほとんど一人の例外もなく、必らず一度はその非難を口にしたと言つてよいであらう。しかし今日では、それらの文藝家の一部も、かつては文藝家と聲を揃へて我々の運動にその非難を浴せた謂ゆる實際運動家の大部分も、我々の運動の意義を認めて來て居る。ところがいま又、正宗氏から、しかも從來よりは、いかにも簡單な、吐きすてるやうな言葉で、その同じ非難を聞くのである。まことに寸毫もちがはない非難を聞くのである。奇異の感を抱かざるを得ない。正宗氏はさきに本紙の文藝時評で、口を極めて『私批評』の必要を說き、私の文藝批評を非難して、誰でも言ひそうなことを言つてゐるに過ぎぬと喝破した。當時私は、その評語の大部分に不滿ではあつたが、多少胸にこたへたものがあり、努力を刺戟された。が、いま正宗氏自身の批評はどうであるか。恐らく正宗氏は、これまで相當長い間我々の運動に加へられたその非難の如きは、目を通してもゐはしないであらう。さうして正宗氏の右の不思議――批評は、氏の『私批評』であるに相違ないであらう。が、その『私批評』が、

毫も他の多くの文藝家の評語と異ひがないとしたら、奇怪な次第ではあるまいか。さうしてこの奇怪な現象は、別個の觀察點からの解釋を要求するものではあるまいか。

私はこれまで繰返し繰返し、實際運動と藝術運動について、說いて來た。だからいまさら、それを繰返し度くない。しかし正宗氏から、あゝ言ふ風に批評を投げつけられると、いまでもやはり私の理論を動し難いものと信じてゐる私は、せめて大略にせよそれを繰返しておかなければならぬ。

實際運動と文藝運動に關聯したこの非難は、一つの極く簡單な、素朴な常識に基くものである。由來常識と言ふものは、一つの現象か、ものゝ一端を捉へて、凡てを組立ててしまふ作用である。太陽は地球を廻つてゐると考へ、トラホームをもつて來て偶々治つたからと言つて、A溫泉は凡ての眼病に利くとするのが、常識である。そこで難者の常識は、この問題で如何なる一端を捉へたのであらうか。我々と思想を同じくする人々は確かに、今日の社會惡の根底は經濟組織に在る、と說いてゐる。難者の常識の捉へた一端は、正に、これなのである。この一端さへ捉へてしまへば、あとは常識の支配で安々と片がつく。然らば、その社會惡の根底たる經濟組織を目標とする實際運動につかないで、藝術運動の易きにつくのはどういふ譯であるか、難者の常識がかう詰めかけて來るのは、機械作用よりも確實である。しかし常識は遂に常識であつて、太陽は決して地球を廻つてゐるのでもなければ、A溫泉は風眼にもそこひにも利くわけではない。

正宗氏のこの問題にたいする批評が、結局常識に基いたものに過ぎないと言ふ證據を氏の言葉から示さう。氏は我々を、『諸種の生産事業を起すに當つて、資本家が頭を使つていろ／＼畫策して、勞働者を驅逐して激勞させ、利益の大部分を自己の懷中に收めるのは陋劣であると憤つてゐる』ものとして、藝術運動云々を立言してゐるのである。私は、決して他の言葉尻を捉へて、問題とする卑劣を私に許し度くはない。こゝに引用した一句は實に、正宗氏の近代社會思想、近代社會主義理論にたいする全理解を象徵してゐるものであるから、こゝに引例としたのである。その理解のいかに素朴で、いかに常識的であることよ。

我々の理論が、正宗氏の言ふやうに單純であるならば、そうしてまた、現實の社會がそんな單純な理論で取扱はれるほど、單純に出來上つてゐるものならば、氏の忠告を待つまでもなく、藝術運動などの『易き』につかないで、その不都合な貪婪な資本家を片つ端から片づけて行つたが、たしかに早道である。社會惡の根底たる經濟組織以外に、何の相關的な力もないほど、こ

の現實の社會が單純に出來てゐるならば、その無緣無蒸の經濟組織に一擧を加へる方が、たしかに有効でもあり、否、『易き』ことでもある。しかし不幸にも、社會はそんなに單純に出來上つてはゐないのである。

我々と認識と思想とを同じくする人々は、確かに、今日の社會惡の根底は經濟組織にある、と說いてゐる。それに間違ひはない。しかし我々は、その經濟組織が無緣無蒸に露出してゐるとも、個々の資本家の行爲が凡ての始めであつて、終りであるとも、決して說いてゐない。否、反對に、そんな抽象社會は現實に存在しない、と說いてゐるのである。現實の社會には、その經濟組織を、或は順當に發達させ、或はそれを固定させるための、政治や××と言ふが如き物理力があり、藝術や宗教と言ふが如き精神力がある。それらが相倚り相補つて、すなはち互に相關々係をつくつて、一個の統一ある生きた社會をつくつてゐる。そう我々は說いて居り、それがまた事實である。たゞいかなる政治や××の組織も、藝術、宗教、教育の系統も、經濟組織に相應してでなければあり得ないと言ふ意味で、社會惡の根底は經濟組織だ、と說くのである。そうして右の諸の力の相關關係の最も完成されたる形をとつてゐるのが、現代の資本主義社會であり、その完成されたる組織をもつて、今や行詰つた資本主義經濟組織を『永久に』維持しようと焦慮してゐるところから、諸の現代の悲劇が生れる。我々はそう說くのである。これが我々の、近代社會主義思想の、資本主義社會に對する解剖理論である。

これと表裏して、我々の理論には、他の一面があり、現實の社會には、その理論の發生する一面の現象がある。それは資本主義の胎內に於ける、プロレタリアートの發生、その發生の必然に齎來すところの、階級鬪爭の理論である。資本主義の胎內において必然に、而して現に我々の肉眼で見るとうりに、プロレタリアの大衆が發生する。この階級は、その成熟の一定段階に於いて、先づ經濟的に鬪爭を始める。そうして更にその進んだ段階において、その經濟組織を取かこんでゐる物理的、精神的の力に向つて鬪爭をすゝめる。謂ゆるプロレタリアートの政治鬪爭、文化(藝術)鬪爭が、それである。かくて鬪爭は、そのキヤタストロフにおいて、それらの物理的、精神的の力を他の物理的、精神的の力に代へ、經濟の組織を別個の軌道へと意識的に進める。そして經濟の組織の徐々の變化につれて、物理的、精神的の力の形態もそれに應じて變化し、或るものが止揚され、或ものが創られる。現在のロシアは、この過程の初期の段階にあると見てよい。これが我々の鬪爭、建設の理論である。

この現實、この理論から、――正宗氏の言ふやうな『藝術運動の易きにつくのはどういふ譯か。』といふ疑問が、易々と出て來るであらうか。否。そこから出て來るものは唯一つ、支配階級の物理的精神的の諸の力の現れにたいして、いたるところその內部からの闘爭をつよめ、その成果を集積して、その全體の崩壞を早めなければならぬと言ふ、動かすべからざる結論である。これらの闘爭は或は政治闘爭と呼ばれ、第三戰線の闘爭と呼ばれるが、つまり全體としての實際運動を形成る要素に外ならぬ。しかもそれらの物理力精神力の組織（謂ゆる上部建築）が、いかに强力な作用を持つてゐるかを痛感したものは、それらの運動の意義の重大さを決して、見誤ることはないのである。もしこれを一介の讀書生たる私の獨斷であると言ふならば、私は、例へばツアーリズムとの闘爭期に於けるロシアについて、それらの闘爭の意義を高調した言說、その闘爭の生々した事實を、いくらでも示すことが出來る。紹介する人もなくその機關もなくて、よしそれがその當時日本に紹介されなかつたとしても、存在しなかつたと言ふ證據にはならない。

私がいまこの論點に觸れて、こゝに述べて來たことは、社會思想の入門書の一頁をひもとけば分ることである。それを事新しく說くことは決して愉快ではなかつたが、正宗氏の質疑の構へ方が、我々の不在をうばつて、我々に挑すると言つた行き方なので、正宗氏同樣に、皮肉や反語で間に會せておくことがイヤとすれば（私は決してそれをしたくない）、野暮でも反復でも、せめて我々の理論と實際の輪廓だけでも、一應述べねばならぬ位置におかれたのである。

かゝる位置に私がおかれたことは、正宗氏がかつて社會思想の入門書の一頁もひもとかぬことを證するものとして、よいであらう。それは物臭からか、意識的にか、私は知らない。がとにかく、今日の社會機構の解剖を企てた人間努力の累積にたいして、そういふ態度を抱くと言ふこと、且つ氏の私批評があやしくも、一聯の人々の年來の批評と符節を合してゐるといふこと、それは然るべき理由――社會的、客觀的の理由のあることでなければならぬ。女神ミネルバがすつかり武裝してジュピターの大神の頭の中から飛び出すやうなことは、神話の世界の出來事である。

正宗氏の第三の不思議――批評に移る。私はこの論點を繰返して讀んで見て、氏ほどの犀利な眼光と、聰明な頭腦をもつて、して、いかにも性急に、いかにもムキになつて、何故このやうにまで、獨斷と、勝手な抽象をやらなければならなかつたのか、

と、肯はざるを得なかつた。先づ第一に、氏は、『由來藝術は有閑時の所産であつて』と無造作に言ひ放ち、原始時代とか野蠻人とか言ふ類のことさへ持ち出してゐる。しかしこれは氏の獨斷である。近代の科學の探究によると、由來藝術は有閑時の所産でも何でもない。原始時代には、藝術は勞働歌として、勞働の筋肉的リズムとして發生して來た。藝術が有閑時の所産となり、有閑者の專有となつたのは、社會に身分別が出來てからのことである。これも憶說であつて定說でないと言ふかも知れぬ。が、それは尠くとも、正宗氏の獨斷よりは、謙虚な檢討と探索とを經た憶說である。

しかしそれは比較的枝葉の問題である。大切なのは、而して氏が力を籠めて說いてゐるのは、藝術の『麻睡力』についての論點である。氏は私が『解放の藝術』の中で『階級的麻睡』云云と言つてゐるのから、性急に『麻睡』といふ言葉だけ拔きとつて來て、いろんな例を引き來り、『古來の傑れた藝術には多少麻睡的文字の含まれてゐないものは絕無である』とか、悲劇の觀客の心を捉へる『藝術的感激——麻睡的力』とか、等、等を說いてゐる。が、もう少し心を落付けてもらひたい。私は決して、古來の傑れた藝術に麻睡的文字が含まれてゐないとも說きはしないし、藝術的感激——麻睡的力を否定したことも曾つてない。感激、麻睡、興奮、さういふ一聯の心的狀態を與へることなしに、藝術があり得ないのは、言ふまでもないことである。が、その心的狀態は、何も彼も忘れてうつとりとなると言ふのと同じではない。先づ、感激、麻睡、興奮がある。それを通じて、讀者觀者は、或はAの事柄を忘れさせられ、或はBの事實の前に生きた肉眼を開く。しかも近代の藝術は、ますます讀者觀者の心に、この過程を濃厚にするのである。

正宗氏はストリンドベリーやチエホフ、トルラー、カイゼルの名をあげて、それらの人々の傑作を見ても、『觀客の心は、棘棘した階級鬪爭の感を起させられ、イラ／＼させられるのではなくて、藝術的感激——麻睡的力を感ぜしめられるのである。』と言ふ。この場合の正宗氏は、藝術的感激——麻睡的力を說くのに急がしくて、觀客の心の上に起る過程を少しも解剖してゐない。正宗氏の擧げた人だちの劇について言つて見よう。我々は、ストリンドベリーやチエホフの優れた藝術に、先づ感激させられ、醉はされる。そしてそれを通じて男女の永遠の鬪爭の姿や、絕望的なインテリゲンチヤの生活に、どうしても眼を閉ぢて居れなくなる。トルラーの『群衆人間』の有つ強い力に先づ感激させられる。その感激した心は、どんなに逃げようとしたつて、あの群衆對個人の呼吸のつまるやうな問題から、逃げ

ることが出來ない。カイゼルの『朝から夜中まで』の優れた力は、觀客の心をしびれるまでに捉へないではおかないし、その捉へた觀客の心の眼に、マンモンの恐ろしい支配の事實を、燒き付けないではおかないのである。イプセンの『人形の家』が始めてストックホルムで上演された時、劇の進行と共に醉されて行つた觀客は、最後の幕が下りると、雪崩を打つて街頭に出で、婦人解放の大きなセンセーションを起したと聞いてゐる。

私はこれまで一二度書いたことがあるが、あのゲエリングの表現派劇『海戰』が始めて築地小劇場で上演された時、私はその魅力に打たれると共に、その興奮した私の心は、戰爭及び××にたいする抑へ切れぬ憎惡に滿たされたのを覺えてゐる。偶然私の傍に居た秋田雨雀氏その他の知り合ひも、顏の色に出るまで激動してゐた。そして私と同じ憎惡を新らたに强くせしめられたと言つてゐた。なほこれは後でまた觸れることであるが、私自身、これから實人生を知らうと言ふ時代に、早くもその麻睡にかゝつたのは、故獨步の晩年の小說、正宗氏の小說であつた。私はその感激――麻睡を緣として、人生の穢い現實の一面を覗、何とも言へぬ醒めさめした氣持を、若くして抱いた。たしかに現實の一面に內視を開かせられたのである。

これが正宗氏の一口に『藝術的感激――麻睡力』として、すべてを說明させてしまつてゐるものゝ實際の內容である。ここで私は、我々の要求する藝術、少くとも起るべき藝術は、その麻睡力によつて階級的の意識をねむらせるやうなものであつてはならず、反對に階級の意識を覺醒させるものでなくてはならぬと說いたのである。またその藝術には、階級的の意識に齒をそそぐやうな、享樂と麻睡が絡つてゐてはいけない、とも說いたのである。これに何の無理があらうか。このどこに正宗氏の齒々しい口調で言ふやうな『未練らしい言譯』があらうか。それよりも『麻睡』と言ふ言葉だけ取出して來て、獨斷や何かで押しつけて、一切觀るべきものに振向きもしない氏こそ、氏自身の齒々しい言葉を浴せらるべき對象ではないか。

我々の藝術上の主張となつてゐるもの、したがつて『解放の藝術』の提說の基礎となつてゐるものは、今日の藝術のほとんどすべては、直接間接に、いくたの形態と經路とを執つて、階級的支配の用具となつて居り、被支配階級を麻痺させるにとどまるものである。その支配階級の藝術に對抗して、被支配階級の藝術を築き上げなければならぬ、而してその藝術は、その持つ感激力によつて、被支配階級の意識を目醒めしめるものでなければならぬ、と言ふに在る。これがその基礎の基礎であり、骨組の骨組である。正宗氏が『解放の藝術』を問題にする以

た、後進にたいする少しばかりの親切があれば、否、それがなくとも、大衆的雜誌の文藝時評を書くといふ責任だけからでも、その主張の根本に向つて、皮肉や獨斷や面倒臭さそうな言ひつ放しでなく、尠くとも相手が考究の手がゝりを見出し得る程度に、檢討し、批評を下して然るべきではないか。

私はいま問題を論點だけに限つて取扱つて來たが、その麻睡說に現はれた正宗氏の藝術上の立場は、かの謂ゆる『藝術のための藝術』の立場と、紙一重の差か乃至は同一のものである。私は必らずしも、實際上の正宗氏の立場が、そうであるとは言はない。(近來は、次第に藝術のための藝術の方へ傾いて來てゐるやうではあるが。)が、尠くとも、右の言說に現はれたところではそうである。こゝでも亦私は、從來かなり長い間、我々の藝術運動に向つて、對抗的に高調された主張を想ひ出さないではおれない。それはたつた今、正宗氏のそれが、紙一重の差か乃至は同一だと言つた、藝術のための藝術の主張である。この恐らくは偶然であらう一致、これも亦別個の觀點からの說明を要する現象である。たゞ偶然として、個人の心理からのみ觀たのでは、解釋のつかぬ現象である。

私は正宗氏によつて一般化された問題をこれまで內在的に觀て來た。そして別個の觀點から取扱ふべきものとして、二つの問題を殘して來た。一つは、氏が現實の社會機構の解剖に、及びその解剖のための人間努力の累積に、無視的の態度を抱き、且つ氏の私批評が、偶くも一聯の人々の年來の批評と符節を合してゐると言ふ事實であり、他は、氏が、階級文學の主張に對抗して表明した藝術上の立場が、やはり以前にそれに對抗して高調された藝術上の主張と一致してゐると言ふ、たつた今指摘した事實である。これから別個の觀點に立つて、この事實を觀よう。現象の現はれて來たゞけを觀てゐないで、その發生した客觀的、社會的の根本を究めることは、その現象の把握を完全にする所以であるし、またこの仕事をすることが、この一文を單なる反駁文に終らしめないで、多少とも意義を加へる所以だと思ふからである。

正宗氏は並ならぬ強い個性をもつてゐる人である。だから氏の言說や行動が、その個性のニユアンスによつて、色づけられることは爭はれない。それだからと言つて、氏のすべての動きが、その個性によつて決定されると考へてはならない。もしそのすべてが個性の光源から發するものならば、氏のその個性的な行動が、恰も他の一聯の人々の個性的な行動と、一部分にせよ、符節を合してゐると言ふ現象は、どうして說明し得るか。

諸猶を用ひなければ説明がつかない。——[illegible]

正宗氏の社會機構にたいする無視的態度は、氏のニヒリズム的氣分の現はれに相違ないが、そしてそのニヒリズム的氣分は勿論、氏の個性の濃厚なニュアンスをもつてゐるが、それは決して正宗氏の個性が生み出したものでなく、日本の知識階級の意識の一つの反映に外ならない。思想的に言ふならば、知識階級の自由主義的思想の一つの現はれに外ならない。自由主義的思想の基調は、個人主義的の精神であつて、その精神を押し進めて行けば、政治上では民主々義となり、哲學的には個人對社會の對抗觀念となり、更に個人の獨存思想ともなる。ニヒリズムがこゝから派を引いてゐることは、容易に分るであらう。

氏の氣分の根底が、知識階級の自由主義的思想の一つの現れだといふことは、その實際運動對藝術運動の批評にも、藝術のための藝術の主張にも、現はれてゐる。無産階級のおかれた實際上の無自由と、それの由つて來るところが把握されず、把握しようともせず、資本家が悪るければそれを倒すのが第一で、藝術運動などはいらぬことだと片付けてしまふところに、空疎な自由の肯定が姿を見せてゐる。藝術は藝術的感激を味はせるもので、その他の何物でもないと說くところに、階級對立の現實の社會にかて、いづれかの階級の支配の外におかれる、社會的活動があり得ると云ふ、知識階級のイデオロギーが顔を出してゐる。それらが知識階級のイデオロギーの反映であり、その自由主義的思想の現はれであるが故に、正宗氏の強い個性あるに拘らず、他の知識階級者の一聯の人々と、同じことを言ひ出すの矛盾が生れるのである。

いつたい知識階級は、ブルジョアジーと殆んど同時に發生した階級であつて、新興ブルジョアジーが封建的政治勢力と戰ふ思想的武器が、自由主義・民主々義であつた時、知識階級が封建的浪曼的精神と戰ふ武器は、現實的精神、自然主義であつた。この自由主義、民主々義、現實的精神、自然主義は、その現はれた分野によつてそれぞれの特殊に基いて、名前こそ異つてゐるが、實は同じものゝ現はれである。そしてそれは資本主義の早期と云ふ經濟的基礎を反映したものに外ならなかつたのである。當時の自然主義の洗禮を受けた文藝家で、今日時に政治の批評などをする人があるが、その凡てが民主々義の理想と云ふか、又は其弊と云つたものを、無意識的に腹に蓄へてゐて、それに依つてものを言つてゐるのを見る。これが右の事實の一つの實證と言つてよい。

正宗氏は言ふまでもなく知識階級に屬する人で、しかも自然主義の運動の中から力強く起き上つて來た人である。自由主義

思想が深く氏の中に潜んで居り、それが氏の個性の鈍重を加へられて、ニヒリスチックとなつたとしても、何も不思議でなく、寧ろ當然である。

自由主義はその發生において、かくブルジョアジーのものであり、その後の發展において、ブルジョアジーは、知識階級をも含めての中産階級を、無産階級から切離すために、その階級の間に自由主義的思想を、意識的に植付けもしたが、資本主義のおかれた段階も次第に變化し、知識階級の經濟的地位も動搖し來り、したがつて自由主義もそのまゝではをらなかつた。その內部の分裂がやつて來て、一部はプロレタリアートのイデオロギーと合致し、一部は次第に保守的な角度をとつてまたブルジョアジーのそれと結合し、殘りの僅かな一部が、動搖的な、しかし自ら高しと言つた風格で、自由主義を守りつゞけて來たが、それも次第にブルジョアジーの保守思想へ附着して行く傾向を示してゐると云ふのが、現在である。政治界や教學界で、往年の自由主義者が、いまどうなつてゐるかを觀ても、またプロレタリア運動の內部へ、どれだけ多くの舊い知識階級の自由主義者が合體してゐるかを觀ても、それが明白に分る。特に近年の文壇では、その過程が鮮やかである。プロレタリアの藝術運動を最初に形ち造るものゝ中、自由主義を通過した人々であつたし、最近爆發的にふえたこの運動の支持者の殆んど凡ても、自然主義運動の洗禮を眞面目に受けた人々である。さうかと思ふと、自然主義運動を一應は通過し、又は、その運動の中から立ち上つた人でも、すつかりブルジョアジーの保守思想と密着したものもある。

正宗氏は、こゝにも氏の個性が働いて、深く腹に入れた自由主義を持ちつゞけ、獨り在ると云つた態度で押し通し、ニヒリズムの氣分を發散させて、適度のベンチレーションを行つて來たが、最近、それが僅かながら保守の方へと傾いて行つた……と觀察して間違ひであらうか。

かう觀察して始めて、曩に私の殘した問題を說く手がゝりが得られると思ふ。

私が最後へ殘しておいた問題、正宗氏の第一の『不思議』即ち私の稟性や行動についての批評に聯關して、私の所懷を述べてもよい個所へ、もうやつて來た。私は激情を交へることなく、あからさまに語るであらう。それが解剖者の參考には、一ばんよきことでもあるであらう。

正宗氏は、私の文章が骨ばかりで肉がなく、所論が單調であると言ふ。まさにその通りである。私には一面に激情性があ

る。私は筆を手にするや、意識的にそれを抑へることに努力する。それからまた、內容の熟しない文字を雜然とならべ、多岐の論點に觸れて遂に何を言つてゐるのか分らぬ文章が、世上目に餘るほど多いので、簡單なことでもよいから考へぬいたことを、平明に書き下ろそうと心掛けてゐる。それらが幾分、そこに作用してゐるのかとも思ふ。が、天稟の資質に乏しいことは、何としても恥ぢ入るより外はない。

私には『人類發生以來、男女とも青年時代には必らず多少は有つてゐる筈の詩を缺いでゐるやうだ。』と正宗氏は言ふ。氏は、新らしく物を書き出す人間は、みな若き青年男女だと、頭から定めてかゝつてゐるのでは無からうか。齡不惑に近い私に、青年男女の詩があつたら、それこそ不可思議である。

が、私は神仙譚にでもあるやうに、半白の頭をして、母の體から出た奇兒ででもあつたらうか。しばらく過去を物語ることを許して貰ひ度い。

私は記憶力も定らぬ中に、兩親を失つてしまつた。そうして物心ついた私の肉眼に映つたものは、衰亡した封建的中產階級の有樣と、大勢の兄姉の先途を思ひ惱んでゐる姿と、唯一つ溫き寢床であつた乳母の家の極貧とであつた。乳母は間もなく業病で、自らくびれて死んでしまひ、愛する一人の妹は、小學を卒へると海の向ふへ旅立つてしまつた。小青年時の私は、何一つ明るいものを見ることが出來なかつた。中學の半ば頃、その私を捉へたものは社會主義思想と、自然主義文學とであつた。社會主義思想は一二年にしてすてられた。が自然主義文學は恐ろしい魔睡力をもつて私に迫つた。そうしてそれによつて見せられたものは、廣い世間の現實を支配する醜い姿であつた。淋しい人間の生活の內容であつた。暗く、冷いのは私の家のみではなかつた。中學を卒業すると、私は田舍教師として身を立てて行かうとして、多少の希望を抱いて、越後の片田舍に教師となつた。そこに觀たものは何であつたか。村の人だちの貧乏と、その子供の運命的におかれた不幸とであつた。私は、酒に親しみ、極道に入つた。そして益々深く私を捉へて來た自然主義文學は、私の胸に虛無的の氣持さへ呼び起した。私は二度も死を決した。そのたびに友達に支へられた。義兄は、せめてその私の心持を轉換させるために、ワセダに入れてくれた。私はやはり文學を選んだ。しかし文學を學ぶのではなかつた。酒と極道との止む時はなかつた。しかし酒や極道を樂しむのではなかつた。虛無的な氣持はつのるばかりであつた。そしてそのまま學校を出て、一二の新聞社につとめた。しばらく夢中に、機械的に、働いてゐる間に、そこでも亦何を見たか。こんどはこ

の小さな社會の呼吸のつまるやうなからくりではなかつたか。

その間に次第に消散し、意識的にも退治して行つたのは、文學的迷妄であつた。またそれを助けてくれたのは、社會の經濟的機構の研究、社會主義の思想であつた。私の心は始めて落付いた。文學的迷妄は跡方もなく消えてしまつて、たゞ社會の組織を凝視した。習慣の力は恐ろしいもので、それでもまだ小說を完全に手から離しはしなかつた。虛無的な氣持は依然として消えない。私は自分と戰ひつゝ、社會運動の一隅にも入つた。――かうした私には『人類發生以來、男女共青年時代には必ず多少とも有つてゐる筈の詩』を、生長させる機會も、發散させる氣持の餘裕もなかつた。私は決して奇兒として、母の體から生れて來たのではなかつたが。

私はずいぶん長い間、文學をすててゐた。それを再び問題にするやうになつたのは、社會思想の方の考へが、多少とも深められていつて、社會の上層建築の實相、それにたいする鬪爭の意義を、知つてからであつた。私は文學の恐ろしい麻痺力を人一倍、否、生命を危くするまでに經驗してゐた。それだけにその實相をまざまざと感ぜられ、それにたいする鬪爭の意義を重大視した。私は長くすてゝゐた文學を再び問題にし、貧しい力の一部をその鬪爭に割いた。――私はかつて私の半生の內面史は、虛無思想との鬪爭史であると書いたことがある。最初これの萠芽を植付けてくれたものは、青年時の早期に瞬間も手を離さなかつた故獨歩の藝術であつた。そしてそれを仕上げてくれたものは正宗氏その人の藝術に外ならなかつた。青年時の中期晩期に、いかに私は、正宗氏の藝術から得た感激によつて、社會と人生を眺め、これと抵抗しながらも虛無的な氣持を深めて行つたか。そして長き隔りの後に、再び文學を問題にして來た時、私の目標としたところは、正宗氏をもふくめてブルヂヨアジーの文學の崩壞を早め、新興階級の文學を育てることによつて、鬪爭を激化することであつた。私はいまかく、正宗氏と語を交へて、舊師に矛を向け、私の長かつた過去と戰つてゐるといふ、一種の言ひしれぬ感に打たれざるを得ない。

若し私が、藝術運動こそ社會を變更する唯一の仕事だといふ如き暴論を吐いたならば、同志よ、社會の苦しめる人々よ、私の體に石を投げよ。私が果して、藝術を論じて我事終れりとしてゐるのであれば、同志よ、世の苦しめる人々よ、先づ來つて私を鞭打て。『男子一代の事業を文學以外に求める氣はないか』と正宗氏は言ふ。私には幸にしてそんな個人主義的なヒロイズムの匂ひのする氣持は抱けないのである。私はたゞ無產階級解放の階級的な大事業の一兵卒として、最も有効に働けるところ

に場面をえらんで、そこで働いて倒れゝばいゝのである。働く場面は、事實の發展と、事情とによつてどう變るかも知れぬ。大切なのは場面ではない。いかにその場面で力をつくして働くかである。謂ゆる第一線を選んだとて、怠けてゐて何になるか。

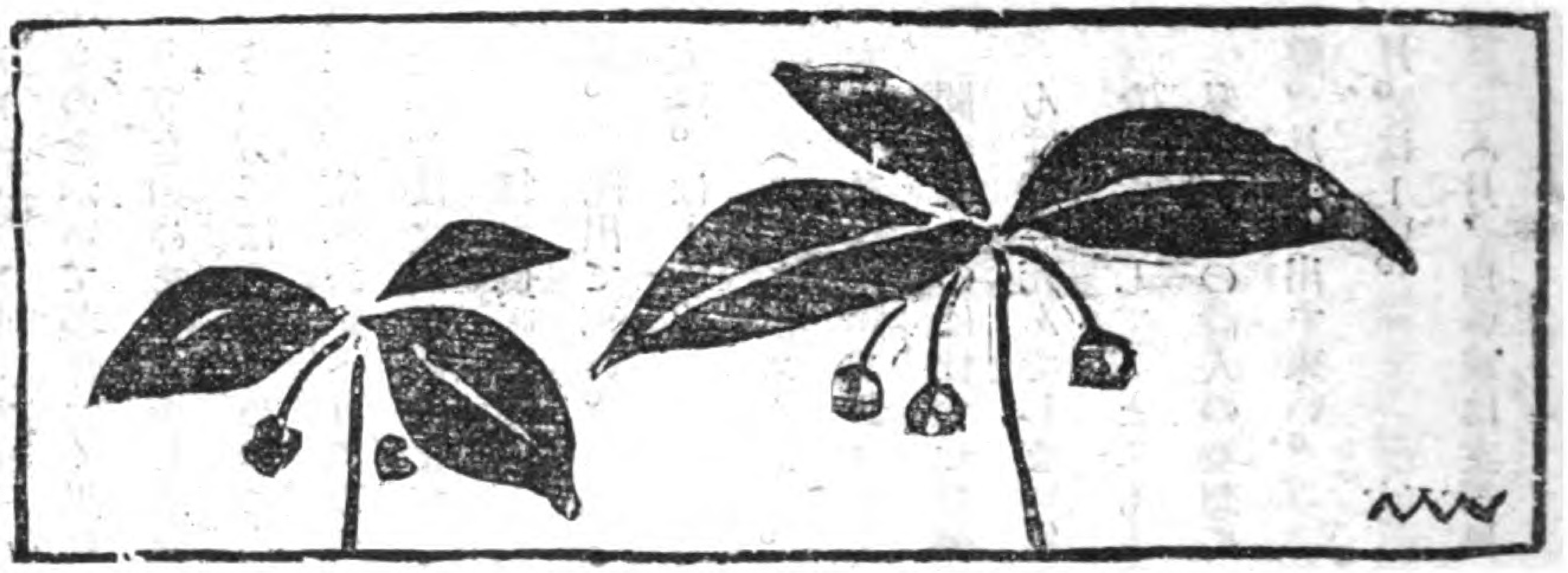
正宗氏は、『未練らしく』とか、『物欲しげな』とか、氏の氣持だけを滿足させればいゝらしい棘々しい言葉を使役して、批評を進めてゐる。文壇の名聲に未練がましいとか、虛名に物欲しげなとか言ふのであらう。が、それは、かつて名聲にあこがれ、虛名を求めて、それを得た人の狹い、かなり見苦しい當推量である。人間の多くの心の中には、もつと廣々とした、もつとさわやかな心もあるのだ。

名聲に未練があり、虛名を欲しくば、何を苦しんで、現代に叛き、現代の組織の中にあつて、到底勝利の見込もない闘爭を選んで、そのためにあくせくするのか。名聲や虛名は、現代に順應した仕事の中にごろ〱してゐる。酬ひらるゝ所常にうすく、病臥すれば藥石は愚か、米鹽の資にも事を缺き、十五年一日として健康な容姿を見せぬ妻に滿足な醫療も與へられず、數月の勞苦によつて譯書を出せば、直ちに發賣を禁止せらるゝ身に、何の名聲ぞや。何の虛名ぞや。

いまでこそ無產者の藝術運動も陽の光りの下にあるが、一度び極端な反動の時期が來り、印刷屋に封ぜられ、發表機關にボイコツトされたら、底ひも知れぬ地下に沈んで、再生のために人知れぬ勞苦を味はねばならぬ。そして物事の現はれのみを見る人々によつて、無產者文藝亡びたりと嘲られねばならぬ。そこに何の名利ぞや。何の喝采ぞや。

私は淺情を交へずと誓ひながら、いさゝか平靜を濁したかも知れぬ。しかしこゝに書き記したことは、誇さずと雖も、私の平素の所懷である。

私の立場を多少とも明らかにし、所懷を述べる機會を與へてくれたことは、正宗氏に感謝しなければならぬ。(二六・九・八)



生命の王（一幕物）

武者小路實篤

登場人物　いろ〳〵。澤山。

（黒幕の前。作者登場）

作者。作者が出しやばると云ふのは甚だ面白くないことで御座いますが、舞台が出來上るのにまだ十分位いかゝるさうで、もう時間が來ております。それで十分程しやべらして戴きます。私は芝居をかくのが道樂ですが、舞台の規則なぞと云ふものはまるで知らないので、たゞ面白ければいゝと思つてゐるのです。しかし面白いものをかいて皆さんと一緒になつて夢中になつてよろこぶと云ふことは中々むづかしいことで、私もさう云ふものをいつかかきたいと思つて十何年心がけてゐるのですが、どうもうまくかけないのです。今度のものは、自分では少しは面白いかと思つてゐるのですが、あてになりません。皆さんに見ていたゞいてわるい處はなほし、そして一つ面白い芝居をつくり上げて、皆さんと一緒によろこびたいと思つゝゐるのです。もし私のがものになつておりませんでしたら、どうかど

なたでもよろしいから一つうんと面白いものをつくつて、日本人は勿論、全世界の人間のこらずを、よろこばすやうなものをかいて戴きたく思ひます。私の力は足りないかも知れませんが、皆さんの力を私は見かぎりたくないのです。もうぢき始めます。少し馬鹿々々しい出鱈目な所もありますが、しばらく御辛抱を願ひます。最後まで辛抱づよく見て下さる方には何のためにこんなものをかいたか、おわかりになるだらうと思ひます。それでもおわかりになりませんでしたら、家へおかへりになつて三日程お考へ下さるとわかるだらうと思ひます。皆さまは賢い方ですから。（鈴がなる）それでは之から始めます。

（舞台眞暗）

聲。太陽出て來い。

太陽。はーい。

（急にあかるくなり。太陽赤の衣を着、黑の衣の星を五六人つれて登場皆男。）

太陽。私は太陽であります。本當の太陽には耳も言葉もありません。たゞ恐ろしいうなり聲だけであります。人間には聞へないのは仕合せで御座います。私は本當の太陽ではありません。本當の太陽がこんな處に出て來ましたら、皆さんは燒け死んでしまいます。この立派な劇場もやけてしまいます。第一地球があめのやうになつたり、がすのやうになつたりして、とても人間なぞは歩くことは出來ません。私が本當の太陽でないことはお互に仕合せで御座います。私は一人の詩人の空想にあらはれた太陽にすぎないのであります。（もうけの席につく）

聲。月！出て來い。

月。はーい。

（月、白い或は支那風の衣を着、うす赤、水色、白の衣を着た星を五六人つれて登場、皆、女の方よろしからん）

月。私は月で御座います。本當の月では御座いません。本當の月はいくら小さくも、この舞台の上には入り切れません。それで假りに私が月になつたのであります。私はなりたくはなかつたのですが、是非なれと云ふのでなつたのであります。私が月らしくなくともどうか私を攻擊しないで下さい。罪は私にはないことに約束して參つたのです。（扇で顏をあふぎながらもうけの席につく）。

太陽。お月さん。

月。なんです。太陽さん。

太陽。いゝ處でお逢ひしました。

月。本當にお久しぶりですね。お變りはありませんか。

太陽。えゝ、相變らずです。今日は久しぶりに地球の話をしませう。

月。えゝ。いたしませう。

太陽。地球と云ふ星は、私の秘藏つ子であれを見てゐると退屈しません。

月。本當に地球は面白い星ですね。私もあれは大好きです。見れば見る程面白い。殊に夜の地球は私、大好きです。

太陽。夜の地球。私は晝の地球切り見たことはないのですが、夜の地球なぞと云ふものがあるのですか。

月。ありますとも。夜の地球は實に面白いものです。靜かで、美しくつて、神秘で、まるで一色に見へますが、其處に又夢のやうな美しさがあります。そして人間達はごく少しの他は皆、深い眠りにおちてゐます。

太陽。それは本當ですか。

月。本當ですとも。そして町々にはあかりがとぼり、小さい星のやうにそのひかりが弱くかゞやくのを見ると、人間て可愛らしいものに思ひますね。

太陽。へー。私は地球を出來た時から見てゐますが、そんな世界を見たことはありません。
月。それはさうです。あなたが地球を見ると地球は晝になるのです。そして、いろ〳〵のあかりは消えてしまうのです。
太陽。人間てよく働くものですね。
月。なまけてゐるものも隨分ありますよ。
太陽。だが働いてゐるものゝ方が多いでせう。働かなければ食へないわけですからね。
月。いや働かないでも、金さへあれば食つてゆけます。
太陽。その金は働かなければ得られないのでせう。
月。いや働いて得る金はごく少しですよ、何にかわけのわからないことをしてゐるうちに金をうん〳〵ためる人もありますよ。
太陽。さうですかね。だがよく働く動物なのには感心しますよ。尤も働かないで食つてゆくには數が多すぎますがね
月。何しろ人間てへんなものですね。
太陽。あなたは人間は好きですか。
月。すきです。隨分いやな奴も、馬鹿な奴も、ゐますがね。それ以上殺しあつたり、同じ人間を隨分ひどい目にあはす奴もゐて、人間は今にどうなるかと思ふ時もありますが。大體はすきです。あなたはどうですか。
太陽。僕だつてすきですよ。あいつの生命が全部的に生きたら、すばらしいことをやりますよ。見てゐらつしやい。今に人間の内の生命が全部生る時が來ますからね。
月。そんな時が來たら人間は一人のこらず、賢くなつて、馬鹿な眞似や、理窟にあはないことはなくなりますかね。

太陽。それはなくなりますよ。

月。一寸さうはなりさうもありませんね。

太陽。いやなりますよ。もう一寸の間ですよ。

月。まだ隨分さうなるのには間があるでせう。

太陽。たか〳〵二三千年もたてば、立派に人間の生命が生き出すでせう。

月。さうでせうかね。

太陽。僕はさう思つてゐるのです。時に久しぶりにあなたのおどりを見たいものですね。

月。いや、お目にかけるやうなものではありません。

太陽。そんなことを云はずに見せて下さい。

月。それではお目にかけますかね。

太陽。どうぞ。

（月。お伴の星をつれておどる）

太陽。うまい。うまい。

（詩人滑稽な風采、登場。月舞ひおはる）

太陽。相變らず上手ですね。

月。どうしまして。

太陽。お月さん。そこにゐる詩人は僕が可愛がつてゐる詩人です。

月。さうですか。始めて。

詩人。（最敬禮をして）始めまして。
月。とんでもない、おどりをお見せしました。
詩人。いえ、いえ。實に、實にお立派です。
太陽。詩人に酒をやれ。黄金の杯を持つて來い。
星一。はい。
太陽。詩人、いゝ處に來た。この頃はどうだ。
詩人。相變らず貧乏で困つております。
太陽。貧乏は詩人につきものださうぢやないか。
詩人。つきものでもどうも困ります。空氣を食つても生てはおれませんから。
太陽。人間てあはれなものだな。食へないのか。
詩人。どうにか食つてはおりますが。
太陽。それならいゝぢやないか。
詩人。どうも時々困るのです。さつきも隨分困つてゐたのです。しかしいくら考へたつて金はとれないので、あなた方のことを夢見てゐたのです。その內金のことは忘れてしまいましたが、どうも內にゐると、妻に泣きごとを云はれるので閉口し切つてゐるのです。
太陽。困つた奴だな。
月。お子さんは何人あるのですか。
詩人。五人御座います。

月。それぢや大へんですね。
詩人。本當に大へんです。子供の可愛いゝことは非常ですが。
月。詩ぢや金はとれないのですか。
詩人。とれません。
太陽。詩は食へないものかね。俺の秘藏兒も食へないぢや困るだらう。
詩人。困ります。どうにかならないものですかね。
太陽。金とは俺は緣がないからな。
（星一、黃金の杯に酒を入れて持つてくる）
詩人。ありがたう御座います。（のみほす）
太陽。どうだ。
詩人。すつかりいゝ氣持になつて來ました。
太陽。滿足か。
詩人。この上金があつたら滿足以上ですが。
太陽。困つた奴だな。お月さんあなたは金をもつてゐますか。
月。いやそんなものは持つてゐません。
太陽。誰か金をもつてゐる奴はゐるか、（間）誰もないのか。お前はどうだ。
星一。もつておりません。
太陽。どうも仕方がないな。人間て餘計なものがゐるものだな。そして他の人間は皆金をもつてゐるのか。

詩人。持つてゐるものも少しはゐますが、大部分は持つてゐません。
太陽。それで食へるのか。
詩人。金をとるために皆働いてゐるのです。
太陽。お前は働かないのか。
詩人。私は働きたくとも働けないのです。
太陽。どうして。
詩人。誰もやとつてはくれません。
太陽。やとうとはどう云ふことだ。
詩人。一寸說明が出來ません。
太陽。それではお前は人間に生れたことを後悔してゐるのか。
詩人。後悔はしません。しかし人間の世界がもう少しよくなつてくれたらと思ひます。
太陽。よくならないのか。人間は自分の世界を自分に都合よくつくる力があるはづだ。
詩人。しかし中々さううまくはゆきません。
太陽。働かずに食ひたいのか。
詩人。自分のしたい仕事をして、食つてゆけるやうにしたいのです。少くも一日に三四時間働けば、あとは自由をたのしめるやうにしたいのです。さうなれば實にうれしいのです。しかしいつのことですか。
太陽。人間は思つたより馬鹿なものだな。
詩人。馬鹿なやうで利口で、利口のやうで馬鹿です。愛想をつかして見ると中々いゝ方面をもつてゐます。しかし信用

して見ると實に馬鹿な方面をもつてゐます。救はれないと時々思ひますが、しかし人間の内には自分を救ふ力がないことはないと思ふのです。

太陽。それはさうだ。人間はたしかに自分の力で自分を救ひ得る。

詩人。じかしいつのことですか。

太陽。あと二三千年だらう。

詩人。二三千年。隨分さきの話ですね。

太陽。なに二三千年なんか、またゝく間にくるよ。

詩人。さう早く來られては困りますよ。

太陽。どうして。

詩人。それでも私達はあと四五十年は生きられさうもありません。二三千年がすぐだつたら四五十年は一瞬間です

太陽。それはさうだね。しかし人間にとつては四五十年はわりにながい年月だらう。

詩人。すぎて見れば一瞬間です。

太陽。お前は今いくつだ。

詩人。四十です。

太陽。生れて今迄一瞬間か。

詩人。一瞬間のやうでもあり、永遠に生て來たやうな氣もします。

太陽。それ見ろ。四十年は人間にとつて短かい年ぢやない。

詩人。だが苦しんだあげく、まもなく死病にとつかれて苦しみぬいて死ぬことを考へるとあまりいゝ氣はしません。

太陽。それなら人間に生れたことは不服か。
詩人。不服に思つたつて仕方がありません。人間が苦惜が云へるのは人間にたいしてだけです。しかし人生にはたしかによろこびもあります。生命が内にもへ上る時のよろこび、そのよろこびを味はふ時、私は滿足します。だが人間にはそれにもおとらず、悲しみが與へられ、又苦しみが與へられております。
太陽。悲しみや、苦しみ、僕にはそんな言葉の意味がわからないが。いやなものださうだな。
詩人。あなたは悲しみや、苦しみを知らないのですか。本當に。
太陽。知らないよ。誰か知つてゐるかね。お月さん、あなたは知つてゐますか。
月。知りません。
太陽。他のものたちはどうだ。
星達。知りません。
詩人。それでたいくつはなさらないのですか。
太陽。退屈なんか知らない。常に滿ち足りた心もちで生てゐる。
詩人。涅槃の心もちですか。
太陽。まあ。さうだね。
詩人。何の心配もなく。
太陽。あたりまい。
詩人。死滅の恐怖もなく。
太陽。あたりまい。

詩人。生てゐるよろこびだけを感じて。
太陽。それも意識せずに滿足してゐる。
詩人。うらやましいですね。
太陽。死ねばお前達も私達の仲間になる。
詩人。ですけど、私は死にたくないのです。
太陽。あはれな奴だ。
詩人。私は自殺するものをよろこびません。
太陽。誰も自殺しろとは云はない。
詩人。生きられるだけ生ること。それは人間らしいよろこびです。そして死ねばあなたたちの仲間入りを自づとする。
それもわるくはありませんね。
太陽。わるくはないさ。
詩人。だがあなたには人間のことが本當にはおわかりになりません。夜の世界がわからないやうに。
太陽。それなら月にはわかるか。
詩人。お月さまも月のない暗夜のことは御存知ありません。
月。私の知らない世界、そんなものがあるのか。
詩人。あなたが地球を一番よく御らんになる時は、月夜の時です。
月。それはさうかも知れませんね。私も私の見た世界切り知らないのですね。
詩人。お日さまも、お月さまも自分の見られる世界切り御存知ありません。しかし私達人間も、又動物も植物も、あな

た方が見て下さるので生てゆけるのです。あなた方が見て下さらなければ私達は生てはゐられないのです。

月。私なんか、何の力もないものです。

詩人。そんなことはありません。あなたも私達には大した力をもつておいでゞす。あなたが居て下さらなかつたらどんなにさびしいでしやう。その上地球のいろ〳〵のものにあなたの影響は實に澤山あります。お日さまにはおかないにならなくつても。

月。さうですかね。あなたは嘘はつかないでせう。しかし人間は、滿足して生てゆけないものですかね。

詩人。悟つた人は滿足して生てゐるさうですが、私達はいろ〳〵の目にあふことで、いろ〳〵の感じを抱きます。そして時には滿足もしますが、反對に時にはどうしていゝかわからない悲しみや、とてもたへられない苦痛に壓倒されます。人間の神經は敏感すぎます。尤もそれで人間は生々してゐられるのですが、感じがにぶくなつたら人間は生々は出來ないでせう。

月。私達にはそんな氣持は、しつくりわかりません。

太陽。僕にもわからない。悲しいとか、痛いとか云ふのはどんなものかわからない。

月。どうしていゝかわからないとか、とても耐えられないとか云ふことも私にはわかりません。

太陽。俺にもわからない。

詩人。それはあなた方は完全に生てゐらつしやるからです。當然、必然、自然の道を歩いてゐらつしやるからです。そして天の法則に背かずに生てゐらつしやるからです。しかし下界に生てゐるものはちがいます。

太陽。さうかな。どうちがうのだ。

詩人。彼等は運命に支配されますが、その運命は氣まぐれです。

太陽。運命が氣まぐれだ。運命は必然なものではないのか。
詩人。少くも我々の目から見た下界を支配してゐる運命は氣まぐれです。
太陽。それぢや困るだらう。
詩人。だから困るのです。
月。もし私達の運命が氣まぐれだつたらどうでせう。
太陽。星と星はたへずぶつかるだらう、そして宇宙は渾沌たるものになるだらう。
月。それでは下界は始終ごた〳〵してゐるのでせうね。人間社會も。
詩人。さうです、人間は他の動物より智慧があるだけなほ關係が複雜になり、こんがらかり、なほお互に衝突しあふのです。
太陽。とても想像がつかないな。だが人間の内にある生命はお互に調和するやうに出來てゐるはづだ。
詩人。しかし其處まで目ざめてゐる人間は實に少いのです。大部分はでたらめな運命に支配されてゐるのです。
太陽。さうかな。人間のことは僕達にはわからないよ。
詩人。あなたたちの生活が私は實に羨やましいのです。あるがまゝに滿足してゐらつしやる、まよはない生活。
太陽。羨やましがられることもないが、僕達の生活には迷ひはない。
詩人。迷ひのない生活、私はそれをのぞんでゐるのです。
太陽。悟ればいゝのだらう。
詩人。だが中々悟れません。又悟り切りたくない所もあるのです。人間らしいよろこびが、私をひきつけるのです。
太陽。人間らしいよろこびとはどんなものだ。

詩人。一寸言葉では云へませんが、男女の愛とか、仕事をするよろこびとか、自分を完成さしてゆくよろこびや、自然に接するよろこびなど、又いくらでもあるでせう。
太陽。さうかね。俺は人間と云ふものをもつとよく研究して見たいのだ。一つ人間仲間をもう少しよんで來て、人間と云ふものはどんなものか、俺達に見せてくれないか。
詩人。それは中々むづかしいことです。人間は一人々々ちがつた性格と運命をもつてゐます。
太陽。いや、さう云ふくわしいことは知りたくはない。お月さんあなたも見たいでせう。
月。えゝ、是非もつと人間のことを知りたく思ひます。
詩人。それでは無理と思ひますが、人間の一端でもお目にかけませう。あとは察していたゞくことにして。
太陽。是非さうしてもらはう。
詩人。それでは私の友人に役者がゐますから、それ等をよび出して、一つ人間とはこんなものだと云ふ有樣を演じさせてお目にかけませう。しかしうまくゆけばよろしいがうまくゆかないかも知れません。
太陽。出來ないことをしろとは云はないよ。
詩人。それなら仲間をよんで來ます、そして私がかいた「人間」と云ふ、ごくたわいないものをお目にかけませう。
太陽。それならお前の友達をよんで來てほしい。
詩人。承知しました。
太陽。おい、烏出て來い。
烏。はい。（三本足の烏登場）
太陽。この詩人をつれて車におのせして、下界へ行つて、この詩人の仲間を車にのせて來い。

鳥。はい。
（詩人と鳥退場）
太陽。人間に生れなくつてよかつた。
月。本當ですね。人間に生れないのはよう御座いました。
太陽。氣まぐれの運命にひつぱり廻されて、あつちへぶつかり、こつちへぶつかりしてあげくの果、苦しみ死に、死んでしまう。何が其處にとり柄があるのでせう。
月。それでも人間に生れたい人もあるのですね。
太陽。つい生れるのでせう。
月。それでも生れたことは後悔しないとあの人は云つてゐましたね
太陽。後悔しないやうに、つくられてゐるのでせう。自然と云ふ奴はぬけ目のない奴ですからね。
月。自然は冷酷なものなのですか。親切なものなのですか。
太陽。どつちでもないのです。生命力にあふれてゐて、すき間があるとは、何んでも生かしたがるものなのです。そしてあとのことは知らないのです。死ぬ奴は勝手に死ね、苦しむ奴は苦しめ、生る奴は生きろ、よろこぶ奴はよろこべ。とさう云ふ奴です。
月。苦しむものは氣の毒ですね。
太陽。あなたもちと人間かぶれしましたね。
月。人間て同情心の强いものですか。
太陽。呑氣な程度においては同情心をもつてゐるやうですよ。だが知れたものですね。しかし人間と云ふ奴は苦しんで

平氣と云ふわけにはゆかないのですから、苦しんでゐる人間は、自分達を苦しめるものと、戰ふだけ戰つて、自分を幸福にしやうとします。人間はそれで救はれると僕は思つてゐるのですよ。だが今の人間はまだ駄目でせう

月。氣まぐれの運命に引ぱりまわされてはいくらたつても幸福にはなれないでせう。

太陽。人間が本當に賢くなり協力すれば、人間の運命は氣まぐれではなくなるでせう。人間の支配を運命がうけるやうになるでせう。僕は人間を買ひかぶつてゐるか知れませんが、人間の素質の內にはそれだけの力があると思つてゐるのです。

月。それなら今の人間は賢くないのですか。

太陽。まだ人間の力が充分に生てゐないのです。それで生るのがやつとの人間が多いのです。又他人を利用して得をしやうと云ふ人間が多すぎるのです。

月。ともかく人間と云ふものはおとなしい、臆病ものゝやうですが、一方隨分殘酷で、無情で、意地わるですね。

太陽。何しろまだ力が充分に生ないで、いぢけてゐるのです。そして小さい世界の內に入りこんでごた〳〵やつてゐるのです。時々見てゐて、人間程いやな奴はないと思ひますね。一思ひに殺してやつたらさつぱりするとね。しかし一人々々の心のなかを見てやると可愛さうにもなり、同情も出來るものです。平和に生てゐる人間も多いやうですが、隨分氣の毒な人間もゐますから、憎むわけにはゆきません。

月。本當にさうです。私は時々人間が可哀さうになります。

（詩人、監督、男女俳優を十二三人つれて登場。大きな箱を星が二人でもつてくる皆太陽と月に敬禮する）

詩人、つれて參りました。

太陽。早かつた。（俳優達に）どうも御苦勞さん。

監督。お招きにあづかり光榮に存じます。
太陽。それでは早速、見せてもらはうか。
監督。畏こまりました。
詩人。舞臺は之ではせまいだらう。
監督。少しせまいね。
詩人。それでは誠に恐れ入りますが、もう少しおさがりを願ひます。
太陽。よし〳〵。
（太陽や月たち、あとに席をうつす）
監督。それぢやすぐ始めることにしやう。
詩人。一寸衣裳をつけます間、お待ち下さい。
（俳優達箱をあけ各自自分の衣裳をとり出す）
太陽。よし〳〵。
詩人。なんでもいゝから、どうせわかりはしないのだから、いゝ加減でいゝだらう。その着物のまゝでいゝだらう。
（皆大さわぎをやりながら着物をつける）
監督。椅子を三つ程ほしいがね。
詩人。よし〳〵。椅子が三つ程ほしいさうです。
太陽。椅子を三つもつて來い。
星。はい。

（星、三人椅子をとりにゆき、赤くぬつた椅子をもつてくる）

詩人。ありがたう、ありがたう、之でいゝか。

監督。結構々々。

（椅子を舞台の眞なかに三つならべる）

監督。自然はこゝに。

（自然、岩のやうな風をして頭から布をかぶり顔だけ出してゐる。指定された席につく。上手の椅子）

監督。神様。どうぞこゝに。

（神様。中央の椅子に腰かける）

監督。惡魔はこゝに。

（惡魔。下手の席につく。詩人出てお辭儀し）

詩人。一寸説明さしてもらいます。こゝにおりますのは自然で御座います。自然と云ふものはどんな形をとつてあらはしていゝか、無形、無色、無味、しかも、あらゆるものを産み出す力をもつてゐるもの。形にあらはすのは無理ですが、かりにこれを自然といたします。次におりますのが、神様で御座います。神様も見た方がありますかどうか。この神様は人間界において想像されております神様の姿によりました。次ぎにおりますのが、惡魔で御座います。之も私は見たわけではないのです。之も人間によつて想像された姿にいたしました。お日様や、お月さまや、お星さまが御覧になつたらさぞ貧弱なものと御らんになるでせう。又人間と云ふものは、神様も惡魔も人間の姿以外には考へられないことをあはれに思はれるかと思ひますが、大目に見てほしく思ひます。之からは各自、自分で自己紹介いたします。（お辭儀する）

自然。わしは自然ぢや。人間共はわしを冷酷なものと思ひおる。しかしわしは冷酷なものぢやない。わしはまだ完全ぢやないだけだ。わしのつくつたものにも既に完全になつたものがある。完全にならうとしてゐるものがある。完全になる見こみなく亡びゆくものもある。天上界もわしからうまれた。わしの法則に從つてすなほに生て滿足してゐるものそれは天上界ぢや、太陽、月、星はわしにつくられたまゝで滿足してゐる。だが下界のものは、わしがつくつたにはちがいないが、彼等もわしの法則に從つてはゐるが、其處には極樂も地獄もある。平和も戰亂もある。生みの苦しみも、死の苦しみもある。下界では山水、岩石、彼等はわしにつくられたまゝで滿足してゐる。草木も決して自分の運命を嘆げかない。動物に至つて、平和と生のよろこびは苦痛と死の恐怖に亂だされがちになる。しかし彼等はわしを批評しやうとはしない。彼等はいかに慘酷な運命にやつけられて、なきさけぶとも運命を呪ひもせず、わしを呪ひもしない。そして神や惡魔をうみ出しもせず、運命の飜弄に甘じる。生意氣なのは人間ぢや、彼等はわしを輕蔑し、或るものはわしを罪のかたまりのやうに思ひ、わしに抵抗するのを善だと心得てゐる。彼等はわしのつくつた法則では甘じられないで、何か他のものをうみ出さうとしてゐる。そのくせわしがやつたよろこびだけは出來るだけぬすみとらうとする。わしの子であるが、わしに背かうと常に心がけてゐる子だ。そして自分の力を買ひかぶりすぎてゐる。そして少しでも都合のわるいことがあると、わしのせいにして逃げやうとする。だが彼等はこのわしの手からはのがれることは出來ないのぢや。わしの許しを得ずに彼等に何が出來る。わしの恩と、わしの意志を尊敬することを忘れる人間共よ。罰をうけるぞ。

神。次ぎにひかへた私は神樣である。私は人間によつてつくり出されたものだ。だが私は事實は自然の一分にすぎない。人間は私をない所につくつたのではない。ある所につくつた。私は人間から生れたが、同時に自然から生れた。私は人間を支配するものだが、人間が望む程、まだ萬能ではない。私のことを本當に知らないものは、私を萬能だと思

ひ、そして人間界におこるあらゆる不幸を私のせいにして私を呪ひ、私を否定する。だがそんな所に私はゐない、私がゐるのは人間が萬能ではないからだ。人間が不完全だからだ。人間が不幸におち入りやすいからだ。そのくせ人間が完全を目ざして進まうとしてゐるからだ。人間の不幸は私のせいではなく、私を信じないものゝせいである。私を生み出す力のないものゝせいである。完全なものには私は不用なものだ。不完全の域から脱する意志をまるで持たないものにも私は不用なものだ。心に理想を持たず、あこがれを持たず、全體と調和して生たいと思はぬものには私は縁のないものだ。人間の内に私はゐるのだ。私は人間の神様であり、人間が完全を欲する所から生れた。私は人間の愛から生れ、人類が全部的に生きたがる意志から生れた。私に愛されることとは人類に祝され、よしと見られる心をもち、又その道を歩く時に限る。私に導かれやうとするものは、人類に祝される心の持ち主になることが必要なのである。

惡魔。次ぎにひかへた俺は惡魔だ。人間は俺を呪ふが、俺を愛してゐるのだ。人間は俺の奴隷になりたがつてゐる。俺は人間の心の内に神と一緒に住んでゐるものだ。だが多くの人間は神よりは俺の云ふことをきく、その方が面白いからだ。醉ふことが出來るからだ。あとのことはどうでもいゝ。他人のことなんかくそ喰へだ。快樂こそ萬能だ。酒と女こそ人間の最もつよいたのしみだ。俺は自然の不完全を利用し、人間社會の不完全を利用し、又人間のつくり方の不完全を利用し、人間を何處までも墮落させやうとするものだ。俺は平和と勤勉を嫌ふ。俺はあくどいもの、病的なもの、無情、冷酷、陰險を愛する。人間の生命を不健全にし、破壊する傾向のあるもののこらずを愛する。健全な本能を滿足するだけでは俺は滿足をしない。なるべく病的な域に人間を落し入れるのが俺の仕事だ。そして自分の生命と他人の生命を破壊しつくすものこそ、俺の愛する弟子である。さあ、俺達三人の内の誰が一番多くの人間をひきつけるか。よろしい勝負をして見やう。

自然。よろしい勝負をして見やう。

惡魔。誰か人間がくるといゝな。あ、やつて來たぞ。

（青年三郎登場。神の前に跪づく）

三郎。神樣、私はどゝしたらいゝのです。私達の兄弟の爭そひは益々はげしくなります。弟達は太郎兄さんを殺したがつております。太郎兄さんは何と云つても改心してくれません。弟達が自分を殺しにくればさかさまに殺してやる許りだと云つてゐます。私はどつちの味方にもつくことが出來ないのです。そして兩方から敵のまわしものゝやゝに思はれてゐます。私も太郎兄さんに腹をたてることはあります。しかし次郎兄さんや、他の弟達のやうにムキになつて太郎兄さんをやつけやうとは思ひません。それに次郎兄さんも僕は信用してゐないのです。しかしこのまゝにほつたらかしておいたら、恐ろしいことが起るにちがいありません。私は太郎兄さんにも忠告して見ました。次郎兄さんその他弟達にも注意して見ました。しかし誰も聞かうとはしません。そして怖ろしい方に向つて進んでゆきます。私にはどうしていゝかわからないのです。

神。お前にわからないことは私にもわからない。

三郎。私は實際困つてゐるのです。其處へゆくと、太郎兄さんにしろ、次郎兄さんにしろ、その他四郎にしろ、五郎にしろ、六郎にしろ、七郎にしろ、少しも迷はずに生てゐます。太郎兄さんは何處までも金をとることを考へてゐます。そして贅澤なくらしをして少しも恥ません。そして次郎兄さんや四郎、五郎、七郎は太郎兄さんを憎み切つてゐます。そして太郎兄さんの早く死ぬことをのぞんでゐます。太郎兄さんが死ねば、自分達は金持になれると思つてゐるのです。次郎兄さんは自分の金になれば、皆に公平にわけるといつてゐます。しかし、太郎兄さんの金だつて一つか二つの家庭をたもては少しは餘裕があるかも知れませんが、皆でわけたら、その金は知れたものです。勿論、それだけの金でもほしいにはちがいないでせうが、しかし次郎兄さんが自分のものになつたら、皆にわけるか、どうか

は私は信用しません。しかし皆は信用してゐるのです。勿論私が次郎兄さんの味方をしないのは、次郎兄さんが金をくれさうもないからではないのです。私は兄を殺すことに反對なのです。それに兄の一人子も一緒に殺すことを計畫してゐるのです。そして五人殺しや、三人殺しの泥棒の記事をよむと、次郎兄さん達は太郎兄さんの一家がさう云ふ風にやられるといゝのだがと次郎兄さんと四郎とは話しあつて、へんな笑ひをするのです。その笑ひを見るとぞつとします。何げなく云ふのですが、其所に二人の根性があらはれるのです。そして六郎は一層質がわるくつて太郎兄さんにお世辭つかつて、何とかうまい汁をすい、そして次郎兄さん達のかげ口を太郎兄さんに告げ口したり、太郎兄さんのかげ口を次郎兄さんたちに知らせたりするのです。私はその間にたつて何にも出來ないのです。私はどうしていいかわからないのです。神樣、本當にどうしたらいゝのです。太郎兄さんが改心して、他の兄弟たちのことを少し考へてくれるといゝのですが、さうすればせめて五郎、七郎は騷動のなかにまきこまれずにすめると思ふのですが。

（太郎と六郎登場）

太郎。さうか。そんなことを云つてゐたか。

六郎。あすこに、三郎兄さんがゐます。三郎兄さんは實に陰險な人です。

太郎。三郎！お前は何してゐるのだ。早く行つて働いてこい。畑の草を貴樣がとらないので、作物は全滅だぞ

三郎。お兄さん。いゝ處で御逢ひしました。

太郎。何か俺にいゝたいことがあるのか。

三郎。お兄さんはよく考へて御らんになりましたか。

太郎。何をだ。

三郎。私達は兄弟だと云ふことを。

太郎。それがどうしたのだ。

三郎。弟達に不平をあまり起させないやうにして戴きたいのです。

太郎。不平を起させるのは貴様のくせして、次郎だつて、四郎だつて五郎だつて、七郎だつて入智慧するものがなければ、不平なんか起しはしない。貴様が入智慧して、皆は兄弟だ。兄弟としての平等のわけまいをもらうのが至當だといひ出したのは。

三郎。僕はお兄さんにだけさう云ふのです。他の人にはそんなことを云つたことはありません。

太郎。他の兄弟のゐる所で、聞へよがしにさう云つたのはお前だ。

三郎。私は他の人のゐるのを知らなかつたのです。

太郎。嘘をつくな。早くいつて働かないと家からおい出すぞ。

三郎。お兄さん。僕はお兄さんのことも考へてゐるつもりです。

太郎。おためごかしはよせ。さつさとゆかないか。ゆかないとこのムチでぶつたゝくぞ。

三郎。お兄さんは恐ろしい時の近づきつゝあるのを御存知ないのですか。

太郎。次郎達を中傷しようと云ふのか。あいつはこの頃、いやにおとなしくなつたぞ。俺の力をあいつたちは知つたのだ。

三郎。それは反つて恐ろしい前徴かも知れませんね。どつちにしてもお兄さんはお兄さんとして弟達のことを考へて、自分のゐることをよろこんでもらへるやうになさらないといけないと思ひます。

太郎。うるさい奴だな。（ムチで打つ）兄の云ふことをきかないか。戸主の云ふことをきかないか。

三郎。それでは私もよく考へますが、お兄さんもよく考へて下さい。（退場）

太郎。馬鹿な奴だ。

六郎。本當にムチでお兄さんがおぶちになつた時は胸がすきました。三郎兄さんの僞善者なのには皆あいそをつかしてゐます。
太郎。あいつの顔を見ると胸がわるくなる。何處かで酒でものもう。
六郎。おともいたしませう。
太郎。何處がいゝかな、お前のいゝ人のゐる處にゆかう。
六郎。えゝ。ゆきませう。お兄さんのいゝ人もゐますからね。

（太郎、六郎。退場。次郎、四郎登場）

次郎。また二人であそびに行きやがつたな。
四郎。えゝ、ゆきました。
次郎。俺達に散々働かしておいて、そしてその金を全部とり上げて、勝手な眞似をしてやがる。今に思ひ知らしてやる。
四郎。本當にひどすぎますね。しかし威張らしておくのももう一寸ですね。
次郎。一寸の間だ。威張らしておくさ。

（二人顔見あはし笑ふ。三郎登場）

三郎。次郎兄さんはこゝでしたか。
次郎。何か用か。
三郎。別に用ぢやないのですが、僕は心配で仕方がないことがあるのです。
次郎。なんだ。
三郎。次郎兄さん。

次郎。なんだ。
三郎。恐ろしいことはやめて下さい。
次郎。何を云つてゐるのだ。
三郎。僕は心配なのです。憎惡を燃しすぎてする行爲を恐れるのです。
次郎。俺は何にも恐ろしいことはしないよ。
三郎。きつとですか。
次郎。何を恐れてゐるのだ。
三郎。お兄さんの心のうちで思ひあたることがあるでせう。
次郎。ないね。
三郎。お兄さんは太郎兄さんのことをどう考へてゐます。
次郎。なんだ、兄貴のことか。兄貴のことなんか何とも思つてはしない。兄貴は父親のあとをついで、俺達をつかいたい放題使つたつて、それは兄貴の權利だから何とも思つてゐない。一時は腹もたてたが、この頃はまあ、仕方がないと思つてあきらめてゐるよ。
三郎。本當ですか。
次郎。疑ふのか。
三郎。…………
次郎。貴樣はスパイ見たやうな奴だな。その顏はなんだ。早く向ふへ行け、貴樣は俺のことをあることないこと兄貴につげるさうだが、そんなことをしたら承知しないぞ。

（三郎、あきらめて退場）

次郎。いやな奴だな。あいつは。

四郎。本當に油斷の出來ない男ですよ。

（太郎の妻、子供つれて登場）

太郎の妻。いゝお天氣ですね。

四郎。えゝ、いゝ天氣です。

太郎の子。叔父ちやん、お父ちやん何處へ行つたか知らない。

次郎。知らないよ。

太郎の子。僕は之からお母ちやんと目高しやくいにゆくの、叔父ちやん來ない。

次郎。お叔父ちやんは働かなけりやならないからね。

太郎の妻。本當に大へんですね。

次郎。こちとらは働かなければ食へませんからね。

太郎の妻。それでは失禮します。

（太郎の妻、子退場）

次郎。あいつ達もどうせながくは生てゐないね。

四郎。あはゝ。（空虛な笑ひ）

次郎。しかし餘程うまく殺さなければ見つかつては何にもならないからね。

四郎。泥棒が入つたやうにするのですね。

次郎。俺達はどうしても疑ひをかけられるからね。うまく逃げみちをつけておかなければ。

四郎。三郎にでも罪をきせたらどうですかね。あいつの僞善者なのは誰も知つてゐますからね。反つてあゝ云ふ奴が恐ろしいのだと世間の奴に思はせればよろしいからね。

次郎。さううまくゆくかね。

四郎。ゆきますよ。太郎兄貴が殺された時「三郎！」と云ふ聲がしたのを誰かゞきいたことにすればいゝでせう。

次郎。しかし聞いて知らん顏してゐるのもへんだらう。

四郎。其處で、とび込んだら三郎の逃げてゆく姿を見たとしたらどうです。

次郎。あとでよく考へて見やう。泥坊のせいにするか、三郎のせいにする方がいゝか、又どう云ふ時に殺したらいゝか、よく考へて見やう。しかしこのことは六郎は勿論、五郎や七郎にも云つては駄目だよ。

四郎。大丈夫です。

次郎。そのかはりうまくいつたら、お前には特別褒美をやるよ。

四郎。まあうまくやることが第一です。

（次郎、四郎退場）

惡魔。あはゝゝゝ。自然さんどうです。人間といふ奴はあなたの子ですかね。隨分あなたの考へとはちがつた考へをもつてゐるものですね。神樣！あなたは何のために其處にゐるのです。あはゝゝ。愉快々々。

太陽。人間て馬鹿なものだな。

月。いやなものですね。

詩人。まあ、待つて下さい。あんな人間が全部ぢやないんです。

太陽。何にしろあさましいものだ。
月。本當にあさましいものですね。

（三郎、五郎登場）

五郎。三郎兄さんは太郎兄さんが私達を人間あつかいをしないでもいゝと思つてゐるのですか。
三郎。いゝとは思つてゐない。
五郎。それなら私達の味方ですね。
三郎。ある處まではね。
五郎。太郎兄さんをやつけることには贊成なのですね。
三郎。反省させることは贊成なのだ。
五郎。太郎兄さんは腕力でやつけるより他目がさめない人です。
三郎。それは俺も認める。
五郎。それぢや暴力でやつけることには贊成なのですね。
三郎。勝つにきまつてゐればね。そして太郎兄さんを憎まず、同情し反省させるためならね。
五郎。太郎兄さんが反省しない場合はどうなのです。
三郎。兄弟の生命を尊敬しない點はたしかに太郎兄さんがわるい。その點反省しなかつたら制裁出來たら、制裁していゝと思ふ。
五郎。それなら僕と三郎兄さんの考は同じです。
三郎。しかし次郎兄さん達の考はちがうのだ。

五郎。そんなことはありません。

三郎。次郎兄さんは太郎兄さんの一家のものを殺したがつてゐる。

五郎。そんなことはありません。次郎兄さんは何處までも私達が不當に太郎兄さんに虐待されてゐるのに腹を立てゐゝるだけです。

三郎。それだけぢやないのだ。僕はそれを恐れてゐる。

五郎。僕はさうは思ひませんね。次郎兄さんはそんなにひどい方ではありません。姉さんや、子供を殺すやうな。罪もない子供を殺すやうな。

三郎。だが子供まで殺さなければ財産は子供のものになることを次郎兄さんは知つてゐる。

五郎。しかし太郎兄さんがどうしても云ふことをきかない時太郎兄さんを殺すことはやりかねないと思ひますがね。子供を殺す必要はないと思ひますね。太郎兄さんさへ征服してしまへば、あとは問題にする程のことはないと思ひます。

三郎。殺さなくつたつていゝ。

五郎。だが向ふで殺してくれれば別です。私達は人間らしく生なければなりません。兄だと云つて弟を奴隷にしていゝと云ふことはありません。私達は弟です。奴隷ではないのです。私達は人間です、動物ぢやないのです。太郎兄さんの方で私達を人間としてあつかい、私達を兄弟としてあつかつてくれゝば私達は太郎兄さんを愛するでせう。

三郎。五郎お前の考は大體として僕も賛成だ。僕の兄弟が皆、お前のやうな考へ方をするなら萬事よくゆくはづだ。しかし實際さうはゆかない時、我々はすぐ太郎兄さんをやつければいゝと思ふのは早やすぎるし、簡單すぎる。もう少し考へて見る必要がある。

五郎。何を考へるのですか。

三郎。うちの農場にしろ、工場にしろだ。太郎兄さんがなんでも自分の思ふ通りやつてゐて、ともかく今日の狀態に到達していく分かもうけもあるやうになつた。之は太郎兄さんが私達と力を一つにしてくれない時がくるとどうなるかわからない。太郎兄さんをやつけてしまつて他の人が實際にぶつかつて農場や、工場をやつたら、損が大きくなつて、つぶれてしまはないとも限らない。だから私達は太郎兄さんのその才だけは尊敬し、それから敎はるものは敎はつて、まづ自分達が獨立して仕事が出來るやうにしなければならない。たゞ兄さんだけをやつければいゝと云ふやうな簡單な問題ぢやない。太郎兄さんだつて、中傷する人があるのは面白くないが、惡い許りの人とは思はない。僕達を人間としてあつかう方が利益が上ると云ふことがわかつたら、僕達を今のやうに奴隷のやうにはしまい。

五郎。そんなことはあてになりません。

三郎。いや利害關係さへはつ切りすれば、太郎兄さんも折れるにちがいない。

五郎。あてにはなりません。

三郎。それは皆が一致してゐないからだ。たゞ樂がしたい、得がしたいと云ふ人が多いから、太郎兄さんも油斷が出來ないのだ。もし僕達が僕達の要求を入れたらもつと立派に働き、そして少くも太郎兄さんに損をかけない。少くも今のまゝだと我々は太郎兄さんの云ふ通りにならず損をさせるが、我々の要求を入れたら少くもいくらか得させると云ふことになつたら太郎兄さんも承知するだらう。いや〱ながい時間働くよりは、自ら進んで働く方が結果もいゝわけだ。

五郎。農場ぢやそうかも知れませんが、工場の方は器械の奴隸ですから、なまけるとすぐわかりますからね。ともかく器械の働く時間だけは仕事がはかどりますが、器械の働く時間がへつたらそれだけ仕事ははかどらないのですから。

太郎兄さんは承知はしません。

三郎。それなら太郎兄さんがゐなくなつてもお前達は今のやうに働かなければならない。
五郎。そのかわり太郎兄さんにうは前をはねられずにすみます。
三郎。だが品物が賣れなければ仕方がないだらう。つくればいゝと云ふものぢやない。賣るのには一つの才がいる。
五郎。太郎兄さんには十分やれますよ。
三郎。だが皆怠け出したらそれつ切だ。
五郎。なまけたりはしません。
三郎。第一勞働時間をへらしたいのだらう。
五郎。それはそうです。
三郎。そしてもうけはへらしたくないのだらう。
五郎。それだつて金よりは生命の方が大事ですからね。
三郎。お前はそれを本當に知つてゐるから僕はうれしいのだ。だが他の人は十分それを知つてゐない。七郎の他はね。
太郎兄さんや、四郎は太郎兄さんより慾が少ないとは云へない。
五郎。僕はそうは思ひません。
三郎。さう思へないお前は仕合せだよ。
五郎。ともかく僕は僕達を人間あつかいしないものゝ存在は認めません。
三郎。だが太郎兄さんも人間にはちがいないよ。
五郎。僕達を人間あつかいにすれば、僕達も太郎兄さんを人間あつかいにしますよ。
（太郎登場）

太郎。またこんな所に來て何をぐず〳〵云つてゐるのだ。

五郎。お兄さんが僕達を人間あつかいしない不平を云つてゐたのですよ。お兄さんの方で僕達を人間あつかいしなければ、僕達の方でもお兄さんを人間だとは見ませんからさう思つて下さい。

太郎。三郎に又入れ智慧されたのか。

五郎。入れ智慧なんかされませんよ。三郎兄さんは、お兄さんの味方をしてゐるので僕達に嫌はれてゐるのです。

太郎。どうかね。

五郎。ともかく僕達を人間あつかいしてもらいませう。

太郎。人間あつかいとはどう云ふあつかい方なのだ。

五郎。ムチなぞでおどかさないで下さい。それからすぐ首を切るなぞと云はないで下さい。それから充分な休息を下さい。それから健康を害しないやうな設備と、生々した精神のなくならないやうにして下さい。つまり疲れすぎないやうにしてほしいのです。

太郎。俺なんか若い時もつと働いたものだぞ。今のお前達の働き方でぐず〳〵云ふのは生意氣だぞ。もう一度云つて見ろ。

五郎。何度でも云ひますよ。

太郎。俺に手向ふのか。

五郎。手向ひます。

太郎。馬鹿！（横面をうつ）

五郎。それが人間あつかいでないと云ふのです。

太郎。生意氣云ふな。(又ぶつ)
五郎。私もたゞ默つて打たれてはゐませんよ。
三郎。よせ〳〵。

(次郎、四郎、七郎登場)

次郎。なんだ。なんだ。
太郎。生意氣なことを云つたからさ。
五郎。太郎兄さんが僕をなぐつたのです。
五郎。どつちが生意氣だ。僕だつて人間だぞ。
次郎。人間だと云つたのでなぐられたのか。
五郎。人間なみにあつかつてくれと云つたら太郎兄さんが僕をなぐつたのだ。(泣く)
次郎。お兄さん、僕達を人間ぢやないと思つてゐるのですか。
太郎。人間なことは知つてゐるよ。人間だからこそ怠けたり、生意氣なことを云つたりするのだ。
次郎。どつちが生意氣なのです。
太郎。次郎! お前は五郎の味方するのか。
次郎。あたりまいです。
四郎。太郎兄さん。僕も五郎の味方をします。
太郎。貴樣達が何人よつたからと云つて、俺はちつとも怖かない。
次郎。やつけちやおう。

四郎。合點だ。
(四郎短刀をぬく)
三郎。いけない。(とめやうとする)
次郎。二人をやつてしまへ。
(次郎と四郎、二人をつき殺す)
次郎。二人は決鬪したことにしやう。(短刀を兩方にもたせる)
五郎。(ふるへながら)そんなうそはつけません。
次郎。お前も殺してほしいのか。死ん奴は用はない。生てゐる者だけ生てゆかなければならない。さあ、兩方の手に血をぬつておけ、そして短刀に二人の指紋をつけておけ。內側に血をぬる奴があるか。
詩人。この場は之でおしまいですから。死んだもの達をどけます。
(死人達起き上り退場)
太陽。面白くないな。もつと面白いものを見せてくれ。
詩人。まあもう少し見てゐて下さい。
太陽。まだこの芝居はすんだのぢやないのか。
詩人。之から始まるのです。
太陽。さうか。
月。殺さなくつたつてよささうなものね。
詩人。人間と云ふものは、人を殺したり、殺されたり、お互に又押えつけたり、押えつけられたりしてゐるものだと云

ふことをお目にかけたかつたのです。

太陽。三郎ていくぢのない奴だな。

詩人。えゝ。意久地のない奴です。お靜かに。

惡魔。人間て救ひのない處に段々落ち入るものだ。どうだ神樣、之でもあなたは人間を信用なさるかね。

（五郎、登場）

五郎。神樣、私をお救ひ下さい。次郎兄さんも、四郎兄さんもつかまりました。遠くから姉が見てゐたのです。そして二人とも死刑になつてしまひました。私が一家の主人になつたのです。私はどうしたら私の家がたもつてゆけるか、毎日考へてゐるのですが、どうしたらいゝかわからないのです。昔の生活の方が反つてらくでした。六郎は相變らず怠けてゐます。七郎はよく働いてくれます。しかし私達は工場も、農場もやつてゆけないので、大部分人手に渡しました。自分の理想的な工場と、農場をつくりたいと思つてゐるのですが、私には力がありません。どうかいゝ助手を一人下さいまし。

（七郎登場）

七郎。お兄さん。勞働者の人が一人お逢ひしたいと云つて來ました。

五郎。さうか。それではこゝにお通しゝてくれ。

七郎。はい。（退場）

（勞働者風の男登場）

勞働者。一寸おたのみしたいことがあるのです。

五郎。なんですか。

勞働者。私は今迄働いてゐた印刷場を首になつたのです。あなたの話を或人に伺つてやつて來たのです。

五郎。それはいゝ所にやつて來て下さいました。

勞働者。私達仲間が五人首になつたのです。あなたの所で働かしてもらいたいのです。

五郎。よろしい。しかし私の方は今金を出してあなた方を雇ふことは出來ないのです、たゞあなた方の食ふものと、それから小さい印刷場がつかはずにそのまゝになつてゐるのがありますから、それを全部あなた方に任せますから、それで一つ何か仕事を始めて下さい。純益があつたら、それはあなた方の勝手にしていゝことにして、しかし損が三月以上つゞいたら、お斷りします、しかし三月の間の損は私が責任をもつて拂ひます。私は勞働者の方だけで仕事がうまくゆくものか、どうか見たく思つてゐるのです。勿論、工場は非常に小さくつて十人位い切り働けないのですが。始めは五人でもやつてゆけると思ひますが。

勞働者。全部私達に任せて載ければ私達は立派にやつてゆけると思ひます。

五郎。私達は他の仕事で食つてゆけるのですから、其處で毎月いる費用と、君達の仕事がうまくゆくまでの僕の方の出費とを君達で拂つてくれゝば、それ以上はいらないのです。工場や器械は勿論たゞでおかしゝます。しかし器械の今後の破損は君達の方の責任です。まだ器械はいたんではゐないと思ひます。又仕事の注文なぞには出來るだけ便宜を計りたく思ひます。そのかはり君達が人をやとつて金もうけをするやうな時が萬一あつたら、その時はたゞではおかし出來ないことにお約束しておきます。

勞働者。承知しました。

五郎。それでは之からすぐ工場へ御案内いたしませう。

(二人退場。太郎の未亡人と七郎登場)

太郎の未亡人。五郎さんは本當に親切な方ですね。

七郎。兄は理想家で、夢想家です。あれで實際家の手腕があればいゝのですが、天は二物を與へずと云ひますが、本當です。其處で僕は實際家になつて、兄の夢想をある所まで實現してやらうと思つてゐるのです。

未亡人。本當にあなた方お兄弟の仲のいゝのにはおどろきます。私は始めどうなるかと思つてゐました。

七郎。本當に僕もどうなるかと思ひました。僕は今になつて三郎兄さんのことが思はれて仕方がないのです。

未亡人。あの方はお氣の毒でした。

七郎。太郎兄さんもいゝ人でしたが。

未亡人。私は正直に云つて、死んだ夫を愛してはゐなかつたのです。夫は恐ろしく冷酷な所がありました。偉い所があると思ひましたがね。私の夫や、次郎さん、四郎さん、六郎さんのお母さんと云ふ方は、餘程しつかりした人だつたと見へますね。

七郎。僕の小さい時に死んだので僕は自分達の母の方切り知りません。私達の母は隨分氣のいゝ女でした。

未亡人。さうださうですね。

七郎。父も二つの方面をもつてゐたらしいのです。夢想家と實際家の、そして九郎兄さんは夢想家の方をうけつぎ、僕は實際家の方をうけついだと自分では思つてゐるのです。

太陽。あくびして〻、人間てつまらないことをくよ〳〵云ふものだな。詩人、もう少し話をいそいだらどうだ。

詩人。まあ、もう少し辛抱して下さい。

太陽。それならもう少し辛抱してやらう。

（詩人。七郎の處へゆき何か囁く）

七郎。それではお姉さん、あつちへ參りませう。
未亡人。えゝ、ゆきませう。

(六郎と五郎登場)

六郎。どうしても金はくれないのですか。
五郎。そんなことにつかふ金はやれないよ。
六郎。しみつたれですね、あなたは。太郎兄さんが生てゐてくれたらどんなによかつたか。兄さん、あなたは太郎兄さんが殺されるのを見てゐてうれしかつたでせう。
五郎。そんなことはない。
六郎。それだつてあなたは太郎兄さんが死ぬのをのぞんでゐたのでせう。
五郎。太郎兄さんに私は怒つてはゐた。
六郎。さうでしたね。あなたと太郎兄さんと喧嘩したのがもとで、太郎兄さんも、三郎兄さんも殺され、次郎兄さんも、四郎兄さんも死刑になり、そして四人の死んだ原因になつたあなたが、内の財産を全部總たのですね。運のいゝ人ですね。
五郎。何が運がいゝのだ。
六郎。あなたは内心よろこんだにちがいない。
五郎。馬鹿なことを云ふな。
六郎。あなたは四人の兄さんが死んだので金がどつさり手に入つたのぢやありませんか。
五郎。だから僕は自分の金だとは思つてゐないよ。
六郎。それなら誰の金だと思つてゐるのです。

五郎。社會の金をあづかつてゐるのだと思つてゐる。

六郎。へゝ社會の金ですつて。うまいことを云ひますね。

五郎。僕は自分の金とは思はないから、生活は少しもかへない。

六郎。それはあなたがケチだからですよ。あなたの性質には面白い處がちつともない。そしてあなたは僕を腹ちがいの兄弟として私を憎み、そして七郎だけを愛してゐる。

五郎。腹ちがいなぞと云ふことは問題にしてはゐない。僕が君を嫌ふのは腹ちがいだからぢやない。君の心がくさつてゐるからだ。

六郎。僕の心がくさつてゐるのですつて。

五郎。くさつてゐるよ。

六郎。そして兄さんを四人殺した、あなたの心はくさつてゐないのですか。

五郎。俺は兄貴を殺しはしない。

六郎。手をくださなかつたゞけです。

五郎。俺は心に疚しくないぞ。

六郎。自分が兄の死の原因になつてもですか。

五郎。仕方がなかつたのだ。

六郎。なぜとめなかつたのです。

五郎。とめる暇がなかつた。

六郎。本當ですかね。

五郎。うるさい。あつちへゆけ

六郎。金を下さい。

五郎。やれない。お前は人間と云ふものはあそんで食へるものと思つてゐる。そんなものぢやないぞ。

六郎。遊んで食つてゐるのは僕一人ぢやありませんよ。

五郎。まちがつた生活には俺は同情はない。お前の性根がなほるまでは金は一文だつてやらない。

六郎。よろしい。それなら僕にも考がありますよ。おゝあすこを見て御らんなさい。姉さんと七郎が花をつんでゐますよ。あの二人は遊んでゐていゝのですか。

五郎。七郎はもう今日の仕事はしてしまつたのだ。

六郎。姉さんと七郎の間がへんでもかまはないのですか。

五郎。僕は二人を信用してゐる。

六郎。そして僕だけ信用しないのですか。

五郎。信用しない。君は兄達の生てゐる時中傷許りしてゐた。僕はその時から君を輕蔑し切つてゐた。

六郎。あなたは私が憎いのですね。

五郎。輕蔑してゐるのだよ。

六郎。なんだつて。

五郎。僕と喧嘩する氣かい。

六郎。（急に媚びて）喧嘩なんかしません。兄さんにはどうせ叶ひつこありませんからね。僕はもう降參することにします。そして明日から心を入れかへて働きます。だから僕を憎まないで下さい。本當に僕はわかつたのです。

惡魔。其處だ、しつかりやれ。
自然。だまされちや駄目だぞ。
五郎。(自然に)大丈夫ですよ。しかし私もこんな男と喧嘩する氣にはなれません。だまされたふりしておきますよ。
自然。それもいゝだらう。
五郎。君が本當に改心してくれゝば僕もうれしく思ふ。明日から二時間づゝ働く癖をつけたらいゝだらう。そして身體が出來たら四時間か、五時間働くやうにしていつたらいゝだらう。さうすれば褒美をあげるよ。
六郎。えゝ、働いて見ます。
(五郎、退場)
六郎。あいつは本當にいやな奴だな。あいつこそ死ねばよかつた。(退場)
太陽。人間てなんてこせ〳〵した馬鹿々々しいものでせうね。
月。本當にさうですね。
詩人。あんな人間許りぢやないのです。
太陽。もつと立派な人間を見せてほしいな。
詩人。僕はあの五郎が好きたのです。
太陽。さうかね。人間てへんなものだな。
(五郎と七郎登場)
五郎。七郎、お前は姉さんを愛してゐるのか。
七郎。愛してゐます。

五郎。さうか。それもいゝだらう。しかしもつとお前に適當な人が出てくるかも知れないから、その時困らないだけの用心はしておく方がいゝ。
七郎。大丈夫です。姉さんも馬鹿ぢやありません。
五郎。安心はしてゐる。
七郎。姉さんはお兄さんに感心してゐます。
五郎。今の生活で不平は云つてゐないか。
七郎。えゝ、少しも云つてゐません。
五郎。六郎も明日から働くと云つた。あてにはならないがね。
七郎。さうですか。それは感心ですね。あてにならないにしろ。
五郎。働かないものには金はやらないと云つたのでね。
七郎。兄さん僕は本が買ひたいのです。農業を一つ本氣になつて研究して見たく思ふのです。
五郎。いくらでも買つてやるよ。
七郎。私も一生、農業の研究に沒頭することにきめました。
五郎。それはありがたい。お前だつたらきつと物になる。
七郎。まあ出來るだけやつて見ます。溫室もたてゝよろしいか。
五郎。いゝとも。
七郎。助手を一人さがしたく思ふのです。學校へ行つて一番しつかりしてゐさうな人を雇ひたく思ふのです。
五郎。それはいゝだらう。

七郎。少し月給を多く出してもいゝでせう。

五郎。いゝとも。少しでも人間の生活に役にたつためなら、よろこんで出すよ。そして貧乏すれば、又勞働者の群へ入ればいゝのだ。今になつて見ると太郎兄さんに動物のやうに虐待されて十時間以上も働かされたのもわるくない。へんに自信が出來た。

七郎。しかし私はそのおかげですつかり頭をわるくしましたよ。近頃やつと自分の頭が自分のものになつて來ました。

五郎。大いにやらう。

七郎。やりませう。

五郎。愉快だね。

七郎。愉快です。

（惡魔、誰かを招くやうな手ぶりをする、六郎來る。惡魔、六郎に何か囁く。六郎、ほゝえみながら默つて去る。五郎達は氣がつかない）

五郎。一時僕は人間に生れたのがいやになつてゐた。太郎兄さんの死に顔が目について閉口した。三郎兄さんの死に顔はへんに平和で美しかつたが、太郎兄さんの顏には恨がもへて居た。人間を殺すことの恐ろしさを實に知つた、同時に死なゝければならない人間に生れた自分達が呪はしかつた。だがこの頃はへんに内から力がわいて來た。捨て身になれたからかも知れない。それにしたいことが多すぎるからね。

七郎。本當にしたいことだらけですね。

五郎。何處までも力を一つにしてやつてゆかうね。

七郎。えゝ。さつきの勞働者の方はどうしました。

五郎。よろこんでくれた。立派にやつて見ると云つた。たのもしい男だつた。たのもしい男と云ふものは一目でわかるもの丶やうな氣がする。

(六郎登場)

六郎。兄さん。

五郎。なんだ。

六郎。女の方が逢ひたいと云つて來ました。

五郎。さうか。それではこ丶に來てもらはう。

六郎。はい。(退場)

七郎。いやにおとなしくなりましたね。

五郎。本心ならい丶が、しかし僕はまだ信用しない。ものになるかどうか鍛えて見るつもりだ。

(美しい、しかし何處か惡魔の弟子らしい女)

女。始めてお目にか丶ります。一寸御話したいことがあるのです。

五郎。なんですか。

女。お二人でお話したいのです。

五郎。之は僕の弟で氣のおけない、秘密のない仲間です。

女。さうですか。私は本當は太郎さまに大へんお世話になつた女なのです。

五郎。さうですか。

女。それで今大へん困つておりますので、よかつたら女中にでもおいていたゞきたいと思つてゐるのです。

五郎。そんなことは出來ません。
女。たべさしていたゞければいゝのです。
五郎。どうも御氣の毒ですが、駄目です。
女。(泣きさうになり)私は今非常な不幸な目にあいかけてゐるのです。ひどい男に今ねらはれてゐるのです。太郎さまさへゐて下さつたら。
五郎。一寸六郎をよんで來てくれ。
七郎。はい。(退場)
(六郎七郎、登場)
六郎。なんですか。
五郎。お前はこの女の人を知つてゐるか。
六郎。はい知つてゐます。
五郎。どうして知つてゐるのだ。
六郎。太郎兄さんのお伴して二三度逢ひました。
五郎。何處でお逢ひしたのだ。
六郎。カツフエーです。
五郎。太郎兄さんがこの方を愛してゐたのか。
六郎。え。ゝ。
五郎。お姉さんはそのことを知つてゐるのか。

六郎。いゝえ御存知ありません。

五郎。金さへあればどうにかなるのでしよ。

女。私は今の境遇からのがれたいのです。金なら少しは持つてをりますのです。持つてゐるので反つて悪者にねらはれてゐるのです。

六郎。それはおいて上げたらいゝでしやう。

五郎。六郎、この方が家においてくれと云ふのだがね。

五郎。しかし僕の處は質素にくらしてゆかなければならないのだから。

女。私だつて家は百姓でした。貧しい生活にはなれてをります。

五郎。七郎、どうしやう。

七郎。おいて上げたらいゝでせう。

女。ありがたう御座います。

五郎。それぢや六郎、家の方へ案内してお上げ。

六郎。はい。

（六郎と女退場）

五郎。僕はあの女を好かないね。

七郎。だが氣の毒ですからね。

五郎。あいつの云つてゐることは本當かな。しかし俺達さへしつかりしてゐれば心配なことはない。

詩人。こゝで一休みします。

太陽。どうも面白くないね。何とか面白いものを見せてくれ。
詩人。もう少しの辛抱です。
太陽。あーあ（欠伸し立ち上り）。今度は俺達がおどつて見せてやらう。
月。どうかお見せ下さい。
詩人。一寸まつて下さい。
太陽。あんまり坐つて許りゐたのでねむくなつた。ねむけざましにおどつて見せよう。
詩人。困りましたね。
太陽。俺の方こそさんざん困らされたからね。

（太陽、星達とおどり出す）

詩人。困つた奴だな！

（太陽おどりおはる。皆手をたゝく）

太陽。さあ、之で氣がはつきりした。さあ始めてもらはう。
詩人。困つた奴だな！
太陽。ちつとも困ることはないよ。
詩人。（監督に）これぢや始めやう。なるべくはしよつて大車輪でやらう。時間や空間は無視してやらう。

（美人登場）

惡魔。どうだつた。
美人。だめよ。

惡魔。何がだめなのだ。

美人。あの人は墮落しません。

惡魔。どうしてだ。

美人。あの人は馬鹿です。

惡魔。どうして馬鹿なのだ。

美人。平氣なのです。

惡魔。お前に誘惑されないのか。

美人。えゝ、誘惑されても、一向平氣で又起き上るのです。

惡魔。お前を愛しないのか。

美人。他に愛してゐる人があるようですよ。

惡魔。どうしたら墮落するかね。

美人。あの人は駄目です。

惡魔。なぜ駄目なのだ。

美人。罪と云ふことを知らないのです。

惡魔。罪を知らない。

美人。あの人は動物であり、そして神でもあるのですか。人間ぢやないやうです。

惡魔。へんな奴だな。

美人。へんな奴です。

惡魔。お前はそれで降參したのか。
美人。馬鹿々々しくなつたのです。
惡魔。それなら逃げて見ろ。
美人。私もこゝにゐるのがいやですから、逃げやうと思つてゐるのです。

（六郎登場）

六郎。どうです。
美人。だめ〳〵、あんないやな人はゐない。
六郎。石のやうな奴ですね。
美人。石だかあめだか私にはわからない、私はもう逃げることにしました。
六郎。逃げるのですか。いくぢがないぢやありませんか。
美人。ちつとも面白くない、魂を食はしてくれないのですか。（退場）

（五郎登場）

六郎。お兄さんあの女の人は逃げましたよ。
五郎。さうか。面白い馬鹿だね、あの女は。何しに僕の處なんかに來たのかな。
六郎。あれはお兄さんを誘惑しに惡魔がよこしたのですよ。
五郎。餘程呑氣な惡魔だね。時代おくれの惡魔だね、女なんかつかうのは。女に誘惑されるのは生々してゐない男にかぎる。俺はあの女で女て美しいものだと云ふことを知つて神を讃美した許りさ。
六郎。神を讃美したのですか。

五郎。あたりまへさ。あらゆるよろこびと、あらゆる美は神のおくりものだからね。

六郎。そして生々した精神は。

五郎。それは自然からさ。悪魔なんてケチな奴で人が弱はつてゐる時でないと入りこめない、バイキン見たやうな奴さ。人間を堕落さしてよろこぶなぞと云ふのが、馬鹿な考さ。

六郎。だが人間に堕落する傾向があるのはどう云ふわけです。

五郎。それは生々してゐないからさ。日かげの人間になるからさ。太陽の子にならないからさ。

太陽。賛成！

六郎。人間は健全な心をもてばいゝのですか。

五郎。いゝのさ。うちに生命をみなぎらせばいゝのだ。何かに心をひつかけずに、朗かな心をもつて生ればいゝのだ。

六郎。さう云ふ風に生きられない人はどうすればいゝのです。

五郎。其病氣の原因を皆で無くなすのだ。個人的な病氣だつたら個人的に、社會的な病氣なら社會的に癒せばいゝのだ。

六郎。なか〱なほらないでせう。

五郎。なか〱なほらなくつてもなほす努力と希望は失なはない。

六郎。世界はお兄さんのやうな人許りではありませんよ。

五郎。それが結構なのだ、僕の様なもの許りでは仕様がない。あらゆる人間の内に生てゐる生命を僕は尊敬してゐる。

六郎。お兄さんは、神様と自然とどつちを尊敬なさいます。

五郎。神は自然の一部だ。さもなければゼロだ。僕は自然を信じる。自然は完全ぢやないが、自然の内に我々の求めるものはすべてある。そのうちの最も深かく我々の生命を支配するものを假りに神と名づけてゐるのだ。だから神は信

しているものだ。本當の神ならね。それは最も我々の生命に忠實なものだから。

六郎。惡魔はどうです。

五郎。惡魔は馬鹿だよ。足りないのだよ。病的なものさ。しかし惡魔があるから神がある。神があるから惡魔もある。時に惡魔は可愛いゝものだよ。

惡魔。生意氣なことを云ふな。

五郎。人間の内に惡魔の奴隷もあり得る、だがそれは陰險な子だ、暗の子だ、何處か生々した所のない、いぢけ魂だ。我々を導くものではない。我々はそんな人を見る時、更に決心を新にする。

六郎。兄さんは仕合せですね。人類の運命を信じるのですか。

五郎。信じるよ。生々した人間のゐる間、世のなかはよくなる。

六郎。お兄さんは野蠻人が好きなのですか。

五郎。精神の鍛へぬかれた生々した人間を云ふのだ。我等は目標を常に忘れずに進んでゆく人々を知つてゐる。惡魔は一時的にそれ等の人をやつけるかも知れない。だがそれ等の人は更に強い力をもつて起き上る。

六郎。お兄さん達が死んだのはよかつたのですか。

五郎。勿論よくない。皆生てゐてもらいたい。しかし死んだ人は死んだ人だ。生てゐるものは更に力づよく、まちがいなく生てゆくより仕方がない。

六郎。今、お兄さんを殺さうとするものがあつたらどうします。

五郎。逃げられるだけ逃げるよ。

六郎。相手を殺せば生られる時はどうします。

五郎。殺すね。他人を殺していゝと思ふ奴は自分の殺されてもいゝことを斷言してゐるものだからね。

六郎。それなら死刑はいゝものなのですか。

五郎。人殺を是認してゐるものは、自分の殺されることを是認してゐるものだ。だがその考へのまちがつてゐることを本當に知つたものは殺す必要はない。後悔は出來るだけ認めなければならない。

六郎。お兄さんと話してゐるとなんでも簡單に見へますね。

五郎。多くの人は簡單なことを無理にむづかしくしてゐるのだ。人間の生命を尊敬する思想、行爲を自分は是認し、それに反するものには人間の生命の名によつて戰ふつもりだ。

六郎。病的な文學や、畫もお兄さんは嫌ひぢやないのぢやありませんか。

五郎。それは人間の生命の領土を深かくしてくれる、罪の内にかくれた美と寶を掘り出してくれて人生を豐富にしてくれるからさ。廢物だつて利用出來るだけ利用しやうと云ふことはいゝことだ。どんなごみためのなかの寶でもすてないのが人間らしい所だ。

六郎。それなら私の内にも取り柄がありますか。

五郎。ないとは云はないよ。馬鹿とハサミは使ひやうで切れるさうだからね。

六郎。私は馬鹿ですか。

五郎。もう少し油斷の出來ない所がある。だが可愛いゝ處がある。

六郎。ありがたい仕合せですね。

五郎。まあもう少し賢くなるのだね。

六郎。賢く？

五郎。まあいゝ。お前のやうな男にはムチも必要だと云ふことを僕は知つてゐるからね。
六郎。私の方が腕力が強くないのは殘念です。
五郎。あつちへ行かう。
六郎。えゝゆきませう。私はこの頃兄さんが不思議に好きになつて來たのですよ。
五郎。ムチがかい。

（五郎と六郎退場。七郎と未亡人登場）

七郎。それはお兄さんだつてよろこぶでせう。
未亡人。よろこんで下さるでせうかね。
七郎。それはよろこびます。お兄さんはたしかに峰子さんを愛してゐます。
未亡人。嫌つてはゐらつしやらないやうですね。
七郎。峰子さんはお兄さんに本當に似合つておいでゝす。

（未亡人と七郎退場。峰子登場、五郎も登場、二人出あふ）

峰子。お姉さんにお逢ひになりませんか。
五郎。今其處で逢ひました。
峰子。さうですか。
五郎。一寸話したいことがあるのです。
峰子。なんですか。
五郎。あなたは正直に自分の思つたことは何んでも云ひますか。

峰子。さうね。なんでもと云ふわけにはゆきませんが、大概のことなら云へます。
五郎。嫌ひなものは嫌ひと云へますか。
峰子。それは云へるつもりです。
五郎。それなら僕は嫌ひですか。
峰子。あなたは。
五郎。僕ですか。あなたからさきに云つて下さい。
峰子。それは、あなたの方からさきに云つて下さい。
五郎。それならジャンケンできめませう。
峰子。えゝ。
二人。ヂャンケンポ
（峰子勝つ）。
五郎。それなら仕方がないから云ひますが、驚いちやいけません。それから嘘を云つちやいけません。僕は事實の前にはおどろかないのを悧りにしてゐます。嘘を云つてなぐさめてもらいたくないのです。
峰子。それでどうなのです。
五郎。僕はあなたを愛してゐるのです。
峰子。それで私もあなたを愛してゐるのです
五郎。嘘ついたら承知しませんよ。
峰子。嘘なんかつきませんわ。

五郎。それならよろこんでいゝのですね。

（二人接吻しやうとして五郎やめる）

峰子。どうしたの。何を考へてゐらつしやるの。

五郎。僕はあなたを愛してゐることは事實ですが、あなたの決心をきく前に僕はあなたと夫婦になることは出來ないのです。

峰子。なんでも聞いて頂戴。

五郎。あなたは僕が貧乏人になるかも知れないことを知つてゐますか。

峰子。知つてゐますわ。

五郎。僕は一文の金も自分の自由になる金は持つてゐないのです。

峰子。それがどうしたの。

五郎。あなたは僕を金持だと思つてゐると困るのです。

峰子。誰も思つてゐないわ。

五郎。僕はあづかつてゐる金は自分の家庭のためにつかいたくないのです。そして自分のとれる金と云ふものはまるでないのです。

峰子。知つてゐます。

五郎。僕のする仕事はなんでも反對しませんか。

峰子。あなたを信用してゐます。

五郎。僕の仕事を輕蔑した時、あなたと僕とは他人です。

峰子。承知しました。もう他に云ふことはないのですか。
五郎。ありません。あなたの方に何か要求がありますか。
峰子。私はあなたを心の底から信じてゐます。
五郎。ありがとう。それなら之から二人で、働くことにしませう。
（二人つれだつて退場しやうとする。七郎登場）
七郎。印刷場の人が見へました。
五郎。こゝへ御案内してくれ。
（七郎勞働者をつれてくる）
五郎。どうです景氣は。
勞働者。相かはらずいゝ方です。
五郎。それは結構です。
勞働者。今日はおたのみがあつて來たのです。
五郎。なんですか。
勞働者。私達の純益の半分を受けとつて戴きたいのです。
五郎。そんな必要はありません。
勞働者。私達が相談して差し上げることにしたのですから。
五郎。それは何かの時の用意につみたてゝ下さい。
勞働者。私達は各自自分の月給をもらつてあとあまつたのは用意にとつてあるのです。しかし小屋や器機までたゞで戴

いて知らん顔してゐるのは心苦しいのです。取つていたゞかないと侮辱されたやうに思ひます。

五郎。それではよろこんで戴きませう。

勞働者。それはどうもありがたう。皆も安心すると思ひます。それでは失禮します。

五郎。皆さんによろしく、私の敬意をおつたへ下さい。

勞働者。ありがとう。（退場）

五郎。中々しつかりした男でせう。

峰子。本當ね。

五郎。この金も僕に托された金です。よく生かしたい。僕の仕事は人間は正當な仕事をすれば必ず食つてゆける社會をつくることです。それは容易ぢやないのですが、不可能なことではないと思ふのです。

峰子。それは出來ますわ。きつと。

五郎。あなたもそれを信じてくれますか。

峰子。えゝ。

五郎。人間の内に、人間を救ふ力が必ずあることを僕は信じてゐます。

（二人退場）

太陽。もうおしまいか。

詩人。もう少しです。

太陽。何か面白いことがあるのか。

詩人。一番しまいに皆さんにおどつていたゞきます。

太陽。しまいに皆でおどるのか。月も星も人間も一緒にか。
詩人。え丶、そして惡魔や神や自然もおどり出します。
太陽。それは面白いだらう。早くおどりたいものだ。
詩人。もう少しまつて下さい。
自然。どうだ惡魔、少し元氣がないな。
惡魔。今に見てゐらつしやい。
自然。何を見てゐるのだ。
惡魔。人間は墮落しやすいものです。
自然。だが又すぐおき上るよ。
惡魔。神の奴、ねていやがる。
自然。人間は滅多に神の目をさますことは出來ないのだ。
惡魔。俺は神がうらやましい。
自然。なぜだ。
惡魔。だつてねてゐられるから、私なんか安眠は出來ない。
自然。さまあ見ろ。
惡魔。なんだ。人間が俺を愛しすぎるからねてゐられないのだ。
自然。神は安眠してゐても人間は段々よくなる。お前はのべつ働いてゐても人間は段々よくなる。
惡魔。人間がよくなる。誰がそんな馬鹿なことを云ふ。人間はますます殺人器の巧妙なものをつくり出した。今に世界

中の人間が一度に死ぬやうなものをつくり出すだろう。

自然。人間は馬鹿ぢやない。生る道を見出す。

惡魔。少くも利口ぢやないね。馬鹿なこと許りしてゐる。

自然。馬鹿と見へて利口な處がある。

惡魔。利口に見へて馬鹿だ。

自然。今にものになる。今に皆利口になる。

惡魔。今に斬くさつてしまう。

自然。そんなことはない。

惡魔。少くも人間は段々ずるくなり惡くなる。

自然。馬鹿なことを云ふな。人間は段々生命を重じ、立派になる。

惡魔。人間が立派になる？　あはゝゝ。

（神目をさましキヨロ／＼する）

自然。神さん。目がさめましたな。

神。えゝ。

自然。神さん。今私と惡魔と議論してゐるのですが、人間は段々よくなりますか、わるくなりますか。あなたはどう考へます。

神。人間は段々私を利用しなくなつて來ましたね。

惡魔。それ見ろ。

神。だが惡魔の存在も人間は段々認めなくなつて來たでせう。

惡魔。いや私は相變らず繁昌ですよ。相變らず人殺し、暴行、墮落、泥棒、詐僞、人命無視、嘘、僞善、野心、貪慾そんなものが人心を支配しつくしてゐます。

自然。そんなことがあるものか。それは例外で病的な奴に限る。大概の人間は勤勉で、自分の仕事を勵み、平和を愛し、生々した心をもつて隣人のために働き、自分の生命のために働いてゐる。

惡魔。へー大概の人がですか。見渡した所人間は立派な心もつて、隣人のことを考へてゐますかね。それとも隣人はどうなつてもいゝ、自分さへ仕合せになればいゝと考へてゐますかね。

自然。他の生命を傷つけることをよろこぶものはまれだ。自分の生ることを最初に考へるのは當然だ。先づ人間は生なければならない。しかし平和に勤勉に生てゐるものゝ方が多いぞ。

惡魔。神さまあなたはどう思ひますかね。

神。人間の心は愛に餓えてゐる。人間の魂は友達を求めてゐる。

惡魔。そして力を一つにして相手をやつつけたがつてゐるのでせう。

神。皆と平和に生きたがつてゐるものが多い。

惡魔。それは力のない連中でせう。

神。私の意志に叶ふものも段々ふへてゐる。

惡魔。あなたを利用する人がへつてもですか。

神。私は利用されるのはすきぢやない。御利益のためにのみ、私を祈るものは私を愛することは出來ない。私のために利益をすて、生命もゐらないと思ふものが私に愛される。

悪魔。そんな人がゐますかね。
神。たまにはゐるよ。
悪魔。ごくたまにはでせう。
神。だが私を利用せず、私を心ひそかに求め愛してゐるものは決して少くはない。
悪魔。決して多くもありませんね。
神。私を本當に愛し得るものは、さう多くなくても今の所は仕方がない。しかし今に私の眞價ははつ切りするだらう。
そして人間は私に愛される生活をすることによつてのみ生き甲斐を感じることを知るだらう。
悪魔。生き甲斐ですか。死に甲斐ですか。
自然。大生命を得た時、大往生するものだぞ。生き甲斐を得て、始めて死に甲斐が出來るのだぞ。
悪魔。そんな人間は一萬人に一人もないでせう。
自然。今にそんな人間だらけになるのだ。
悪魔。その前に死にたへますよ。
自然。生きぬくまでは人類は死にたへない。それは私が保證する。
悪魔。その前に人類が亡びることを私は保證する。
神。人類が亡びた時、お前も俺も亡びるのだ。亡びないのは自然だけだ。
悪魔。新しいものが生れ、新しい仕事が生れる。
自然。人類は大生命を得る。完成する。それまでは亡びはしない。私はそれを信じてゐる。
悪魔。私は信じませんね。人類は少し馬鹿すぎます。

自然。いや馬鹿ぢやたい、たゞ若いだけだ。
惡魔。若いのですつて。
自然。わかいよ。之からさ。
惡魔。私は人類は年よりだと思ひますね。
自然。若い。
惡魔。としよりです。
自然。若い。
惡魔。年よりです。
自然。若い。
惡魔。年よりにきまつてゐる。
自然。若いのだぞ。それをとしよりだと思ふのはお前は亡びてゆく方許り見てゐるからだ。
惡魔。そしてあなたは生れてくる方許り見てゐるのでせう。ともかく人間が利口でないことはたしかです。
自然。今に利口になることもたしかだ。
惡魔。どうですかね。
自然、神さま、あなたはどう思ひます。
神。私にはわかりませんね。たゞわかつてゐるのは人間どうしがもう少しお互に愛しあいお互の生命が共に生られるやうに骨折らなければいけないと云ふことですね。
惡魔。しかしそんたことは望む方が馬鹿ですよ。人間はます／＼決死の爭闘をします。ます／＼憎みあい、殺しあいま

す。

自然。俺にはさうは思へない。人間の生命が全部的に生きられる時に最大、最高、最美の望をおいてゐる。

惡魔。あは、、、。

（五郎、峰子と登場。七郎反對の方から登場）

七郎。お兄さんお姉さん今日はお目出たう。

五郎。峰子。ありがたう。

（お客達登場）

お客達。（各自）お目出とう、お目でとう（挨拶する）

五郎。ありがとう。ありがとう。（挨拶する）

（峰子はたゞ默禮する）

五郎。皆さん、今日はよく來て下さいました。皆さんにお祝ひして戴く資格があるか、どうかわかりませんが、ともかく、私達は幸福に思つております。深く感謝しております。私達は出來るだけ皆さんの恩を感じて生てゆきたく思ひます。勿論いぢけようとは思ひません。また自分の生命を殺さうとは思ひません。私達は善人でも、お人よしでも、又聖者でもありせません。私達は時にエゴイストでもあり、我儘ものでもあるでせう。しかし自分達が生きられる間、そして少しでも心に餘裕のある間、皆さんと人間に生れたことをよろこべるだけよろこべるやうに骨折りたく思つてゐます。私達の力は少なすぎるでせう。しかしその心がけだけは一生ぶつ通してもちこたへて見るつもりです。出來たらます／＼生々として、人間のために働きたく思ひます。君達生々した人間諸君、君達の一生はらくであるか、苦しいか知りませんが、出來るだけ人間に生れた宿命を人間のために立派に生かしてください。そして人間のためにお互

に働きませう。人間は面白いものです。どの位い我々は能力をもつてゐるか計り知ることが出來ません。そのあらゆる能力を生して人間のために働きたいものです。金のために働く許りでは滿足せず人間の生命のために働きたいものです、そして生れた人間は正しき仕事を欲すればすぐ得られ、正しい生活をすれば生活の心配せずにすめる社會をつくるやうに協力して働きたいものです。

客の一人。五郎君夫婦萬歲。

他の客。萬歲、萬歲。五郎君を胴上げしろ。

（皆、五郎を胴上げする）

太陽。もうおどつていゝのか。

詩人。もう少し待つて下さい。

詩人。（見物の方へ向つて）私のかいた脚本はこゝで終つてはゐないのですが、しかし五郎君の結婚後の生活は他日にゆづり、私は作者として一語さしてもらいます。人間と云ふものにはいろ〳〵あります。私にはとても人間のことは十分にかけません。たゞ私は人間に生れたことをよろこび、そして皆さんと共に人間として生てゐることを光榮に思ふものです。そしてお互に人間として生れて來た以上、地上を出來るだけ人間にとつて美しいもの、氣持のいゝもの、生々したものにしたいと思ふのです。私の力は少なすぎます。だがこの望みだけは人類の望みだと思つてゐます。そして太陽や、月や星や、山や川や、海を讃美し、そしてそれ等のものが、人間のます〳〵ほがらかに生ることをのぞんでゐてくれることを感謝するものです。そして我等人間の何處までも生きてゆくことをのぞむものです。そして同時に我々全部の親である生命の王を讃美したく思ひます。生命の王よ出御めされ。

（御輿に若者達にかつがれて生命の王出御する。老人達之を導き、少女や子供はいろ〳〵の花や木の枝をもつてそ

の廻りを守護してゐる。生命の王は夏なら半裸體の青年。寒い時はギリシヤ風の衣をまとふ。他にいゝ考へがあればお任せする)

皆。(歡迎し呼ぶ)生命の王。萬歲。

詩人。さあ、太陽さん、おどつてもいゝ時が來ました。

太陽。よし來た。

詩人。皆さんもどうぞ生命の王をかこんで、おどつて下さい。元氣に元氣におどりぬいて下さい。見物の方もお氣が向いたらどん／＼入つておどつて下さい。おどりぬいて下さい

(元氣な舞踏曲が始まり、皆おどり狂ふ。生命の王の輿は眞中に直立して動かない。それを守護する人達も動かない。おどりはだん／＼はげしく出鱈目になり、人間萬歲、生命萬歲とどなつて手をふつたり、おどり上るものもある)

(急ぎ幕)　(一六、一〇、八)

永久の負債

加能作次郎

一

郷里から出て來て居た義母（はゝ）と二人で、急病で死んだ姪のお八重の骨上げから歸つて來ると、敬介は急に精も根も盡き果てたやうにぐつたりとなつた。兎も角もこれで一段落ついたといふ氣の弛みと共に、一週間ばかりの間全く夜晝なしの看護やら心配やら氣苦勞やらの疲れが、一度にどつと出て來たのであつた。

『あゝ！』

取敢えず骨壺を茶簞笥の上に置くと（それが場所外れの氣がして一寸氣になつたが、外に置く所もなかつたのだ）、彼は大きな呻き聲と共に、どかつとその下の火鉢の前に腰を下した。くら〳〵と昏倒しさうな氣持だつた。

『やれ〳〵！これで早もう……』

義母も腹の底からの大きな溜息を吐いた。そして癖のやうに念佛を稱へながら、その儘すぐ着換にかゝつた。

妻の泰子は早速茶を淹れにかゝつたが、敬介は茶よりも水をといつて、がぶ〳〵と一氣にコップを傾けると、羽織袴のまゝごろつと其處に横になつた。

『おとうさんも着換へてからにしたらどうやいね。紋付がよごれて了ふぞ。』

義母はふだん着の上に田舍風に前垂をしめながらさう注意したが、敬介はそれに答へようともしなかつた。瞼がひとりでに合はさつた。

彼の眼には、火葬場の前の茶店の軒先に立つてゐた「大澤家休憩所」と書いた立札が、今も尙ほ不思議にはつきりと殘つて居た。大澤といふのは死んだお八重の姓で、それは昨日野邊送りに行つた時にもそこに立つてゐたのであつた。その時は併し左程にも感じなかつたのであるが、それが今日は特に異樣に眼に立つた。恐らく昨日からその儘そこに立てつ放しにしてあつたのであらうが、ふとそれに氣がついた瞬間、彼は變にそぐはない、一種空漠な感じを受けた。それはその立て札の仰々しさに引換へて、骨上げに行つたのはたつた二人きりだつたからでもあつたらうが、立て札そのものにも、何となく刈田に殘された案山子のやうな、異樣な寂しさが感ぜられたのであつた。彼はそれをば、お八重の存在を語る最後のものゝやうに思つたのであるが、それも今頃は紙を剝がれて、何處かの隅に横倒しにされてゐるであらう、——そんなことがしみ〴〵と考へられた。

骨上げには妻の泰子も行く筈だつた。彼女としても行かねばならぬ場合でもあつたし、又行きたがつても居たのだつた。けれども折惡しく身體の工合が惡るくて行けなかつた。昨日の葬送の時に、これまで曾てそんなためしもなかつたのに、自動車が動き出すと間もなくそれに醉つて、烈しい吐瀉を始めた。遠い郊外の火葬場まで事無く行き着けるかどうかと危まれた位で、最後まで敬介に抱かれたまゝ正體なく苦しみ續け、やつと行き着いて、車から下りると同時に、

その儘地上にへたばつて了つて、暫くは身動きも出來なかつた程だつた。お八重の看護疲れやら心配やら死の打撃やらで、身心ともに弱りきつてゐた爲だと、我れ人共に言つて居たが、實は他にも原因があるのだといふことは、彼女と敬介とだけにはわかつてゐた。丁度悪阻に際してゐたのであつた。で今日の骨上げには、敬介はさうした身體を氣遣つて、無理に思ひ止まらせたのであつた。

『本當に済みませんわね、一人でも多勢行つて、賑かにしてあげるといゝんですけれど……八重ちやんも寂しく思ふでせうし、私も肝心な時にこんな工合で残念でなりません、八重ちやんに對してもあんたに對しても悪るいやうな氣がしますけれど、どうかまあ悪しからず。』

かう泰子はその時義母に詫びるやうに言つた。敬介の義母は、死んだお八重にとつては眞實の祖母にあたるので、それに對する義理もあつたのだ。

『何のそんなことがあらうぞいね、そんなことを氣にかけんと、あんたの身體を大事にして下んせ。無理をして若し病み出されでもしようものなら、それこそ大變や。——ほんとにあの子の爲に、誰も彼も、無い病まで出して了わいね。』

義母もそんな風に上手に言つた。實は一昨日お八重が到頭敢なく息を引きとつて了つた時、敬介はあまりのことにがつかりと氣を落し、不覺にもその場に失神して倒れたりしたので、義母はそのことも含めて言つたのであつた。が兎に角彼女は、始めて自分自身の娘の腹に出來た可愛い實の孫娘が遠い旅先で寂しく死んで、而もその骨を拾ひに行くものが、自分と共にたつた二人きりしかなかつたといふことに對しては、口にこそ出さね内心お八重の爲にどんなに物寂しく、且つ不憫に思つたであらうかは、察するに餘りあつた。敬介自身もまた同じ心で、一層お八重の不幸を憐んだ。同

時にあの大きな立て札の手前、茶店の人達にも何となく氣まりの悪るいやうな思さへしたのであつた。
『私の姪で、田舍から出て來て居たんですが、こちらには外に親類もなし、ほんの私とこばかりなんで……』
などと彼は茶店の主人に向つて、それとなしに餘計な說明まで附け加へた。
『ですが、この方が却つていゝですよ。生中多勢でがや〳〵言ひながら拾ふよりも、あんたと私と眞の身内の者だけの方がしんみりして。』
さう彼はまた義母に向つても慰めるやうに言つた。
『そのこたさうや。あの子もさう思うて喜んで居らうぞいの。祖母（ばあ）さまと叔父さんに骨を上げて貰うたちうてのう。』
義母は竹箸で骨を拾ひ分けながらそんなことを言つて、また一しきり鼻をすゝり上げた。
敬介達が田舍風に、これは何それは何と、一つ一つ念入りに骨を選り分けたりしてゐるのをまだるしと思つてか、又は幾らか餘分にやつた心附に對する禮心からか、中途から燒夫が二人もやつて來て手傳つて呉れて居たが、その中一人の燒夫が、ふと思ひついたやうに、
『まだ極くお若い方ですね。』と言つた。
『えゝまだ……』と敬介が答へた。
『十七か八位の女の方でせう？』
『丁度十八でした。』
『急病で亡くなられたのでせう？』
燒夫は何もかも知つてゐるやうに言つた。

『えゝ、無病も無病も、寝み附いてからたつた五日しか経たん間に、こんなになつて了ひみしてね。』と義母が答へた。

『どうしてそんなことが解りますか？』と敬介は不思議に思つて訊いて見た。

『お骨を見ると解りますよ』と焼夫が答へた。

『へえゝ、さうかね、不思議だね、どこで解るの？』

敬介は全く意外な感に打たれて、まじ〳〵と焼夫の顔を見つめた。焼夫は男女老若によつて各々その骨の異ることをそれ〳〵説明した。

『だが、どうして急病で死んだ者か、さうでないかゞ解るの？』

『長く患つてゐた人のは、どうしても色が黒くて、おまけに蟲が食つたやうにがす〳〵になつて、穢う御座んすがね、あんまり患はずに急に亡くなつた人のは、この通りに色が白くて、透き通るやうに綺麗ですよ。一寸も穢れが見えませんからね。』

焼夫は二三の骨片を掌に載せて見せながら、そんな風に言つた。

『へえゝ、さうかいね。そんなもので御座いますかいね！　こんな灰になつて了うてからでも、そんなことがちやんと現はれてゐるもんで御座いますかいね！　如何なことにもまあ、何ちうあらたかなもんで御座いますやらね！……なむまんだ、なむまんだ。』

義母は如何にも感じ入つたやうに言つて、あたり憚らず聲をあげて念佛を稱へた。

『なるほどね、さうですか！』

敬介も思はず感嘆するやうに言つて、改めて骨壺の中を見直した。なるほどさう言はれるとさうだつた。大抵のもの

は皆な白く透き通るやうに綺麗だつた。或るものの如きは、光澤があるかとさへ思はれた。

純潔な處女！

彼の感傷癖は、そんなことにまでそれを附會して考へずにはおかなかつた。骨が美しいとてそれがなんだ、單に長病であつたか急病であつたかの相違でしかないではないかと思ひながらも、それが恰もお八重の「人」そのものゝ美しさの故であるかのやうに、妙に誇らしいやうな、又慰められるやうな氣がするのであつた。

『さうかいね、國へ歸つたら、みんなにさう言うて聞かせんならん。』

養母もまた同じ思でさう言つた。

『さうですね。まあ、それが國の親達への何よりの土産ですね。』

そして二人とも、また更に涙を新しくしたのであつた。

そんなことなど思ひ出してゐる中に、敬介は我知らずいつからと〳〵と假睡みかけてゐた。

二

午後になつて、敬介はお八重の骨壺を二階の自分の居間へ移した。床の間の地袋の前の板敷の上に、自分の書き物机に白布をかけたのに載せ、一寸としたものなど供へて、それらしい形を作つた。その晩にでも郷里の方へ送つて行く積りにして居たのであつたが、敬介があまりに疲れてゐるのと、せめて一晩は自宅に泊めねばならぬといつて、明日に延ばしたのであつた。一昨日の朝病院へ擔き込んだのだが、その夕方前に死んで了つたので、その儘そこで通夜をして、昨日病院から火葬場へ、そして今日骨となつて戻つて來たのであつた。郷里で本葬を行ふので、まだ戒名がついて居らず、

位牌は白木のまゝであつたが、白木のまゝでも位牌だと思へば疎かにも出來ず、さりとて何處に立てゝ見ても收まりがつかぬので、いろ〳〵とその据ゑ所に迷つたが、結局骨壺の蔭にかくすやうにして置いたのも、何となく佗しかつた。その代りに、偶然にも丁度その十日ほど前に寫した寫眞を出して飾つたが、それがまた更に新しい哀愁と憐憫とを人々の心にそゝる種だつた。それはお八重が東京へ來てから始めて寫したものであり、又生れて始めて寫したものでもあつた。

『矢つ張り何かの知らせやつたのやねえ、今迄寫したこともないもんが、ついその間際になつてそんな氣になつたなんて。』

養母はその寫眞の由來を聞いてから、さう因緣をつけて感慨深く言つた。

お八重が東京へ出て來てから、彼是滿二年にもなつてゐた。それまでに敬介達は幾度も彼女に寫眞を寫すことを勸めた。十七から十八、丁度處女としての發育盛りに當つて居たので、僅かの間にまるで見違へるやうに大きくもなり美しくもなつた。それで、それを見たら鄕里の親達もどんなに喜ぶかも知れないから、一度寫して送つてやれと、機會のある每に言つてゐたのであつた。けれどもお八重は、自分は寫眞は大嫌ひだ、一生寫眞なんか寫さないなどと言つて、從はなかつたが、それがつい最近になつて、何思つたか自分から進んで寫して來たのであつた。

敬介達は、それをばきつとお八重がその許嫁の男に送る爲に寫したのに違ひないと皮肉に推察してゐた。お八重にはもうちやんと許嫁の男がきまつてゐた。鄕里の實家の近所の者で、船乘だが、近々船長の免狀を取る目的で、神戶へ出てその試驗準備をしてゐるとかで、秋になつたら二人はそれ〳〵同時に歸鄕して、すぐ結婚する筈にまでなつてゐたので、お八重もその期を待ちながら、始終その男と手紙の取り遣りをしてゐた。恐らく互に樂しい新婚の夢でも語り合つてゐたのであらうが、十日に一度位宛の割で向ふからも來るし、こちらからもその度に返事を出してゐたらしかつた。

『きつとさうですよ。その男から送れと言つて來たのに違ひありませんよ。さうでなければ、あんなに寫眞を嫌つてゐたものが、今頃何の機會もないのにふいと自分から寫して來るなんて……』

『さうかも知れないな。』

敬介達はその時そんな風に笑ひ話にしてゐたのであるが、三枚の中一枚だけ、出來て來るとすぐ敬介達に贈り、他の二枚はまだ郷里へも許嫁の所にも送らない中に、急に歸らぬ旅に急いだのであつた。

『でも、これでも寫して置いて呉れて本當によう御座んした。でなければ、國の親達に、どんなにいゝ子になつてゐたか見て貰ふことも出來ないのでした。また親達も、せめて寫眞でなりと、面影を偲ぶことが出來ませうから。』と泰子が言つた。

『こんなことにならうと思うて、とりわけ美しいいゝ子になつて寫つとる。この前私が來て見て行つた時よりも、また一段と器量がようなつて……あんた等のお蔭で、こんな立派ないゝ子に仕立てゝ貰うたのに、あら惜しいことをしたなあ！　こんなことなら、寫した時にすぐさま一枚送つて、親共を喜ばせてやればよかつたのに。今となつては、却つて涙の種や。せめて命のある間に、一目でもこの寫眞を親共に見せてやりたかつた。』

義母はさう掻き口說きながら、限りなく愛惜の涙にくれた。

お八重は敬介の異母妹の長女で、去年の春早々敬介をたよつて上京したのであつた。嫁入支度の着物の一枚も自分の手で稼がうといふ氣持で、何處かよい處へ奉公の世話をして呉れといふのであつたが、敬介は自分の姪を、知らぬ他人の家に水仕事などさせておくのが惜しくもあり可哀相にも思つて、外にも女中が一人居たけれど、その儘自宅に置いて面倒を見てやることにしたのであつた。裁縫學校へでも入れてやらうかと言つて見たけれど、本人にその意志がなか

つたので、妻の泰子が特にそれらの事に意を用ひてやることにして、女中並に取扱つてゐた。その中に前から居た女中が歸つたので、彼女はそれ以後台所方面の仕事を一人で引受けて働いて居た。何處か陰氣で內氣ではあつたが、氣立のやさしい穩和な子で、頭も相當に働き、すること爲すことが氣が利いてゐる上に、陰日向なく忠實によく働いて呉れるので、敬介達は此上もなく重寶がつてゐた。自分では少し心臟が弱いのだなどと言つてゐたけれど、ふだんは至つて健康で、風引いて一日寢たこともなかつた位で、暫くの間に急に見違へるほどめき／＼と身體も發達し、眉目容姿も次第に整つて、近頃では、一寸身なりさへ整へれば、何處へ出してもさう恥しくないやうな垢拔のした娘になつてゐた。田舍の高等小學校を出たばかりで、教養といふほどのものはなかつたが、慾目には一寸品もよく、その色白な下膨れの顏には、やゝ人眼を引くに足るやうな情緒的な愛くるしさもあつた。そして何かにつけて叔父さん／＼といつて、懷つこく敬介を賴りにするので、敬介も上べでは女中らしく遇してゐたが、內心自分の娘のやうに愛してゐた。ところが一寸した風を引いたのが基で、それから胃腸を害し、續いて急性の腹膜炎を起して、まるで崖から小石でも落ちたやうに、それといふ間もなく遽々然と此世から消え去つて了つたのであつた。

敬介は呆然自失した。それが定命であつたのだといへばそれきりのものではあつたが、またさう思つて諦めねばならない次第でもあつたが、併し彼はその夭折を惜しむのあまりに、何だか自分の手落か何かの爲に、死ぬべからざるものが死に、死なすべからざるものを死なして了つたのではないかといふやうな、悔恨に責められてならなかつた。勿論敬介達は、彼女を死から救ふべく出來るだけの力を盡しはした。ふだんから誰の病氣に對しても小心な敬介は、お八重が氣分が惡るいといふなり、本人がその要がないと言つたにも拘らず、早速醫者を呼んで診て貰つた位で、決して手遲れなどしない筈だつた。その後の手當や看護に於ても、彼はたとひ親に對しても子に對しても、彼としてはこれ以上のこ

とは出來ないと思つたほど、精神的にも物質的にも精一ぱいのことをした。

『人の力や金の力で出來ることなら、どんなことでも出來るだけのことをして治してやらう。』

それはたとひ身内の者でなくても、その場合誰に對してもさうしたに違ひもなく、またせずに居られもしなかつたゞらうが、實際敬介も泰子も互に心からさう言つて、醫療に看護にあらゆる手段を盡した。

『俺達のこの眞心と熱心とだけにでもきつと治して見せる。またきつと治る。だから安心して居れ。』

敬介は幾度もさう言つてお八重を勵ましたり慰めたりしたが、實際彼はさう信じもし、またそれほどにも一生懸命になつてゐたのだつた。

『僕も志村さん達があんまり熱心なので、その誠意に動かされて、こんなに一生懸命にやつてゐるのだから、さう思つて出來るだけ氣を靜かに養生して、早く治らねばいけない。』

かゝりつけの醫者も、さうお八重に向つて言つたほどだつた。彼はお八重が重態に陷ると、他の病家へは代理を賴んでやつて、殆ど夜晝なしにお八重の側に附ききりで、あらん限りの手當を盡して吳れた。そして結局自宅では此上のことは不可能だからといつて、病院へ送つたのであつた。

だからさういふ意味では、敬介は自分自身に對しても十分申譯が立つた。盡せるだけのことは盡したといふ慰めはあつても、足らなかつたといふ悔は殘らない筈だつた。後は醫者の診斷や手當の問題であつたが、それは倂し彼の力以上のことだつた。早い中に專門の博士といふ人にも立會つて貰つたので、彼にはその場合醫者を信じないわけにはいかなつた。而もそれにも拘らず、敬介はまだ何かしら爲て見ようもあつたのではないかといふ氣がしてならなかつた。

『こんなにまでして貰つて、私はもうこれで死んでもかまひませせん。』

からお八重は烈しい病苦の中に涙を浮べて感謝してゐたが、尙ほ且つ自分の力が足りなかつた爲に、失ふべからざる命を失つたやうな氣がしてならなかつた。何處かでお八重が自分を恨んで居るやうな氣がしてならなかつた。

『本當に殘念で殘念でなりません。どうかしてと思つて、あれだけ一生懸命に出來るだけの手を盡したけれど其の甲斐もなく、大切な子を殺して了つて、國の親達に對しても、どう申譯をしていゝやら、どんなに私達が恨まれるか知れません。』と泰子も義母に向つてその苦衷を述べた。

『何の恨むどころかいね。この私が見て行つた通りに、よくみんなに言うて聞かせるわいね。こゝの家に置いて貰うて居たらこそ、あんなに錢金惜まずに學士樣や博士樣に診て貰ふやら、看護婦の二人も附けるやら、それでも足らいで、終ひに病院へまで入れて貰うやら、あれ以上のことが、何處のお姫樣でも出來ませんわいね。あれだけにまでして貰うて治れ得んもんが、親の側に居ようが何處に居ようが、どうして治れ得ようぞいね、みんな壽命やわいね。錢金の力でも人間の力でも、壽命のないものには及ばんないね。さう思うて諦めるより仕方がない。それよりも、あんた達に大い心配をかけたり、澤山な金を使はせたりして申譯がないわいね。』と義母がしみ〴〵と言つた。

併し敬介には、どうしてもまだ何か氣の濟まないものが殘つてならなかつた。

三

義母と泰子とが階下へ降りて行つてからも、敬介は尙ほ一人二階に居殘つて、緣側の籐椅子の上に疲れた身體を投げ出しながら、いろ〳〵とお八重の追憶に耽つて居た。彼は今にもお八重が、そこの階段の上り口へ、「叔父さん、お客さまです」と言つてあらはれて來さうな氣がしたり、「あゝ叔父さん！叔父さん！」と、絶え間なく病苦を訴へて、といふ

よりも恐ろしい死の手に攫まれて、それから逃れんと救ひを求めるやうに叫びながら、ひしと縋りついて來る哀れな傷ましい姿が眼にちらついたりしてならなかつた。

いろ〳〵の思出の中に、敬介はそれを思ふ毎にニガ〳〵と胸の疼くやうな、何ともいへない不快な、そして前とは異つた意味でお八重に濟まない、心殘りなことが一つあつた。それは彼がお八重に金を借りたまゝ遂に返すことが出來ずに了つたといふことだつた。

それはつい前の月の中頃のことだつた。彼は妻に知られたくない或る事情で、少し金の要ることがあつた。そしてその時持つて居た自分の小遣だけでは十圓ばかり足りなかつたので、彼はそれを一時内證にお八重に借りた。

『何でもないんだけれど、叔母さんに言はないでお呉れよ。二三日の中にすぐ返すから。』

彼はその時になると、金の使ひ途よりもお八重から借りたといふことそのものを、妻に知られたくないといふ氣持でさう口止めをした。そして彼は借りて了つてから非常にそれを恥ぢ且つ後悔した。勿論彼は金の出來次第すぐ返す積りだつた。ところが、内々當てにしてゐたものが入つて來なかつたり、その外いろんな事情で、たつた拾圓位のものだつたに拘らず、月末が近づいても中々返すことが出來なかつた。

『いゝえよう御座んすよ、叔父さん。私要りませんから。』

彼は氣にして何度も斷りを言つたが、その度にお八重は笑ひながらさう言つてゐた。が敬介は始終それが氣にかゝつてゐた。

『併し要るやうなことが出來たら、早速さう言つてお呉れ。何とでもするから。』

敬介は勿論それ位のものは、いざとなれば何とでも出來るのであつたが、態々その爲に他に工面しなければならぬほ

どのものでもないと思つて、そんな風に言ひながら一日々々延ばして、或る所から入るべき金の屆くのを待つてゐた。その中月が代つた。そして金が入つた。彼は早速返さうと思つた。ところがその矢先、丁度その日の午後お八重が床に就いた。初めはたゞ普通の胃腸カタルだといふ診斷で、二三日養生すればすぐ治ることゝ思つてその儘に過した。寢てゐる所へ態々持つて行く必要もない、治つてから返せばいゝ、さうした簡單な氣持だつた。

ところが時間の經つに從つて、容態が思の外に重くなつた。二三時間の中にはもう腰が立たなくなつた。そして小止みなき激烈な吐瀉と下痢とに、異常な苦悶を續けた。敬介と泰子とは、それから丸二日二晩の間といふもの全く文字通り不眠不休で看護に努めた。食事をする暇さへも容易に見出せず、三日目の朝看護婦が來てから、やつと暫くづつでも枕元を離れることが出來るやうになつた位だつた。その間の心配苦勞は一通りではなかつたが、併しまさか急なことなどあらうとは思はなかつた。醫者も、お八重の心臟の弱いことをかなり氣にしてゐたが、餘病さへ出さねば大丈夫だらうと、その方の注意を十分怠らぬやうにしてゐた。

敬介はさうした混雜の間にも、絶えず例の借金のことが氣になつてゐた。後になつて、それがお八重の死の豫感ではなかつたかと思ひ合はされるのであつたが、妙に今の中にそれを返して了はねばならないといふ氣がしてならなかつた。お八重の病狀が惡くなればなるほどさういふ氣がした。けれどもその機會がなかつた。といふよりも、その事がお八重の神經にどう障るかも知れないといふ危惧の念に阻まれたのであつた。

お八重は發病以來、極度に神經が昂ぶつて、一寸のことでも氣にして仕方がなかつた。自分の心臟の弱いことを苦に病んだり、變な夢を見たとか、鳥が啼いたとかいつては死の前兆でないかと恐れたり「瀧」の池(お八重の郷里の家の近くにある非常に冷たい清水の湧く池の名)の水が飲みたいと思ひ出したやうに言ふかと思ふと、その後からすぐ、

『あゝ、あんなこと思つたのも何かの知らせかも知れない』とびく〳〵したりするといつた風で、さうした神經の病み方が、どんなに彼女の病氣に障つてゐるか知れなかつた。で醫者の注意もあつたが、敬介達は出來るだけ彼女の精神を安靜にし、少しでも神經に觸らぬやうに努めねばならなかつた。三日目の朝看護婦が來ると同時に、病室を女中部屋から敬介達の居間に移したが、その時などでも、

『あゝ、私はもう駄目なんでせうね、それでこんな叔父さん達の部屋へなんか連れて來たんでせう！』といふ風にすぐ氣を廻したりした位だつた。殊に看護婦を二人も呼んだといふことが、彼女にすぐに重態といふことを自覺せしめ、一層神經を惱まさせたらしかつた。

『なに、そんなんぢやないんだよ、志村さん達が、二日も三日も一睡もしないであんたの看護をして來なすつたので、二人とも身體が續かなくなつたから、それで仕方なしに來て貰つたんだ。若し志村さん達が倒れたら大變だと心配になつたから、僕が相談もせずに、勝手に連れて來たんだから、氣にしてはいけない。みんなあんたが早く治るやうにと思つてすることなんだから、何事も僕達に任して、氣を鎭めて居なければいけない』

そんな風に敬介達は、特に醫者に賴んで言譯したりたしなめたりして貰はねばならなかつた。その日未明に、敬介達は醫者とも相談して、郷里へ電報で、敬介の義母に看病かた〳〵來て貰ふやうに言つてやつた（お八重の母親は、臨月近い身重で迚も來られぬことが分つてゐたので）。義母は早速來るといふ返電をよこしたが、さて愈々來るとなると、それが爲にまたお八重が喜び安心するよりも却つて變に氣を廻して、精神的に或は意外な打擊を與へるやうなことがないかと、そんな取越苦勞までした位だつた。

兎に角そんな風にまでお八重も敏感になつて居り、敬介達も神經質になつてゐた。そしてお八重には絕對安靜が必

要だつた。そんな矢先に、例の借金を返すことなどは、とても思ひも寄らぬことだつた。それこそお八重に致命的の惡影響を與へるに違ひないだらうと思はれた。而も何とかして今の中に返して置きたいといふ氣が頻りにするのだつた。けれども又その爲に一層彼女を重態に、陷らせはせぬかと憂へられて、どうしても實行出來なかつた。彼はその返さんとして返し得ざる秘密の負債の意識の爲に時々お八重が弱々しい不安な眼附で彼を見つめてゐるのを見ると、若しかしたら彼女がその貸金のことを思ひ出して、自分の心を疑つてゐるのではないかといふやうな、自ら思ふも不快な疑惧の念に惱まされさへした。が、時とすると、彼はお八重が「あゝ叔父さん！叔父さん！」と、堪へ難き苦痛を訴へるのをば、あの金を返して呉れと言はうとしてゐるのではなからうかと恐れることさへもあつた。若し彼女の方からさう言つて呉れたら、どんなに助かるだらうとも思つた。そして幾度も、申譯の爲にそつと寢床の下へでも忍ばせて置かうかとも考へたが、まさかにそれも爲し得なかつた。そして遂にそれきりになつて了つた。

敬介はどんなに殘念に思つたか知れなかつた。償ふことの出來ない罪を犯したやうな悔恨と自責とに苦しめられもした。彼はお八重の病死の爲に、どんなに身心を勞し、どんなに眞心をこめてその恢復に努めたか知れなかつた。さうした精神的や肉體的の勞苦や損害やは別としても、その爲に彼は彼女に借りた金の二十倍も三十倍もの金を費した。これからまた郷里の方へ義母と共に遺骨を送つて行かねばならない。それやこれやで仕事が出來ない爲に生ずる收入の減少などを見積れば、差引何十倍の損害になるかも知れなかつた。さればといつて、それによつてお八重に借りた十圓の金が償却されたことになるわけでもなかつた。

『叔父さんは、到頭あのお金を返して下さいませんでしたわね。』

かうお八重が、今頃冥途の旅路の何處かで恨むやうに言つてゐるやうな氣がしてならなかつた。それを思ふと、敬介は胸も塞がるやうな重い憂欝にとざされるのであつた。

四

義母と泰子とが、女中部屋でお八重の遺物を整理してゐた。明日遺骨と共に行李をまとめて郷里へ持つて歸へる筈だつた。女中部屋は母家から鍵の手に突出て居るので、二階の縁側からは斜めに眼下に見下すことが出來た。窓を明け放つてゐるので、着物を擴げたり疊んだりしてゐる二人の姿もよく見えた。話聲も手に取るやうに聞えた。

お八重はふだんから心掛のよい子で、與へられた給金を一厘も無駄に使はず、少しまとまると、それで郷里へ歸つてから必要な衣類を求めた。僅か二年足らずの中に、勿論上等のものではなかつたが、田舎などでは十分他所行として着られる四季折々のものが殆ど一通り出來かゝつてゐた。帶とかコートとか長襦袢とかいふやうなものも整つてゐた。彼女はそれらのものを大抵袖も通さずに行李に藏ひ込んで居た。時々出してひろげて見ては一人で喜んで居るやうなこともあつた。

『そんなに慾をして藏ひ込んで置かないかつて、折角自分でこしらへたんだもの、少しは着て見なくちやつまらないぢやないの、一枚や二枚着つぶしたつて、お嫁に行く時は行く時で、双親揃うて居るんだもの、欲しいといへば幾らもこしらへて下さるよ。』

泰子は時としてそんなことを言ふことがあつたが、お八重は、

『何の、あんな貧乏なお父さんがこしらへて呉れ得るもんですか。』などと言つて、決して粗略には扱はなかつた。彼女は金は一文も貯めなくともいゝから、その代り一枚でも餘計に着物を作りたい、田舎へ歸れば迚も作れつこはないから、嫁入に持つて行く着物でも、出來るだけ親に心配をかけないで自分で作つて行く積りだなどと、常々言ひ〳〵してゐたのであつた。

泰子は今それらの話をして義母に聞かせてゐた。

『さうかいね、そんなことまで言うて居つたかいね！おゝ〳〵可愛や！それほど儉約に儉約をして、こんなに澤山いゝ着物をこしへながら、可惜しや、一遍も袖を通さんと死んで行つて了うて！』

義母は一枚々々手にかけて見たり横にひろげたりしては、惜しくてならぬやうに兎見角見しつゝ、さう言つて涙に咽んでゐた。と突然、

『はてな、變だぞ、どうしたんでせう、お金が少し足りないやうですわ。』と訝き怪しむやうな泰子の聲が聞えて來た。

『しまつた！』

敬介はそれを聞くと、思はずぎよつとして彈機にはぢかれたやうに椅子から飛び上つた。そして烈しい心の動搖と惑亂とに、まるで逃場を失つた鼠のやうに、部屋へ入つたり緣側へ出たりおろ〳〵になつてそこらを驅け廻り始めた。

『お金が足りないね？』と義母は異樣に緊張した調子で尋ねた。

『えゝ、丁度十圓ばかり足りませんわ。これが先月の給金で、晦日にやつたので、まだそつくり紙に包んだまゝになつてゐるし、この外に、先々月やつたのが十五圓手のつかぬのがある筈ですがね、それが五圓と、端錢が何十錢かあるきりで、丁度十圓札一枚足りませんがね。』

『へえゝ、何處へやつたやらね？』

『不思議だな、あれから何にも買物なんかしないんですから、確かに持つてゐなければならぬ筈ですがね。』

『妙やね。』

『可怪しいな、五十錢か一圓位なら、白粉でも買つたのだらうといふこともあれど……少しまとまつた買物をする時には、きつと私と相談して、私が見立てゝ買つてやるんですから、一人でそんな大きな買物をすることなんかないんです

し、たまで此間その村二重の帶をこしらへてから何一つ買物つてしないんですよ。何處へやつたものかしら。』

『何處か着物の間にでも狭まつて居らんかしら。』

『そんなことはないでせう。いつでもこの財布に入れてゐるんですから。現にその時一緒にやつた五圓札がありますもの。』

そんなことを言ひながら、二人は押入の中から、いろんなこまかいものを取下して、片端から探して始めた。

敬介はそこに居堪らないやうな氣がした。

『あ、それは僕が借りてるんだよ。』

彼はもう少しでさう二階から白狀しようとした。が、どうしてもそれが口から出なかつた。さう言つて了へば、それで何でもなく濟んで了ふのであつたが、それを知つてゐながら、妻に知られたくない事柄で、內證に借りたのだといふつまらない意識にこだはつて、その疚しさに打克つことが出來なかつた。彼は何處かへ逃げ出さうと思つて階下へ下りて行つた。と、彼の姿を見ると泰子がいきなり云つた。

『八重ちやんのお金が十圓ありませんがね。』

そして今義母に說明したやうなことを繰返して彼に聞かせた。敬介はその時も餘つ程白狀しようとしかけたが、併し言葉がそれを裏切つて了つた。

『さうかい。どうしたんだらうな。』

彼はついそんな風に白ばくれて言つて了つた。もう取返しがつかなかつた。弦を放たれた欺瞞の矢は、永久に、且つ絶對に取り戻すよしもなかつた。

『どつかに紛れ込んでゞも居るんぢやないか、あんまり引つくり返すと尙ほ更分らなくなるよ。』

又に彼は、更にそんな風に虚僞の上に虚僞を積み重ねゝばならなかつた。そしてその爲に又一層苦しんだ。彼の聲も手足もぶる〱と打震へてゐた。顏も蒼く色を失つてゐた。もし泰子が、少しでも猜疑の眼を以て彼を見たならば、彼女は立ろに彼の秘密を看破し得たに違ひなかつた。彼は迚もそこに長く立つて居るに堪へなくなつて、逃げるやうに再び二階へ上つた。だがどうしても落ち着いて居られなかつた。死人に口はない、默つて知らぬ顏をして居ればそれきりだ、また今に及んではそれより外に仕方がない、さう思つて出來るだけ氣を鎭めようと努めたが駄目だつた。

義母と泰子とは、まだ矢張り執拗に熱心にそこらを探してゐた。敬介はふと、若しもお八重が何かの覺え帳にでも、彼に貸したといふことを記けてありはしないかと氣にし出した。あんな几帳面な物堅い女だから、或はそんなことをしてゐないとも限らない、若しそんなものでも泰子の眼に入らうものなら！さういふ危惧を抱き始めると、彼はもう居ても立つても居られなかつた。妻に秘密を知られることなんか、もはや何でもなかつた。それよりも、知らない振りをして胡魔化して了はうとしたと思はれ、その心事の陋醜を咎められるのが何より恐しかつた。わけてもそこに義母が居るではないか！どうして顏向けが出來ようか！泥棒とも詐欺とも騙りとも、何と思はれても仕方のないことだつた。どんなに侮蔑され嘲笑されても仕方のないことだつた。それは正に慚死に値することだつた。他人ならまだしも、人もあらうに最も親近な妻や義母の前に、さうした醜惡な自分を曝さねばならないとは、何たる悲慘だらう！

彼は自分で自分の胸を掻きむしつた。そして一度は、袂の中へ十圓紙幣を一枚忍ばせながら階下へ降りかけた。泰子等が部屋中にごた〱引つくり返して居る何かの中へ、そつと投げ込んで置かうといふ氣だつた。

が、次の瞬間に、又もや、さうした欺騙を重ねようとする自分の淺間しさに氣がつくと、彼はもう堪らなくなつて、いきなり袂から紙幣を取り出して寸裂〱に引きちぎつて了つた。そしてお八重の骨壺の前に跪坐し、寫眞に向つて手を合せながら、『お八重、惡かつた、許してお呉れ。』と本當に聲に出して言つた。

（大正十五年十月）



大鹽平八郎

眞山青果

第三幕

時――天保八年正月六七日頃。即ち前場と同日、一時間ほどの後。

處――大鹽屋敷うち、食堂及び勝手向。

舞臺下手寄りに、正面奥より中戶をくゞり、前方に舞臺を縱斷する石敷の露地ありて、家屋を二部に分かつ。露地の上手は家族居住の勝手向となり、下手の建物は塾生の食堂なり。

食堂は十二疊ほどの板敷の部屋。正面に櫺子窓ありて油障子を閉め、下手は賄所に通ふ。木製粗造の飯台を二列に置きならべ、椀茶椀などの食器を置く。壁に食事規定を貼り、板木、柏子木など懸けたり。

勝手向は中の間、勝手の二室にしきられ、中の間の長押には有名なる「胸中觀花館」の横額を懸け、篁笥茶棚等の器具を置き、勝手には竈爐、戸棚、家具棚など備はる。中の間の奥は内玄關に通じ、勝手の奥は下女部屋及び臺所に通ふ舞台装置。器具調度ともに質素にして飾らざるなかに、厳格にして舊慣古風をすてざる大塩家の家風を思はしむ

時は正月松の内なれば、神棚に注連を張り、鏡餅蓬萊かざりなどを据え、又男子出生の祝ひに諸方より送られたる祝儀の品、破魔弓などを飾る。

幕明く。惹生村の人足小頭吉五郎（當時の誤れる思想のために社會の殘虐をうけし同胞の一人）、前場の松樹を運搬し來りし働き姿のまゝにて、勝手口の上り段にうづくまりて酒を振舞はれゐる。平八郎、自身乘り出して酒をすゝめつゝ熱心にその話を聞く。吉五郎、三十四五歳、壯健倔强の若者、やゝ酒に醉ふ。賄方の下男三平、四十歳位。賄所と食堂の間を出入して飯櫃汁鍋などをはこび、塾生晩飯の用意をなす。

平八郎（片頰に笑みつゝ）何、鳩の米？　鳩の食ふ――？

吉　五　いゝえ、公儀から鳩の食ふほどの救米、でござります。

平八郎　公儀から鳩の食ふほど救米、仰山さうに年寄こい〳〵、か。

吉　五　京の衆は、口が惡うございます。（飲む）一竈わづか二合か三合の施米するとて、袴はいた町役を今日も明日もと奉行所へ呼びつけて、書いた紙に判子の二三十も捺させ、やたらに御威光ぶりを振り廻はさつしやるが、町内諸入費の勘定を立てると、お救米などは當日の雜用にも足りませぬ。は、は、、。

平八郎　役人の下情に通ぜぬは、古今の同弊だ。

吉　五　近頃は各町内とも、役所手續を面倒がつて、正直に窮民の書上げなどする者はございませぬ。お役人はまたそれを出世のお手柄にします。さもわが政治が行きとどいて、支配下に一人の貧民も出さぬように、江戸表へ申達なさるげにございますよ。(笑ふ)

平八郎　京都も然うかなあ……。(嘆息)尤も、過日猪飼敬所からなにがしへの書面に、京役人は江戸上役の氣受をつくらふために、無理から祇園の邌物を出させたり、四條の芝居小屋を興行させたり、ひたすら世上の泰平を裝ふてゐると聞いた。

吉　五　(酒にやゝ舌もつれて)旦那樣、それに較べてはやはり大鹽樣々でございます。四年前、それ、巳年の凶作でございます。同じ饑饉でもあの時は、町奉行所矢部駿河樣の御手配が行きとどいて、段々の御救助米も下さるれば、大坂三郷の分限者どもゝみな藏を虛にして施行につきました。表向の功績は矢部樣でも、內實のお差繰はみな大鹽樣の御苦勞と、世間一統みな存じて居ります。

平八郎　(聞きにくそうに)跡部の陰囊ひき！功名にあせるなら、實に今なのだ。

吉　五　同じ市中の落首でも違ひまするな。矢部うれし駿河の富士の山よりも、名は高うなる米は安うなる——今度とは雲泥の相違でございます。はゝはゝゝ。

平八郎　然しそれは、將軍家にも責はある。何分來春は將軍宣下の御大禮を行はせらるゝに、御費用萬端は例によつて大坂町人の獻上金を待たせらるゝ御模樣だ。今日饑饉救濟に豪商どもを疲らせては、來年の御慶事に事を缺く。小賢者の跡部は、たゞそれを憂へてゐるのだ。

吉　五　それ程御信仰の禁裡樣なら、お膝元の京都に、せめて食米ばかりも滿足に送りさうなものだ。猶冬嚴重なお觸出しで、京都輸送米を毎日五百何石と限つたゝめ、京都中は紳にも書かれぬ難澁をなさいます。小前小者の貧民は御器を持たない新乞食になつて、續々と當地へ流れ込み、歷々の町人衆さへ、顏をつゝみ闇にまぎれて五升一斗の飯米をはる〴〵大坂まで買ひに下られます。それを又口々には番屋を据へ、嚴重に人檢めのうへ追ひ返し、ぶち敲き、泣き叫ぶものを召捕つて、例へ二三升の風呂敷米でも、京へは上ぼせぬ手段をなされます。

平八郎　昔もあつた――。(俯向いて、嘆息)葛沿といふ大名は、農人等の辨當まで檢め、持運びする小兒をも打殺したと云ふ……。

吉　五　大坂は天下の御臺所、これを大事に踏まへるには、諸國の難儀まで目がとゞかぬといふなら、まだ知れてゐる。然し、跡部樣は然うぢやない。現に諸方に手をのばして西國米を買ひ煽り、江戸廻米の御用をつとめてござらしやる。それでは關東上役に媚び諂つて、京大坂のものゝ首を締めると云ふものだ。

平八郎　それはおれも聞いたが……雜説だらう。

吉　五　雜說?(頸を立て、平八郎を見る)いいえ、顯然證據がございます。過日、西方與力の内山彥次郎樣が跡部樣の隱密御用をうけて、兵庫表へ御出張になつたのは、專ら江戸御買上米の差略のためでございます。兵庫の豪商北風莊右衞門、こいつ又强慾のけだもので、内山樣はこいつと魂膽をあはせ、西の宮在灘目村に内密の米市場を取り立てて、大坂入津の諸國米を食ひ止めては、悉皆關東筋へ廻漕して居ります。

平八郎　(狼狽するやうに)これ、おれの機嫌をとつてはならないぞ。

吉　五　え、機嫌……?

平八郎　吉五郎。然し、それを眞事として考へて見ろ、容易ならぬことだぞ。跡部はその時、人民の敵だ。民の衣食を奪ふ殘虐は桀紂にも等しいのだ。人民の敵、おれは大坂市民を敵としてゐる——恐らく政治家として、これ以上畏しい自覺はないのだ。彼は一日もその職にゐられるものではない。

吉五　一杯、下さりませ。（平八郎を見て、冷然銚釐を引寄せる）

平八郎　衆怨のあつまるところ巨木も枯るゝと云ふ。然やう惡政あつて、彼が安穩に生きる筈もなく、また生かす筈もないのだ。おれは彼を庇ふのではないが、彼の苦しんでゐる點は認めてやりたい。現在政治の病根は、政府の經濟が疲弊して、餘りに金權に媚びる點にある。城代、奉行、みな大坂商人の鼻息をうかゞつて、統治の權能を發揮しかねてゐる。

大井正一郎、したゝかに醉ふて入り來る。

大井　（蹣跚めきつゝ）先生、何故あの時、わたくしにも云はして下さらないんだ。

平八郎　（大井を見、後ち）後世は金錢が、そのまゝ人間の慾望となつた。融通のために假りに用ひた金錢が今は物品のさかひを越えて、人心を動かすちからとなつた。その金錢が政治の權と結びつく時、そこに諸の邪惡、秕政が行はれるのだ。金力が金權に移つたのだ。好く見ろ、三都と云ふがなかにも、近年大坂金持の放埒無慙さは何うだ。諸大名に貸銀して莫大の利德を得てゐながら、樣々の名目のもとに諸家の扶持米御充行を掠め取り、なほ飽足らず僭上にも、大名家の家老用人などゝ格式まで奪ひ取つてゐる。彼等は恐るべき金力を右に、支配の權力を左に握つて、實に傍若無人………、萬物一體の仁を忘れ、わが得手勝手に政道を曲げやうとしてゐる。

吉五郎、興味なさゝうに聞き、酒を飲む。

大　井　大鹽先生。（兩手を柱に摑み、聲帶を捩るやうにして叫ぶ。）

平八郎　喧ましい。（門弟を叱し、穩かに吉五郎に）金持とは何んだ。彼に何んの產業がある。彼等はたゞ金銀を死藏する無賴の遊民だ。然るに現在の役人奉行は、その無賴遊民の庇護をうけて、辛うじて財政を運用してゐるのだ。金持の前に頭が上らないのだ。金持町人の機嫌をとつて下々の難儀など顧みてはゐられないのだ。今日諸役人ども手を拱いて窮民救濟に誠意がないのは、要するに政治の大權が金力に壓倒されてゐるためなのだ。駄目だ。最早や役人どもなどに待つ時ではない。びつこ馬は撻たれるほど動かなくなる。はゝはゝ。（快然と笑つて）おれも馬鹿だ、びつこ馬を馳らせやうとして、舊冬以來散々手を燒いたのだ。その位に在らざればその政を謀らずの本文を正直に守り、跡部に功をなさせて時務の難を救ふべく、肝膽を砕いて再三再四上書も建白もして見たが、やつぱり駄目だ。駑馬ほど鞭には驚かない。はゝはゝ。この上は金持町人自身を動かして、その反省を求めるより外に策はない。

吉　五　それとて、何んになりませう。（冷然として飮む）世間に食ひ足らぬ者は多く、食ひ餘ると云ふ者は少うございます。

平八郎（むつとして）然し、有り餘るものが足りないものを救はずして、誰が救ふ。

吉　五　救ふ。厭な言葉だ。(吐き出すやうに）手の平からものを投げるやうな言葉だ。

平八郎　なら今の世を何うする。一日二日の稼ぎするものが、何うして一升二百五十文の米が食へぞく

吉　五　成るやうに成りませう。それが世間だ。

平八郎　（屹として）吉五郎、貴樣謀叛を待つてゐるな。

吉五　飛んでもない……！（思はず平八郎を見詰める）

平八郎　（聲を柔らげて）その絶望はいかぬ。誰しも窮民の難澁を憂へぬものはない。

吉五　要へたり救つたり、兩方はなりますまい。はゝはゝゝ。

大井　（又、顔を上げ）先生、宇津木をあのまゝ置かれますか。

平八郎　吉五郎、おれは跡部には失望したが、自分の誠意に失望はしない。第二、第三、第四、建言は順次にやぶり棄てられても、おれは第五、第六の策を立てゝ世を濟はずにゐられない。おれは決心して、鴻の池に行つた。そして當主に說いた

吉五　鴻の池でござりますか……。（冷笑を含む）

平八郎　然う蔑んではよくない。金持とて人間だ、人に忍びざるの心はあるのだ。誠をもつて問へば、誠をもつて應へる。現に六萬兩の救助金に、彼はこゝろよく應じてくれた。

吉五　昔から、神信心と施しとに、身上を傷めた金持はないと申します。

平八郎　然し鴻の池一門は、舊家だ、名家だ。流石に冥利を知つてゐる。

吉五　冥利を知るほどなら、あゝは分限になりますまい。

大井　（上り段にベタリと腰掛け）先生、撲たれてもいゝ。彼は姦物です。彼が世事に超越して見えるのは、一個の俗才に過ぎません。彼は洗心洞の反逆者です。

平八郎　（聞かぬさまにて）吉五郎、おれはこの元旦、衣服をあらためて雜煮の膳に向つて、太箸を取り食はんとして、不圖涙が……止度なく頰を流れてゐる。今市中にさまよふて飢寒に苦しむ人々を思ふと、結構に料理し

た雜煮の餅が、急に咽を下らなくなつたのだ。その時の詩だ。忽思城中多二菜色一、一身溫飽愧二于天一――僞らざるその時の心持なのだ。同時に稲妻のごとくわが心を掠めたのは、何故おれは食つて彼は食はぬか……と云ふ言葉だ。誰でも深く考へて見るが好い、何故おれは食つて彼は食へぬか……考へるほど心に寒く、悚然として戰慄せずにゐられない、人間の大きな問題だ。

吉五　旦那はやつぱり學者だ。わが物差で人の背をはかる。

平八郎　（腹立しげに）何故おれに有つて、彼等には無いのだ。

吉五　それは、問ひにはなりませぬ。餅の無いやつは食ふな、食はずに死ね、斯う教へられて居ります。

平八郎　その世間を慘い、殘酷とは思はないか。

吉五　それまで考へては、われ／＼など生きる場所がございませぬ。

平八郎　然し吉五、人間の本然には善をなさずにゐられない強烈なる要求もあるのだ。如何にお前が拒んでも、その靈性を見ずに居られない時が來るのだ。お前はそれを見る時がある。

この時、中の間の奥にてドツと賑かに笑ふ女どもの聲、聞ゆる。平八郎、屹とその方に耳を立てしが、やがて徐に云ふ。

平八郎　論語にも、均なれば貧しきものなく、和なれば寡きものなし、と云つてゐる。今日の危險は第一、上下貧富の懸隔にあるのだ。上を殺いで下を補む、何よりの急務だ。吉五郎、お前は身分柄にも似合はず、假名つきの經書も少しは讀んだのだ。お前が先に立つて、そのやうな自暴自棄の言葉を發しては相濟むまい。廣く人の煩悶のために考へて、世間の一惡を去ること、農夫の務めて雜草を去るごとくしなければならない。疲れてはい

ないぞ。倦んではならないぞ。獸窮すれば即ち嚙み、鳥窮すれば則ち啄く、民窮すれば則ち騷亂のほかはないのだ。

吉五　何その心配はございませぬ。（冷笑）人間はみなわが世に馴れて居ます。

平八郎　足寒ければ心をそこない、人怨むれば國を傷ると云ふ。おれは、何時その時が來ないとも限らぬと思ふ。嗚呼、このまゝには濟むまい、このまゝには濟まないと思ふ…………。（額に手を加へて、獨語のやうに呟く）

吉五　はゝはゝゝ。（飲む）

美吉屋の妻つね、五十歳、晴れの產衣を飾りし嬰兒弓太郎を前帶に抱きて來る。美吉屋は靱油掛町の手拭仕入業にて鹽田氏、大鹽家の遠き姻戚にあたる。おつねは紋服。平八郎の妾おゆう、これも紋服にて中の間の入口に立つ。養女おみね、おいく、下女など賑かに見送る。

つね　それではおぢい様、和子は初めの宮詣でに行つて參じます。（嬰兒を平八郎の前にかゞませ）この愛くるしい晴姿を、何うか祝ふて下さりませ。

平八郎　（弓太郎を見ず、おゆうの目を見詰めつゝ）この刻限に——もはや日暮れに近い。

つね　祝ひの日は、先に延ばしてはなりませぬ。それに天滿の天神様なら、つい目の先でござります。

平八郎　（苦々しげな目を放して）女どもに委せた、何うでも好い。

つね、嬰兒に一禮させて去る。內玄關の方に賑かなる女どもの笑ひ聲溢れ、やがて火打石の音など聞ゆる。晡方三平、食堂の用意を終りて、戸口に出で、食時の柏子木を鳴らす。

大　井（眠りかけし目をひらき、胡坐を組み）宇津木の處分は何うなさる。僕は今日、破門を覺悟で飲んだんだ。彼は先生のために、心中の賊だ。

平八郎（睨み、舌打ちして）後で、悔むぞ。

大　井　先生はむやみに、彼を重んじてゐるが、彼のこゝろは疾つくに先生を離れてゐる。先生、何故彼は洗心洞の塾頭を受けませんか。彼は足を洗つて大鹽塾を去るつもりでゐる。

平八郎　宇津木が塾を去る――――？（大井を見詰めしが、思返して吉五郎に）吉五郎、おれが斯く時事に熱中するのを見て、自分の善行を急ぐと云ふ者があるかも知れない。老莊かぶれの宇津木などは、おれの性の偏僻を疾んで、惻隱の心も偏すれば民を傷り身を殞すものありと……云ふかも知れない。然しおれは、それは云ふ者の冷淡だと思ふ。われは食つて生き、彼は食はずに死すとの事實を、おれは何うしても自箇分外のことにしては見られない。人は窮民が路上に饑死すると云ふが、おれは一人づつその屍體がわがこゝろの中に斃れて、怨みをもつておれの顏を見詰めてゐるやうにさへ思ふ時がある。恐らくこの性質は、おれの一生の負擔なのだらう。

（歎息）

大　井（突如として、笑ふ）はゝはゝゝ。鍋の中の湯を煮れば湯氣になる。その湯氣を外に漏せば、鍋の湯は次第に減じます。

平八郎（不快さうに大井を見て）それは何んだ。

大　井　宇津木の言葉です。先生を批評した言葉です。その鍋に蓋があれば、湯氣は露になつて又鍋に滴り下りる。即ち鍋の湯は永久に減らないと云ふんです。先生は蓋のない鍋だ。はゝはゝゝ。

平八郎（案外に怒らず、誰に云ふともなく穏かに）おれには中和の性を蓄へず、喜怒の感情を容易に外に漏らすのを、宇津木は惜しんでくれるのだらう。自分にも反省してゐる。然し同時に又おれに云はせれば、怒るべきに怒らず、憤るべきに憤らず、冷然としてわが身のみを守る人間が賤しめられてならない。彼等が學靜を說き中庸を云ふのは、一身の利害から打算して、危險の地に身を近づけないのだ。怒りを憎む輩に限つて、柔弱不振の徒が多い。彼等は德性に口を藉りて、わが心中の利己心を掩はふとするのだ。

大井　その先生が、何故彼の陰柔をゆるして置きます。彼奴は狡猾だ。大鹽學の虛無大虛に口を藉りて、自己の卑劣怯懦をごまかしてゐるんだ。而已ならず、われ〳〵が實學實行に勉めるのを、彼は絕えず批判冷笑して嘲つてゐる。先生がこの凶作に對して斯く苦心するのさへ、彼は始終侮蔑の目をもつて見てゐる。あの超然と、高くとまつて、悟り顏に人を見る目の、眸の底の冷たさを見るがいゝ。彼は學風の破壞者だ。われ〳〵は團結して彼の塾頭たるを拒みます。

舊塾生安田圖書、河合八十郎、吉見英太郎、其他。この間に一二人づゝ食堂に入り來り、銘々おのが膳に坐りて手盛りにて食事す。無言。

吉五郎、自ら水を汲み來りて、自分の膳具など洗ひて、歸り仕度をなす。

平八郎（不圖、咄嗟の思案、坐を進めて）吉五郎！

吉五　は。（見上げる）

平八郎　お前さき程、人は人を救ひ得ないやうに云つたな。

吉五　金持の手からのこぼれ米など、藝もない話と思ひますよ。（不興氣に答へて、膳具を土間の棚に納める）

平八郎　金持にかゝはることではない。人が人を救ひ得られぬかの問題だ。おれは全國の窮民をも、殘りなく救ひ得る仕法もないではないと思ふ。（次第に肩をかどやかせ、歎ばしげに）人間あつまつてこの世間をつくる以上、人が人を救ひ得ない筈はないと思ふ。天地同體の仁があれば、一人と雖も無辜の生民を餓死させる筈はないのだ。

吉　五　然やうでござりますなあ……。（暮迫る外の光を眺めつゝ、草鞋の紐など結ぶ）

平八郎　（一點を凝視して、沈思しつゝ）おれは餘りに重く、金を見た。金が人を救ふと考へたが……。然うではない。人間の誠！（拳にて膝を打ち）これが人間を救ふのだ。

吉　五　貧乏人に生れたも因果、常住人樣に救はれねばなりませぬか。はゝはゝ。

平八郎　何？

吉　五　どれ、暮れて來た。それでは御馳走だちに致します。

吉五郎、歸り去る。大井正一郎、この前より柱に凭れてうつら〳〵と眠る。

平八郎、兩の拳に落着きなくわが膝を叩いて、次第に具體する思案に微笑し、怡しむ。

庄司儀左衛門、手足を洗ひ仕事着を脱ぎつゝ入り來る。用事ありげに平八郎の方を見て躊躇し、やがて力なく食堂に入る。

暮色次第に近づく。この間に食事を終りし塾生等、一人づゝ立ち去る。

大　井　（目を覺まして）先生、わたくしどもの訴へは何うなります。

平八郎　煩さい。考へてゐるのだ。

大　井　彼は僞君子だ。宇津木を塾頭に仰ぐほどなら、舊塾の者は一統同盟して廢學だ。

平八郎　誰かゐないか。この氣違ひを連れて行け。(顏を顰めて立ち上る)

大　井(疊を叩いて)先生。

平八郎　煩さい。あつちへ行つてくれ。(沈思しつゝ中の間の方へ歩む)

大　井(その後を追ふて)先生!

平八郎　馬鹿者。邪魔をするのか。

大　井　好し、頼まない!宇津木に直談判だ!

大井正一郎、反抗的に叫んで出て行かんとするを食堂にありし安田圖書、塾生、三平など走り來りて、喚き狂ふ大井を無理に食堂へ連れ込む。

平八郎、縁側の柱にもたれ、土を見詰めて考ふる。

大　井(一同を睨めて)皆、覺えて置けよ。おれは一度人を斬つた男なのだ。人を斬つたんだぞ。えゝ……勝手にしろ!

大井、自暴自棄に板の間に倒れ、大の字に臥る。

平八郎、何か心に頷き急に小窓を開きて、外方に叫ぶ。

平八郎　吉五はもう歸つたのか。吉五郎……吉五郎。

吉五郎、中戸口より顏を出す。

吉　五　旦那様——。

平八郎（歎ばしげに）吉五郎、おれは今釈然として心の視野が開けたやうだ。今に見ろ、必ず見せるぞ。はゝはゝゝ。金持も頼まない、何人も頼まない。人はその誠をもつて、隣人の難苦を救ひ得るものだと思ふ。

吉五　その事でござりますか、何うか……好しう御配慮を願ひます。（冷かに答へて、去らんとす）

平八郎　吉五郎。

吉五　歸りが遠うござります。御免下されませ。

平八郎（顔を上げ、急に）吉五、お前の居村には難澁人が多いだらう。

吉五　米がこの値段いたします。當節食ひかねる方が、威張つて表を歩るけます。はゝはゝゝ。

平八郎　待て。（小簞笥より金包を出し）中齋の寸志だ。村中の者に、殘りなく配分してくれ。（と投げ出す）

吉五（金包を受け取り）二十五兩包みでござりますか。

平八郎　自然出火などあつて、天滿筋に煙りの見える時は、一村殘らず大鹽の屋敷へ駈付けてくれるやうに頼む。

吉五　ほう……。（怪訝さうに平八郎と金を見較べて）旦那様はそれ程まで……窮民等の暴動を、恐れてござらつしやりますか。

平八郎　おれはお前達より遠いところを見てゐる。盜賊はその主を憎み、民衆はその上を憎む……このまゝぢや濟まぬ。このまゝでは濟まないぞ。

吉五　然やうでござりますかなあ……。頂いて歸ります。

吉五郎、一禮して不審さうに去る。平八郎、また土を見詰める。

塾生等、食事を終りて去る。庄司も食事を終りて、わが食器など片付ける時、宇津木矩之允、門弟岡田良

之進をつれて、食堂に入り來る。微笑をもつて庄司に目禮しつゝ、わが席につく。
大井正一郞、鼾をかきて眠る。

庄　司　（勝手口に立ち寄りて）先生。

平八郞　儀左、險惡な世の中になつたなあ。（笑ひながら坐に戾つて）何うしたのか、上れ。

庄　司　東角組中の者が動搖いたしまして……、平山なども頭を惱めて居ります。（靜に坐りながら）先生、舊冬二十八日の頃、あなた樣は鴻の池の本家をお尋ねなさいましたか。

平八郞　うん？（驚きて庄司を見る）

庄　司　目下の貧民救濟のため、何萬兩とかの醵金を彼等にお迫りなさいましたか。

平八郞　誰が跡部へしやべつたのだ。

庄　司　その時鴻の池は、いづれ一族協議の上といふ御返事であつたと申しまするが、今日までに最早やその應答が鴻の池から參つて居りませうか。

平八郞　それは未だ來ない。おれは商人の資格で說いたのだ。跡部の職責を傷けることではない。おれには……おれにも、一人の人間としての平八郞があるのだ。

庄　司　然やうでござりますか。やはり……事實でござりまするかなあ。（憂はしげに嘆息して俯向く）

平八郞　（不安さうに、言語も少し顫きつゝ）儀左衞門。跡部はそれを誰に聞いたのだ。鴻の池はそれ程おれに……信義をやぶる者とも思はれない。現に、おれが、彼に說くと、彼は淚を流しておれの熱誠に感動してゐたのだ。疊についたおれの兩手をとつて、額に頂かないばかり……今の世には有り難い御志だと、彼は心底から悅ん

でくれた。

庄司　（項垂れて）はい。

平八郎　それが何んで跡部に障はる。一箇の平八郎と一箇の鴻の池との相談なのだ。何も……障るところはない筈だ。儀左衛門、お前も公平に考へて見てくれ。目下の窮民を救ふとは惡いことなのか。私慾もなく、私慾もなく、ただ何んとかして食はせたい救ひたいと思ふのが、何んで跡部を怒らせるのだらう。おれは如何に考へても、疚しいとは思はれない。

庄司　御性質として、お言葉はよく分ります。（溜息）

平八郎　（寧ろ訴へるやうな口調にて）なあ庄司、跡部はなぜおれと手を握り合ふ氣になれないだらう。おれは跡部を敵としてはゐないぞ、却つて彼に名を成させるつもりでゐる。今度の六萬兩も、鴻の池から返事があり次第、おれはそれを跡部の功績にするこゝろでゐた。元來おれは敵をもつ時、極度に苦しむ性質なのだ。敵は持ちたくない！彼の方から打解けて味方になれば、おれは人のために夢中になつて、働く男なのだ。彼自身の功名のためにも、何故おれ一人ぐらゐ籠絡出來ないだらう。おれはそれを思ふと、跡部に會つて、互に膝を抱き込んでトックリと話して見たいと思ふ時すらある。（急に又、わが言葉に興味をもち）駄目かなあ庄司、跡部は虛心坦懷おれの言葉に耳を傾ける氣はないだらうか。おれは、いつでも會ふよ。

庄司　鴻の池の話が斯く惡意につたはりますやうでは、跡部樣の御心も大抵知れて居ります。

平八郎　鴻の池はもう好い。高が町人だ。唯、跡部よ。跡部はおれと事を共にする氣はないのだらうか。

庄司　然やう――。

平八郎　彼とおれとこゝろを合せれば、時局の艱難など何んでもないことだがなあ………。(自嘲的に笑つて)はゝはゝゝ、それも駄目か。まあ何事も、云はぬこと、爲ぬことだ。

庄司　先づ、その外はござりますまい。

平八郎、大聲に然し寂しげに笑ふ。庄司、俯向いて沈思する。

平八郎　(やゝ長き間を置いて、然りげなく)庄司、おれはそれに就いて、折入つてお前に頼みたいことがあるのだが………。

庄司　(顔を上げ)何んでござります。

平八郎　(少しく目を伏せつゝ)お前とおれとの交際はもはや二十年近い。師弟の關係と云ふより、おれは舊い親友として君を見てゐる。君は愼み深く身をまもつて、他の者のやうに容易に僕の心裡中に入つて來ないが、然し始終おれの側を少しく離れて立ち、深切に………おれのこゝろを見詰めてゐてくれるのは、好うく知つてゐる。何人の忠告をも聞かないおれが、時に君が物憂はしく俯向くのを見て………幾度自分に反省を加へたか知れない。

(靜かに云ふ)

庄司　恐れ入つたことでござります。

平八郎　貴公に頼みと云ふのは、やはり目下の救民策だ。

庄司　は?

平八郎　庄司、お前は又かと思ふだらう。然し、おれは何うしてもそれを捨てられない。跡部に建言を容れられないため、我執を貫くと云ふのではない。如何に考へてもおれには、天地に化育されたる同じ人間が、おれは生き彼

は生きられぬと云ふ不合理を信ずることが出來ない。おれは人々とゝもに生きたい、人間總體とゝもに生きたいと思ふのだ。それには仕法がある。人間全體が、共に生きて共に救けるべき、立派な方法があると思ふのだ。それには君等の力をかりて、一つの同盟を結ばなければならないのだ。

庄司　先づ、お考へを仰しやつて下さい。

平八郎　おれは今まで、少數の金持權力者によつて、多數の難民を救はうとしたが、これが間違だ。人間は平等に、一人が一人を救ふ義務がある。これが根本の精髓だつたのだ。人はたゞ一人づゝ、その貧しき隣人を救へばよいのだ。世に貧しき者が百萬あれば、その隣りに百萬の食ひ餘る人がなければならない。おのが力を持つてその一人づゝ窮乏を救へば、天下に飢寒の憂ひはない筈だ。一人が一人を救ふ――この簡單至明なる道理のうちに初めて人道が行はれるのだ。庄司、おれは今日、初めてこの眞理に悟了したのだ。（食堂の物音に耳を立て）誰だ、誰かゐるのか。

宇津木　先生、わたくしでございます。

（宇津木、食事を終りて靜かに勝手口を通りかゝる。）

平八郎　あ、貴公か――。（不快さうに顏を外らす）

宇津木　いづれ先生に御話し致したいと思ひますが……又の機會にいたしませう。（微笑して去らんとす）

平八郎　田舍へ歸つて、靜かに瞑想したいと云ふ、その話か。

宇津木　それもございます

平八郎　洗心洞の弊風に耐へられなくなつたと云ふのか。

宇津木　わたくしは元來虛弱に生れて、煩雜なる都會の生活に適當しないと思ひます。

平八郎　然うか、考へては見やう。然し、君は、僕が昨今しきりに時務に熱中するのを見て、たゞ一旦の客氣、情慾に驅られてゐると見るのではないか。

宇津木　決して然うは思ひません。先生には先生の熱情がありますこ。その熱情に追從して行けない自分の胸中妥なさを、わたくしは始終こゝろに慚ぢて居ります

平八郎　君は悧口だ。明哲にして身を保つの人だらう。

宇津木　――――？

平八郎　（獨語のやうに）然うか。君だけは僕を知つてくれると思つてゐたのだ……。

この時、格子戶の開く音して、宮詣りより歸り來りし女どもの笑聲內玄關に溢れて聞ゆ。

宇津木　先生。いづれ又……お目にかゝつて申上げます。

宇津木、門弟岡田を引連れて去る。平八郎、同く唇を嚙んでその後姿を見送る。

おゆう、おつね、一同と歸り來る。天滿みやげの風車、鯛釣りなどの玩具を携ふ。

ゆ　う　（膝を突きて）只今戾りました。和子も機嫌よう、お宮參りを濟ましました。

平八郎　眠つたのか。（覗き見る）

ゆ　う　町の灯を初めて見て、それは嬉しさうでござりました。

平八郎　そして、美吉屋の內儀は。

ゆ　う　夜が深けるとまた途中が物騷になるとて、お宮からすぐに館に歸られました。

平八郎　（思はず嬰兒の頬を突いて）おゝ笑つた。

ゆう　うぶすな樣にあやされてゐるのでございませう。ちよつと抱いて御覽なされ、また急に重くなりました。

つね　（懷中より神籤を出して）お神籤も八十五番の大吉でございました。

平八郎　（庄司の態度に氣がつき、少し顏を顰めて）屈託がある筈だ。

女ども一同、去る。その間庄司は俯向きて、女どもの方も見ぬように勉めゐる。

詩吟の聲、微かに新塾の方より聞え來る。

庄司　（やうやく顏を上げて）宇津木兄は近頃憔悴して見えますが……。

平八郎　お前も然う見えるか。然し……彼れには何も苦しむことはないと思ふ。その迹を踐まず、亦室に入らず……彼は生れながらにして善人の道を得た男なのだ。（吟聲を聞きて）宇津木の聲のやうだな。近頃毎晩吟聲を發するが、聲に悲愴の調を帶びて……妙に人に迫るものがある。（と聞く）

庄司　（微吟に口吟して）知者は惑はず仁者は憂へず、君胡んぞ戚々として眉雙ながら愁ふ……。陽明先生の詩のやうでございます。

平八郎　うむ、啾々吟だ。おれを諷諫してゐるのだ。（聞く）

月光、窓に明るし。吟聲、なほ續く。

「之を用ゆれば則ち行ひ、舍れば即ち休む。

此の身浩蕩、虛舟を浮ぶ。

丈夫落々、天地を掀ぐ

豈圖て束縛、窮四の如くならん
…………
…………

河合八十次郎、中戸を潜りて入り來る。

八十　先生、平山兄が付添つて鴻の池の番頭と云ふ人が兩名見えました。密々の御用と申されました。

平八郎　鴻の池の番頭？　平山が付添つて來た？　果して破談に來たな。（唇を嚙んで立ちしが、考へて）會はぬと云へ。

八十　はい、然し………

平八郎　鴻の池は大塩を賣つたのだ。會はない！

庄司　（心配さうに）先生。わたくしがその者に面會いたして、然るべく取計つて置きませう。御奉行のお聲掛りとあれば、粗末の取扱ひもなりますまい。如何でござりませうか。

平八郎　貴公の料簡次第だ。おれはもう何事も云ふまい！

庄司儀左衛門、八十次郎、去る。平八郎、瞑目して詩吟を聞き、苦惱に耐えざるものゝ如く、そこにある水汲下駄を穿き、戸外に出んとして、食堂に醉臥せる大井正一郎を見る。

平八郎　大井、大井。（下駄を蹈み鳴らして）正一郎。

大井　（むくと起きて目を擦る）は。

平八郎　大聲に詩吟してくれ、あの聲が、厭なのだ。

大井　は？

平八郎　詩は何んでもいゝのだ。大聲に、あの宇津木の吟聲を壓迫してくれ。聞きたくない、聞きたくない――

平八郎、倉皇として追はるゝやうに走り去る。大井、やゝ狼狽しつゝまた走り去る。

間もなく新塾の方に、二三人聲を合はせて詩吟の聲聞ゆる。詩はいづれも平八郎の新作なり。

『新衣着し得て新年を祝す
羹餅味濃かにして咽を下すに易し
忽ち思ふ城中菜色多し
一身の溫袍天に愧づ』

『一身の溫袍天に愧づ
隱者寧んぞ救荃の心なからんや
…………………
…………………』

月光、障子に冴ゆる。舞台やゝ長き沈默。

平八郎。面色を變じ居の色も失ふて、下駄を鳴らしつゝガタ〳〵と駈け戻り來る。呼吸もせはしく、食堂の前なる手桶より柄杓にて水を飲む。

平八郎　（勝手口に立ち、大聲）誰かゐないか、誰か………。八十、三平、宇津木をこゝへ連れて來い。

おゆう、その聲に驚きて、寢みゐたる嬰兒の産衣を持ちたるまゝ走り來る。

ゆ　う　旦那樣。何か起りましたか、何うなされました。

平八郎　うむ……。（息を嚥み）おれは恐しいものを見た。捨兒を見た。

ゆ　う　え、捨兒？

平八郎　矩之允を呼べ。あの恐ろしい憤怨の背を見せてやる。日頃おれの騷ぐのが輕動か、彼が超然として冷視するのが酷薄か、事實の上に知らしてやる。三平。三平。

ゆ　う　そして捨兒は、何處にあつたのでございます

平八郎　淀川だ。（指差して）木村堤の土手下だ。子も、捨てた親もまだ居る。彼の大虛說は彼の賤しき利己心をまぎらす詭辯に過ぎない。この恐ろしき事實を見せて、彼とて他人の病を疾むことの出來ない卑怯さを恥ぢ入らせるのだ。宇津木を呼べ。

おゆう（何か思ひ定めて）旦那樣、今宵は弓太郎のために、お宮參りの祝ひ日でございます。（靜かに云ふ）

平八郎　それが何んだ。

ゆ　う　あの兒の一生のよろこびに、何うかおこゝろをお宥め下さいまし。近頃は御酒の過ぎるせゐか、些とお氣が……急くやうに思はれます。

平八郎　えゝ、宇津木を呼べと云ふのだ。

ゆう　御自分にはお氣がつかれますまいが、夜お寢みになつても、手足の指先が絶えず痙攣してゐられます。五年前の御大病を思ひ合はせて、家内の者はみな心を痛めて居ります。

平八郎　えゝ、賴まない、自分で呼んで來る。

平八郎、下駄に足をかくる時、庄司儀左衛門、慌しく入り來る。

庄司　先生大聲をなされて何事でございます。

平八郎　儀左。かねておれの變へてゐた日が來たぞ。おれは面白づくに空騷ぎしたのではない。おれは今淀川堤で、恐しい捨兒の現場を見て來たのだ。

庄司　（ギョッとして）捨兒でございますか。

平八郎　三十四五の女だ。夜目にはさまで見窄らしい姿とも思はなかつた。木村堤の土手下にうづくまつて、こちらの氣色を窺つてゐるやうにも思つた。おれは考へ事しながら行き過ぎた。赤兒の啼聲が聞える。振り返つて見ると、女もそこから二三間はなれて、月の下に立つてゐた。思はず聲掛けて女を叱らうとしたが、女は逃げも騷ぎもしない。蒼白い額に月の光をうけて、目の底から見詰めるやうに、ぢいつとおれの顏を睨んでゐるのだ。おれは戰慄して、足が進まなかつた。そこに突ツ立つたまゝ、惘然と見てゐるより外はなかつた。女は懷手をしてゐたのだらう、肩から垂れる兩の袂をブラリ〳〵と振りながら、足も早やめず、見返りもせず、煙るやうな河霧のなかを、靜かに小さく歩み去つたのだ。儀左衛門、これでもまだ何か宇津木に詭辯があるか。端的のこの實例は、何を語り何を示してゐると思ふ。民衆の怨差は何處に向ひ、きたいづくに溢れやうとしてゐる。

それでも猶ほお前達はおれに、世間を見るな、忘れろと云ひ得るか。おれはその判斷を宇津木に聞きたいのだ。

おゆう、庄司、俯向いて無言。

平八郎（間を置きて）おれは何故に、足をつまだつやうな思ひして、彼の歸塾を待つたのだ。純眞なる自分、鎖磨されない自分を、彼のうちに見たかつた。彼はおれの學説に生れて、おれの思想にそだてられた唯一人の子供なのだ。然し三年の遊歴から歸つて來た彼は最早や、おれの血統ではなくなつてゐた。却つておれを苦しめおれを惱ます……心中の賊になつてゐた。おれはあいつの冷やかな眼を見、冷やかな聲を聞き、冷やかに動ぜぬ姿を見る時、不思議にもわがこゝろの平衡を失つて、躊躇し、逡巡し、狐疑して意氣の沮喪するを感ずるやうになつた。深く黒い彼の批判の目は、右に行けば右に立ち、左に行けばわが左にふさがつて、悲しげにおれを見詰める。おれは徒に彼のために氣力を消耗されて……疲れた、苦しくなる。（兩の拳を膝に置き頂垂れる。間。額を上げ）然し、彼はわが生んだ子だ。親としてその儘には棄て置けない。彼の迷妄を醒まし、彼の誤謬を打破するのは、師としておれの責任だと思ふ。庄司、宇津木をこゝへ呼んで來てくれ。靜かに話して聞かせたい。

庄司　はい……。

儀左衞門、おゆうと顏見合はせ、躊躇して立たず。

平八郎（述懷らしく）なる程彼は、おれの健康を要へてくれる。又、圭角の多いおれの性格を悲しんでくれる。然し一度でも彼は、おれのこゝろの惱みに觸れて來たことはないのだ。彼の云ふところはいつも……一身の安危、渡世

の損徳に過ぎない。彼の俗劣なる心匠はこの一事でも知れよう。彼には禍福榮辱のほかに……人間の惱みを知らないのだ。おれは彼を卑しむ、鄙しむ。（庄司を見て）儀左衞門、おれは彼に對する意地にも、この現狀を傍觀してゐられない。彼の批評を恐れ憚つて、善事を行ふに躊躇するのは、われながら萎縮してゐる。おれは彼が屈し伏するまで鬪つて、彼の賤しき利己心を挫いてやりたい。彼をおれの前に跪かせ、恥づるところを知らしむる迄は、飽まで初一念を貫かずにゐない。貧民それ自身よりも、おれは彼を倒すために蹶起するのだ。それが唯一つ、彼のなかに葬られたる自分を蘇らせ、本來のわれを彼のなかに見出す方法なのだ。儀左衞門、宇津木を呼べ、呼んで來てくれ。

儀左衞門、顏をも上げず沈思す。新塾の吟聲、また遠く微かに聞え來る。

おゆう、何か思ひ定めて、少しく坐を進める。

平八郎　（反射性に鋭く、おゆうを見て）ゆう、何か云ひたいのか、おれに何か云ひ出したいのか。

ゆ　う　——？（顫える眸にて、悲しげに平八郎を見る）

平八郎　（險しく急きて）おれのこゝろの惱みとは、お前の思ふことではない。

ゆう、沈默して俯向く。

庄　司　（心配さうに聲を顫はして）先生。さき程のお言葉にも、何か同盟を結んで窮民救濟をなさるやうに承はりましたがそれでは鴻の池の話はやぶれても、外にも御仕法があるのでございまするか。

平八郎　外から來る跡部の邪魔は我慢もする。內からまどはす宇津木の姦邪は惡むべきだ。おれは決して目的を果たさない。

庄司　同盟を結ぶと仰せられますると……?
平八郎　まことに氣の毒だが、貴公の祿米を向ふ二十箇年借用したい。
庄司　(驚きて)何んでございます。
平八郎　おれは今まで、上を殺いで下を恤むこゝろでゐた。跡部に迫り鴻の池に賴んだもそのためだが、それは然し哭つてゐた。同じ人間と生れて、救ふ救はれるの言葉はない筈だ。食ふ者は食はざる者と同體にならなければならぬ。食貨は人間全體のものだ。一人がそれを私して、その餘りを他人に與ふると云ふ法はない。一人食に飽けば萬人も共に飽き、一人饑ゆれば萬人共に饑ゆるのが自然だ、天然だ。その天理をつくして初めて萬民を塗炭の苦しみより救ひ得るのだ。
庄司　はい。
平八郎　(顏色次第に晴れやかに)これには權力者を待つてはいけない。金持を賴んではならない。世に最も乏しき配分をうける者が先づ立つて、その隣人と饑を共にするの模範を示さなければならない。おれの祿高二百石、お前の俸米は十石三人扶持、それを合せたゞけでも事は足りる。燈火はかすかなれども、やがて天を燒くの火だ。兩人二十箇年の俸給を抵當にして金を借りれば、千兩近い金を得るだらう。それを難澁民に分配するのだ。又借入金の元金利息は、銘々二十箇年の儉約をもつて貸方に入金するのだ。如何に思案しても、最早やこの上の方法はないと思ふ。儀左衛門、決して權奇の策ではないぞ、これが人間の常道なのだ。儀左衛門、無理な賴みのやうだが、好く考へて見てくれ。この際の覺悟は、たゞ共に饑えると云ふ一事にあるのだ。
庄司　はい……。

平八郎　お前とおれとが先づ立てば、瀬田、小泉、その他の門弟もやがて憤起するに相違ない。東方與力が全部一致すれば、西方でもその儘にはゐられない。奉行も動き、城代も動けば、八萬十萬の金穀は忽ちにして積み得られる譯だ。何うだ。儀左衞門、何う思ふ。最初、燈火はかすかなるほど好いのだぞ。大勢の門弟に謀らずに、貴公一人に相談するのはそのためだ。

庄　司　（額の汗を拭きつゝ）はい………

平八郎　同意なのか、不同意なのか。明かに云つてくれ。

庄　司　は……。

ゆ　う　（見かねて、進み出て）然し、旦那樣、その御話はいづれ格之助にも……。

平八郎　何？

ゆ　う　兎に角格之助は大鹽家の當主、一應御協議なされずばなりますまいと思ひます。（屹として云ふ）

平八郎　最う好い。頼まない。（不快さうに立ち上り）おゆう、八十を走らして河内屋喜兵衞を呼んでくれ。

ゆ　う　は？

平八郎　藏書をみな賣拂つて施行金にするのだ。藏書はおれのものだ。何人の故障もない筈だ。おれはおれの全部を空しくして、隣人と共に饑ゆるのだ直ぐ河内屋を呼びにやれ。

平八郎、奥の間に去る。

おゆう、儀左衞門、顔を見合はせてほつと大息する。

第四幕

時――天保八年二月八日。前幕より一月の後。

處――洗心洞內、講禮堂。

講禮堂は講堂なり。平舞台。正面に植込の庭及び土藏の一端を見る。講堂は疊二十疊ほどの廣間にて、下手平八郎の書齋に通じ、上手玄關に通ず。床の間は正面上手寄りにあり、田能村竹田筆の王陽明の肖像を掛げ、香を焚く。講堂の右側の棚間には陽明が龍場諸生に示せる立志勤學改過責善の四篇を掲げ、左側の壁上には呂新語の學則十七條を掲げたり。四方の壁はもと書物箱を推く積重ねありたるも、賓書施行のため書籍全部を賣拂ひたる後なれば、壁にその痕跡をとゞめて、縱横に本箱の輪廓を殘せり。

當日は洗心洞歲首開講の日なれば、中央正面に褥をしき見台を置き、論語第二卷を載せたり。平八郎の講席なり。やゝ離れて大鹽格之助、宇津木矩之允の席あり。見台ありて褥なし、その對側は塾生門弟等の席なれば、論語を十二三冊、銘々の坐席に準じて疊の上に開きあり。

暮明く。塾生十數名みなわが席を立ち中央に集りて、喧騷混雜の體を極め、暫くは事態を明かにするを得ず。大井正一郎、腕をまくり足を踏んで「不埒者……おれが處罪する……許して置けない……僞君子。」など絶叫して、混亂の内に躍り入らんとするを、渡邊良左衞門その他二三の塾生にて引止めゐる。岡田良之進は泣顏になり、ウロ／＼と人々の間を駈け廻はり「先生、先生、先生。」と悲しげに呼ぶ。瀨田濟之助は庄司儀左衞門と慌しく囁き合ひ、安田圖書は扼腕して怒り立つ。その他の者はたゞ騷擾混亂するのみ、これ實は平八郎と矩之允が講書の質疑より次第に激論となり、遂に格鬪となりても兩方相下らず、怒罵激越を極めて爭ふなり。

初め平八郎矩之允の姿を見ず、諸生喧雜の間より互に怒聲、斷絶的に漏れ來る。

平八郎　云ふな、必ず云ふな、卑怯に言葉を躱はさないな。

宇津木　云ふとも、云ふ。今日こそ、何んでも云ふ。

平八郎　卑怯者、僞善者！

宇津木　……。

平八郎　貴樣、おれに反抗するか。おれに叛くか。

宇津木　師弟の禮を棄てゝ來たのはそちらだ。誰が、叛かせた。

平八郎　まだ云ふか、貴樣――。

宇津木　仁に當つては師に讓らず、況んや師弟の禮は失つてゐる。

平八郎　僞君子、また聖賢の語を口に飾るか！――。

言語窮りて、格鬪の音聞え、その度に立ち騒ぐ門弟等の位置は混亂す。格之助、急を聞きて慌てふためき、駈け來る。人々を掻分けて爭論の間に入る。

格之助　お父上、何う遊ばしました。父上。

（息を切らして取支ふる）

平八郎　邪魔をするな。こいつ、懲しめてやる。

宇津木　うむ……。（苦しげに呻き）卑怯だ、暴力には屈しない。

格之助　お父上、手をお放し下さい。宇津木兄、逃げてくれたまへ。宇津木兄、危ない、逃げて……。諸君も退いて、諸君、何を呆然として立つてゐるのだ。

塾生一同、左右に開く。平八郎と短之允の姿、初めて見物の前にあり。平八郎は麻上下の禮裝、短之允は紋服に袴。

平八郎は短之允を組伏せ、膝下に引据え、面色蒼白に變じ怒りに聲も顫ふ。短之允、流石に腕力にて抵抗せされどその表情憎惡と憤激に燃えて、頭髮をみだし頬を疊に擦り付けられゐる。格之助、轉動して爲すところなく、たゞ平八郎の腕に縋りつくのみ。

格之助　父上、外聞もいかゞです。お放し下さい。宇津木兄に不都合があれば、われ／＼が制裁いたします。父上何うか……貴方樣の御恥辱になります。

平八郎　學問上の爭ひだ。（格之助を睨み）宇津木、貴樣まだこれでもその邪說を主張するか。飽までおれの講說に反對

するのか。

宇津木　舌なほ有り、志また存すだ。

平八郎　うぬ……。

　平八郎、蹶として宇津木を疊に擦り付ける。宇津木、口を噤んでその苦痛を忍ぶ。瀬田、庄司、格之助、無理に兩人を引分くる。宇津木は起き上りて衣紋のみだれたるを直しなどすれど、平八郎は捩ぢゆがみたる上下のまゝ、宇津木を睨みつけて總身を顫はしゐる。

格之助　宇津木兄、手前は貿書施行のことにつき、河內屋の番頭に應對してゐて、事の經緯は存じないが、全體何うしたことなのでございます。日頃溫潤な貴兄にも不似合な、何が源因で然うまで激昂なされます。

宇津木　（强いて微笑を含み）この破裂は恐らく免れがたき結果だつたでせう。先生とわたくし――、人間と人間との悲しき對立です。晩く早く、來るべきものが來たのです。

格之助　然し、今日の爭端は。

宇津木　論語第九子究の章の講說が今日の源因と云はゞ云ふべきでせう。然し、それは恐らく先生にも枝葉の問題であつて、根本の衝突はまだ／＼深いところにあります。人と人との間の憎み――然う云ふのが適當かも知れません。

平八郎　（屹として）宇津木、お前は憎みと云つたな。おれは君を憎み、君はおれを憎む、その意味なのか。

宇津木　單に感情上の憎惡ぢやありません。人間には――本然の憎惡があると思ふ。

平八郎　貴公明白に、それを斷言し得るか。

宇津木　致します。

平八郎　おれを憎むと云つたな。

宇津木　あなたがわたくしを憎む如く……。

平八郎　異端者！その學説は何人に學び何人を傳統するのだ。

宇津木　何人でもない。恐らくは貴方自身に與へられた觀念に生み出されたものと思ふ。わたくしは何人の子でもない。やはり大鹽學の正統だと思つてゐる。

平八郎　邪道奴、この――。

（平八郎、宇津木に躍りかゝらんとす。人々、その間に割つている。）

格之助　（父を支ゆるやうにして）お父上、河内屋の番頭から施行について口上がございました。

平八郎　うん？（仕方なく格之助を見る）

格之助　今日安堂寺町の本屋會所に於て、かねて配布せる施行札を引換えに一人一朱づゝ施行いたし、晝前締切までに引渡しました劵面がこの通りでございます。（使用濟の施行札を出し）總數四千二百五十七枚、これを金高に直して二百五十兩餘り、滯りなく相渡しましたさうでございます。

平八郎　昨日の施行高は？幾何ほどゝか云つたな。

格之助　昨日は午前午後ともに統一いたして、札數三千四百六十幾枚、金高百八十幾兩になります。

平八郎　昨日一日より今日晝前の施行數が、遙かに多いではないか。

格之助　昨日はまだ施行の趣意が鄕村まで、よく通達いたさなかつたと思はれます。施行札をうけた村々でも、大鹽様

が何故自力にて斯く莫大の施行をなさるゝか、藏書全部を賣拂つて六百二十兩の大金を貧民に施されるとは合點がゆかぬなどゝ、却つて疑惑するものが多かつたと申します。

　平八郎、熱心に宇津木を凝視する。宇津木、聞かぬさまに空嘯きゐる。

格之助　半信半疑ながら施行劵をうけて、昨日安堂寺町の會所に參つた農民どもゝ、滯りなく金子の施行いたされるを見て、初めて父上の廣大な御慈悲に驚いたものと見えます。感嘆して銘々の居村に歸つて吹聽いたしましたので、今日はもう早朝より押すな／＼と書林どもの店先につめかけ、大鹽樣の明神樣のと叫んで、大層もない雜鬧を極めたと申します。

平八郎　(宇津木を睨み、聲のみに笑ふ)はゝはゝゝ。

瀬田　そりや然うなくてはなりますまい。奉行は手を拱いて爲すところなく、鴻の池天王寺屋の豪商どもさへ未だ何んの催しもなき時、先生御一身の慈善をもつて一人一朱づゝ、一萬人近い施行をなされるのでござります。驚くのが當り前と思ひます。

平八郎　それで、施行は三日間だ。今日の午後明日に殘る金高はどれほどあるのだ。

格之助　昨今兩日にて三百四十兩ほどでござりますから、未だ殘金が……三百兩近く、かれこれ五千枚ほどの施行劵がまだ引換えられずにある筈と思ひます。

平八郎　一人一朱の金は些少なものかも知れない。然し一萬人の大衆に、例へ僅少づゝでも難澁を救つた譯になるのだ。はゝはゝゝ。

庄司　一朱の金があれば白米が一升、麥が三升買はれます。どれほど貧民の潤ひになるか知れませぬ。

大　井　(宗津木に冷笑を送りつゝ)京都町奉行所の救米が一軒あてに三合とか聞いた。一大鹽家の施行が一朱銀一つ……はゝはゝゝ。こりや鳩の食ふほどではなかつたと見える。

平八郎　(宇津木の目を離し靜かに)おれが施行を思ひ立つた時、耕すや餒その中にありと云つて、おれの所行を冷笑したものがあると聞いた。民は食に飽く歳あり又饑ゆる歳あり、過不足もまた自然の妙理にして、人力をもつて動かしがたいと達観して、おれの焦燥を嘲つたやつがあると聞いた。然し、おれの讀んだ論語には、然やうな無情な言葉は斷じて見當らなかつた。聖人は斷じてさる冷酷の言を發すべきではないと思ふ。おれは論語の本文を耕すやとは讀まぬ。耕すも餒その中にありと讀んでゐる。然う讀んで初めて、下文に、學べば祿おのづからその中にありの格言に光を發するのだ。聖人の至言は小人輩の推測分量をゆるさぬ。佞辯口才の小人ほど世間を誤る者はないのだ。

宇津木　先生！(屹として進み出る)

平八郎　何んだ。

宇津木　その諷刺はわたくしに當るものと思はれます。

平八郎　おれは道聽塗說するのだ。必ずしも足下を云ふのではない………然し、論あらば聞く。

宇津木　わたくしは先生が三十年の苦心をもつて集められた書籍を、一朝にして賣拂はれるのを悲しみました。民に施さるる恩惠を惡事とは思ひませぬ。學者の藏書は賈人の財に等し。一時の情勢に憤激して終生の悔を殘さるゝのを恐かしと思つたのだ。

平八郎　女は面に白粉を塗る。紅を裝ふ。その女が紅粉を廢して世の窮民を救つたら、君はそれを何と云ふ。

宇津木　美譚と思ひます。

平八郎　學者が書籍を賣る、女の白粉を廢すると何の相違がある。見よ、滔々たる天下の讀書生、書を讀み文を飾ると雖も、一人として婦女子の嬌態をつくらざる者あるか。書籍は學者の白粉だ。その粉飾を撤して眞當頭に立つ、それこそ實學、大鹽學の骨髓なのだ。

宇津木　極端の論だ。（不快さうに口を噤む）

平八郎　極端だ？

宇津木　傾けば溢れるまで傾くのは御氣性です。善を責めても、又惡を悔むも、先生は必ずその極端を極めずにはゐられない人です。わたくしには從つて行けません。

平八郎　利口なものは溺れる河に近づかないとよ。

宇津木　然うかも知れません。然しそれは利口のためではない。わが分を量つて自ら止るところを知り、その矩を踰へません。

平八郎　不快だ。聖經の文字を口にするな。（横を向く）

宇津木　然うですか。

不快なる沈默。

平八郎（卒爾して口を開く）貴公は滿坐のなかに師說を嘲弄して、禮を失つたとは思はないか。

宇津木　學說は曲げられません。

平八郎　門人子路が孔子に仕へるに、家臣の禮をとつたのが何故惡いのだ。それを過ぎたりとして退けたまふのは聖人

の美德であらうが、師父を尊敬するのあまり、臣子の禮をもつて仕へた子路の眞情には、むしろ倣ふべきところがある。

宇津木　然し孔夫子は、たとへ道路に斃れ死すともその詐りをうけないとまで憤つてゐます。

平八郎　聖人にも固執はある。孔子の謙遜と見てもいゝ。

宇津木　然うは思ひせん。(頑固に首を振り)然うは思ひません。

平八郎、口を噤んで蒼白なる宇津木の顔を睨む。

瀬田　宇津木兄、何うしたのだ。(執成すやうに肩を叩きて)それではまるで言便佞めに過ぎない。先生の趣意は、たゞ弟子として師匠に對する子路の深切を說かれたのだ。

宇津木　いや、違ふ。それでは、臣なくして臣ありとなす、吾れ誰をか欺かん、天を欺かんや、とまで切言されてゐる孔子の金言が意義を失ふ。倫理上の大問題だ。

平八郎　宇津木、明かに斯う云つたら何うだ。不德義の大塩中斎には、家臣の禮をとつて仕へるに忍びない、と。

宇津木　(同じく睨んで)あなたこそ然う云ふがいゝ。一切の自分を棄てゝ、臣下のごとく、奴隷のごとくわが前に屈從せよと、云ふがいゝ。

平八郎　わが教育した門弟は、師匠のものではないのか。

宇津木　自分のものだ。

平八郎　何――。

平八郎、思はず呻きて立上らんとす。格之助、支ゆる。

宇津木　矩之丸のごとき、君とするところ微なりと雖も、井伊掃部頭がある。何者と雖も、その他の支配は決して受けない。

平八郎、顫えつゝ睨む。悲憤の涙その瞼に溢る。

宇津木　あなたは宇津木を、臆病利口者になつて長崎から歸つて來たと云ふ。寧ろ僕は、勇氣をもつて歸つたと云はれたい。僕が虛無說を擴張して、一切を傍觀し、無抵抗の態度をとるのを、あなたは臆病のためと思ふのか。わたしは總ゆる權力を拒否するために、この冷淡を保つてゐるのだ。あなたはわたしの言葉を濫るしとして、心に戰ふ言葉を出せないもの丶やうに云ふ。わたしは最も靜かなる言葉を發する時、常に最も心中に戰ふてゐるのだ。僕に云はせると、あなたこそ臆病者だ。無類の怯懦者だ。あなたはわたしに離れたいと云ふが、あなたはその轍に堪へ得られる人ではない。

瀨田、庄司等、氣をもみて制止せんとすれども、宇津木は亢奮して聞かず。蒼白になりて目には涙さへ湛ふる。

格之助、平八郎を退坐せしめんと勉むれども、平八郎は微かに首を振るのみ。動かず。

宇津木　あなたは自著洗心洞劄記のなかに、厲聲疾呼して大虛の靈を說き、永遠を說き、人生の不滅を說き、さかんに君子の陽德剛性を主張してゐる。然しそれは寧ろあなたの、人間としての弱さと不安から來る溜息なのだ、懺悔錄だ、呻吟語だ。あなたは病氣にも弱く、性格にも臆病者だ。あなたは始終肺病に抵抗して、酒を飮み寒威を冒すと云ふけれど、實は絕えず死の恐怖に苦しみつゝ、纔かに逆行によつてこゝろの不安を紛らしてゐるのだ。又、あなたは劄記のなかに、名聞を惡み、富貴を惡み、榮達を惡んで蛇蝎のごとく厭ふてゐるのは、その

名聞に驅られやすき自分、富貴榮達に動かされやすい自分の弱さを恥ぢ恐れて、強いて虛無の貝殼のなかに身を閉ぢようとしてゐるのだ。あなたは善を急ぎ悔恨を急ぐ、みなその同じ弱さから來てゐる。恐らくあなたほど過去の自分に執着する人はあるまい。わが行爲の善惡がいつまでもこゝろに殘つて、水牛のごとく絕えずそれを反芻してゐる人だ。天地は流轉する。何故もう少し自性を深め强めて自個を他人として眺められないのです。善事もまた人生の一過事、惡事もまた一過事、過去を過去として徒らに停滯せぬところに、流通無碍の生命を見ると思ふ。

平八郎、何か云はんとして能はず。寂しく口を噤む。

宇津木　あなたは常に自ら寄くと傲語しながら、何故に他人に鞭朴を待ちます。他人の鞭を待つのぢやない。實は他人の憫み他人の赦しを迫つてゐるのだ。人によつて赦されやうとする本來の弱さは洵に同情すべきだが、藩籬を超へて他人の心中まで浸入して來る貪婪さには、實に厭ふべきものがある。あなたは當に己を賴まなければならない。人の熱に因つて生きようとするのは卑怯だ。

平八郎、やゝ頂垂れる。一同、肅然として目を伏せる。

宇津木、淚を帶びて傷ましげに師匠の姿を見詰むる。

宇津木（やゝ間を置きて）先生。あなたは御自分の憔悴に氣がつかれませんか。わたしは長崎から歸つて、第一にあなたの衰へを見た。病氣も進んでゐますよ。こゝろも疲れてゐます。先生、御自身の過失を悔悟なさるのはいゝ。然しさうあなたのやうに、間斷なく自分を責め苛んでは、お體をやぶりますよ。たとへ御自分の肉體でも、然うまで苦しめるものではありません。あなたは悔まんがために悔み、悔恨を玩弄してゐるやうにさへ見

える。先生、あなたは物に拘泥し過ぎる。わが讎とて、赦す時には赦さなければなりません。

平八郎、無言。

宇津木　なる程先生の近狀には、俗人にもあるまじき失行があつた。然しそれとて致方はありますまい。自ら赦さないで、他人の誰がその過を赦し得ませう。あなたはもはや嬰兒さんを膝に抱かれてゐる。本性のまゝに愛されてゐると思ふ。過ちのあるところに人間を見る。あたしはあなたの過失を見て、却つて人としての親しみを覺えたやうな氣さへした。（坐を少し進め）先生、哀しみは心の死より大なるは莫しと云ひます、又、過ちを恥ぢて非を作すなかれ、とも云ふ。君子の過ちは日月の蝕するごとく、萬人をして仰ぎ見させなければならない。先生、この時は一段の功夫を進められる時と思ふ。——これでわたくしは云ふだけ云つた。口を噤ぢます。

宇津木、腕を組みて眼を瞑ぢる。平八郎、黯然として俯向くのみ。

一同顏を上げず。

暗澹なる空氣、一坐に漂ふて長き沈默つゞく。

宇津木　（亢奮やまず、不快なる沈默に堪へさるもの丶如く、目を瞑りしまゝ又不用意に口を開く）跡部の事件も然うだ。炮術修業とて然うだ。あなたには、物を窮めるよりは、物に溺れる習癖がある。小兒が火弄をして、身を燒く危さにまで近づくやうに、あなたは不安恐怖に驅られるほど、その危險の方に引擦られて行く人だ。火藥製造も奉行所の氣受けがよろしからぬと知れば知るほど却つて深入して、大炮をつくり棒火箭地雷火のごときまでを製造して、われから危險を冒さずにゐられないのだ。

平八郎、ヂロリと目の隅より宇津木を睨み、また力なく嘆息して俯向く。

宇津木　(自ら默止せんとして能はざる如く、又云ふ)あなたの救民策なるものを御覧なさるがいゝ。第一策には誠意があるが、第二第三と切迫するほど次第に詭道に墜ちて、權變可不思議のものになる。經濟の政策としても次第に鄙劣なものになる。これは奉行に勝ちたいためではない、本心は跡部を恐れてゐるのだ。小兒が水溜りを歩いて、新しい下駄をよごすことを恐れながら、やはり一思ひに水に踏込まずにはゐられなくなるやうに、あなたは跡部を恐れる不安から、却つて身を危きに近づけるのだ。

平八郎　(やゝ侮蔑の苦笑を洩らしつゝ)一身の問題は君の折檻も受けやう。然しわが學說性質までさかのぼつての批判は、寧ろ君の云ひ過ぎであらうと思ふ。今日は答へぬ。(靜かに立ち、書齋の方へ歩む)

宇津木　云ひ過ぎではない。あなたの迷妄を折伏するのだ。

平八郎　中齋の經濟は迷妄か。

宇津木　發足を誤つてゐる。

平八郎　天下蒼生を憂ふるは惡事なのか。

宇津木　行爲を先にするが惡い。學者は、先づ思ふべきである。

平八郎　(喉に音して唾液を飲み、されど靜かに)禹は天下に溺るゝ者あれば、已れこれを溺らすが如く、稷は天下に饑うる者あれば、已れこれを饑ゑしむる如く、そのこゝろが痛んだと云ふ――

宇津木　天道は循環す。天は人の寒さに苦しむ故に、その冬を緩めない。

平八郎　外道――

平八郎、躍りかゝりて宇津木の髻を摑み、引据え引廻はす。塾生門弟等、これを止めんとして能はず、たゞ

喧囂騒亂するのみなり。宇津木、最初は少しは抵抗を試みたれど、後は觀念して爲すがまゝにまかせる。

橋本忠兵衛、（般若寺村百姓、中齋門人、平八郎養女おみねの實父）羽織袴の姿にて賣書施行の本屋會所より馳付け來る。羽織の袖などほころび、泥にまぶれ、面色も甚だ亢奮してゐる。

橋本　（兩人を引分けつゝ）先生、何んの眞似だ……何んの眞似だ。先生、また氣違ひの眞似をさつしやるか。

平八郎　（宇津木の兩腕をつかみ、對座して）さ、まだ云ふことがあるだらう、云へ、云へ。鬼畜……惡魔……。

平八郎、肩息になりて宇津木を引き廻はす。

橋本　先生、それよりも大事が起つた。先生、御奉行所から今日の施行に故障が出た。跡部樣から難題を持ち込んでござつた。

平八郎、思はず手をとゞめて忠兵衛を見る。

橋本　跡部樣の爲され方は實に陰險極まる。百姓ながら腹を据へかね、わしはこれからお役所に暴れ込まふかと思つてゐる。

平八郎　（宇津木を突き離して）施行がならないと云ふのか。

橋本　それならば未だ男らしい。然うぢやない、今日の施行の行事、河内屋喜兵衛、新次郎、記一兵衛などを引ツ立てゝお取調べが初まつたのだ。何んでもこれは、徒事では濟まぬ、濟まぬ。（平八郎の耳に口を寄せて）容易ならぬ風説もござりまするぞ。

平八郎　（屹として）風説とは、平八郎を縛るのか。

橋本　（兩手に後頭部を抱き、絶望的に叫ぶ）覺悟だ、覺悟だ。

平八郎　覺悟とは、謀叛だ。役所へ踏ん込んで、跡部と差違へて死ぬのだ。皆、その覺悟をしろ。

平八郎、一同に命令しつゝ不圖宇津木と視線を合はせる。互に見詰める。そのうち宇津木の面上には冷然たる詆笑漂ひ、そを見る平八郎の目は弱々しくたじろぐ。

この間に格之助、瀬田、庄司など額をあつめて忠兵衛と囁き合ふ。大井、安田など舊塾生等は躊躇して言ふ。

庄　司　(進み出てゝ)それでは手前はこれから格之助様のお供をいたして、役所の模様を窺つて參りませう。今日の講義初めに鄉左衛門が參會しないのを不審と存じましたが、かならず何か仔細がござりませう。

格之助　われ／＼の歸ります迄は、何事も穩便に願ひます。

格之助、庄司、倉皇として出て行く。

平八郎　(坐に戻りながら)忠兵衛、今日の施行は如何いたした。

橋　本　會所に寐張りして、今日のところは中止しました。

忠兵衛、腕組みしつゝ不機嫌さうに答ふ。

平八郎　奉行所の許しを得ぬのは、越權の振舞ひとでも云ふのか。

橋　本　何うで……そんな事でもござりませう。

平八郎　容易ならぬ風聞とは？

橋　本　いづれ追々と分りませう。(溜息して、凝つと考へ込む)

平八郎、不安さうに口を噤む。間。

橋本　（忌々しげに舌打ちして）宇津木さん、あなたも部屋へ歸つて、休息なされたら何うだ。

宇津木　然う致しませう。良之進。（一禮して立つ）

平八郎　宇津木。

宇津木　は。

平八郎　貴公の歸國の願ひは、まだ許してはゐないぞ。

宇津木　門生の札をかける以上、致方ありません。

宇津木、良之進をつれて靜かに去る。

橋本　その執拗にも困る。この場合、何んの時と思ふ………。（苦々しげに平八郎に呟き、氣を換へて門弟等に）諸君、今日の講義びらきの酒がござりませう。こゝへ出して下さい。諸君もまた襖を排つて、今日は大にお飲みなさるがいゝ。

門生、塾生、去る。瀬田、小泉等は殘る。

橋本　瀬田さん、まあお坐り下さい。（と坐をゐざりつゝ）先生にもあぐねます。何んがため宇津木一人を然う目の敵になさるか、わしには分らない。憎い者なら破門なされればいゝだらう。

瀬田　宇津木兄も、然し穩かではありません。今日の顏色など、全く狂氣の沙汰としか思はれない。わたしども先生の御我慢に驚き入りました。

小泉　少しく慢心もございますよ。何うも然う思ふ。

橋本　逃げる者を追ふ……何んせい、未練だ。

塾生等、足つきの廣盃に口取肴、酒肴など載せて持ち來る。酒は湯桶に入れたり。門弟等も上手の襖をはづして酒宴をひらく。但し見物席より見ゆるは二三子の後姿に過ぎず。

橋本　（眞先に盃をとりて）さ、頂きませう。先生、如何。

平八郎、淋々と盃をうけ、口もつけずして下に置く。忠兵衞、瀨田等は互に酌して飮む。

平八郎　（間を置き、辯解するやうに）忠兵衞。おれは必ずしも愛惜心によつて、宇津木に對するのではない。彼が切りにわが學說を曲解して、次第に異端に傾くのを惜しむのだ。彼にはあの蘊蓄があるだけに、弊害もまた甚だしいものがある。

橋本　あなたは、拘泥し過ぎるよ。わが生んだ實の子さへ……自由にならないのが世間だ。

忠兵衞、何か心中の鬱結を拂はんとするものゝ如く、たゞ酒盃を急ぐ。

平八郎　然し――

橋本　それを云つてゐる時ぢやありますまい。

平八郎　然し、宇津木はおれを憎んでゐるとは思はれない。彼は長年の弟子だ。彼の性格の淵底は知つてゐるつもりだ。

橋本　（橫を向いて）瀨田さん、一つ頂きませうか。

平八郎、無言。

渡邊良左衞門、（洗心洞門人、東組同心）顏色を變へて走り來る。

渡邊　先生、參りました。お役所から參りました。

平八郎　（思はず聲立てゝ）誰が來た！（と立上る）

瀨田、忠兵衛等も驚く。隣室の塾生等はドヤ〳〵と走り來り、閾際に立ちて聞く。

渡邊　平山君が附人となつて、御隱居役の荻野勘左衛門どのが御出張なされました。

平八郎　門前に……高張提灯などないか。

渡邊　いゝえ、いづれも平服のまゝ木履がけでございます。

平八郎　（やゝ落着いて）然うか。客間へ通して置いてくれ。着物を換へて會はふ。（奥に入る）

渡邊、去る。塾生等も隣室に退去す。

瀨田　忠兵衛どの。（不安さうに低聲）最前、容易ならぬ風説と云はれたが、何か先生のお身柄にかゝはるやうな話でも……。

橋本　いや、大抵大丈夫だ。そんな事は……ございますまい。（口尻を噛みつゝ心配さうに客間の氣勢を窺ふ）

瀨田　然しそんな無法をなされては、それこそ世間の騷動だ。兎に角、役所へ詰めて見ませうか。

小泉　この際の施行が……罪になるとは思はれないて。

瀨田　待て〳〵、今に樣子が分る。庄司が行つてゐるから、役所の方は氣遣ひあるまい。

小泉　それでも若し――

瀨田　（顏を顰め、睨む）騷ぐなよ！

一同不安さうに沈默する時、隣室俄に騷がしく、何か罵り合ふやうな聲、斷續して聞え來る。

瀨田　何んだ〳〵、大井だな。何を論じてるんだ。

小泉（腰を立てゝ聞きつゝ）相手は……平山だ。平山のやうだ。

大井正一郎、平山助次郎（洗心洞門人、東組與力）と論爭する聲、次第に明瞭となる。但し、姿を見ず。

平山　その詰問が甚だ不快だ。僕は洗心洞門人として、君等よりは遙に先輩なのだ。

大井　然らば何故に、近頃洗心洞を疎遠するんだ。

平山　町目付の役儀は、例へ師弟の間柄でも、私の交際は遠慮しなければならないのだ。

大井　何故今日の使をうけた。跡部に諂つて何故使者に立つた。

平山　口上役は荻野氏だ。おれはたゞ附人として同道したまでだ。現におれは應對の席にも出ず、玄關に待つてゐるではないか。

大井　貴公、大鹽塾の學則には飽まで背かぬな。

平山　入門の時、盟約書を入れてる。おれは弟子だ。

大井　今日の使は何んの使だ。先生を罰するのか。

平山　おれは知らない。その役の者に聞くがいゝ。（突然、聲立てゝ）何をする、亂暴者！

大井　貴樣は先生を探索してゐた、跡部の犬だ。

平山（少しく怯えたる聲）これ、何をするんだ、何をする。

大井　跡部の口上を云へ。先生は蟄居か、追放か。

平山　知らん。おれは只、荻野の附人に來たのだ

大井　何い。

膳椀を踏み割る音。亂暴する大井を取り支へて人々の立ち騷ぐ間に、怒號する大井の叫聲聞ゆる。平山助次郎、顏に投げかけられし酒を拭きつゝ、門生に押し隔てられて、講堂の方に姿を隱はす。

橋本　平山さん、又大井君の亂暴ですか。

平山　先生の探偵に來てゐると思ふのだらう。亂暴者！

瀨田　時に役所の模樣は何うだ。(小聲)むつかしくなりさうか。

平山　僕にや何んとも云へないよ。先生の出やう一つだ。

小泉　然し、眞逆に表立つてお咎めなどはないだらう。

平山　さあ………、兎に角先生の返事次第だらう。

小泉　平山君。そんなに切迫してゐる御模樣か。

瀨田　困つたものだ。(嘆息して腕を組む)

橋本　(顏を上げて)皆さん、こりやもう仕方ありません。あの御氣性では、制して止まる人ぢやない。行くところまで行くもよからう。何うせわれ〳〵も連坐は遁れますまい。(食を飲む)

隣室の大井正一郎、一同のとゞむるも聞かず、平山を惡罵しつゝ講堂に闖入し來らんとする時、平八郎、顏色惡しく悄然と客間より戾り來る。大井を一瞥したるのみ、無言その坐につく、大井、畏縮して薗際に坐る。

平山　(平八郎を見て)荻野氏はもう歸られましたか。

平八郎　いま歸つた。が、御用濟みになつたから、君は自宅へ引取つてもよいとの傳言であつた。

平山　然やうでございますか、それでは手前………。（と立掛ける）

瀬田　待てよ、平山。何か先生のお話があるだらう。

平山　うん、然し、些と用事もあるのだ。

平山、迷惑さうに坐す。大井、膝を立てゝ平山を威嚇する。

渡邊、吉見等の同心等も心配さうに隣室より窺ふ。

瀬田　先生。それで、御奉行様の御察當は何う云ふ名目なので御坐ります。施行を何うせいと仰せられました。

平八郎　いや、橋本の悲憤する程ではない。案外穏かなものであつた。格之助がわが組につとめる以上は、例へ平八郎一己の慈善なりと雖も、一應山城守まで屆出づべき筈と思ふが、その事のないは如何なる御存念か、承りたいとの口上だ。

橋本（膝を進め、鋭く）何んと答へられました。

平八郎（一同の思はくをはゞかる如く、やゝ伏目になりて）質問が穏便なれば、わしも………穏かに答へた。平八郎は隠居の身分、殊更自分所持の書籍を賣り拂つて致すことゆえ、格別御屆けにも及ぶまいかと料簡して、自儘に取計ひました義は………誠に恐れ入つて居ります。尤も施行は三日間のところ、殘りは明日一日となりました。若し不都合と思し召さば、明日の施行は中止いたしませうか、御指圖次第に致しませうと答へた。

橋本　では、明日の施行は、中止でござりますか。守口の孝右衛門初めわたくしどもまで先に立つて、三郷三十三町村中に施行券を配つて置きながら、今更跡部様の御察當があるとて、手足をちゞめて變改になりますか。それこそ、騒動でござりますぞ。

平八郎　まあ後を聞いての話だ。勘左衞門も考へてゐたが、金子調達の次第も分明し、別に御不審の筋も相聞えぬに、前々より觸れ置きたる施行を差止めては、窮民の氣受けもいかゞと氣遣はれる。高が明日一日のことゆゑ、隨分穩便に施行を取計らふやうにと、至極穩當なる挨拶であつた。

橋本　あなたは、それで事が濟むと思ひまするか。その言譯ぐらゐで、あの執拗な跡部樣が、御心をとかれると考へまするか。

平八郎　（不審さうに忠兵衞を見て）濟むも濟まぬも……狹野はその外に話がなかつたのだ。

橋本　違ひます。わしの聞いた風説はそのんなことではない。

平八郎　（微笑しながら）現に狹野は今平山への言傳てに、御用濟みになつたと云つてるではないか。然うまで疑ふのは、足下の杞憂だ。

橋本　ふむ――――。（大息を漏して考へ込む）

隣室の門弟、同心等も安心して、また酒宴にうつる。

平八郎　どれ、わしも一つお相伴しやうか。（忠兵衞の沈思を氣にしつゝも、快く大盃をとりて瀬田の酌をうけて）然し跡部とて考へたらう。米價は天上なしに騰貴して、昨日の小賣は二百六十文に近い。千日から難波へかけて、孤をかけた餓死人が何十人となく路傍に横はつてゐると云ふ。その役にゐては尻鞍が揉めこならぬ筈だ。はゝはゝ。それに大鹽の慈善が評判になるだけ、奉行所の無爲無策が目に立つて來るのだ。今日までの如く、手を拱いてはゐられまい。それに金持どもゝ默つてはゐられなくなる。奉行が備ひ金持が立てば、側へ蹌踉きながらも貧民の口が濡れるだらう。われ〳〵の施行は、事は小なりと雖も彼等を刺戟したゞけの功は立つたの

だ。瀬田君、お酌願はふか、はゝはゝ。

平八郎、笑つて盃を重ねつゝ、やはり忠兵衛の沈思、一同の沈默に憚るこゝろあり。

平八郎　平山。それとも何か、……跡部は大鹽に對して、まだ何か思惑でも挾んでゐるのか。

平　山　始終申し上げます通り、お上はわたくしを洗心洞門人と見て油斷なされません。機密の御意見などは、一向に伺つたことがございません。これは明かに、御承知を願つて置きます。

平八郎　この上にも跡部がわしを猜疑するなら、それは彼の苛察陰惡と云ふものだ。その時こそおれは蹶起して、政治人道のために彼と爭ふ。若しおれが義盟の軍を起したら、彼等輩は何うしてその防禦をつける。城代、町奉行、みな腰拔けぞろひで、焼玉の二三發も城内に打ち込めば、みなわあッと叫んで、四散する代物どもだ。はゝゝゝ。假に敗軍しても六甲山の險阻に閉籠つて、近國近在の農夫等を煽動して見ろ。百姓町人ともに皆有司の惡政に憤怒して、騒擾動亂を待ちかねてゐる時だ。火は石より出でて微かなれど、諸を始めに愼まされば、延焼して遂に屋を燎く。畿内一帶の兵亂は見え透いてゐる。聖人も、民の欲するところは天必ずこれに從ふと云つてゐる。平八郎は民心民望をあつめてゐると信ずる。若し飽迄跡部がおれを追究するならおれは起つ、起つ！

隣室にどつと拍手の聲起り、絶叫する者もあり。

平八郎　（自らの亢奮をやゝ恥ぢながら）おれはたゞ人民のために變へたのだ。決して彼等の政治を妨げはしない。殊にわしは、少しも私の利慾を考へてゐないぞ。みな人民のためだ。天下の憂患、實に視るに忍びなかつたのだ。（語調やゝクドクドしく）然るに跡部がそれを惡くとつて、この上わしを窮地に窘めると云ふなら誰だつてそ

れは、反噬せずにゐられまい。彼がもし以上におれを壓迫するなら、おれは起つ、おれは……起つ、起つて大義を唱ふるより外に仕方がないのだ。(急しく一同の顏色を見廻はしつゝ)この考は今日に初つたことではない、この頃中から始終おれの念頭を去らない問題なのだ。義の欲に勝つものは從ひ、欲の義に勝つものは凶なり、——百姓の力を得るものは富み、百姓の死を得るものは强し、——國を以て國を守り、民を以て民を守る——おれは人民を味方として彼等の暴虐に反抗するの外はない。諸君とて決してそれを非なりとはすまい。中齋を助けて、共に起つ覺悟はあるだらう。(神經性に激しく目を瞬き)先刻おれが狄野に隱かに答へたのを見て、諸君或はおれが彼に屈伏したやうに齒痒く思ふかも知れない。宇津木——宇津木などは、おれが跡部を恐れてゐると云ふ……然うぢやない、然うぢやないのだ。彼と反對に立つ場合には、そこに最う何んの妥協も融和もあり得ない、最後の手段、おれは蹶起して戰ふより外はないのだ。宇津木の云ふ如く、おれは彼に屈したのではない。最後の大事だから持重するのだ。

一同、無言。

橋　本　(やゝ冷嘲を含んで)先生、あなたは大義の謀叛と云ふが、一時憤激のお言葉ですか、それとも事實に決心なされてゐますか。

平八郎　何——。(その意を解しかねるやうに、眼瞼を痙攣させつゝ對者の顏を見詰める)

橋　本　わたくしの心は、あなたはこの際跡部樣との間に、外に途のひらきやうはないと確信なさいますか。

平八郎　(屹然として)忠兵衞、おれに起てといふのか。

橋　本　然うぢやございません。若し事がいよ〳〵の場合に望んで、わたくしどものの覺悟のために伺つて置きます。

平八郎　いよ〳〵の場合――？

橋　本　先生。わたしはこれでは濟むまいと存じますよ。

平八郎、不安さうに忠兵衞を見詰む。忠兵衞、苦しさうに目を伏せる。平八郎、更に追求せんとして躊躇、空しく對者を見詰むるのみ。

やゝありて忠兵衞、顏を上げる。

橋　本（指の先に目頭の涙を拂つて）跡部樣は陰險だ。今日のお使ひは瀬踏みでござります。他まで大鹽一門を羅織なさるおこゝろに相違ありません。

平八郎　平山！　お前も然う思ふか。

平　山（憤然、進み出てゝ）いゝえ、わたくし存じません。わたくしも同じく大鹽一門です。

平八郎　最後まで、おれに隨ふな。

平　山　無論の話です。

隣室の人々、一人來り二人來り、閾際に立ちて聞く。

平八郎　忠兵衞。跡部はおれを何うすると云ふのだ。風說でもいゝ、それを聞かう。忠兵衞！

橋　本　お騷ぎなさいますなよ。あなたを獄に下すか、或は……それ以上に出るかも知れません。

平八郎　何んの罪、何んの罪名があるのだ。

橋　本　その魂膽は分りません。然し大坂の政治に、あなたと云ふ者が邪魔になることは實情でございます。體裁はいかにつくつても、あなたを取除かずにゐられません。

平八郎　（隣室に向つて）誰か、矩之丞を呼んで來い。直ぐ宇津木を呼んで來てくれ。（忠兵衛に）忠兵衛、それは確かなる聞込みなのか。何を罪としておれを縛る。

橋　本　會所の風聞ですから、罪名などは分りません。たゞそんな噂が世上にありますから、その時にお迷ひなさらぬやう、確と御思案なさるがいゝと思ひます。

平八郎　瀬田、何んの罪に陷ちる。

瀬　田　（嘆息）然やうでございますなあ——。

平八郎　兎に角、宇津木に賴んで家族だけは遁がして置かう。然し、何んの罪でおれを獄に下す。風聞だ、雜説に相違ない。家事不取締？……或ひは誹謗？……徒黨？……新儀？………一つとして罪にあたるものがない。世間はたゞ跡部がおれを忌むことを知つて、臆測するのだ。

平八郎、呻吟するやうに呟きて頭を上げる時、宇津木の門下生岡田良之進、そこに來りて一禮し、頭を上げる。

平八郎　（良之進を見て）何か用か。

岡　田　先生は只今、少し御不快で横になつてゐられます。御用を伺つて來いと申付けられました。

平八郎　病氣なら……最う好い。

岡　田　それに……。（口籠りつゝ）この際は却つてお目にかゝらない方が好からう。わたくしも考へます、何うか先生にも……御熟考を願ひますと、さう申上げて來いと云はれました。

平八郎　（不快さうに）分つた。歸つていゝ。

岡田、去る。

平八郎、又傾きて思案に耽ける時、養子格之助、庄司儀左衛門慌しく歸り來る。

格之助　父上。矢張り事情は切迫して居ります。役所には西方與力の內山彥次郎が詰めてゐて、何かお上と密談中でござりました。

平八郎　庄司、何んの罪だ。何んでおれを縛るのだ。

庄司　取沙汰がまち／＼で、委しくは分りませんが、强訴の罪を名として先生を捕するのではございますまいか。

平八郎　强訴？　强訴は重罪だぞ。死罪だ——おれを死罪にあてるのか！

格之助　河合鄕左衛門なぞは評判に驚き、昨夜三男を連れて出奔いたしたと申します。東組の與力同心一同にお咎めがあるに相違ございません。

一同、驚きて顏を見合はす。

平八郎　强訴は死罪だ、重罪だ。强訴は……死罪だ。跡部はおれを死罪にあてるか。

平八郎、亢奮して呟きつゝ、何か用事ありげに書齋の方に步み、又立停りて何か考へ、口のうちに呟く。

平八郎（決心して）好し、跡部に會はふ。跡部に會つて仔細を聞かう、强訴とは、强訴とは………好し、跡部に會つて來る。

平八郎、奮然出て行かんとして又立停りて考ふる。忠兵衛の默然たるを見て、急に立戾り忠兵衛の手をひきて正面床の間に坐らせ、自分も屹つと對坐する。

——（幕）——　次號完結



定價		
	定價	送料
一册	八十錢	參錢
六册	四圓八十錢	送料共
十二册	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料
△御照會次第詳細御回答申上ます

大正十五年十月二十日印刷
大正十五年十一月一日發行　（禁轉載）

編輯發行人　高野敬錄
印刷人　高木鳥三
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話牛込五〇八九番
振替東京三四番
同長野ヨ二〇五番


カルピス
滋強飲料
秋だ
うんと讀まう
うんと飲まう
智嚢を肥やす爲に
體力を肥やす爲に
酒店・食料品店・藥店にあり

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

